

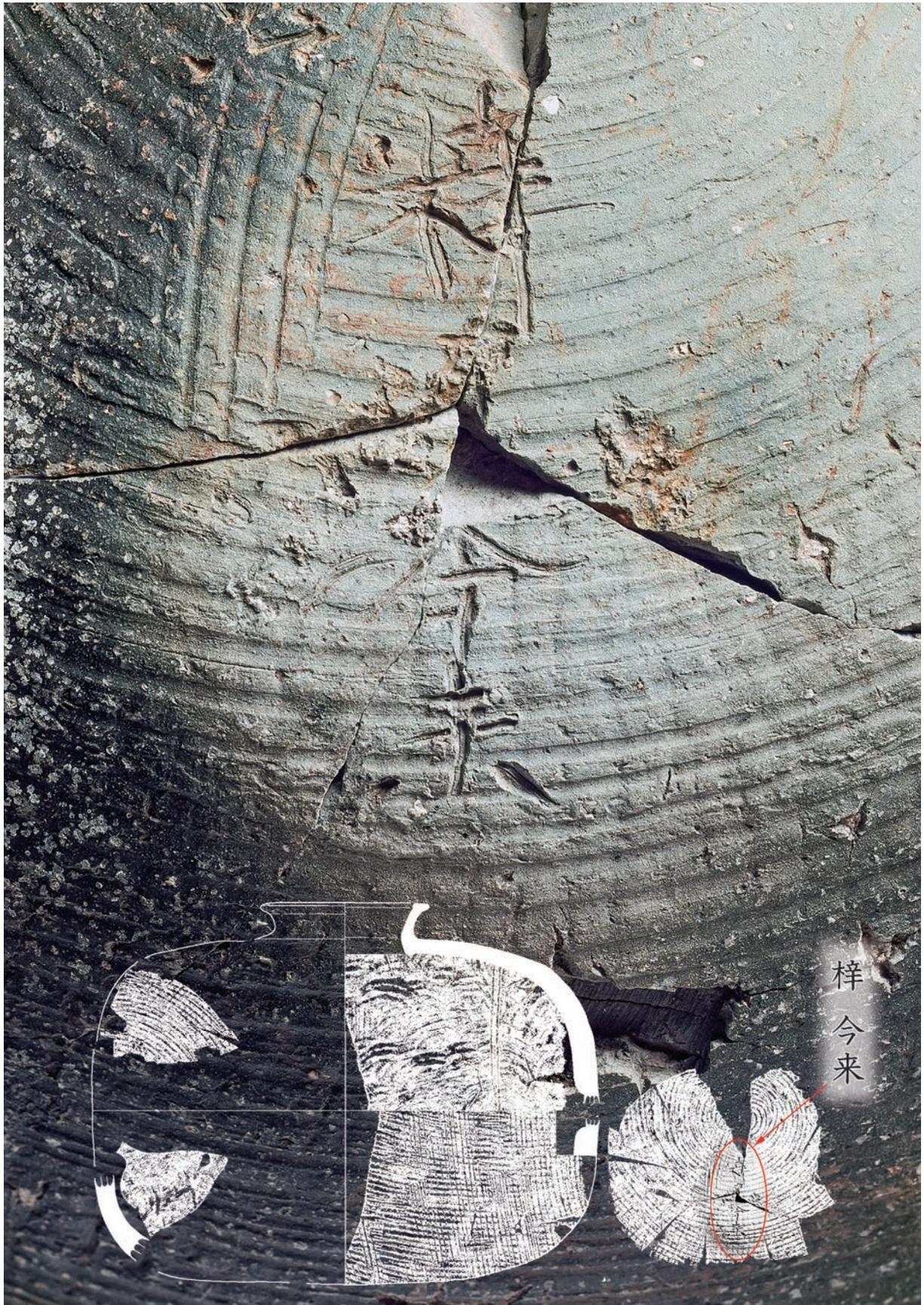
会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告14

桜町遺跡（5次）

西木流C遺跡（2次）

西木流D遺跡（1次）

鶴沼B遺跡（1次）



口絵 「梓 今来」刻書須恵器

序 文

文化財は、それぞれの地域の歴史に根ざした文化遺産であり、我が国の歴史や文化を正しく理解するために必要不可欠なものです。そのため、当時の姿がよく理解できるように、可能な限りそのままの形で文化財を保存し、後世に伝えていく努力が現代に生きる私たちに求められています。

会津縦貫北道路は、喜多方市と会津若松市を結ぶ全長13.1kmの高規格道路であり、平成8年度に都市計画道路として建設が決定され、平成9年度からは建設省(現国土交通省)直轄事業として建設工事が進められています。この路線内には、周知の埋蔵文化財包蔵地を含め、先人が残した貴重な文化遺産が包蔵されています。福島県教育委員会では、数多くの遺跡等の所在を確認するとともに、国土交通省東北地方整備局郡山国道事務所と埋蔵文化財保護のための協議を重ねてきました。その中で現状での保存が困難なものについては、詳細な記録を残すために発掘調査を実施してまいりました。

本報告書は、平成25年度に発掘調査を実施した湯川村桜町遺跡の5次調査、会津若松市西木流C遺跡の2次調査、西木流D遺跡の1次調査、鶴沼B遺跡の1次調査の成果をまとめたものです。その結果、古代の会津郡衙周辺の様相を解明する上で重要な知見が得られ、とくに西木流C遺跡から出土した「梓 今来」の刻書須恵器は、北陸経由で移住した渡来系氏族を示唆するものとして、学術的に注目されます。

今後、この報告書が、県民の皆様の文化財に対する理解を深めるとともに、地域の歴史を解明するための基礎資料として、さらには生涯学習等の資料として広く活用していただければ幸いに存じます。

最後に、発掘調査の実施に当たり、御協力いただいた湯川村教委員会、会津若松市教育委員会、国土交通省東北地方整備局郡山国道事務所、公益財団法人福島県文化振興財団をはじめとする関係機関及び関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成26年12月

福島県教育委員会

教育長 杉 昭 重

あいさつ

当公益財団では、福島県教育委員会からの委託を受けて、県内の大規模な開発に先立ち、開発対象地域内に所在する埋蔵文化財の調査を実施しております。会津縦貫北道路にかかる埋蔵文化財については、平成9年度の表面調査を経て、平成13年度から発掘調査を実施してまいりました。

本報告書は、平成25年度に発掘調査を実施した河沼郡湯川村桜町遺跡の5次調査、会津若松市西木流C遺跡の2次調査、西木流D遺跡の1次調査、鶴沼B遺跡の1次調査の成果をまとめたものです。今回の調査では、河川流路跡などから平安時代を中心とした多くの土器類や木製品が出土しており、西木流C遺跡では「梓 今来」と刻書された新潟県産の須恵器横瓶が見つかり、古代の会津地方に北陸由来の渡来系集団が移住した可能性を示す貴重な知見となりました。

本報告書がふるさとの歴史を解明するための一助となれば幸いです。

終わりに、今回の発掘調査にご協力をいただきました関係諸機関ならびに地元住民の皆様
に厚く御礼申し上げますとともに、当財団の事業の推進につきまして、今後とも一層の御理解と御協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成26年12月

公益財団法人 福島県文化振興財団
理事長 遠藤 俊博

緒 言

- 1 本書は、会津縦貫北道路(会津若松市～喜多方間)遺跡発掘調査において、平成25年度に実施した湯川村桜町遺跡・会津若松市西木流C・西木流D・鶴沼B遺跡の発掘調査報告書である。
桜町遺跡(5次)：河沼郡湯川村大字桜町字千苺ほか 遺跡番号：422-00030
西木流C遺跡(2次)：会津若松市高野町大字木流字木流 遺跡番号：202-00241
西木流D遺跡(1次)：会津若松市高野町大字木流字木流 遺跡番号：202-00242
鶴沼B遺跡(1次)：会津若松市高野町大字中沼字鶴沼 遺跡番号：202-00230
- 2 当遺跡発掘調査事業は、福島県教育委員会が国土交通省の委託を受けて実施し、調査に係る費用は国土交通省が負担した。
- 3 福島県教育委員会は、発掘調査を財団法人福島県文化振興財団(現：公益財団法人福島県文化振興財団)に委託して実施した。
- 4 財団法人福島県文化振興財団(現：公益財団法人福島県文化振興財団)では、遺跡調査部調査課の下記の職員を配して調査にあたった。
課長 安田 稔 副主幹 藤谷 誠 専門文化財主査 菅原祥夫
文化財主査 細山郁夫 文化財主査 吉野勤也 文化財主査 作田一耕
文化財主査 菊田順幸 文化財主査 日下部 正和 文化財主査 阿部知己
文化財主査 青山博樹 文化財主事 鶴見諒平 文化財主事 荒木麻衣
- 5 本書の執筆分担は、担当職員が分担して行い、各文末に文責を記した。
- 6 本書に使用した地図は、国土交通省国土地理院発行の2万5千分の1地形図、並びに同省東北地方整備局郡山国道事務所が製作した工事用地図を複製したものである。
- 7 本書に掲載したC14年代測定については、株式会社加速器分析研究所に委託し、その分析結果及び考察は編ごとに付章として掲載した。
- 8 本書に収録した調査記録及び出土資料は、福島県教育委員会が保管している。
- 9 発掘調査及び報告書の作成に際して、次の機関及び個人から協力・助言をいただいた。
会津若松市教育委員会 湯川村教育委員会 奈良文化財研究所 (故)今泉隆雄
三上喜孝 吉田 勸 永田英明 荒木志伸 中村岳彦
吉田博行 石田明夫 近藤真佐夫 山中雄志 梶原文子

用 例

1 本文中及び遺物整理に使用した略記号は、以下の通りである。

湯川村……………U K	会津若松市……………A W	桜町遺跡……………S K R
西木流C遺跡…N K G・C	西木流D遺跡…N K G・D	鶴沼B遺跡……………T R N・B
掘立柱建物跡…S B	溝 跡……………S D	土 坑……………S K
性格不明遺構…S X	柱 穴……………P	トレンチ……………T
サブトレンチ…S T	遺構外堆積土…L	遺構内堆積土…ℓ
グリッド……………G		

2 遺構挿図における遺構番号は、当該遺構は正式名称、その他の遺構は記号化した略称で記載している。

3 本書における遺構実測図の用例は、以下の通りである。

- (1) 方位記号の表記がないものは、全て本書の上を真北とする。
- (2) 縮尺は、各挿図版に示した。
- (3) 遺構内の傾斜面は ㄟ、後世の削平や人為的な削平部分は ㄟ の記号で表記した。
- (4) 断面図および地形図における標高は、海拔標高を示す。
- (5) 遺構外の自然堆積土はローマ数字、遺構内堆積土は、算用数字で表記した。

[例] 遺構外自然堆積土：L I・L II…、遺構内堆積土：ℓ 1・ℓ 2…

- (6) 平面図における座標は、平成23年3月11日に発生した東北地方太平洋沖地震による歪みを補正した平面直角座標系のIX系の数値を示している。
- (7) 掘立柱建物跡の柱痕は、網点で示した。

4 本書における遺物実測図の用例は、以下の通りである。

- (1) 縮尺は各挿図ごとに示した。
- (2) 土器断面は、繊維を含む縄文土器に▲印を付け、土師器・陶磁器を白ヌキ、須恵器はベタ黒、灰釉陶器は網点とした。
- (3) 挿図中の網点は、内面黒色処理範囲を示し、それ以外は図版ごとに凡例を示した。
- (4) 遺物の計測値は、図中に示した。()は推定値、[]は残存値である。
- (5) 遺物番号は挿図版ごととし、文中では下記のように省略して表記した。また、掲載遺物の出土位置・層位は、右下に示している。[例] 図28の10番の遺物…図28-10

5 本書における遺物写真で個々に付した番号は、挿図番号と一致する。

6 引用・参考文献は、執筆者の敬称を省略し、付章を除き本文末に一括した。

目 次

序 章 調査経緯と遺跡の環境

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 地理的環境	2
第3節 歴史的環境	3
第4節 調査方法	7

第1編 桜町遺跡（5次）

第1章 調査経過	11
第2章 遺構と遺物	
第1節 遺構の分布と基本土層	13
1 遺構の分布(13)	2 基本土層(14)
第2節 土 坑	14
199号土坑(15)	200号土坑(15)
第3節 遺構外出土遺物	15
第3章 総 括	16

第2編 西木流C遺跡（2次）

第1章 調査経過	23			
第2章 遺構と遺物				
第1節 遺構の分布と概要	24			
第2節 基本土層	26			
第3節 流 路 跡	30			
第4節 溝 跡	41			
4号溝跡(41)	5号溝跡(42)	14号溝跡(43)	15号溝跡(51)	16号溝跡(57)
17号溝跡(59)	18号溝跡(59)	19号溝跡(60)	20号溝跡(61)	21号溝跡(61)
22号溝跡(62)				
第5節 土 坑	62			
3号土坑(62)				
第6節 遺構外出土遺物	63			
第3章 総 括				
第1節 古代の土器の特徴と年代	64			

第2節 「樟 今来」と渡来系集団	65
第3節 木 器	67
付 章 自然科学分析	
第1節 出土炭化物等の放射性炭素年代測定について	71
第3編 西木流D遺跡（1次）	
第1章 調査経過	117
第2章 遺構と遺物	
第1節 遺構の分布と概要	119
第2節 基本土層	121
第3節 掘立柱建物跡	121
1号掘立柱建物跡(121)	
第4節 溝 跡	122
1・3号溝跡(122) 2号溝跡(124)	
第5節 土 坑	126
1号土坑(126) 2号土坑(126) 3号土坑(126)	
第6節 遺構外出土遺物	127
第3章 総 括	127
第4編 鶴沼B遺跡（1次）	
第1章 調査経過	139
第2章 北区の遺構と遺物	
第1節 遺構の分布とサブトレンチ	141
第2節 土 坑	146
1号土坑(146) 2号土坑(146) 3号土坑(146) 4号土坑(148)	
5号土坑(148) 6号土坑(148)	
第3節 溝 跡	149
1号溝跡(149) 2号溝跡(149) 3号溝跡(150)	
第4節 流 路 跡	152
第5節 堰状遺構	176
第6節 性格不明遺構	178
1号性格不明遺構(178) 2号性格不明遺構(178)	
第7節 遺構外出土遺物	183

第3章 南区の遺構と遺物	
第1節 遺構の分布と基本土層	184
第2節 土坑	188
1号土坑(188) 2号土坑(188) 3号土坑(189) 4号土坑(189) 5号土坑(189)	
第3節 溝跡	191
1号溝跡(191) 2号溝跡(191) 3号溝跡(191) 4号溝跡(192) 5号溝跡(192)	
6号溝跡(195) 7号溝跡(196) 8号溝跡(196) 9号溝跡(196)	
第4節 流路跡	199
1号流路跡(199) 2号流路跡(207) 3号流路跡(209) 4号流路跡(209)	
5号流路跡(212)	
第5節 遺構外出土遺物	212
第4章 総括	213
付章 自然科学分析	
第1節 出土炭化物等の放射性炭素年代測定について	217

挿図・表・写真目次

序 章

[挿図]

図1 会津縦貫北道路位置図……………	1	図3 周辺の遺跡位置図……………	4
図2 調査遺跡と会津盆地北部地形……………	3		

[表]

表1 周辺遺跡一覧表……………	5
-----------------	---

第1編 桜町遺跡（5次）

[挿図]

図1 桜町遺跡調査範囲……………	12	図3 199・200号土坑……………	14
図2 遺構配置図……………	13	図4 遺構外出土遺物……………	15

[写真図版]

1 調査区全景……………	19	3 199・200号土坑……………	20
2 調査区全景……………	19	4 遺構外出土遺物……………	20

第2編 西木流C遺跡（2次）

[挿図]

図1 西木流C遺跡調査位置図……………	25	図16 14・15号溝跡……………	44
図2 I区遺構配置図……………	27	図17 14号溝跡出土遺物(1)ℓ1～3……………	46
図3 II区遺構配置図……………	28	図18 14号溝跡出土遺物(2)ℓ3……………	47
図4 西木流C遺跡会津若松市調査区……………	29	図19 14号溝跡出土遺物(3)ℓ4……………	48
図5 1号流路跡・22号溝跡……………	31	図20 14号溝跡出土遺物(4)ℓ5①……………	49
図6 1号流路跡土層断面図……………	32	図21 14号溝跡出土遺物(5)ℓ5②……………	50
図7 1号流路跡土層断面図……………	33	図22 15号溝跡……………	51
図8 1号流路跡エレベーション図……………	34	図23 15号溝跡出土遺物(1)ℓ1・2①……………	52
図9 1号流路跡出土遺物(1)ℓ2・3……………	35	図24 15号溝跡出土遺物(2)ℓ1・2②……………	53
図10 1号流路跡出土遺物(2)ℓ3～5……………	36	図25 15号溝跡出土遺物(3)ℓ3・底面……………	54
図11 1号流路跡出土遺物(3)木器①……………	37	図26 16・17号溝跡……………	57
図12 1号流路跡出土遺物(4)木器②……………	38	図27 16号溝跡出土遺物……………	58
図13 1号流路跡出土遺物(5)木器③……………	39	図28 18号溝跡……………	59
図14 4・5・20号溝跡……………	41	図29 19・21号溝跡……………	60
図15 4・5号溝跡出土遺物……………	42	図30 19号溝跡出土遺物……………	61

図31	3号土坑	62	図33	福島県出土木製祭祀具	69
図32	遺構外出土遺物	63	図34	暦年較正年代グラフ	74
[表]					
表1	放射性炭素年代測定結果	73	表2	放射性炭素年代測定結果	73
[写真図版]					
1	調査区遠景	77	24	1号流路跡出土遺物(4)	93
2	調査区全景	77	25	1号流路跡出土遺物(5)	94
3	I区全景	78	26	1号流路跡出土遺物(6)木器①	95
4	II区全景	78	27	1号流路跡出土遺物(7)木器②	96
5	1号流路跡(1)	79	28	4・5号溝跡, 14号溝跡出土遺物(1)	97
6	1号流路跡(2)	80	29	14号溝跡出土遺物(2)	98
7	1号流路跡(3)	81	30	14号溝跡出土遺物(3)	99
8	5号溝跡	81	31	14号溝跡出土遺物(4)	100
9	14号溝跡(1)	82	32	14号溝跡出土遺物(5)	101
10	14号溝跡(2)	83	33	14号溝跡出土遺物(6)	102
11	15号溝跡	84	34	14号溝跡出土遺物(7)	103
12	16号溝跡	85	35	14号溝跡出土遺物(8)	104
13	17号溝跡	86	36	14号溝跡出土遺物(9)	105
14	18号溝跡	86	37	14号溝跡出土遺物(10)	106
15	19号溝跡	87	38	15号溝跡出土遺物(1)	107
16	20号溝跡	88	39	15号溝跡出土遺物(2)	108
17	21号溝跡	88	40	15号溝跡出土遺物(3)	109
18	22号溝跡	88	41	15号溝跡出土遺物(4)	110
19	3号土坑	89	42	15号溝跡出土遺物(5)	111
20	作業風景	89	43	16号溝跡出土遺物(1)	112
21	1号流路跡出土遺物(1)	90	44	16号溝跡出土遺物(2)	113
22	1号流路跡出土遺物(2)	91	45	16号溝跡出土遺物(3)・19号溝跡出土遺物・ 遺構外出土遺物	114
23	1号流路跡出土遺物(3)	92			

第3編 西木流D遺跡(1次)

[挿図]

図1	西木流D遺跡調査位置図	118	図5	1・3号溝跡	123
図2	遺構配置図	119	図6	3号溝跡出土遺物	124
図3	西木流C遺跡II区・ 西木流D遺跡全体図	120	図7	2号溝跡	125
図4	1号掘立柱建物跡	122	図8	1～3号土坑	126
			図9	遺構外出土遺物	127

図10	会津若松市調査区・遺構・遺物	128
-----	----------------	-----

[写真図版]

1	調査区遠景	131	7	2号溝跡	134
2	調査区全景	131	8	3号溝跡	134
3	1号掘立柱建物跡全景	132	9	1～3号土坑	135
4	1号掘立柱建物跡柱穴(1)	132	10	3号溝跡・遺構外出土遺物	135
5	1号掘立柱建物跡柱穴(2)	133	11	作業風景	136
6	1・16号溝跡	133			

第4編 鶴沼B遺跡(1次)

[挿図]

図1	グリッド配置図	140	図22	1・2号流路跡出土遺物(2)	165
図2	北区遺構配置図	142	図23	1・2号流路跡出土遺物(3)	166
図3	深掘りグリッド出土遺物(1)	143	図24	1・2号流路跡出土遺物(4)	167
図4	深掘りグリッド出土遺物(2)	144	図25	1・2号流路跡出土遺物(5)	168
図5	深掘りグリッド出土遺物(3)	145	図26	1・2号流路跡出土遺物(6)	170
図6	1～4号土坑	147	図27	1・2号流路跡出土遺物(7)	171
図7	5・6号土坑	149	図28	1・2号流路跡出土遺物(8)	172
図8	1号溝跡	150	図29	1・2号流路跡出土遺物(9)	174
図9	1号溝跡出土遺物	151	図30	1・2号流路跡出土遺物(10)	175
図10	2・3号溝跡	152	図31	1・2号流路跡出土遺物(11)	176
図11	1・2号流路跡サブトレンチ 壁断面位置図	153	図32	堰状遺構	177
図12	1・2号流路跡サブトレンチ 土層断面図(1)	154	図33	1号性格不明遺構	179
図13	1・2号流路跡サブトレンチ 土層断面図(2)	155	図34	2号性格不明遺構(1)	180
図14	1・2号流路跡サブトレンチ 土層断面図(3)	156	図35	2号性格不明遺構(2)	181
図15	1a・2a号流路跡	158	図36	性格不明遺構出土遺物	182
図16	1b・2b号流路跡	159	図37	遺構外出土遺物	183
図17	1・2号流路跡土層断面図(1)	160	図38	南区全体図	185
図18	1・2号流路跡土層断面図(2)	161	図39	南区遺構配置図(1)	186
図19	1・2号流路跡土層断面図(3)	162	図40	南区遺構配置図(2)	187
図20	1・2号流路跡土層断面図(4)	163	図41	基本土層柱状図	188
図21	1・2号流路跡出土遺物(1)	164	図42	1～5号土坑	190
			図43	1・2・5号溝跡, 1号溝跡出土遺物	193
			図44	3・4号溝跡	194
			図45	3号溝跡出土遺物	195

図46	6号溝跡	197	図53	1号流路跡出土遺物(5)	207
図47	7～9号溝跡	198	図54	2号流路跡, 出土遺物	208
図48	1号流路跡	200	図55	3号流路跡	210
図49	1号流路跡出土遺物(1)	202	図56	4号流路跡, 出土遺物	211
図50	1号流路跡出土遺物(2)	204	図57	5号流路跡	212
図51	1号流路跡出土遺物(3)	205	図58	遺構外出土遺物	212
図52	1号流路跡出土遺物(4)	206	図59	暦年較正年代グラフ	219

[表]

表1	放射性炭素年代測定結果	219	表2	放射性炭素年代測定結果	219
----	-------------	-----	----	-------------	-----

[写真図版]

1	調査区全景	223	27	北区流路跡出土遺物(9)	246
2	北区全景	223	28	北区流路跡, 性格不明遺構出土遺物	247
3	北区自然流路跡	224	29	北区性格不明遺構, 遺構外出土遺物	248
4	北区堰状遺構・杭列	225	30	北区深掘りグリッド, 流路跡出土縄文土器	248
5	北区溝跡	226	31	北区溝跡, 流路跡出土須恵器	249
6	北区土坑, 1号性格不明遺構	227	32	北区流路跡出土土師器	249
7	北区2号性格不明遺構	228	33	北区深掘りグリッド出土須恵器	250
8	南区全景(1)	229	34	北区出土墨書土器(1)	251
9	南区全景(2)	229	35	北区出土墨書土器(2)	252
10	南区土坑	230	36	南区溝跡, 1号流路跡出土遺物(1)	253
11	南区1～5号溝跡	231	37	南区1号流路跡出土遺物(2)	254
12	南区6～9号溝跡	232	38	南区1号流路跡出土遺物(3)	255
13	南区1号流路跡全景	233	39	南区1号流路跡出土遺物(4)	256
14	南区1号流路跡	233	40	南区1号流路跡出土縄文土器	256
15	南区2～5号流路跡	234	41	南区1・2号流路跡, 遺構外出土縄文・弥生土器	257
16	北区深掘りグリッド出土遺物(1)	235	42	南区1号流路跡出土土師器	257
17	北区深掘りグリッド出土遺物(2)	236	43	南区1・4号流路跡出土須恵器	258
18	北区1号溝跡出土遺物	237			
19	北区流路跡出土遺物(1)	238			
20	北区流路跡出土遺物(2)	239			
21	北区流路跡出土遺物(3)	240			
22	北区流路跡出土遺物(4)	241			
23	北区流路跡出土遺物(5)	242			
24	北区流路跡出土遺物(6)	243			
25	北区流路跡出土遺物(7)	244			
26	北区流路跡出土遺物(8)	245			

序章 調査経緯と遺跡の環境

第1節 調査に至る経緯

1 会津縦貫北道路の概要

会津縦貫北道路は、会津盆地北部の会津若松－喜多方間を結ぶ自動車専用の基幹道路である。喜多方市関柴町大字西勝を起点とし、湯川村を経て会津若松市高野町大字中沼を終点とする全長13.1kmの道路として計画されている。平成8年に計画が策定され、同9年度からは、建設省(現国土交通省)直轄事業として、建設が進められている。平成25年には起点の喜多方ICから湯川南ICまでが開通した。平成27年度には全線が開通する予定である。

この道路が完成することにより、会津盆地北部は高速道路網に組み込まれることになる。その結果、交通の利便性が飛躍的に向上し、日常生活圏の拡大、観光振興が図られ、交通状態が緩和されることが期待される。

2 これまでの調査経過

平成25年度までの福島県教育委員会では、会津縦貫北道路建設予定地内にある埋蔵文化財の保護を図るために、平成9年度より財団法人福島県文化センター(現公益財団法人福島県文化振興財団)に委託して表面調査を実施した。表面調査では、平成9年度に周知の遺跡21か所、遺跡推定地3か所、平成19年度に周知の遺跡4か所、遺跡推定地2か所を確認した。

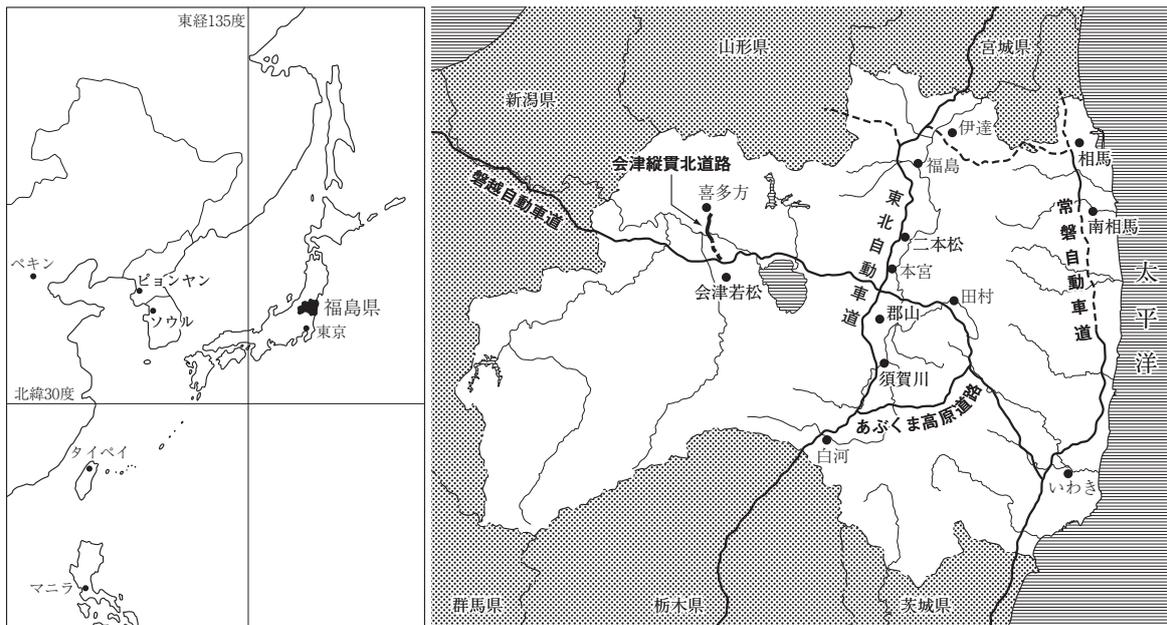


図1 会津縦貫北道路位置図

表面調査により確認された周知の遺跡、遺跡推定地については、工事計画において優先箇所となる地点を対象として、平成12年度から試掘調査を実施した。平成18年度までに喜多方市に所在する遺跡、平成23年度までに湯川村に所在する遺跡の試掘調査を完了した。会津若松市に所在する遺跡の試掘調査は、平成23年度から開始し、平成25年度で終了した。

試掘調査によって、保存範囲が確定した遺跡については、福島県教育委員会と東北地方建設局郡山国道工事事務所(現東北地方整備局郡山国道事務所)が協議を行い、発掘調査を実施して記録保存を図ることとなった。

試掘調査は、平成12年度より本年度まで、麻生館遺跡から西坂才遺跡までの10遺跡について実施し、発掘調査は平成13年度の喜多方市麻生館遺跡から本年度の桜町・西木流C・西木流D・鶴沼B・鶴沼C・西坂才遺跡までの10遺跡について実施した。(菅原)

第2節 地理的環境

桜町、西木流C・D、鶴沼B遺跡は、湯川村南東部から会津若松市北西部の隣接する町村に位置し、会津盆地の中央よりやや南東側に位置している。

遺跡の位置する会津盆地は、南北約32km、東西約13kmと縦長な楕円形である。東は磐梯山を含む奥羽山脈、南は会津高原と呼ばれる山間地、西は越後山脈、北は飯豊山地に囲まれている。会津盆地の低位部は「あいづだいら(会津平)」と呼ばれ、標高175～220m程度の平坦地となっている。盆地内では、ほぼ中央を南南東から北北西に向けて、南会津に水源を持ち盆地内の最大の河川である阿賀川をはじめ、その支流の鶴沼川・宮川などが北流している。盆地中央東側では、猪苗代湖に水源を持つ日橋川(にっばしがわ)が西流しており、遺跡の東側を北流する湊川(せせなぎがわ)は、そこに合流する。南部の諸河川は北に向かって流れ、会津盆地の西端中央部で阿賀川に合流し、日本海に向かって流れる。

これらの河川により盆地内は、周辺の山地から運ばれた堆積物に広く覆われ、なだらかな沖積平野および扇状地を形成している。さらに、それらの河川による侵食により、段丘状の地形等も発達している。盆地の南東方向には背灸(せあぶり)高原があり、そこから盆地床に続く扇状地が広がっている。遺跡周辺は、この扇状地が侵食された平坦な低位段丘上に位置し、この扇状地の最下位の区域に属していると考えられる。

会津盆地の気候は、基本的に日本海側気候であるが、海から離れた内陸性気候も併せ持つ。そのため、寒暖の差が激しい。冬は寒冷で積雪が多く、特に山間部では豪雪地帯となるが、夏は高温多湿であり、フェーン現象で高温になることも多い。しかし、奥羽山脈の東側で問題となる「やませ」による冷害の影響は受けにくい。このような自然環境の中、東北地方でも有数の米産地となっており、遺跡周辺でも各集落間の平地は、主に水田として利用されている。今回調査した建設予定地内も、調査前はほとんどが水田として利用されていた。

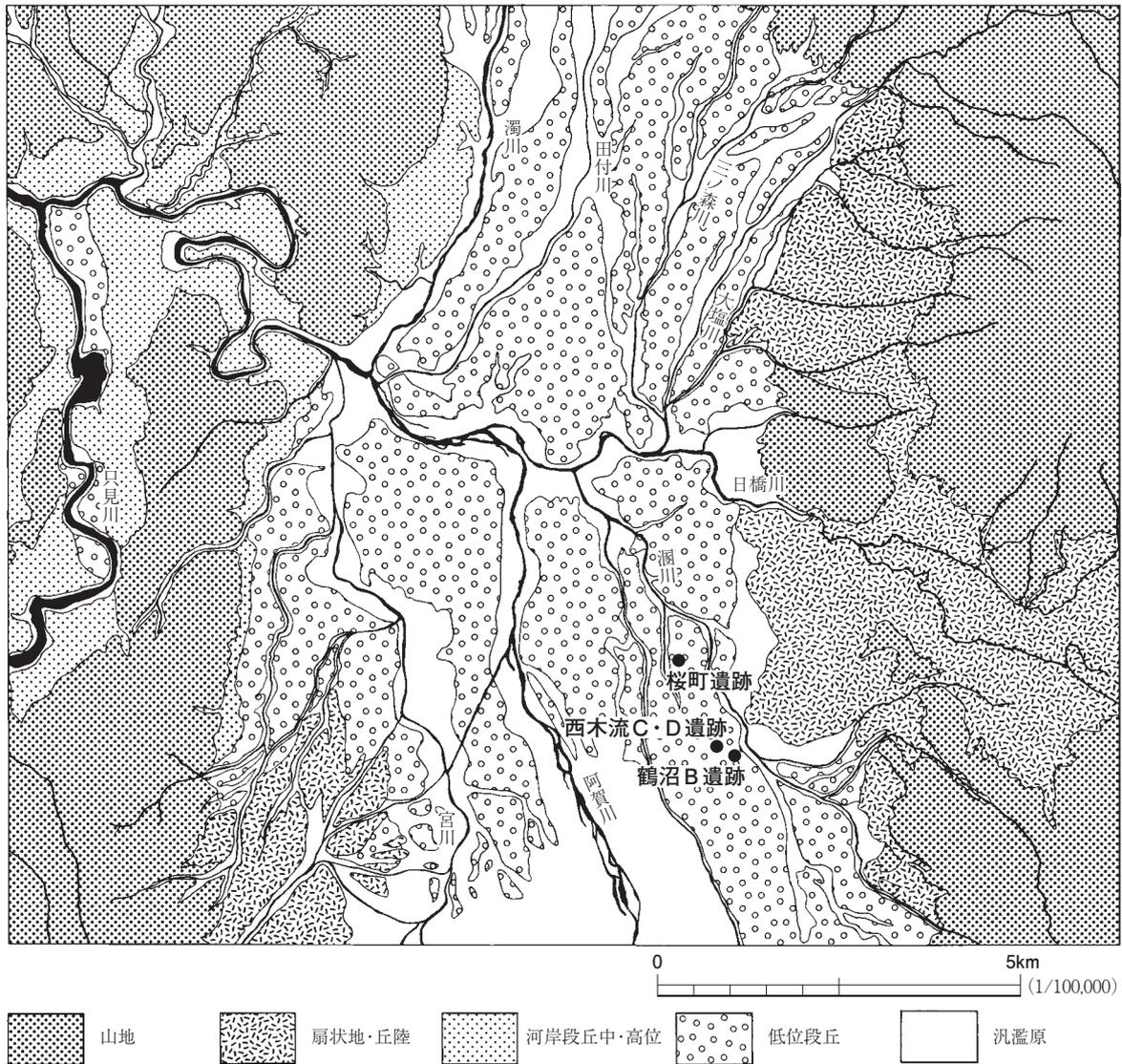


図2 調査遺跡と会津盆地北部地形

盆地の東端と西端には、会津盆地東縁断層帯と会津盆地西縁断層帯があり、特に西縁断層帯では、有史以来しばしば活動していることがわかっている。さらに、河川の氾濫が繰り返され、集落の水没等を示す痕跡が確認されている。(吉野)

第3節 歴史的環境

桜町(5次), 西木流C(2次), 西木流D(1次), 鶴沼B(1次)の各遺跡の調査では平安時代の遺構・遺物が確認された。鶴沼B遺跡では自然流路の跡から平安時代の遺物のほか、縄文土器, 弥生土器, 古墳時代の土師器が少なからず出土している。本節では湯川村・会津若松市の旧石器時代から平安時代までを中心として、周辺地域の遺跡を概観したい。

旧石器時代の遺跡は盆地内部では確認されておらず、会津若松市笹山原遺跡群など、猪苗代湖周

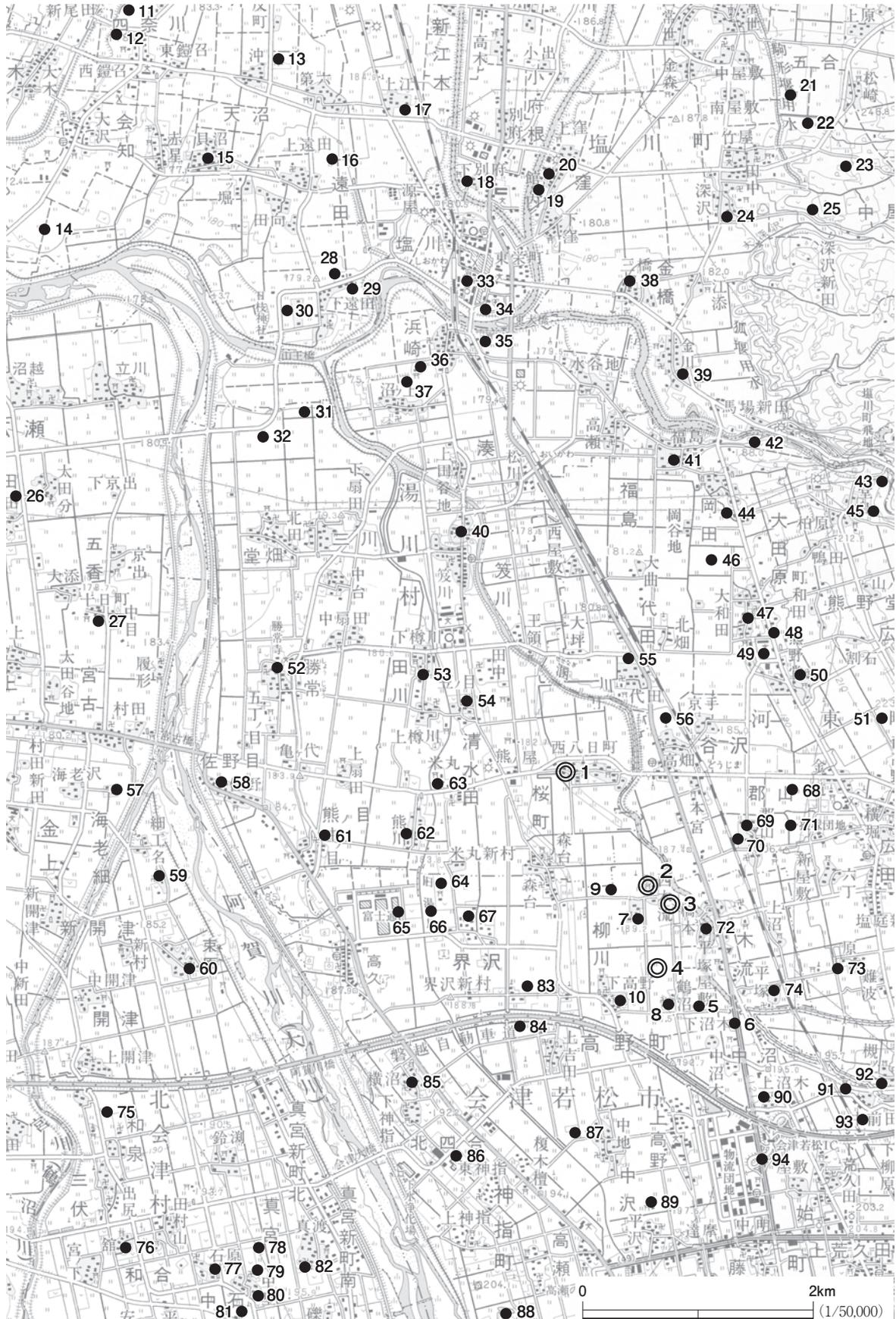


図3 周辺の遺跡位置図

表1 周辺遺跡一覧表

No.	遺跡名	種類	備考(文献)	No.	遺跡名	種類	備考(文献)
1	桜町遺跡	弥生集落・墳墓, 平安集落, 中近世の城館跡	『会津5・10・11・12』, 本書	48	大正寺跡	中世の社寺跡	
2	西木流C遺跡	奈良・平安時代の散布地	『会津若松66』, 『会津13』, 本書	49	熊野堂館跡	中世の城館跡	『新編』, 『河東町史』
3	西木流D遺跡	奈良・平安時代の散布地	『会津若松66』, 本書	50	高館館跡	中世の城館跡	『新編』, 『会津鑑』, 『古墨記』
4	鶴沼B遺跡	奈良・平安時代の散布地	『会津若松66』, 本書	51	南高野館跡	中世の城館跡	
5	鶴沼C遺跡	奈良・平安時代の散布地	『会津15』	52	勝常寺薬師堂	中世の社寺跡	『湯川村史』
6	西坂才遺跡	奈良・平安時代の散布地	『会津15』	53	禪定寺跡	中世の社寺跡	『新編』
7	西木流A遺跡	奈良・平安時代の散布地	『会津若松66』	54	笠ノ目館跡	中世の城館跡	『新編』, 『会津鑑』, 『古墨記』
8	鶴沼A遺跡	奈良・平安時代の散布地		55	荒木の館跡(代田村館)	中世の城館跡	『会津鑑』, 『古墨記』, 『新井家由来記』
9	西木流B遺跡	中世の散布地	『会津若松66』	56	高畑村館跡(高畑遺跡)	中世の城館跡	『会津鑑』, 『古墨記』, 『坂下27』
10	下高野館跡	中世の城館跡		57	海老沢館跡	中世の城館跡	『新編』
11	鏡ノ町A遺跡	奈良・平安時代の集落跡	『塩川町3』	58	佐野館跡	中世の城館跡	『古墨記』, 『湯川村史』
12	鏡ノ町B遺跡	奈良・平安時代の集落跡	『塩川町8』	59	細工名館跡	中世の城館跡	『新編』, 『会津鑑』
13	沖館跡(館ノ内遺跡)	中世の城館跡	『新編』, 『会津鑑』, 『塩川3』, 『蘆名家御旧臣見聞録』	60	塚原館跡	中世の城館跡	『新編』, 『会津鑑』, 『塚原村社寺縁起』, 『会津坂下町史』
14	内屋敷遺跡	古墳～近世集落跡	『塩川町7・12』	61	中ノ目館跡	中世の城館跡	『会津鑑』, 『古墨記』
15	貝沼館跡	中世の城館跡	『新編』, 『蘆名家御旧臣見聞録』	62	熊川館跡	中世の城館跡	『湯川村史』, 『二瓶氏系図』
16	麻生館遺跡(麻生館跡)	平安時代の集落跡・中世の館	『会津1』	63	米丸館跡	中世の城館跡	『会津鑑』, 『古墨記』
17	上江館跡	中世の城館跡	『新編』	64	界沢遺跡	中世の城館跡	
18	別府館跡	中世の城館跡	『古墨記』	65	東高久遺跡	平安時代の集落跡	『会津若松104』
19	上窪南館跡	中世の城館跡	『新編』	66	西館跡	中世の城館跡	『新編』, 『会津鑑』, 『古墨記』
20	丹波館跡	中世の城館跡	『新編』, 『会津鑑』, 『古墨記』	67	界沢館跡	中世の城館跡	
21	南屋敷跡	中世の城館跡	『新編』, 『会津鑑』, 『古墨記』	68	明石塚館跡	中世の城館跡	『明石塚館』(河東町, 1977), 『地誌草稿郡山村』
22	小滝館跡	中世の城館跡	『新編』, 『古墨記』, 『蘆名家御旧臣見聞録』	69	郡山遺跡	奈良・平安時代の官衙推定地	『河東町15』, 『会津若松107・114・115・118・124・128』
23	掘込館跡	中世の城館跡		70	原田館跡	中世の城館跡	
24	深沢・平塚館跡	中世の城館跡	『新編』	71	中屋敷館跡	中世の城館跡	『明石塚館』(河東町, 1977), 『地誌草稿郡山村』
25	竹の内館跡	中世の城館跡		72	平塚館跡	中世の城館跡	『新編』
26	御池田山ノ神遺跡	平安時代・中世の散布地	『坂下44』	73	足利館跡	中世の城館跡	
27	中目経塚	中世の塚		74	平塚館跡	中世の城館跡	『新編』
28	下遠田館跡	中世の城館跡	『新編』, 『会津鑑』, 『古墨記』	75	和泉館跡	中世の城館跡	
29	荒屋敷遺跡	縄文～古墳・平安・中近世の散布地	『会津2～6』, 『塩川町10・13』	76	田村山館跡	中世の城館跡	『新編』, 『会津鑑』, 『古墨記』
30	新屋敷跡	中世の城館跡	『新編』	77	石原館跡	中世の城館跡	『新編』, 『会津鑑』
31	北田城跡	中世の城館跡	『新編』, 『会津鑑』, 『古墨記』, 『湯川村史』, 『北田城跡』(湯川村, 1984)	78	平右衛門館館跡	中世の城館跡	
32	堂畑館跡	中世の城館跡	『古墨記』, 『湯川村史』	79	北館館跡	中世の城館跡	
33	小十郎館跡	中世の城館跡	『新編』	80	東館館跡	中世の城館跡	
34	柏木城館	中世の城館跡	『塔寺八幡宮長帳』, 『新編』, 『会津旧事雑考』	81	中館館跡	中世の城館跡	
35	浜崎城跡	中世・近世の城館跡	『新編』, 『会津鑑』, 『古墨記』, 『浜崎城絵図』	82	真渡館跡	中世の城館跡	『新編』
36	浜崎館跡	中世の城館跡	『会津鑑』	83	矢玉遺跡	奈良・平安時代の散布地	『会津若松61』
37	沼ノ上遺跡	縄文, 中世の集落跡	『会津8』	84	上吉田B遺跡	中世の散布地	『会津若松66』
38	三橋館跡	中世の城館跡	『塔寺八幡宮長帳』, 『新編』, 『会津鑑』, 『古墨記』	85	横沼館跡	中世の城館跡	
39	金川館跡	中世の城館跡		86	イタミ七堂跡	中世の社寺跡	
40	笈川館跡	中世の城館跡	『新編』, 『会津鑑』, 『古墨記』	87	中地館跡	中世の城館跡	『新編』
41	鳥の館跡(鳥村館)	中世の城館跡	『新編』, 『会津鑑』, 『古墨記』	88	神指城跡	中世の城館跡	『新編』, 『会津鑑』, 『古墨記』, 『会津農水X』
42	嶋村館跡	中世の城館跡	『会津鑑』, 『古墨記』, 『伴野家系図』, 『会津若松111』	89	平沢館跡(平沢遺跡)	中世の散布地・城館跡	『新編』, 『会津若松66』
43	権現堂跡	平安・中世の社寺跡		90	沼木欄跡	中世の城館跡	『会津鑑』, 『古墨記』
44	地蔵窯跡	中世の窯跡		91	中前田欄跡	中世の城館跡	
45	堂島墨跡(堂島館)	中世の城館跡	『会津鑑』, 『古墨記』, 『河東町史』	92	清正寺跡	中世・近世の社寺跡	
46	大和田館跡	中世の城館跡	『川東町史』, 『蘆名家御旧臣見聞録』, 『新編』, 『河東町12』	93	熊の壇供養壇群	中世の塚	
47	大和田欄跡	中世の城館跡	『古墨記』, 『河東町史』	94	屋敷A遺跡	弥生・古墳・平安時代, 中世の集落跡	『会津若松30・94』, 『横断道12』

『会津』会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告書 『会津農水』国営会津農業水利事業関連遺跡発掘調査 『横断道』磐越自動車道遺跡発掘調査報告書 『新編』新編会津風土記 『古墨記』会津古墨記 『会津若松』会津若松発掘報告書 『河東町』河東町発掘報告書 『塩川町』塩川町発掘報告書 『坂下』会津坂下町発掘報告書

辺の標高が高い場所に多いが、本年度の調査では鶴沼B遺跡より旧石器時代末から縄文時代の初め頃と考えられる石器が1点出土している。

縄文時代の遺跡も旧石器時代と同じく標高の高い場所に多い。縄文時代草創期の遺跡は笹山原No.11遺跡、西会津町塩喰岩陰遺跡などで確認される。喜多方市常世原田遺跡は縄文早期の常世式の標識遺跡となっている。会津若松市では大野原A遺跡からも早期の土器が出土している。中期の本能原遺跡では環状集落、晩期は上雨屋遺跡・屋敷遺跡で土坑墓が確認されている。

弥生時代になると、縄文時代までとは異なり盆地内部の標高の低い部分でも遺跡が確認されている。会津若松市一ノ堰B遺跡・川原町口遺跡では弥生時代の土坑墓群が確認されている。中期の会津若松市南御山遺跡・墓料遺跡では、東日本で縄文時代から続く伝統的な墓制である再葬墓が発見されている。後期の遺跡では、会津若松市和泉遺跡で多くの土器が出土している。会津若松市屋敷遺跡では方形周溝墓から北陸地方の影響を受けた土器が出土し、桜町遺跡の方形周溝墓からは北陸地方だけではなく、関東地方の影響が見られる土器も確認され、広い範囲での交流が想定される。集落が確認された事例は少ないが、湯川村勝常寺では後期の住居跡が確認されており、周辺に集落が広がっていた可能性が高い。

古墳時代の会津地方は、東北地方の中で早い時期に古墳が築かれた地域である。会津若松市田村山古墳からは東北最古の内行花文鏡が出土し、鏡自体の年代は2世紀とも考えられている。会津大塚山古墳からは、古墳時代の中心地域である近畿地方とのつながりを示す遺物とされる三角縁神獣鏡が出土している。会津大塚山古墳よりも古いと考えられる堂ヶ作山古墳や飯盛山古墳などは、盆地を囲む山の尾根上に築かれている。中期以降は大型古墳の築造が見られなくなり、調査された古墳も少ないため、中・後期の古墳の実態は不明な点が多い。調査が行われた中期古墳と考えられる例では、会津坂下町長井前ノ山古墳は全長36m程の前方後円墳で、合掌形石室と呼ばれる埋葬施設を持つ。合掌形石室は長野県などで多く確認されていて、朝鮮半島由来の墓制と考えられている。喜多方市明蓮寺古墳群第1号墳は箱形石棺を埋葬施設として有し、古墳時代中期の須恵器杯蓋が出土している。後期古墳は中期以上に不明な点が多い。会津若松市では村北古墳群、長山古墳、大塚山西古墳、大塚山2号墳などが調査され、これらの古墳は後期に位置づけられる可能性がある。小札甲が出土した喜多方市山崎横穴墓群や会津若松市駒板新田横穴墓群、大塚山横穴墓群など古墳時代の終わり頃の7世紀には多くの横穴が確認されている。

湯川村・会津若松市において集落・住居が確認された事例は、和泉遺跡、村西遺跡など限られている。近隣地域では、会津坂下町樋渡台畑遺跡で前期・後期の集落が確認され、喜多方市古屋敷遺跡で国内有数の規模の豪族居館跡が見つまっている。樋渡台畑遺跡の後期の集落も豪族居館に特徴的な突出部を持つ溝に囲まれており、豪族居館跡と考えられている。

会津盆地では7・8世紀代の遺跡・遺物も確認される事例が極めて少ない。船ヶ森西遺跡では7・8世紀の竪穴住居跡が確認できる。他には会津若松市南原遺跡などでこの時期の土器が出土している。村北瓦窯跡は7世紀後半～8世紀初頭の短期間に操業された窯跡で、その供給先の一つが郡山

遺跡と考えられる。

平安時代になると会津盆地内部で確認できる遺跡の数が大幅に増加し、この時期に会津地方の開発の一つの画期がある。郡山遺跡は古代会津郡衙と推定される遺跡で、奈良時代から平安時代にかけての遺跡である。「會」と書かれた墨書土器、寺院や官衙などでのみ用いられた瓦、一般集落には流通しない灰釉陶器、円面硯などが出土している。平成24年度の調査では役人の居宅跡と推定される、規則的に並んだ掘立柱建物跡群も確認されている。

会津盆地の平安時代の遺跡の多くでは、掘立柱建物跡が中心であり、竪穴建物が確認される事例は少ない。会津若松市横沼西遺跡は竪穴建物が確認できる数少ない遺跡である。

郡山遺跡の南西約500mに所在する西木流C遺跡では掘立柱建物跡や、灰釉・緑釉陶器などが検出されているほか、2012年度の1次調査では、大規模な自然流路の跡から、斎串など律令祭祀にかかわる遺物、棧橋などの機能が想定される杭列が見つかった。

上吉田遺跡では自然流路跡の中から、会津盆地内のみならず福島県内の遺跡では最多の墨書土器が確認されている。文字の種類も多岐に及び、河川を利用した祭祀を行っていたと見られる。

屋敷遺跡では掘立柱建物が規則的に配置されており、その周囲は溝によって区画されていた。

矢玉遺跡は15点の木簡・漆紙文書が出土した遺跡であり、それらは文献に書かれることの少ない古代会津地方の一端を示す貴重な文字史料といえる。この遺跡でも自然河川を水運に利用していたと見られ、河川跡に近接して掘立柱建物跡が規則的に並んでいる。一部掘削して手を加えている状況が確認され、舟溜りと推定される場所もある。掘立柱建物跡群と流路が接する状況は上居合遺跡でも確認でき、生活・経済基盤としての水運の重要性がうかがえる。

中世には武家が台頭し、その拠点として城館が多く築かれる。会津盆地内にも多くの城館跡が存在し、喜多方市荒屋敷遺跡・麻生館遺跡・高堂太遺跡・下高額館跡、湯川村桜町遺跡で調査が行われ、当時の城館の構造が明らかにされている。

近世の遺跡としては、関ヶ原の戦い後に、完成を待たず破却された神指城の調査が行われ、二の丸の南辺と東辺の土塁跡と堀跡が確認された。鶴ヶ城として知られる若松城やその城下の武家屋敷跡も発掘調査が行われ、当時の武家の生活がうかがえる遺物が出土している。 (鶴見)

第4節 調査方法

今回の調査では、グリッド設定を、これまでの会津縦貫北道路遺跡発掘調査の方法に準拠して行った。10mごとに、北から南に算用数字を、西から東にアルファベットを順に付けて、グリッド番号とした。ただし、全面に杭の打設は行わず、遺物の密集する範囲や、細部の図化が必要な遺構周辺に限定した。また、今回設定した国土座標は、東日本大震災でのずれを補正したものを利用している。

標高は、調査区の周囲に標高基準杭の打設を委託し、3か所に設定した。さらに標高基準杭を元

にして、現地に打設したグリッド杭にも標高を移動し、それを調査時の基準とした。

遺跡内での土層は、遺跡全体の基本土層を「L I, L II…」で表記し、遺構内の堆積土は「 ℓ 1, ℓ 2…」で表記した。

遺構の測量は、1/20、遺跡全体の地形測量は、1/200の縮尺で実施した。平面図については、光波測距器を用いて実測し、断面図は水糸を張って、コンバックスで実測した。

取り上げた遺物は、土器等については遺物カードに遺構・地点名・遺物番号・層位名・日付を記載し、ビニール袋に入れて持ち帰った。

写真撮影は、35mm一眼レフカメラ2台を利用して、モノクロフィルムとカラーリバーサルの両方を使って実施した。さらに一部は、デジタルカメラによる写真撮影も行った。なお、調査区の全景写真については、委託してラジコンヘリコプターによる空撮を実施した。 (菅 原)



第1編 桜町遺跡（5次）

第1章 調査経過

桜町遺跡の5次調査は、2,000㎡を対象に、平成25年4月10日(水)～5月17日(金)にわたり実施した。実働日数は25日間である。今回は周辺調査区の状況から、遺構・遺物の分布が希薄だったため、計画の1週間前には調査が終了し、引き渡しを行うことができた。以下、週ごとに記述する。

第1週：4月10日(水)、現地入り。重機搬入と、調査区の縄張りを行う。次いで4月11日(木)から、表土剥ぎを開始し、プレハブ・トイレ設置と器材搬入を行った。

第2週：4月15日(月)、作業員雇用手続きをし、安全教育ののち、作業を開始する。同日のうちに小型の土坑の姿が見え始め、199・200号土坑と命名する。

第3週：4月23日(火)、199号土坑の断面写真撮影→断面図作成→完掘写真撮影を実施する。4月24日(水)、小雨の降る中、200号土坑の断面写真撮影→断面図作成、完掘写真撮影を行う。4月25日(木)、雨水の排水に追われる。

第4週：ゴールデンウィークのため、作業は休みとする。

第5週：5月8日(水)～10日(金)、委託業者による測量基準杭の移設と原点移動。この間、強風が吹き荒れ、作業は困難を極めた。

第6週：それでも5月14日(火)までには遺構精査を終了させることができ、同日午後、光波測距器による、遺跡全体の地形測量を行う。また、層序を確認するため、2m×2mの深掘り区を5か所設け、順次、掘り下げていく。5月16日(木)・17日(金)、発掘器材を西木流C遺跡のプレハブに移動。17日(金)、調査を終了し、全員、西木流C遺跡に合流した。

その後、5月23日(木)に現地引き渡し、6月4日(火)・5日(水)に埋め戻しを行い、6月10日(月)に、喜多方工事事務所長から作業完了の最終確認を受けた。(菅原)



第1編 桜町遺跡 (5次)

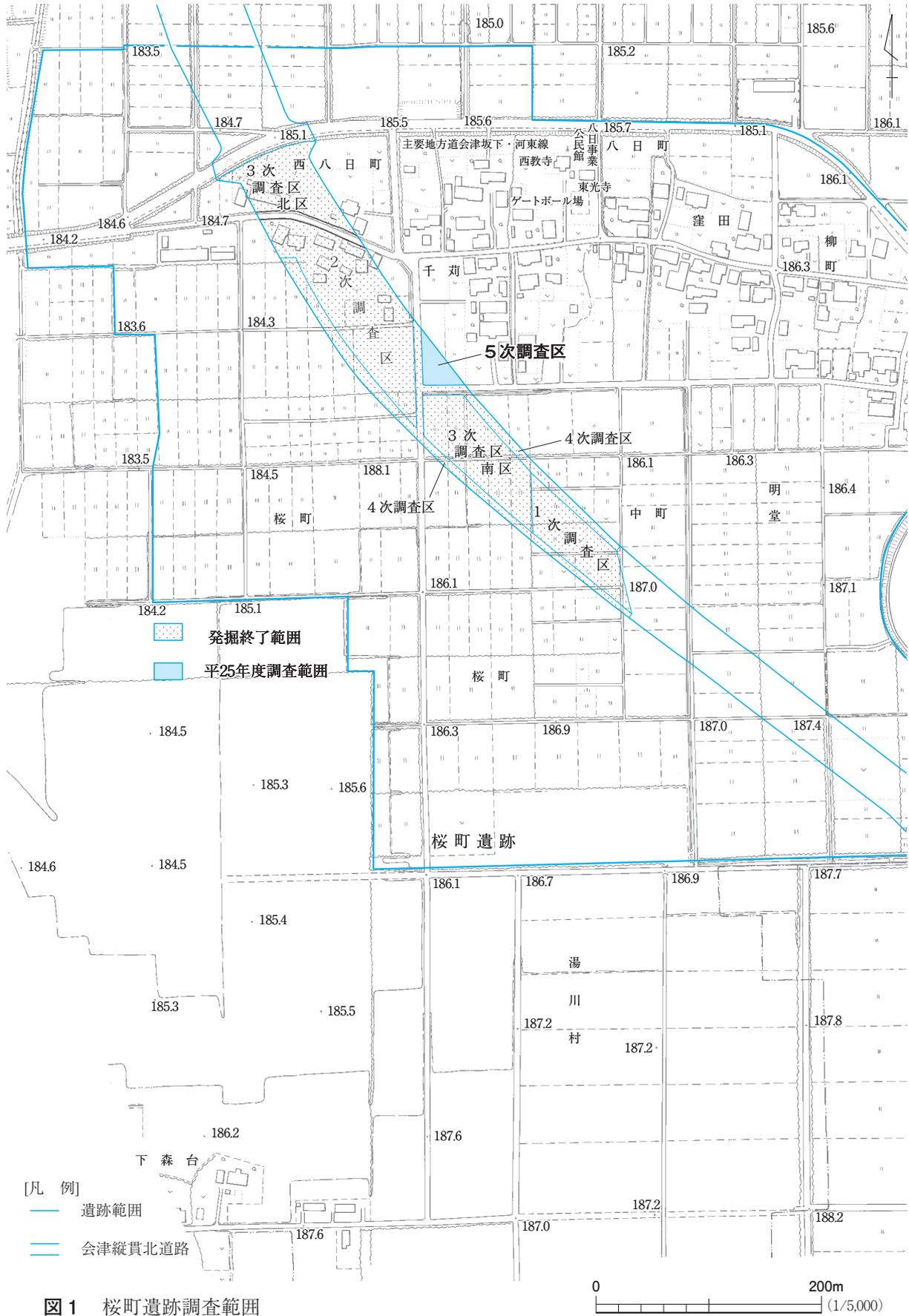


図1 桜町遺跡調査範囲

第2章 遺構と遺物

第1節 遺構の分布と基本土層

1 遺構の分布

5次調査区は、遺構の分布が希薄だった。これは、隣接調査区の状況から予測された通りの結果であり、調査区南西部で土坑が2基検出されたのみである。他に、調査区南西部を「L」状に曲が

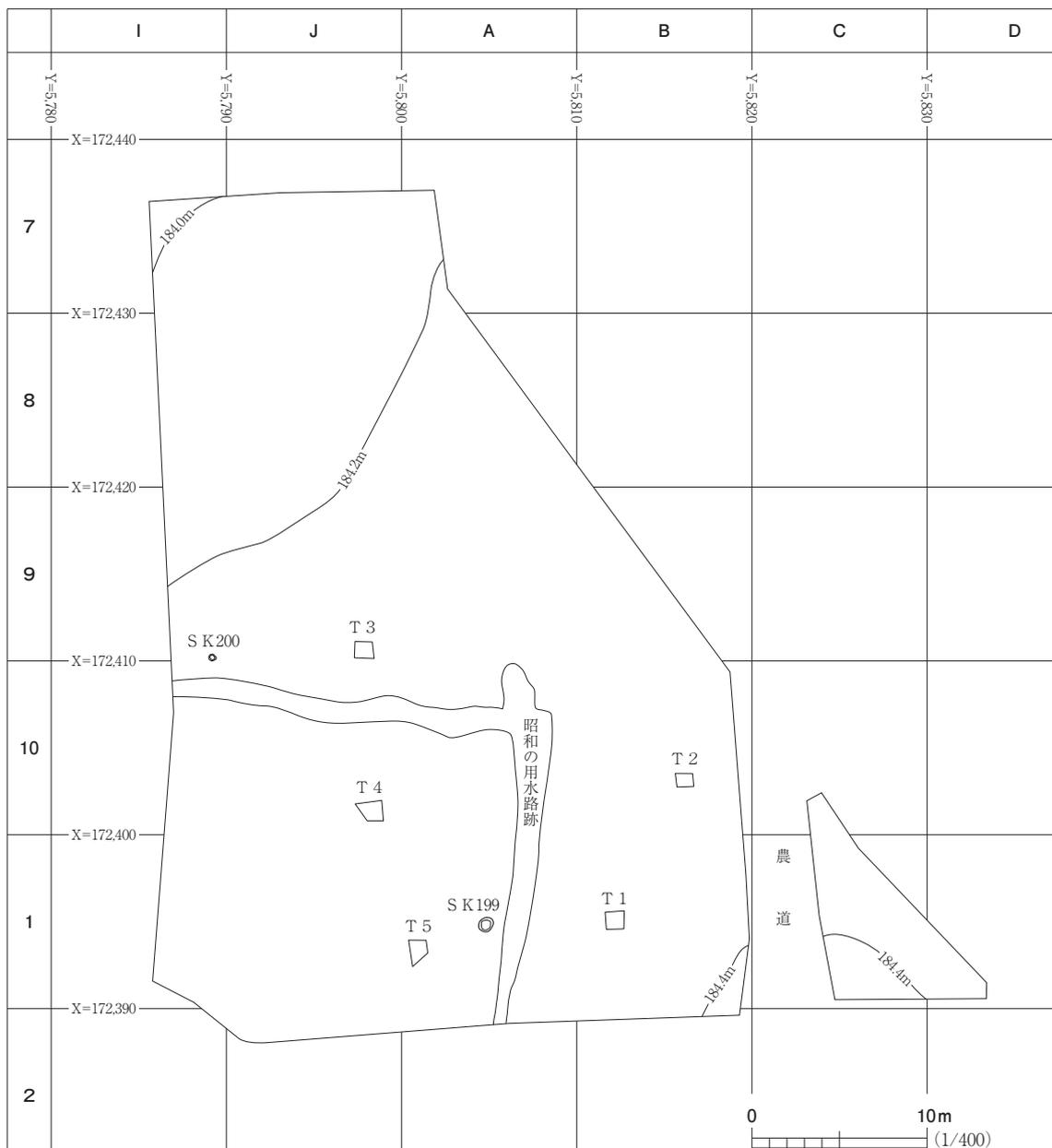


図2 遺構配置図

る溝跡が検出されたが、昭和30年代の農地造成で埋められた事実が判明しており、遺構として扱わなかった。

また、2か所の風倒木痕も、同様の扱いとした。

2 基本土層

基本土層は、原則的に1～4次調査と同じ基準で分層した。表記も同様で、アルファベットの大文字Lを付け、これにローマ数字を組み合わせている。

L I ……調査区の表土層である。

L II ……黒褐色土である。旧表土層に相当する土層である。層厚は数cm程度で、部分的に残存していた。

L III a ……黒褐色土に沼沢火山噴出物を含む土層である。層厚は十数cmと薄い。

L III b ……砂層である。上部は細かな砂と粘土の互層をなし、下部は粒子が粗くなる。層厚は、30～50cmを測る。

L III c ……灰褐色粘土。層厚は、30cm前後を測る。

L III d ……沼沢火山噴出物である。 (菅原)

第2節 土 坑

5次調査で検出されたのは、199号土坑と200号土坑の2基である。それらは、形状・堆積土が類似しており、同時期の所産と考えられる。

具体的には、出土遺物の決め手を欠くものの、近世に帰属する可能性が高い。性格については、不明である。

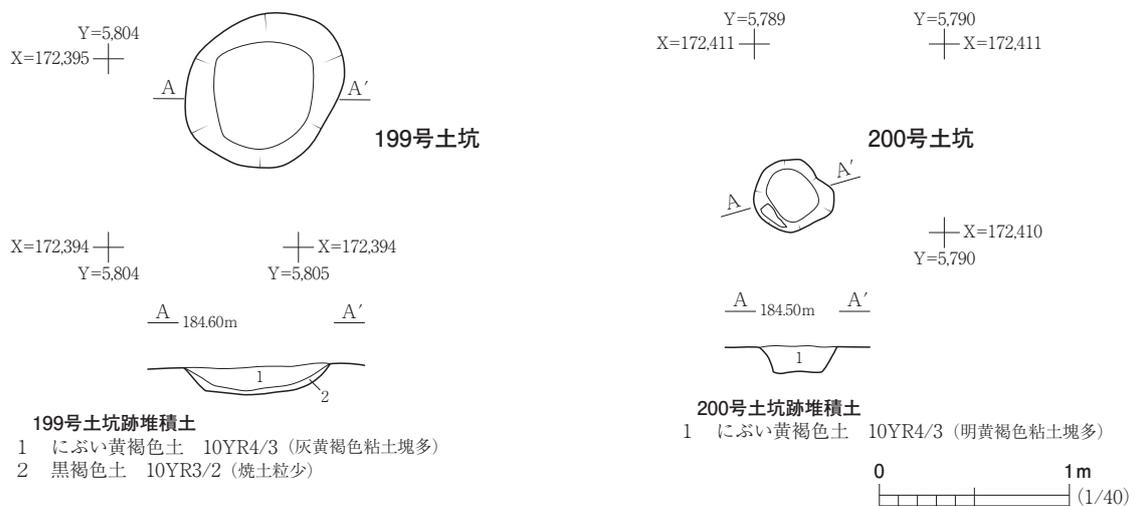


図3 199・200号土坑

199号土坑 S K 199 (図3, 写真3)

調査区南部のA 1グリッドで検出された小型の土坑である。L III a 上面で検出され、プランははっきりしていた。

平面形は不整形円形を呈し、規模は90cm×76cm、検出面からの深さは16cmを測る。堆積土は2層に分かれ、いずれも人為堆積土と考えられる。ℓ 1は、にぶい黄褐色土で、灰黄褐色粘土を多量に含む。ℓ 2は、底面全体を覆う薄い黒褐色土である。少量の焼土粒を含む。

遺物は出土していない。

200号土坑 S K 200 (図4, 写真3)

調査区西部のI 9グリッドで検出された小型の土坑である。L III a 上面で検出され、プランははっきりしていた。

平面形は不整形円形を呈し、規模は44cm×37cm、検出面からの深さは14cmを測る。堆積土は、にぶい黄褐色土の単層である。明黄褐色粘土塊を多く含む。

遺物は出土していない。

(菅原)

第3節 遺構外出土遺物

遺構外からは、表土中心に、須恵器片・土師器片・近世陶磁器片、銭貨が出土した。ここでは、図示できた5点に説明を加える。

須 恵 器 (図4-1~4, 写真4)

いずれも、甕の胴部片である。1は、外面に平行引き→螺状沈線が施され、大戸窯産と判断される。2も同様で、1とは接合しなかったが、同一個体の可能性がある。3は、外面に浅い平行引き目、4は、交差した平行引き目が観察される。いずれも、1・2と色調が異なり、大戸窯の製品でない可能性もある。

銭 貨 (図4-5, 写真4)

寛永通寶である。劣化が著しく、緑青が吹いている。

(菅原)

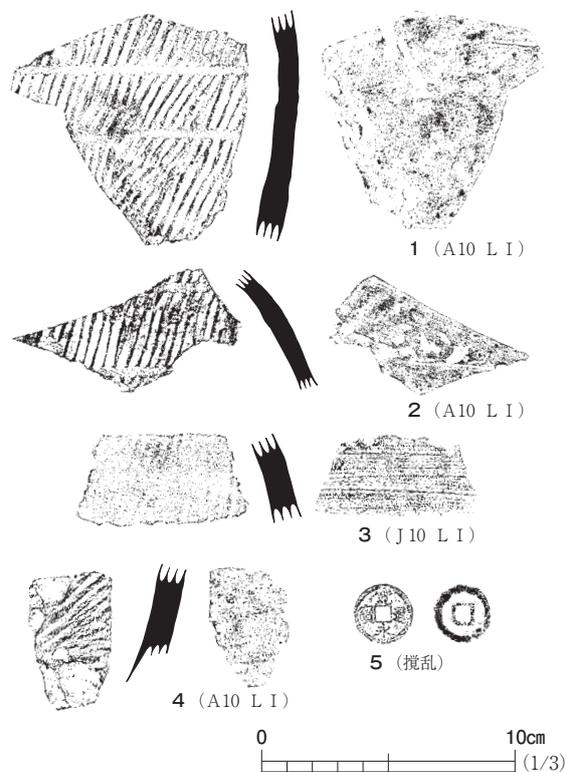


図4 遺構外出土遺物

第3章 総括

本年度の5次調査によって、会津縦貫北道路に係る桜町遺跡の発掘調査は、全て終了した。今回の成果は、以下の4点に要約することができる。

1. 5次調査区は、現在の千苺集落に接しており、1～4次調査区より、標高のいくぶん高い場所にあたる。
2. 遺構は、土坑2基が検出された。時期は、近世と推定される。
3. 遺物は、遺構外から、少量の須恵器・土師器・近世陶磁器片、銭貨が出土した。
4. 以上に、1～4次調査の成果を加味すると、桜町遺跡の遺構分布は、現在の千苺集落から離れた標高の低い部分を中心に展開することが明らかになったと言える。 (菅原)



写 真 図 版

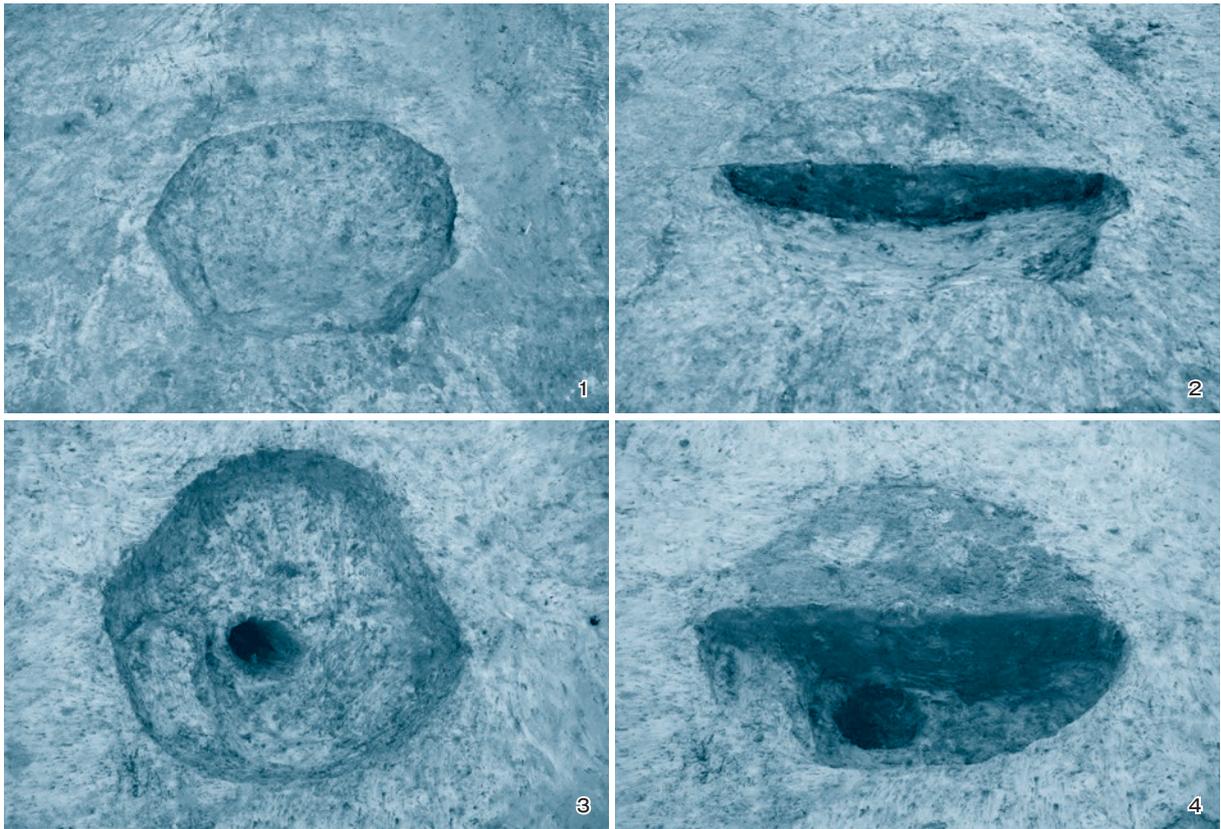
第1編 桜町遺跡（5次）



1 調査区全景（南西から）

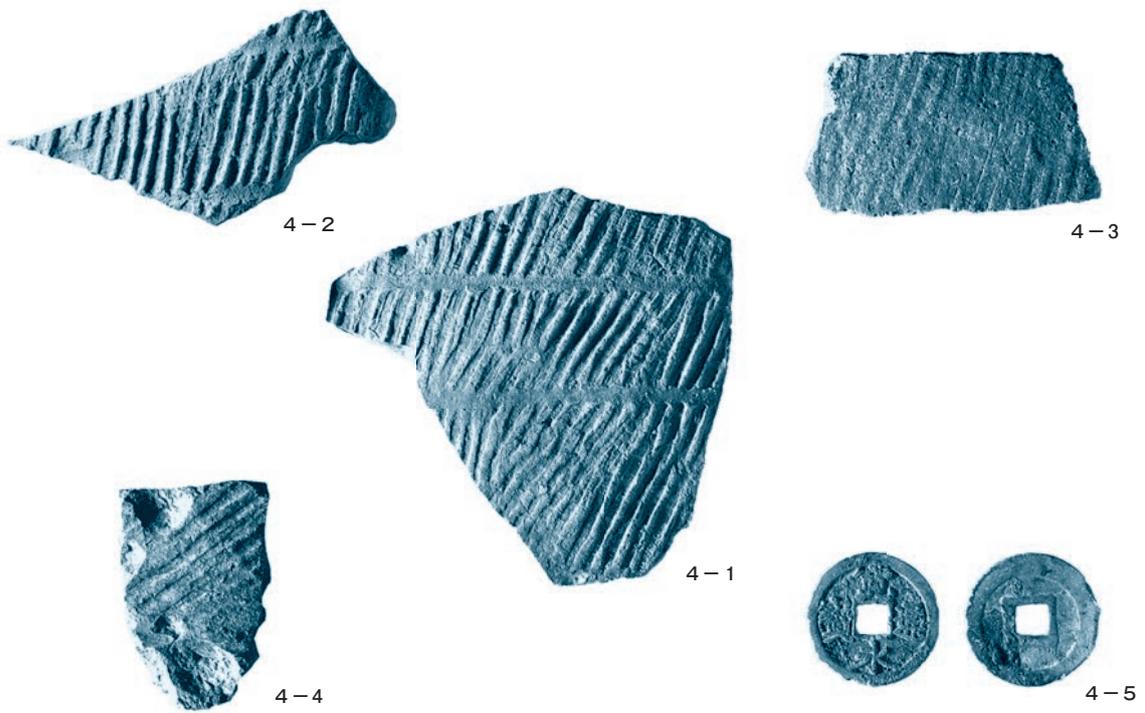


2 調査区全景（西から）



3 199・200号土坑

1 199号土坑全景(南から) 2 199号土坑断面(南から)
3 200号土坑全景(南から) 4 200号土坑断面(南から)



4 遺構外出土遺物

第2編 西木流C遺跡（2次）

第1章 調査経過

西木流C遺跡の2次調査は、10,400㎡を対象に、4月10日(水)～11月22日(金)にわたり実施した。実働日数は、136日間である。調査区は、北側のI区7,800㎡と、南側のII区2,600㎡に分かれており(図1)、基本的にはII区→I区の順で作業を進めた。ただ、実際の工程は、工事の進捗状況に大きく左右され、調査員・作業員は両区の間を行き来している。また今回は、1次調査の経験から、最も労力が掛かると予想された1号流路跡に十分な作業時間をかけるため、遺構分布の稀薄なI区西端部については、トレンチ調査で対応した。その結果、本格的な寒さの前に調査を終了させ、考古学的にも一定の成果を上げることができたと言える。以下、2週間単位で調査経過を報告する。

第1～2週：器材搬入、プレハブ・トイレ設置、I区の縄張りを行い、表土剥ぎを開始する。また、II区に置かれた1次調査の廃土移動にも着手した。

第3～4週：4月23日(火)、作業員雇用を開始する。次いで4月25日(木)から、廃土を移動したII区の表土剥ぎを開始し、それを追いかける形で遺構検出に着手した。その結果、1次調査区4号溝跡の続きをほぼ検出し、さらに重複する溝跡を確認した。

第5～6週：5月10日(金)、4号溝跡を完掘、重複する溝跡にサブトレンチを入れたところ、土師器・須恵器がまとまって出土し、古代の遺構になる可能性が出てきた。そこで、14号溝跡と命名し、さらに隣接の溝跡を15号溝跡とした。

第7～8週：5月20日(月)に、桜町遺跡の調査を終了した調査員・作業員が合流。このことで、検出作業は飛躍的に進み、調査区東辺に沿って16号溝跡を検出した。5月22日(水)には、上層から多量の流木が出土し始めた。

第9～10週：14～16号溝跡の掘り込みを継続し、6月10日(月)に、16号溝跡から細く枝分かれした17号溝跡を検出した。

第11～12週：II区(工事用道路部分を除く)の調査の目途がついてきたため、6月24日(月)から、調査員・作業員の一部がI区に移動し、同時並行で作業を進めることにした。同区東半で1次調査区1号流路跡の続きが検出された。

第13～14週：I区の調査は、西半の先行引き渡しが急遽決定したため、1号流路跡の調査をいったん中断する。一方、II区の調査は順調に進み、工事用道路部分を残して、7月12日(金)に実質的な作業を終了した。

第15～16週：全員で、I区西半の調査にあたる。7月24日(水)、3号土坑を検出。半裁する。

第17～18週：19号溝跡を検出し、サブトレンチを4本入れ、断面で土層堆積状況を確認する。古墳時代前期の土師器高杯が出土したが、他に遺物は出土しなかった。8月6日(火)には、廃土置き場の頂上から、19号溝跡の全景写真を撮影し、I区西半の調査をひとまず終えた。盆休み前の

8月9日(金)は、遺構のシート養生など、安全確保を行った。

第19週：盆休み。

第20～21週：I区東半の調査を再開した。北へ向かって、重機で表土剥ぎを行い、一定の面積が確保できた範囲から、人力で遺構検出と掘り込みを行っていく作業を開始した。まもなく1次調査区ほどではなかったものの、多量の土器類や木器が底面付近から出土し始め、ほぼ同じ状態が9月下旬まで続いた。8月29日(木)には、I区西半の3,500㎡(重機進入路部分を除く)と、II区2,000㎡(工事用道路部分を除く)の引き渡しを行う。

第22～23週：9月4日(水)から、II区の工事用道路部分の調査をI区東半と同時進行で開始し、9月13日(金)までに終了させた。調査成果では、15号溝跡の西端がとらえられている。

第24～25週：9月18日(水)に、このII区の工事用道路部分600㎡の引き渡しを行う。引き続き、9月24日(火)から、I区西半の重機進入路部分の調査に着手した。同区東半で発見されなかった1号流路跡の西壁と、それより古い21号溝跡を検出し、27日(金)までに終了させることができた。

第26～27週：調査の終盤近くとなった10月1日(火)から、鶴沼B遺跡の応援に作業員の一部が移動する。10月3日(木)には、I区東半で層序確認のための深掘りを開始した。10月8日(火)～10日(木)は、深掘りで大型の流木が出土するが、加工痕の無いことを確認して、埋め戻す。

第28～29週：10月18日(金)に、産廃物を鶴沼C遺跡のプレハブ脇に運び、10月25日(金)には、深掘り、1号流路跡の掘り込み・実測が終了した。

第30～31週：10月30日(水)、器材類を発掘現場からプレハブに移動し、10月31日(木)から、器材類の片づけと、ビニールシートの水洗いを開始した。

第32～33週：11月22日(金)、I区東半および西半の工事用道路部分、計4,300㎡の引き渡しを行った。これによって、2次調査の一切を完了する。(菅原)

第2章 遺構と遺物

第1節 遺構の分布と概要

今回の2次調査では、1次調査区の北側をI区、南側をII区と呼称した。I・II区ともに、旧瀬川とその支流跡の溝跡・流路跡が、縦横無尽に走っているのが特徴である。一方で人工的な遺構は少ないが、会津若松市教育委員会の調査では、隣接地で多数の掘立柱建物跡が発見されており(会津若松市教育委員会1996・2000)、本遺跡は、鶴沼C遺跡や西坂才遺跡のように、河川沿岸に規格的配置の建物群が点在する景観だったと考えられる。

以下、地区ごとに遺構の分布と概要を述べる。

【I区】遺構の分布は、調査区中央を南北に縦断した用水路を境に、対照的な様相を呈している。東半の検出面は、1号流路跡の覆土でほぼ埋め尽くされ、地山相当のLⅢが露出していたのは、南

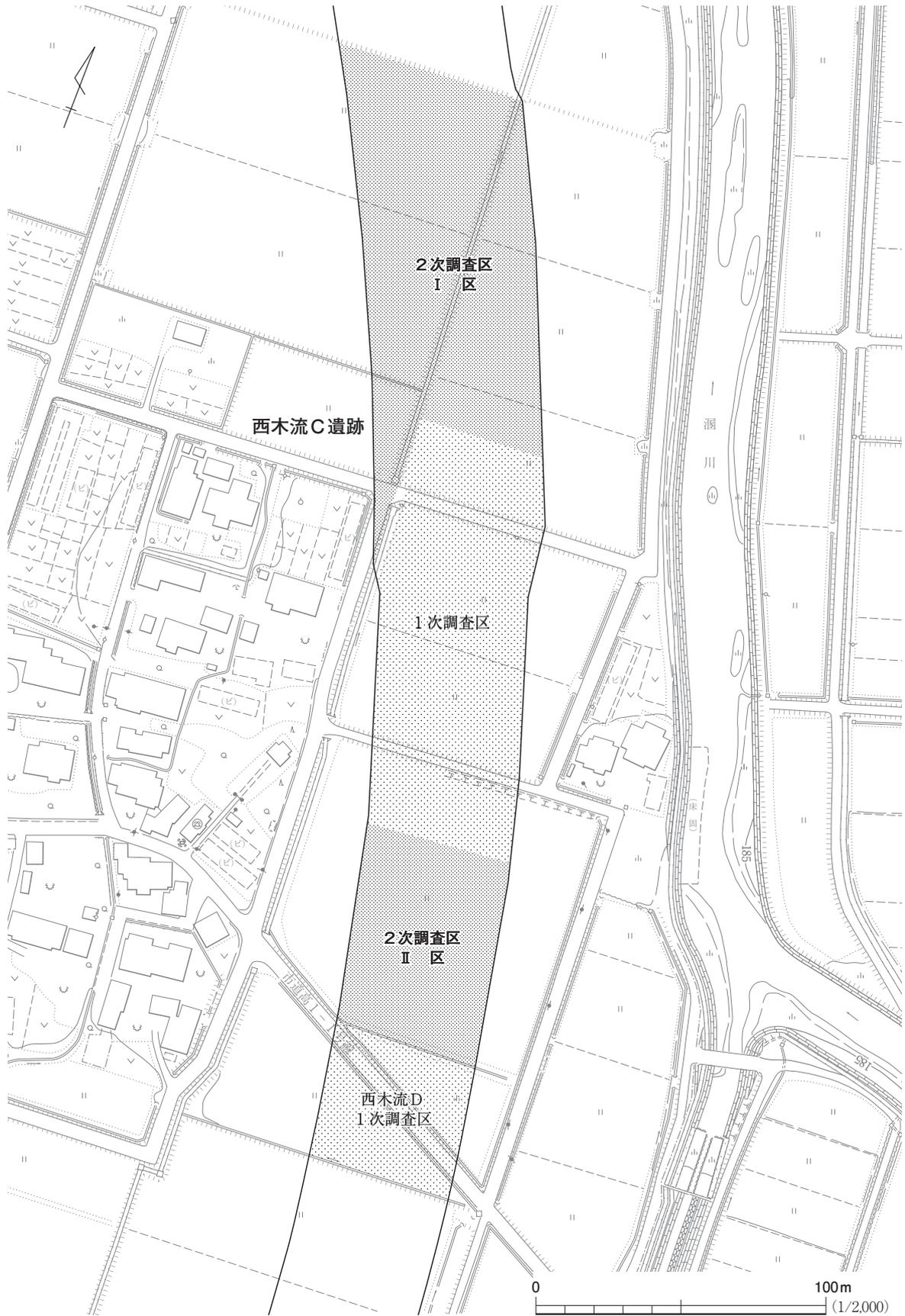


図1 西木流C遺跡調査位置図

東端と北端のみである。対して、西半の分布はきわめて希薄であり、南端と北端を除く範囲は、LⅢないし礫層のLⅣが露出していた。

それらは時期別に、次のように区分できる。

◎古代以前…1号流路跡, 19・21・22号溝跡

◎近現代……3号土坑

このうち、1号流路跡は1次調査で多数の木器・土器類が出土しており、今回もほぼ同様の結果となった。

【Ⅱ区】調査区全体に溝跡の分布が認められ、他の種類の遺構は皆無だった。それらは時期別に、次のように区分できる。

◎古代以前…5・14～18・20号溝跡

◎近現代……4号溝跡

さらに、古代の溝跡は、人工的な14・15・20号溝跡と、自然地形(流路跡)の5・16・17・18号溝跡に分けられ、前者は、蛇行しながら南→北へ流れ、後者を掘り込んで構築されている。

なお、本調査区の北半分は、既に会津若松市教育委員会が調査を実施した範囲に重なっている(図4)。しかし、ここでの調査は遺構の上面確認にとどまっており(会津若松市教育委員会1996・2000)、今回は掘り下げを行ったことになる。(菅原)

第2節 基本土層

基本土層の分層基準は、原則的に1次調査と一致させた。大別して、4層がある。

LⅠ……表土。ほとんどが水田耕作土である。

LⅡ……黒褐色粘質土。旧表土層に相当する土層である。層厚は数cm程度で、薄い。部分的に残存していた。

LⅢ……灰褐色粘質土。層厚は20～45cmを測る。遺構検出面の大半にあたる。LⅢへの移行は漸移的であり、場所によっては、沼沢火山噴出物の二次堆積を含む中間層が認められた。

LⅣ……礫層。流木や種子などの植物遺体を含んでいる。(菅原)

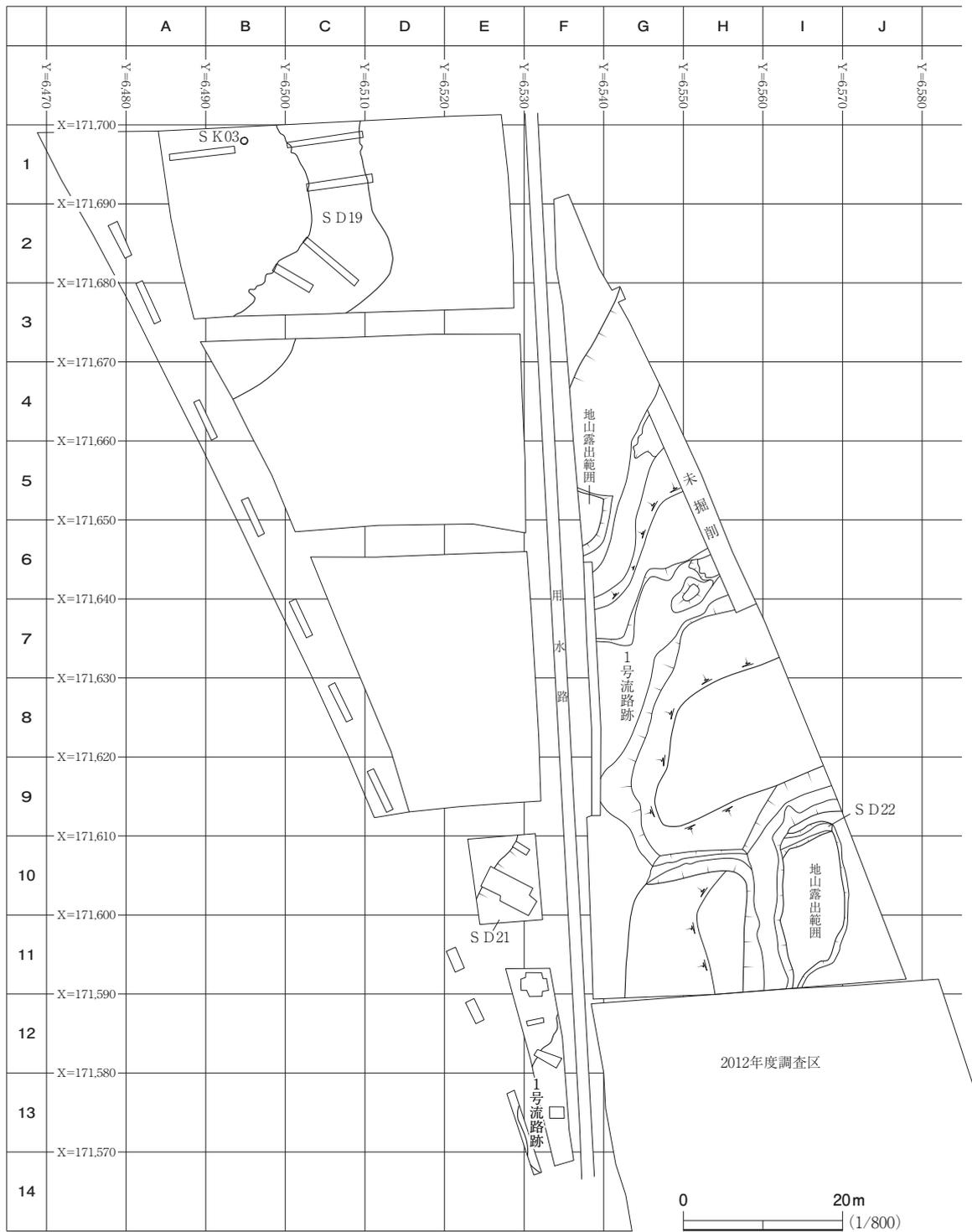


図2 I区遺構配置図

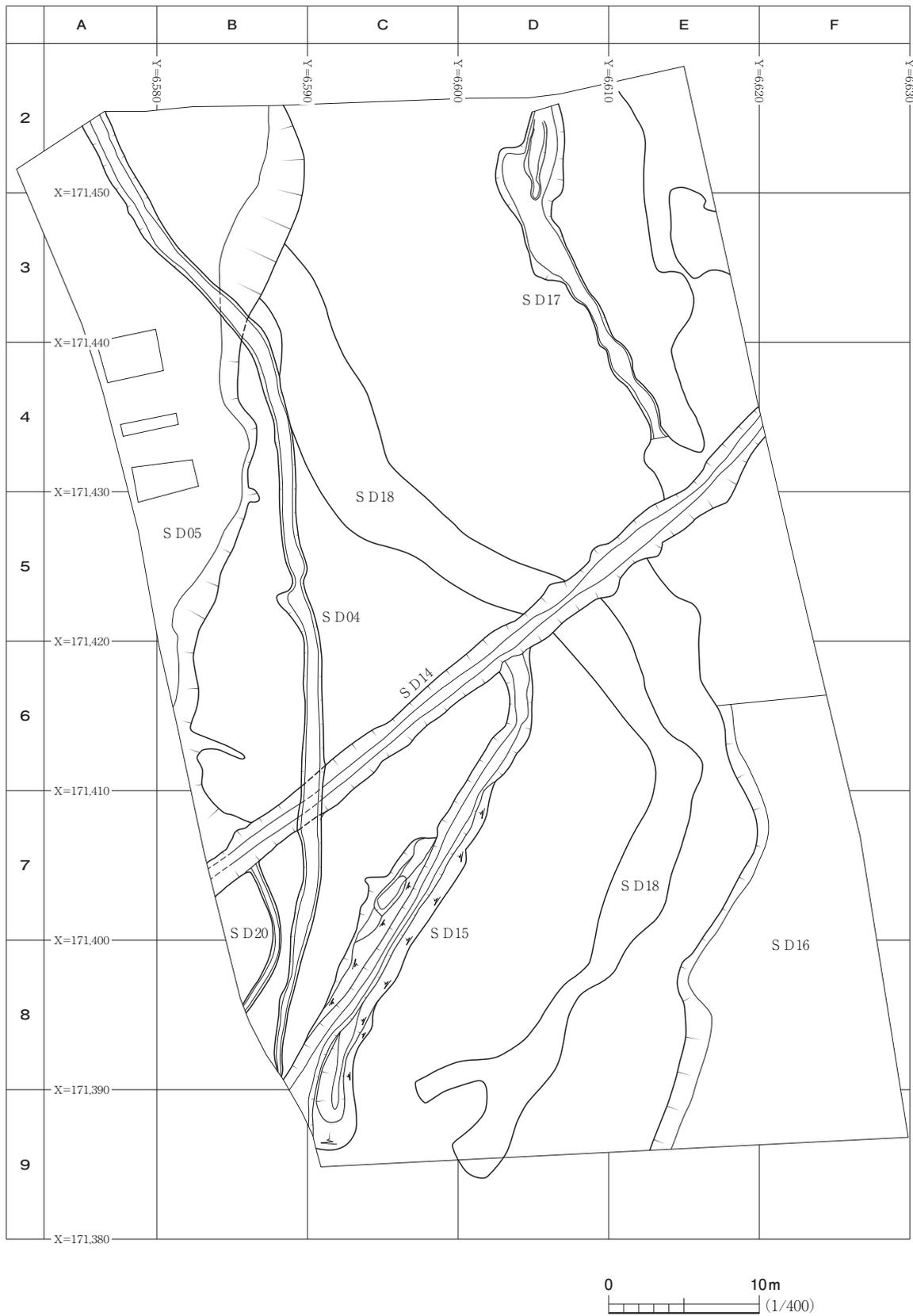


図3 II区遺構配置図

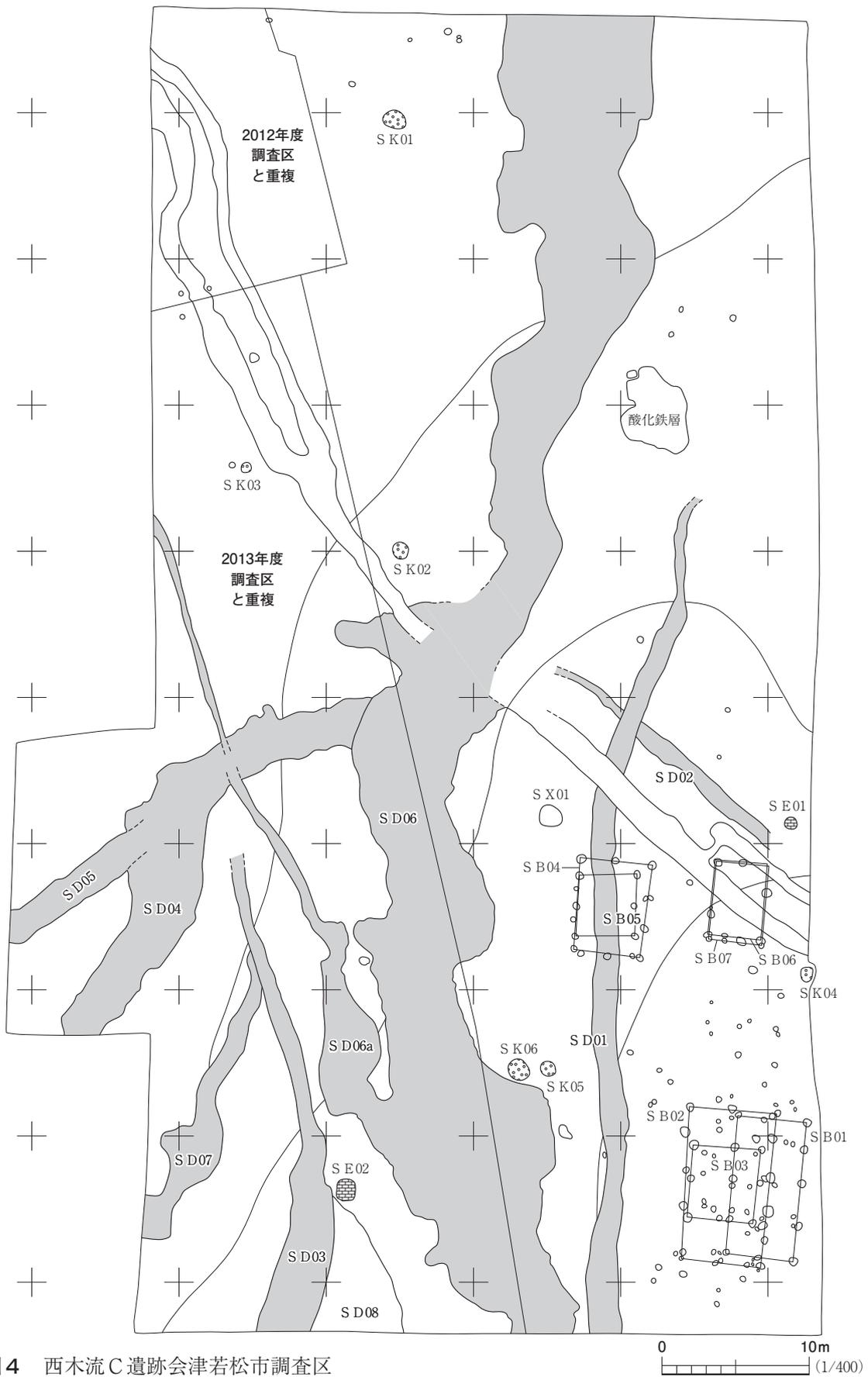


図4 西木流C遺跡会津若松市調査区

第3節 流路跡

流路跡が1条検出された。実際の流路跡は、他にもこれより幅の狭いものが多数発見されたが、人工施設跡と区別せず、すべて溝跡で登録している。以下、当該遺構のみを報告する。

1号流路跡

遺 構 (図5～8, 写真5～7)

1次調査において、北半検出面の大部分を占め、多量の木器・土器類が出土した流路跡である。今回の2次調査では、I区東半のほぼ全面で続きが確認され、調査区外にさらに延びることが判明した。調査方法は、まず南端にサブトレンチを入れて、遺物がまとまって出土する層位を確認した後、上部を適宜重機で剥いでいき、あとは人力で掘り込む手順を取っている。

本流路跡は、東西方向がE～I、南北方向が3～14グリッドにまたがっており、LⅢないし礫層のLⅣ上面で検出された。溝幅は最大箇所で6.9m、検出面からの深さ2.14mを測る。大きく見た方向は、「S」字状に蛇行しており、底面レベルの観察から南→北に流れていたと判断される(図5右)。これは、現在の溷川の流路と基本的に一致するもので、今回検出された長さは約114m、1次調査区と合わせた総延長は約183mとなる。重複関係は21・22号溝跡より新しく、底面は礫層に達していた。

なお、I9グリッドの南岸底面に、杭が1本確認されている(j-j')。

堆積土は基本的に3層に分かれ、深掘りをかけた箇所では、あと2層を確認した。いずれも自然堆積層である。ℓ1は、黒褐色から暗褐色粘質土で、層相は一定しない。ℓ2は、黒褐色粘質土で、いわゆる「スクモ層」に該当するものである。多量の植物遺体(小枝や茎・葉・種子など)を含んでおり、乾燥すると細かなひび割れが生じた。おそらく、静水状態のくぼみに周辺の植生を巻き込みながら、ゆっくりと堆積したものと推定される。ℓ3は、砂質土と粘質土が細かい幅で交互堆積したもので、流水層と考えられる。ℓ4は礫層である。層厚はまちまちで、部分的にℓ5が露出している箇所が認められた。ℓ5は、にぶい黄褐色砂質土で、部分的に縞状の黒褐色砂質土を含む。

遺 物 (図9～13, 写真21～27)

1次調査ほどではなかったが、今回も多く遺物が得られた。このうちℓ4・5の出土遺物は、本来ℓ3に帰属したものが、激しい流水作用で下部に潜り込んだ可能性があると思われる。ここでは、図示した62点を層位ごとに解説していく。

— ℓ2の遺物 —

土 師 器

いずれもロクロ土師器である。図9-1・2は、かわらけに該当するもので、胎土がきめ細かく精選されている。口径は10cm前後で近似しており、1は器高が低く、2は高めである。どちらも

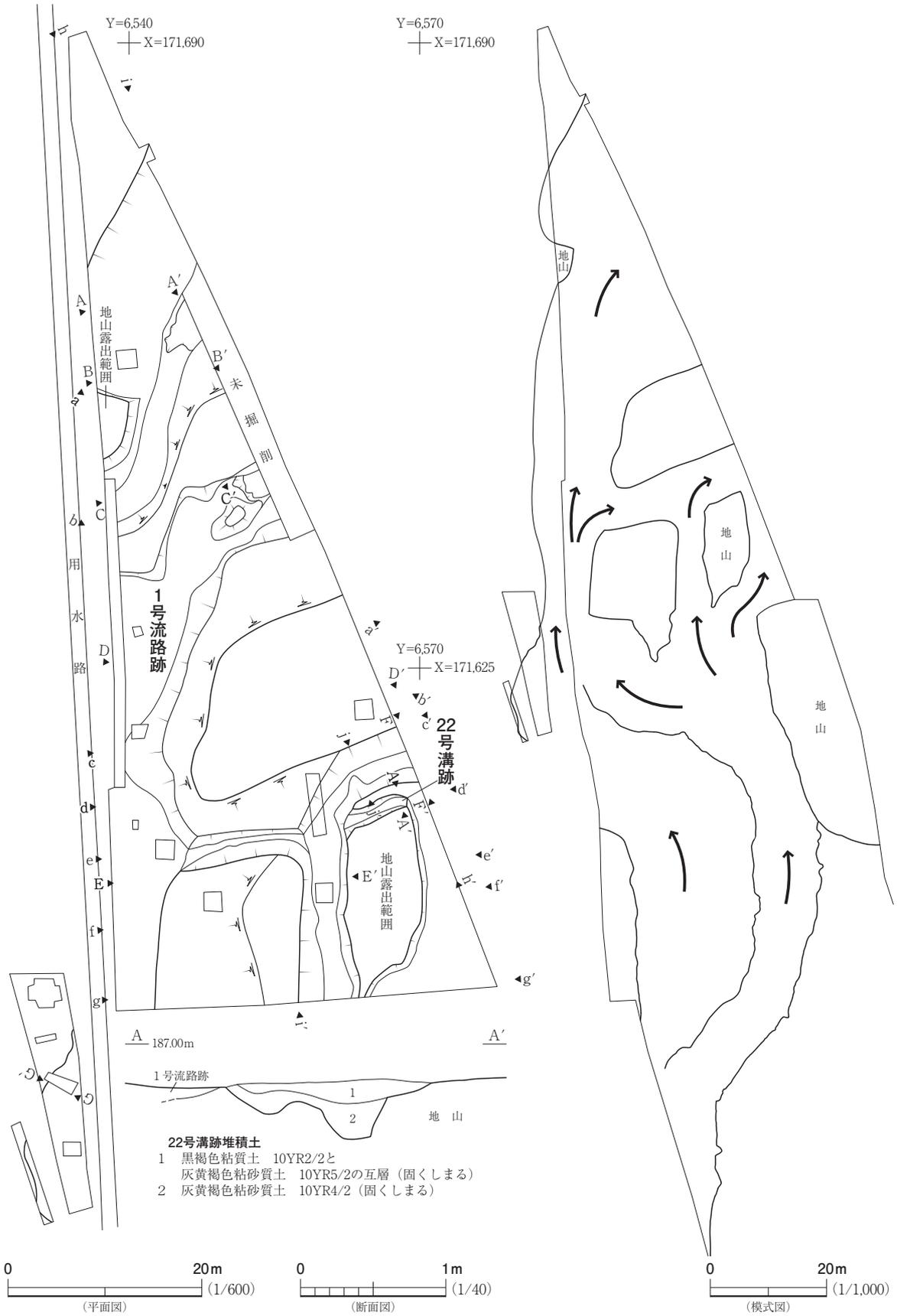


図5 1号流路跡・22号溝跡

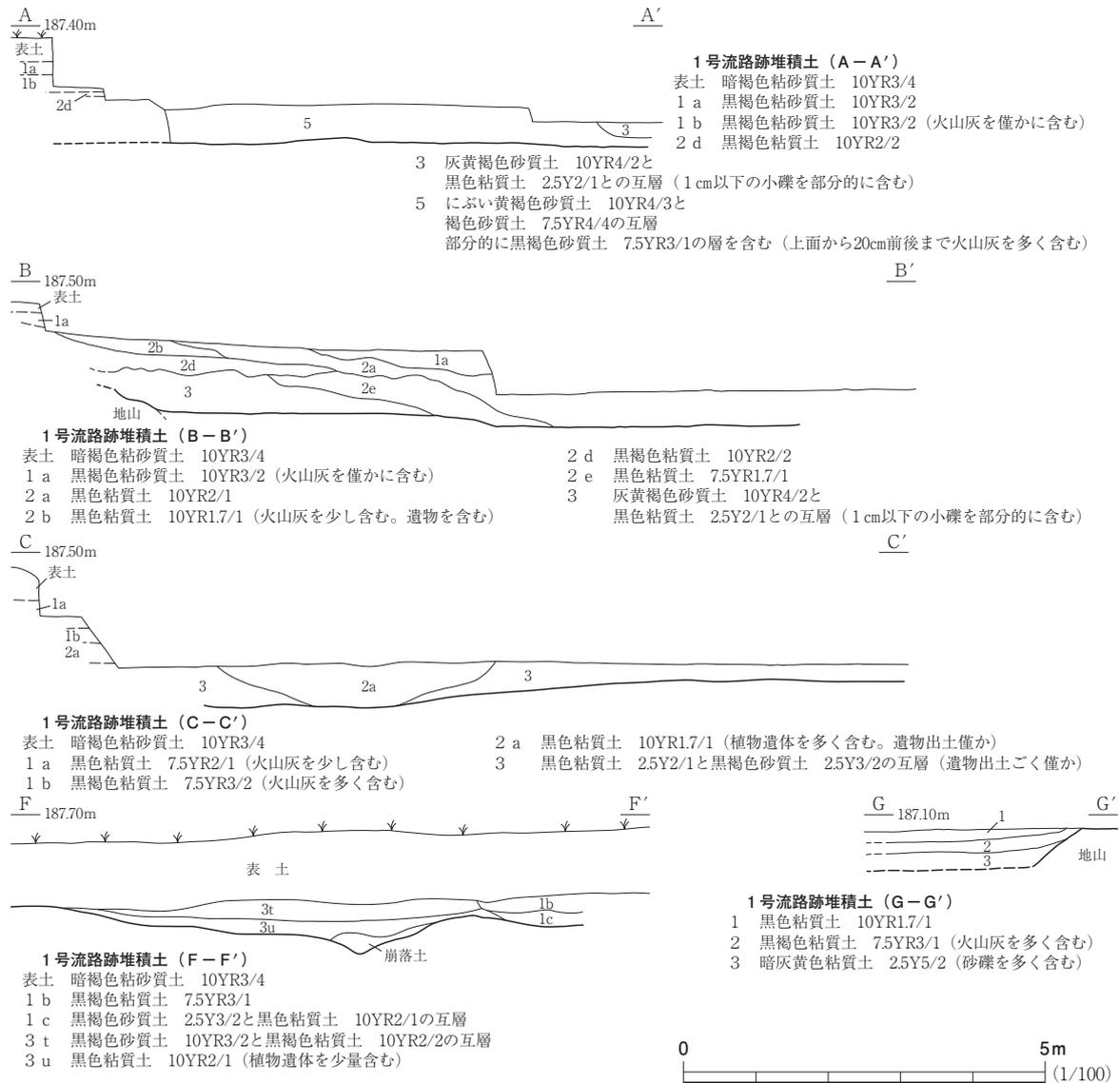


図6 1号流路跡土層断面図

片側に偏って油煙が観察され、出土地点が近接していたことから、セットで使用されたのかもしれない。3は、底部回転糸切り→底部全面から体部下端回転ヘラケズリの杯である。内面の見込みはしっかりしており、ヘラミガキの単位幅がきわめて狭い。底部外面には、ヘラ記号が認められる。4は、小型甕である。口縁部が直立し、底部は回転糸切り無調整である。器面は使用により変色し、荒れている。

須恵器

図9-5・6は、底部回転ヘラ切り無調整の杯である。5は器高が高く、6は低い。

同図7は長頸瓶の胴部である。口頸部は接合面で割れている。青味がかかった色調と、胎土の白色粒子が目立つ。

木器

図12-2は弓で、弭が作り出されている。表面の仕上げ調整がみられず、未成品と考えられる。



図7 1号流路跡土層断面図

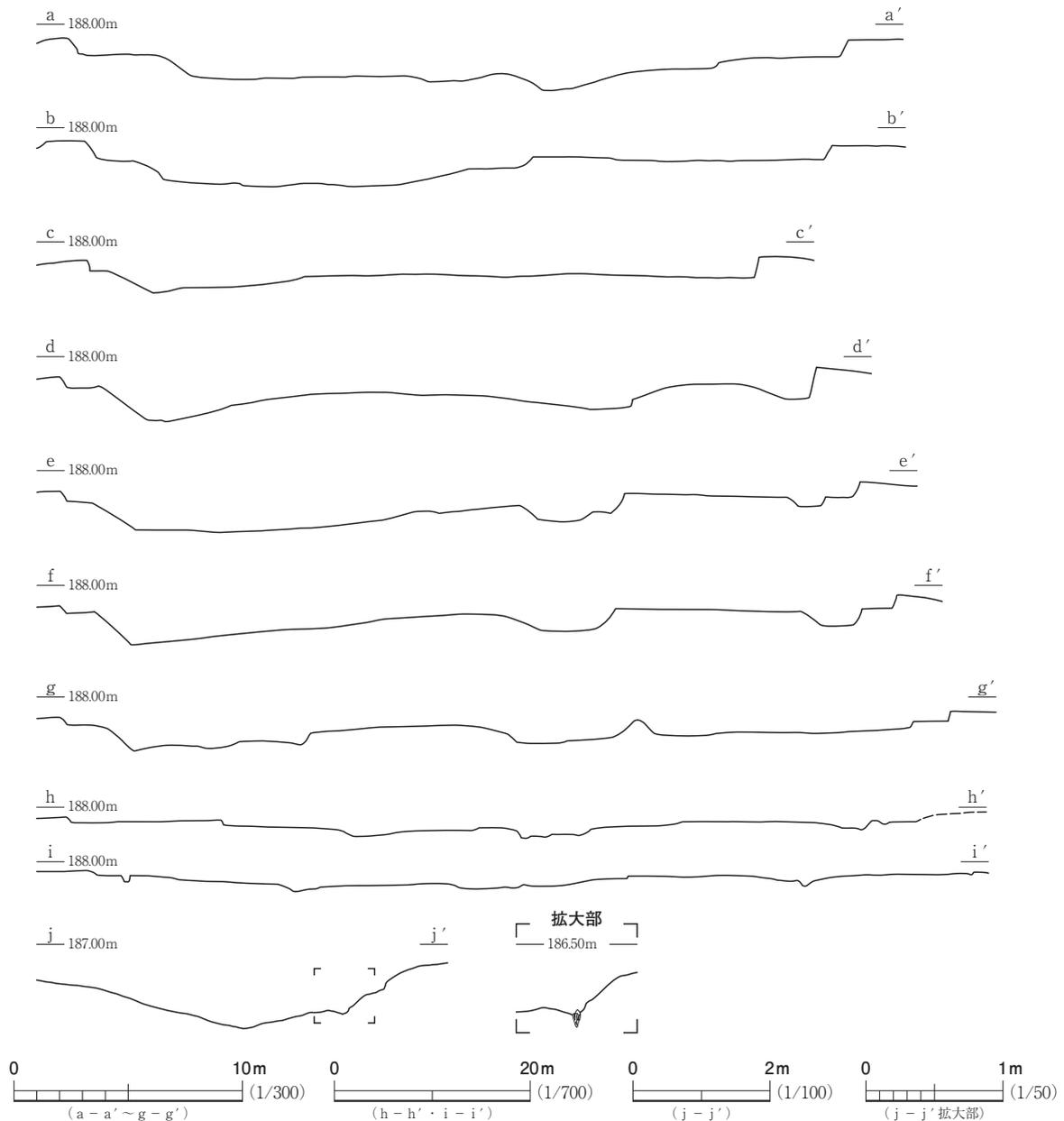


図8 1号流路跡エレベーション図

3は、折敷の底板である。隅丸方形のものと考えられる。5・8は、断面長方形の細長い木器である。5は、片側が斜めに切り落とされ、8は図の上方が、炭化する。図13-3・5は、棒状の木器である。断面は、3が正方形、5が円形をなし、5は両端がやや細く加工されている。6・8は、板状の木器である。6の断面は、隅丸長方形を呈する。

— Ⅱ 3の遺物 —

土 師 器

いずれもロクロ土師器である。図9-8~12, 14・15は杯で、12・15を除き、底部に糸切り痕が確認される。このうち、8・10・11は無調整、9・14は体部下端手持ちヘラケズリである。12・15は、切り離し不明で、底部全面から体部下端に回転ヘラケズリが加えられている。また、11の

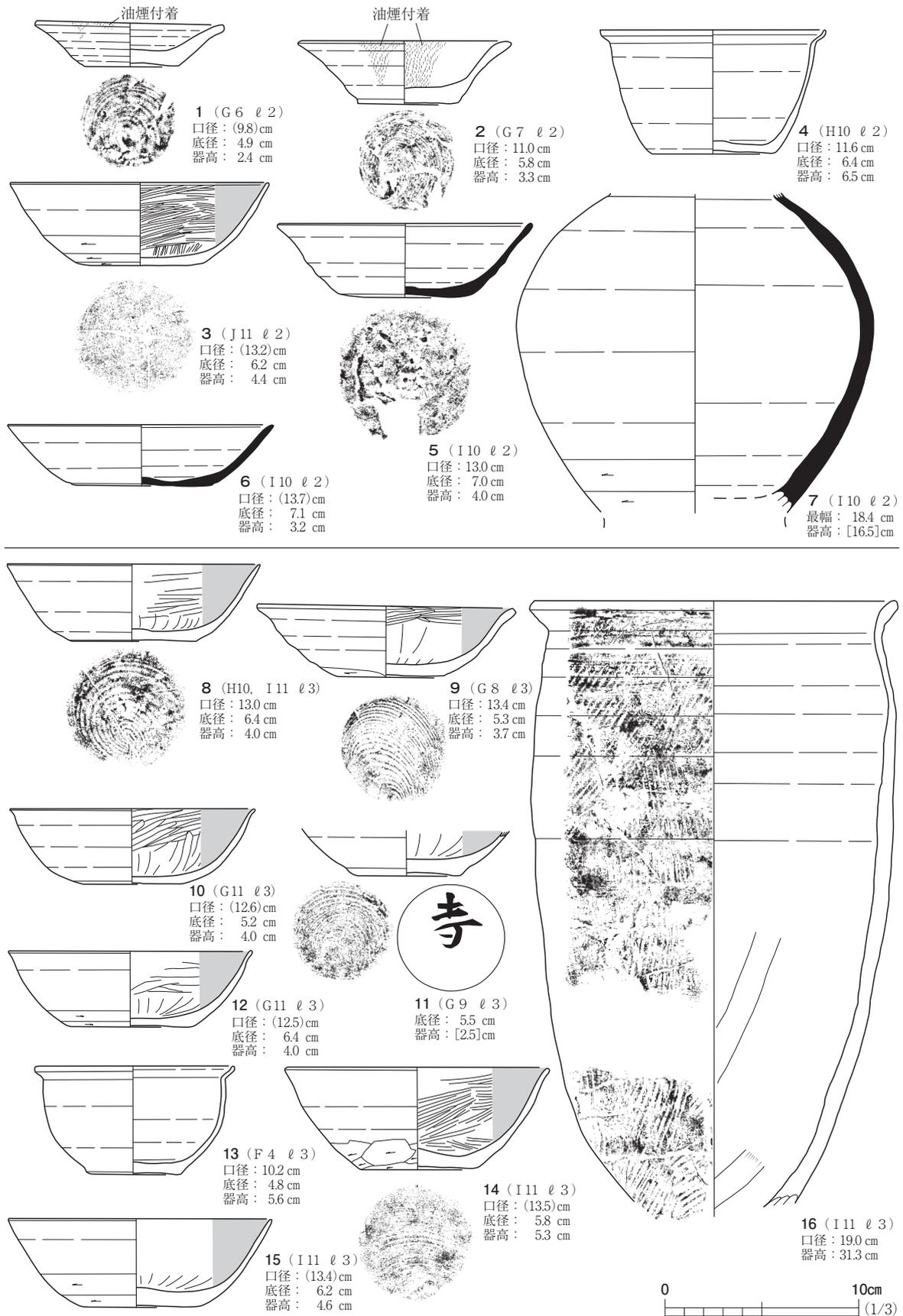


図9 1号流路跡出土遺物 (1) ℓ 2・3

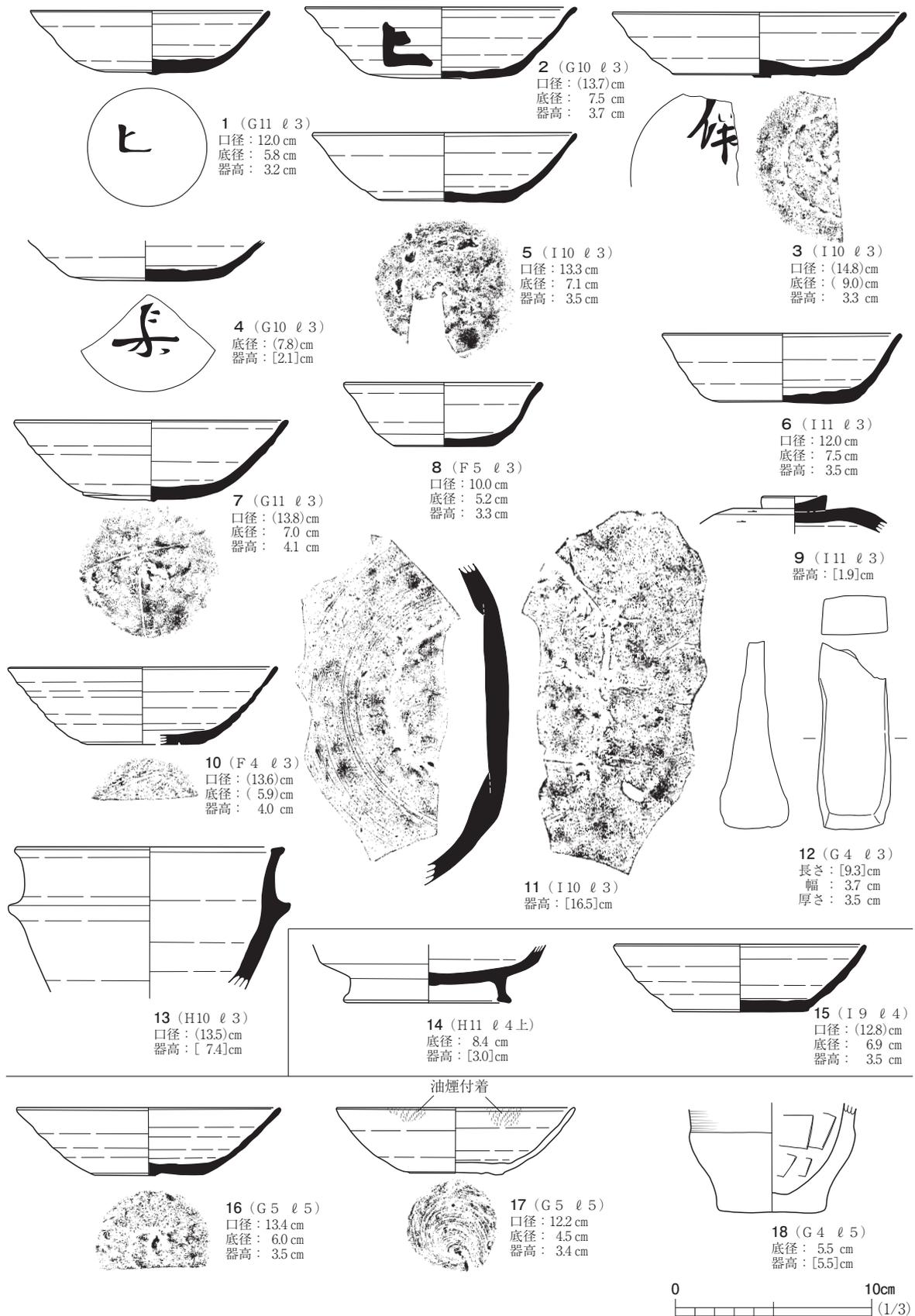


図10 1号流路跡出土遺物 (2) ℓ 3~5

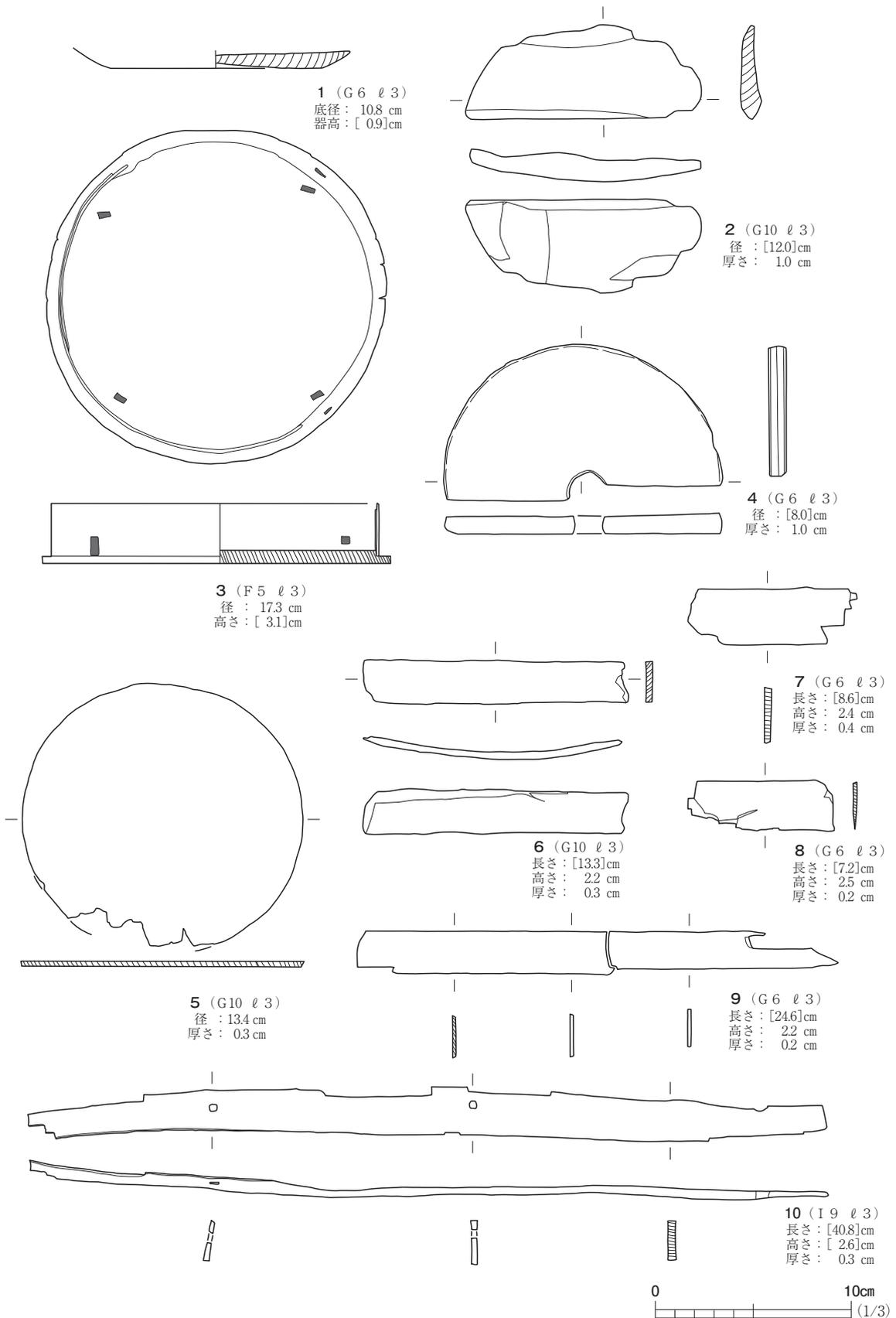


図11 1号流路跡出土遺物 (3) 木器①

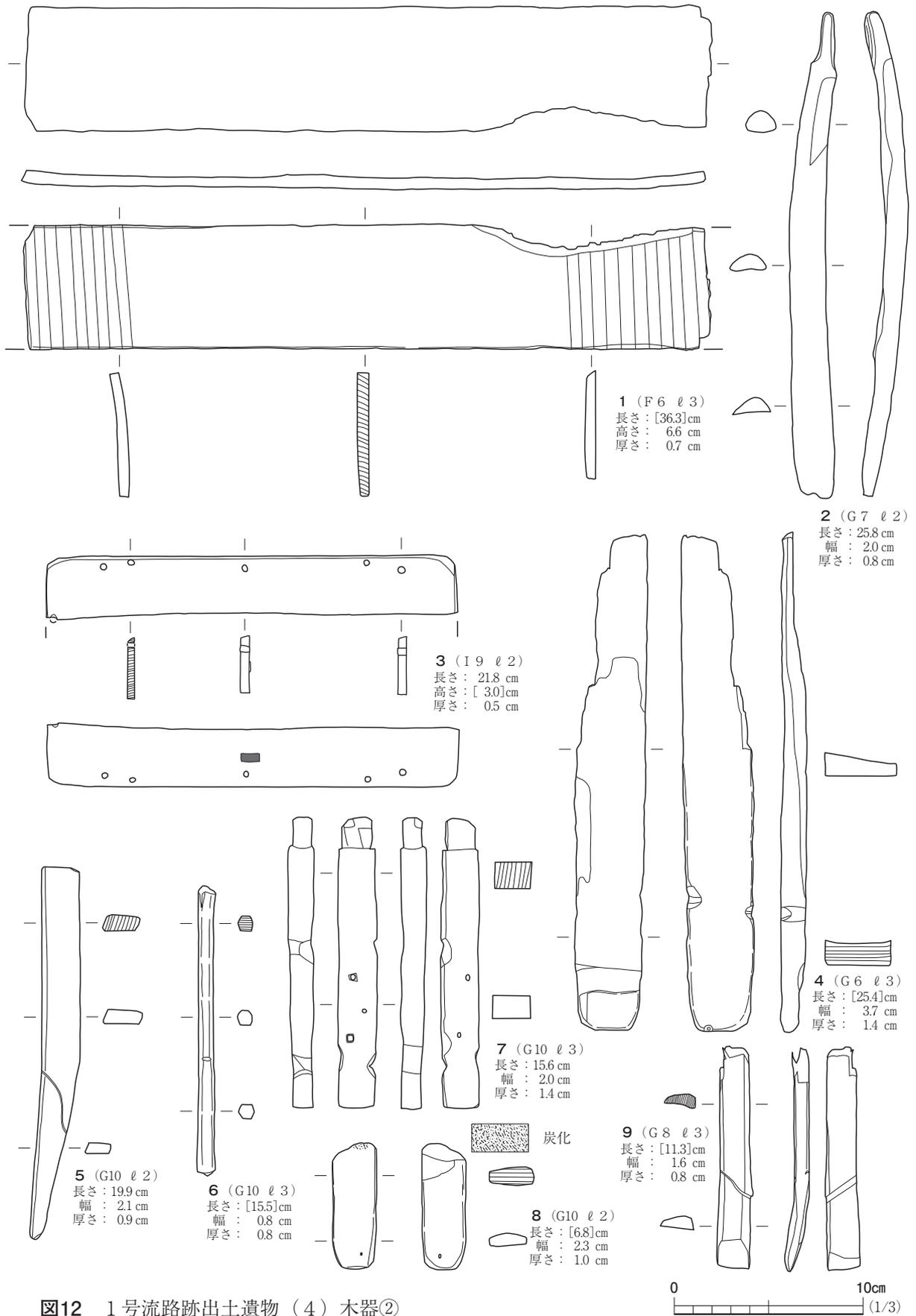


図12 1号流路跡出土遺物(4)木器②

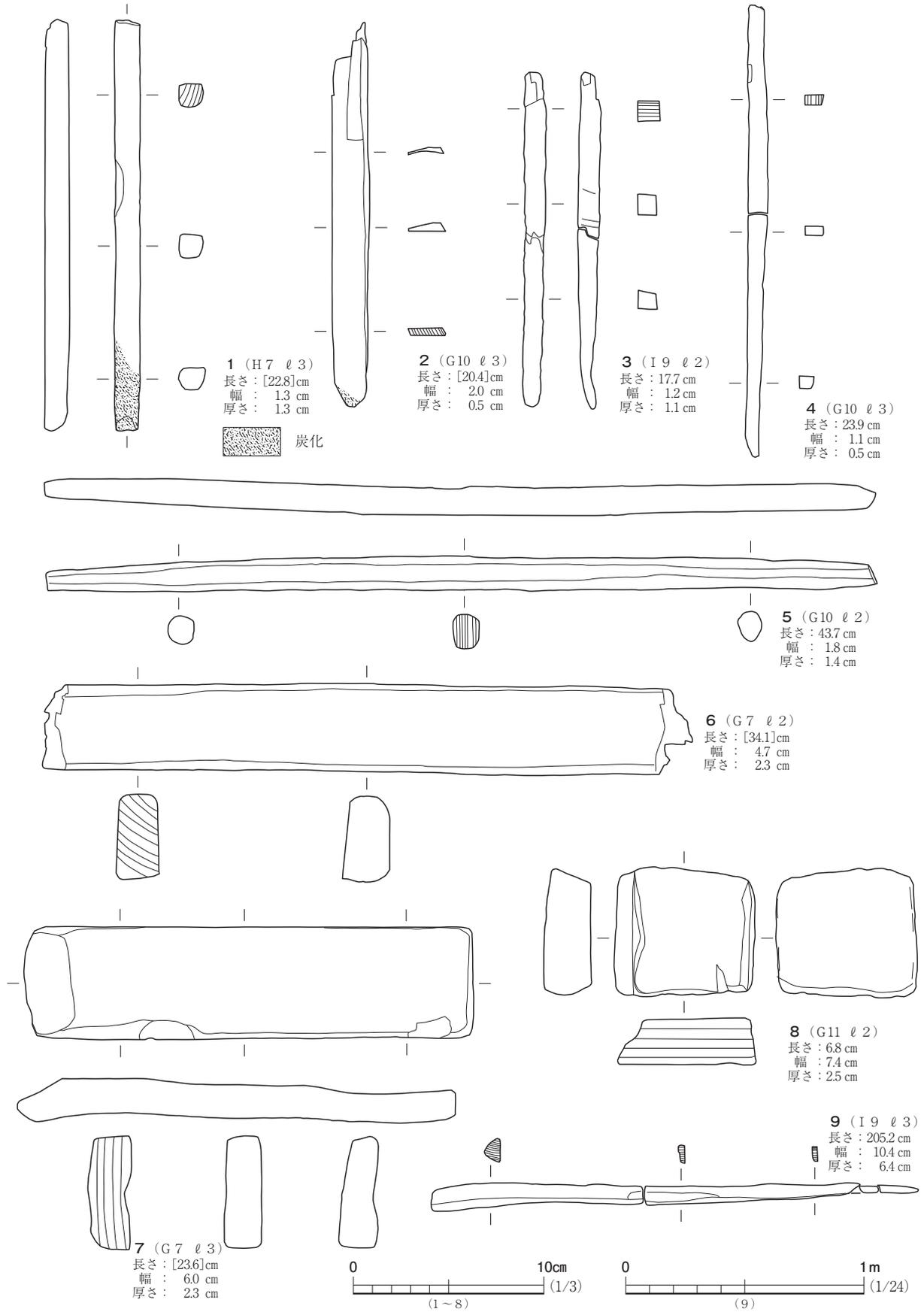


図13 1号流路跡出土遺物 (5) 木器③

底部外面には、「寺」の墨書がある。

同図13・16は大小の甕である。13は小型品で、口縁部端が短く立ち上がる。底部回転糸切りである。16は、長胴甕になり、底部を除き、ほぼ全体が残る。胴部外面に平行叩き目が観察される。

須恵器

図10-1～8は、底部ヘラ切り無調整の杯である。このうち1・2は「ヒ」、3は「伴」、4は「集」の墨書が観察される。また、小型の8は焼きが甘く、灰白色を呈し、器面の一部が剥落している。

同図9は、つぶれたリング状の、蓋のつまみである。天井部に回転ヘラケズリ調整がみられる。10は鉢であろうか、突帯が巡り、口縁部端が平坦面をなす珍しい器形である。体部内面の下端は、急に角度が変わっており、底部付近と思われる。11は、横瓶の円盤閉塞部分となる。青味がかった色調、白色粒子から明らかに大戸窯産と判断される。

石製品

図10-12は砥石である。縦断面は、略三角形をなす。

木器

図11-1・2は、挽物椀である。このうち2は分厚く、調整が粗いことから、未成品と思われる。3～10は曲物である。3は、ほぼ全体の形状が復元でき、4・5は底板、6～10は側板である。このうち4は、中央の穿孔→半裁により、二次転用されている。また、図12-1も、曲物側板の可能性はある。

図12-4・9は、性格不明である。6は箸、7は紡織機の一部だろうか。

図13-1・2は、先端が炭化しており、火付木の可能性がある。4・9は、断面方形の細長い棒状、7は板状をなす。

— 4・5の遺物 —

土師器

図10-17は、底径の小さな非内黒・ミガキのロクロ杯である。黒斑は無く、赤褐色を呈し、硬質な焼成に仕上がっている。「須恵系土器」(桑原1976)とも呼ばれるものに、該当する。内面のロクロナデは「コテ当て調整」(前川1984)で、底部は回転糸切り無調整である。口縁部端に油煙の付着箇所が認められる。18は、非ロクロ小型鉢である。口縁部下端に段を有し、色調は古代の土師器と異なる。古墳時代後期の所産と考えられる。

須恵器

図10-14は高台埴である。口縁部が欠損する。15・16は底部回転ヘラ切り無調整の杯で、15の底部外面にはヘラ記号が認められる。

まとめ

本遺構は、1次調査区から続く、大きな自然流路跡である。9世紀主体の土器類、木器が豊富に出土しており、平安時代前半に遺跡を南→北の方向で流れていたことが判明した。性格は、現在の溷川とほぼ一致することから、旧溷川かその支流跡と考えられる。(菅原)

第4節 溝 跡

溝跡は、11条検出された。それらは時期別に、次のように整理できる。

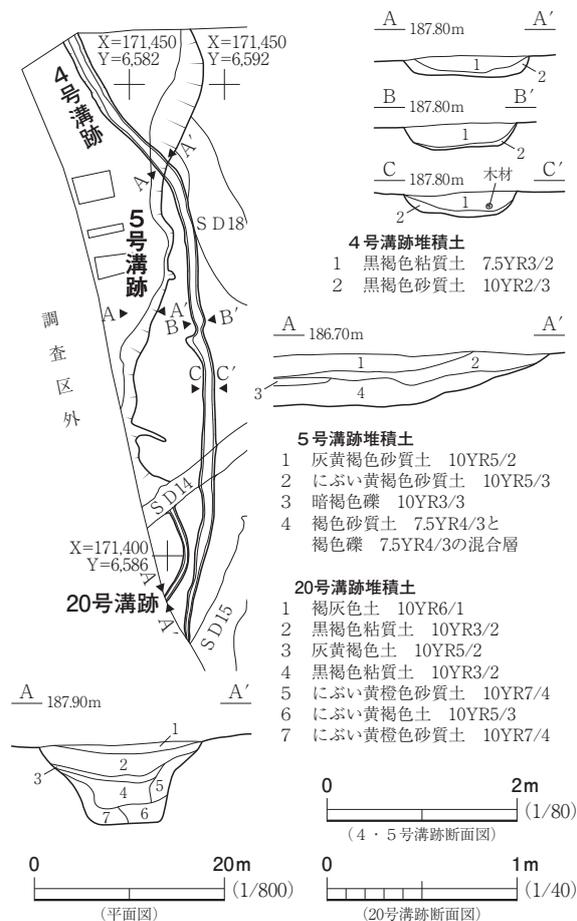
- ◎古代以前……………18・21号溝跡
 - ◎古 代……………5, 14～17, 19・20・22号溝跡
 - ◎近現代……………4号溝跡
- 以下、番号順に報告していく。

4号溝跡 S D 04

遺 構 (図14)

Ⅱ区の西側を南北に流れる溝跡で、1次調査による4号溝跡の南方向への延長部分である。A 2・3, B 3～5・8, C 5～7グリッドで検出した。検出面はLⅢ上面である。5号溝跡, 14号溝跡と重複関係にあり、両者を4号溝跡が破壊していることから新しい。

本遺構は、長さ70mほどを検出した。北端部約15mは、5号溝跡を破壊する形で北西から南東



方向に延びる。さらにB 4グリッド付近から方向を変え、ほぼ真南に延び、途中14号溝跡と重複しながら調査区南端部で調査区外へ続く。幅は1～1.5m前後で南端部になると50cm程度に細くなる。深さは、検出面から20～30cm程度で、底面は比較的平坦であり、南から北に向かって低くなっていく傾向が認められる。

堆積土は、l 1は人為堆積土、l 2は自然堆積と考えられる。l 2はレンズ状の砂層を形成し、その様相から水成堆積と判断した。

遺 物 (図15, 写真28)

出土遺物は、土師器、須恵器、陶磁器の破片が少量と砥石である。その中から2点の砥石を図示した。

どちらも、時期は不明だが、灰色の石材を用いている。各面ともに使用され、擦痕が多い。特に広い面は摩耗によってゆるやかに湾曲し、使い込まれている様子が見られる。

図14 4・5・20号溝跡

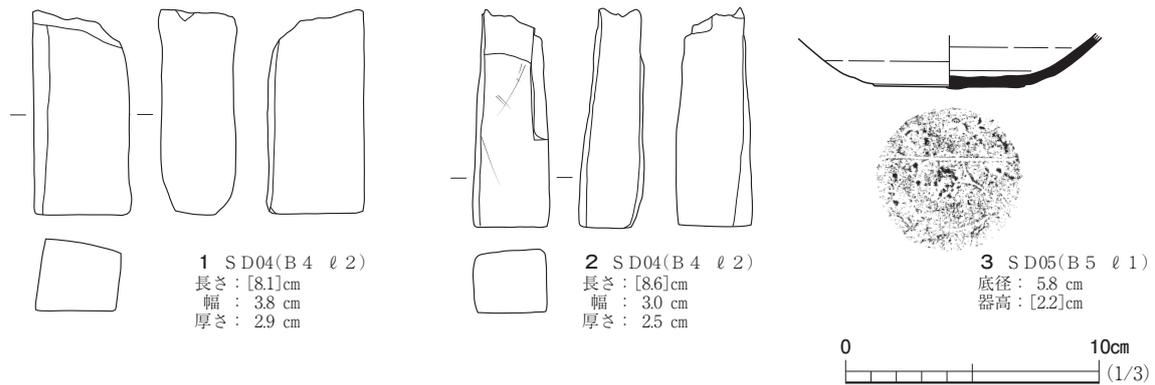


図15 4・5号溝跡出土遺物

まとめ

1次調査による遺物の出土状況も考慮すると、近世以降に機能したと考えられる。上面からは現代の陶磁器などが出土しており、ほ場整備の際に埋め戻された可能性が高い。(吉野)

5号溝跡 S D 05

遺構(図14, 写真8)

Ⅱ区北西端部を南北方向に流れる溝跡で、1次調査による5号溝跡の延長部分である。A2～5, B2～7グリッドで検出した。検出面はLⅢ上面である。B3グリッドで4号溝跡と重複しており、4号溝跡が5号溝跡を破壊していることから4号溝跡よりも古い。また、B7グリッドでは、14号溝跡と重複しており、5号溝跡が14号溝跡を切っていることから14号溝跡よりも新しい。

本遺構は、検出当初東側のラインのみ確認された。その後、調査区西端部の工食用道路部分、幅約6mをさらに拡張して調査したところ、A4グリッド付近で西側の立ち上がりのラインが確認された。これにより、今回の調査で確認された規模は、調査区北端部A2・B2グリッドから南南西方向に約50m、幅は約10mであり、1次調査の5号溝跡に合致する。A4・B4グリッドに3か所のサブトレンチを設定し、溝跡の底面を確認したところ、検出面からの深さは約60cmである。B2・3グリッド周辺では、底面に丸みを帯びた礫が多数検出されている。

堆積土は、4層に分けられたが、そのすべてが砂層や礫層であり、その堆積状況から水成堆積であることが確認できた。

遺物(図15, 写真28)

出土遺物は、土師器、須恵器の破片が多数出土しているが、ℓ1・2で確認されるのみで、流れ込みによるものと考えられる。小片が多いため、特徴的な1点を抽出し図に示した。図15-3は須恵器杯片で、底部は回転ヘラ切り無調整である。特徴としては、焼成前のヘラ記号が、底部中心付近を横切るように直線状に1本認められる。

まとめ

5号溝跡は、1次調査において1号流路跡と重複し、1号流路跡によって破壊されていることが確認されている。そのことから、1号流路跡よりも古い溝跡という見方ができる。しかし、堆積土や出土遺物の状況から、1号流路跡に共通する流路跡の一部であり、比較的近い時期に機能していたものと考えられる。(吉野)

14号溝跡 S D 14

遺 構 (図16, 写真9・10)

Ⅱ区の中央付近で確認した溝跡で、B7・C6～7・D5～6・E4～5グリッドで検出した。検出面はLⅢ上面である。本溝跡は過去に会津若松市教育委員会が行った調査でも検出されており、その調査では5号溝跡に該当する(会津若松市教育委員会2000)。4・5号溝跡より古く、16・18・20号溝跡より新しい。15号溝跡との重複関係は検出段階では把握できなかった。

検出の時点では溝跡の東側半分ほどで攪乱された土が深く入り込み、検出面に30cm程の段差が生じていた。西木流C遺跡周辺では過去には場整備が行われていたため、そのときに生じた段差と考え調査を進めた。土層観察用のベルトを残し、溝跡を掘り進めたところ、南西側は堆積土がしっかりと確認することができたが、北東側は攪乱されており、底面付近まで攪乱された土が入り込んでいる箇所もあった。堆積土が残っているところと、攪乱を受けている部分の境界のD-D'断面付近で、土層観察用のベルトを溝に平行するように断ち割ってみたところ、攪乱された土が垂直に立ち上がることを確認した。前述したように、攪乱された土は底面付近まで達していて、溝跡の壁の上部がなくなっただけではいたが、下部は改変されておらず、改変を受けていないところとの違いは見られなかった。そのため、溝の北東側の攪乱を受けた土は、過去の調査時に掘削した部分を埋め戻したものと推定した。そこで会津若松市が行った調査の図面と照らし合わせたところ、溝跡の形状が一致したため、攪乱された土は過去の調査時の埋め戻し土と判断した。

溝の規模は確認できた範囲で長さ約48m、幅は2m前後で推移する。深さは最も深い場所で検出面から90cmで、浅い場所だと上部が大きく削られていて、30cmしかない。底面のレベルは南西側に行くにしたがって低くなっており、北東から南西に向けて水が流れていたと推測できる。溝の平面形態は直線的で、中央付近で15号溝跡と合流する。東西ともに調査区外へ続いている、東側は会津若松市の調査範囲に重なる部分がある。14号溝跡は16号溝跡(会津若松市6号溝跡)よりも新しい。重複部分では16号溝跡がほぼ埋まった段階で14号溝跡が掘削されていて、その上から14・16号溝が堆積土に覆われている。東側は調査区外に続くが、会津若松市の調査では大半がプランの確認のみであるため、14号溝跡がどの方向に続いているのか、あるいは続いていないのかは不明である。断面形態は逆台形状で、溝跡の底面は平坦に整えられている。

堆積土は基本的に5層に区分することができる。全て自然堆積と判断している。ℓ1は、黒色または灰色の粘質土で、部分的に灰黄褐色砂質土の層が入り込む。ℓ1bも部分的にしか確認できな

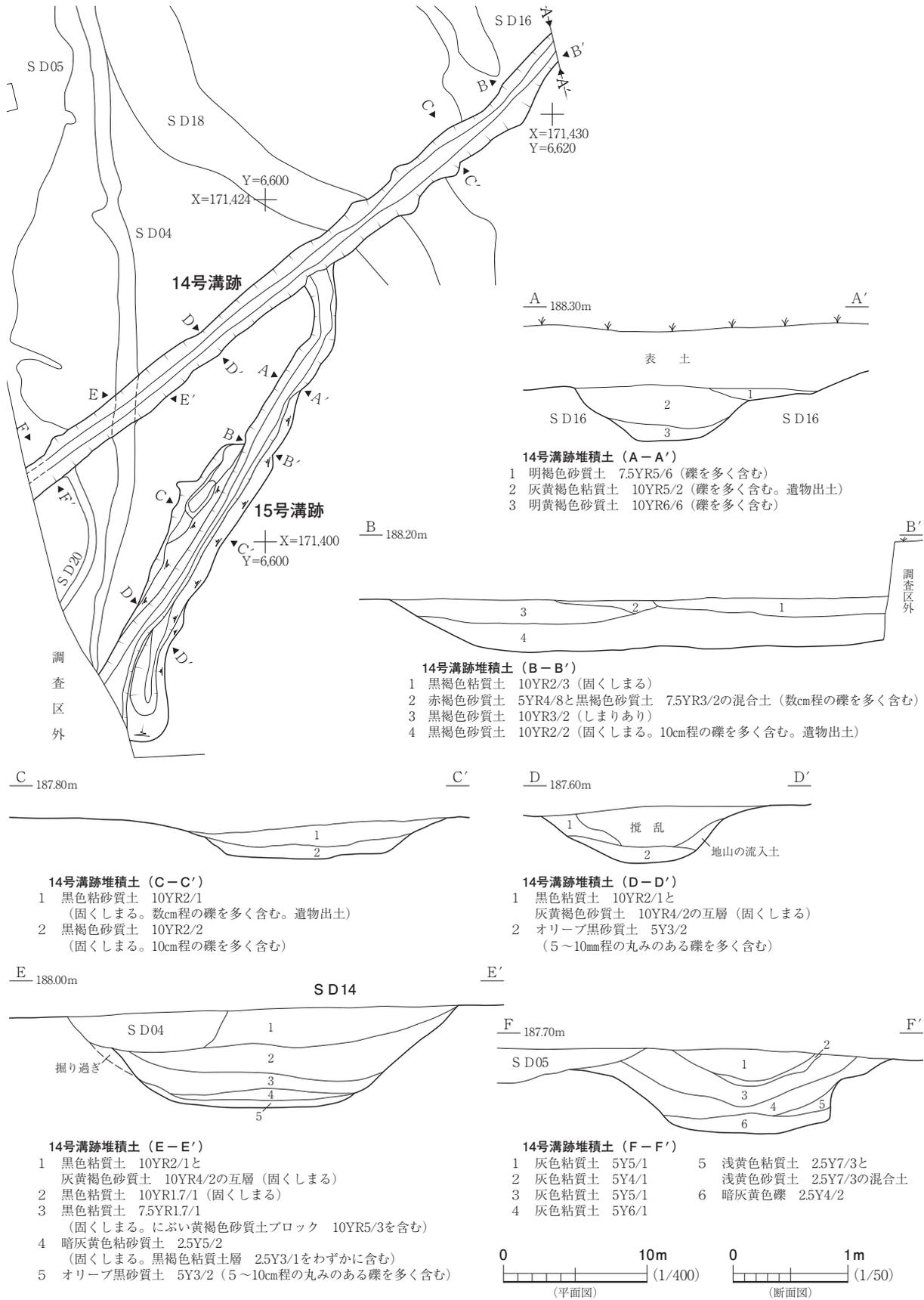


図16 14・15号溝跡

い。ℓ 2は、黒色または灰色の粘質土である。ℓ 3は、黒色または灰色粘質土層である。ℓ 4は、色調は一定ではないが、粘質土と砂質土が混ざる層である。ℓ 5も場所によって堆積土の色調が異なるが、礫を多量に含む点が共通する。また、16号溝跡と重複する部分と重複しない部分とでは堆積土の様相が異なる。16号溝跡との重複部分はℓ 5より上の層も礫を多く含むが、これは16号溝跡の基底部分が礫であるため、14号溝跡が埋没していく過程で、周囲の礫が流れ込んでいるためだろう。D-D'断面より北東側はℓ 1～3が確認できないが、ほ場整備の際に削られた可能性が高い。

遺物 (図17～21, 写真28～37)

遺物は土師器・須恵器・木器が出土している。ℓ 1～5にかけて出土しているが、ℓ 4・5からが特に多く、遺存度も良い。各層ごとに出土遺物について記述する。

— ℓ 1の遺物—

図17-1～5はℓ 1出土遺物の遺物である。1・2は須恵器の甕を示した。1は、内面は丁寧になデ調整されているが、外面は粗い。2は、平底の甕の底部から胴部までのものである。

3は平底の土師器甕の底部で、外面はタタキ調整されている。

4はロクロ成形の土師器杯で、底部から体部下端にかけて回転ヘラケズリされている。口縁部がわずかに外反する。内面は黒色処理とヘラミガキで調整される。墨書は底部にあり、横線が一本確認できるが、文字は判読できない。

5は須恵器杯で、体部に逆位に墨書がある。左から書き始められていることからすると「干」あるいは「平」と読めるだろうか。他には「千」の可能性もある。

— ℓ 2の遺物—

ℓ 2出土遺物は須恵器3点を図17-6～8に掲載した。

6・7は杯である。6の底部は回転ヘラ切りだが、7は回転糸切りになっている。色調も異なり、6は若干白みが強いのに対し、7は灰色に近い。7には側面に墨書がある。逆位に「レ」を2つ重ねたようなものが書かれており、文字ではなく記号だろう。

8は甕の胴部中程から底部までのものである。平底で、底部にはヘラ書きで「一」が確認できる。

— ℓ 3の遺物—

ℓ 3出土遺物を図17-9～14に掲載した。

9・10は須恵器杯で、9は14号溝跡出土の中では口径・底径・器高ともに大きなものである。10には2文字墨書があるが左側の文字が読めない。右側の文字は「子」だろう。

11・12は、ロクロ成形の土師器杯で、いずれも底部から体部下端は回転ヘラケズリ、内面は黒色処理とミガキ調整されている。11は体部下端に墨書があるが、全体が残っていないため何の文字かはわからない。

13・14は木器で、板状に加工されている。曲物の側板だろう。13は綴じ方がわかるもので、2枚の板が結合された状態である。

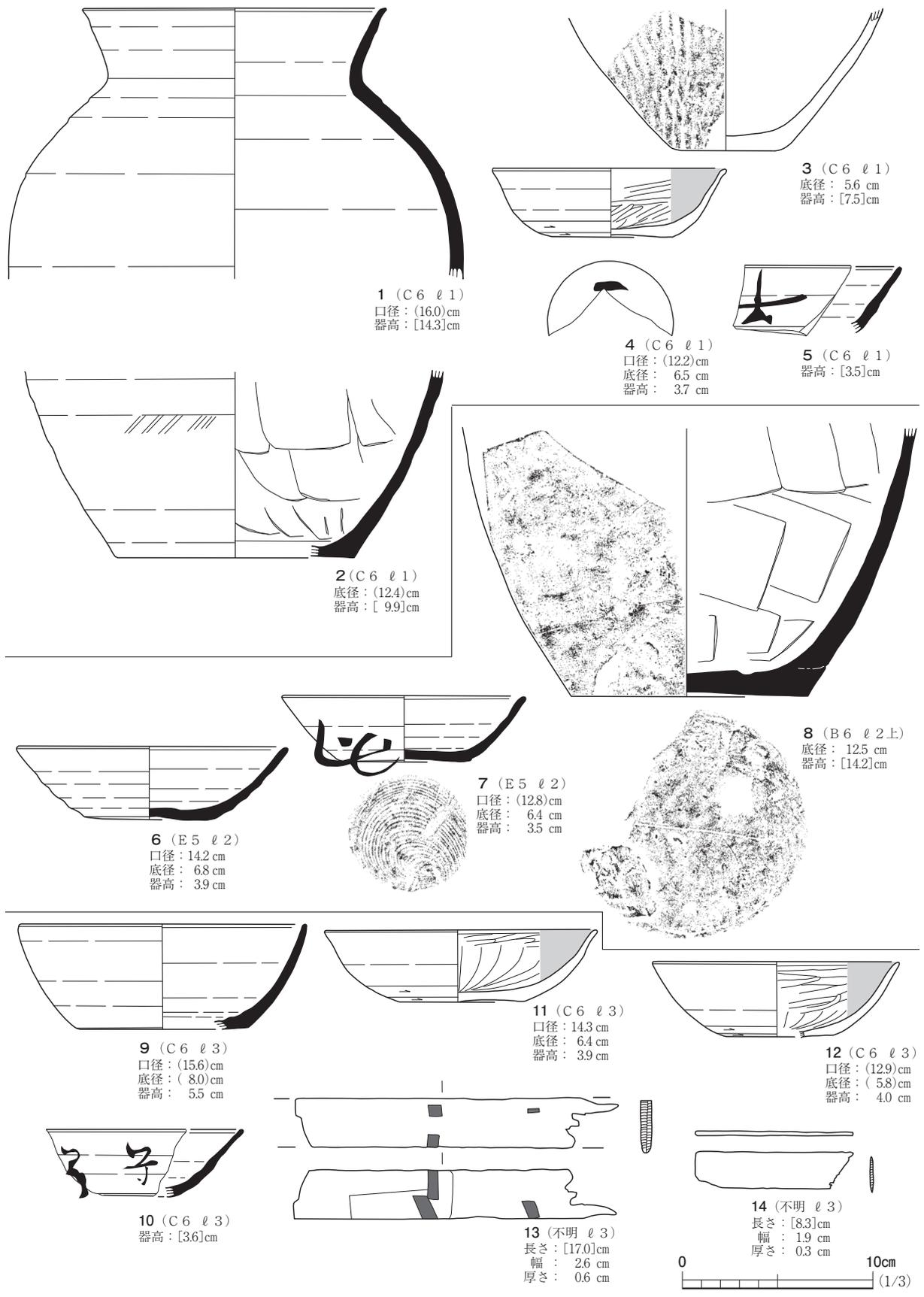


図17 14号溝跡出土遺物(1) l1~3

図18は石製の支脚である。一部を除いてほぼ全体的に白く変色しており、火を受けた様子が確認できる。竈に置かれて、甕を固定するのに用いられたものだろう。14号溝跡で出土する遺物は平安時代の遺物のみであり、他の時期の遺物が混ざっていないことからすると平安時代のものと考えられる。周辺遺跡では船ヶ森西遺跡、横沼西遺跡で竈を持つ竪穴住居跡が確認されている。

— l 4 の遺物 —

土師器

図19-15・16はロクロ成形の土師器で、15は杯、16は長胴甕の口縁部から胴部までのものを掲載した。15の杯は内面黒色処理と細かなミガキが施される。16は胴部と口縁部の間の屈曲が強い。

須恵器

図19-1は高台皿で、硯として転用されている。体部中ほどに稜をもち、そこから口縁部にかけて外反して立ち上がる。器の3分の1程と高台部分が意図的に打ち欠きされた状態になっている。内面には墨痕がほぼ一面に明瞭に確認できる。

同図2～14は杯である。いずれも底部回転ヘラ切りで、調整はされていない。14は焼成が悪く、赤みが強い。9は底部から体部にかけて丸みがある。2・7・12には墨書が確認できた。2は底部にあるが一部のみで何の文字なのかは不明である。7は体部に逆位に書かれている。「福」だろう。また、7には底部にヘラ記号「×」が確認できる。12は体部に「丈」と書かれている。

— l 5 の遺物 —

土師器

図21-2～10は土師器で、2～8は杯である。杯は全てロクロ成形で、内面黒色処理とミガキ調整が確認でき、2～5・7・8は底部から体部下端に回転ヘラケズリが施されている。2は口縁部から体部にかけての屈曲が強い。3～8には墨書が確認できるが、7は判読できない。3は体部に墨書があり、合わせ文字で「土万」ないし「土方」と読める。5は体部にあるが、欠損部が多く判

読ができない。8は合わせ文字で横向きに書かれている。「五万」だろうか。4は底部にあるが、文字の全体像がわからない。9・10は土師器甕で、9はロクロ成形の小型で平底のものである。底部は回転糸切り、体部下端に回転ヘラケズリが施される。10は平底で、底部からの立ち上がりは丸みを持っている。内外面ともに器面が剥落しているところが多く、調整の単位は不明である。

須恵器

図20-1～22は須恵器杯をまとめた。底部が残るものは、全て回転ヘラ切りで切り離され

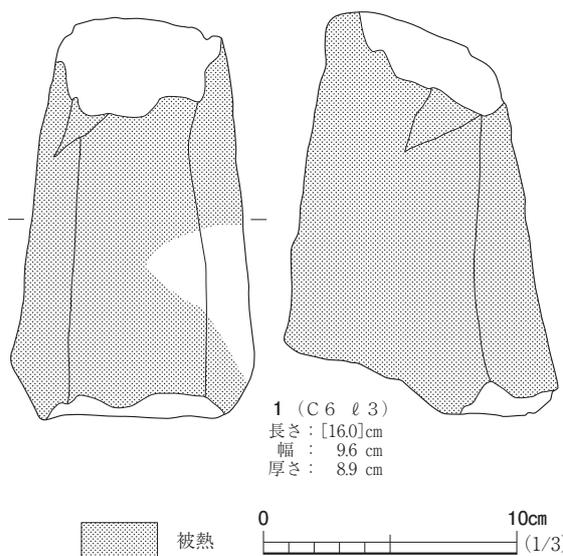


図18 14号溝跡出土遺物 (2) l 3

ている。11はℓ 5出土のほかの杯に比べ器高が低く、7は底部がわずかに丸みを持っている。

これらの内、墨書が確認できるものが11点、ヘラ記号が確認できるものが1点ある。1は底面に「廿万」、2は体部に横向きに「廿万」とある。3は体部にあるが、何の文字になるかは判読できない。5は体部に墨書があるが文字は不明で、底部にあるヘラ記号はおそらく「千」だろう。13は不明である。17は底部に「一」と書かれる。18は体部に横向きに2文字で、「来万」と書かれる。19も横向きに書かれているが、何の文字かはわからない。20は斜めに「万」と書かれている。21は文字ではなく記号の可能性もある。22は書かれた文字の一部が残っているのみで、不明である。23は須恵器の大甕の破片で、外面はタタキ調整、内面には当て具痕が残る。24は甕の口縁部から頸部にかけてのものである。

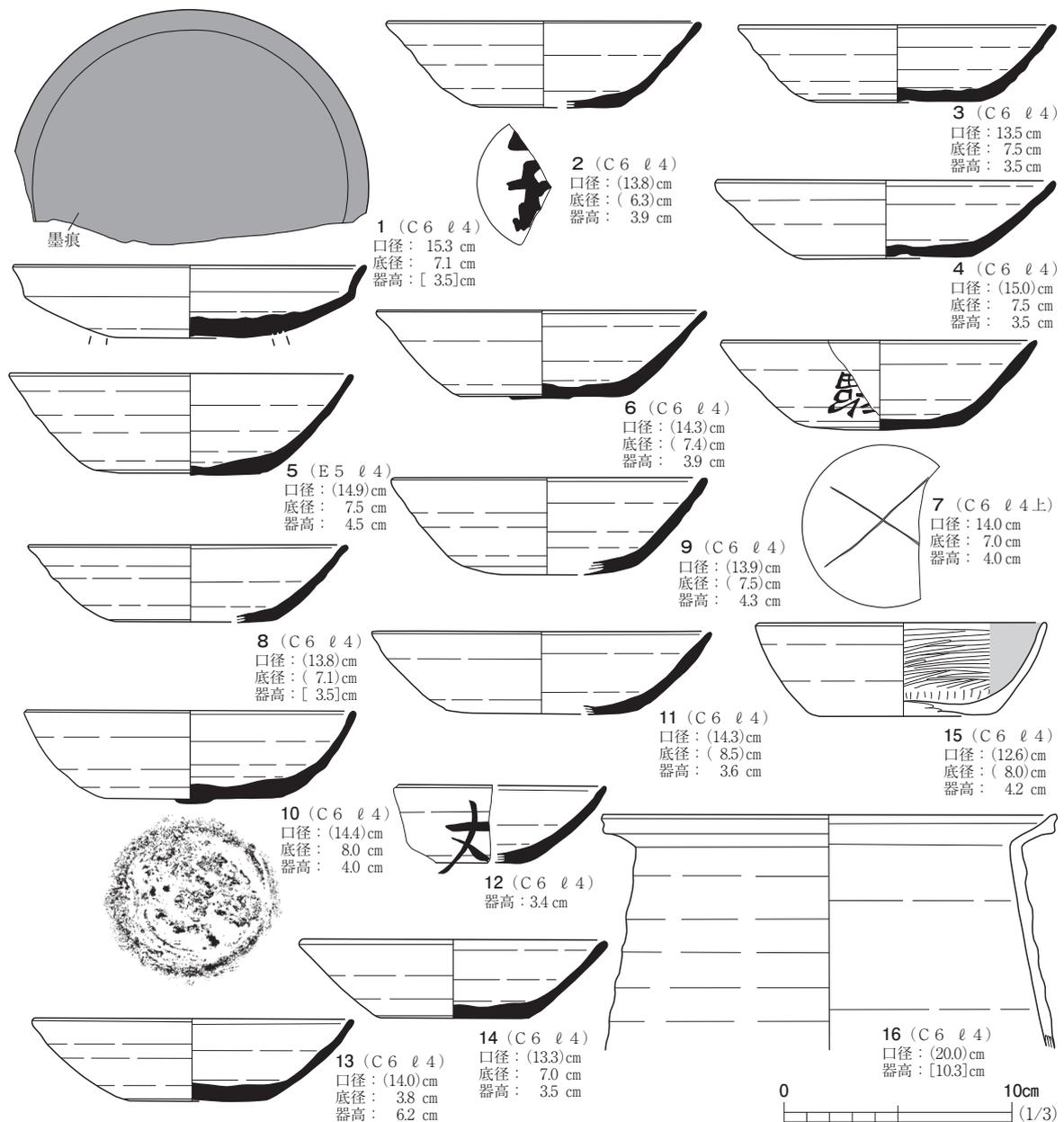


図19 14号溝跡出土遺物 (3) ℓ 4

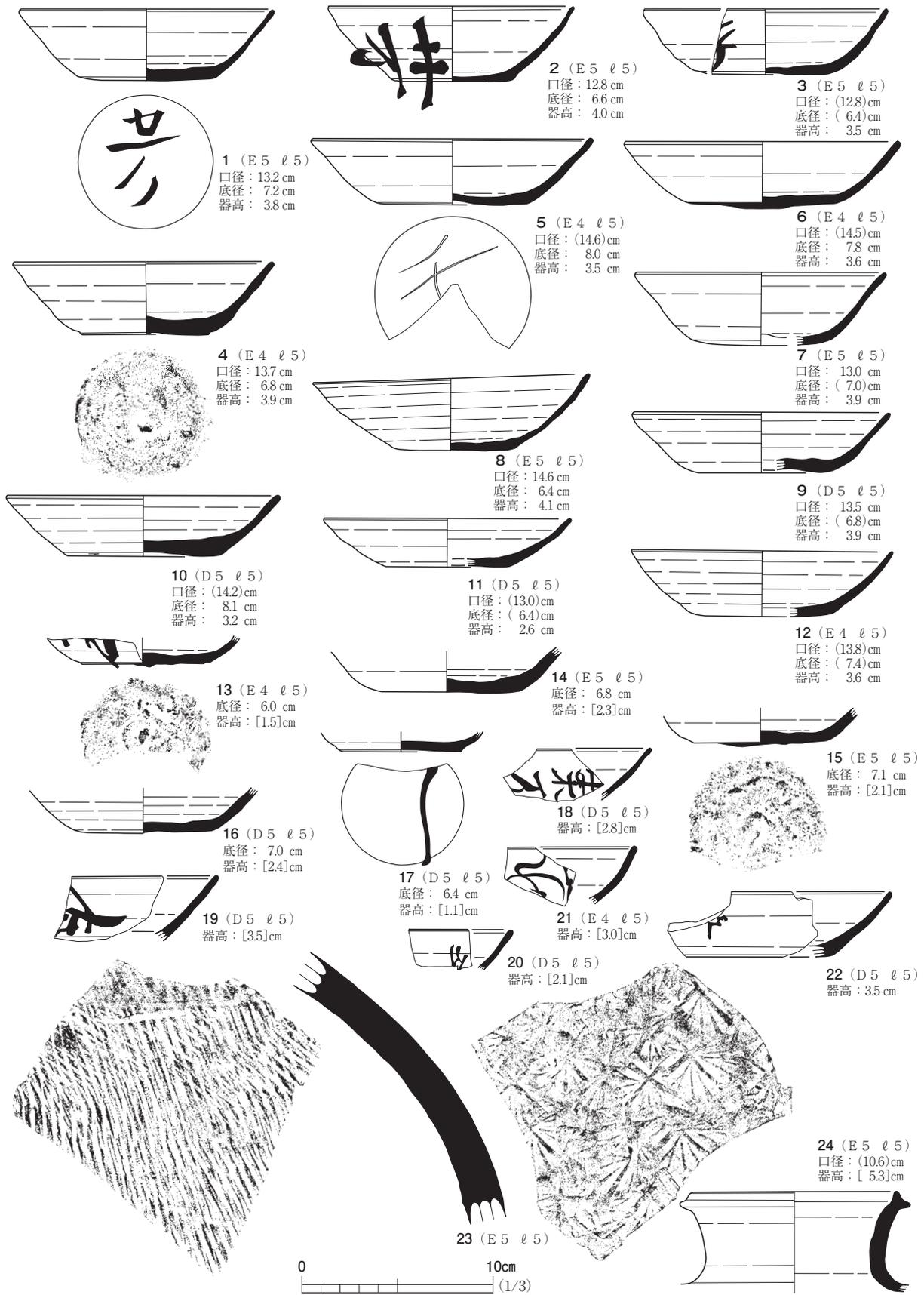


図20 14号溝跡出土遺物 (4) l5 ①

図21-1は須恵器の大甕で、胴部下半の破片である。外面はタタキ調整のあとに沈線が平行に施されている。内面の当て具痕は明瞭ではなく、丁寧にナデ消されている。

まとめ

14号溝跡は底面が整えられた直線的な溝跡で、人工的に掘削されたと判断できる。東側は会津若松市教育委員会の調査区に続く。本年度調査区外に出たところで収束しているか、会津若松市調査の2号溝跡に続くか、どちらかの可能性が考えられるが断定はできない。集水あるいは区画溝としての機能が想定されるが、会津若松市の調査で確認された掘立柱建物跡との関連は不明である。須恵器・土師器を中心に多く出土し、多少の年代幅はあるが、9世紀代に収まる資料が中心であるため、平安時代に機能した溝跡と判断した。(鶴見)

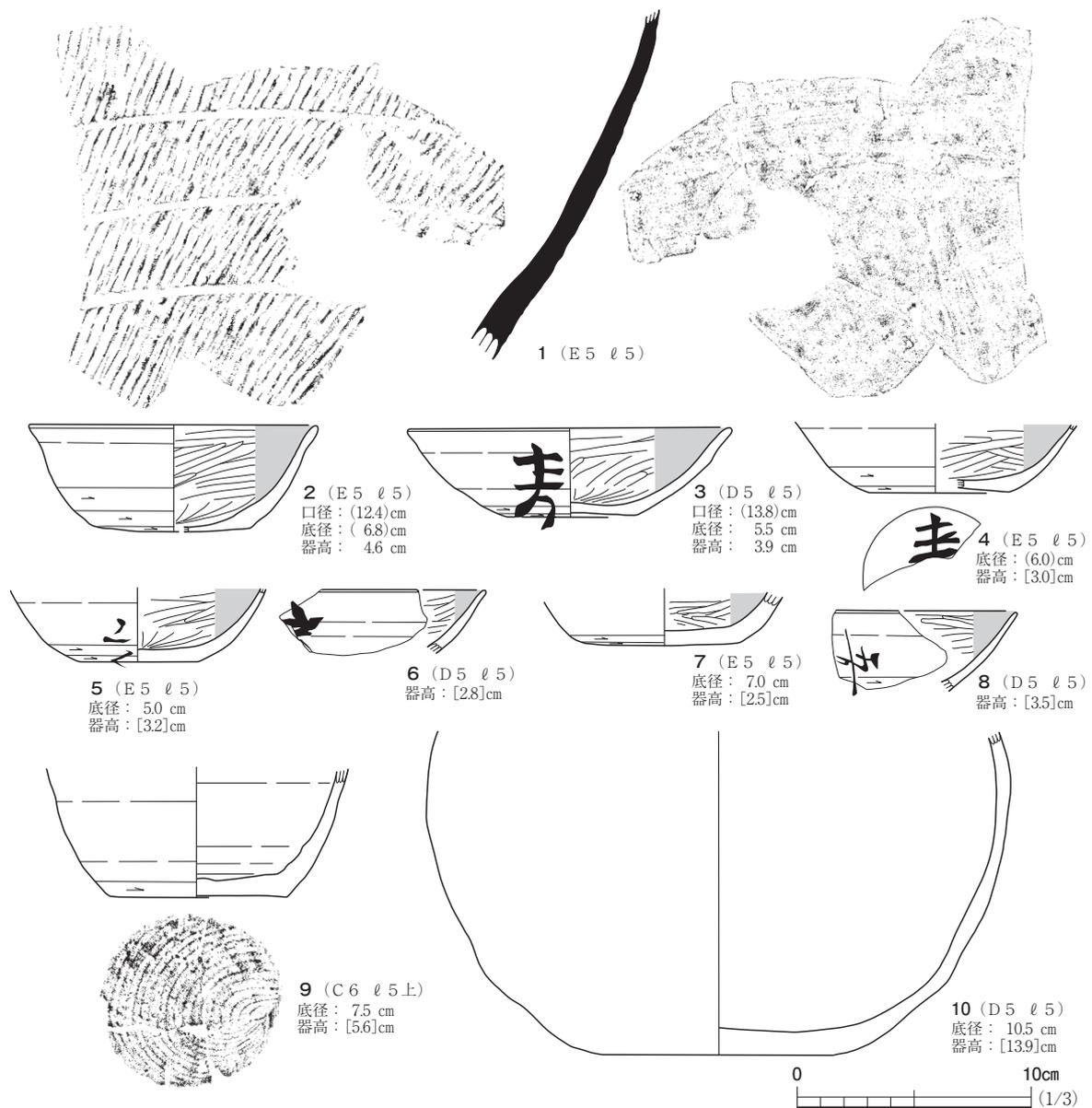


図21 14号溝跡出土遺物(5) l5②

15号溝跡 S D 15

遺 構 (図16・22, 写真11)

Ⅱ区B 8・C 6～9・D 6～7グリッドで検出した。検出面はLⅢ上面である。14号溝跡と重複関係にあるが、新旧は確認できなかった。会津若松市が行った調査報告では4号溝跡に該当する。当初は単一の遺構と考えていたが、土層を観察したところ2時期の溝が重複していると判明し、古い溝跡を15号溝跡A、新しい溝跡を15号溝跡Bとした。

14号溝跡と同様に一部は既に会津若松市によって調査されている。B-B'断面から北東側に20cmほどのところを境に土層の状態が異なり、北東側の土は攪乱を受けた状態で、過去の調査時の埋め戻し土の可能性が高い。それよりも南西側では堆積土が残っていた。既存調査部分と未調査部分との検出面には、30cm前後の高さの違いがあり、ほ場整備の影響だろう。B-B'断面より北東側では堆積土が底面まで掘削されて残っていなかったが、壁の立ち上がり自体は未調査部分で確認できたものと大きな違いはなく、当初の形状が残っていると判断した。15号溝跡Bは確認できる範囲で長さ22m、幅3m、深さは10～30cm前後と浅い溝跡である。15号溝跡Aが直線的であるのに対し、15号溝跡Bは若干の蛇行が見られる。南端は西木流D遺跡の1号溝跡の手前で収束していることから、自然のものではなく、1号溝跡の存在を意識して掘削された可能性が高い。B-B'断面より北東側は検出面が低くなり、土層が残っていなかったため、15号溝跡がどこまで続い

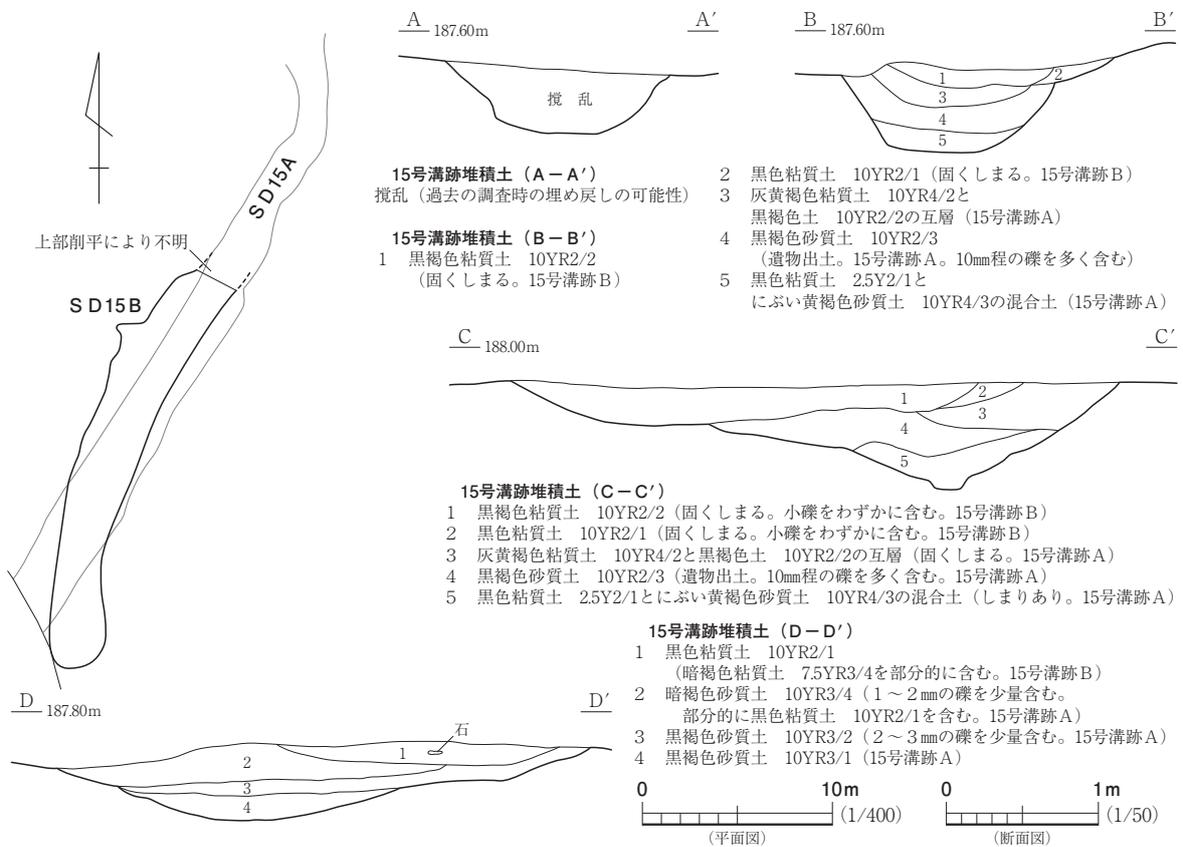


図22 15号溝跡

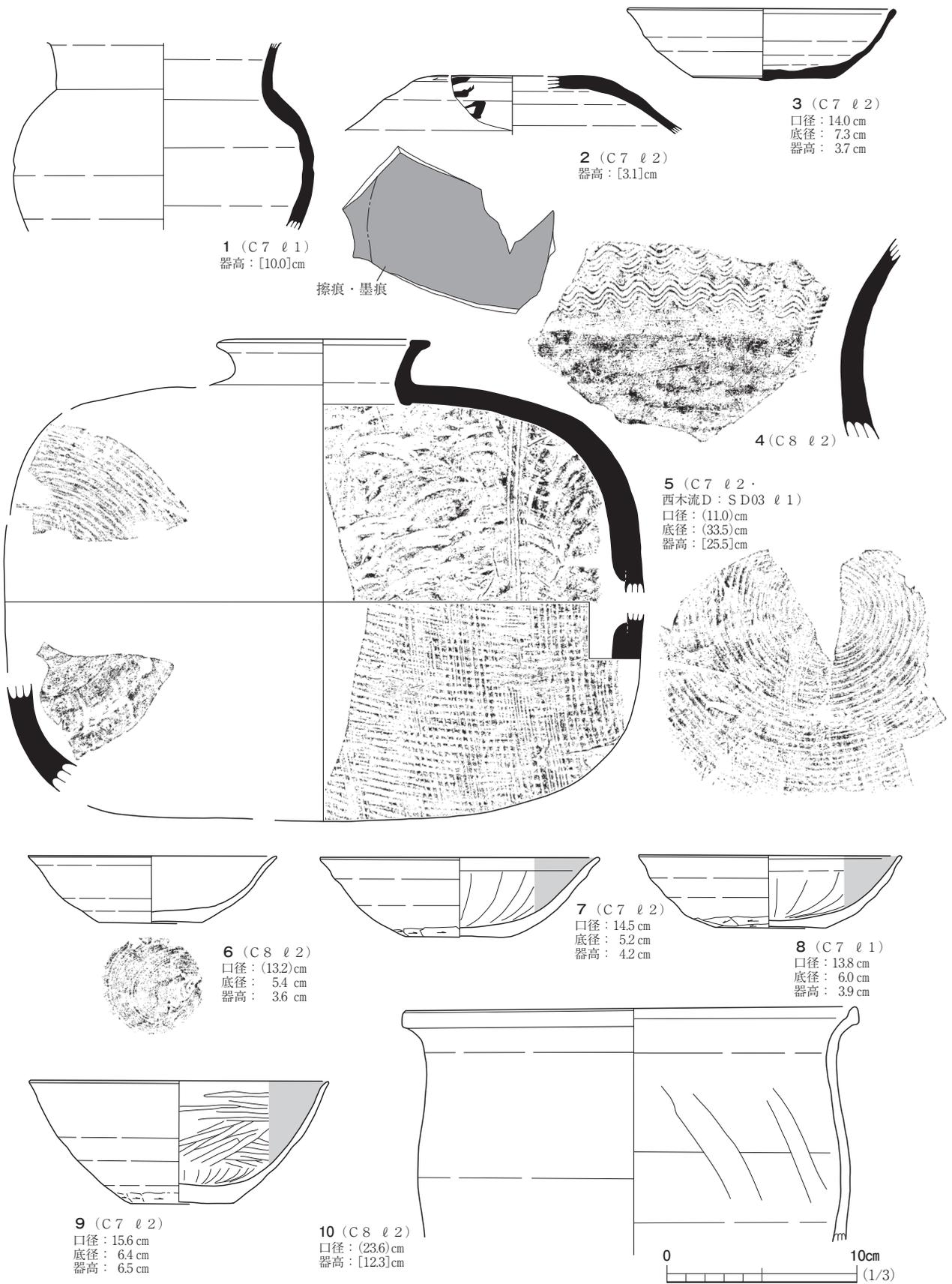


図23 15号溝跡出土遺物 (1) l1・2①

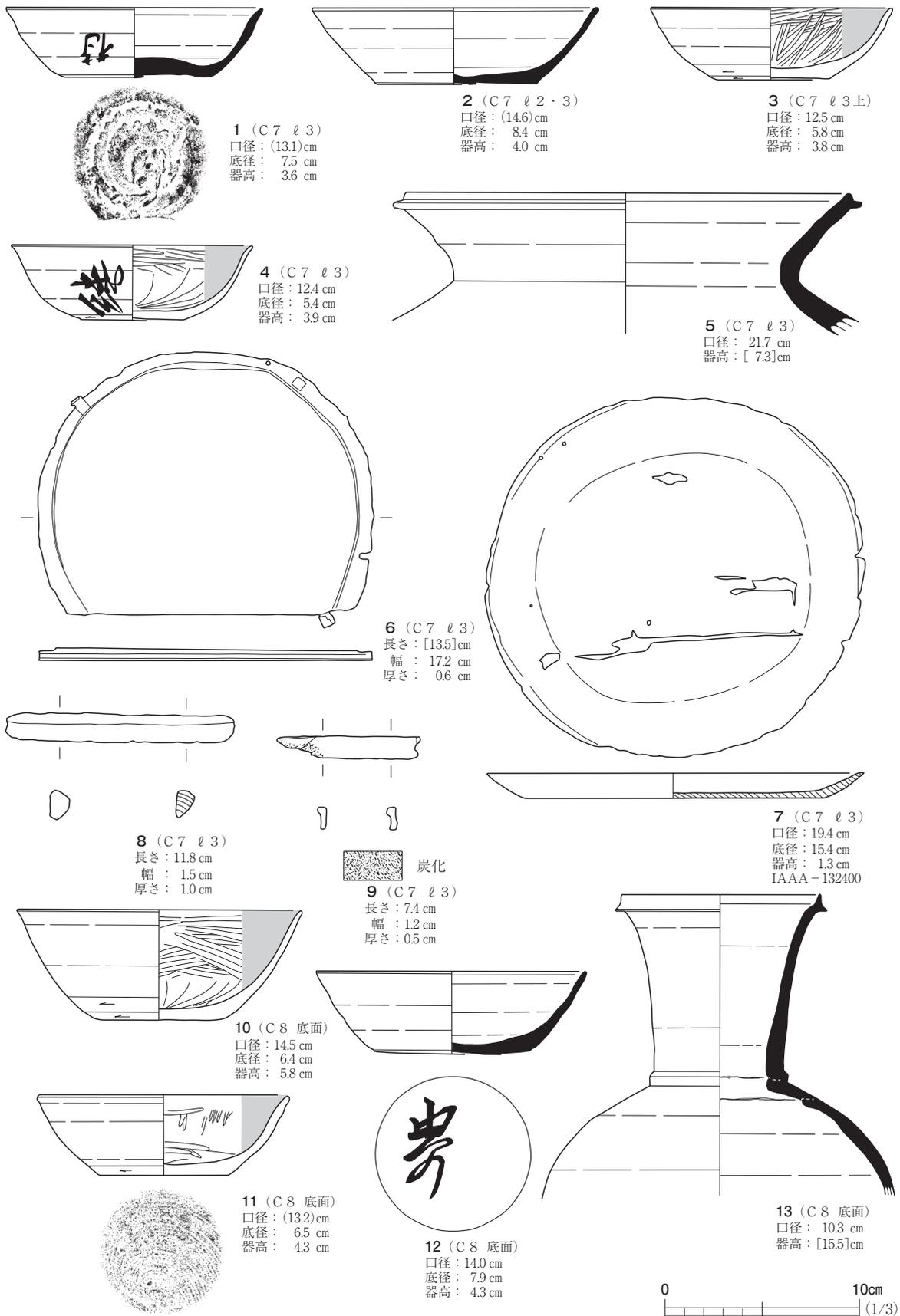


図25 15号溝跡出土遺物(3) l 3・底面

ているのかは不明である。しかし、会津若松市の報告書に掲載された断面図には、15号溝跡Bに該当すると思われる土層が確認できる。その位置から判断すると最低でも5m程は北東側に続いていたようである。14号溝跡と合流する付近がどうなっていたのかは堆積土が残っていなかったため把握できない。15号溝跡Aの規模は長さ34m、幅は残りの良い場所で2.5～3m、検出面からの深さ70cm、浅いところでは50cmであった。断面形態はV字状で、底面が比較的平坦に整えられている。場所によって底面の幅が異なり、南西側の幅が狭い。平面形態は直線的で、14号溝跡の少し手前でわずかに曲がっている。底面のレベルはC7グリッド付近がわずかに低くなっているが、ほぼ一定である。そのため、流路方向は断言できない。

堆積土は5層に区分できる。ℓ1は黒色または黒褐色の粘質土、ℓ2は黒色の粘質土で15号溝跡Bの堆積土に該当するが、ℓ2は南西側では確認できない。ℓ3以下は15号溝跡Aの堆積土に該当する。ℓ3は層の様相が一定ではなく、灰黄褐色または暗褐色の粘質土に黒色土または暗褐色砂質土が混ざる。ℓ4は非常に礫を多く含んだ層で、黒褐色の砂質土を基調とする。ℓ5は黒色粘質土にぶい黄褐色砂質土の混ざった層である。

遺物 (図23～25, 写真38～42)

遺物は土師器・須恵器・木器が多数出土している。以下、出土層位ごとに遺物について記述する。

図23・24はℓ1・2出土の遺物で、この層の出土遺物は15号溝跡Bの出土遺物に該当する。ℓ1・2出土の遺物は接合するものがあり、一括して報告する。

— ℓ1・2の遺物—

土師器

図23-6～9は土師器杯で、全てロクロ成形のものである。6は底部に回転糸切り痕を残し、内面の黒色処理とミガキ調整がない。7～9は内面に黒色処理とミガキがある。8は底部回転糸切り後、底部から体部下端が手持ちヘラケズリされている。9は他の2点に比べ器高があり、底部から体部下端にかけて手持ちヘラケズリされる。

10はロクロ成形の甕である。一部に赤く変色している部分があり、炭化物もわずかに付着する。

図24-1～3は須恵器の甕の図をまとめている。1は底部から胴部にかけてのもので、高台を持つ。2は大甕の頸部から胴部にかけてのもので、外面はタタキ、内面は頸部から胴部中程までは当て具痕を残し、それより下はタタキの痕跡が見られる。3は丸底の大甕である。

須恵器

図23-1～5は須恵器を示した。

1は短頸壺で、底部を欠く。

2は蓋である。外面には墨書が確認できるが、半分近くが欠損しているため文字の判読はできない。内面は捺痕・墨痕があり、転用硯として使われている。

3は杯で、底部は回転ヘラ切り無調整である。

4は大甕の口縁部片で波状文が施されている。

5は横瓶で、15号溝跡出土の破片と西木流D遺跡の3号溝跡出土の破片が接合した。口縁部の上面が水平に作られているのが、特徴的である。また円盤閉塞部分の外面には、ヘラ書きで「梓今来」と刻書されている。

— Ⅱ3の遺物 —

Ⅱ3出土の遺物は図25-1~9に示した。この層からは木質遺物の出土があり、その中でも製品あるいは加工が確認できたものを掲載している。

土 師 器

図25-3・4はロクロ成形の土師器杯で内面には黒色処理とミガキ調整がある。4は底部回転糸切り後、底部から体部下端を回転ヘラケズリしている。体部に「継万」の合わせ墨書文字がある。

須 恵 器

図25-1・2は須恵器の杯で、底部は回転ヘラ切り無調整である。1は墨書があり「持」と判断した。5は須恵器甕の口縁部から頸部にかけてのもので、頸部の屈曲が強く、口縁部は突起状に張り出している。

木 器

図25-6~9は木器を掲載した。6は曲物の底板で縁に段を持つ。綴じ皮が3か所残っており、本来はもう1か所あったのだろう。

7は挽物の皿で、一部欠損しているが残りは良い。

8・9は棒状のもので、9は先端が炭化し、火付木と思われる。

— 底面の遺物 —

図25-10~13は底面から出土した遺物である。

10・11はロクロ成形の土師器杯で、10は底径、器高ともに大きい。2点とも内側は黒色処理とミガキ調整がされているが、10は底部から体部下端にかけて回転ヘラケズリされているのに対し、11は底部を回転糸切りで切り離している。

12は須恵器の杯で、底部に墨書がある。「中万」だろう。

13は須恵器長頸瓶で、口縁部から胴部中ほどまでが残存している。頸部にはリング状突帯が巡る。胴部は一度円盤閉塞を行い、その上に別作りの頸部をつける3段構成で作られる。

ま と め

14号溝跡同様、人工的に掘り込まれた溝跡である。15号溝跡の年代はA・Bともに平安時代の中におさまる。15号溝跡Bの出土遺物から見ると、14号溝跡上層出土の土器よりも明らかに新しいものを含むため、15号溝跡Bは14号溝跡よりも新しい可能性がある。15号溝跡Aはそれよりも古い。出土遺物は須恵器・土師器が中心で、9世紀~10世紀頃のものを含むが、層位的なまとまりはあまりみられない。(鶴見)

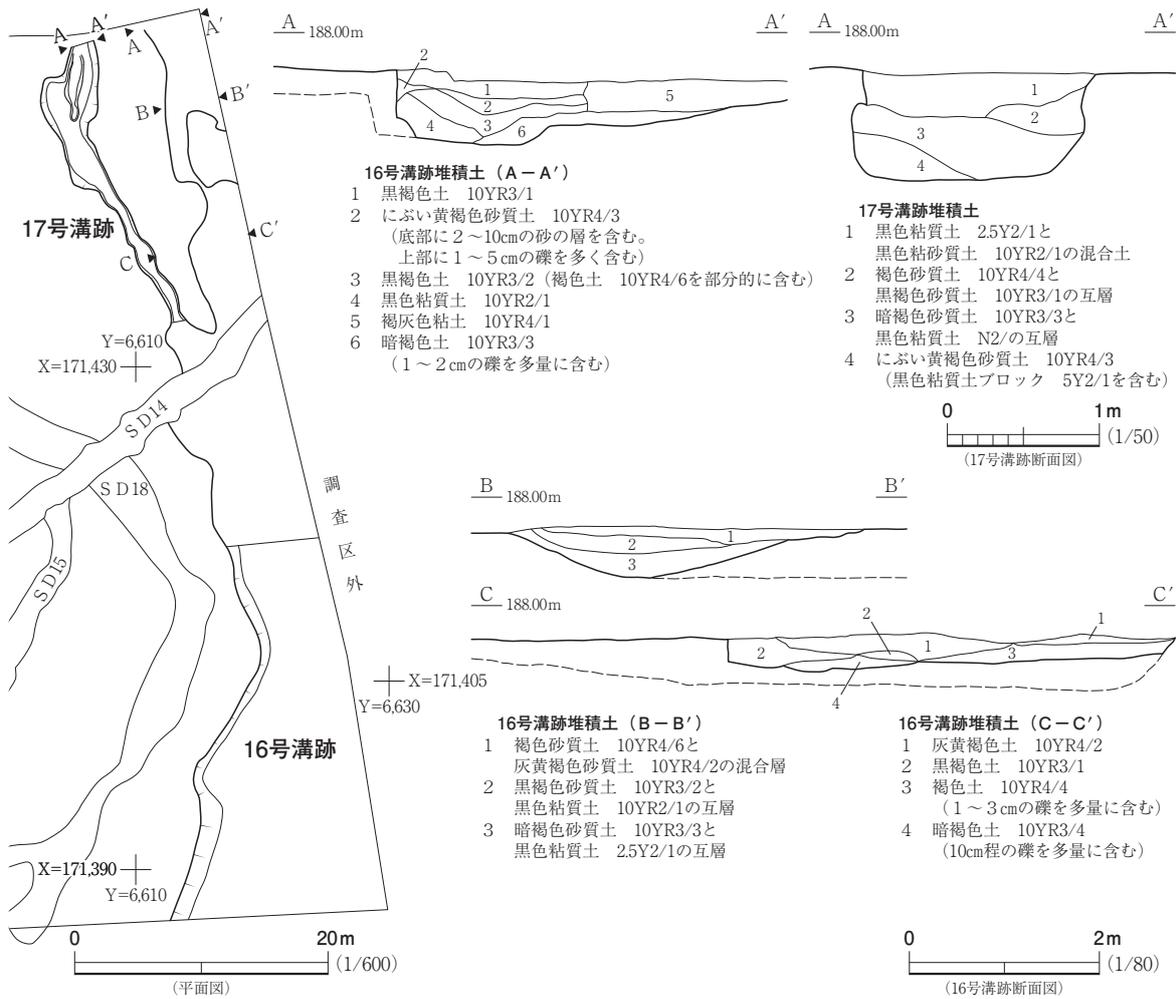


図26 16・17号溝跡

16号溝跡 SD16

遺 構 (図26, 写真12)

Ⅱ区東壁沿いで、検出された溝跡である。重複関係は、14号溝跡より古い。別名を付したが西木流D遺跡1・3号溝跡、本遺跡1次調査区8号溝跡は同一遺構であり、17号溝跡も枝分かれした小支流と考えられる。

本溝跡は東西方向E~F、南北方向2~9グリッドにまたがっており、LⅡないしLⅢ上面で検出された。溝幅は、最大箇所16m、検出面からの深さ85cmを測る。方向は、弓なりに蛇行し、底面レベルの観察から南→北に流れていたと判断される。これは、現在の瀬川の流路と基本的に一致するもので、今回検出された長さは約72mとなる。

堆積土は、観察地点により多様であるが、いずれも流水作用による自然堆積土とみられる。傾向としては、上層の灰黄褐色から褐色を基調とした砂質土に対し、下層は、暗褐色から黒褐色基調の砂質土で、礫を含むことが指摘される。遺物の取り上げは、この基準をもとに上層を①、下層を②として、行った。

遺物(図27, 写真43~45)

E4・5グリッドを中心に, 須恵器・土師器・木器が出土した。他に, F6~8グリッドで流木が多量に出土している。ここでは, 図示した14点に解説を加えていく。なお, 出土層位は図27-1・11を除き, すべて $\ell 2$ である。

土師器

図27-12は, 底部切り離し不明の杯である。底部全面から体部下端回転ヘラケズリで, 底部外面には「鳴」の墨書がある。

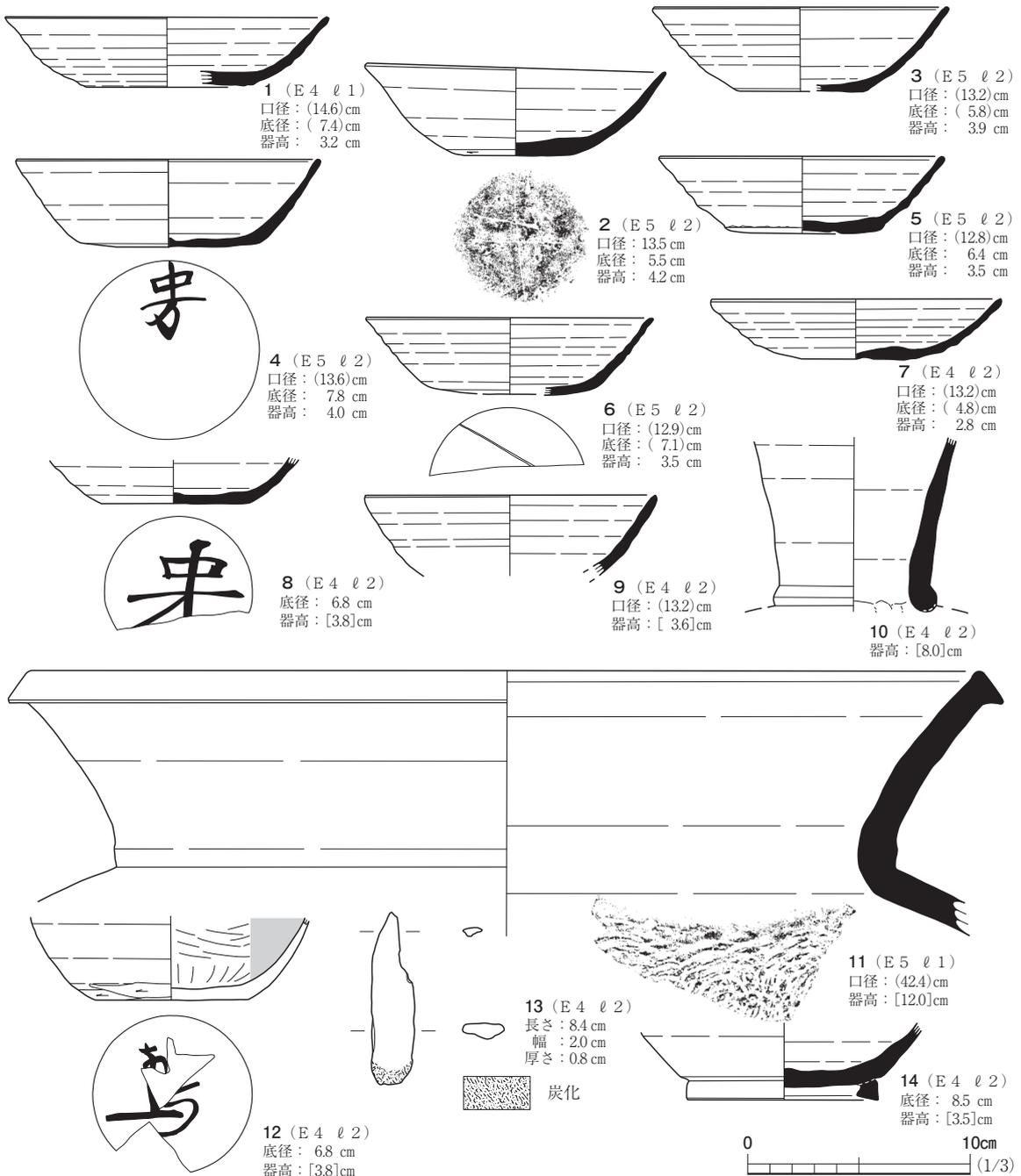


図27 16号溝跡出土遺物

須恵器

図27-1~9は杯である。9を除き、いずれも底部の回転ヘラ切り無調整が確認される。このうち、2・6の底部外面にはヘラ記号、4・8の底部外面には「中万」の墨書が認められる。10は、長頸瓶の頸部片である。下端にリング状凸帯が巡る。11は、甕(みか)クラスの大甕の口頸部片である。わずかに残る胴部上端には、内面当て目が観察できる。色調は赤っぽく、胎土は、径1~3mmの砂粒を特徴的に含む。14は、長頸瓶の底部と思われる。

木器

図27-13は、火付木だろうか。先端が炭化している。

まとめ

本遺構は幅が一定せず、方向も蛇行する溝跡である。この様子から、自然流路跡と考えられる。出土遺物の特徴から、9世紀に流水していたのは間違いなく、具体的な性格は旧瀬川の支流跡と考えられる。(菅原)

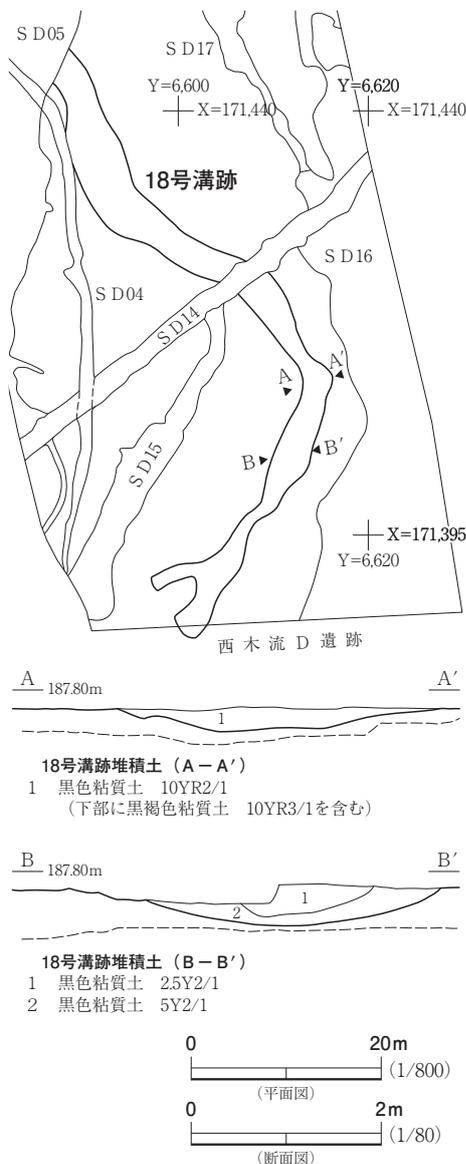


図28 18号溝跡

17号溝跡 SD 17 (図26, 写真13)

調査区Ⅱ区の北東部、D2~4・E4グリッドで検出した。検出面はLⅢ上面である。

本溝跡はD2グリッド北側調査区外に延びており調査区内で確認できた規模は、全長が24m、溝幅は0.9~4.6m、深さは北端部で70cmを測る。底面は北に向かって深くなる。溝跡が南東に延び16号溝跡と接している。16号溝跡が枝分かれしてできたものと思われる。堆積土は4層に分けた。ℓ1は黒色粘質土と黒色粘砂質土の混合土。ℓ2は褐色砂質土と黒褐色砂質土の互層。ℓ3は暗褐色砂質土と黒色粘質土の互層で、西壁側から堆積土が流入してきている。ℓ4はにぶい黄褐色砂質土。

遺物は土師器・須恵器細片が数点出土した。時期は16号溝跡と同時期の自然流路跡と思われる。(細山)

18号溝跡 SD 18 (図28, 写真14)

調査区Ⅱ区の中央を南北に逆「く」の字で、B3~4・C3~5・8・9・D5~9・E5~8グリッドで検出した。検出面はLⅢ上面である。規模は、全長が75m、溝幅は1.5~5.5m、深さは50cmを測る。底面は北に向かって深くなる。D9グリッドから真北に対して約45°東向

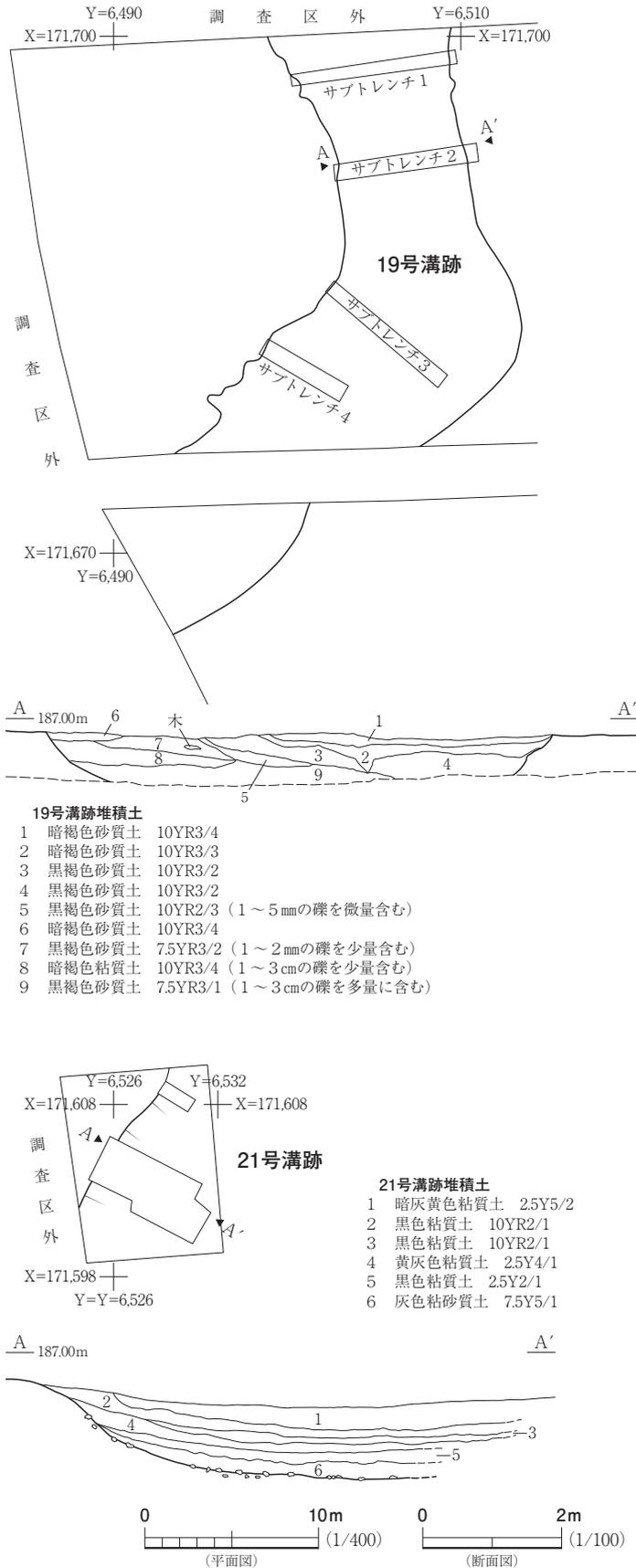


図29 19・21号溝跡

きに16号溝跡と並走し、E 6グリッドから真北に対して約35°西に向きを変え、D 5グリッドで14号溝跡に切られる。その後B 4グリッドで4号溝跡に接し、B 3グリッドで5号溝跡に達する。堆積土の黒色粘質土は溝の機能時期に堆積した土層と判断した。遺物が出土していないが、古代以前の自然流路跡と思われる。(細山)

19号溝跡 S D 19

遺構(図29, 写真15)

I区西側B 1~4・C 1~4・D 2・3グリッドで検出した。重複する遺構はない。溝の規模が大きく、形状も蛇行しており、検出面の精査時には遺物が見えなかった。そこで自然流路の可能性を念頭に置き、溝に直行するようにサブトレンチを設定した。土層を観察した結果、堆積土は暗褐色または黒褐色の砂質土が基本で、2時期の溝が重なっていることが判明した。西寄りに流れていた溝が機能を停止し、ある程度土が堆積した後、東寄りに新たな溝ができていた。遺物がなかったため3本のサブトレンチを追加で設定し、年代を判断できる遺物がないかを確認したが、出土遺物はほぼ皆無であった。最終的に、人工的な溝ではなく自然流路の跡の可能性が高く、遺物も含まれていないと判断し、全体的な掘削は行わず、溝のプランを確認

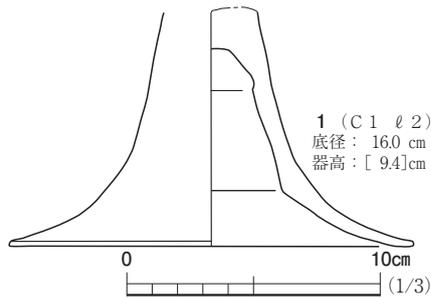


図30 19号溝跡出土遺物

するだけに留めた。B 3・4グリッドには調査区に隣接する水田の排水路があり、排水路を使用しなくなった時期に調査を行う予定であったが、自然流路と判断したため調査を行わなかった。確認できる範囲での規模は長さ約38 m、幅は最大11 m、深さは底面まで掘削していないため不明で、流れの方向も同様に不明であるが、1号流路跡や遺跡の傍を流れる溷川の流れる方向からすると、北側に向かって流れていた

可能性が高い。

遺物 (図30, 写真45)

出土遺物は土師器1点のみで、他に破片等の出土もない。図30は土師器高杯で、脚部のみが残存している。内面では体部中ほどに稜があり、屈曲する。外面は器面が剥落し、調整は不明である。形態的特徴から古墳時代前期のものだろう。

まとめ

19号溝跡は大規模な自然流路跡である。出土遺物は土師器高杯1点のみであるため年代を確定はできない。古墳時代前期を上限とする溝跡だろう。(鶴見)

20号溝跡 S D 20 (図14, 写真16)

Ⅱ区南西部で検出された、円形周溝状の溝跡である。5・14号溝跡に破壊され、推定範囲の半分以上は調査区外に広がっている。

グリッドでは、B 7・8にまたがっており、LⅢ上面から検出された。断面は、比較的整った逆台形を呈し、溝幅82～86 cm、検出面からの深さ37～43 cmである。検出された範囲の平面プランは、弓なり状で、長さは11.6 mを測った。堆積土は、7層に分かれ、いずれも自然堆積層である。上部のℓ 1～4は、明るい色調と暗い色調の粘質土が、交互に堆積したものである。対して下部のℓ 5～7は、壁崩落土で、明るい色調の砂質土が主体をなす。

遺物は出土していない。

本遺構は、時期の決め手を欠くが、特徴的な形状と会津盆地の類例からみて、古代の平地式建物跡の可能性が高い。(菅原)

21号溝跡 S D 21 (図29, 写真17)

Ⅰ区E 10グリッドで確認された溝跡である。E 10付近の調査区は、周囲が水路や工事用道路に囲まれているため、部分的な調査となっている。本遺構は、真北に対して東へ約30°傾いたプランとして検出された。確認できたプランは、溝跡の西側のラインであり、東側のラインは確認できていない。検出段階ですでにLⅢ上面から50 cmほど削平されており、堆積土の状況と溝跡の延長部分を確認するため、F 11付近にサブトレンチを設定した。

堆積土は6層に区分した。全体的に非常に硬く締まっており、水平に堆積する様相から水成堆積であると考えられる。底面には、丸みのある礫が多数みられた。サブトレンチは、堆積土の状況から本遺構の延長上にあると判断した。

本遺構から南側のE 13・F 12グリッドでは、1号流路跡の西側ラインが検出されている。サブトレンチが本遺構の堆積土であることと東側のラインが確認できないこと、さらには、本遺構のすぐ東側に1号流路跡が存在することから、1号流路跡によって浸食されていると推測される。遺物が出土していないため、年代や性格は不明であるが、1号流路跡よりさらに古い流路の一部と考えられる。(吉野)

22号溝跡 S D 22 (図5, 写真18)

I区I 9・10グリッドで検出した。I区南東端の中州状に地山が残る場所にある溝跡である。1号流路跡よりも古い。長さ8m、幅は最大で1.8mある。深さは一定ではなく、底面の凹凸が激しい。堆積土は2層に区分でき、どちらも自然堆積だった。

出土遺物は確認できなかった。

出土遺物がなく、年代は不明だが、1号流路跡よりも古い段階に機能していた自然流路の跡と考える。(鶴見)

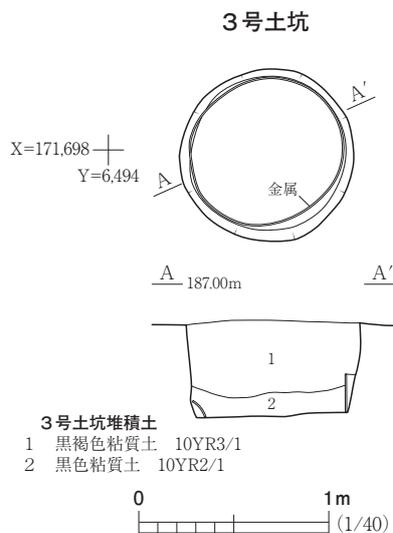
第5節 土 坑

今回検出された土坑は1基にとどまり、1次調査に続いて、当該遺構の分布は希薄であった。したがって、西木流C遺跡の特徴とも言える。

Y=6,494
X=171,699 +

Y=6,495
+ X=171,699

3号土坑 S K 03 (図31, 写真19)



I区西側調査区北端のB 1グリッドで検出した。重複している遺構はない。長さ92cm、幅92cmの円形である。壁の立ち上がりは直線的で、検出面からの深さは52cmあった。堆積土は黒褐色と黒色の粘質土が2層に自然堆積していた。堆積土には金属片が多数混ざっていたが、土坑の下半部分に環状の鉄製品が残っていたため、その断片と判断した。もともと土坑内に桶などの木器が存在し、そのつなぎ目を固定していた部品であったと推定する。遺物は陶器片が出土しているが、図示できる大きさではなかった。3号土坑は何らかの貯蔵施設の可能性がある。陶器片が出土していることから、年代は近世と推定しておきたい。(鶴見)

図31 3号土坑

第6節 遺構外出土遺物

遺構外からは、須恵器・土師器・近世陶磁器の破片、石製品が出土している。ここでは、図示した4点に解説を加える。

須恵器 (図32-1~3, 写真45)

いずれも杯である。1は底部外面, 2は体部外面に判読不明の墨書が観察される。ただし、墨痕が薄く、実測図には表現しなかった。また、1・3は底部ヘラ切り無調整である。

石製品 (図32-4, 写真45)

砥石である。断面は長方形を呈し、図の上方が欠損している。

(菅原)

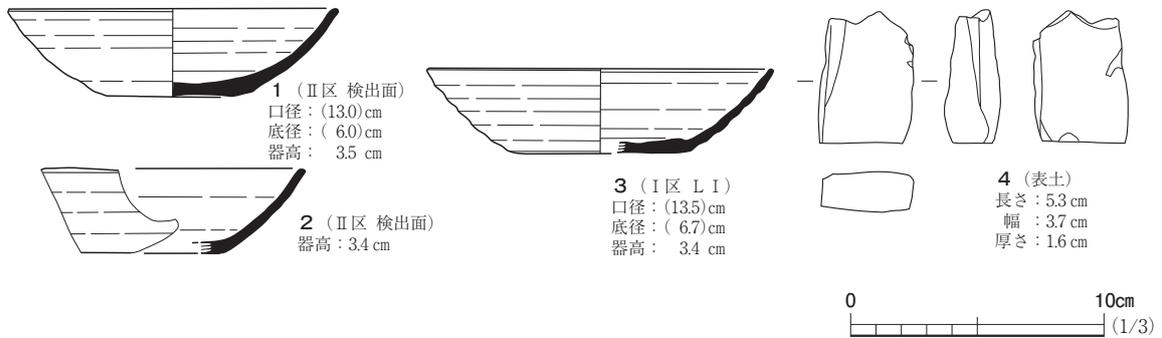


図32 遺構外出土遺物

第3章 総括

今回の2次調査で、会津縦貫北道路建設に係る西木流C遺跡の発掘調査は終了した。成果は、前章で記述したとおりである。その結果、蛇行する自然流路跡沿岸に営まれた古代の会津郡衙関連遺跡の一面が明らかになったと言える(付図)。

ここでは、関連遺物に焦点を絞ってまとめを行い、詳細な遺構変遷の検討は、同一の掘立柱建物群が連続して広がる次年度の西木流D遺跡(2次)の報告の中で行うこととする。

第1節 古代の土器の特徴と年代

2次調査により、自然流路跡、溝跡などからコンテナ約20箱分の土師器・須恵器が出土した。図示遺物は134点を数え、内訳は土師器34点、須恵器100点となる。過去の会津若松市教育委員会の発掘調査では、緑釉・灰釉陶器が出土したが(会津若松市教育委員会1996・2000)、本事業では発見されなかった。

以下、1次調査の出土資料を含め特徴を記述していく。

1. 器種構成と製作技術の地域性

土師器・須恵器の器種構成は、次のとおりである。

◎土師器…食膳具(杯・高台杯・深碗) 煮炊き具(甕・なべ) 貯蔵具(鉢) 筒形土器

◎須恵器…食膳具(杯・高台皿・高台碗・蓋) 貯蔵具(甕・短頸壺・鉢・長頸瓶・小瓶・横瓶・水瓶)

このうち筒形土器(焼き塩壺)は、浜通り沿岸から運ばれたもので、土師器なべと須恵器横瓶は、北陸から出羽南部に安定した分布圏が存在する。こうした太平洋側と日本海側の要素が重なり合う器種構成の状況は、製作技術にも認められる。

◎太平洋側の要素…土師器杯の内面黒色処理卓越。土師器甕の胴部叩き成形。

◎日本海側の要素…須恵器杯の回転ヘラ切り底主体。

2. 墨書土器について

墨書土器は小破片を含めると150点以上を数え、34点を図示した(土師器9点：須恵器25点)。この数の多さは、郡衙関連遺跡である本遺跡の性格をよく示している。また、須恵器転用硯・パレットが出土したことから、墨書行為は遺跡内か周辺で行われたと推定される。器種は杯のみで、部位は次のように整理される。

◎体部外面 24点(正位7点 逆位3点 横位6点 不明8点)

◎底部外面 10点

このように、墨書行為が特定部位や方向に偏る傾向は認められない。また判読可能なものは17種類21点あり、内訳は次のように整理される。

「寺」……1点 「伴」……1点 「集」……1点 「福」……1点 「子」……1点
 「ヒ」……2点 「持」……1点 「嶋」……1点 「丈」……1点 「万」……1点
 「継万」…1点 「廿万」…2点 「中万」…3点 「来万」…1点 「土万」…1点
 「五万」…1点 「繕」……1点

主体を占めるのは、吉祥句の「万」が付く7種類11点(約50%)である。他に、1点のみであるが、「寺」は周囲に仏教施設が存在した可能性を示唆している。

3. 年代について

ここでは、土器様相から見た古代の遺跡存続期間を示しておきたい。

会津地方の編年研究に従うと(山中1999・2000)、本遺跡は、8世紀後半～10世紀中葉に継続して営まれたと考えられる。このうち、人工的に掘削された15・16号溝跡は9世紀前半～中葉に中心年代が求められ、1号流路跡と重複しない範囲はいち早く埋没した可能性が高い。その後、11世紀中葉頃には1号流路跡で燈明皿が廃棄されているが、単発現象で終わっている。(菅原)

第2節 「梓 今来」と渡来系集団

今回、「梓 今来」と刻書された須恵器横瓶が、1個体出土した(巻頭写真、図23-5)。横瓶は古墳時代以来の伝統的な祭祀用器種であり(中村2010)、本資料は所有者にとって特別な器物であったと考えられる。以下、この「梓 今来」が何を意味するのかを検討したい。

1. 基本属性

本資料の生産地は、新潟県新潟市西部(旧新津市方面)の遠隔地窯に求められる(坂井秀弥氏の教示による)。刻書は、焼成前に先端の細い工具で円盤閉塞された胴部側面に対して施され、文字方向は正位をなす。「梓」と「今来」の間には、一文字分の空白が見られ、相互の軸線は微妙にずれている。したがって、「梓」と「今来」はそれぞれ独立した意味を持ち、両者で全体の意味をなしたと考えられる。

出土状況は、Ⅱ区15号溝跡、西木流D遺跡3号溝跡に破片が拡散し、図23-5は、接合しなかった口縁部と胴部を図上で復元した。時期は8世紀末～9世紀前半と考えられ、本資料は遺跡形成期の所産となる。

2. 「梓 今来」の意味

下段の「今来」には、史料上の主な用例として、次のものが認められる。

A：『日本書記』雄略七年条 「今来才伎(いまきのてひと)」

B：『日本書紀』欽明七年条 「大和国今来郡(いまきのこおり)」

C：『延喜式』卷二十八隼人司 「今来隼人(いまきのはやと)」

A～Cのうち、最も有名なAは、百済から雄略天皇に献上された新来(=今来)の渡来系集団に対する呼称である。Bも、類似した使用例にあたり、新来の渡来系集団の集住地に由来する郡名を示したもので、Cは、それが隼人に対して使用された例にあたる。他に、山背国の氏族名を示す用例も認められる(『新撰姓氏録』)。

このように史料に見える「今来」は、畿内政権の藤元における新来の異民族集団の表記として確認され、これまでの出土文字資料も、対応して平城京跡の2例(木簡・墨書土器)しか確認されていなかった。したがって、本資料はそれが地方でも使用されたことを実証する、初資料と言える。ちなみに鶴沼C遺跡では、土器10点(墨書)と木製皿1点(刻書)に「今」の文字が認められ、「今来」を省略した可能性が高い(『会津縦貫北15』収録)。

そうすると、問題は彼らの出自であるが、9世紀の会津地方に隼人の移配史料は無く、また国造制の北限より外側だった当地域にとって、身近な存在の蝦夷の可能性も低いと思われる。したがって、現時点では北陸経由の渡来系集団を想定するのが、最も妥当と考えられる。実は従来、見過ごされていたが、会津郡衙関連遺跡では、渡来系氏族名の「秦人」(上吉田遺跡：9世紀中葉)、「秦□」(東高久遺跡：9世紀)の墨書土器が出土しており、『新編会津風土記』(幕末～明治初期編纂)には、－9世紀の会津地方へ源融の家来の「秦人」が移住した－、というまさに対応する伝承記述が認められる。

このことから、9世紀の会津地方へ渡来系集団が移住したことが確実視され、本資料の「今来」は秦氏を指すものとみられる。秦氏は全国規模で勢力を伸ばしたことが知られており、会津地方への移住もその一環と理解できよう。

さらに、この延長でみると、本資料の推定生産地付近には、上段の「梓」と読み方の近い「足羽(あすわ)」の地名が確認されることが注目される。その故地の福井県足羽地方は、秦氏の集住地とみられており、会津郡衙の関連遺跡では、「足」・「足寺」・「西足」・「大足」・「田足」・「万足」・「廿足」・「北家足」の墨書土器が多数出土していることと対応する(矢玉・上吉田・鶴沼C遺跡)。

今のところ「梓」＝「足羽」を直結させる史資料は見当たらないが、ここでは、その可能性を指摘しておき、今後の研究進展を待ちたい。(菅原)

第3節 木器

1. 西木流C遺跡出土の木器

西木流C遺跡では比較的まとまった数の木器が出土している。2次調査出土の木器は1次調査に比べ少ないが、1・2次調査を合わせて、1号流路跡からは椀・皿などの食膳具、曲物などの容器、田下駄、堅杵、コロバシといった農耕具、紡織具の可能性のあるもの、祭祀具である斎串など比較的種類は豊富である。これらの木器の年代については土器から判断するしかないが、1号流路跡出土の土器は1次調査出土のものと同様で大きく矛盾するものはないため、同様の年代を考えていだろう。14・16号溝跡からも木器が数点出土しており、それらも平安時代のものと考えられる。

2. 祭祀具について

西木流C遺跡出土木器の中でも、祭祀具について言及しておきたい。出土した木製祭祀具は斎串が13点出土している。また、舟形の可能性のあるものが1点存在する。会津盆地内部では古代の木器が出土する遺跡が多いが、その中に木製祭祀具はそれほど多くない。確実な例では会津若松市矢玉遺跡で舟形が2点出土している(会津若松市1999)。東高久遺跡では刀形が1点出土し(会津若松市教育委員会2005)、喜多方市高堂太遺跡では刀子形の可能性のある木器が1点出土している(財団法人福島県文化振興事業団2008)。

福島県内で祭祀具が最も多く見つかっているのは浜通り地方である。いわき市荒田目条里遺跡(いわき市教育振興事業団2001)、荒田目条里制遺構・砂畑遺跡(以下砂畑遺跡と省略、いわき市教育振興事業団2002)で木器が多く出土し、荒田目条里遺跡では木簡を含んでいる。荒田目条里遺跡出土木器は祭祀具に限っても人形、立体人形、馬形、舟形、刀形、陽物形、絵馬、斎串など多岐にわたる祭祀遺物が出土している。また、砂畑遺跡では刀形・斎串と種類は少ないが、多くの斎串が出土している。磐城郡衙でもある根岸遺跡は両遺跡の近隣に所在し、この遺跡からも刀子形・刀形が出土している。

数は少ないが、中通り地方でも福島市御山千軒遺跡で馬形が出土している(福島県教育委員会1983)。また、福島市中ノ内遺跡では刀形が1点出土している(福島市教育委員会1988)。この2つの遺跡は信夫郡衙と推定される福島市北五老内遺跡の比較的近隣に所在することから、律令祭祀物として認識できる可能性が高い。

中通り・浜通り地方では郡衙周辺の遺跡で木製祭祀具が確認され、郡衙とされる遺跡でも木製祭祀具が確認できる。これらの木器は律令祭祀遺物とされるものであり、官衙周辺の遺跡で見つかることが多い。西木流C遺跡の近隣には会津郡衙と推定される会津若松市郡山遺跡が存在する。調査範囲が限定されていることもあって木器の出土は少なく、木製祭祀具は確認できない。しかし、その近隣の遺跡で木製祭祀具が確認されることは、近隣に郡衙が存在する傍証にはなるだろう。

出土遺構の傾向をみると、遺構外出土の高堂太遺跡、井戸出土の東高久遺跡、トレンチ出土で遺構の性格が不明な中ノ内遺跡以外は全て溝跡もしくは自然流路の跡から出土していて、河川における祭祀が多い。木製祭祀具は井戸や溝など、水にかかわる場所で用いられることが多いが、福島県では井戸での木製祭祀具の使用例は少なく、流路跡での例が多数を占める。

3. 周辺地域の祭祀具

陸奥国の国府である多賀城跡でも木製祭祀具が多く出土している。多賀城における祭祀遺物は柳澤氏によってその内容がまとめられている。多賀城では、場外の、溝跡でも多く木製祭祀具が出土し、人面墨書土器やト骨なども確認されていて、多様な祭祀が行われている(柳澤2011)。

山形県では祭祀具の中でも、斎申についての集成があり、水辺の祭祀で使われている状況が確認されている(山内2008)。木製祭祀具全般についてみると、出羽国府が置かれた庄内地方の遺跡で出土が多く、俵田遺跡では出土状況が良好で、祭祀が行われた当時の状況がわかる(山形県教育委員会1984)。

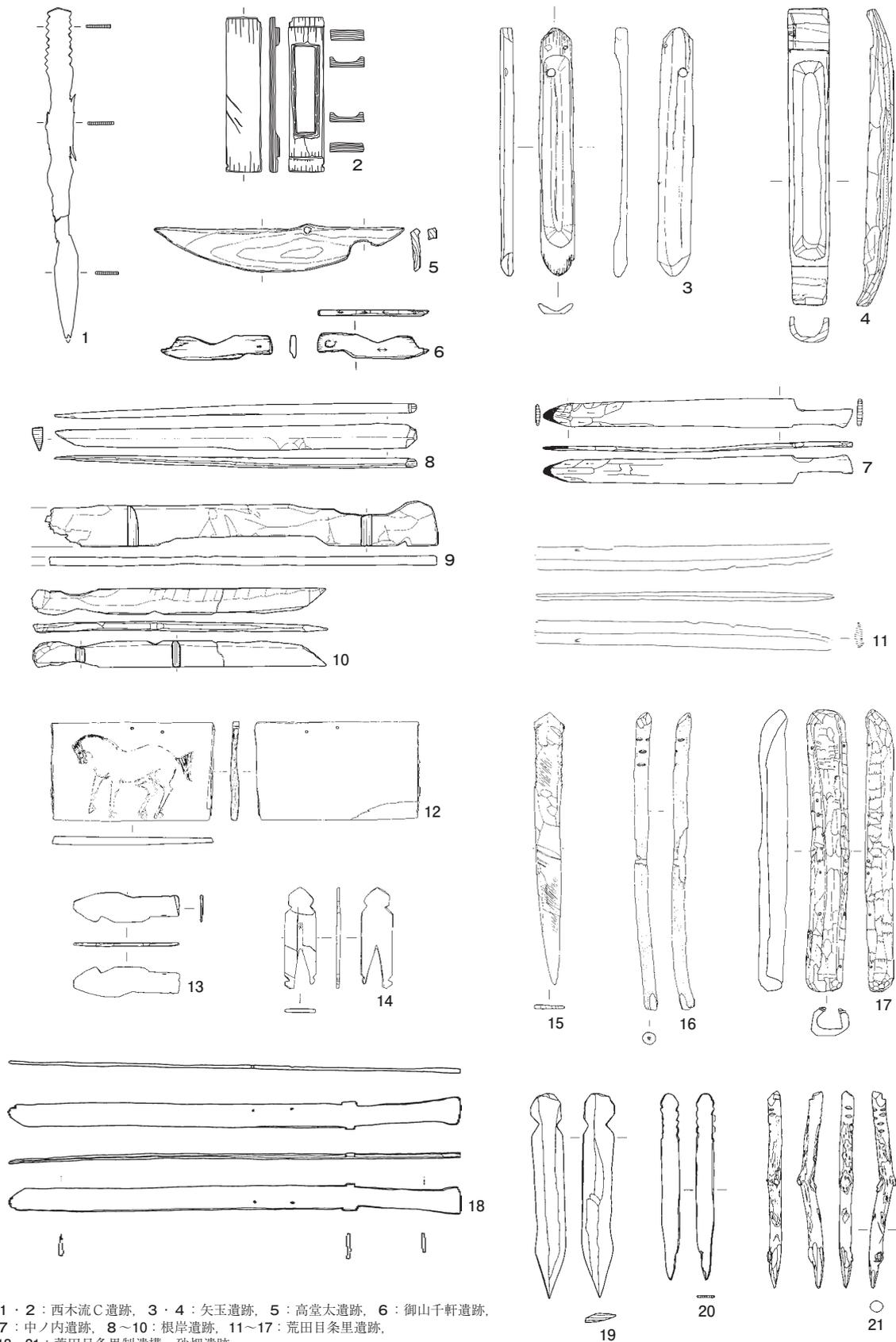
置賜地方の遺跡でも木器が出土しているが、木製祭祀具の出土例は少ない。しかし、水にかかわる祭祀に使われていたことが良くわかる例がある。梅ノ木前1遺跡(山形市教育委員会2007)と馳上遺跡(山形県埋蔵文化財センター2002)出土の呪符木簡には「竜王」の文字があり、水の祭祀に関するものとされる。その他の祭祀具では道伝遺跡では絵馬と斎申が(川西町教育委員会1984)、今塚遺跡でも斎申が確認される(山形県埋蔵文化財センター1994)。

梅ノ木前1遺跡の呪符木簡が住居の覆土出土である以外は、溝跡や河川跡の出土であり、山形県でも祭祀遺物は水に関連する場所で出土する傾向にある。都城と同じように、東北地方南部にも律令制とともに、祭祀が浸透してきている様子が確認できる。

4. まとめ

以上のように、福島県内や周辺地域における木製祭祀具の出土傾向は溝跡や河川跡、井戸などの水にかかわる遺構から出土する事例が多い。西木流C遺跡で流路跡から斎申が出土していることはその傾向に合致し、水辺の祭祀が行われた場の一つとして認識することができる。

会津地方では木製祭祀具だけではなく、律令祭祀遺物と考えられるもの全般の出土例が少ない。会津郡衙とその周辺の遺跡を考える上では、今後の資料の増加が期待される。(鶴見)



1・2：西木流C遺跡，3・4：矢玉遺跡，5：高堂太遺跡，6：御山千軒遺跡，
 7：中ノ内遺跡，8～10：根岸遺跡，11～17：荒田目条里遺跡，
 18～21：荒田目条里制遺構・砂畑遺跡
 12・18は1/8 1～11，13～17，19～21は1/6

図33 福島県出土木製祭祀具

参考文献

- 会津若松市教育委員会 1993 『会津大戸窯 大戸古窯跡群発掘調査報告書』
- 会津若松市教育委員会 1993 『若松北部地区県営ほ場整備事業発掘調査報告書』
- 会津若松市教育委員会 1996 『若松北部地区県営ほ場整備事業発掘調査概報Ⅳ』
- 会津若松市教育委員会 1999 『矢玉遺跡』
- 会津若松市教育委員会 2000 『若松北部県営ほ場整備発掘調査報告書Ⅱ』
- 会津若松市教育委員会 2005 『東高久遺跡』
- 蘆田伊人編 2002 『新編会津風土記』雄山閣
- いわき市教育委員会 2001 『荒田目条里遺跡』
- 川西町教育委員会 1984 『道伝遺跡発掘調査報告書—置賜郡衙推定地—』川西町埋蔵文化財調査報告書 第8集
- 北野博司 1993 「横瓶あれこれ」『北陸古代土器研究』第3号 北陸古代土器研究会
- 菅原祥夫 2007 「東北の豪族居宅」『古代豪族居宅の構造と機能』国立文化財機構 奈良文化財研究所
- 菅原祥夫 2011 「福島県の古代生業」『古代社会の生業をめぐる諸問題』日本考古学協会栃木大会実行委員会
- 中村岳彦 2010 「横瓶生産の消長とその意味」『土曜考古』第33号 土曜考古学研究会
- 平川南 2000 『墨書土器の研究』吉川弘文館
- 平野郁雄 1961 「秦氏の研究」『史学雑誌』第70編 第3・4号
- 東村純子 2011 『考古学から見た古代日本の紡織』六一書房
- 福島県教育委員会 1983 『東北新幹線関連遺跡発掘調査報告Ⅵ』
- 福島県教育委員会 1983 『東北新幹線関連遺跡発掘調査報告Ⅵ』
- 福島市教育委員会 1988 『昭和62年度一般国道13号福島西道路関連遺跡発掘調査報告 中ノ内遺跡』
- 福島県教育委員会 1990 『東北横断自動車道遺跡調査報告9』
- 福島県教育委員会 1998 『常磐自動車道遺跡調査報告11』
- 松村一良 2013 「西海道の集落遺跡における移配俘囚の足跡について—豊前・筑前・筑後・肥後4国の事例を中心に—」『内海文化研究紀要』第41号 広島大学大学院文化研究科附属内海文化研究施設
- 望月精司 1999 「越前・南加賀地域の古代須恵器貯蔵具」『須恵器貯蔵具を考えるⅠ つはとかめ 北陸古代土器研究』第8号 北陸古代土器研究会
- 柳澤和明 2011 「国府多賀城の祭祀」『東北歴史博物館研究紀要12』東北歴史博物館
- 山内七恵 2008 「山形県内出土斎申の集成と分類」『研究紀要』第5号 財団法人山形県埋蔵文化財センター
- 山中雄志 1999 「ロクロ土師器を中心とする会津地方の土器様相(前編)」『福島考古』第40号
- 山中雄志 2000 「ロクロ土師器を中心とする会津地方の土器様相(後編)」『福島考古』第41号
- 山形県教育委員会 1984 『俵田遺跡第2次発掘調査報告書』
- 山形市教育委員会 2007 『梅ノ木前1遺跡』山形市埋蔵文化財調査報告書 第28集
- 財団法人いわき市教育文化事業団 2000 『根岸遺跡』
- 財団法人いわき市教育文化事業団 2001 『荒田目条里遺跡』
- 財団法人いわき市教育文化事業団 2002 『荒田目条里制遺構・砂畑遺跡』
- 財団法人福島県文化振興事業団編 2008 『会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告8』福島県教育委員会
- 財団法人山形県埋蔵文化財センター 1994 『今塚遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書 第7集
- 財団法人山形県埋蔵文化財センター 2002 『馳上遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書 第101集

付章 自然科学分析

第1節 出土炭化物等の放射性炭素年代測定について

(株)加速器分析研究所

1 測定対象試料

西木流C遺跡は、福島県会津若松市高野町大字木流字木流に所在する。測定対象試料は、SD 15と1号流路跡から出土した木製品や堅果等の合計5点である(表1)。木製品 AW-NKG・C2-1は皿(25図7)で、破損部より試料を採取した。採取試料は5年輪分で、その外側に約55年輪確認された。堅果 AW-NKG・C2-2はクルミ、種子 AW-NKG・C2-3はモモ、堅果 AW-NKG・C2-5はトチとされる。貝皮 AW-NKG・C2-4は、淡水性の貝殻の皮である。

2 化学処理工程

- (1)メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。
- (2)酸-アルカリ-酸(AAA: Acid Alkali Acid)処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常1 mol/l (1 M)の塩酸(HCl)を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム(NaOH)水溶液を用い、0.001Mから1 Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1 Mに達した時には「AAA」、1 M未満の場合は「AaA」と表1に記載する。
- (3)試料を燃焼させ、二酸化炭素(CO₂)を発生させる。
- (4)真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5)精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト(C)を生成させる。
- (6)グラファイトを内径1 mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

3 測定方法

加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置(NEC社製)を使用し、¹⁴Cの計数、¹³C濃度(¹³C/¹²C)、¹⁴C濃度(¹⁴C/¹²C)の測定を行う。測定では、米国国立標準局(NIST)から提供されたシュウ酸(HOx II)を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

4 算出方法

- (1) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の¹³C濃度(¹³C/¹²C)を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(‰)で表し

た値である(表1)。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。

- (2) ^{14}C 年代(Libby Age : yrBP)は、過去の大気中 ^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年(0yrBP)として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期(5568年)を使用する(Stuiver and Polach 1977)。 ^{14}C 年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。 ^{14}C 年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、 ^{14}C 年代の誤差($\pm 1\sigma$)は、試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。
- (3) pMC (percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。pMCが小さい(^{14}C が少ない)ほど古い年代を示し、pMCが100以上(^{14}C の量が標準現代炭素と同等以上)の場合 Modern とする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。
- (4) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差($1\sigma = 68.2\%$)あるいは2標準偏差($2\sigma = 95.4\%$)で表示される。グラフの縦軸が ^{14}C 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下一桁を丸めない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal13データベース(Reimer et al. 2013)を用い、OxCalv4.2較正プログラム(Bronk Ramsey 2009)を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表2に示した。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に基づいて較正(calibrate)された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」(または「cal BP」)という単位で表される。

5 測定結果

測定結果を表1, 2に示す。

S D 15出土試料4点の ^{14}C 年代は、 $1340 \pm 20\text{yrBP}$ (AW-NKG・C2-4)から $1170 \pm 20\text{yrBP}$ (AW-NKG・C2-3)の範囲で、若干幅がある。暦年較正年代(1σ)は、最も古いAW-NKG・C2-4が656～684cal ADの範囲、最も新しいAW-NKG・C2-3が778～890cal ADの間に3つの範囲で示される。

これらの試料の特徴と年代との関係について検討すると、木製品AW-NKG・C2-1は、測定試料の外側に少なくとも約55年輪あることが確かめられているため、実際に木が死んだ年代(木製品が製作された年代に近いと推定される)は今回の測定結果よりも新しいと考えられる。また、貝皮AW-NKG・C2-4については、淡水性の貝殻であることから、その生息環境によっては淡水リザーバー効果によって実際よりも古い年代値が示されている可能性がある(宮田ほか2009)。これら2

点に対し、堅果 AW-NKG・C2-2と種子 AW-NKG・C2-3の場合、試料自体の特性として年代値を古く見積もらせる要因は認められない。したがって、4点の中で比較的新しい年代を示した堅果 AW-NKG・C2-2と種子 AW-NKG・C2-3の測定結果がSD15の年代により近い値となっている可能性がある。

1号流路跡出土試料 AW-NKG・C2-5の ^{14}C 年代は $1180 \pm 20\text{yrBP}$ 、暦年較正年代(1σ)は778～886cal ADの間に3つの範囲で示される。

試料の炭素含有率は、植物質の試料4点がすべて50%以上、貝皮が31%で、化学処理、測定上の問題は特に認められない。

表1 放射性炭素年代測定結果($\delta^{13}\text{C}$ 補正值)

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-132400	AW-NKG・C2-1	SD15 ℓ 3 図25-7	木製品	AaA	-27.45 ± 0.62	$1,280 \pm 20$	85.25 ± 0.26
IAAA-132401	AW-NKG・C2-2	SD15 ℓ 3	堅果	AAA	-23.79 ± 0.81	$1,220 \pm 20$	85.96 ± 0.26
IAAA-132402	AW-NKG・C2-3	SD15 ℓ 3	種子	AAA	-30.04 ± 0.59	$1,170 \pm 20$	86.41 ± 0.26
IAAA-132403	AW-NKG・C2-4	SD15 ℓ 3	貝皮	AaA	-26.75 ± 0.67	$1,340 \pm 20$	84.69 ± 0.25
IAAA-132404	AW-NKG・C2-5	1号流路跡 ℓ 3	堅果	AAA	-29.78 ± 0.26	$1,180 \pm 20$	86.32 ± 0.26

表2 放射性炭素年代測定結果($\delta^{13}\text{C}$ 未補正值, 暦年較正用 ^{14}C 年代, 較正年代)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-132400	$1,320 \pm 20$	84.82 ± 0.23	$1,282 \pm 24$	683calAD - 716calAD (39.6%) 743calAD - 766calAD (28.6%)	670calAD - 770calAD (95.4%)
IAAA-132401	$1,200 \pm 20$	86.17 ± 0.21	$1,215 \pm 23$	770calAD - 779calAD (7.3%) 790calAD - 868calAD (60.9%)	716calAD - 743calAD (10.3%) 766calAD - 887calAD (85.1%)
IAAA-132402	$1,260 \pm 20$	85.52 ± 0.23	$1,173 \pm 24$	778calAD - 792calAD (12.5%) 804calAD - 843calAD (29.2%) 859calAD - 890calAD (26.5%)	772calAD - 899calAD (88.2%) 924calAD - 946calAD (7.2%)
IAAA-132403	$1,360 \pm 20$	84.38 ± 0.22	$1,335 \pm 23$	656calAD - 684calAD (68.2%)	649calAD - 710calAD (87.3%) 746calAD - 764calAD (8.1%)
IAAA-132404	$1,260 \pm 20$	85.48 ± 0.25	$1,181 \pm 24$	778calAD - 792calAD (12.7%) 803calAD - 843calAD (32.2%) 858calAD - 886calAD (23.4%)	771calAD - 895calAD (92.4%) 928calAD - 941calAD (3.0%)

参考文献

Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51 (1), 337-360

宮田佳樹, 南雅代, 遠部慎, 坂本稔, 今村峯雄 2009 琵琶湖の淡水リザーバー効果に関する研究, 名古屋大学加速器質量分析計業績報告書, XX, 112-116

Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, *Radiocarbon* 55 (4), 1869-1887

Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, *Radiocarbon* 19 (3), 355-363

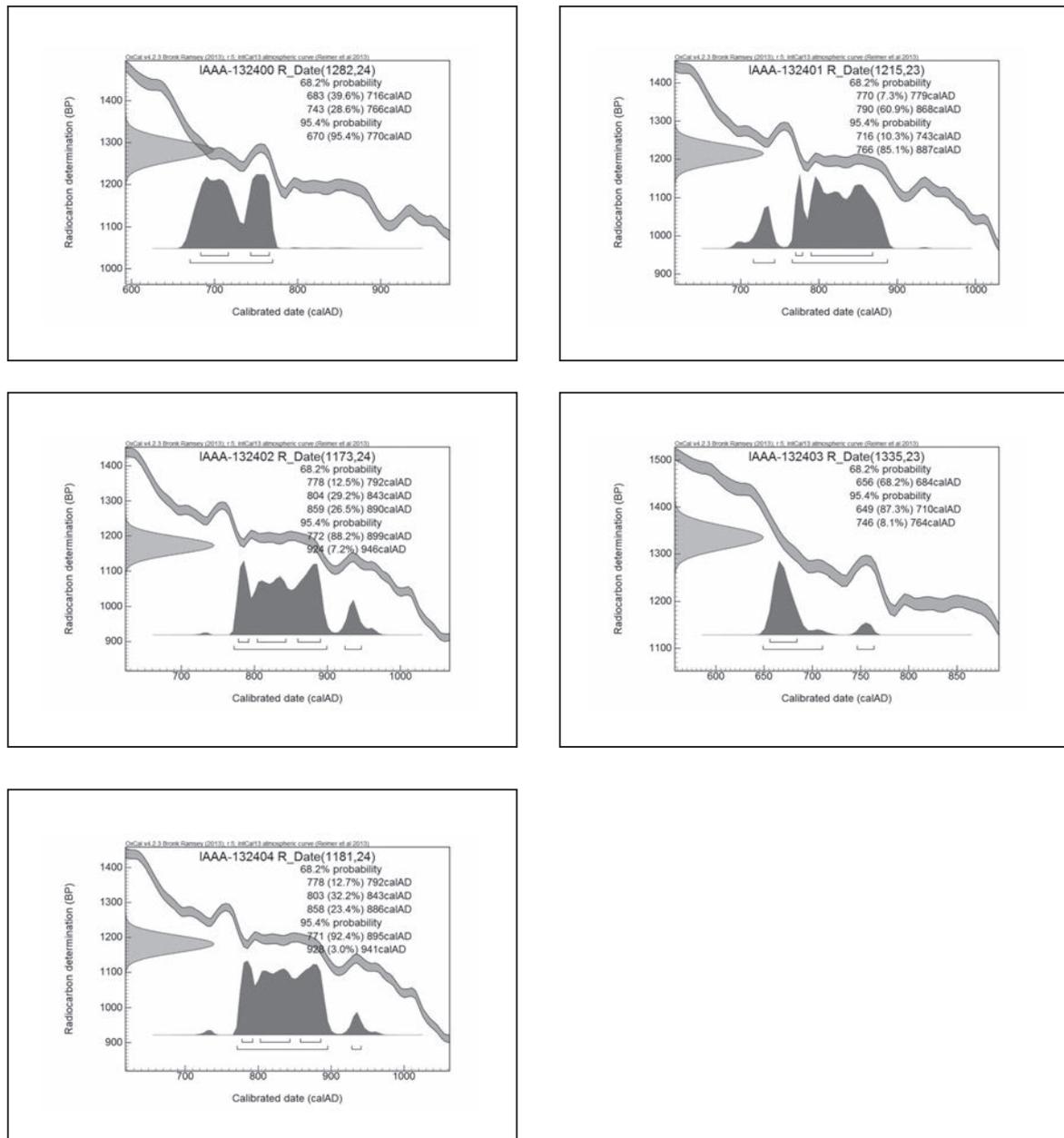


図34 暦年較正年代グラフ

写 真 図 版

第2編 西木流C遺跡（2次）



1 調査区遠景（南から）



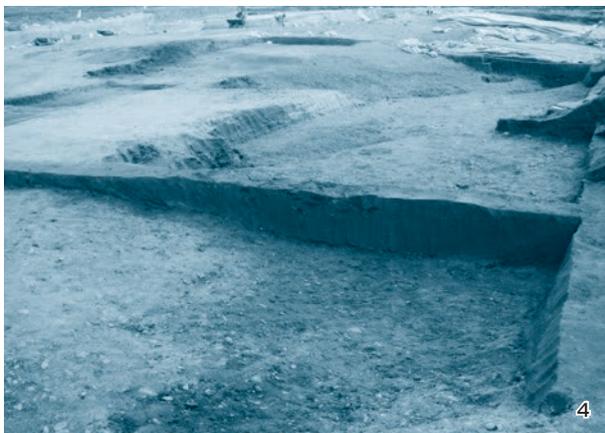
2 調査区全景（真上から）



3 I区全景(真上から)



4 II区全景(真上から)



5 1号流路跡 (1)

1 全景 (南から)
 2 断面A-A' (南から) 3 断面B-B' (北から)
 4 断面C-C' (北西から) 5 断面D-D' (南から)



1



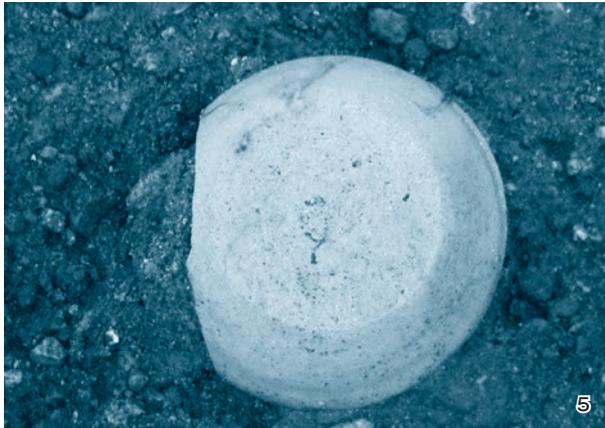
2



3



4



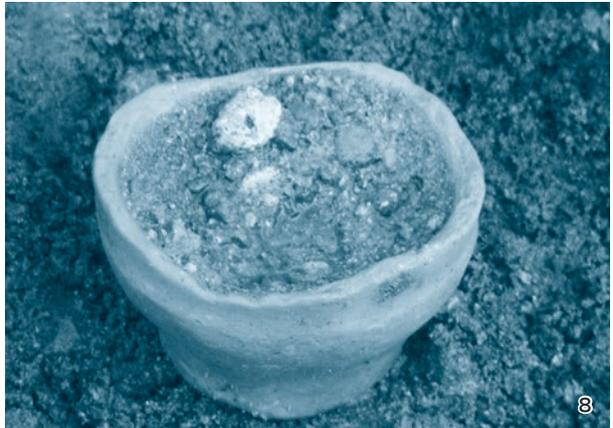
5



6



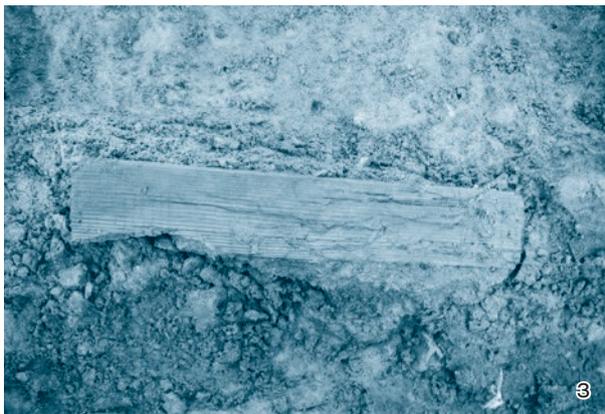
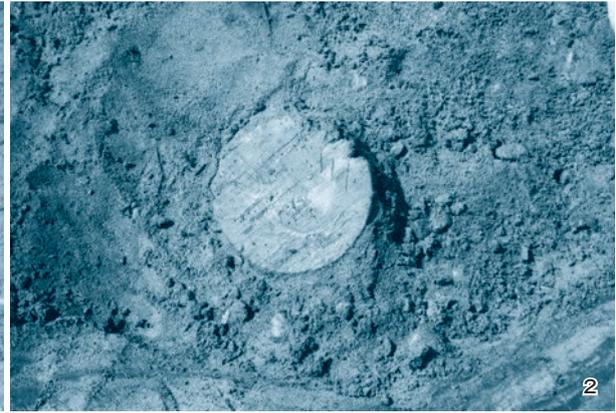
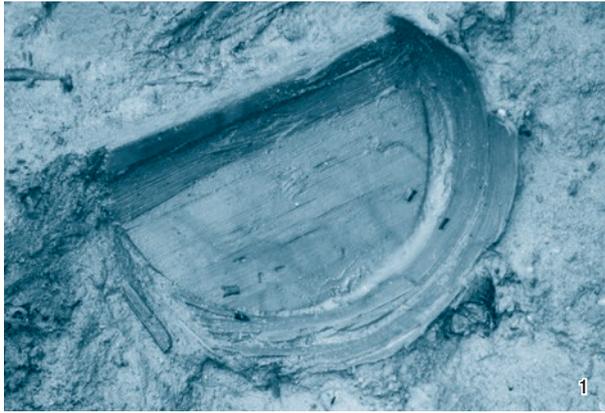
7



8

6 1号流路跡(2)

- 1 断面E-E'西側(南から)
- 2 断面E-E'東側(南から)
- 3 断面F-F'(西から)
- 4 遺物出土状況(西から)
- 5 遺物出土状況(南から)
- 6 遺物出土状況(南から)
- 7 遺物出土状況(東から)
- 8 遺物出土状況(南から)



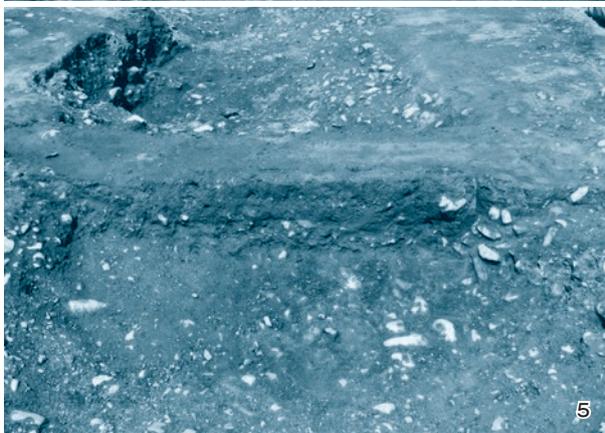
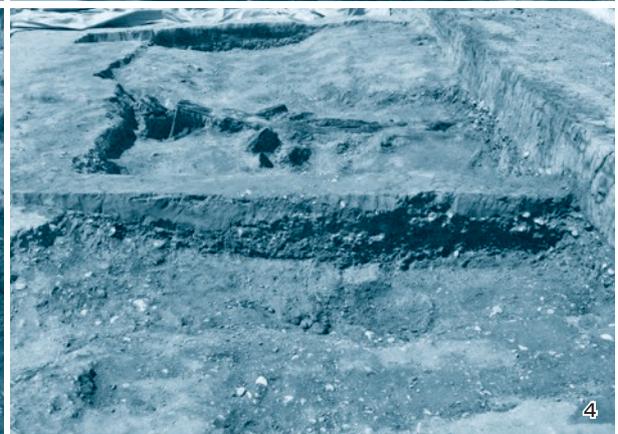
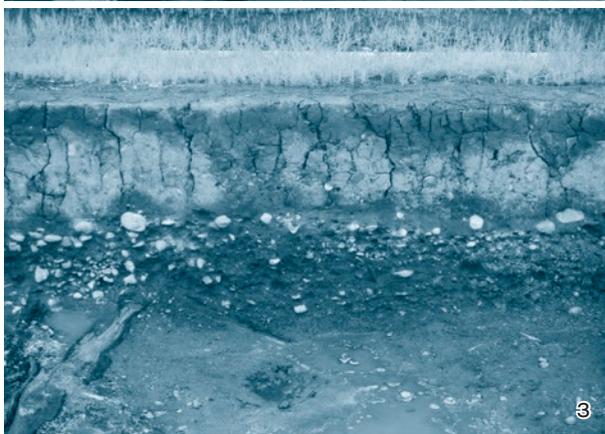
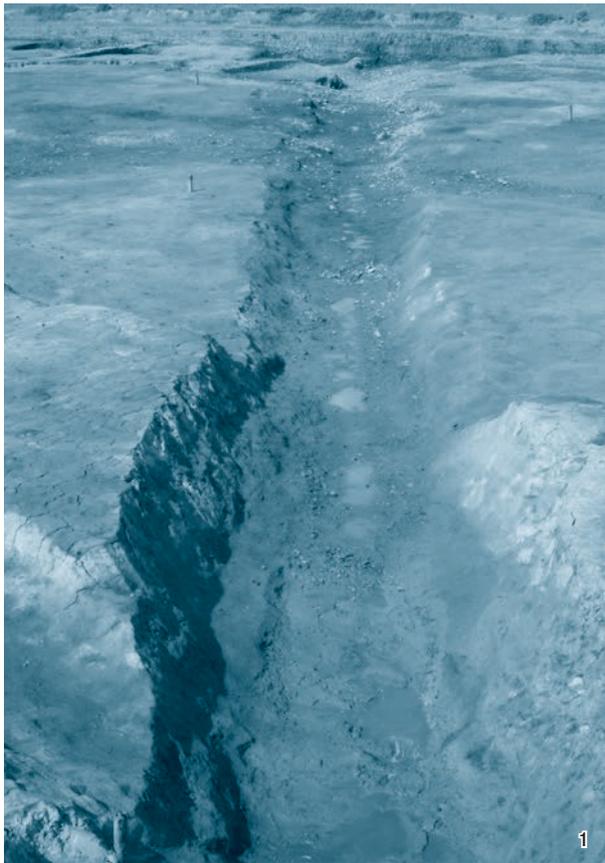
7 1号流路跡 (3)

1 遺物出土状況 (北から) 2 遺物出土状況 (北から)
3 遺物出土状況 (西から) 4 遺物出土状況 (北から)



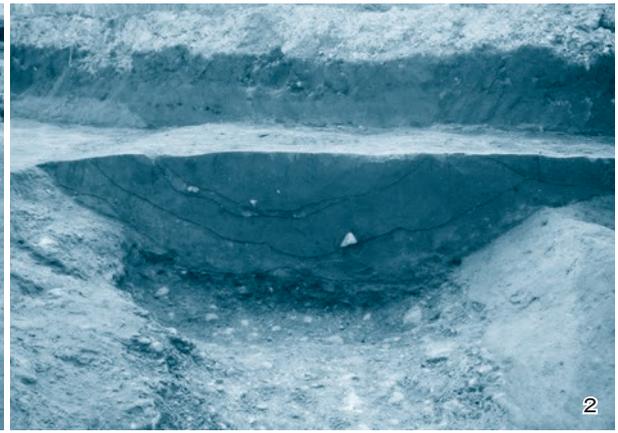
8 5号溝跡

1 全景 (南から) 2 検出 (南から)
3 断面 (南から)



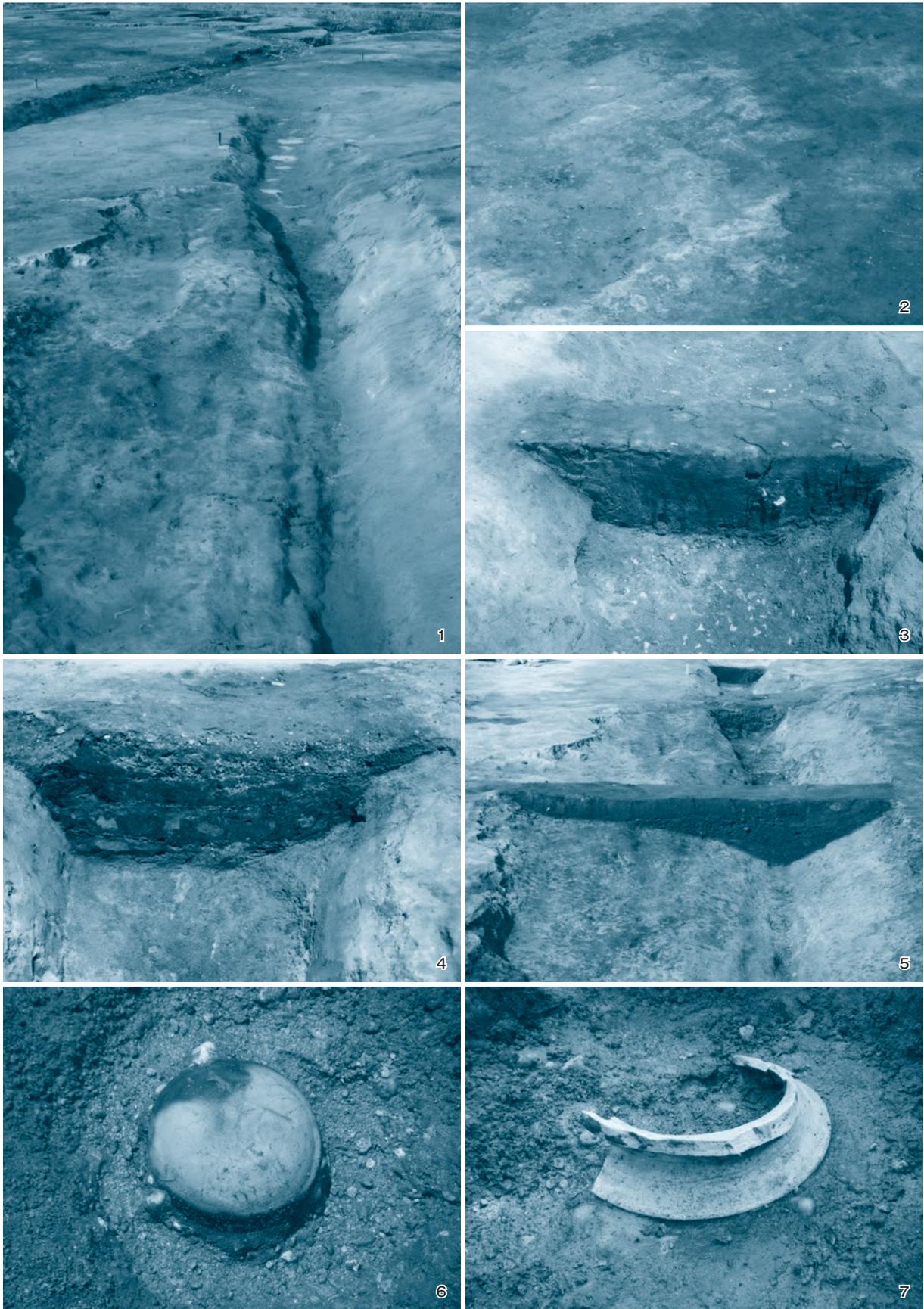
9 14号溝跡(1)

1 全景(南西から) 2 検出(南西から)
3 断面A-A'(西から) 4 断面B-B'(南から)
5 断面C-C'(南西から) 6 断面D-D'(南西から)



10 14号溝跡 (2)

- | | |
|--------------------|-------------------|
| 1 断面 E - E' (南西から) | 2 断面 F - F' (東から) |
| 3 遺物出土状況 (西から) | 4 遺物出土状況 (北から) |
| 5 遺物出土状況 (南から) | 6 遺物出土状況 (北から) |
| 7 遺物出土状況 (西から) | 8 遺物出土状況 (東から) |



11 15号溝跡

- 1 全景 (南西から)
- 2 検出 (南西から)
- 3 断面 A - A' (南西から)
- 4 断面 B - B' (南西から)
- 5 断面 C - C' (南西から)
- 6 遺物出土状況 (北から)
- 7 遺物出土状況 (北から)



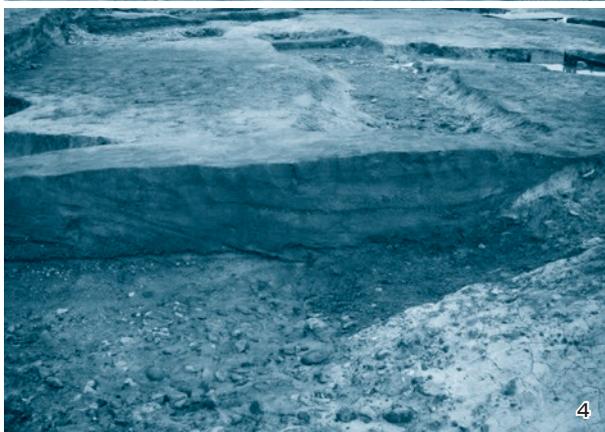
1



2



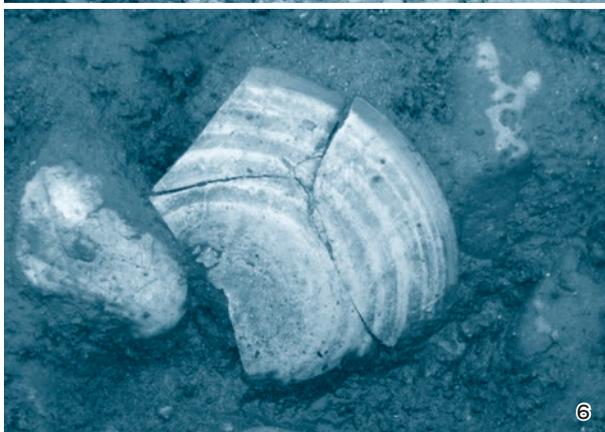
3



4



5



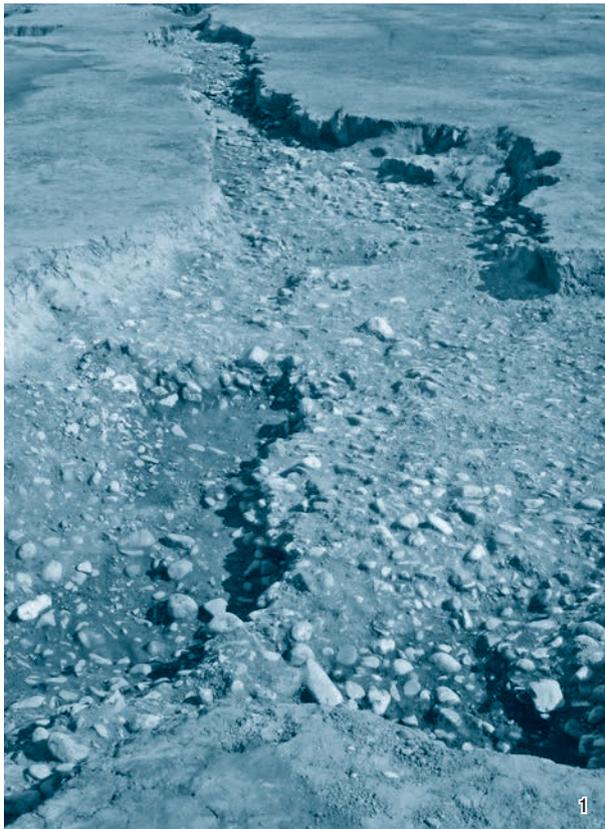
6



7

12 16号溝跡

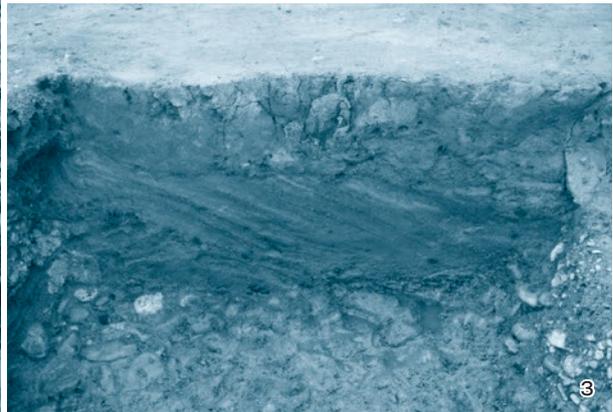
- 1 全景 (南から)
- 2 検出 (南から)
- 3 断面 A - A' (南から)
- 4 断面 B - B' (北から)
- 5 断面 C - C' (南から)
- 6 遺物検出状況 (西から)
- 7 全景 (南から)



13 17号溝跡



2



3

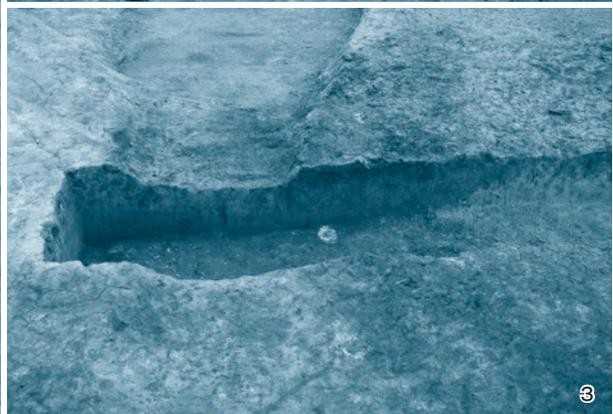
1 全景 (北から) 2 検出 (南から)
3 断面 (南から)



14 18号溝跡



2



3

1 全景 (南から) 2 断面 A - A' (南西から)
3 断面 B - B' (南西から)



1



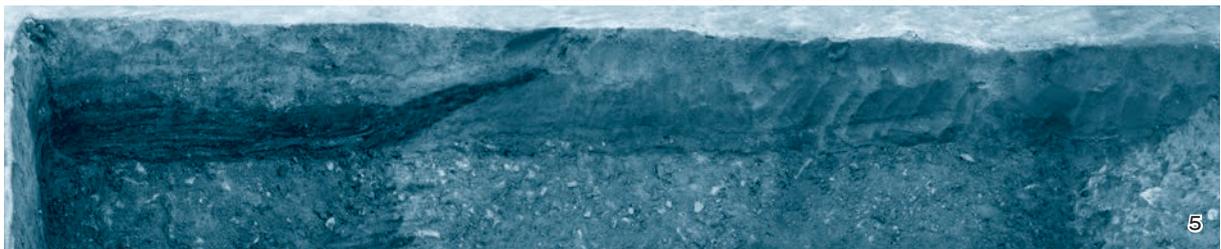
2



3



4



5

15 19号溝跡

- 1 全景 (北から)
- 2 断面 ST1 (南から)
- 3 断面 ST2 (南から)
- 4 断面 ST3 (南西から)
- 5 断面 ST4 (南西から)



16 20号溝跡



2 検出 (北から)



3 断面 (東から)



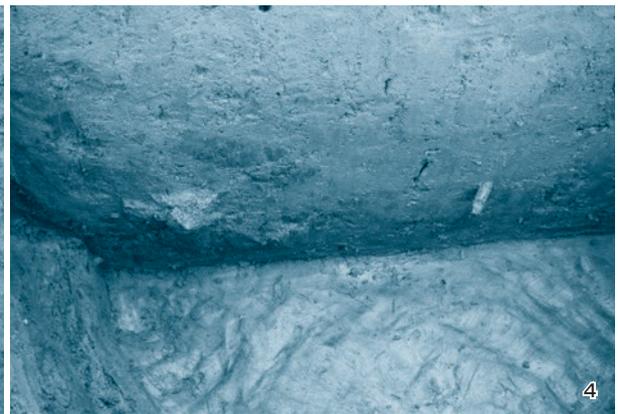
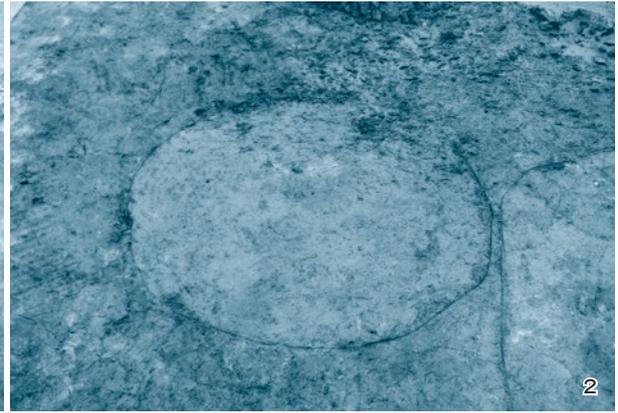
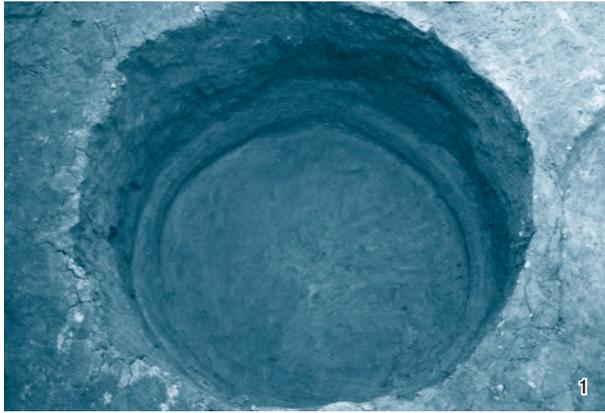
17 21号溝跡

断面A-A' (南から)



18 22号溝跡

断面 (西から)

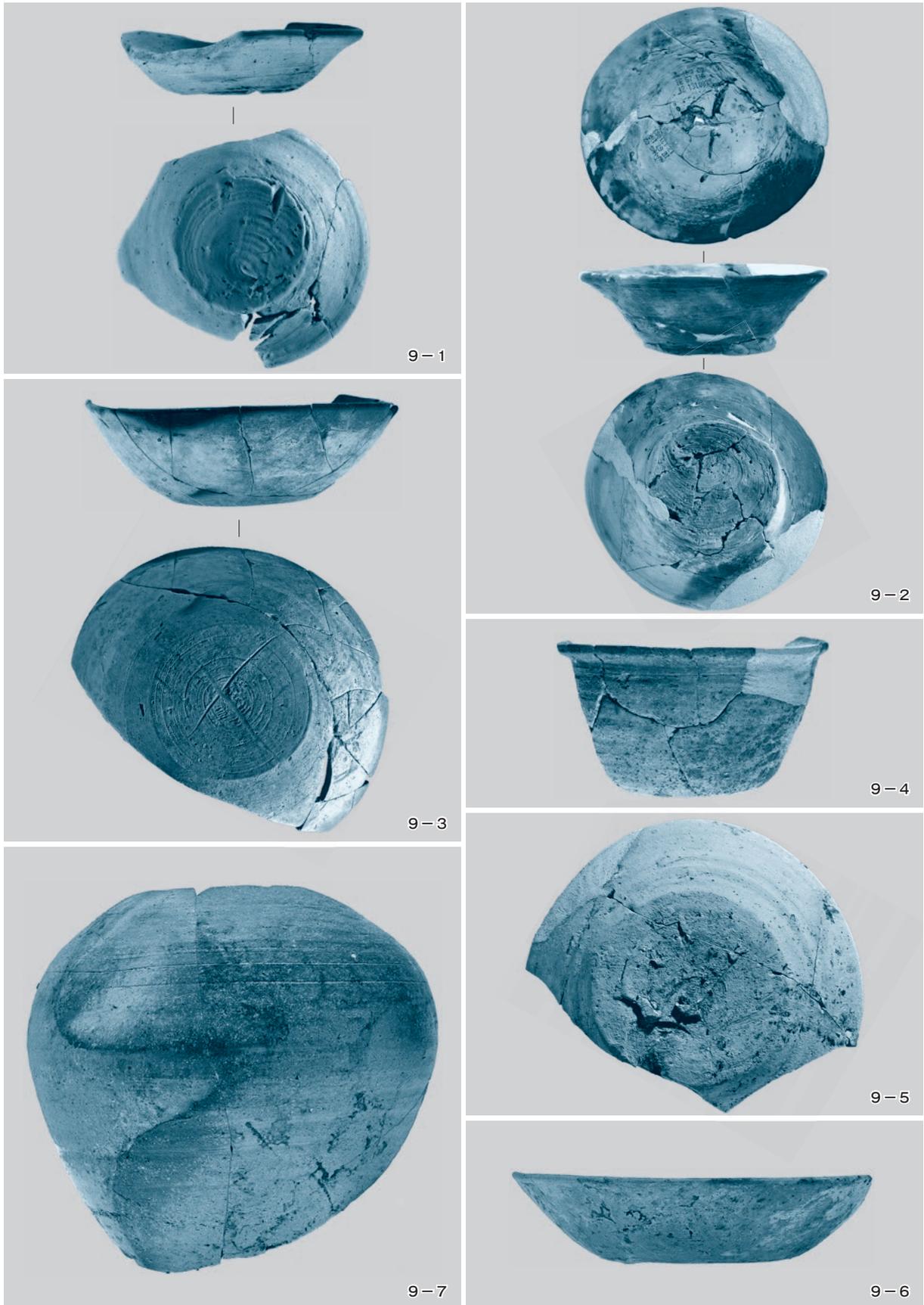


19 3号土坑

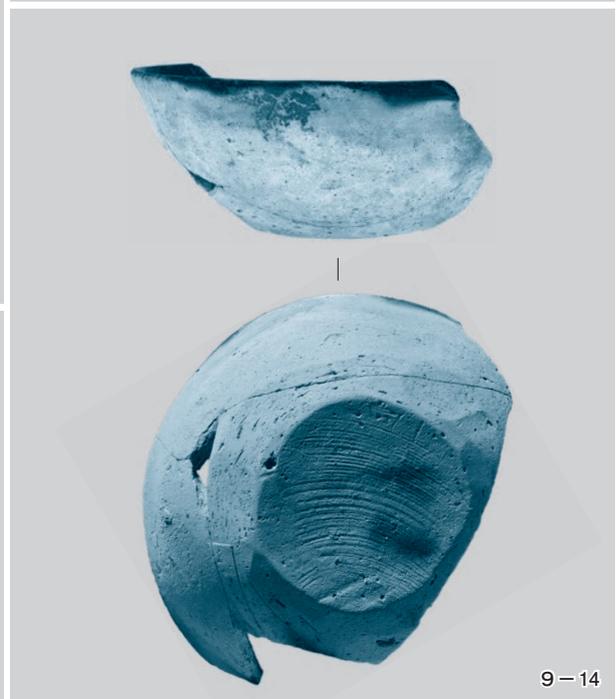
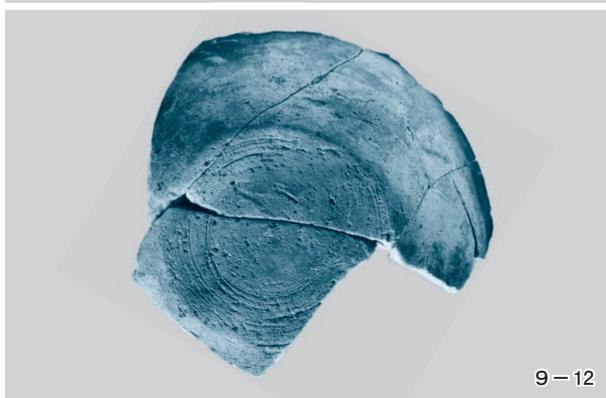
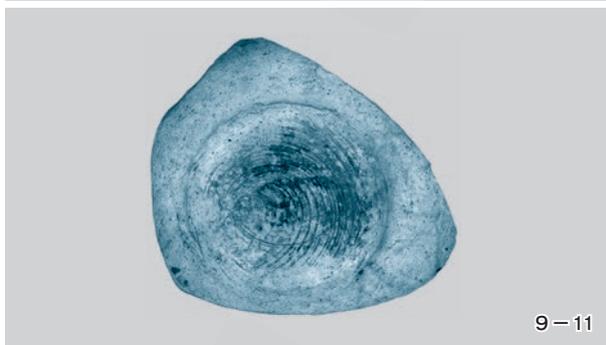
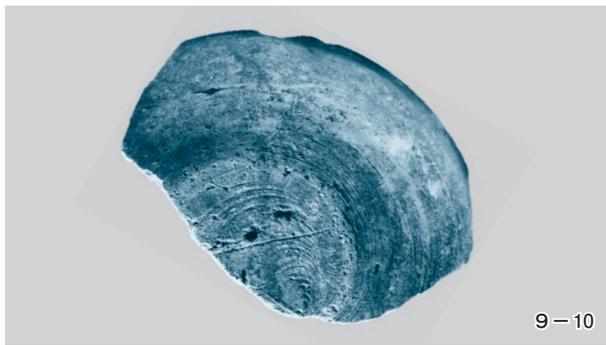
1 全景 (東から) 2 検出 (東から)
3 断面 (南から) 4 断面 (南から)



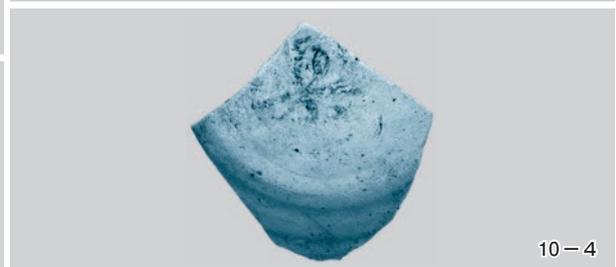
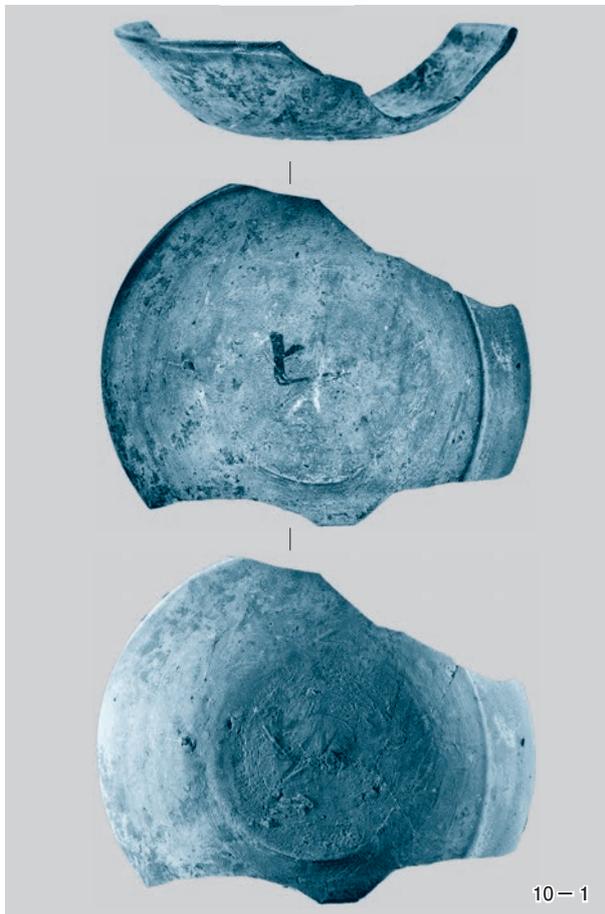
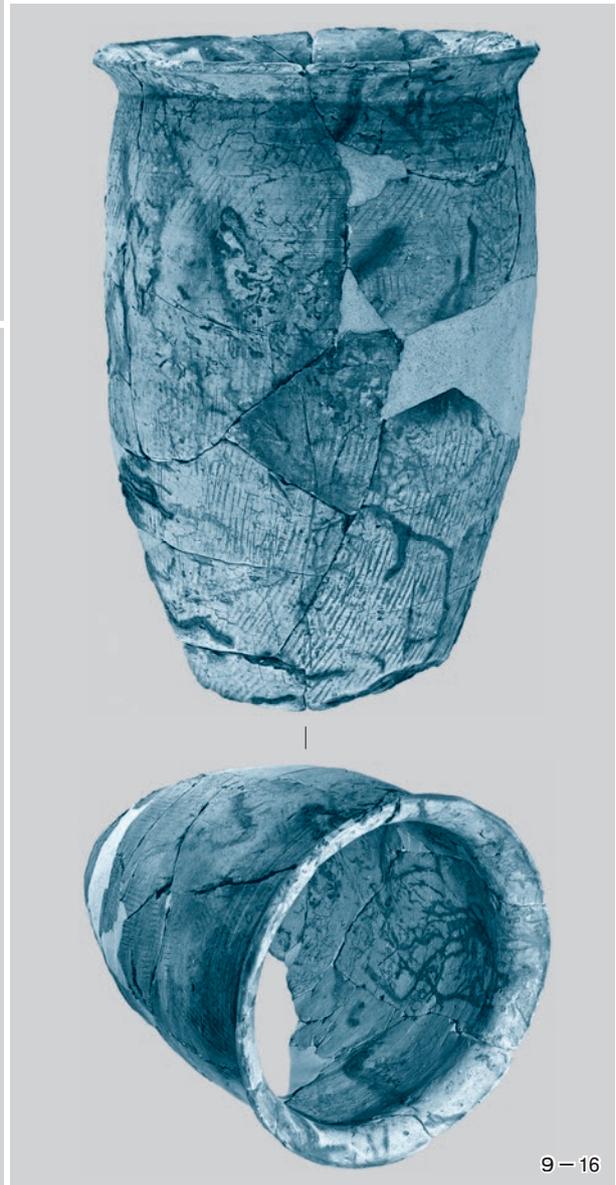
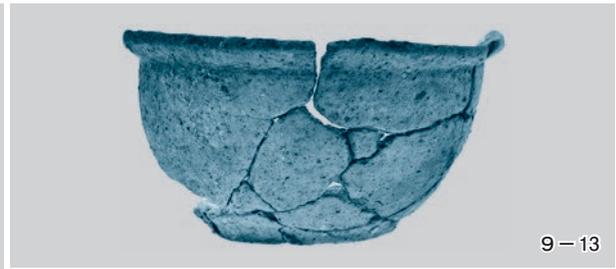
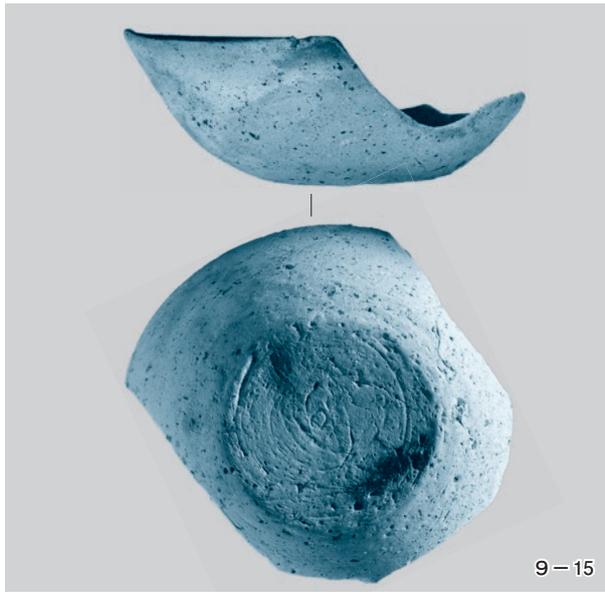
20 作業風景



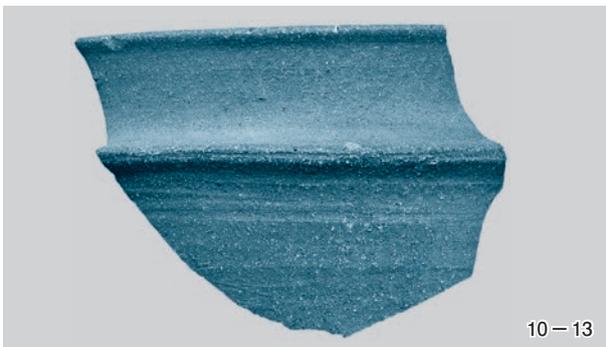
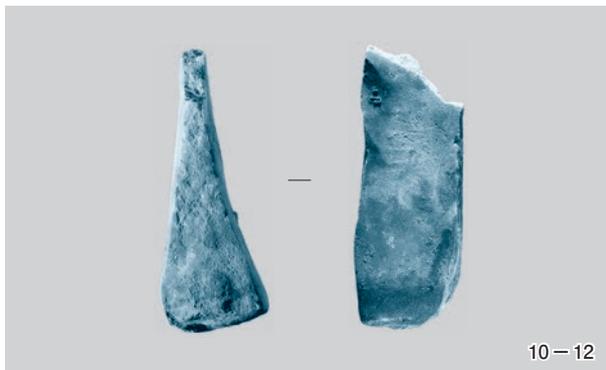
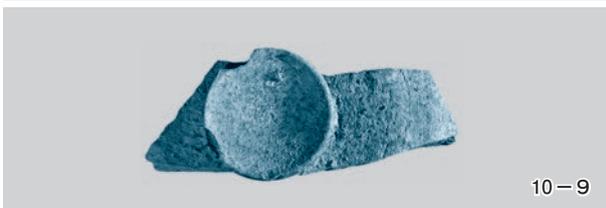
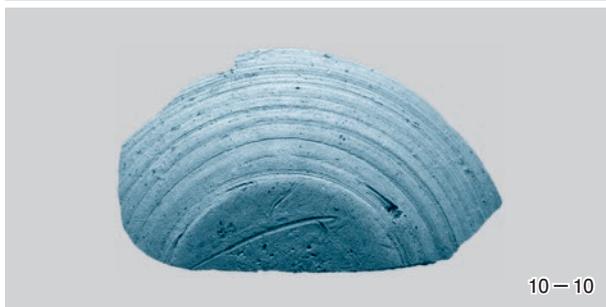
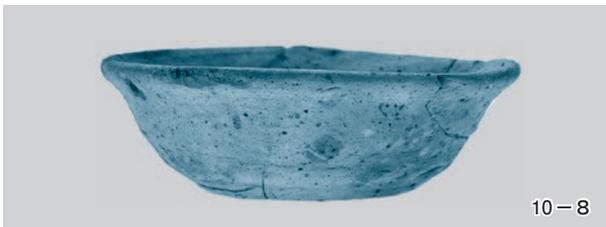
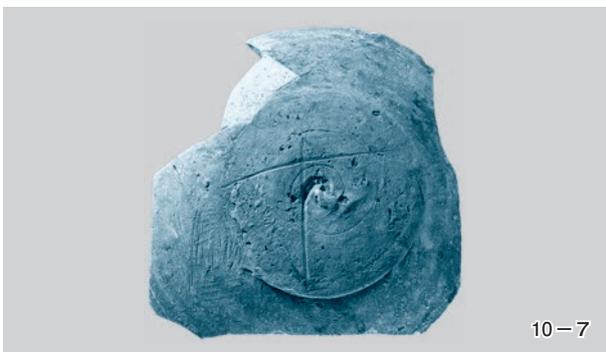
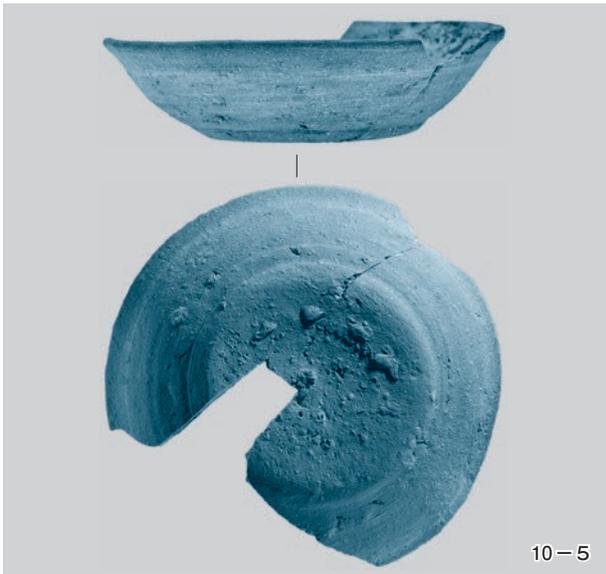
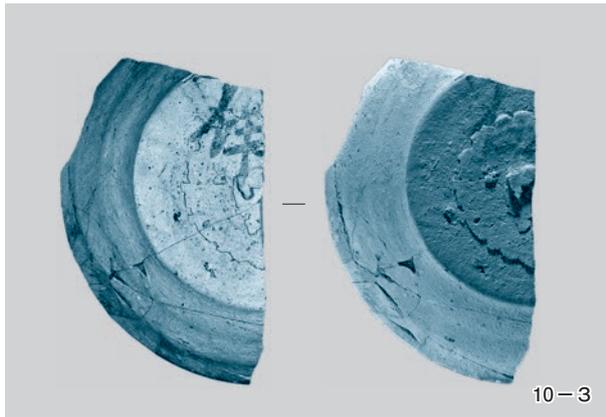
21 1号流路跡出土遺物(1)



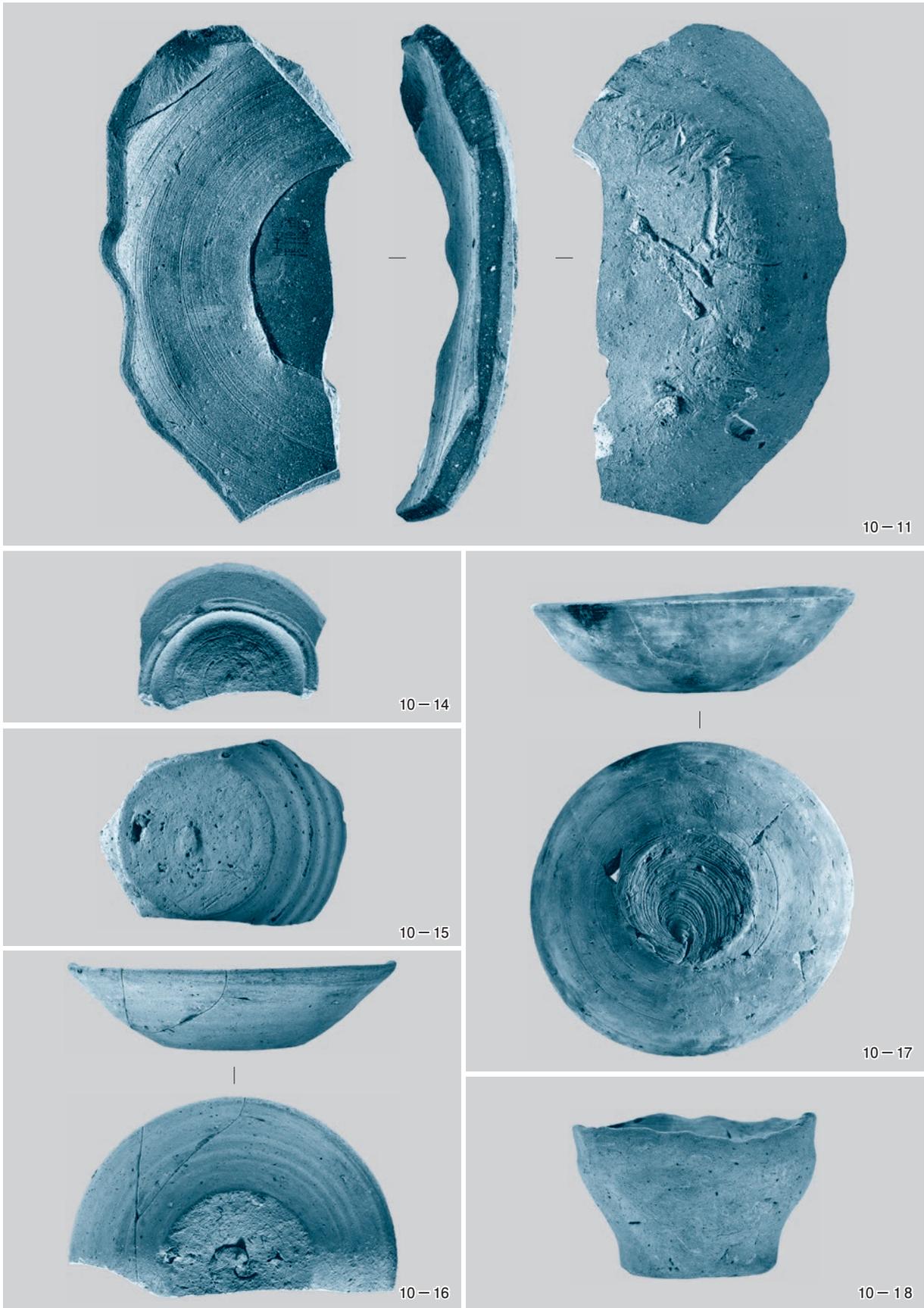
22 1号流路跡出土遺物(2)



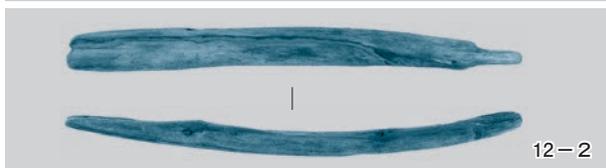
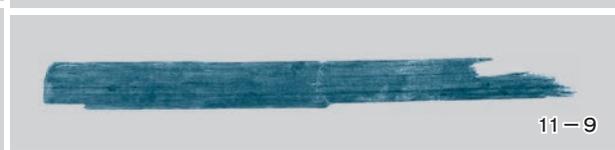
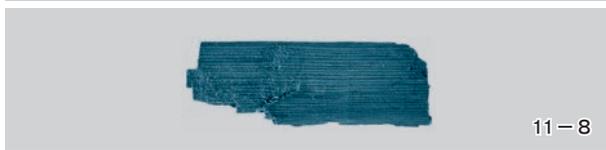
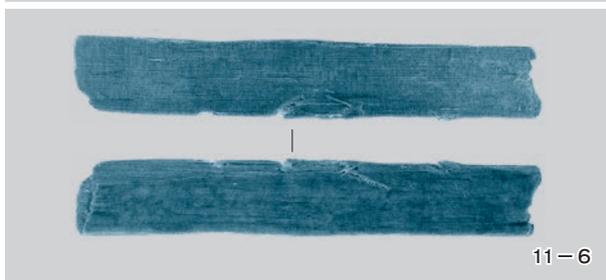
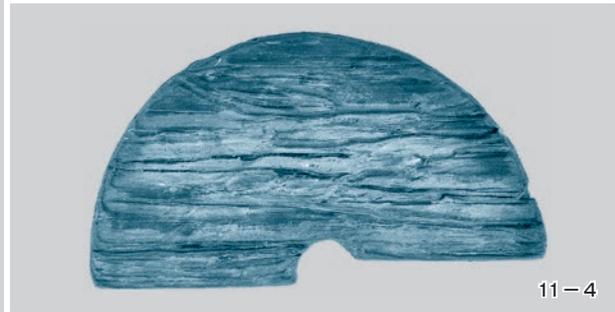
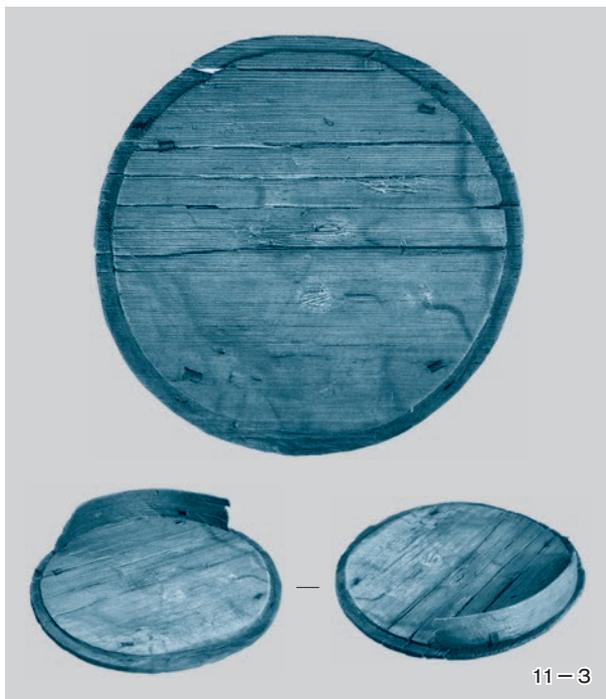
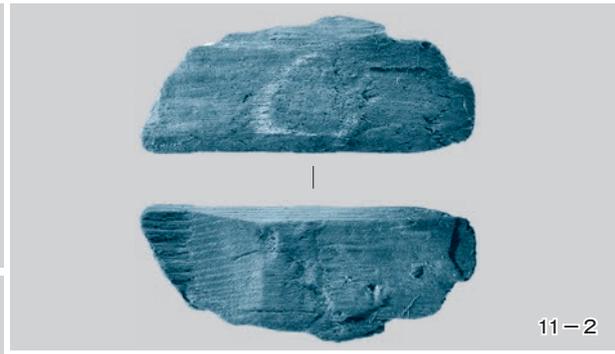
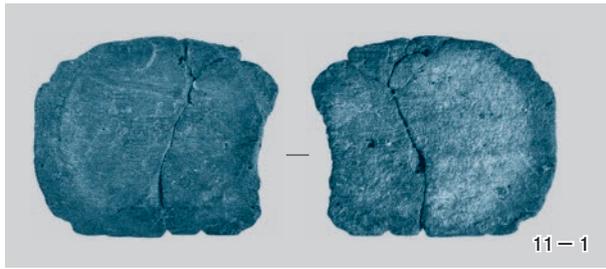
23 1号流路跡出土遺物(3)



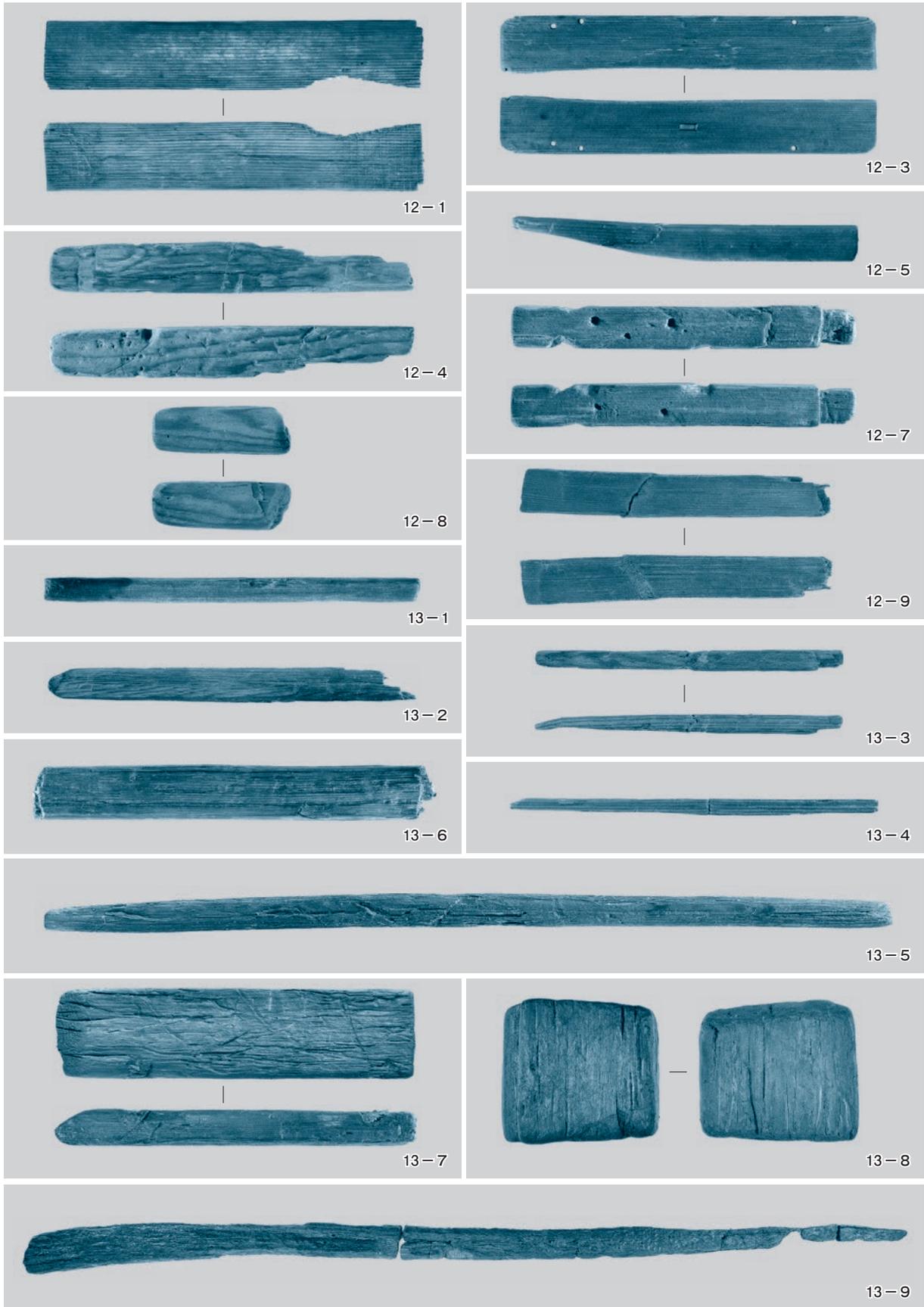
24 1号流路跡出土遺物(4)



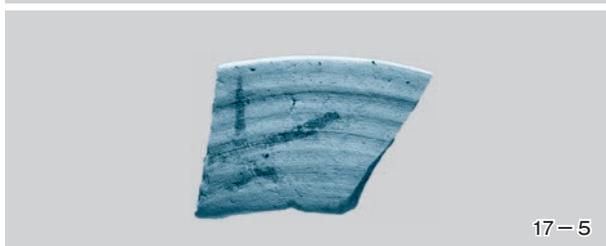
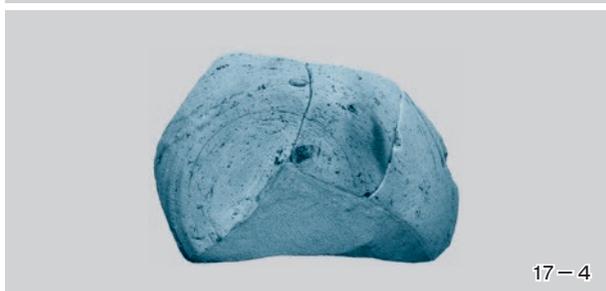
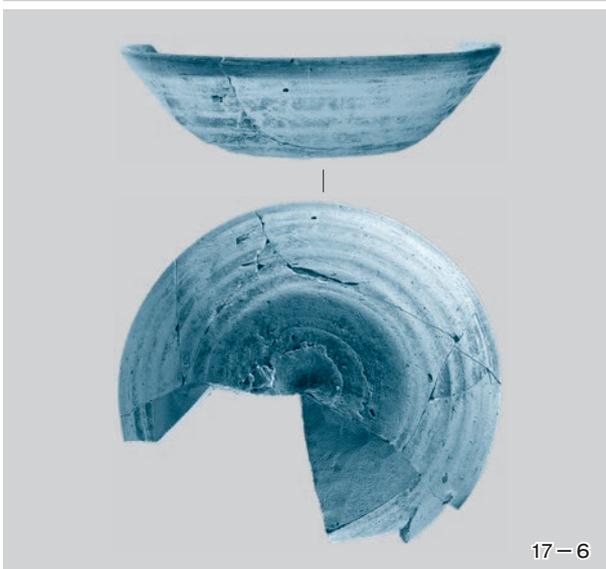
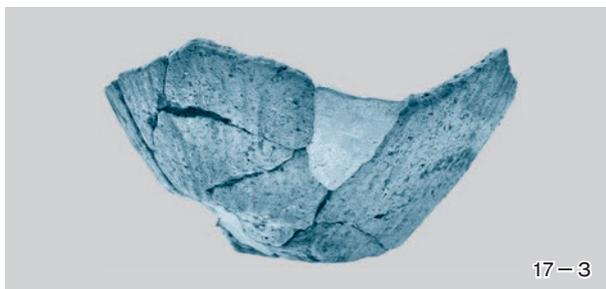
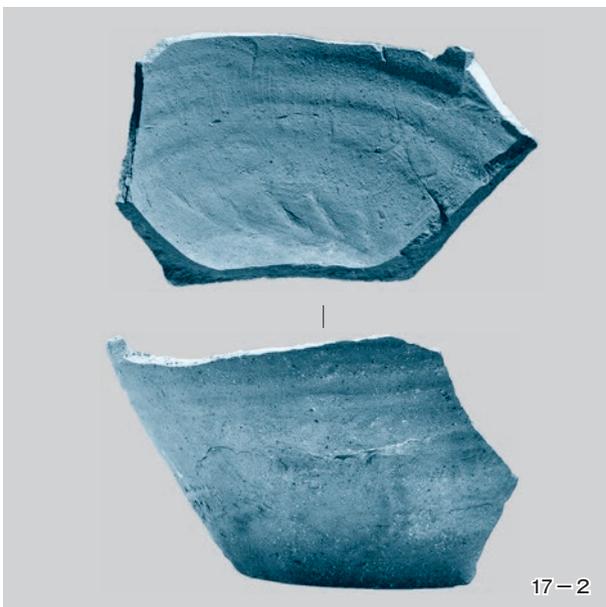
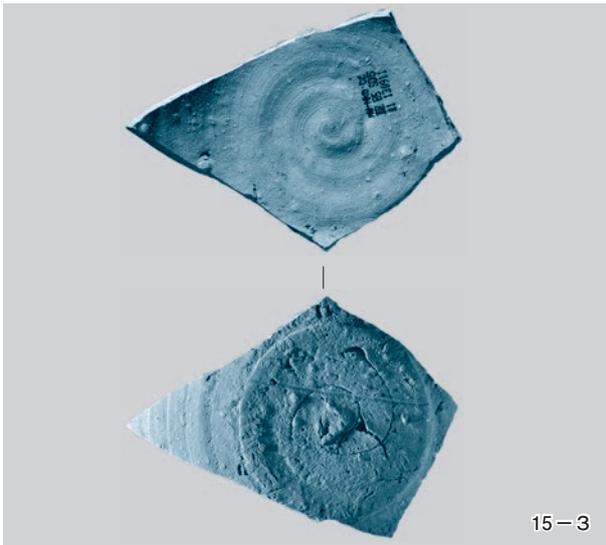
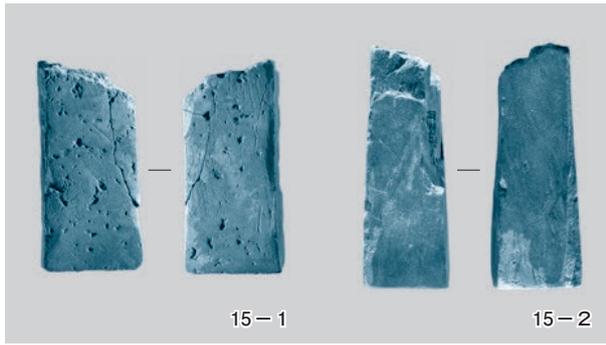
25 1号流路跡出土遺物(5)



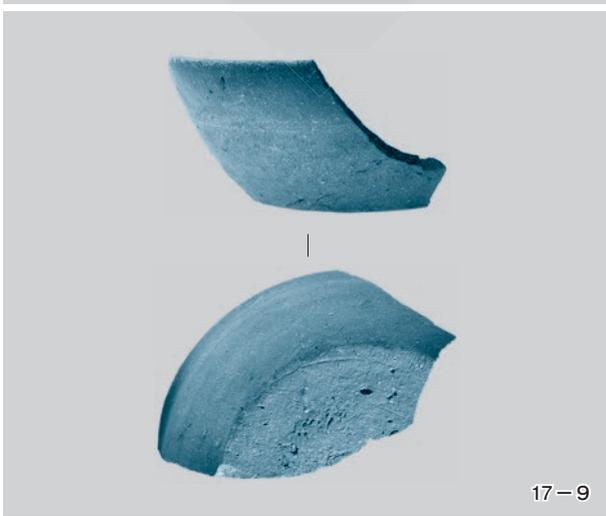
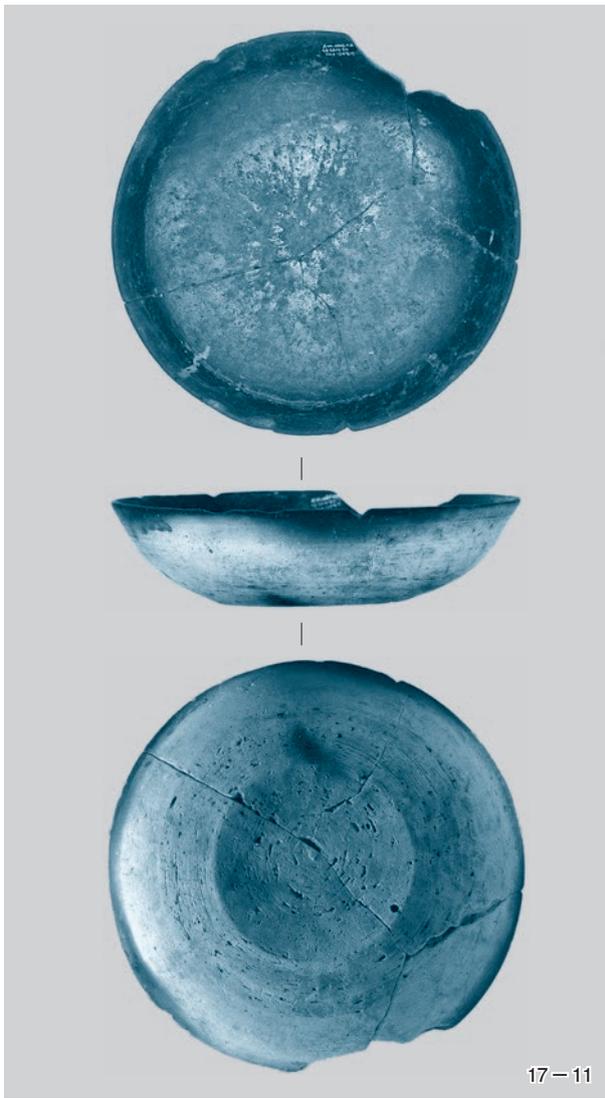
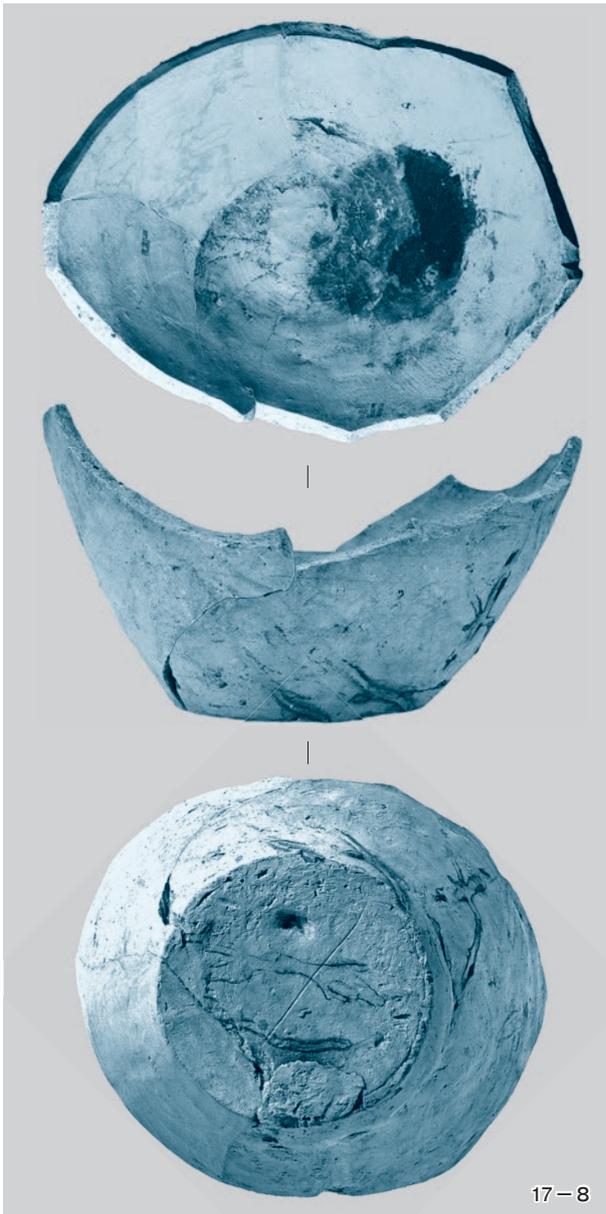
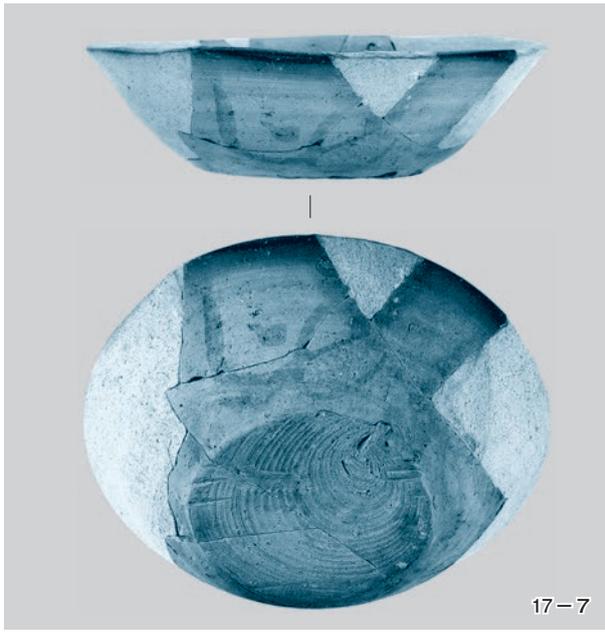
26 1号流路跡出土遺物(6) 木器①



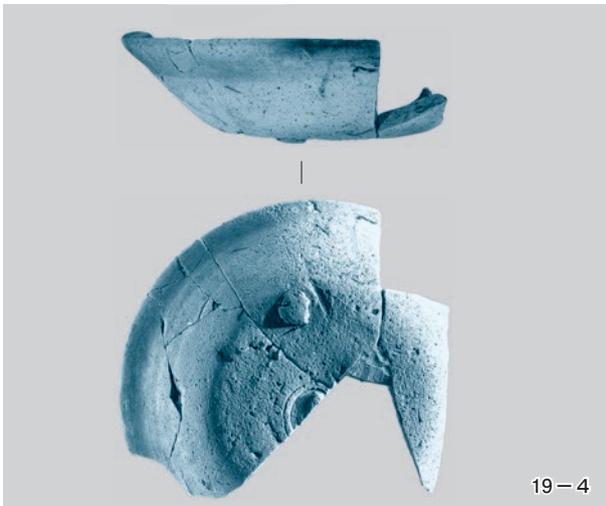
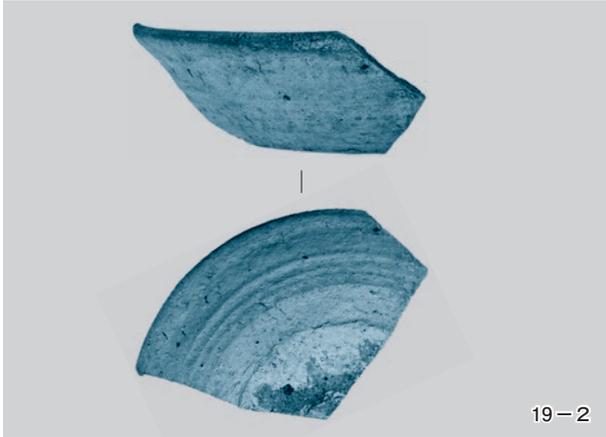
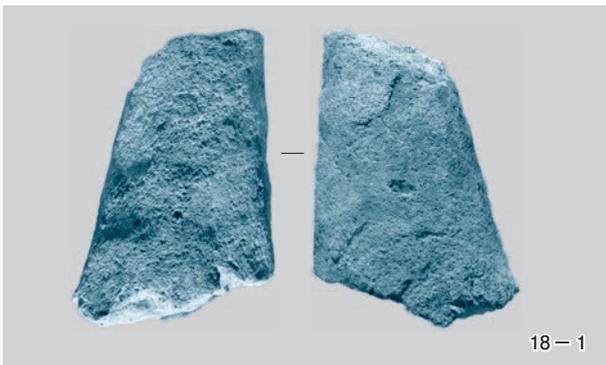
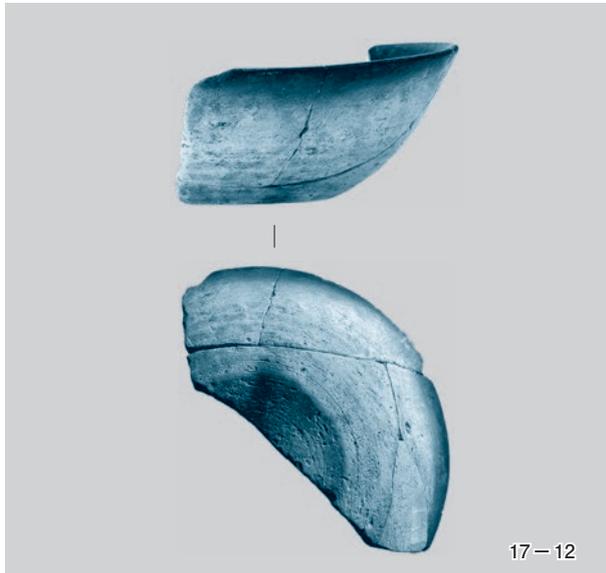
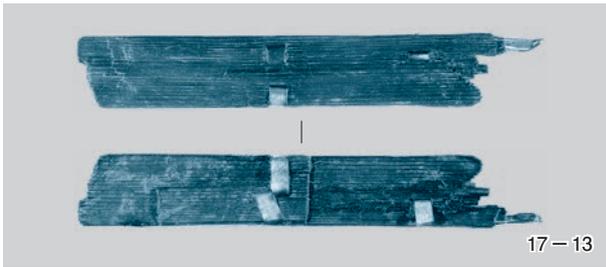
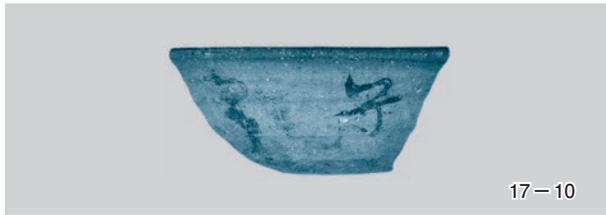
27 1号流路跡出土遺物(7) 木器②



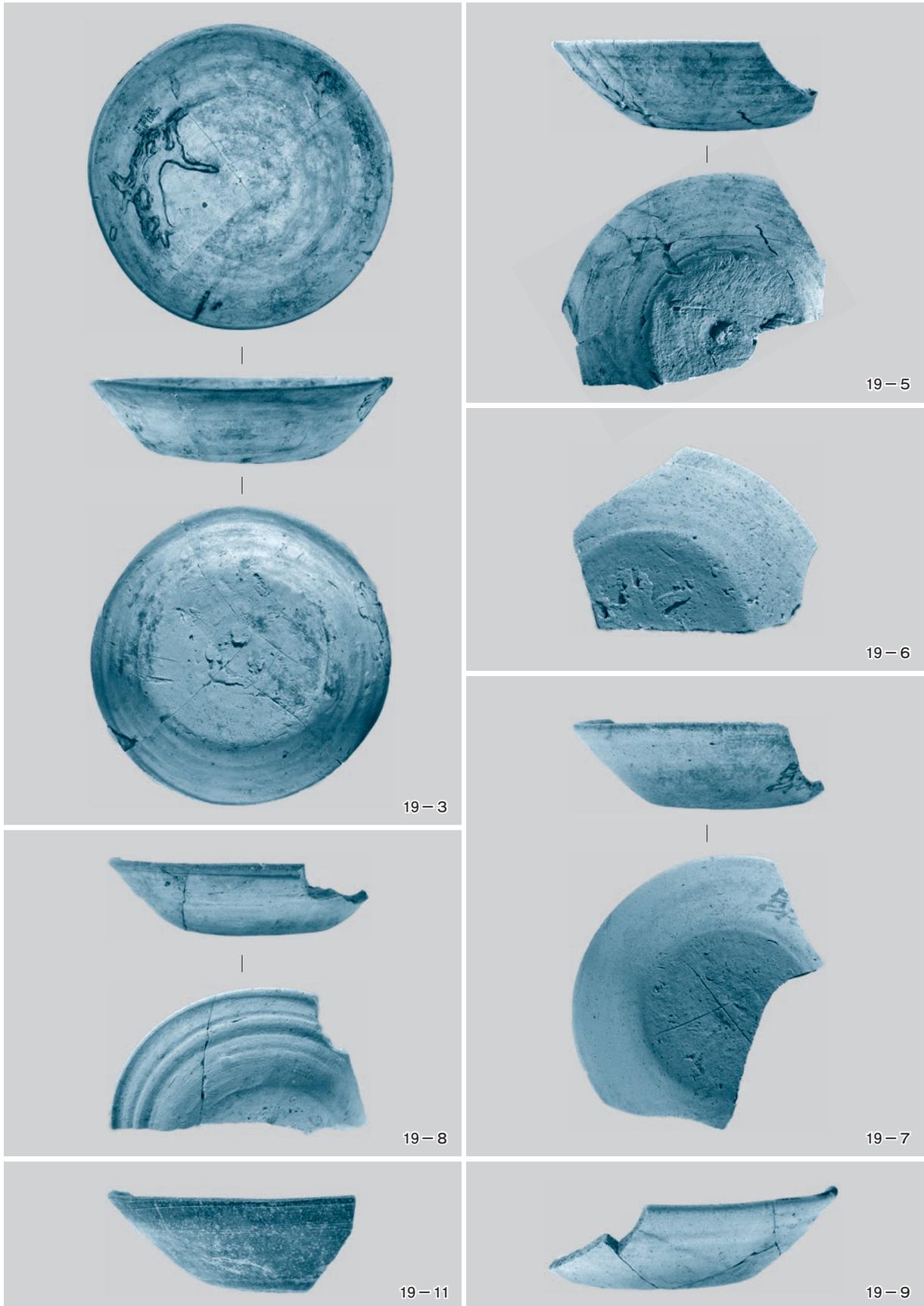
28 4·5号沟迹出土遺物, 14号沟迹出土遺物 (1)



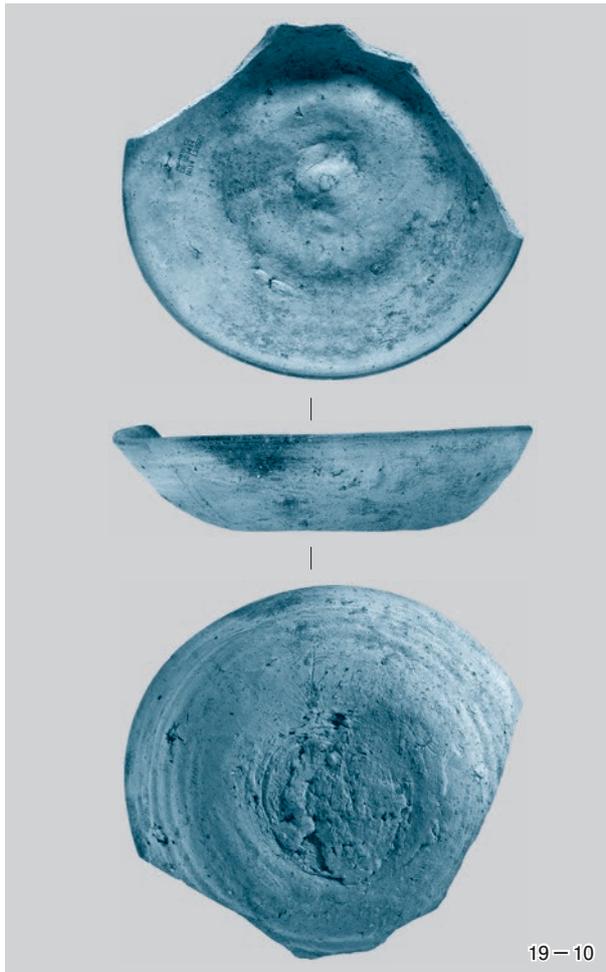
29 14号溝跡出土遺物(2)



30 14号溝跡出土遺物 (3)



31 14号溝跡出土遺物(4)



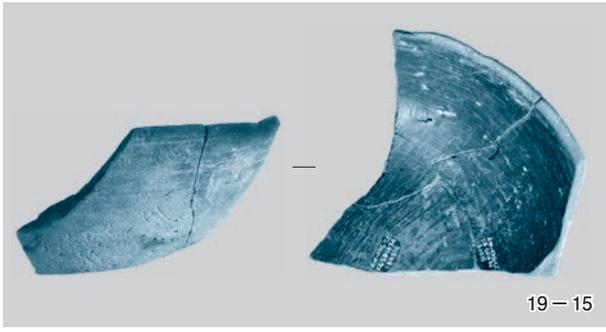
19-10



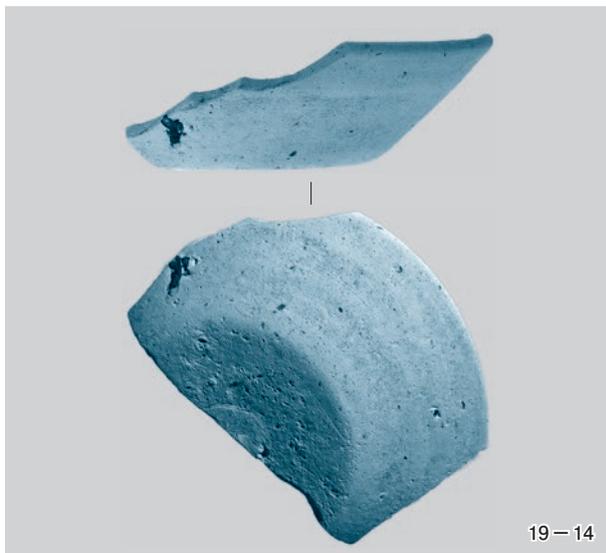
19-13



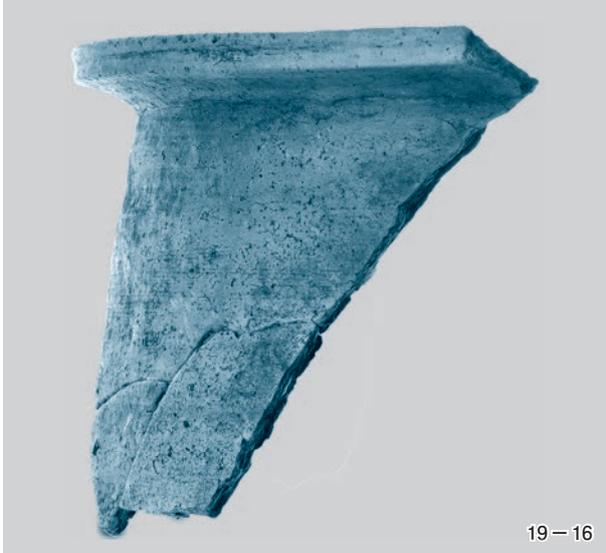
19-12



19-15

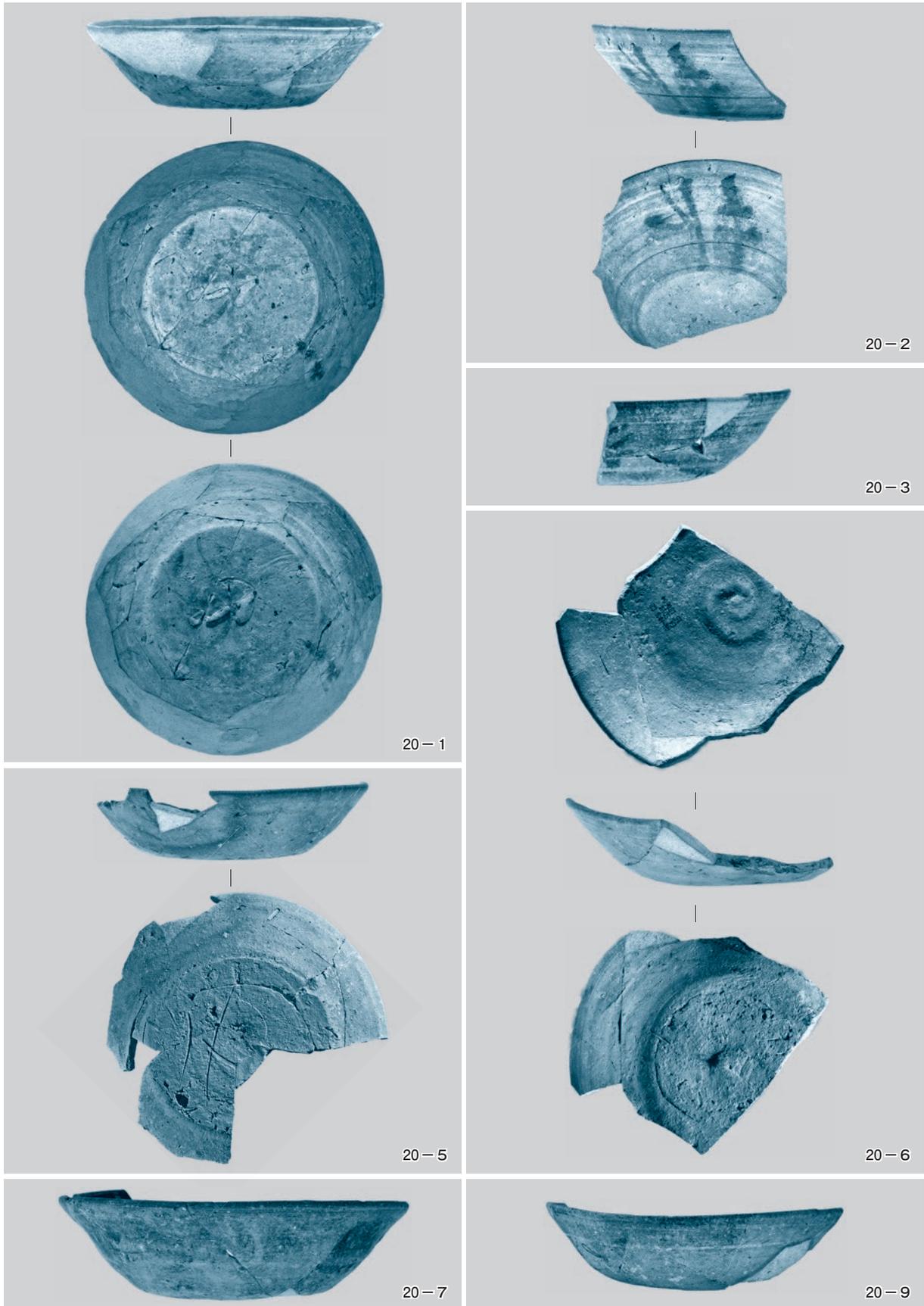


19-14

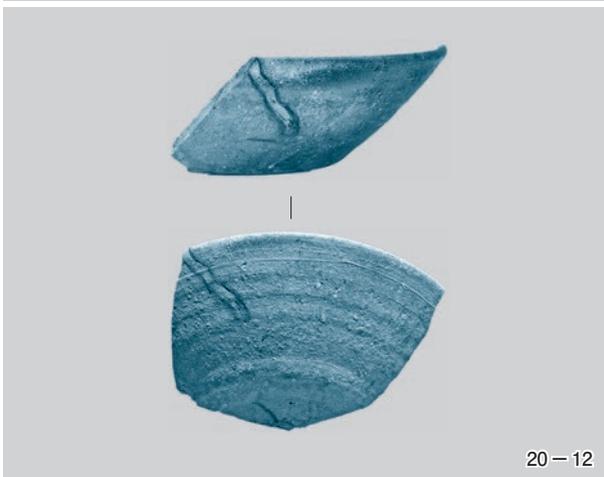
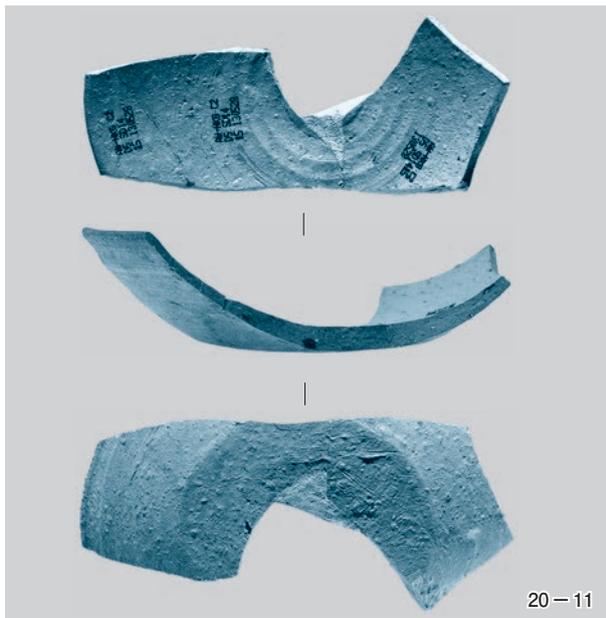
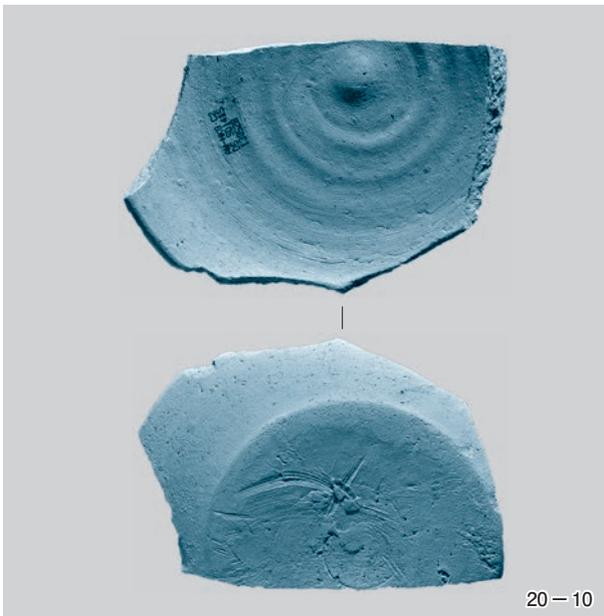
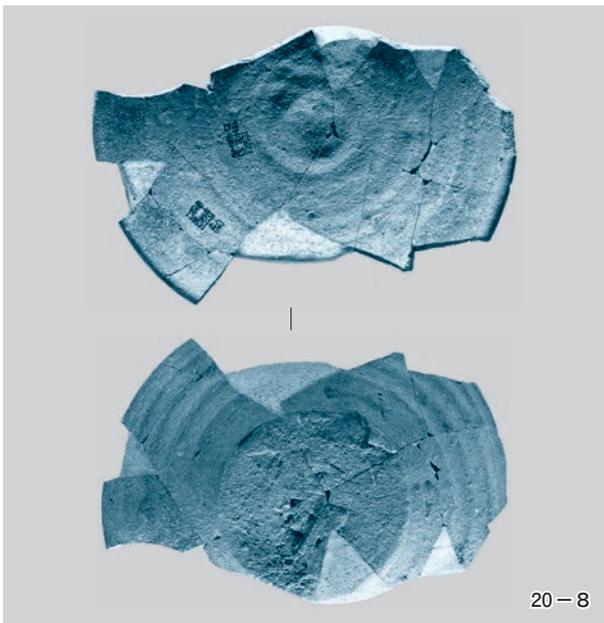
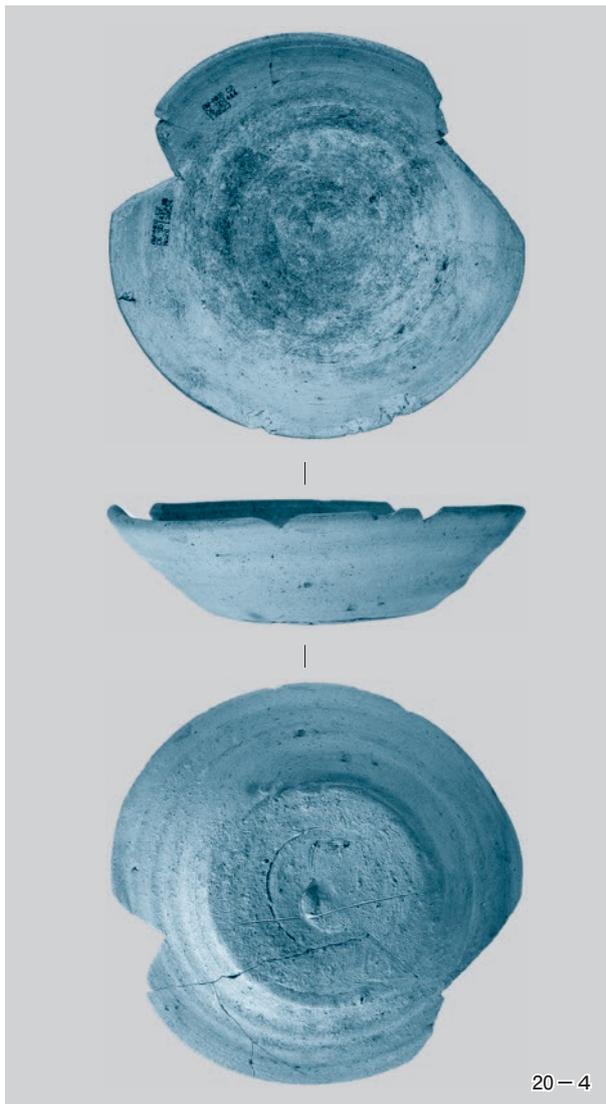


19-16

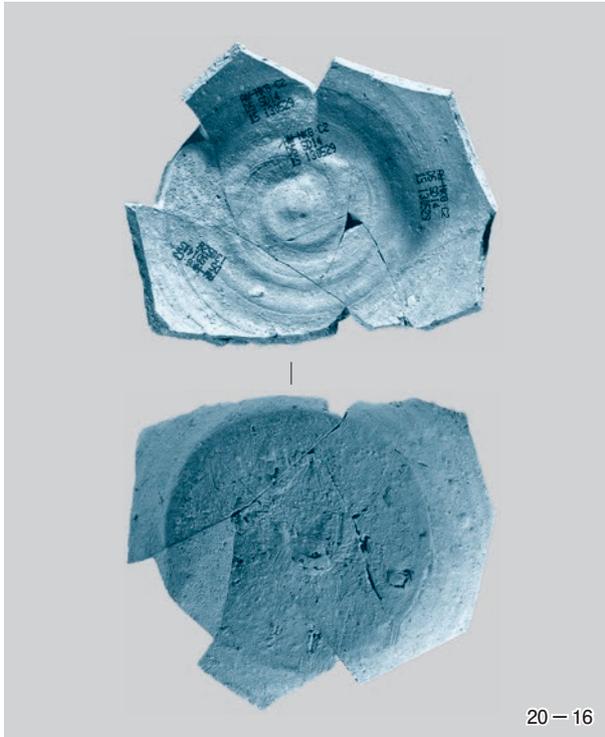
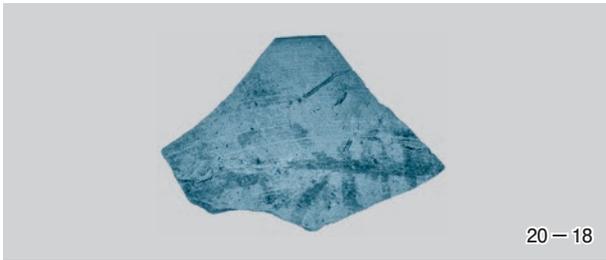
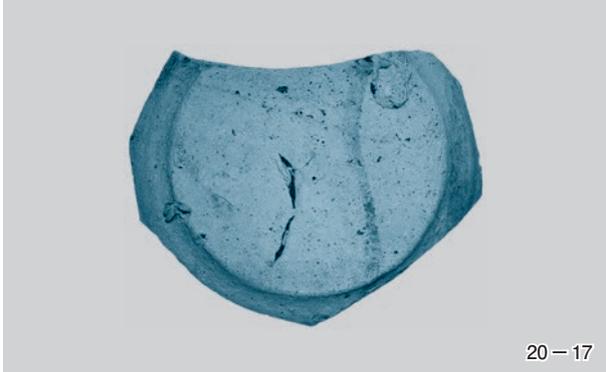
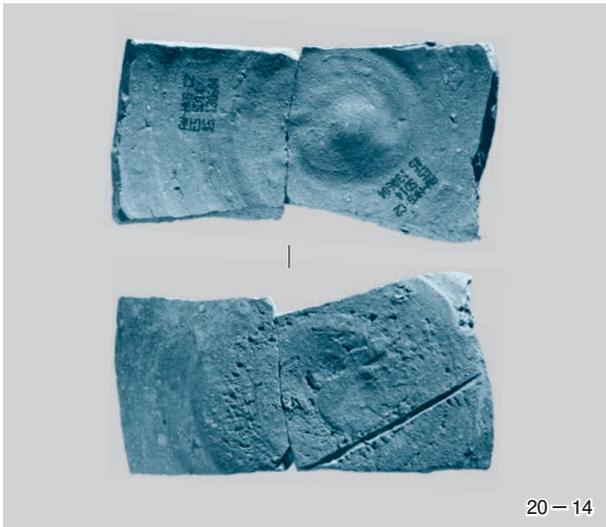
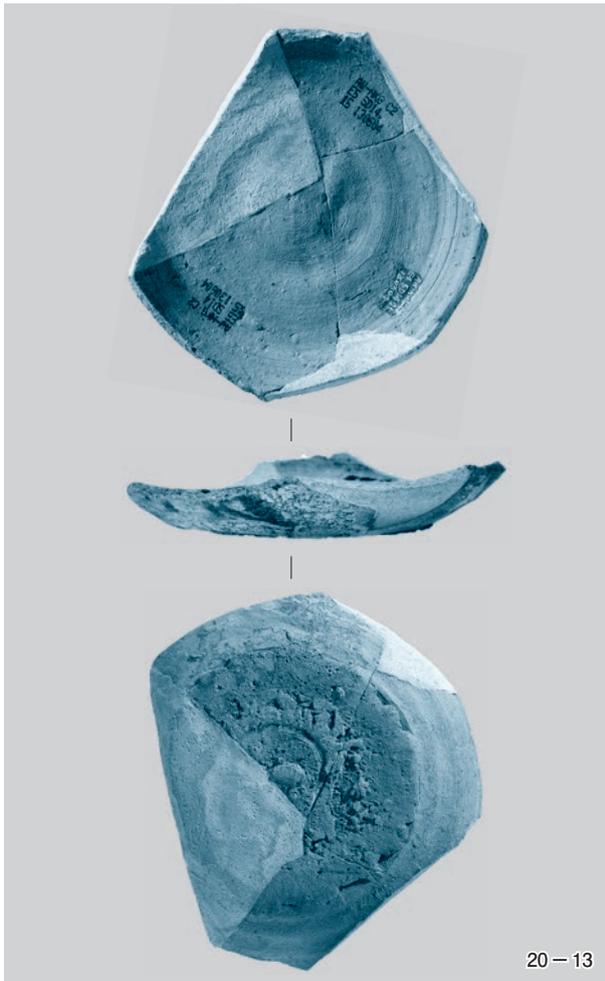
32 14号溝跡出土遺物 (5)



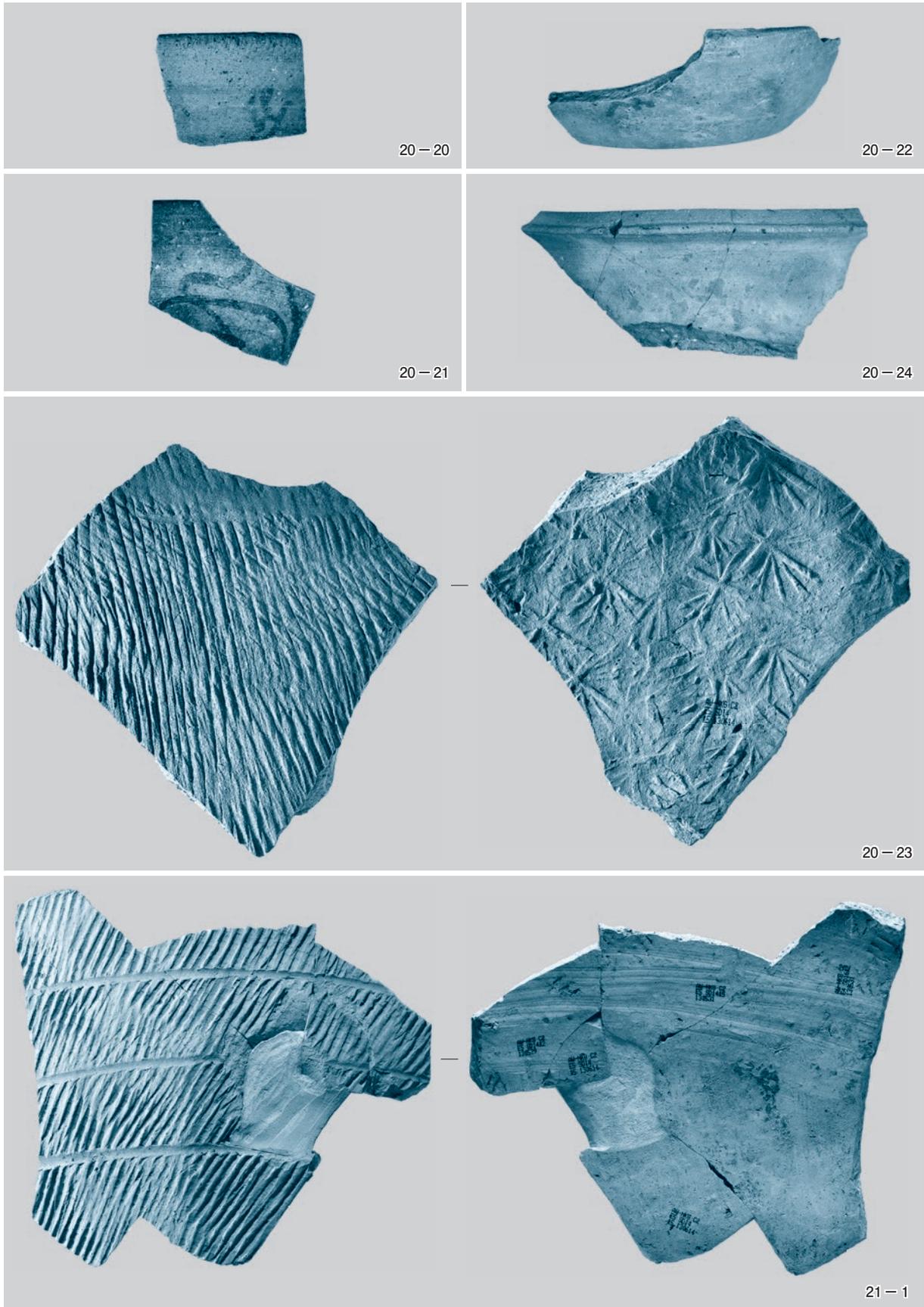
33 14号溝跡出土遺物(6)



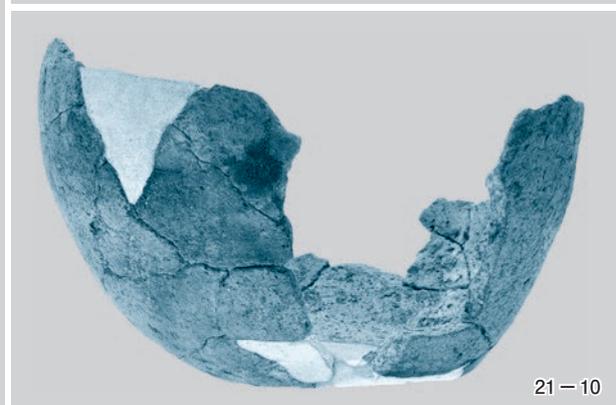
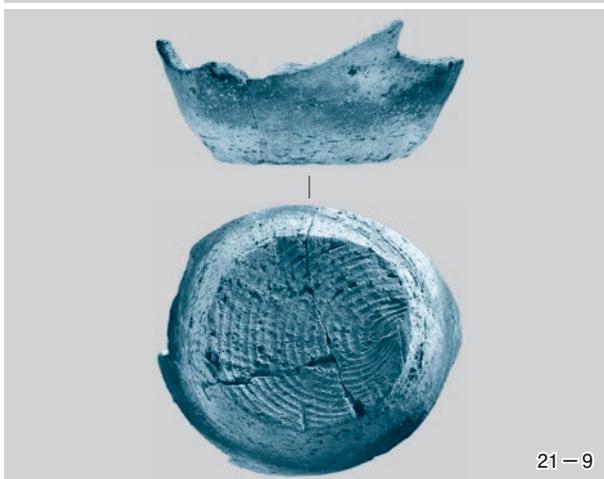
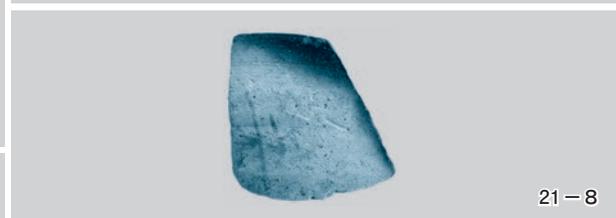
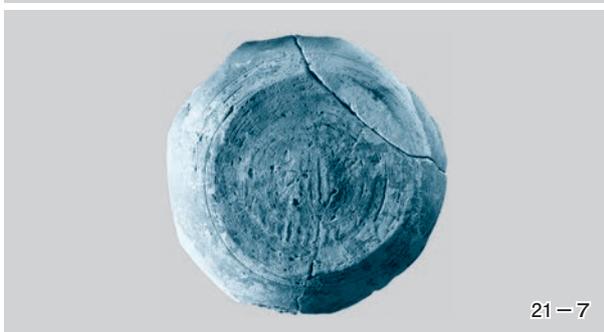
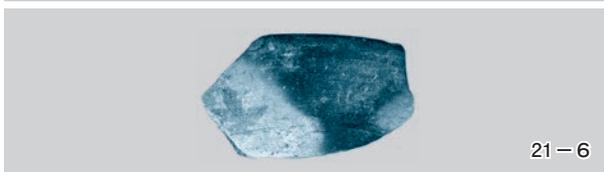
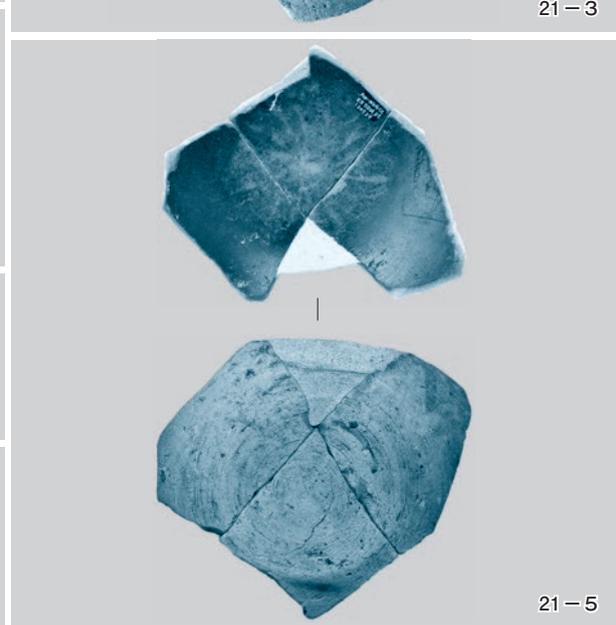
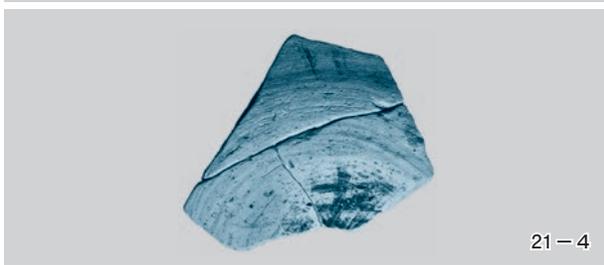
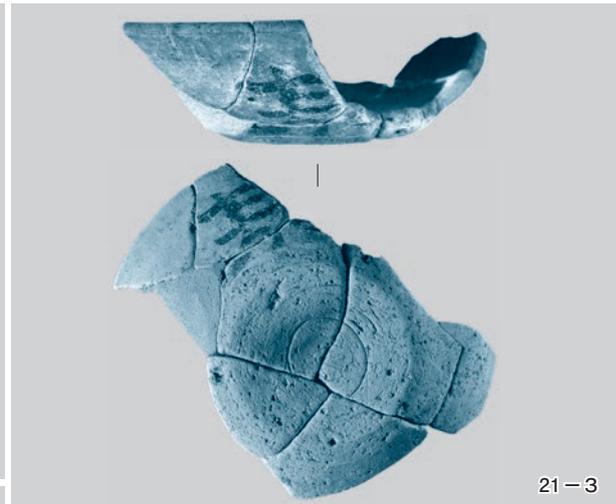
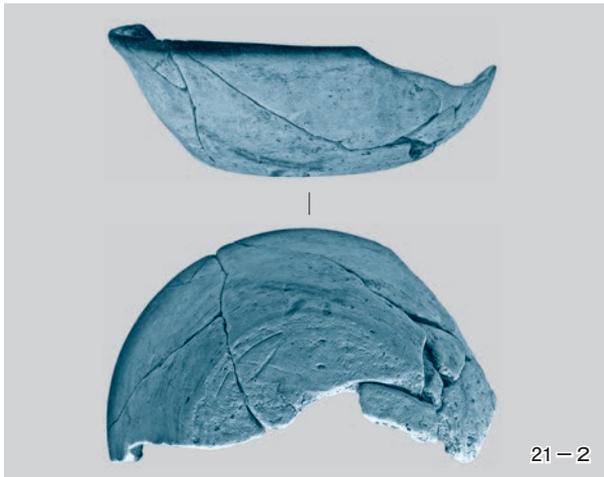
34 14号溝跡出土遺物 (7)



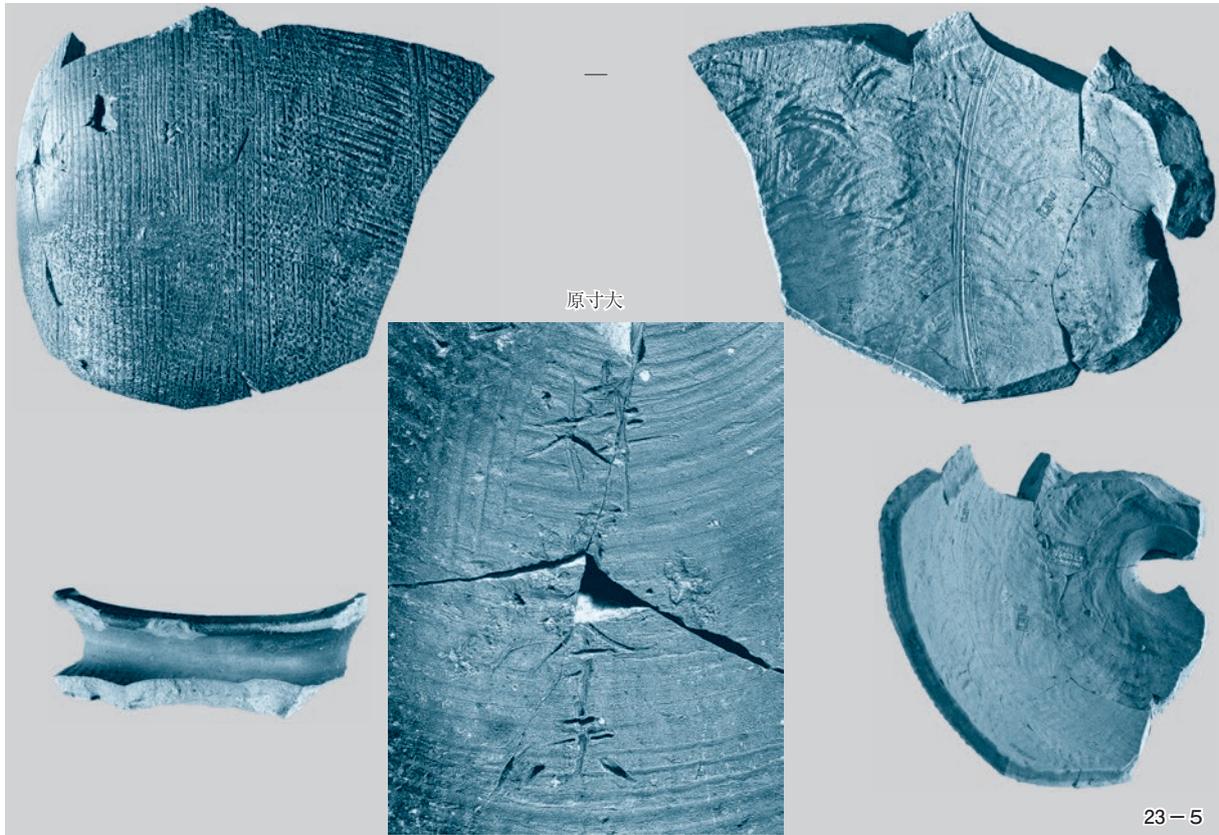
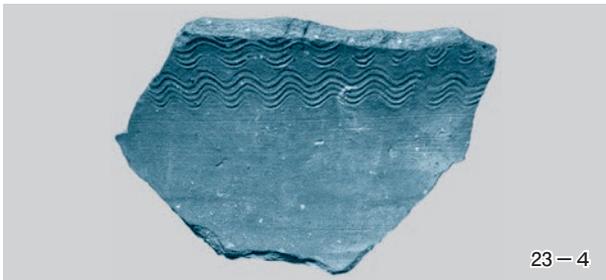
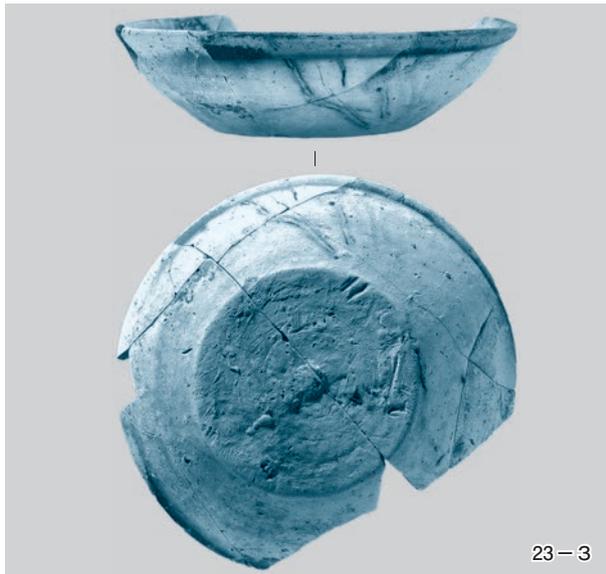
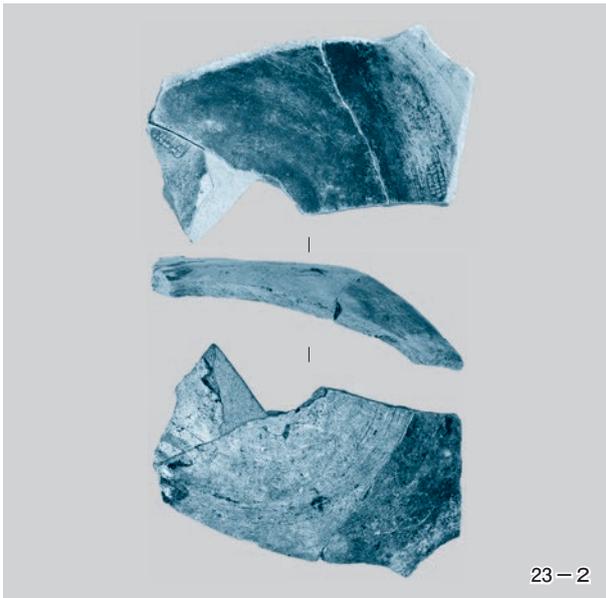
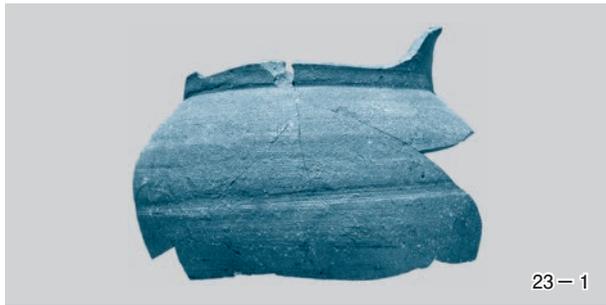
35 14号溝跡出土遺物(8)



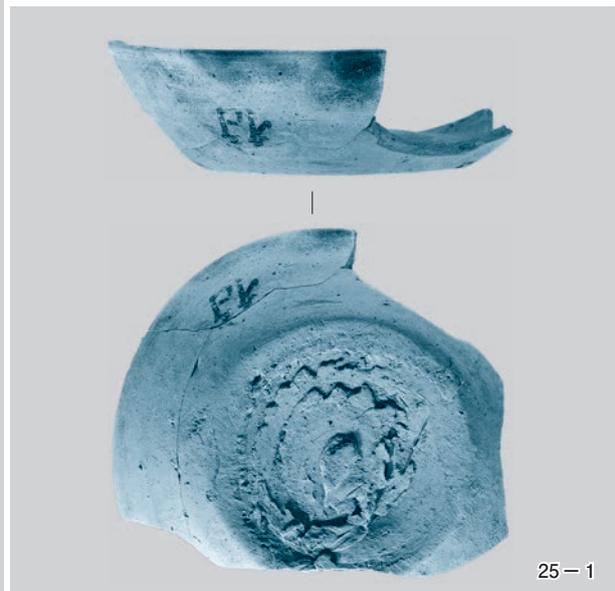
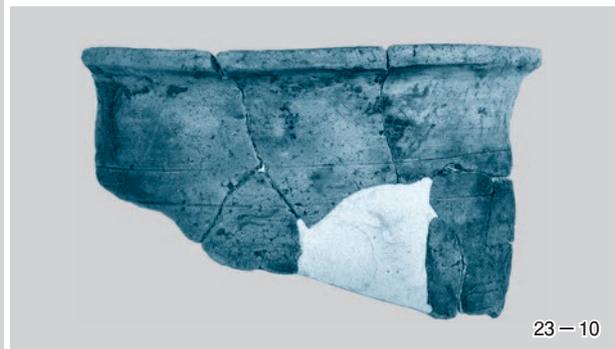
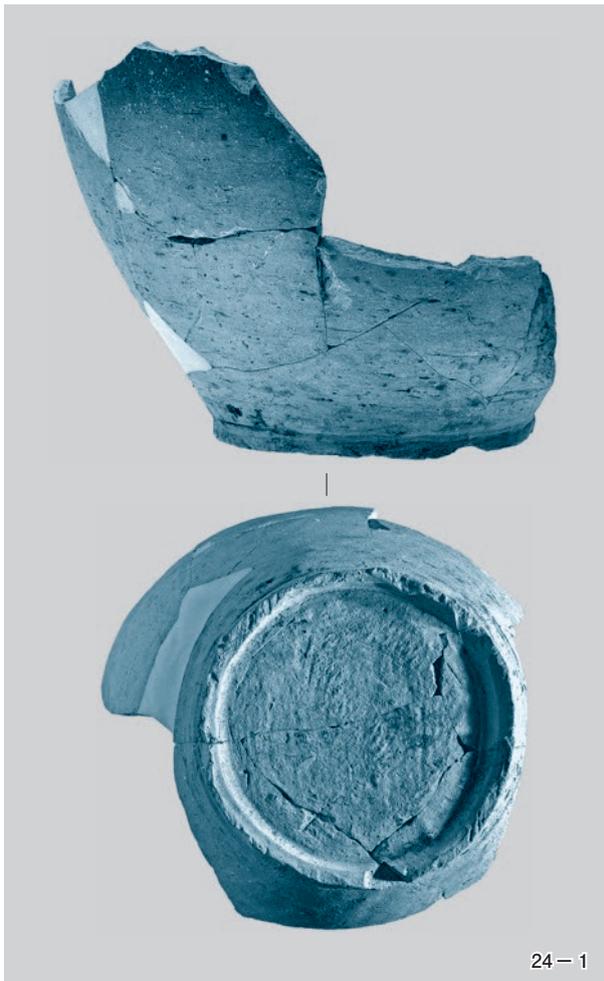
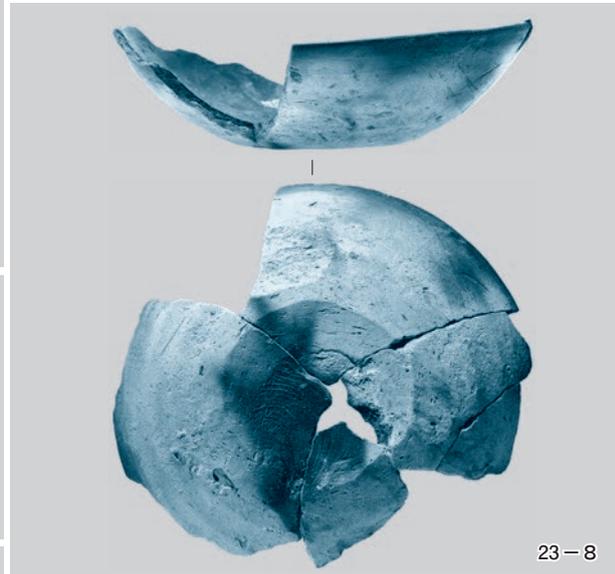
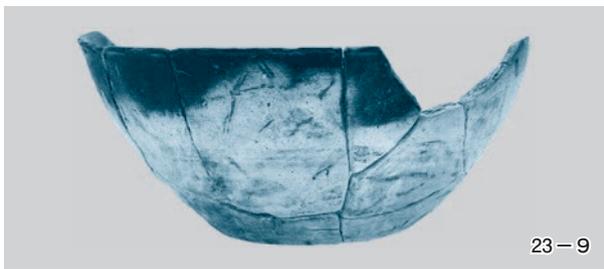
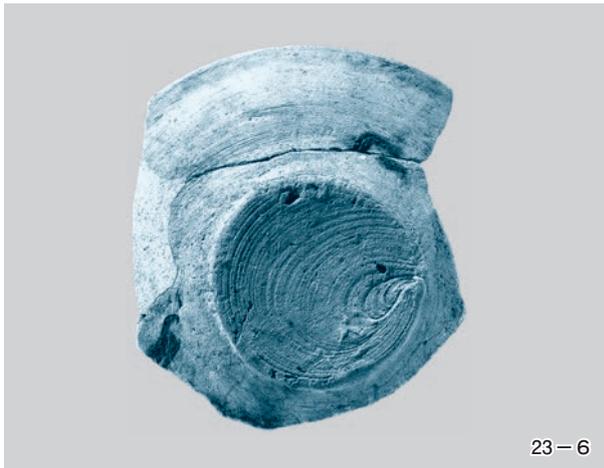
36 14号溝跡出土遺物（9）



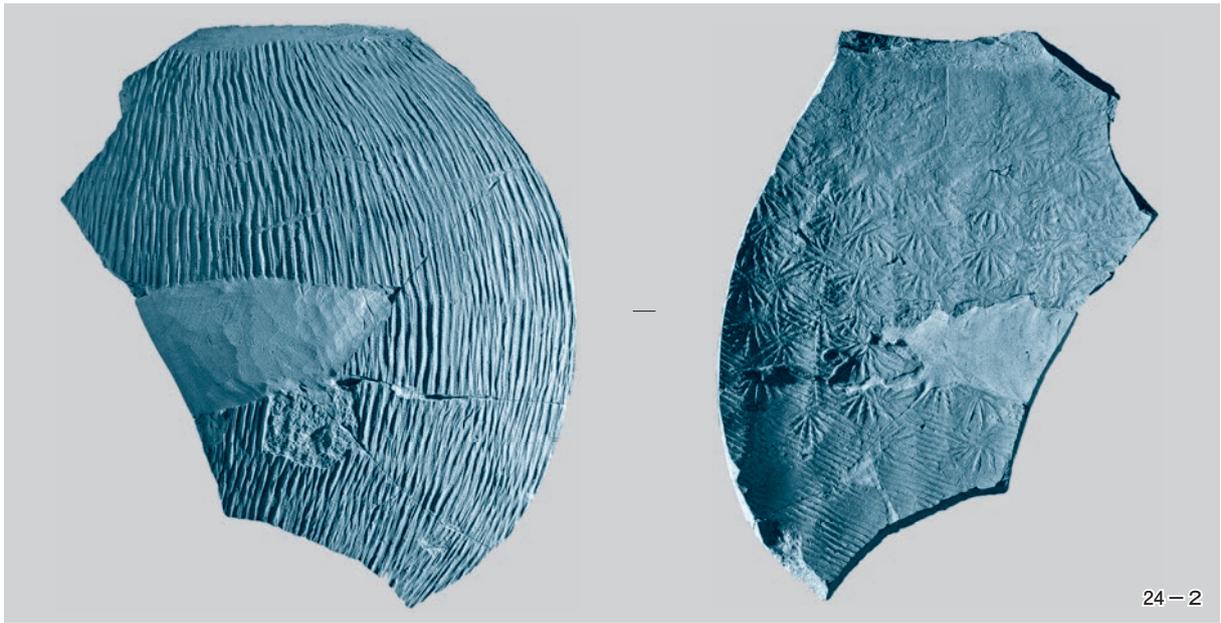
37 14号溝跡出土遺物 (10)



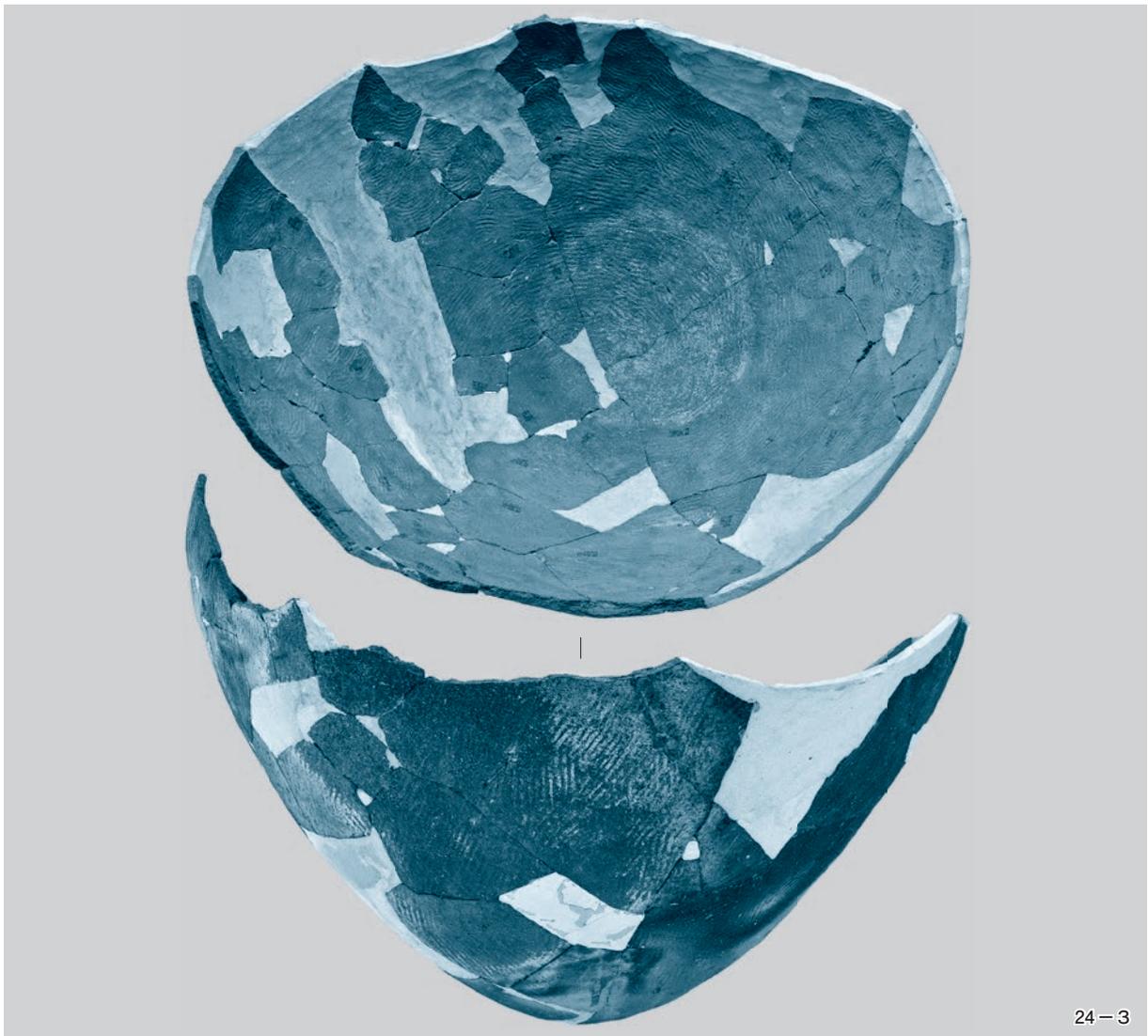
38 15号溝跡出土遺物 (1)



39 15号溝跡出土遺物(2)

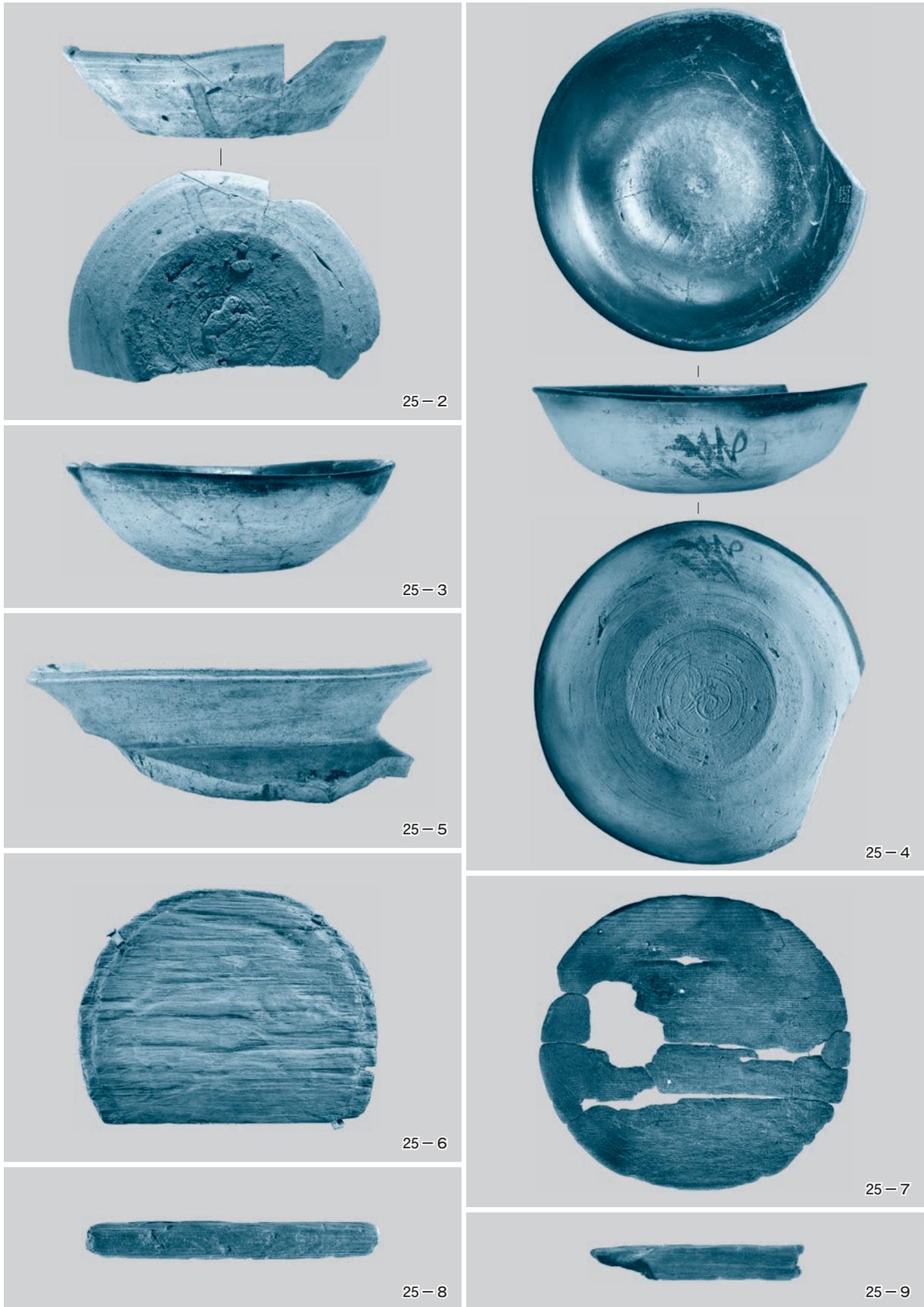


24-2

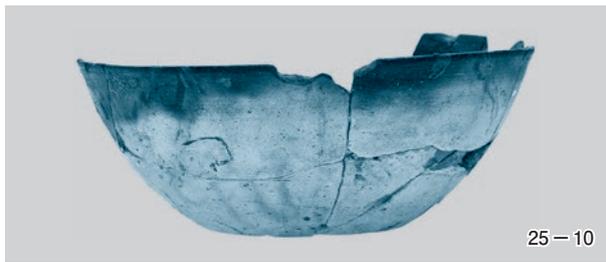


24-3

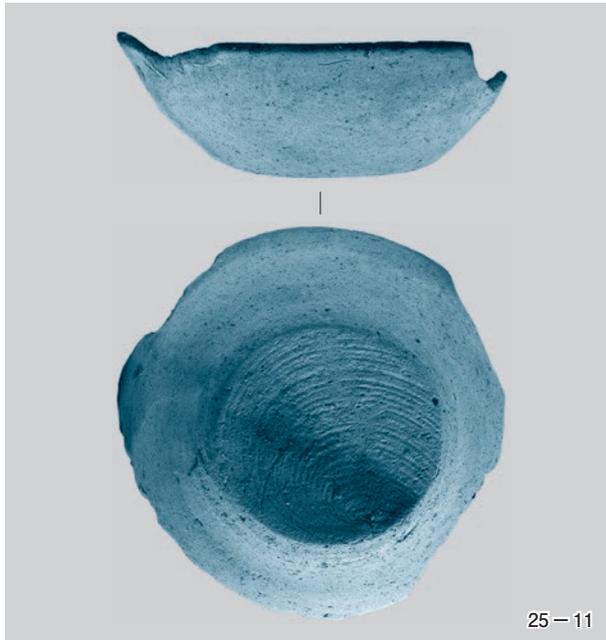
40 15号溝跡出土遺物（3）



41 15号溝跡出土遺物(4)



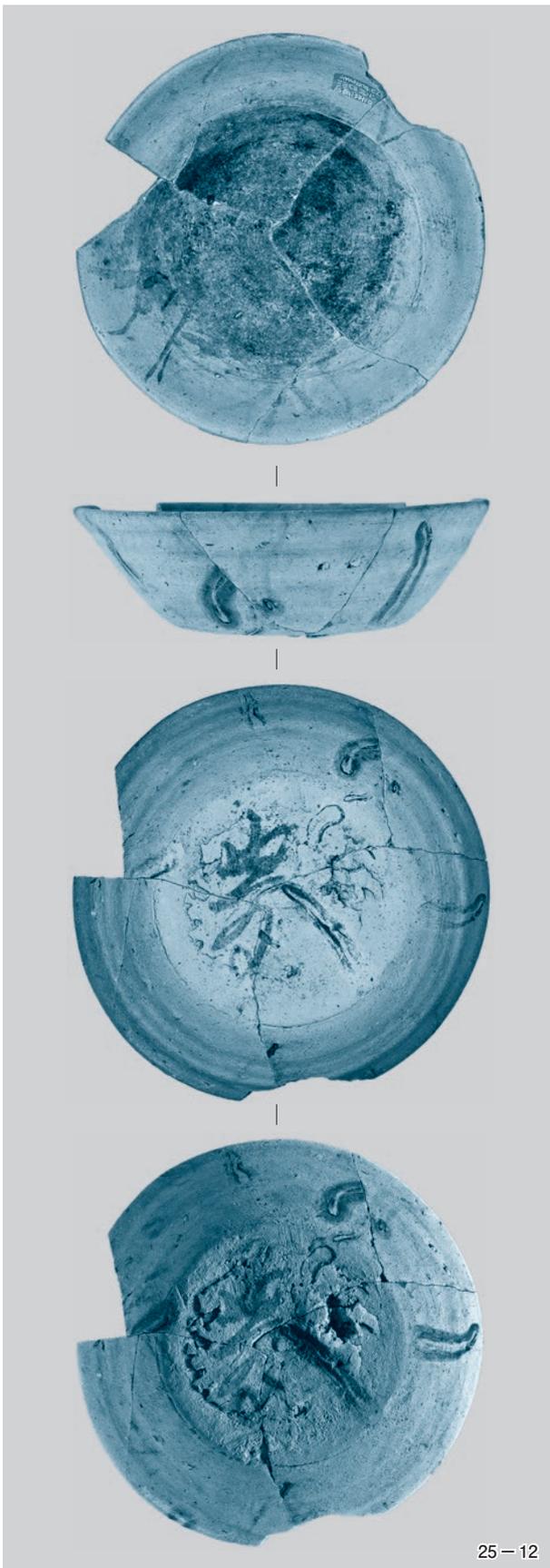
25-10



25-11

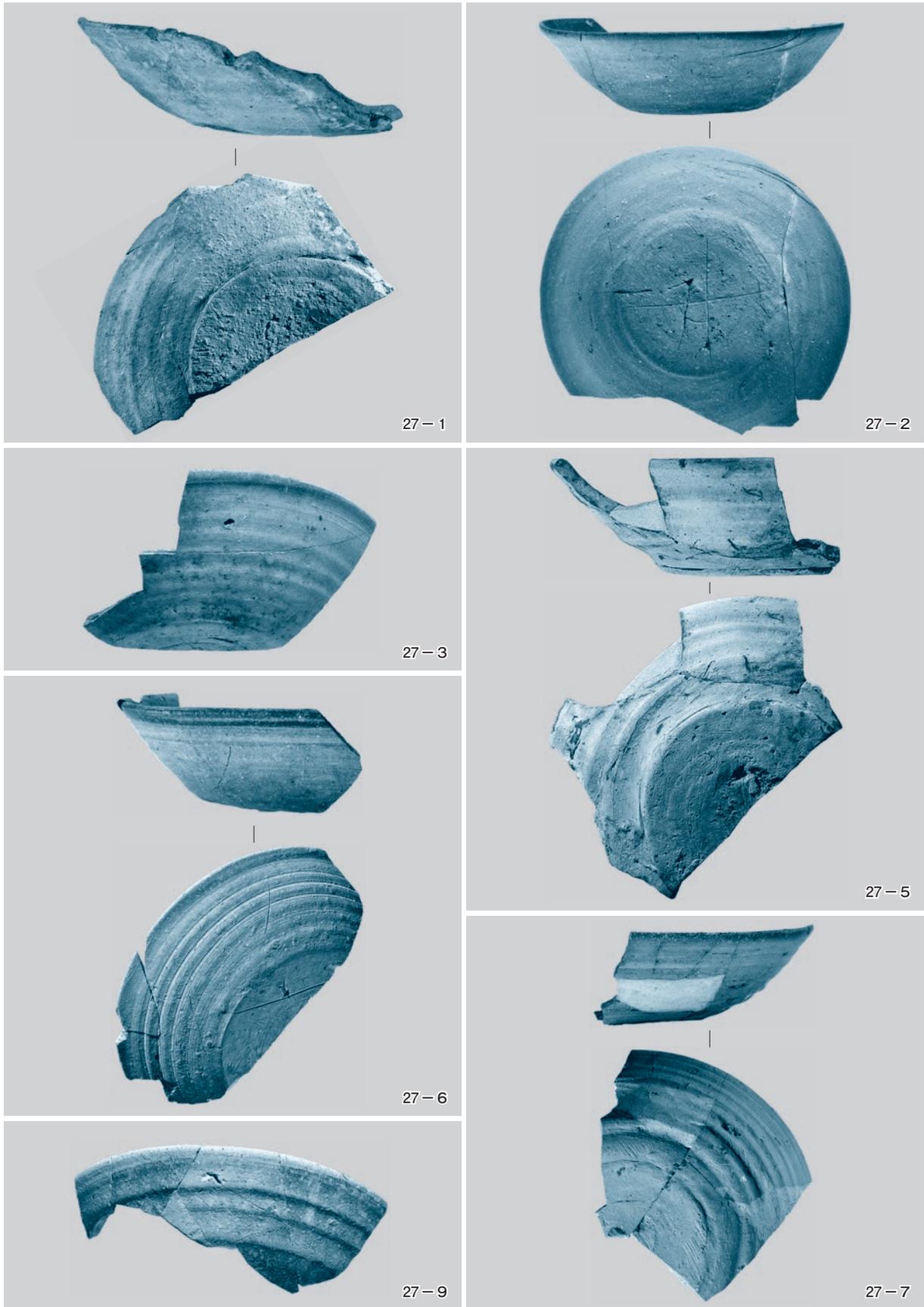


25-13

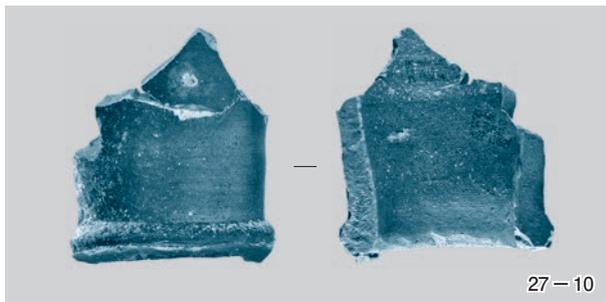
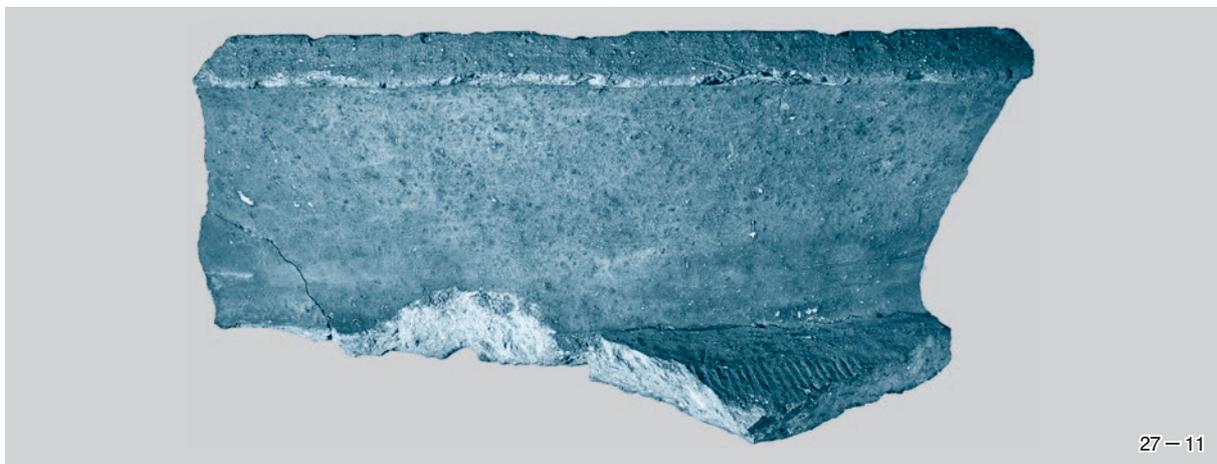
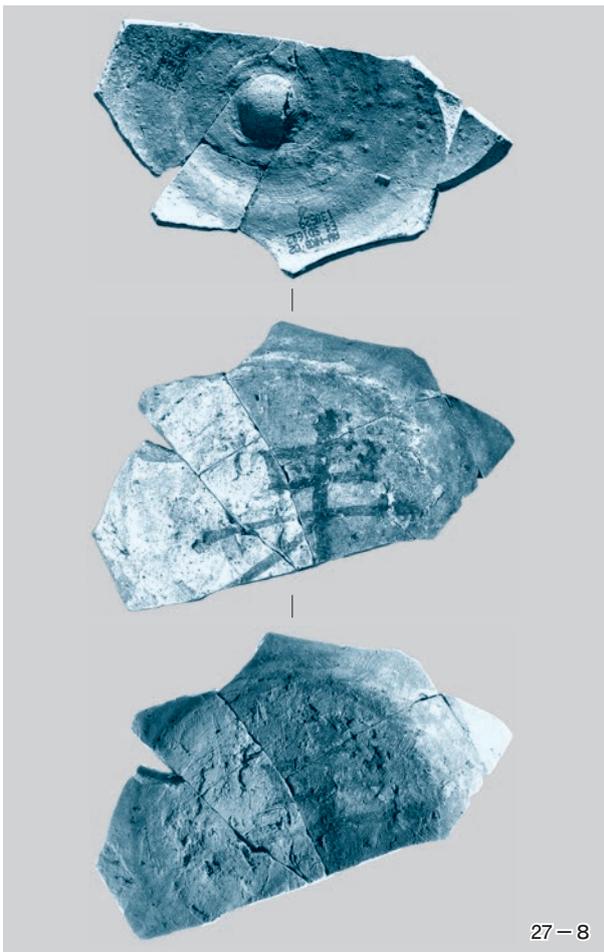
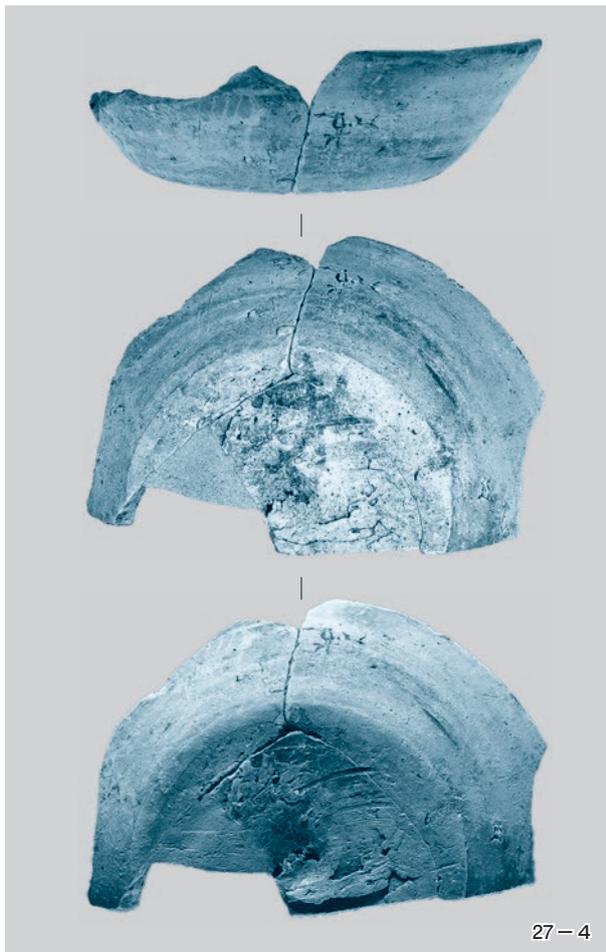


25-12

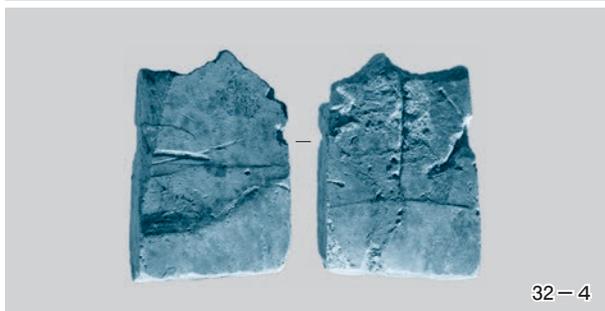
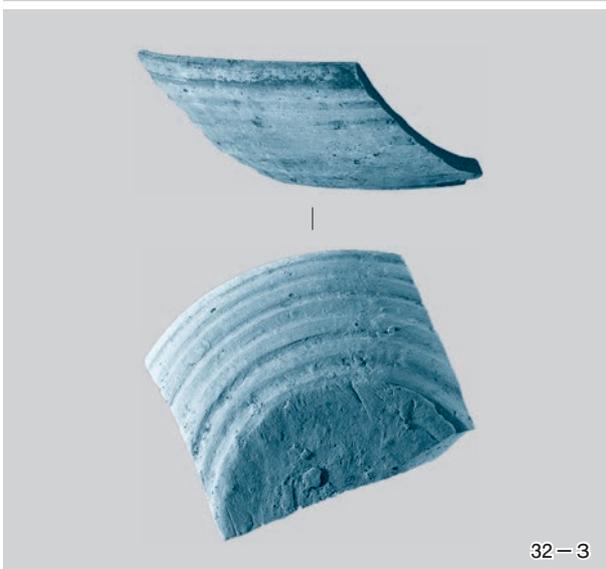
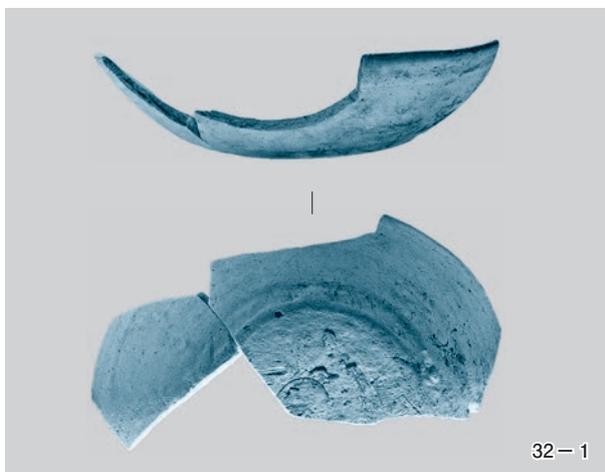
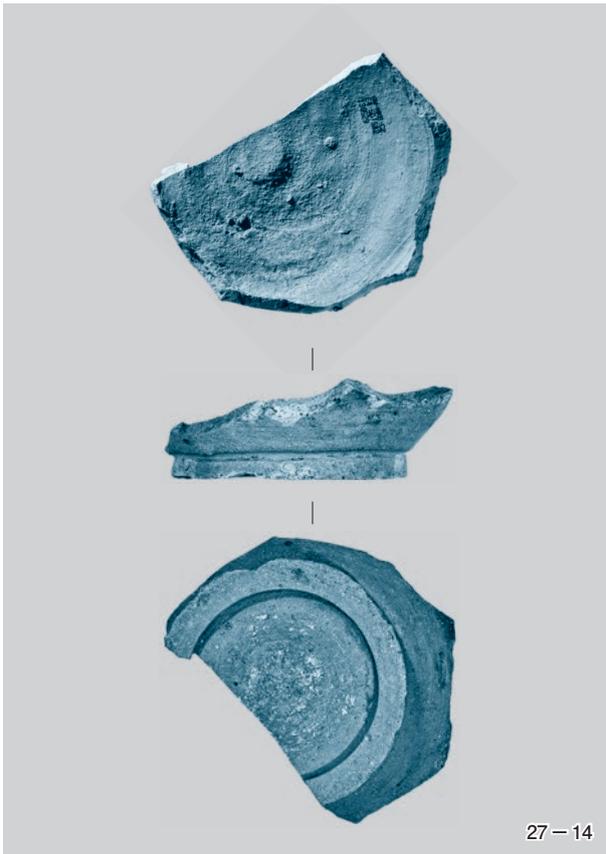
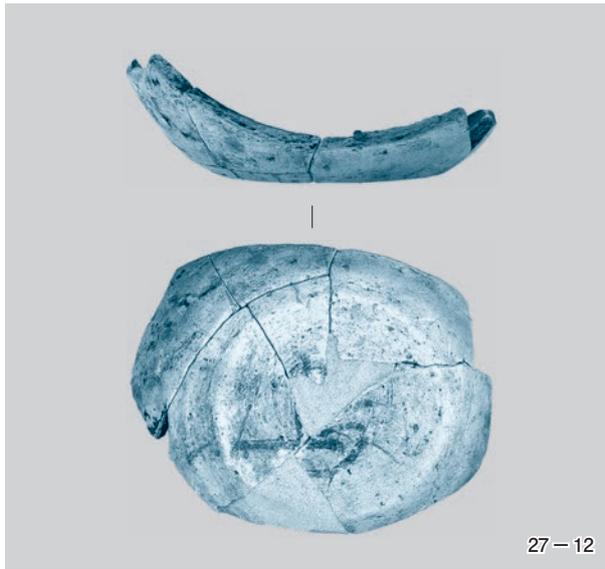
42 15号溝跡出土遺物 (5)



43 16号溝跡出土遺物(1)



44 16号溝跡出土遺物 (2)



45 16号溝跡出土遺物(3), 19号溝跡出土遺物, 遺構外出土遺物

第3編 西木流D遺跡（1次）

第1章 調査経過

西木流D遺跡の調査は、2,800㎡を対象に、平成25年5月14日(火)～9月13日(金)にわたり実施した。実働日数は30日間である。調査工程は、工事計画との兼ね合いから前半の2,000㎡と、後半の800㎡に分け、さらに前半については、市道高1-1号線周辺をまず調査し、最後に残る部分を調査する段階を踏んでいる。

また、今回の調査は西木流C遺跡と一体で行っており、調査員・作業員は両遺跡の間を行き来した。実働日数の割に、調査期間が長いのは、そのためである。以下、2週間単位で調査経過を報告する。

第1～2週：5月14日(火)、調査の初日である。既に、表土剥ぎを行っていた市道高1-1号線の北側で、遺構検出作業に着手。また、5月21日(火)に市道の南側の表土剥ぎを開始した。

第3～4週：5月27日(月)、ほぼ等間隔に柱穴が並び始め、5月29日(水)に全体像が確定する。1号掘立柱建物跡と命名し、2間×2間の総柱建物跡であることが、判明した。6月5日(水)・6日(木)、2号溝跡の断面写真→断面図→全景写真→平面図作成。

第5～6週：6月11日(火)～13日(木)、1号掘立柱建物跡の全景写真→平面図・レベリング。6月14日(金)、1号溝跡が、西木流C遺跡Ⅱ区16号溝跡と一連の遺構であることが確定する。6月20日(木)、クローラキャリアの廃土運搬路だった1号溝跡東端の掘り込みを開始。

第7～8週：6月25日(火)、掘りあがった範囲から、溝跡の平面図作成に入る。7月2日(火)、3号溝跡の一部再検出。

第9～10週：7月11日(木)、3号溝跡の全景写真、地形測量。市道部分の条件整備が整うまで、作業をいったん中断する。

第11～12週：7月24日(水)、市道の舗装撤去・表土剥ぎを開始。7月30日(火)、遺構検出作業に着手する。7月31日(水)、2・3号土坑を検出し、8月2日(金)に平面図作成、地形測量。

第13～14週：8月9日(金)、盆休み前の現場の安全確保、シート養生を行う。

第15～16週：8月21日(水)、ラジコンヘリコプターで調査範囲の空撮を実施した。好天に恵まれる。8月29日(木)、2,000㎡の引き渡しを行い、この後いったん作業を中断する。

第17～18週：9月4日(水)、調査再開の初日である。表土剥ぎを開始し、9月6日(金)から遺構検出に着手する。前半の調査範囲から続く溝跡が検出され、9月10日(火)までに掘り込みは終了。9月11日(水)から地形測量を実施し、9月13日(金)には調査員・作業員が、西木流C遺跡Ⅰ区の調査へ移動した。

第19週：9月18日(水)、800㎡の引き渡しを行う。(菅原)



図1 西木流D遺跡調査位置図

第2章 遺構と遺物

第1節 遺構の分布と概要

遺構の数が少ないが、分布は調査区全体に広がる。それらは時期別に、次のように整理される。

◎古代…… S B 01, S K 01～03, S D 01・03



図2 遺構配置図

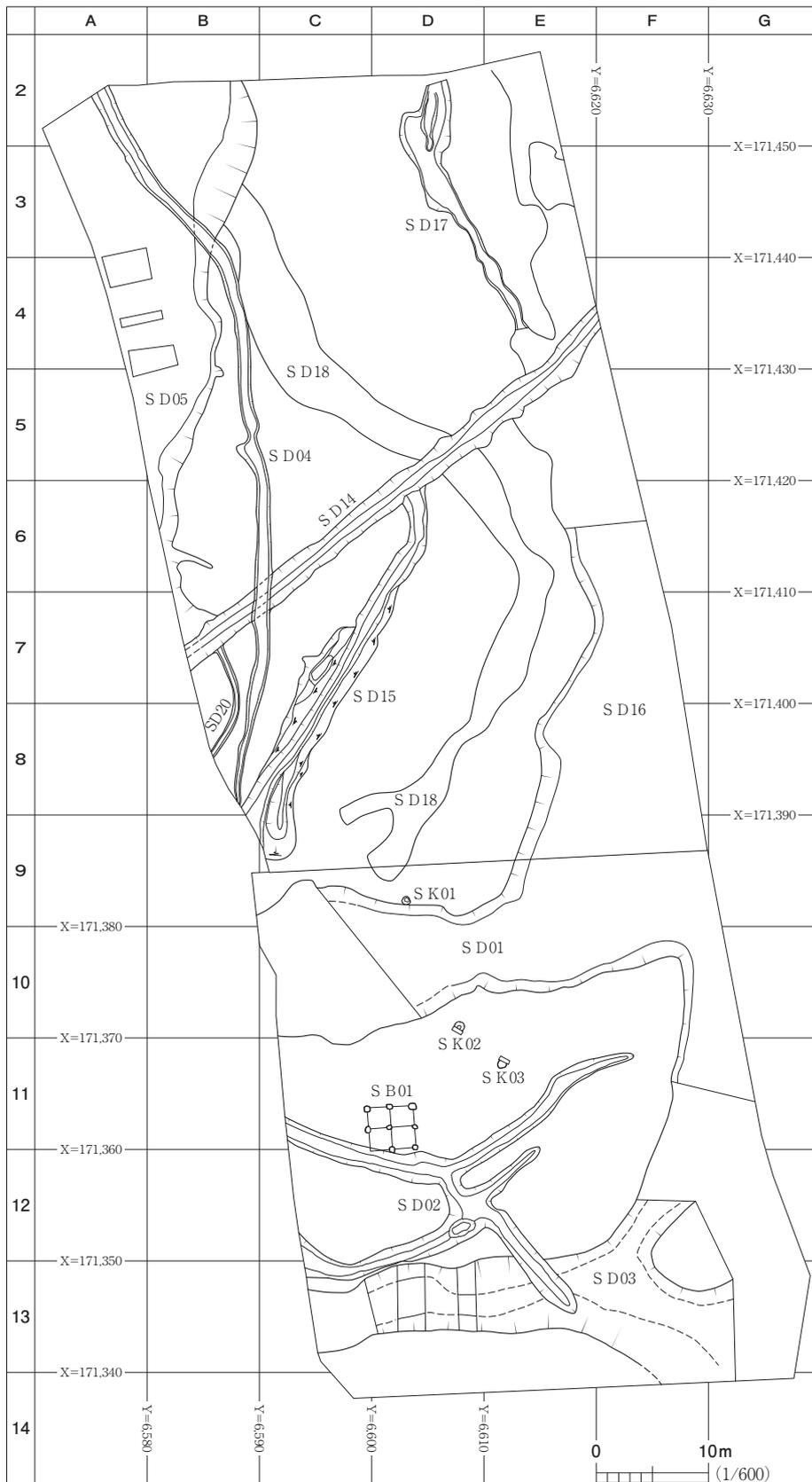


図3 西木流C遺跡Ⅱ区・西木流D遺跡全体図

◎近世以降… S D 02

このうち古代の1・3号溝跡は、西木流C遺跡Ⅱ区16号溝跡の上流側にあたる。本遺跡では二つに分かれて西側に折れ曲がり、1号掘立柱建物跡は、それらで方形状に区画された範囲内から検出された。また、1～3号土坑は関連施設とみられ、1号溝跡の両岸に掘られている。

対して2号溝跡は、近世頃に掘削された農業用排水路である。堆積土中から近世陶磁器、ビール瓶などが出土した。(菅原)

第2節 基本土層

基本土層の分層基準は、原則的に西木流C遺跡と一致させた。大別して、4層がある。

L I ……表土。ほとんどが水田耕作土である。床土の下面は、酸化鉄でオレンジ色に変色した箇所が広く見られた。

L II ……黒褐色粘質土。旧表土層に相当する土層である。層厚は3～15cm程度で、薄い。主にⅠ区北端付近と、Ⅱ区北東部に分布していた。

L III ……灰褐色粘質土。層厚は15～40cmを測る。遺構検出面の大半にあたる。L IIIへの移行は漸移的であり、場所によっては、沼沢火山噴出物の二次堆積を含む中間層が認められた。

L IV ……礫層。流木や種子などの植物遺体を含んでいる。(菅原)

第3節 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡の数は、1棟にとどまった。しかし、会津若松市教育委員会による隣接地の発掘調査では、古代の規格的配置の掘立柱建物群が発見されており(会津若松市教育委員会1996・2000)、今回のものは、その一部に該当する可能性が高い。

1号掘立柱建物跡 S B 01 (図4, 写真3～5)

2間×2間の総柱建物跡である。1・3号溝跡によって、方形状に囲まれた範囲(南北約24m×東西約33m以上)の中で検出され、意図的な占地が読み取れる。D 11グリッドに位置しており、L III上面で検出された。上部削平が著しく、P 7は近現代の2号溝跡に壊されていたが、他の平面プランは比較的容易に確認することができた。

規模は中軸線上で計測すると、南北4.02m、東西4.04m、方向は真北に対して5°西に傾く。柱間寸法は、南北方向がP 1-P 4間2.06m、P 2-P 8間2.00m + 2.04m、P 3-P 9間1.72m + 2.00m、東西方向が、P 1-P 3間2.06m + 2.00m、P 4-P 6間2.02m + 2.16m、P 8-P 9間1.98mである。柱穴は隅丸方形基調で、径40～70cm、検出面からの深さは最も遺存状態の良いP 9で25cmを測る。柱痕跡は、径12～15cmを測った。柱痕跡直下の柱穴底面には、礫を敷いたものが見

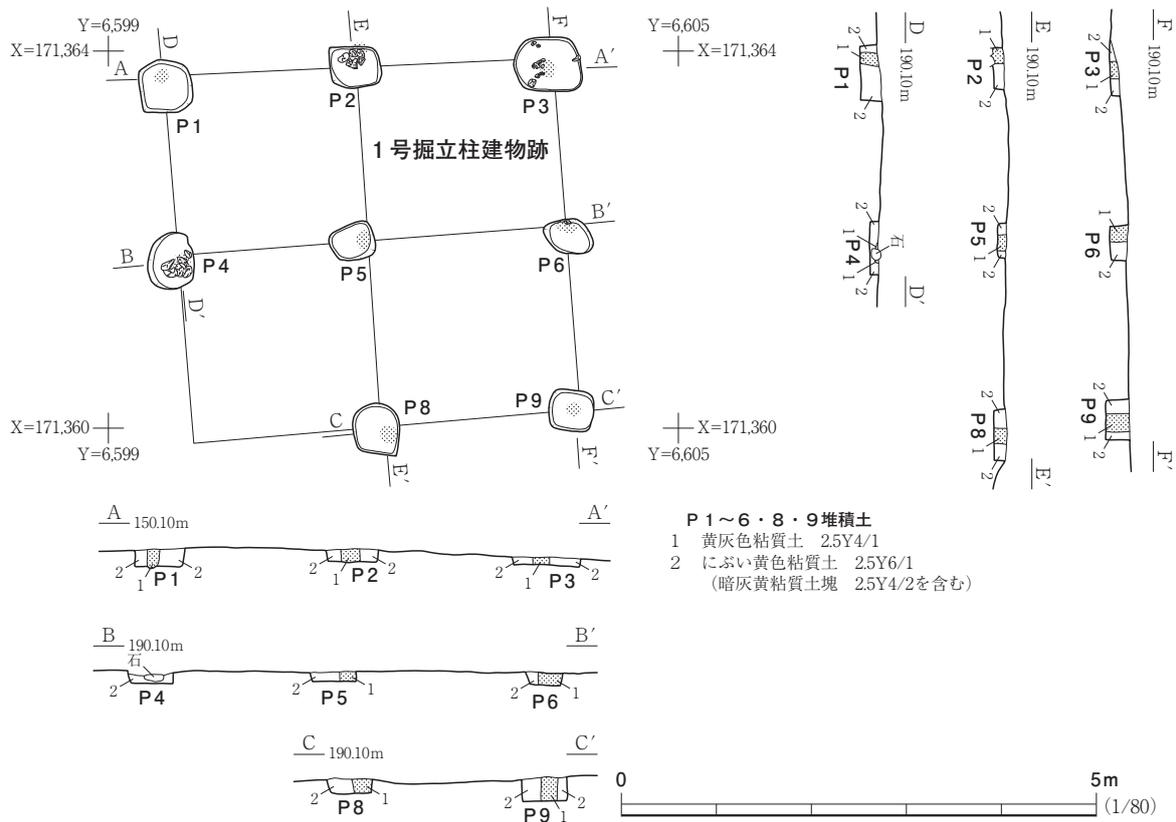


図4 1号掘立柱建物跡

られ、地盤沈下防止の工夫がうかがえる。

遺物は出土しなかった。

(菅原)

第4節 溝跡

溝跡は、3条検出された。それらは時期・性格の違いで、次のように区別される。

◎古代の自然流路跡…SD01・03

◎近世以降の用排水路…SD02

このうち1・3号溝跡は、同一遺構であるが、市道高1-1号線を挟んで検出したため、便宜上、2つの遺構番号を付して調査を実施した。ここでは、一括して報告を行う。

1・3号溝跡 SD01・03

遺構 (図5, 写真6・8)

調査区北・東・南部を「コ」字状に曲がる、大型の溝跡である。北東端は、西木流C遺跡Ⅱ区の16号溝跡へ続き、底面レベルの観察から、その上流側にあたと判断される。掘り込みは、廃土量が膨大になるため、適宜、重機を使用した。検出面は、LⅡ～Ⅲ上面である。

検出された長さは、1号溝跡が39m、3号溝跡が、西木流C遺跡Ⅱ区の16号溝跡の延長方向で

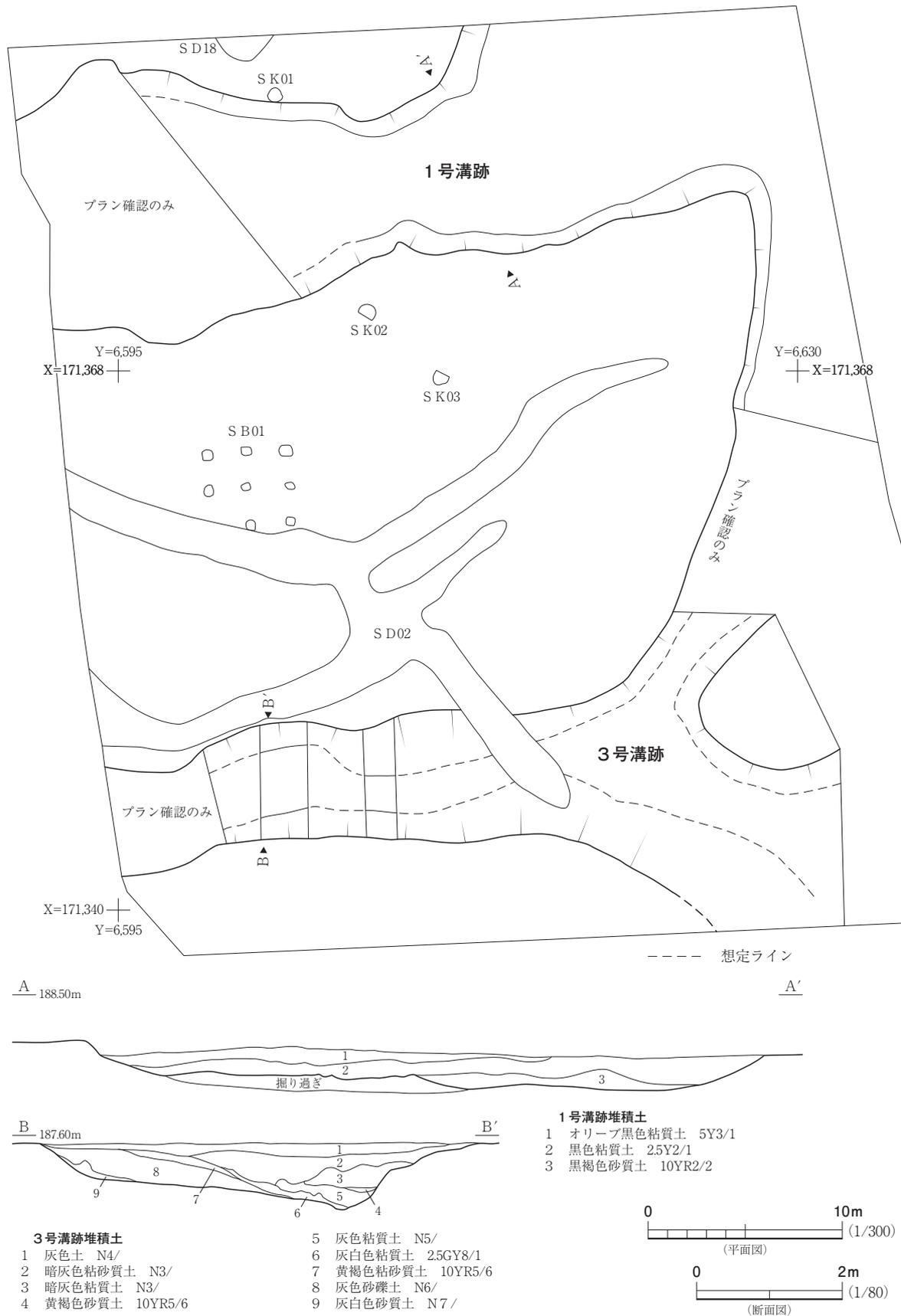


図5 1・3号溝跡

約28m, 西に曲がる方向で28.5mを測る。また, 上幅は7~14m, 検出面からの深さは42~67cmである。底面は, 礫層のLⅣに達し, ほぼ平坦であった。

堆積土は, 大きく2層に大別され, 上層が粘質土主体, 下層が砂質土主体である。下層は流水層で, 所々に流木がみられた。断面は逆台形基調をなすが, 一様でない。ほぼ直角に折れ曲がる北東部内側は, 崖状になっていた。

遺物 (図6, 写真10)

遺物は, 非常に少なく, 小破片が多い。ここでは, 3号溝跡上層から出土した須恵器5点を図示する。

1~3は, 須恵器甕の胴部片である。1・2は, 外面に大戸窯特有の螺旋状沈線が施され, その前の調整痕として, 外面に平行叩き目, 内面に当て目が確認できる。3は, 外面に条線の細かな平行叩き目, 内面に当て目が残る。4は, 杯の底部である。底径は小さめで, 回転ヘラ切り無調整である。5は, 身の深い高台埴である。大型品になると思われる。

まとめ

本溝跡は, 西木流C遺跡Ⅱ区16号溝跡へ続き, その上流部にあたる。遺物は少なかったが, 新しい時期のものはみられず, この点でも, 矛盾は無かった。

性格は, やや蛇行し, 溝幅が一定しない様子から自然流路跡と考えられ, 具体的には旧瀬川の支流跡である蓋然性が高いとみられる。 (菅原)

2号溝跡 SD02 (図7, 写真7)

調査区の中央部南西, C11~13・D11~13・E11~13・F11グリッドで検出した。E13グリッドで3号溝跡と重複しており, 本溝跡のほうが新しい。検出面はLⅢ上面である。D11グリッドには1号掘立柱建物跡があり, 本溝跡に近接しP7が北壁から検出され, P8・9は北の壁際から検出された。

本溝跡は2つの流れがあり, 1つ目はF11~D12~C11グリッドと東西方向に延び, 長さは35m, 最大幅が2.8m, 深さが38cmを測る。堆積土は2層に分けた。ℓ1は褐灰色土で, ℓ2はにぶい黄橙色土である。この溝跡の南側壁面に木杭が打ち込まれている。この杭は南壁の護岸のため

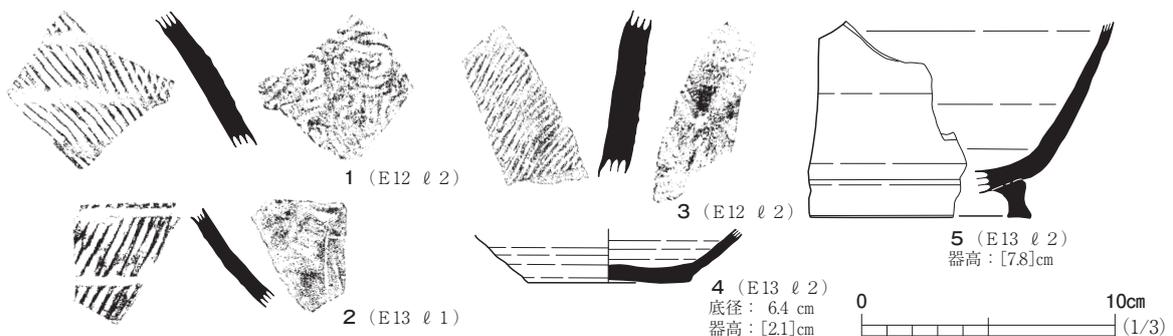


図6 3号溝跡出土遺物

と推定される。

2つ目はE 12・13グリッドからD 12グリッドで合流しC 12グリッドに流れる溝である。溝は「く」の字状を呈し西方向に延び、長さは29m、最大幅が4.3mを測る。合流点に長軸2.6m、短軸1.4m程度の落ち込みが見られる。この溝跡の北側壁面にも木杭が打ち込まれている。2つの溝跡はD 12グリッドでつながっている。近世の陶磁器が出土した。(細 山)

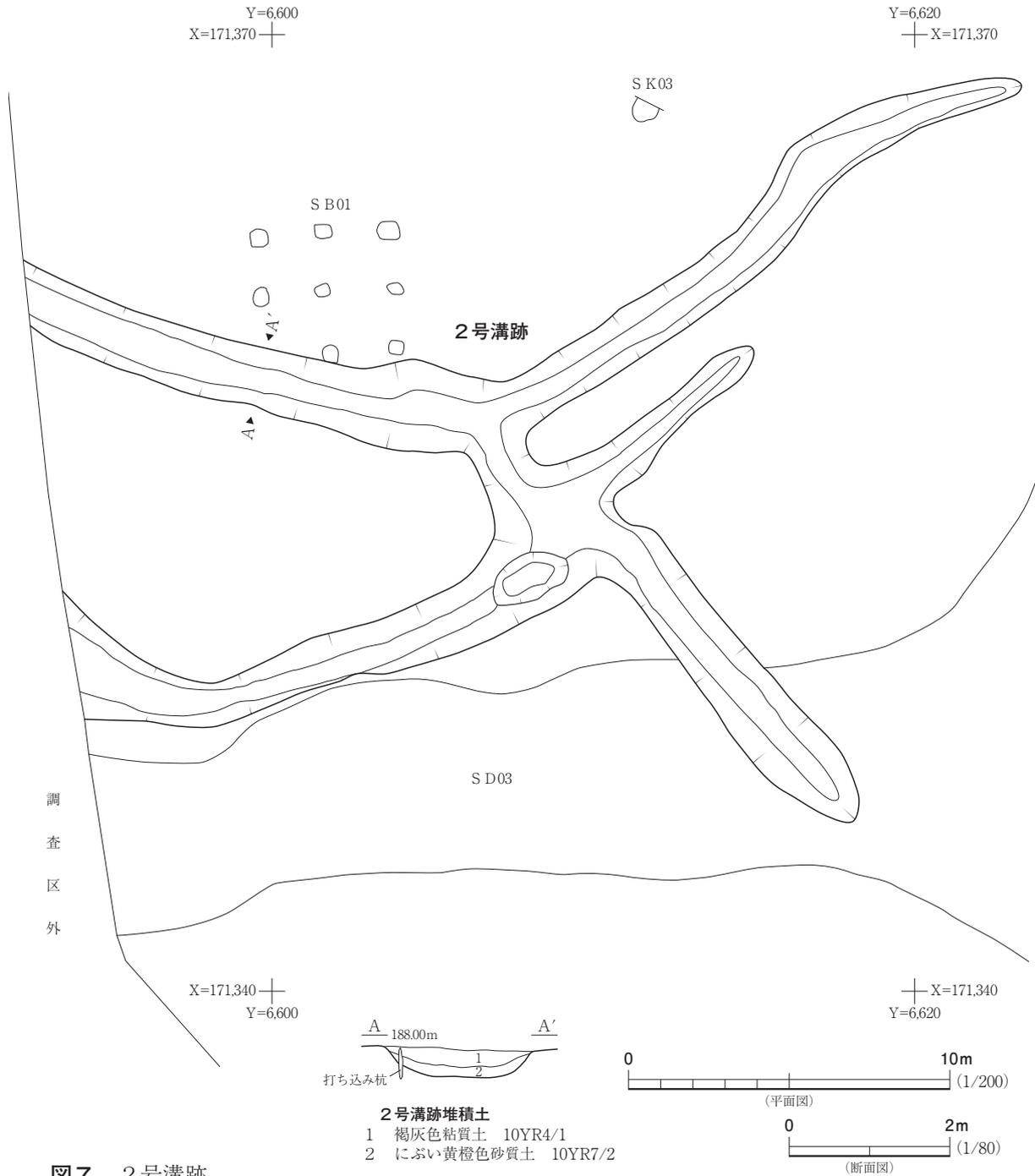


図7 2号溝跡

第5節 土 坑

今回の調査で土坑を3基確認した。3基とも堆積土から遺物は出土しなかったが、近接する1号掘立柱建物跡とはほぼ同じ時期のものと思われる。

1号土坑 SK01 (図2・8, 写真9)

調査区の北端部中央やや西寄り, D9グリッドに位置し南側を1号溝跡が東西に走っている。検出面はLⅢ上面である。平面形は, 若干の欠けがあるがほぼ円形を呈する。規模は, 上端の径75cm前後, 底面までの深さは65cmを測る。底部の形状はほぼ平坦で, 壁は急な立ち上がりを呈す。遺構内堆積土は3層に分けた。ℓ1は黒褐色土で自然堆積と思われる。ℓ2はにぶい黄橙色粘土塊を多く含み, 炭化物が少量含まれていた。ℓ3にも炭化物が少量含まれていた。(細山)

2号土坑 SK02 (図2・8, 写真9)

調査区の中央やや北西寄り, D10グリッドに位置する。検出面はLⅢ上面である。1号土坑から1号溝跡を挟んで南東約12mに位置する。平面形は, 南西部分が水道管埋設溝により壊されているがほぼ円形と推測される。規模は上端の径90cm前後, 底面で径30cm前後, 底面までの深さは20cmを測る。底部の形状は鍋底状を呈す。堆積土は灰黄褐色土で粘性ありの単層である。(細山)

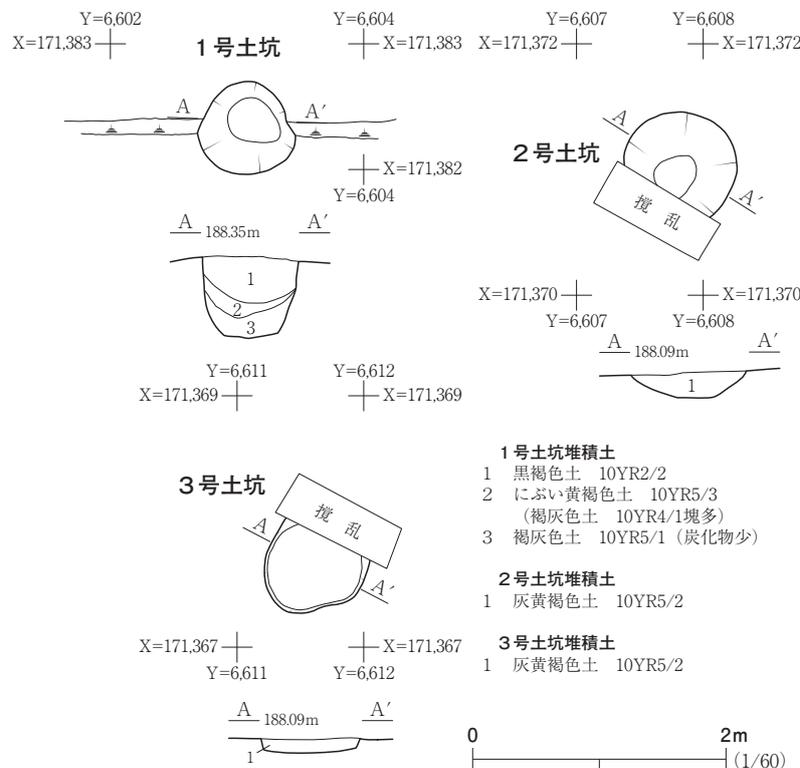


図8 1～3号土坑

調査区のほぼ中央, E11グリッドに位置する。検出面はLⅢ上面である。2号土坑から南東約4mに位置する。平面形は, 北東部分が水道管埋設溝により壊されているがほぼ円形と推測される。

規模は, 上端の径80cm前後, 底面では径75cm前後, 底面までの深さは10cmを測る。底部の形状はほぼ平坦で, 壁は急な立ち上がりを呈す。堆積土は灰黄褐色土で粘性ありの単層である。(細山)

第6節 遺構外出土遺物

(図9, 写真10)

遺構外からは、須恵器・土師器・近世陶磁器の破片が出土している。ここでは、須恵器3点を図示し、解説を加える。

1～3は甕の胴部片である。1は、大戸窯特有の螺旋状沈線が施され、その前の調整痕として、外面に叩き目、内面に当て目が観察できる。2・3は、螺旋状沈線が施されないもので、2の外面の平行叩き目は条線が細かく、3の平行叩き目は、木目圧痕がみられる。

(菅原)

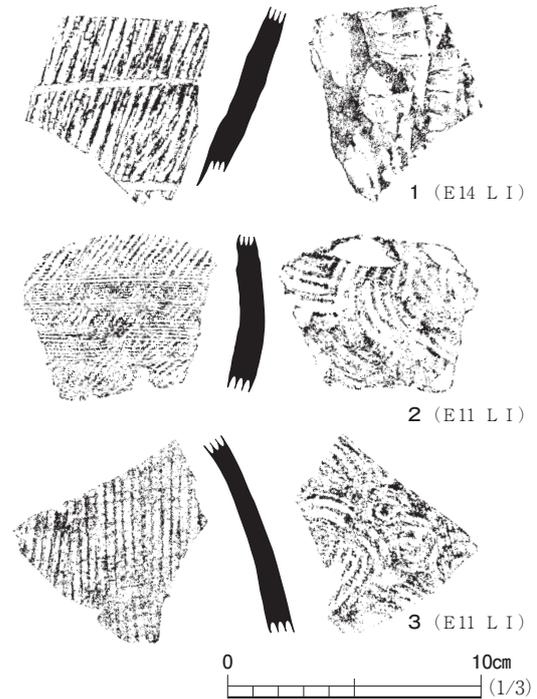


図9 遺構外出土遺物

第3章 総括

1. 今回の1次調査は、西木流D遺跡の北部2,800㎡が対象となった。
2. 発見された遺構は、西木流C遺跡Ⅱ区から連続する溝跡、溝跡に囲まれた総柱倉庫1棟、土坑3基である。このうち、2号溝跡を除くものが古代の所産と考えられる。
3. 遺物は、少なかったが、9世紀を主体としており、主要遺構のおおよその年代を示していると考えられる。
4. 次年度は、広範囲の発掘調査が予定されている。これによって、会津若松市教育委員会による調査成果(図10)との関係も、明白になるはずである。

(菅原)

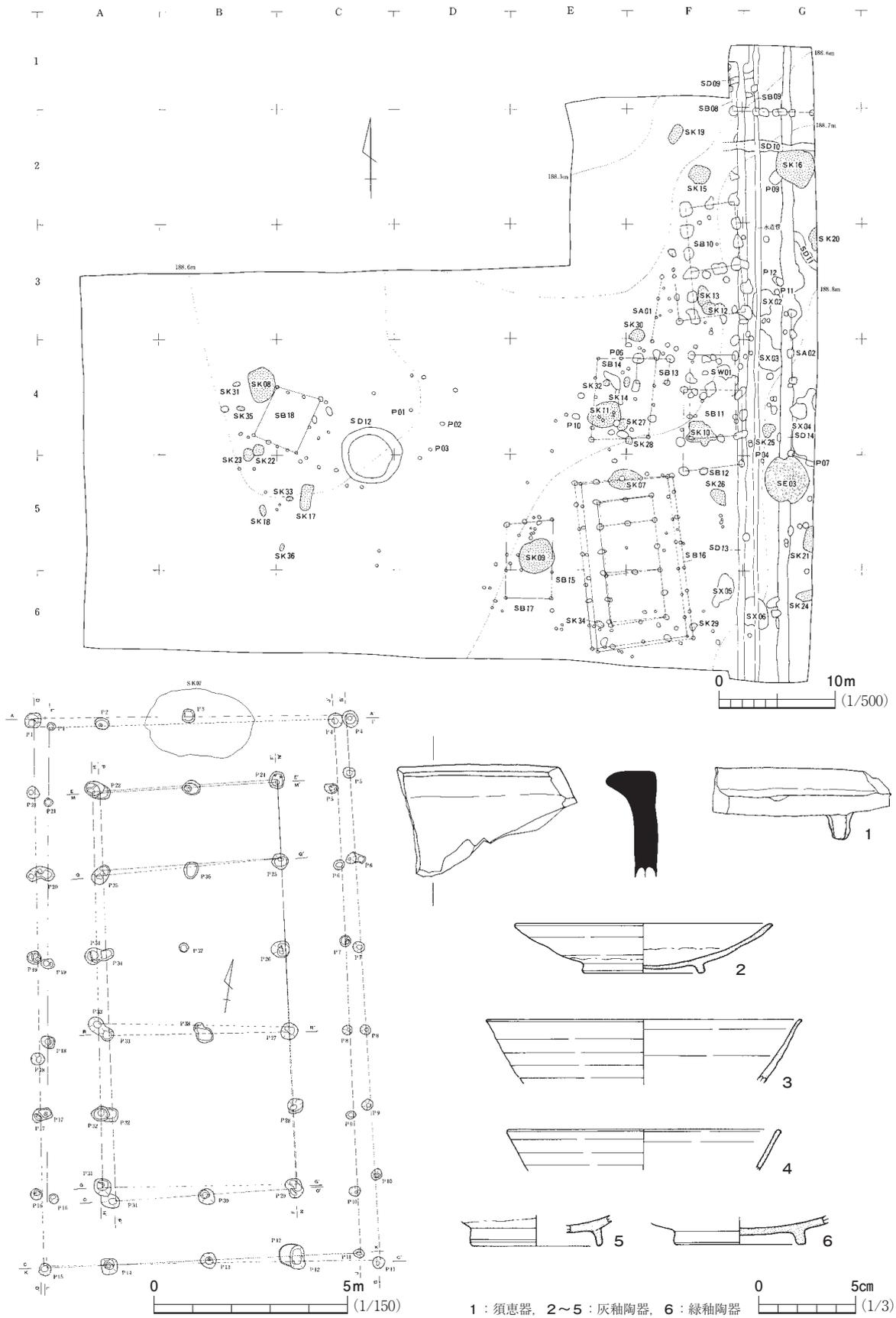


図10 会津若松市調査区・遺構・遺物

写 真 図 版

第3編 西木流D遺跡（1次）



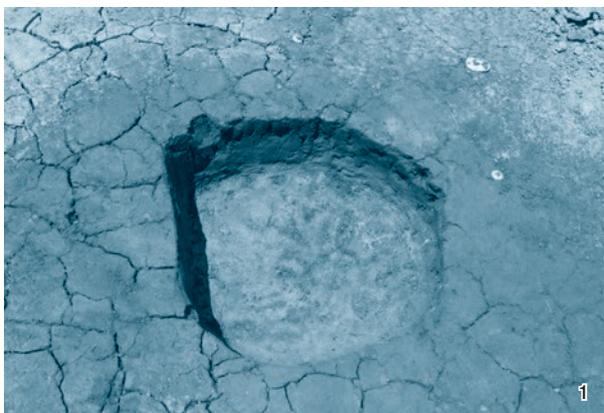
1 調査区遠景（西から）



2 調査区全景（真上から）



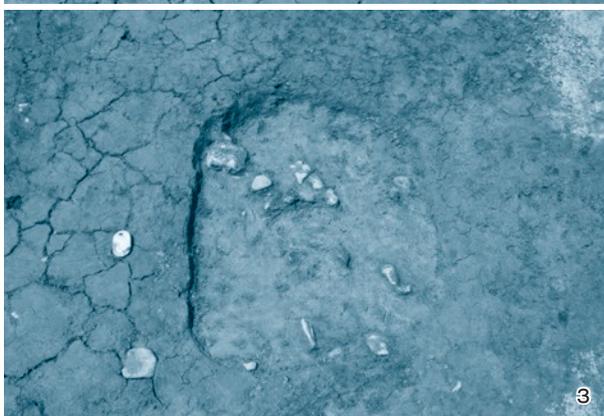
3 1号掘立柱建物跡全景(東から)



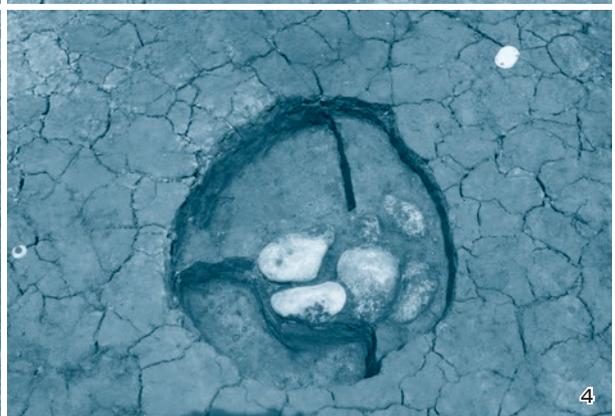
1



2



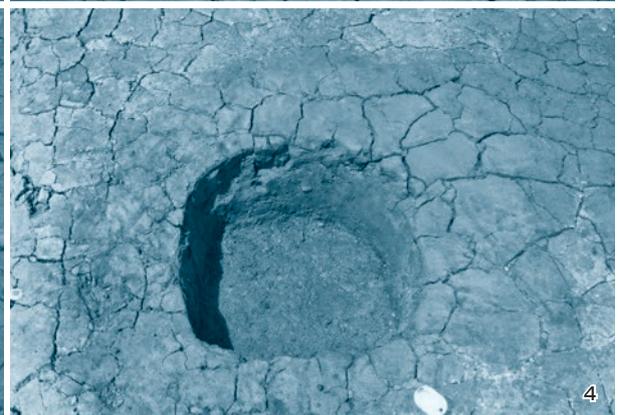
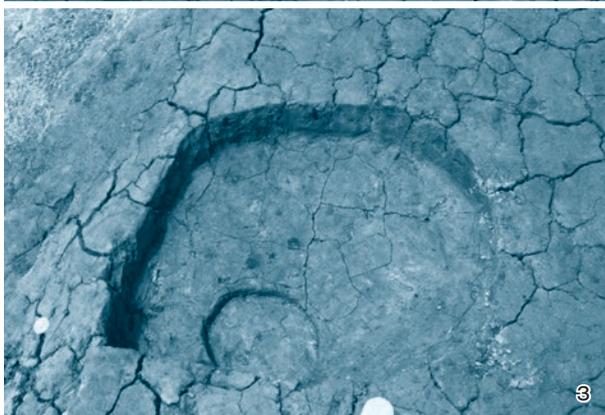
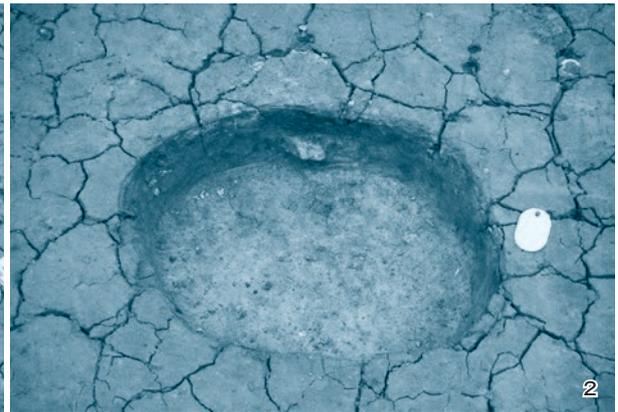
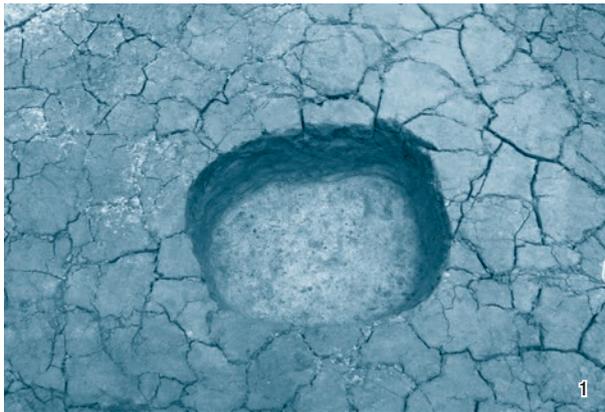
3



4

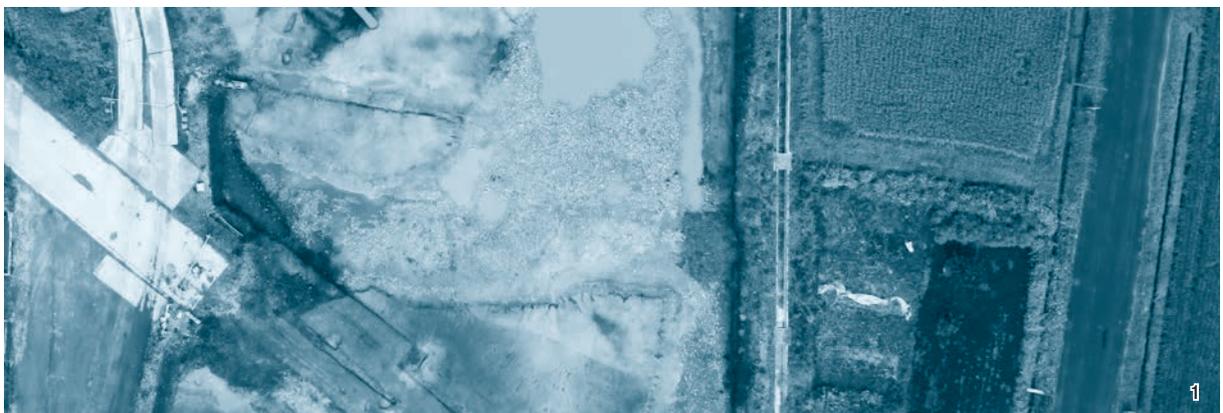
4 1号掘立柱建物跡柱穴(1)

1 P1全景(東から) 2 P2全景(東から)
3 P3全景(東から) 4 P4全景(南から)



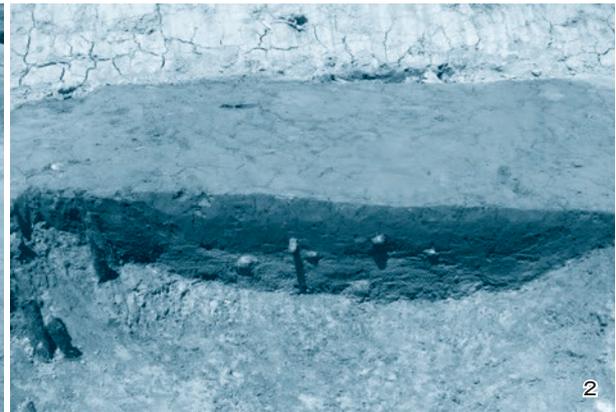
5 1号掘立柱建物跡柱穴(2)

1 P5全景(南から) 2 P6全景(南から)
3 P8全景(東から) 4 P9全景(東から)



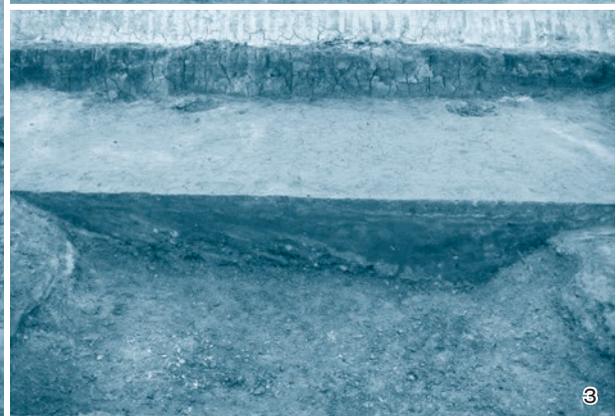
6 1・16号溝跡

1 1号溝跡全景(真上から) 2 1号溝跡断面(北から) 3 1・16号溝跡接点断面(南から)



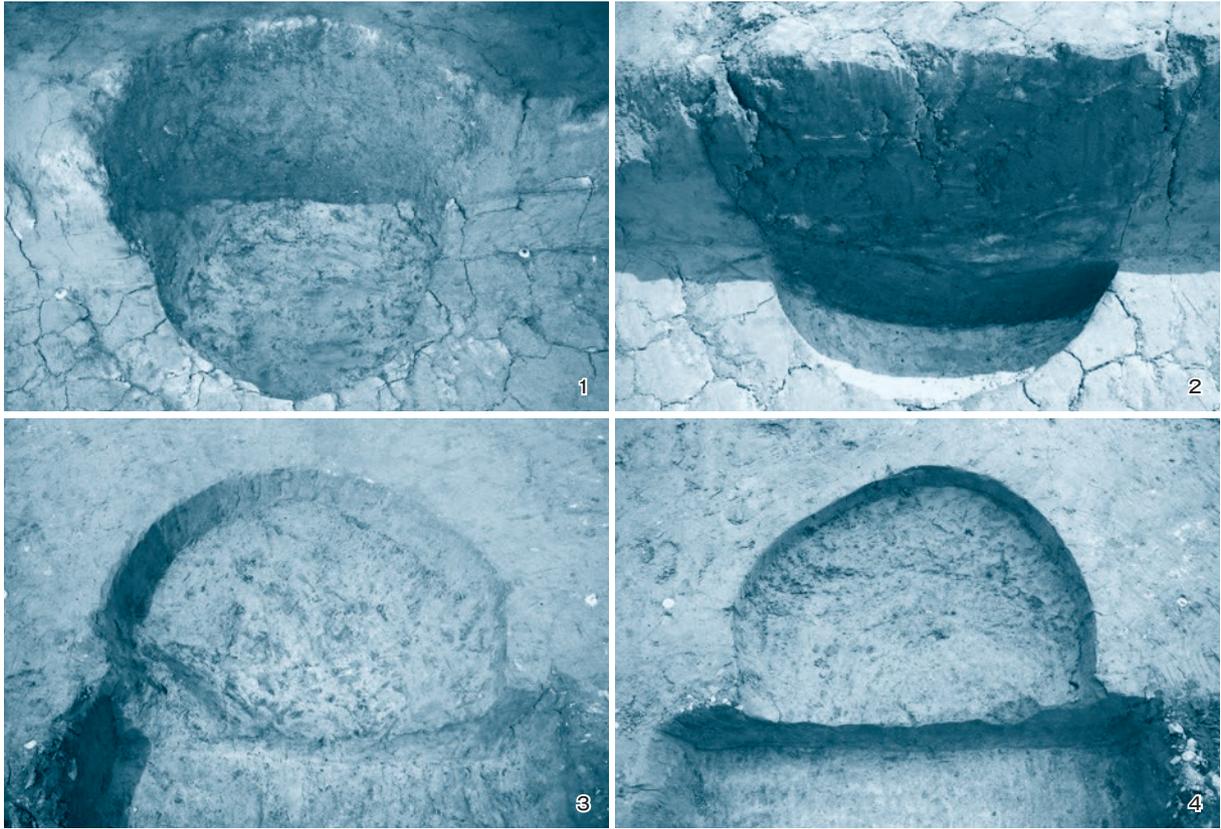
7 2号溝跡

1 全景(南から) 2 断面(東から)
3 検出西半部(東から) 4 検出東半部(南東から)



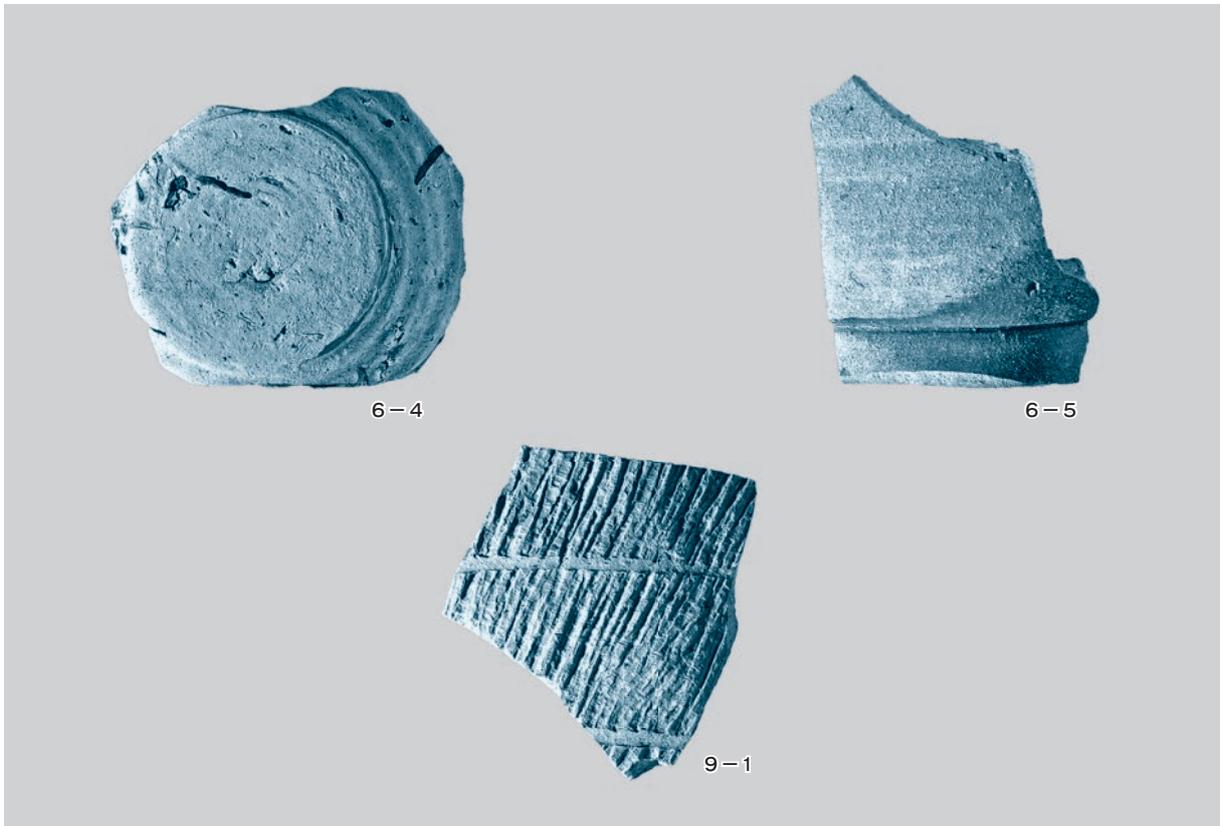
8 3号溝跡

1 全景(西から) 2 検出(西から)
3 断面(東から)



9 1～3号土坑

1 1号土坑全景（北から） 2 1号土坑断面（北から）
3 2号土坑全景（南から） 4 3号土坑全景（北から）



10 3号溝跡・遺構外出土遺物



11 作業風景

第4編 鶴沼B遺跡（1次）

第1章 調査経過

鶴沼B遺跡の第1次調査は、12,100㎡を対象に、平成25年4月15日～11月29日まで、のべ152日間にわたって実施した。本事業に伴う調査としては今年度が第1次となるが、平成7年度に会津若松市教育委員会が「木流遺跡」という遺跡名で試掘調査と発掘調査を実施している(石田1996)。今年度の調査区は工事の工程から南北に分断され、それぞれ北区、南区とした。面積は6,300㎡と5,800㎡である。両調査区は約80m離れ、この部分をプレハブ用地と排土置き場とし、次年度に調査の予定である。遺構の番号は両調査区それぞれに付し、本報告で別個に章を立てた。

調査は南区から開始した。まず第2沼川と市道高3-3号線間の2,300㎡を対象とし4月15日に表土剥ぎを開始した。この範囲には秋まで使用予定のU字溝と隣接する畑への接続道路があり、この部分は調査できなかった。4月22日に作業員を投入し、まもなく溝跡などを検出した。調査区の北部では大規模な自然流路跡を検出し、調査区の南部に延びることが判明した。しかし、調査区南半部では人工的に掘られた遺構のプランは明瞭である一方、自然流路跡のプランは不明瞭であった。そこで検出された遺構を調査したのち重機で掘り下げ流路跡の検出作業を改めて行った。

流路跡は、上部に堆積する黒色粘土層にはほとんど遺物が含まれておらず、下部の砂礫層に平安時代の遺物を含むことがサブトレンチの掘削により判明した。この大規模な流路跡をすべて人力で掘り上げることは調査の日程上不可能と判断し、上部の無遺物層を機械で掘削し、遺物を多く包含する下層のみを人力で掘削することとした。測量業者による測量杭の打設は5月24日に行った。

6月10日には、市道付け替え工事完了に伴い、旧市道部分1,500㎡の調査を開始した。この部分はボックスカルバート建設のため、7月末日まで引き渡してほしい旨の要望が工事側から示された。7月中下旬は連日の雨天で空撮を二度延期し、8月1日に空撮を行い、引き渡しは8月7日となった。残る部分も、8月末日の引き渡し日が示され、8月28日に引き渡しを行った。

この間、7月22日から市道西側の表土剥ぎを開始した。連日の雨で表土剥ぎは難行したものの、8月下旬から検出作業を始め、市道東側部分の引き渡しに伴い、調査は市道西側に移行した。

9月は天候に恵まれて調査がはかどり、10月2日に空撮、同8日に南区の調査を終了、同15日に引き渡しを行った。市道西側の調査区に関しては調査側で調査区の埋戻しを行った。

北区は、4月26日に北端部のボックスカルバート建設予定部分2,100㎡の表土剥ぎを開始し、5月9日から人力による作業を開始した。同17日頃、隣接する水路から調査区内に水が流入して水没する事態となった。調査を再開できたのは6月24日で、8月29日に引き渡しを行った。

8月19日に残り4,200㎡の表土剥ぎを開始した。9月中旬から調査の一段落した西坂才遺跡の作業員を投入し、10月9日に南区から移動した作業員が加わった。調査は11月28日に終了し、翌29日に引き渡しを行い、本遺跡における本年度の調査を終了した。(青山)

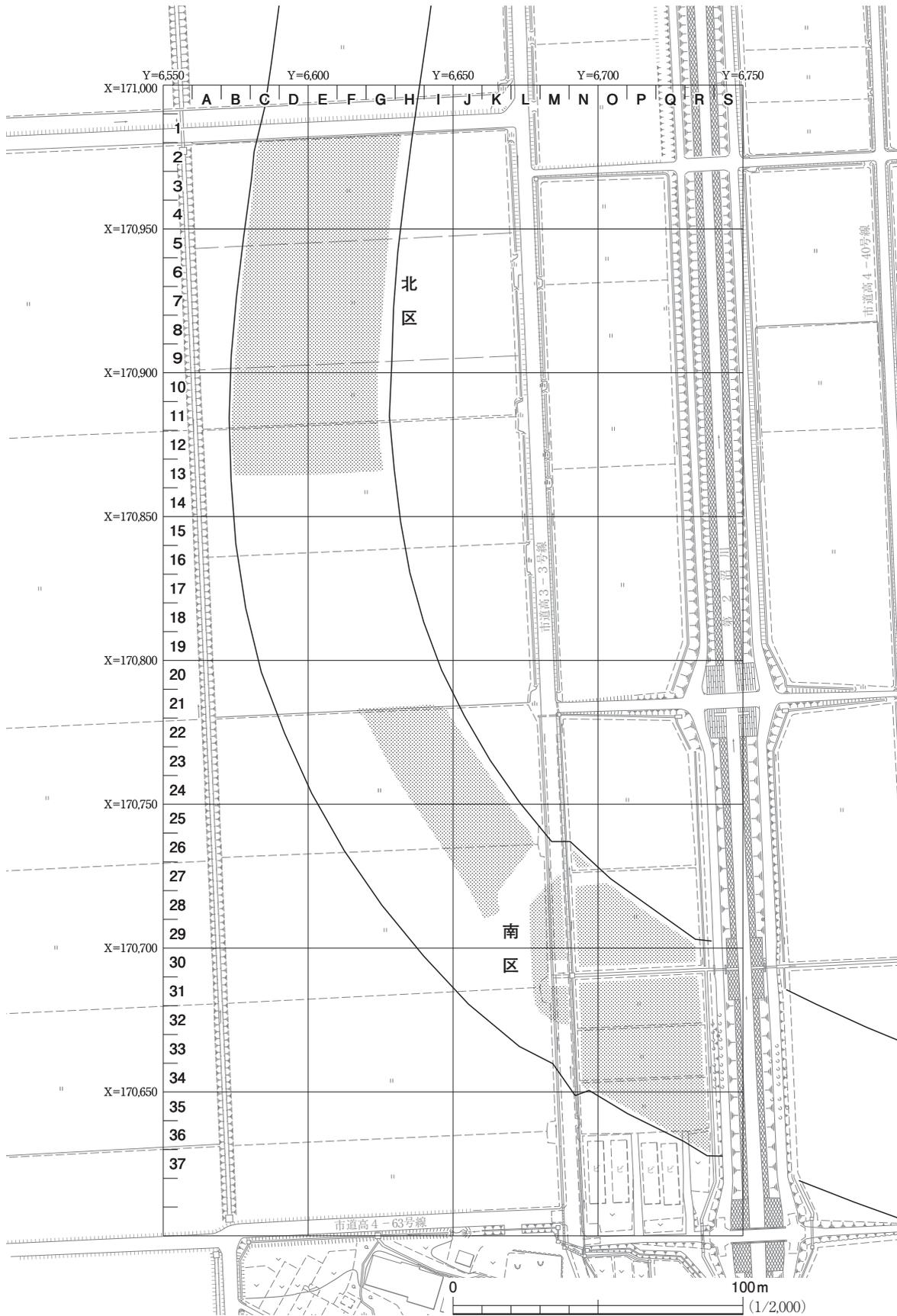


図1 グリッド配置図

第2章 北区の遺構と遺物

第1節 遺構の分布とサブトレンチ

今回の調査では、土坑6基、溝跡3条、ピット14個、堰状遺構1基、性格不明遺構2基、流路跡2か所が見つかった。遺構配置図を図2に示した。このうち、土坑6基と溝跡1条とピットについては、調査区中央西側の表土直下にLⅢが露出している地区で検出された。その時期については、平安時代9世紀のものと近世以降のものが混じっている

流路跡はLⅢが露出している部分を取り囲むように検出され、大きく新旧2時期に分離ができた。

北区の基本土層についても、南区と共通しており(図41)、中央西側ではLⅢが露呈しており、他は河川流路跡堆積物に覆われている形となっている。

調査区北側の2,000㎡については、遺構検出段階で、複数の土層が認められ、1号溝跡以外に明確な遺構が認められなかった。そのため、まず1m幅のサブトレンチを9本設定し、遺物の出土状況を確認した(図11)。サブトレンチの土層断面では、止水湿地堆積物である黒褐色粘土と流水堆積物である粘土と砂の互層が確認された。各サブトレンチの中でも、遺物の集中する地点、あるいは遺存状況の非常に良好な遺物が出土した地点があり、その地点を中心として、3か所に深掘りグリッドを設定した。トレンチを設定した段階で遺物の密度が薄かった上部土層を重機で削除し、その下部について手掘りで調査を実施した。図示遺物について、以下で概観したい。

縄文土器・弥生土器 (図3, 写真16・30)

図3-3は縄文後期後半の深鉢である。同図1・2は縄文晩期の深鉢、同図10は弥生前期の壺である。同図4~9も同じ時期の粗製土器と思われる。同図12は弥生土器で、体部上半に沈線と磨消縄文による文様が入りその下に下向きの弧文が入る天王山式の広口壺である。

土師器・須恵器 (図3~5, 写真16・17・33・34)

図3-11・13~17は古墳前期の土師器で、11が台付甕、13~15が甕、16が壺、17が器台である。14は外面にハケメのちタタキ、内面にケズリが施される。図4-1~4がロクロ成形の土師器杯で内面に黒色処理とミガキ、外面体部下端に回転ヘラケズリが施される。4には「吉」の墨書がある。

図4-5~9が須恵器杯で7~9には体部にそれぞれ「大」、「千」、「常」か「當」の墨書がある。

図4-10は底部に糸切り痕を残し、体部下端に手持ちヘラケズリが施された須恵系土器杯である。

図4-11・12は土師器甕で、ロクロ成形の長胴甕の口縁部である。

図4-13は須恵器甕で、体部から底部で明瞭なロクロナデの痕跡が残っている。同図14~17、図5-1~3が大甕である。図5-4は焼台である。

木製品 (図5, 写真17)

図5-5が曲物底板、同図6が堰状遺構杭列の杭である。

(藤谷)

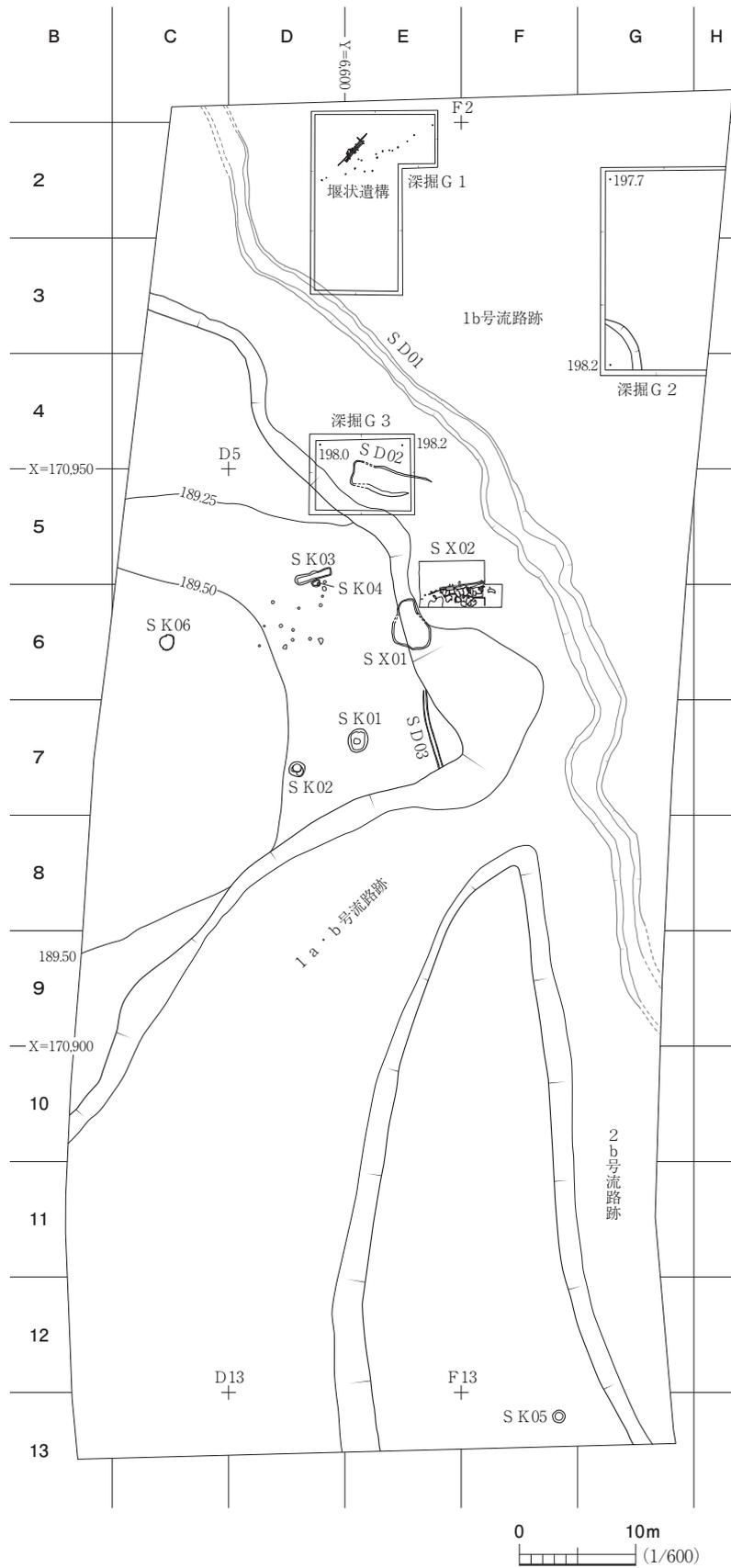


図2 北区遺構配置図

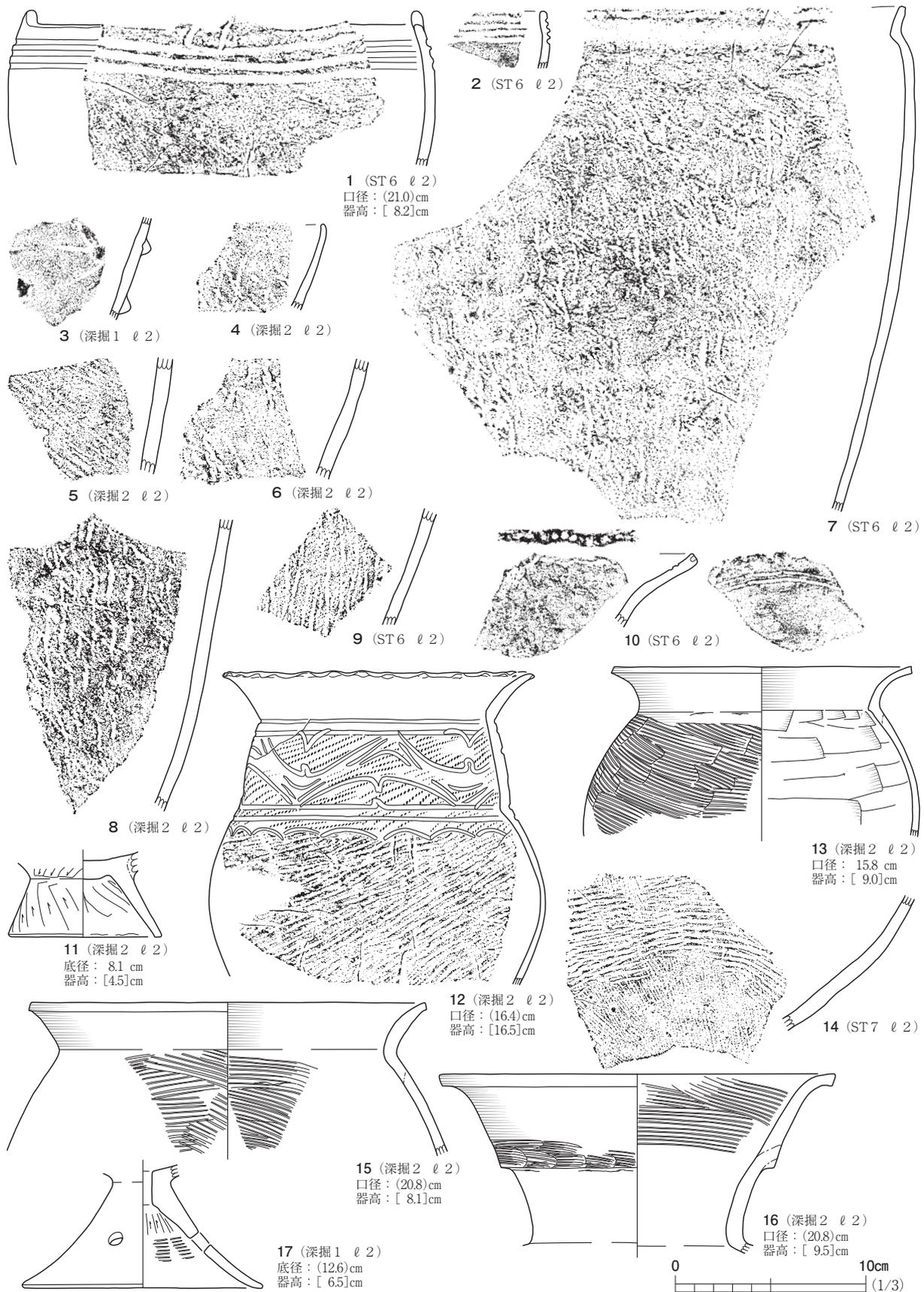


図3 深掘りグリッド出土遺物 (1)

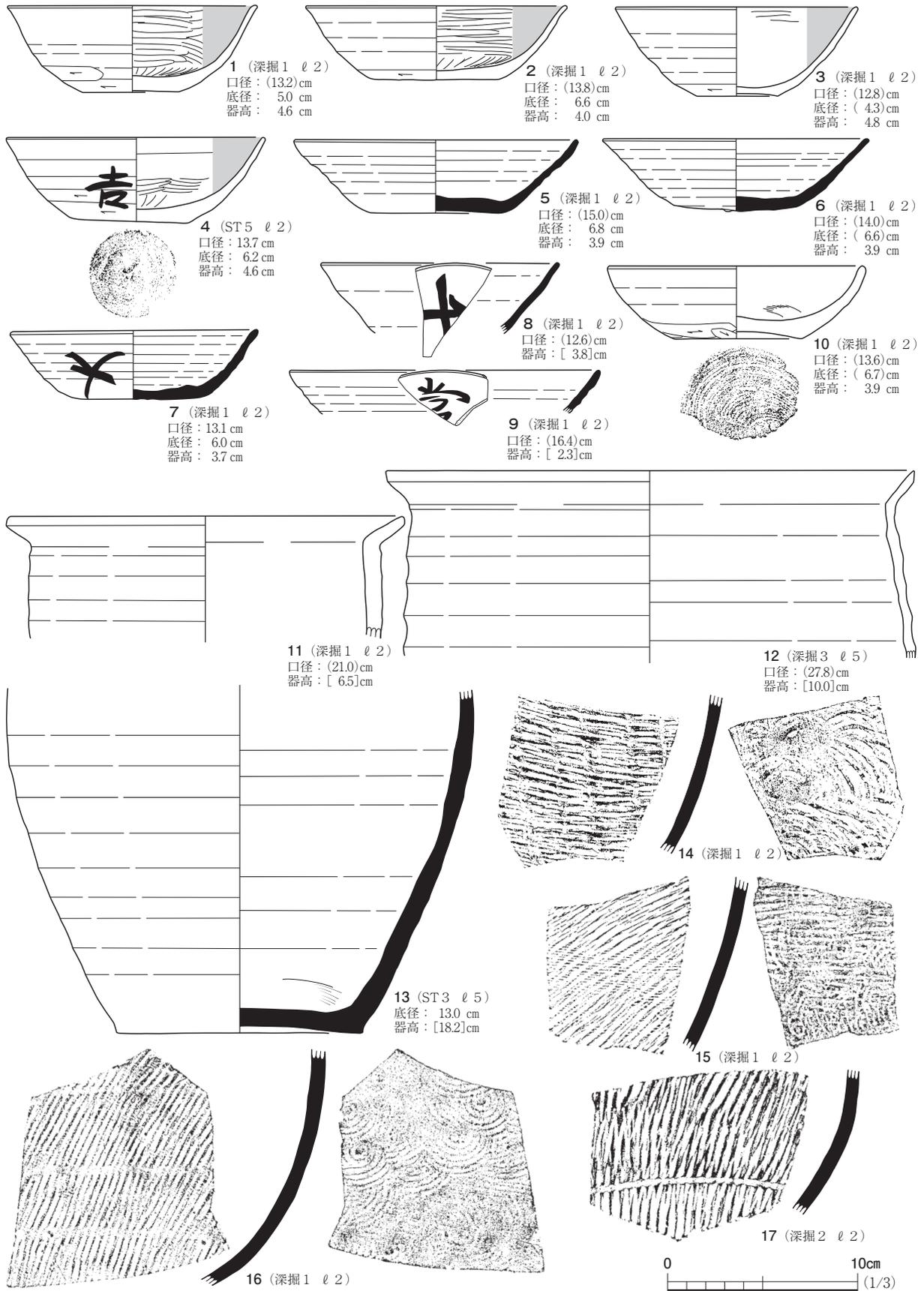


図4 深掘りグリッド出土遺物（2）

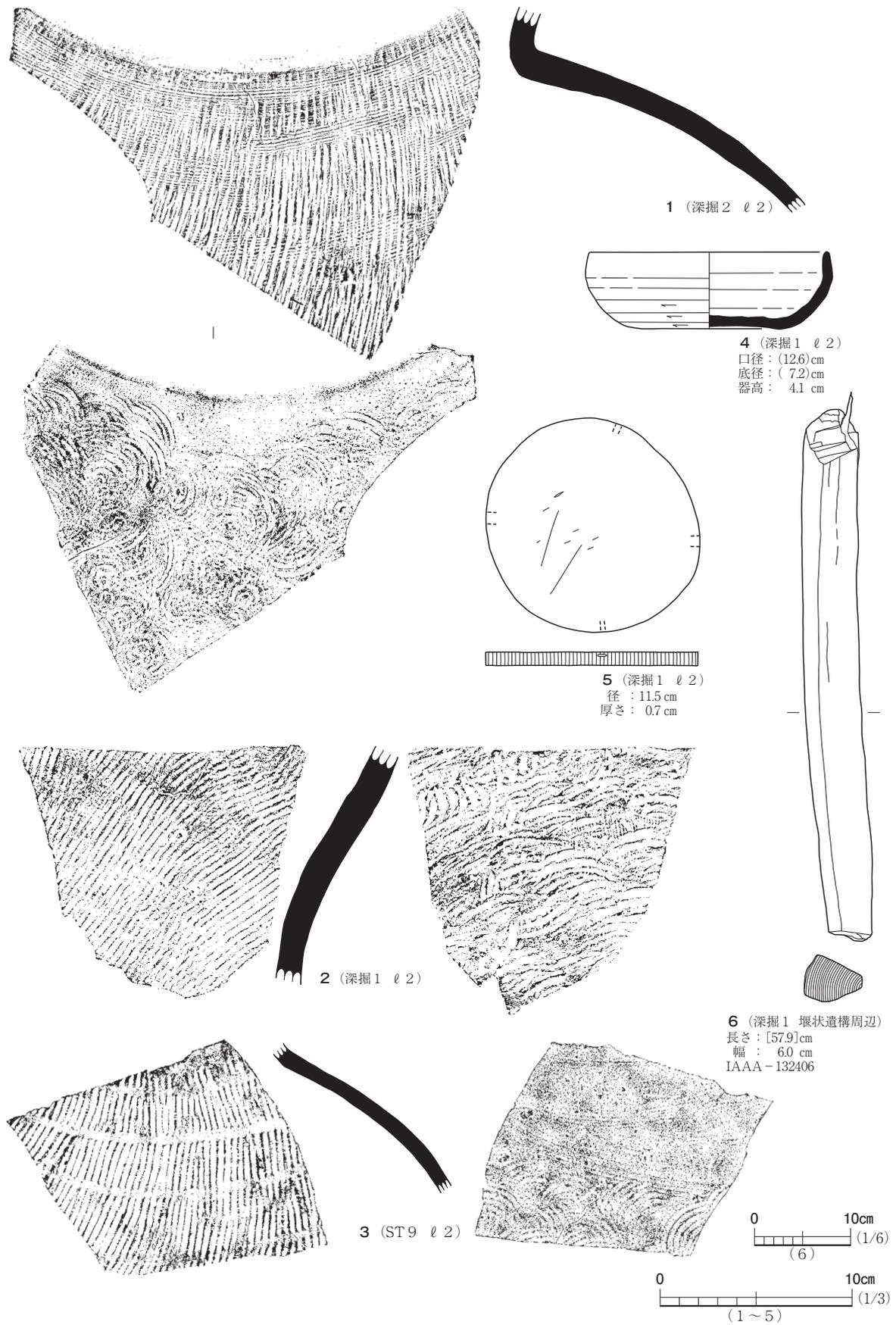


図5 深掘りグリッド出土遺物 (3)

第2節 土 坑

1号土坑 SK01（図6，写真6）

1号土坑は、調査区ほぼ中央のE7グリッドに位置している。周辺には、西側に2号土坑が位置している。遺構検出面はLⅢ上面となっている。

土坑の平面形は上部が長軸2.07mの楕円形を呈しており、最深部で検出面からの深さは68cmとなっている。壁面の立ち上がりは中ほどで段が付く形態で、それより以下の部分に筵状の炭化物が貼りつく形となっている。堆積土はブロック土を含む2層で、堆積状況から、人為堆積と考えられる。

遺物は、ロクロ土師器の細片と剥片が出土している。

本土坑は堆積土が平安時代の遺構と異なり、検出面でのLⅢとの境界も明瞭なところから、近世以降の可能性はあるが、性格は不明である。（藤 谷）

2号土坑 SK02（図6，写真6）

2号土坑は、調査区中央よりやや西側のD7グリッドに位置している。周辺には、東側に1号土坑が位置している。遺構検出面はLⅢ上面となっている。

土坑の平面形は、上部の径1.35mの円形を呈しており、最深部で検出面からの深さは74cmとなっている。壁面の立ち上がりは中ほどで段が付く形態で、堆積土は、ブロック土を含む3層からなる。堆積状況は、人為堆積と考えられる。

遺物は、堆積土中からロクロ土師器と須恵器の細片が出土している。

本土坑は堆積土が平安時代の遺構と異なり、検出面でのLⅢとの境界も明瞭なところから、1号土坑と同時期で近世以降の可能性はあるが、性格は不明である。（藤 谷）

3号土坑 SK03（図6，写真6）

3号土坑は、調査区中央よりやや北側のD5・6グリッドに位置している。周辺には南側に4号土坑が隣接している。遺構検出面は、LⅢ上面となっている。

土坑の平面形は、長軸3.2m、幅58～88cmの長楕円形を呈している。検出面からの深さは最深部で22cmとなっている。断面は鍋底状を呈し、底面は平坦であった。堆積土はブロック土を含む暗褐色土1層で、堆積状況は人為堆積と考えられる。

遺物は、堆積土中からロクロ土師器の細片が出土している。

本土坑は、平安時代の遺物が出土しており、検出面での遺構境界が不明瞭で堆積土が平安時代の遺構と近似するところがあることから、平安時代9世紀の遺構と思われる。また、性格については、不明である。（藤 谷）

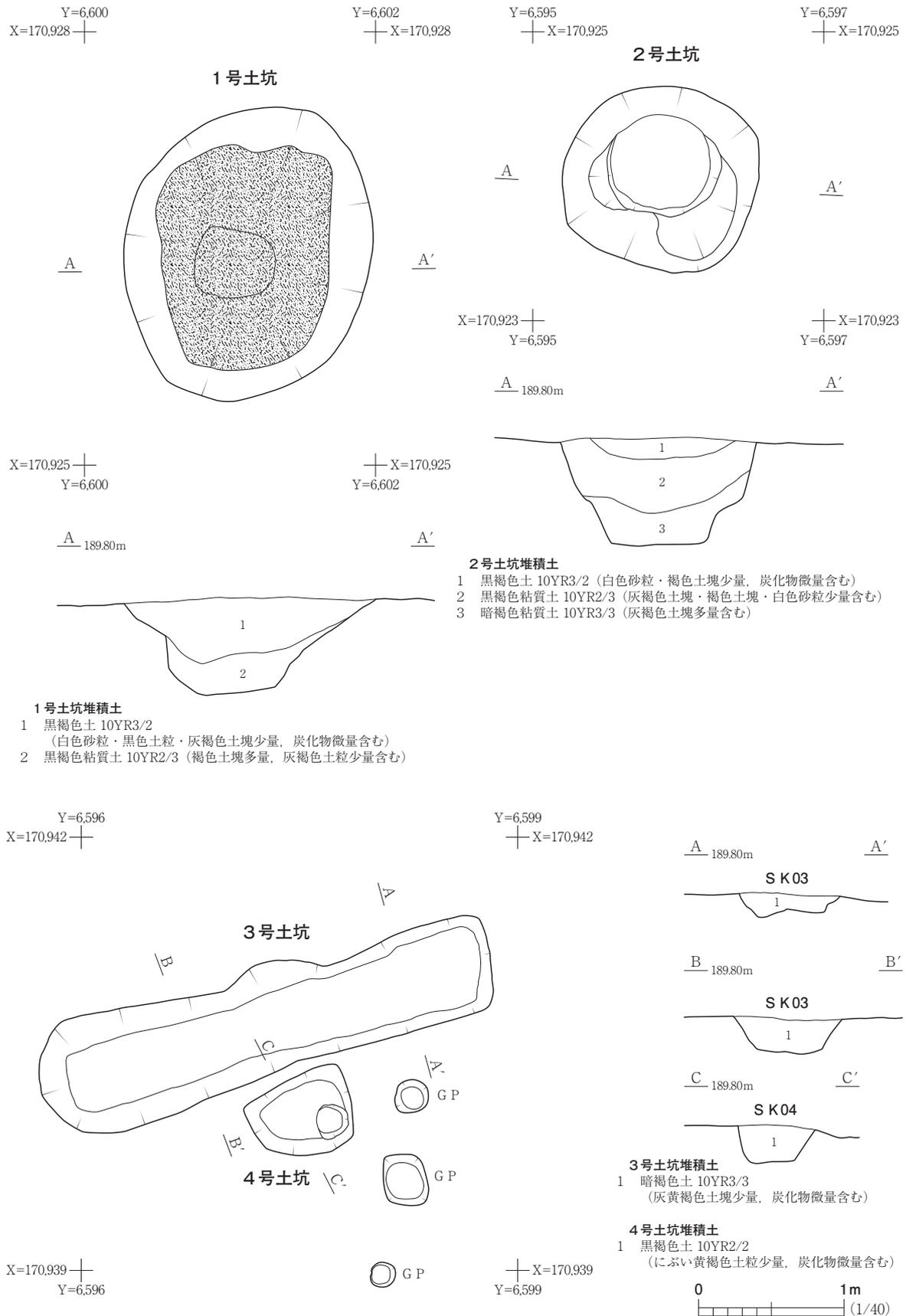


図6 1～4号土坑

4号土坑 SK04（図6，写真6）

4号土坑は、調査区中央よりやや北側のD5・6グリッドに位置している。周辺には北側に3号土坑が隣接している。遺構検出面は、LⅢ上面となっている。

土坑の平面形は、長軸73cmの不整楕円形を呈している。検出面からの深さは最深部で26cmとなっている。断面は鍋底状を呈し、底面は平坦であった。堆積土はブロック土を含む黒褐色土1層で、堆積状況は人為堆積と考えらえる。

遺物は出土していないが、3号土坑の堆積土と近似する堆積土の状況やその位置関係から、3号土坑と同様に平安時代9世紀の遺構である可能性がある。また、性格については、不明である。

（藤 谷）

5号土坑 SK05（図7，写真6）

5号土坑は、調査区南端のF13グリッドに位置している。周辺には東側に2b号流路跡が位置している。遺構検出面は、1・2号流路跡間にある氾濫砂層となっている。

本土坑は桶を埋置した遺構と考えられる。桶は径68cmで、ほぼ底面に据えられた形で出土した。掘形は円形を呈し、その規模は径1.05m、検出面からの深さが33cmとなっている。底面は桶の形に沿って中央がややくぼむ形となっている。裏込めの堆積土は灰黄褐色粘質土、桶内部の堆積土は暗褐色粘質土である。

遺物は出土していないが、堆積土が古代のものと明らかに異なり、検出面との境界も明瞭なところから近世以降の遺構であると考えられる。その性格は、骨等の出土はないものの墓坑の可能を指摘しておきたい。

（藤 谷）

6号土坑 SK06（図7，写真6）

6号土坑は、調査区西側のC6グリッドに位置している。周辺には東側にピット群が位置している。遺構検出面はLⅢ上面となっている。

本土坑は、平面形が長軸1.42mの楕円形を呈している。検出面からの深さは、最深部で55cmとなっている。底面は平坦で、土層は裏込め土と思われる明黄褐色粘質土と、中央部の暗褐色粘質土の2層である。桶の出土はなかったが、断面の土層状況から桶を埋置し、それを取り去った状況がうかがえる。

遺物は出土していないが、5号土坑と同様に堆積土が古代のものと明らかに異なり、検出面との境界も明瞭なところから、近世以降の遺構であると考えられる。その性格は、骨等の出土はないものの5号土坑と同様、墓坑の可能性を指摘しておきたい。

（藤 谷）

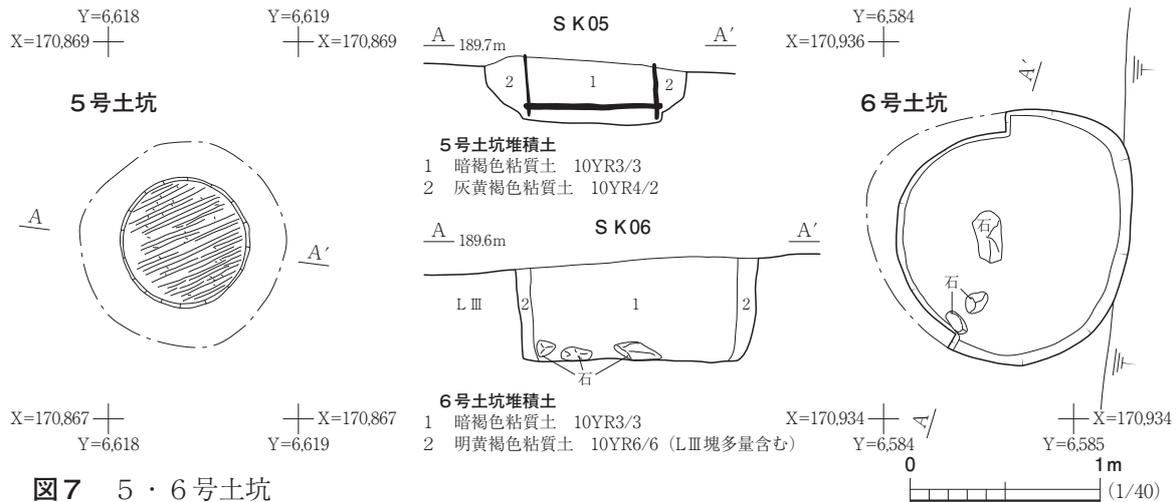


図7 5・6号土坑

第3節 溝 跡

1号溝跡 S D 01 (図8・9, 写真5・18・31)

1号溝跡は、調査区北壁西側から東壁中央よりやや南にかけて、調査区を北北西から南南東方向に縦断する形で検出された溝跡である。検出面は流路跡上部堆積土となっている。南側で2b号流路跡とは重複関係にあり、その上部に位置している。

溝の全長は約90mである。北から見るとD3グリッド付近で屈曲し、F5グリッド付近が広がり、それより南側の東西に蛇行する形態となっている。幅は、狭いところで1.8m、広いところで3.6mほどある。検出面からの深さは、最深部で50cmである。溝跡の東壁、西壁にも土留めと思われる杭列があり、特にE4グリッド～G7グリッドにかけてで、残りが良かった。堆積土は、5層からなり、それぞれ流水の作用によって形成された層と思われる。

遺物は、堆積土中と底面より、土師器、須恵器、須恵系土器、陶磁器、木製品、金属製品、石製品が出土している。図9に示した。

図9-1が土師器高台杯、2が須恵系土器皿、3が土師器甕である。4～7が須恵器で、4が杯、5～7が大甕の体部である。8～14は木製品である。8～11は挽物椀で、内外面に朱漆が塗られている。12も挽物椀である。13が用途不明木製品である。14は近世の木簡である。15はキセルの雁首、16・17は砥石である。部分的に堆積土中よりガラス瓶も出土している。

本溝跡は、ほ場整備前まで農業用水として使われていた溝跡であると思われる。作られた年代は近世まで遡る可能性がある。(藤谷)

2号溝跡 S D 02 (図10, 写真5)

2号溝跡は、調査区北側のE4・5グリッドで検出された溝跡である。東西に長く、東側に更に続く可能性も考えられたため、土坑ではなく溝跡として報告した。西側がサブトレンチで破壊され

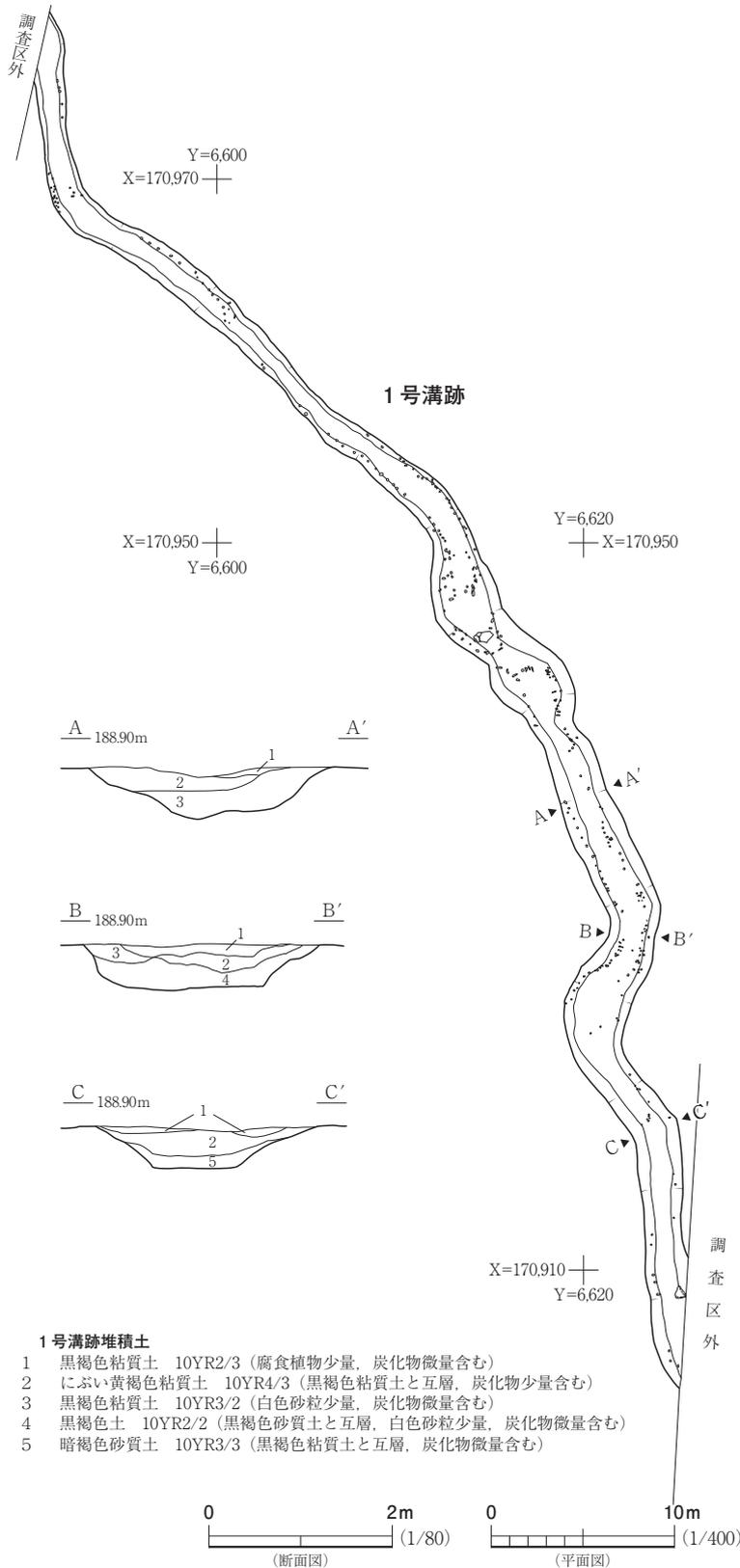


図8 1号溝跡

ており、調査終了後には、本溝跡を含む場所に深掘りグリッド3を設定した。検出面は流路跡の上部堆積土である黒褐色粘質土となっている。

溝跡の規模は、東西方向の全長6.4m、幅1.8～2.3mである。検出面からの深さは、最深部で20cmである。堆積土は、黒褐色土1層で、堆積状況は自然堆積と考えられる。

遺物は、堆積土中より土師器の細片が出土している。

本溝跡からは古代の遺物が出土しているが、古代の流路跡上部の堆積土を掘り込んで作られているところから、それ以後の時期のものと思われる。また、堆積土が近世以降のものとも明らかに異なることから、それ以前の時期のものと思われる。性格は不明である。（藤谷）

3号溝跡 S D 03
(図10, 写真5)

3号溝跡は、調査区中央のE6・7グリッドで検出された溝跡である。南北方向に延びる溝跡で、長く、南側は流路に続いている。堆積土の状況から流路跡との明確な重複関係は認められなかった。遺構検出面はLⅢ上面となっている。

溝跡の規模は、南北方向の全長7.2m、幅24～42cmである。

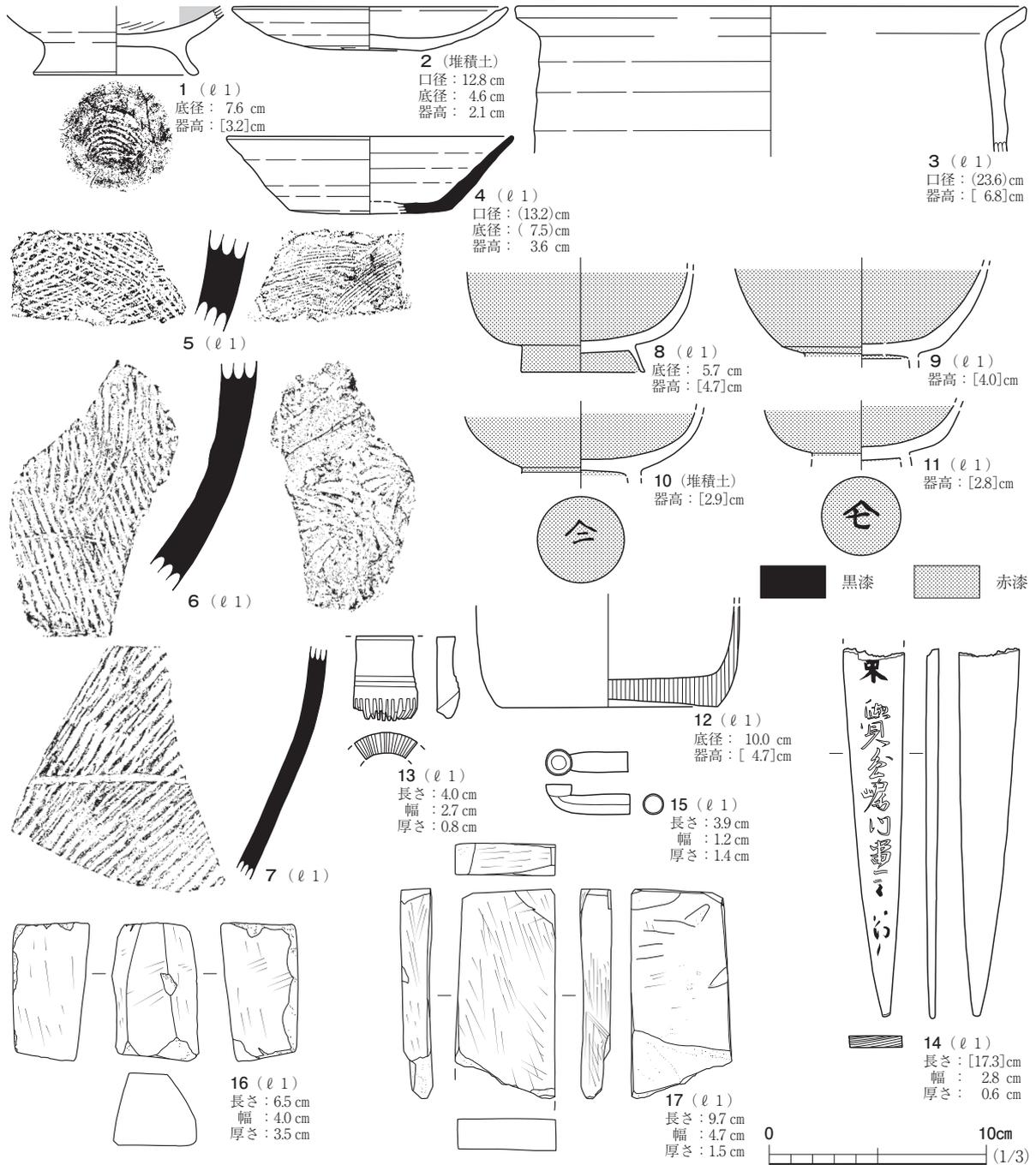


図9 1号溝跡出土遺物

検出面からの深さは、最深部で27cmである。断面はU字状を呈し、底面の高さは北側が南側より13cm程低い。堆積土は、黒褐色土1層で、堆積状況は自然堆積と考えられる。

本溝跡から、遺物は出土していないが、堆積土が他の古代の遺構と近似し、流路跡堆積土上面で検出できなかったところから、古代の溝跡の可能性はあるが、その性格は不明である。(藤谷)

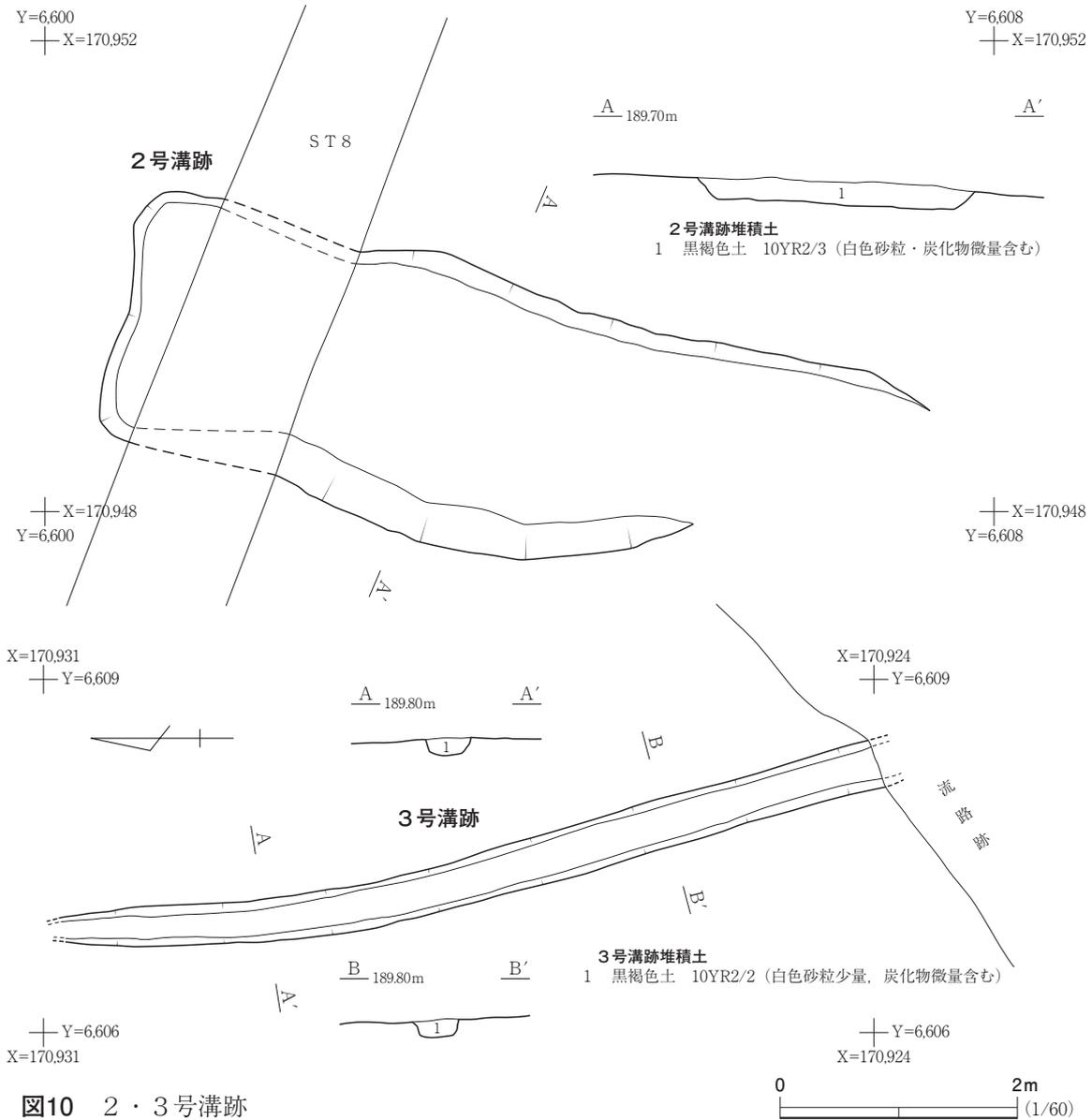


図10 2・3号溝跡

第4節 流路跡

1 a・b号流路跡, 2 a・b号流路跡

遺 構 (図15～20, 写真3)

今回、北区から明確な流路跡は2か所で検出された。大きくは流路跡機能停止後に止水状態で存在したと推定される上部の流路跡を1 a・2 a号流路跡とした。流路跡機能時の調査区下部で明確となった流路跡を1 b・2 b号流路跡とした。検出された調査区は湧水がひどく、大まかなグリッドラインに沿って任意のグリッドを設定し、断面の状況を確認しながら調査を進めた。以下で各流路跡について概観する。

1 a号流路跡は、B 10～12グリッド付近の調査区西壁から中央付近を通過して、G 5・6グリッ

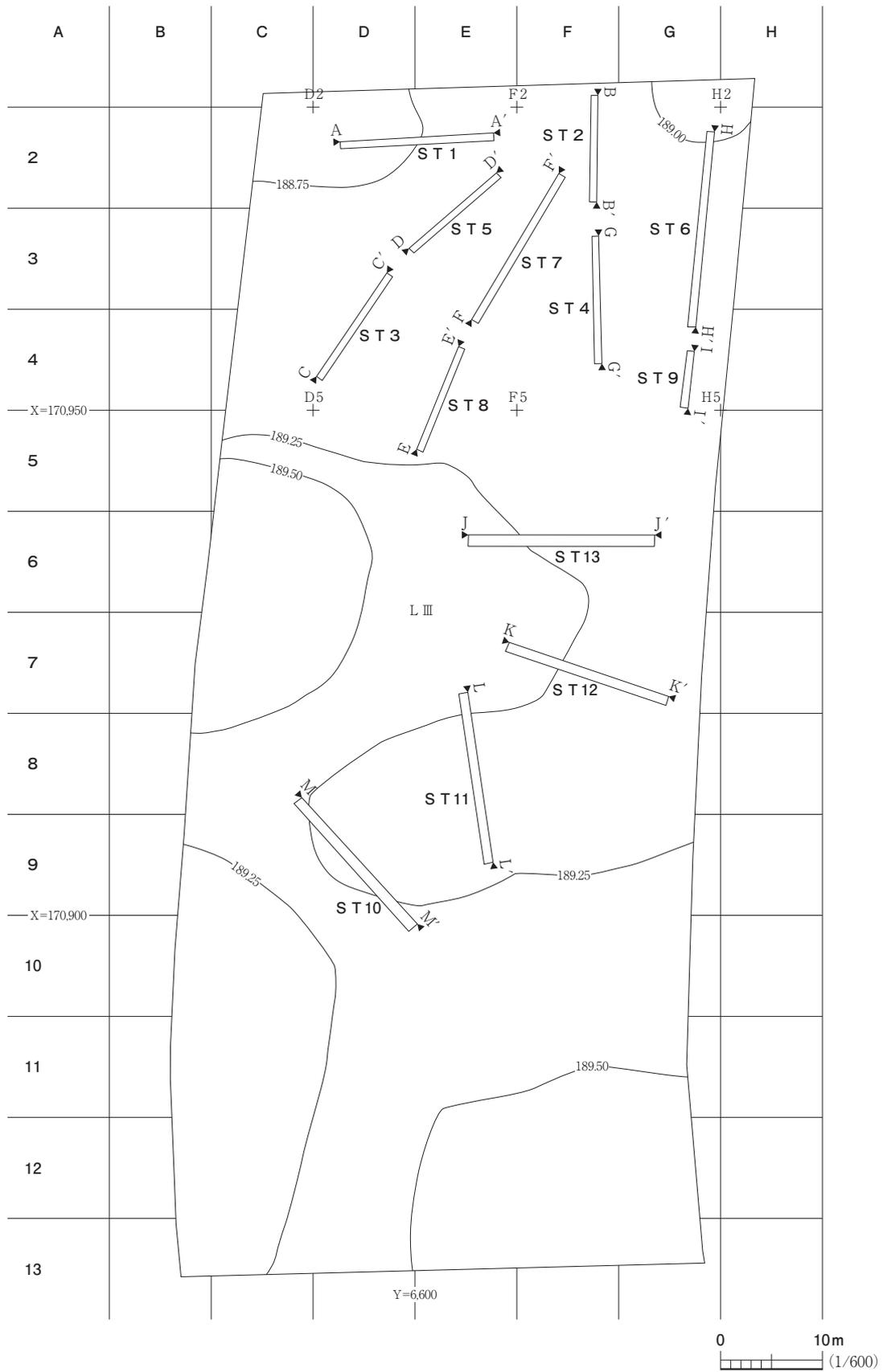


図11 1・2号流路跡サブトレンチ壁断面位置図

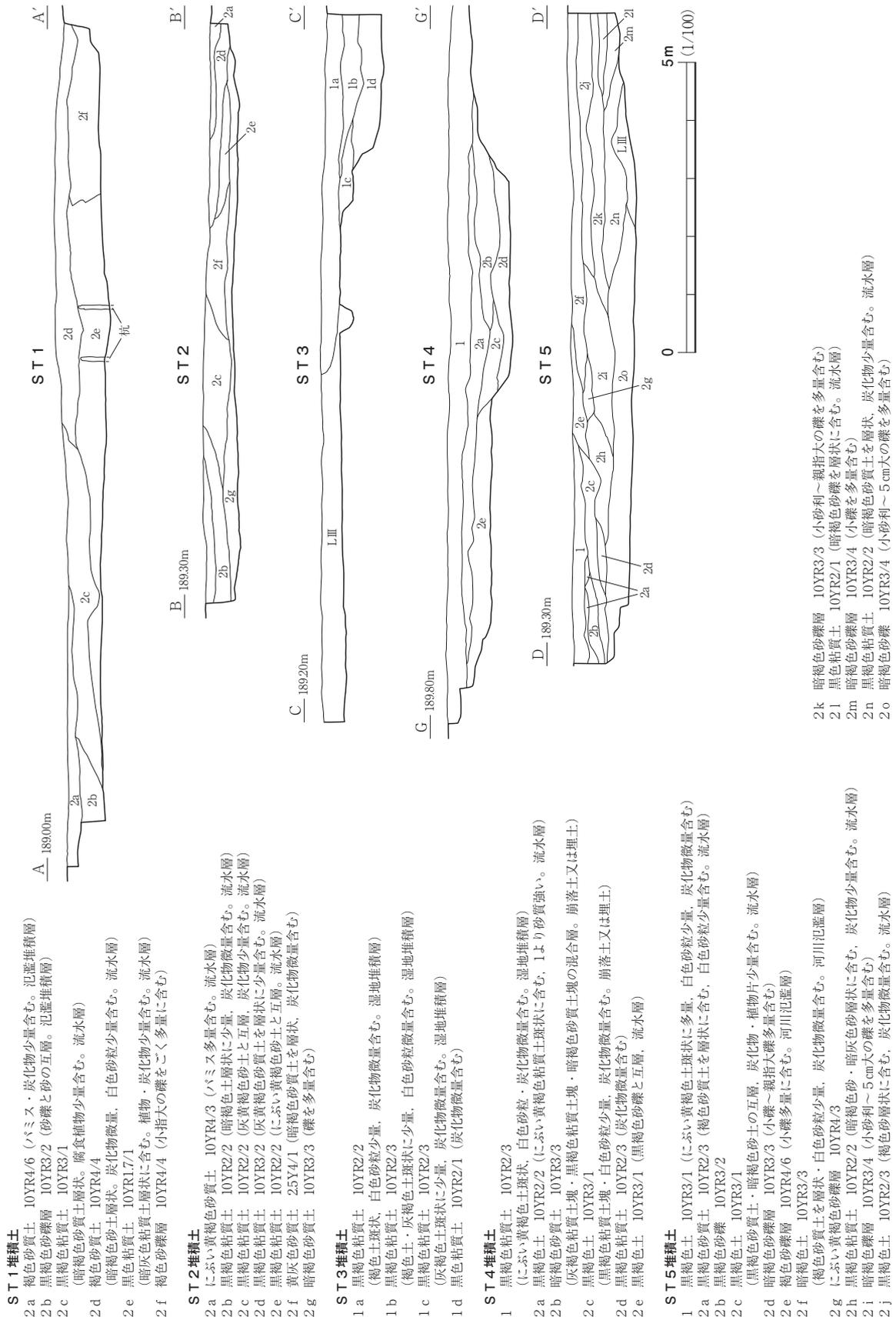


図12 1・2号流路跡サブトレンチ土層断面図(1)

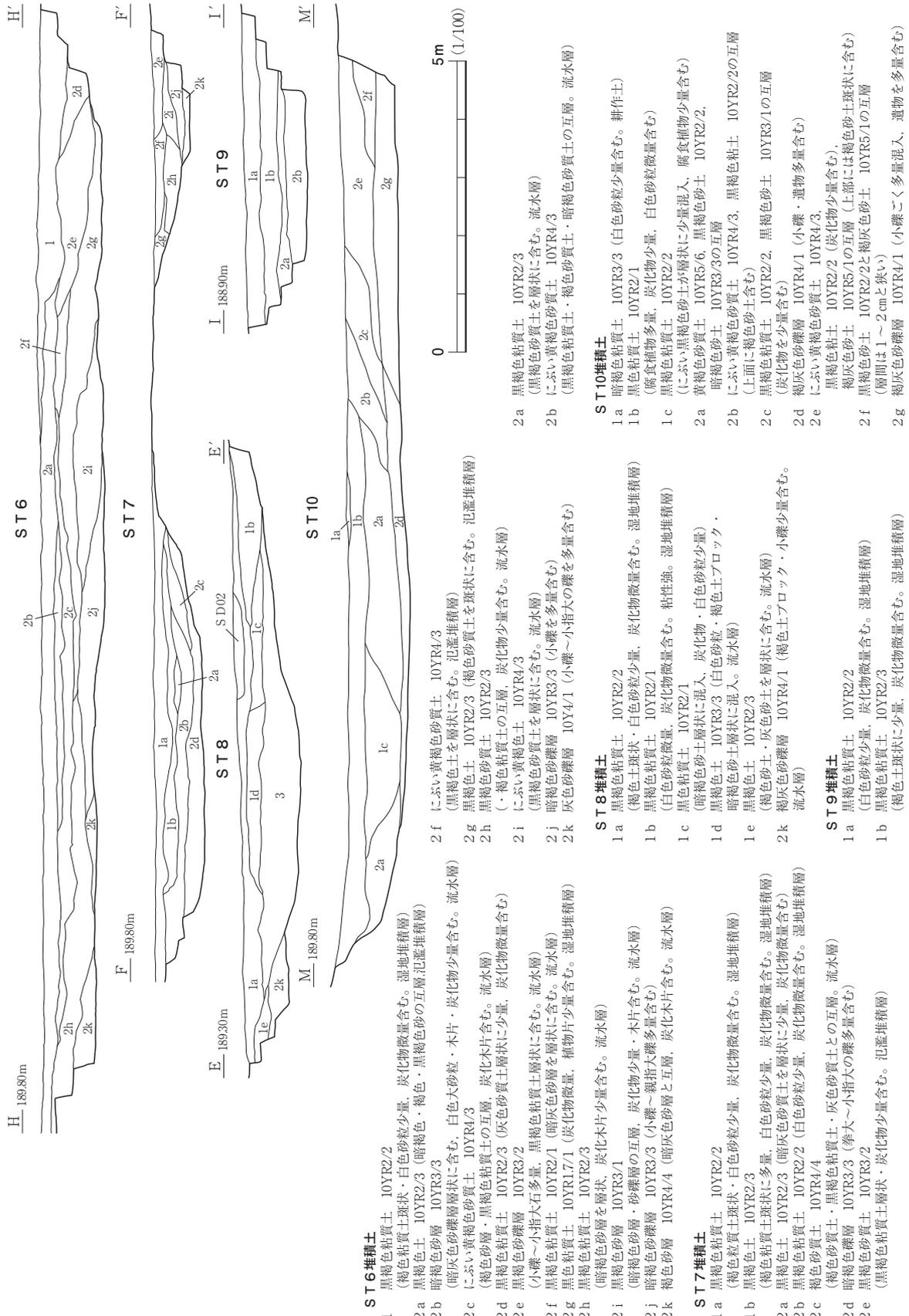


図13 1・2号流路跡サブトレレンチ土層断面図(2)

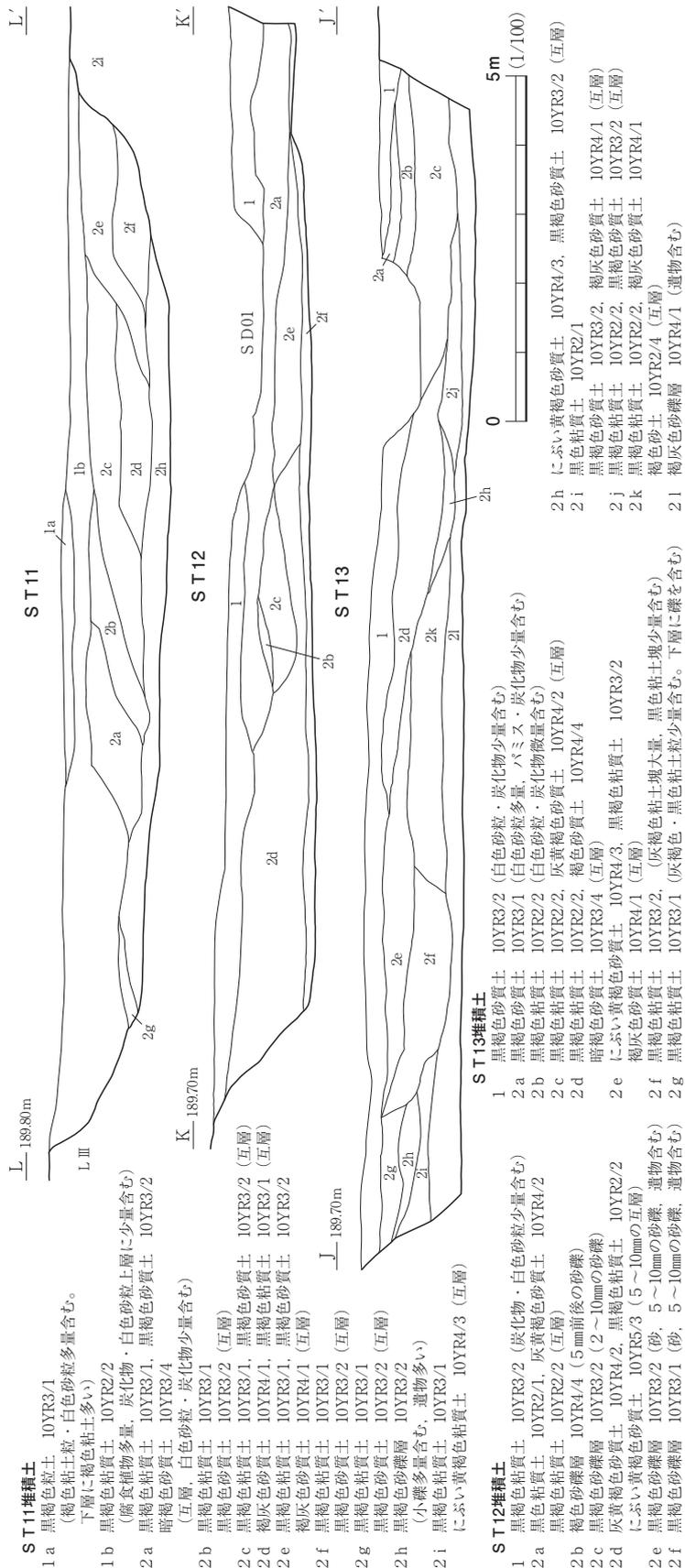


図14 1・2号流路跡サブテラス土層断面図 (3)

ド付近の調査区東壁に向かって、南西から北東方向に延びている。

その規模は、調査区内での長さが約70m、南西側の最大幅が10.5m、中央よりやや東側の最小幅が55cmである。検出面については、北西側がLⅢ上面となっており、明確に検出することができたが、その他については、1b号流路跡も含めた河川氾濫土堆積物があり、断面の状況から幅を推定する形となった。検出面からの深さは、最深部で1.5mとなっている。

堆積土は黒褐色土粘質土で、一部に灰黄褐色砂質土が認められる部分もある。黒褐色粘質土は、止水状態で堆積した腐食を多く含む層で、上部の状況を良く示したものである。

2a号流路跡は、D~G13グリッド付近の調査区南壁の東側2/3から、東壁の南半部に広がっている。調査区内では西側範囲のみが検出されており、西壁がE12とG12グリッドの2か所付近で屈曲している。

その規模は、南壁での長さが約36m、東壁での長さが約49mである。南西側の最大幅が10.5m、中央よりやや東側の最小幅が55cmである。検出面については、2b号流路跡も含めた河川氾濫土堆積物があり、1a号流路跡同様

に断面の状況から幅を推定する形となった。検出面からの深さは、最深部で50cm程である。

堆積土は黒褐色土粘質土が中心となり、一部に灰黄褐色砂質土が認められる部分もある。黒褐色粘質土は、止水状態で堆積した腐食を多く含む層で、上部の状況を良く示したものと思われる。

1 b号流路跡は、調査区南西方向から北東方向に向かって伸びており、調査区中央よりやや東側で2 b号流路跡と合流し、更に調査区北西側に伸びている。調査区北半部については、北側端部については明確にできなかった。

その規模は、南壁での長さが約26m、西壁での長さが約30mである。ここから北西方向に向かって流路が狭まる状況となり、F 7・8グリッド付近でその幅は約10mとなっている。検出面については、西壁部分が1 a号流路跡と共通するLⅢ上面となっている。東壁は、河川氾濫土となっており、断面の状況から幅を推定する形となった。検出面からの深さは、最深部で1.6mである。底面のレベルは、北東側が低くなっており、南西から北東方向に流れた流路跡であったと思われる。

堆積土は粘質土と砂層の互層が堆積しており、典型的な流水堆積となっている。更にこの下部に礫層が堆積しており、大部分の遺物はこの礫層から出土している。

2 b号流路跡は、調査区東壁に沿って、南から北方向に向かって伸びており、調査区中央よりやや東側で1 b号流路跡と合流する。東壁は調査区外にあり、確定できなかった。

その規模は、調査区東南隅から1 b号流路跡との合流地点までの長さが約52mである。検出面については、西壁が河川氾濫土となっており、平面のラインは断面の状況からある程度推定する形となった。検出面からの深さは、最深部で1.1mである。底面のレベルは、北側が低くなっており、南から北方向に流れた流路跡であったと思われる。

堆積土は粘質土と砂層の互層が堆積しており、典型的な流水堆積となっている。更にこの下部に礫層が堆積しており、大部分の遺物はこの礫層から出土している。 (藤谷)

遺物 (図21～31, 写真19～28・30～32・34・35)

1 a・b号, 2 a・b号流路跡からは、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、須恵系土器、土製品、石器、石製品、鉄製品、木製品が出土している。総点数は4,747点で、大部分は平安時代前期の遺物である。1 b号流路跡からの出土量をもっとも多く、特に、B～D 11, C 10, D 9グリッドからはそれぞれ500点以上の遺物が出土した。これらのうち、縄文土器9点、弥生土器1点、土師器105点、須恵器31点、須恵系土器24点、土製品5点、石製品1点、鉄製品1点、木製品4点を図示した。

図21-1～9は縄文土器で、いずれも深鉢である。1・2は前期前葉の大木1～2 a式と考えられる。1は、波状口縁の口唇部に刻みを施し、波頂部に竹管による押捺を一か所施す。口唇部の刻みは細い粘土紐を貼り付けて行っている。波頂下にはボタン状の貼付が口縁に沿って多数付される。胎土に繊維混和痕がみられる。2は、条の方向を変えて菱形を構成する羽状縄文が施される。胎土に繊維混和痕がみられる。3は、前期後半の興津式と思われる。横位の並行沈線と爪形文が2～3条ずつ交互に巡らされている。4～6は、後期中葉の加曾利B式である。4は段を変えて交

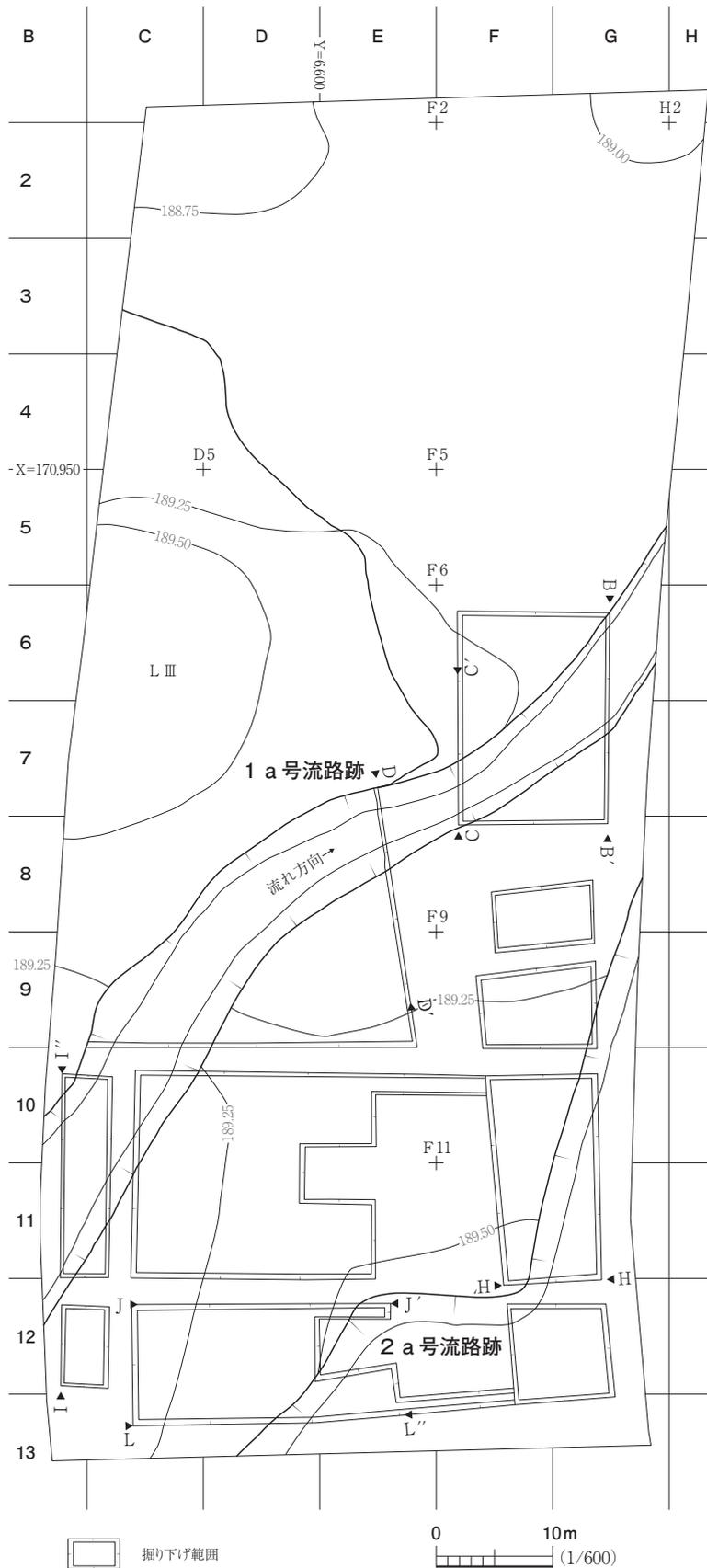


図15 1 a・2 a号流路跡

互に対向する横位の並行する沈線文, 5は併行する沈線を, それぞれ地文上に描く。6はふくらみをもつ胴上部に1条の沈線を巡らせ, その下に羽状の斜刻文を施す。7~9は地文のみの胴部片である。

図21-10は弥生土器である。口縁部と体部が明瞭な稜線をもって画され, 頸部に二本同時施文の並行沈線を巡らす。口縁部を外面側に肥厚させ, 面取りされた端部にL縄文原体による圧痕が刻まれている。複合部には爪形の押し引きが, 複合部の下端に交互刺突が巡らされている。交互刺突は竹管の端部による下方向からのものを2回連続して施したものを1単位とし, 単位間に正面からの刺突が加えられている。体部外面に炭化物が付着している。

図21-11~15は古墳時代前期の土師器である。11は有孔鉢, 12は高杯, 13~15は器台である。

図22・図23・図24-1~14は, ロクロ成形の土師器杯である。器型に, 身の深いもの(図23-17~25, 図24-1~5), 浅いもの(図24-6~14), その中間(図22, 図23-1~16)が認められる。外面にはロクロナデ, 内面にはいずれもミガキ

が、そのうち図23-19、図24-5・13・14を除いて黒色処理が施されている。外面の再調整は回転ヘラケズリがもっとも多く、図22-1~21、図23-1~5、10・11、13~25、図24-4・6・8・9・13、次いで多いのが手持ちヘラケズリで、図22-23、図23-12、図24-2・3・5・10・14である。図22-22・24、図24-1・7・11・12には再調整が施されていない。手持ちヘラケズリと再調整が施されていないものについては底面に回転糸切り痕が残されているものが多い。図22-4、図23-5は回転ヘラケズリ前の回転糸切り痕が観察される。図24-2のみは静止糸切りである。内外面に黒色処理が施されているのは図23-4・7、図24-1で、このうち図23-4は内外面全体に光沢をもつほどに丁寧なミガキ調整が加えられている。同図8・9には外面にロクロナデののち横方向のミガキが加えられている。図24-5・13・14は、内面にミガキ調整は施されているものの黒色処理は施されていない。内面にミガキが加えられていることから土師器に含めたが、黒色処理が施されていない点は須恵系土器に近い。図22-3・9、図

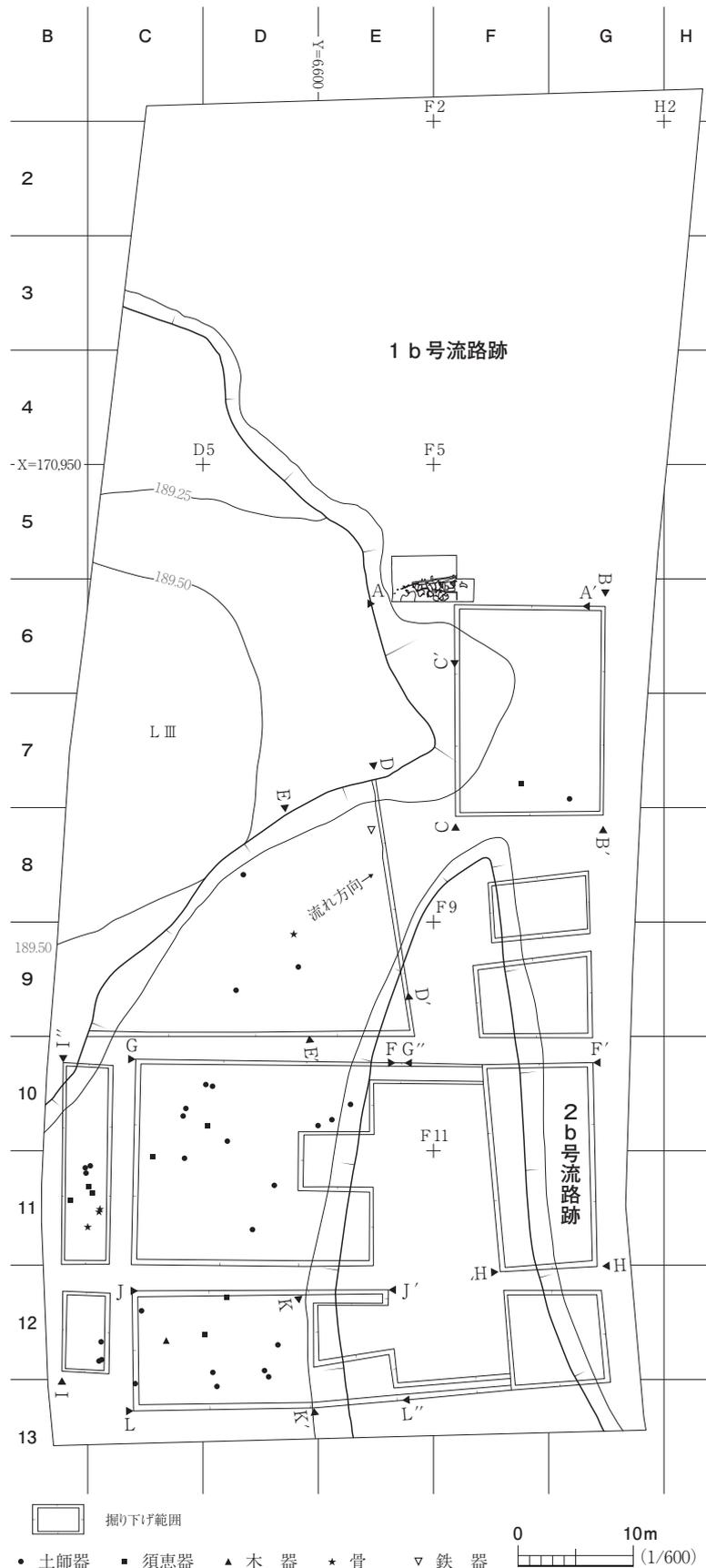


図16 1b・2b号流路跡

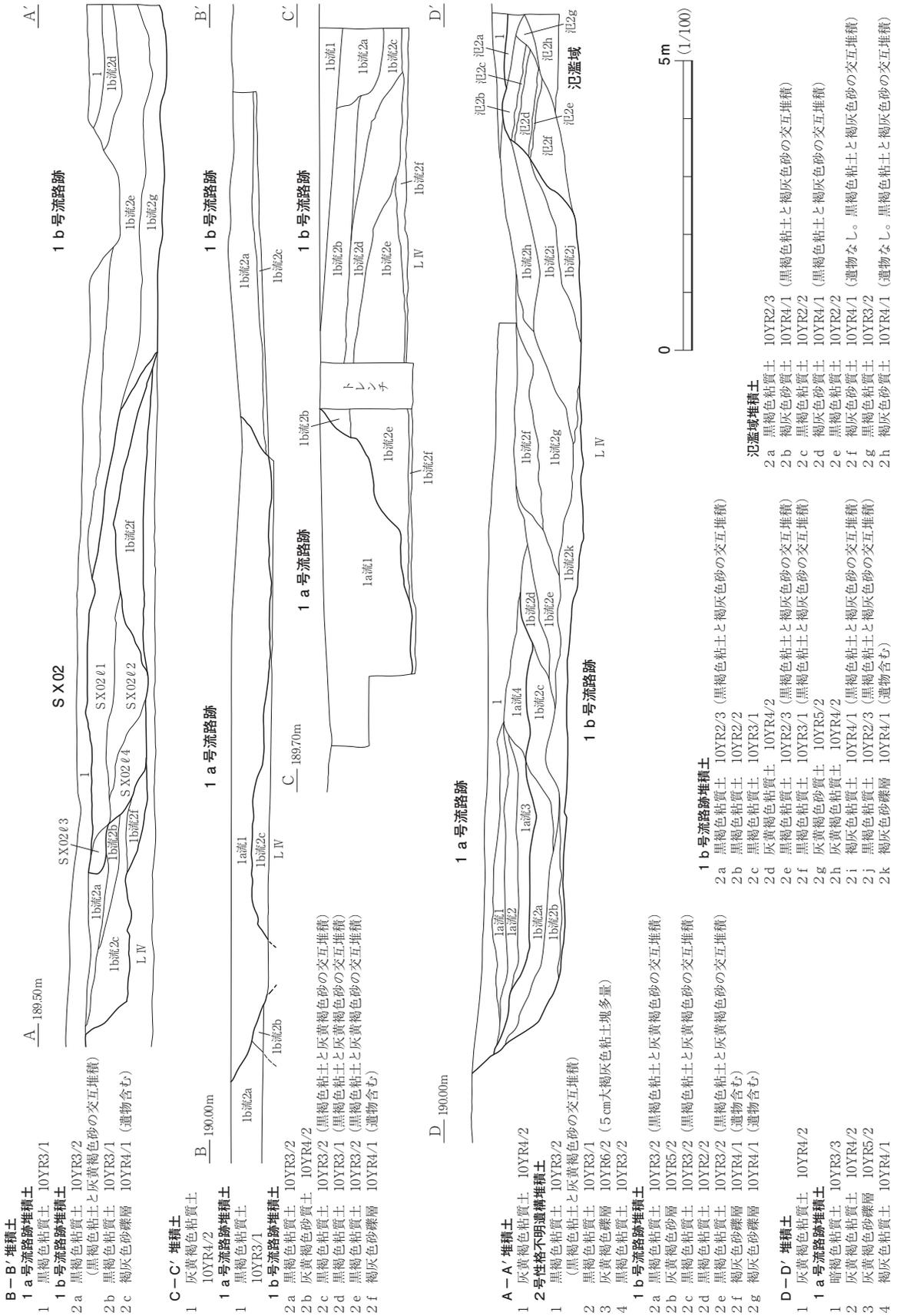


図17 1・2号流路跡土層断面図(1)

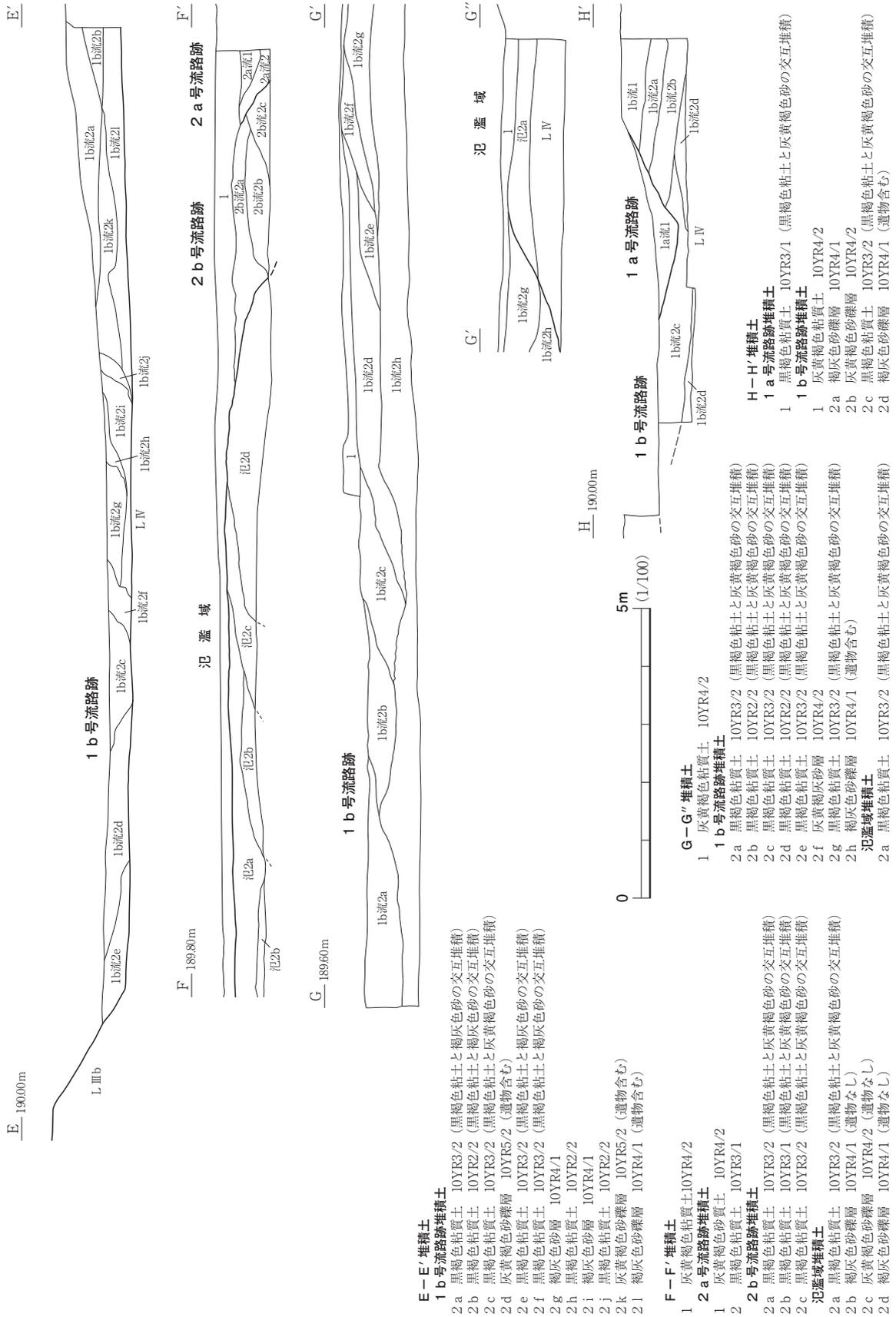


図18 1・2号流路跡土層断面図(2)

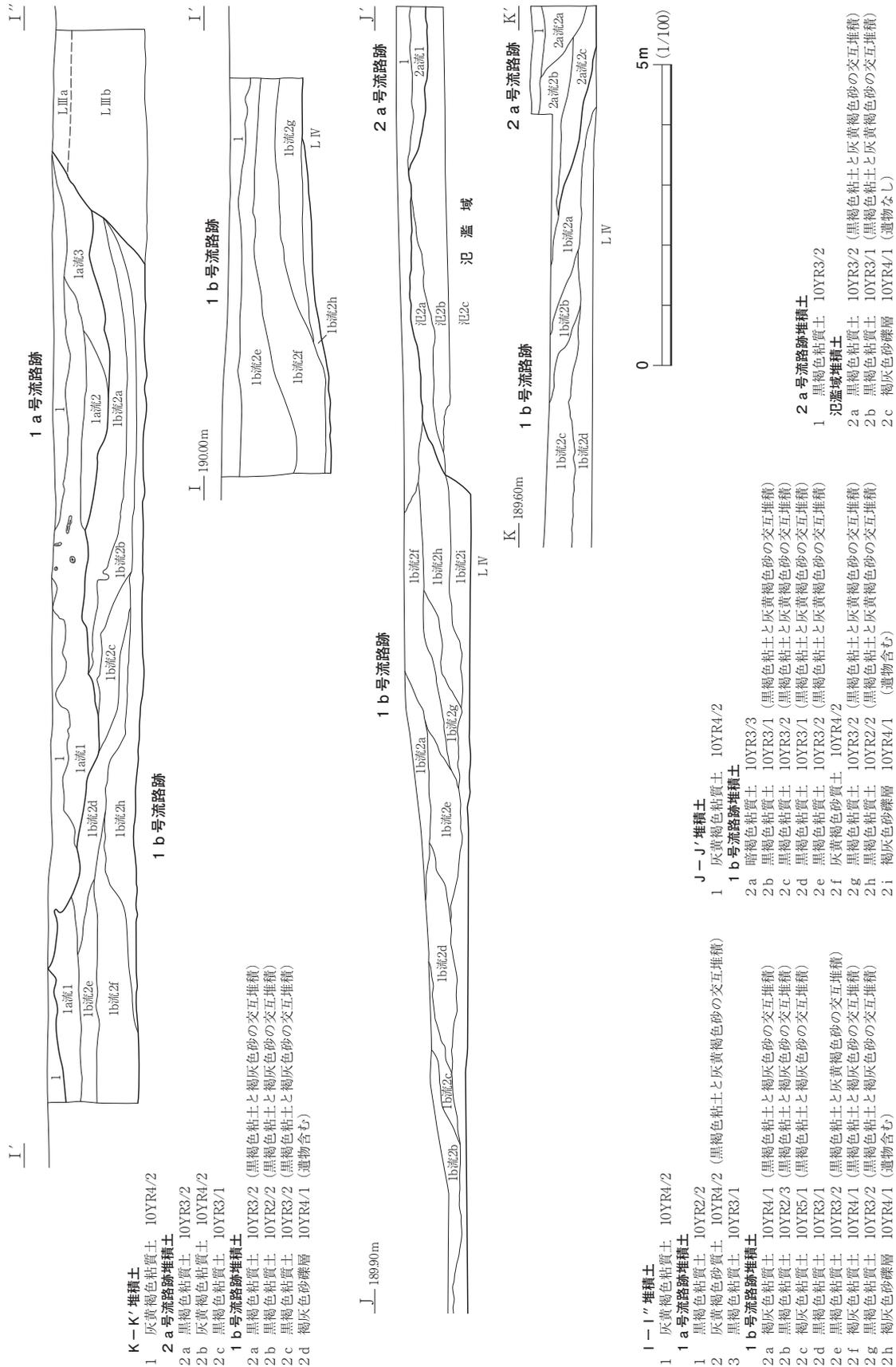


図19 1・2号流路跡土層断面図（3）

23-24, 図24-2・14は柿渋と思われるものが外面に塗布されている。図22-22, 図23-5・6・18, 図24-2は口縁端部の大部分が細かく打ち欠かれている。

墨書で体部に文字が記されているものが多く含まれる。図22-1・4・14は「拾万」で, 図22-17, 図23-2・21・22も土器の欠損により部分的にしか遺存しないものの「拾万」と思われる。図22-7は「十万」である。図22-2・5・6・8は渦巻形の記号で, 同図12も同様の記号と思われる。図22-11は「集」, 同図16は「田仲」, 同図21は「九万」の合わせ字, 同図23は「虫」, 図23-10は「惇」の可能性, 同図11は「田万」, 同図13・15・16は「千」, 同図14は「正」か「止」, 図24-14は「石」である。そのほかについては判読できなかった。

図24-15~18はロクロ成形の高台杯である。いずれも外面にロクロナデ, 内面にミガキののち黒色処理を施す。15は外面に横方向のミガキを, 16は回転ヘラケズリののち横方向のミガキを加えている。16の底面には回転糸切り痕が残され, 口縁端部の大部分には焼成後の細かい打ち欠きを加えられている。17には「八」, 18には「中」と渦巻形の記号が体部に墨書されている。

図24-19~24は土師器杯もしくは高台杯の体部片で, 墨書が認められるものである。19は「万集」, 21・22は欠損により一部分しか遺存していないが「拾万」と思われる。23・24は同じ字であるが判読できなかった。

図25-1~11は須恵器杯である。いずれもロクロ成形で, 2・5・6は底面に回転ヘラ切り痕が観察され, 7は外面に回転ヘラケズリが施されている。3は口縁部の一部が打ち欠かれ, その周辺の内外面と破断面に油煙が付着している。燈明皿として使用されたと考えられる。6の内外面には柿渋と思われるものが塗布されている。1・5・8~11の体部には墨書で文字が書かれている。このうち, 5は「千」, 8は「井」, 9は「田主」, 10・11は同じ字であるが判読できなかった。

図25-12は須恵器の高台杯で, 底部付近の小片である。底面の高台の内側全体に墨痕があり平滑になっている。転用硯と考えられる。

図25-13は須恵器の蓋である。ロクロ成形で外面の頂部付近に回転ヘラケズリが施されている。

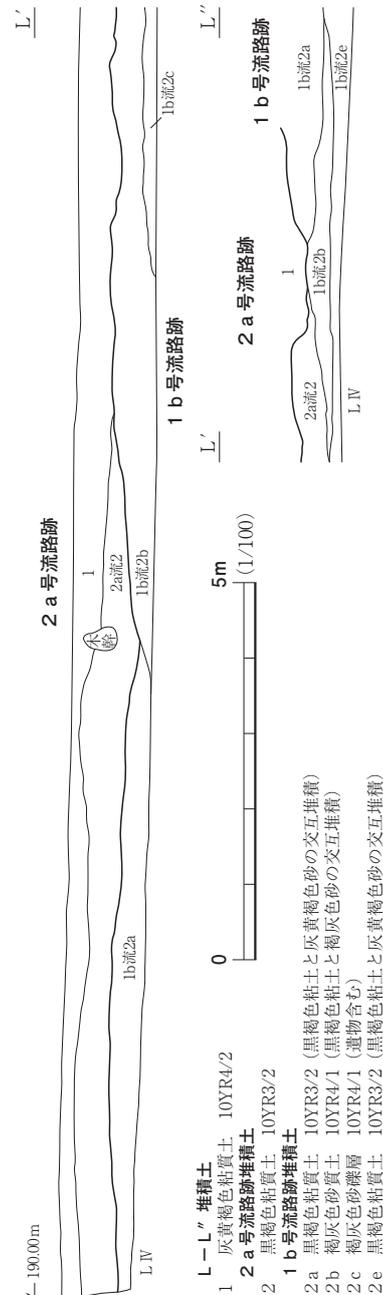


図20 1・2号流路跡土層断面図(4)

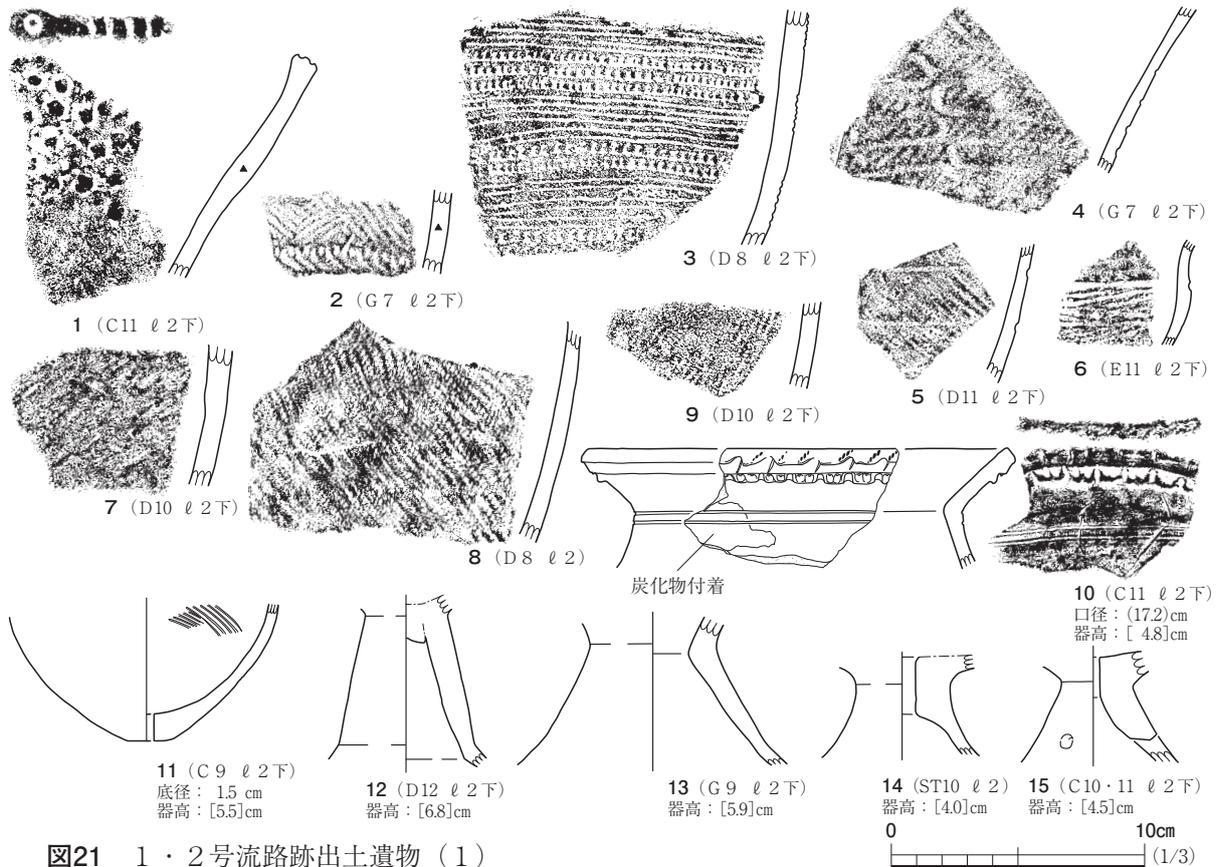


図21 1・2号流路跡出土遺物（1）

口縁部の内面側に自然釉がかかっている。

図25-14・15は墨書のある須恵器の小片で、14は杯、15は鉢と思われる。15の口縁端部は内外に波状をなす。14は「真」と考えられる。15は判読できなかった。

図25-16～24，図26-1～10は須恵系土器の杯である。いずれもロクロ成形で、図25-16を除き回転糸切り痕が底部に残る。16・24は手持ちヘラケズリによる再調整が施され、とくに16は底面全体にまで及ぶ。図25-19，図26-1は内面に油煙が、図26-2は内外面全体に炭化物が付着している。図25-22，図26-4の体部にはそれぞれ「財」，「壬」の墨書がある。22は底部を上にして二文字が書かれている。

図26-11・12は須恵系土器の高台杯である。いずれもロクロ成形で、底面に回転糸切り痕がみられる。11は高台部分を除く内外面に柿渋と思われるものが塗布されている。内面がとくに厚い。

図26-13はロクロ成形の土師器鉢である。外傾する体部と短く外反する口縁部をもつ。

図26-14は土師器の壺である。肩の張る体部とやや上げ底の底部をもつ。口縁部は欠損する。外面が磨滅している部分が多いものの、底面を除く外面全体に光沢をもつほど丁寧なミガキが横方向に施されている。体部の調整が非常に丁寧であるのに対し、底面は凹凸のある雑な作りで調整は施されていない。内外面の全体に黒色処理が施されている。

図26-15は土師器瓶類である。ロクロ成形で、外面に回転ヘラケズリが施され、輪積み痕がわずかに観察される。底面は細かな凹凸がある。

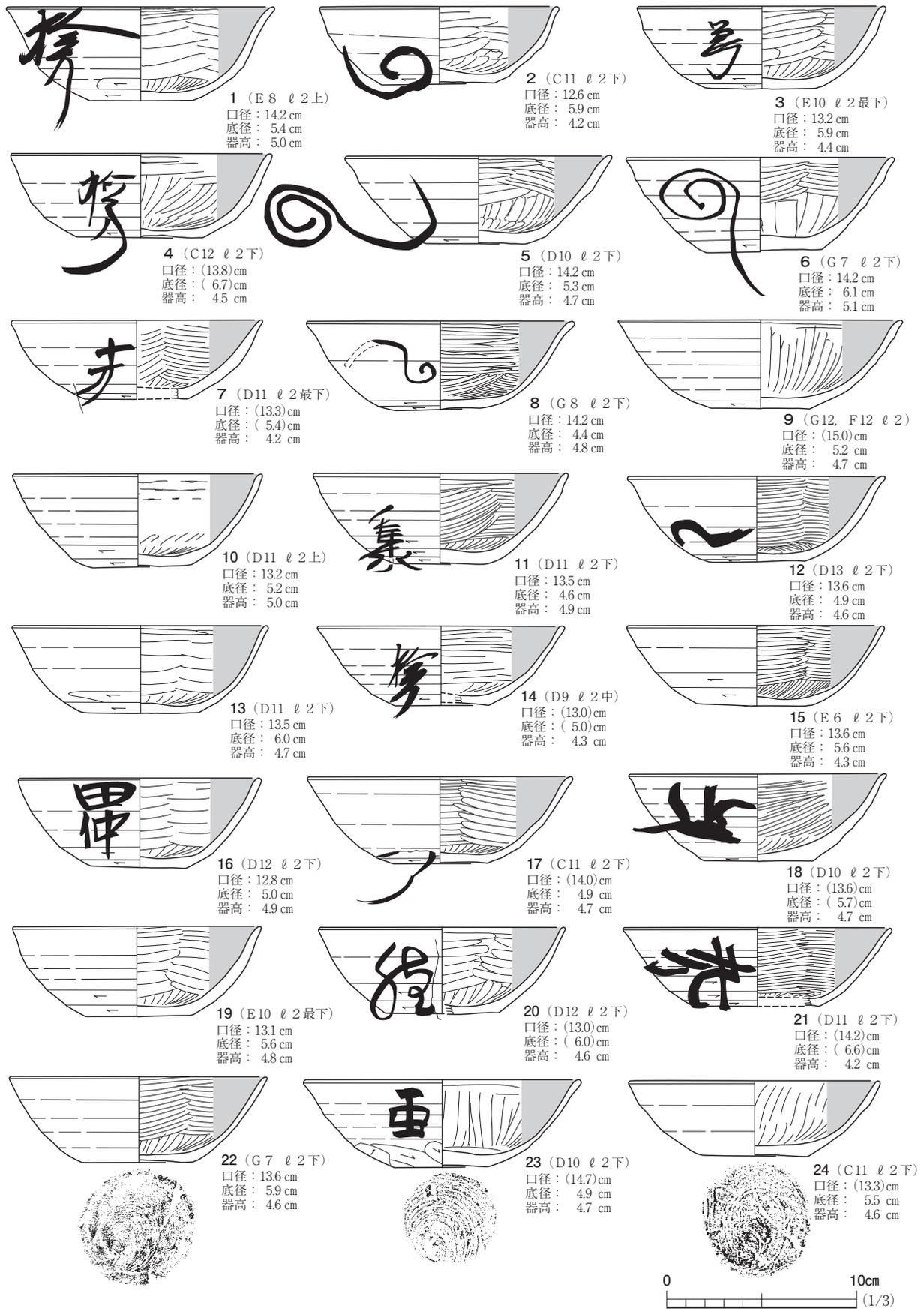


図22 1・2号流路跡出土遺物(2)

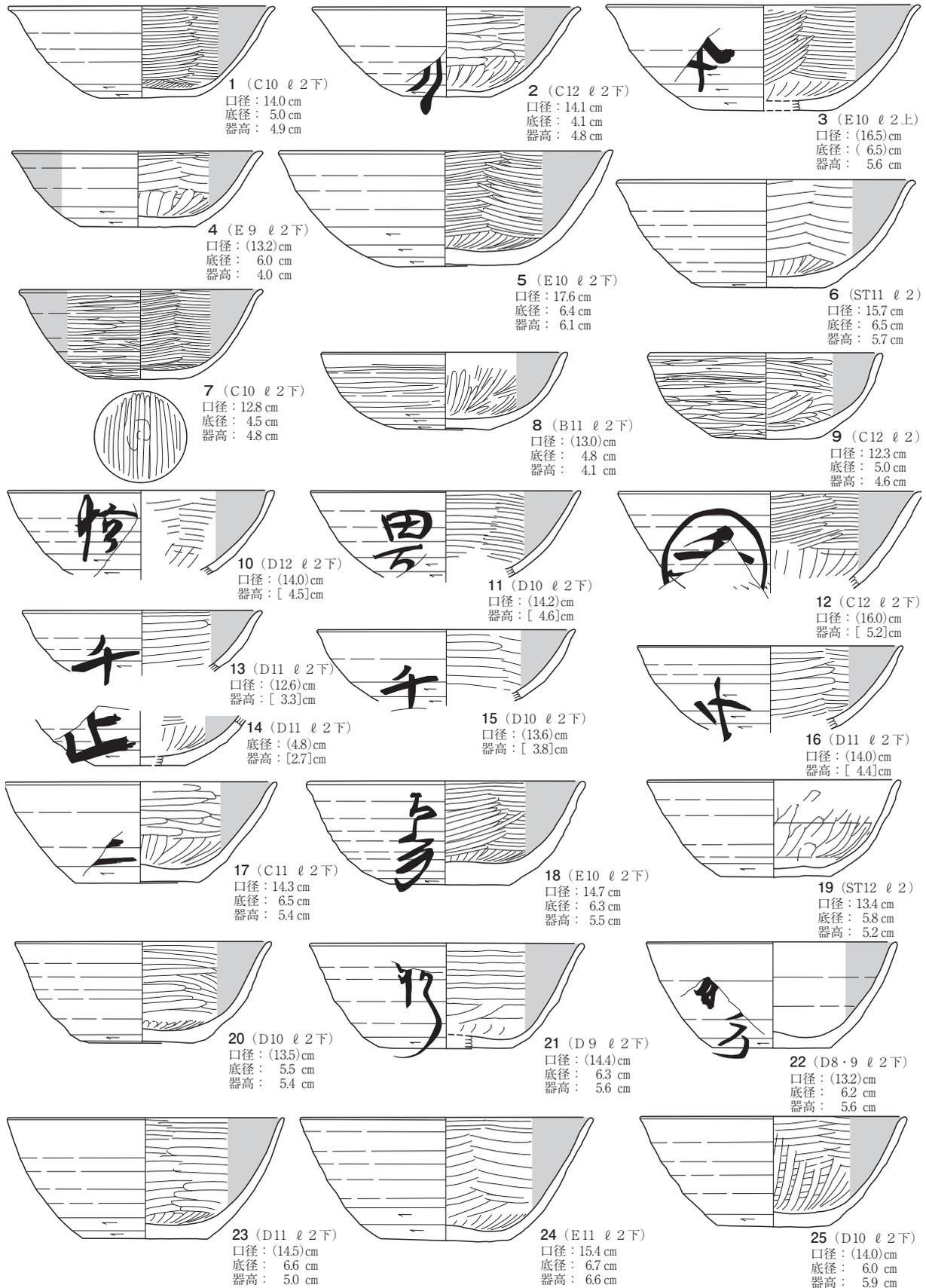


図23 1・2号流路跡出土遺物 (3)



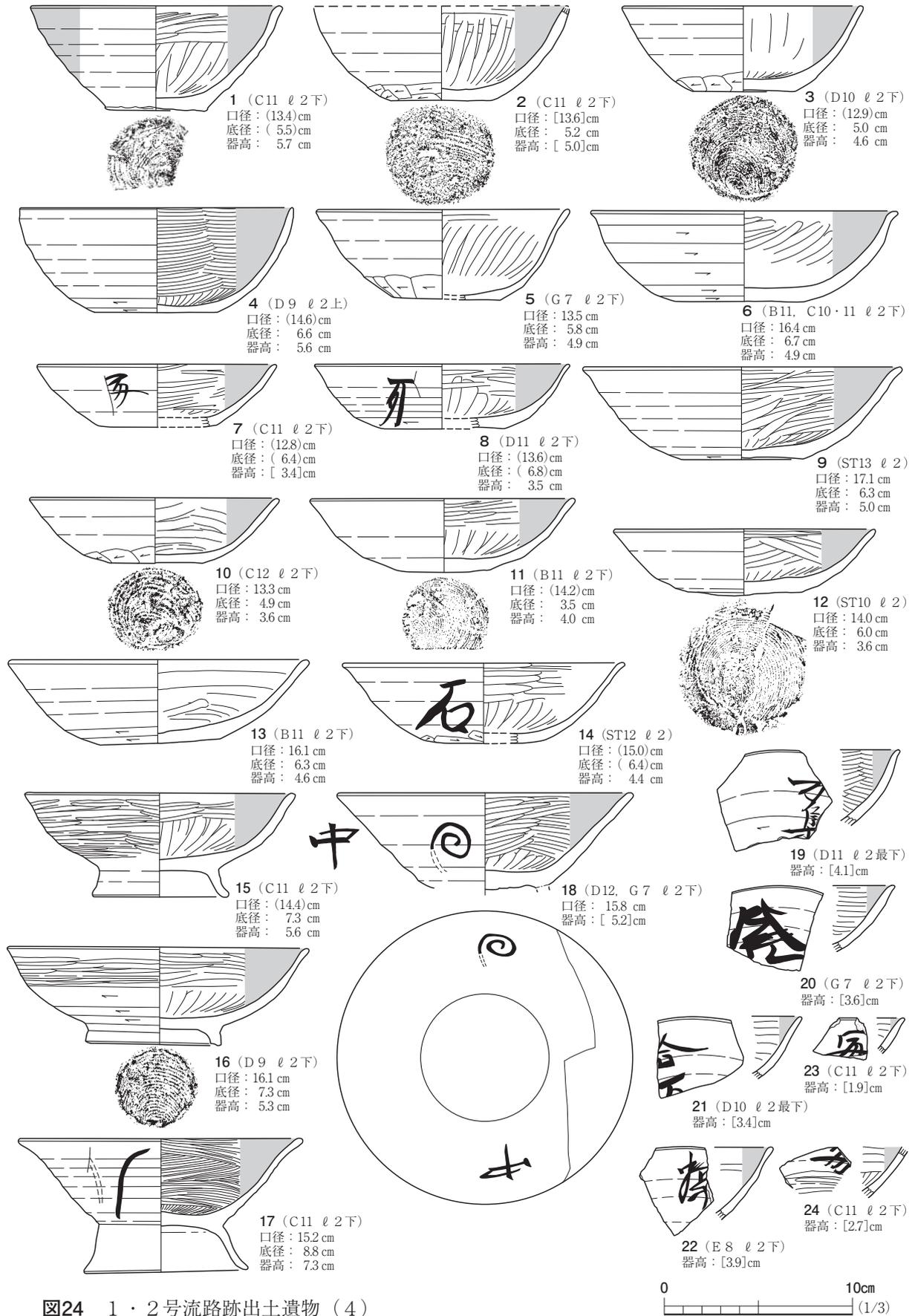


図24 1・2号流路跡出土遺物 (4)

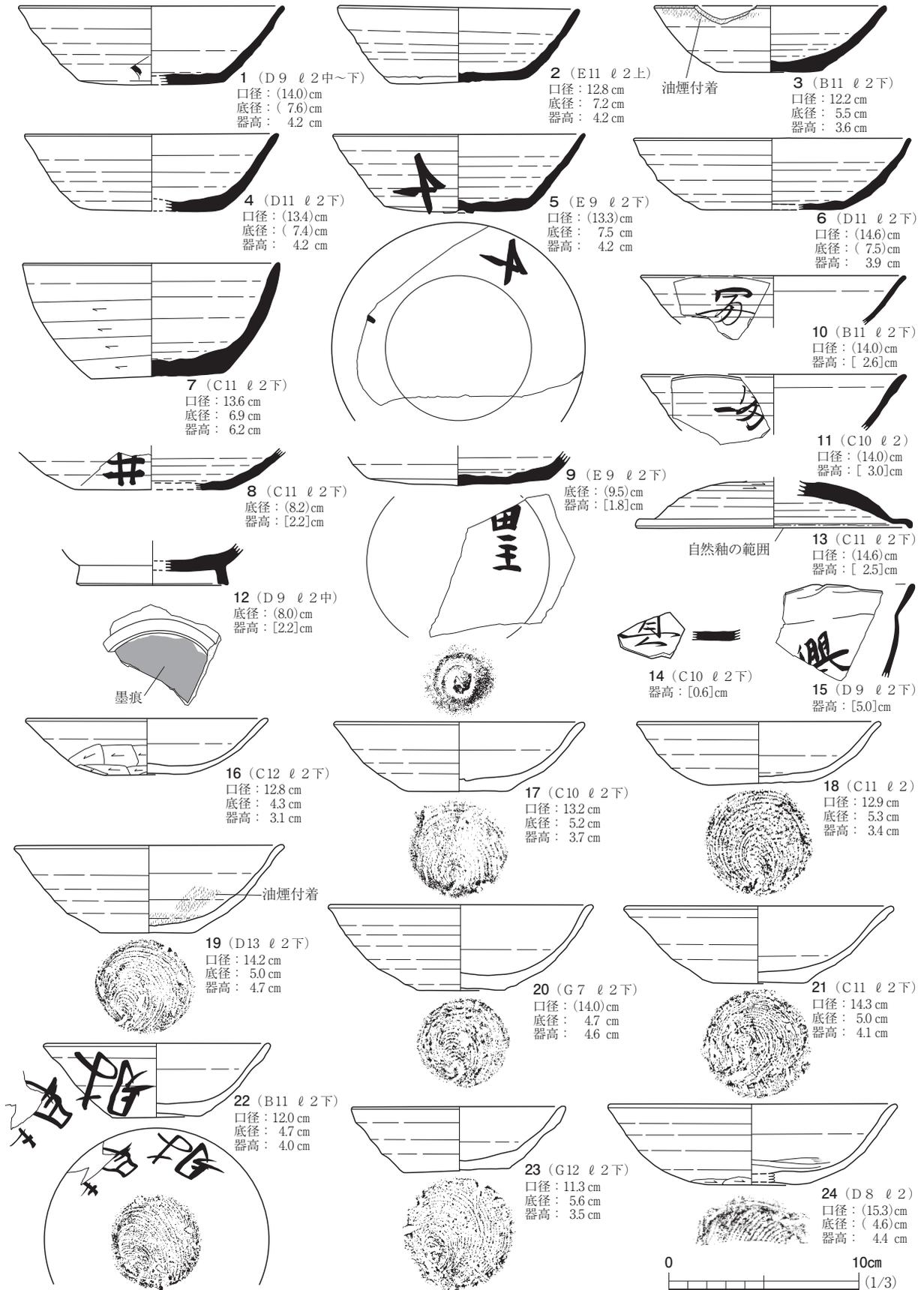


図25 1・2号流路跡出土遺物（5）

図26-16・17は須恵器瓶類である。16は口縁部を欠失するが、高台付きの長頸瓶と思われる。内外面にロクロメが観察される。外面には回転ヘラケズリが施され、体部下半には回転ヘラケズリ前に施されたタタキメがわずかに残る。内外面に黒色の付着物が薄く付着する。17は長頸瓶の口縁部で、口縁端部がつまみあげられ、内外面にロクロメが観察される。

図26-18は須恵器の鉢か甕である。外傾する口縁部の破片で、口縁端部が外側に短く張り出す。

図27-1・2は須恵器の瓶類で、いずれも高台をもつ。いずれも頸部から口縁部を欠失する。1は内外面にロクロナデが施され、体部下半には幅2cmほどの布圧痕が巡る。体上部の内面には輪積み痕が残されている。2は外面にタタキののち回転ヘラケズリを施し、体部上半と下半の一部に自然釉がかかる。内面はヘラナデが施され、肩部より上にロクロナデが残る。

図27-3～8、図28は須恵器甕である。口縁部が遺存するものは、図27-8を除き加飾しない素口縁をもつ。同図3は口縁端部を外側につまみ出し、外面の体部上半にタタキの後ロクロナデ、内面はロクロナデが施される。口縁端部の大部分は焼成後の細かい打ち欠きが加えられている。同図4は口縁端部を外側につまみ出し、内外面にロクロナデ、内面はそののちナデが加えられる。明るい青灰色に還元炎焼成され外面と口縁部の内面に自然釉が薄くかかる。自然釉は緑灰色を呈する部分がある。同図5・6は口縁端部が丸くおさめられ、内外面ともロクロナデが施されている。同図7は外面にタタキ後ロクロナデ、内面にロクロナデが施されている。同図8は口縁端部を上下につまみ出して拡張し、口縁部外面に櫛描文を施す。口縁端部の大部分には焼成後の打ち欠きによる細かな打ち欠きを加えられている。口縁端の拡張部下端にも同様の打ち欠きが部分的にみられる。図28-1は体部上半と下半が接合しないが、胎土、焼成、色調がよく似ており同一個体と思われることから図上復元した。口縁端部を外側につまみ出し、口縁部は内外面ともロクロナデ、体部外面に並行タタキメ、同内面に同心円文を施した当て具痕が付されたのちナデが施されている。体部上半には自然釉がかかり、白色を呈する。図28-2は外面に並行タタキ、内面に菊花状の当て具痕ののちナデが施される。底面には指紋の残る指頭圧痕や靱痕が付される。同図3～5は大甕の体部片である。3は外面に並行タタキメののち横方向のカキメが、内面に並行文の当て具痕ののちカキメと同じ原体によるナデが部分的に施されている。4は外面に並行タタキののちカキメが、内面に同心円文の当て具痕ののちナデが施されている。5は外面に並行タタキ、内面に同心円文の当て具痕が付される。

図29-1・2は古墳時代前期の土師器甕である。いずれも口縁端部が上方につまみ出され、磨滅が激しいものの1は内外面にヨコナデ、2は外面にハケメが施されたのち内外面にヨコナデが施される。同図3も古墳時代の甕と思われる。口縁端部は丸くおさめられ、磨滅が激しいものの口縁部外面にハケメが観察される。

図29-4～6は輪積み成形の土師器甕である。4はほぼ直立する体部上半と外反する口縁部をもつ。外面にハケメとナデ、内面に横方向のハケメが施される。5は端部が丸くおさめられた口縁部から体部上端部分にかけての一部が遺存する大型品である。磨滅が激しいが内外面ともハケメが

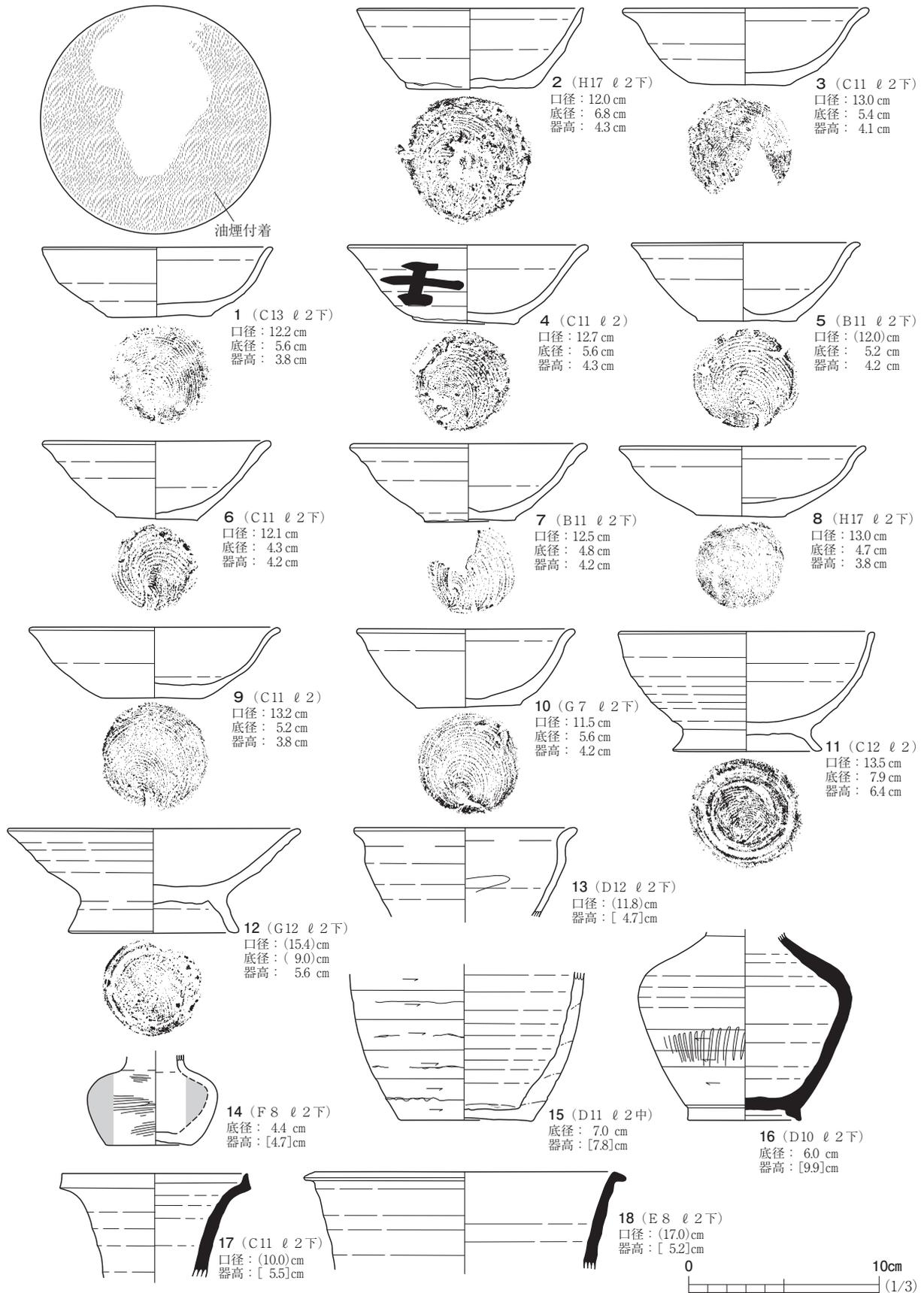


図26 1・2号流路跡出土遺物（6）

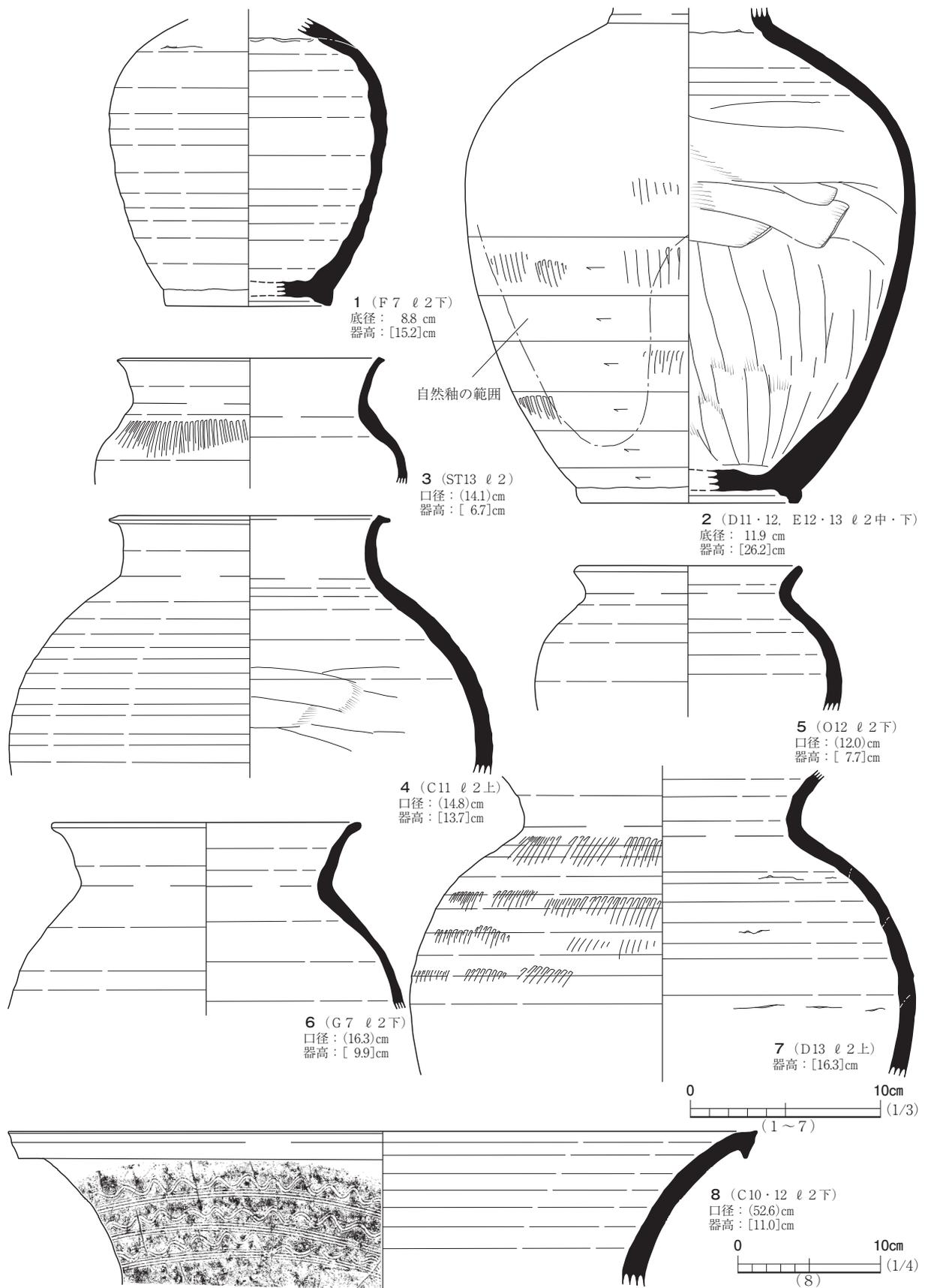


図27 1・2号流路跡出土遺物 (7)



图28 1・2号流路跡出土遺物（8）

観察される。6も大型で口縁部と体部の境が不明瞭である。口縁部には内外面にヨコナデ、体部内面にナデが施される。体部外面には輪積み痕が多く残され、炭化物が付着する。

図29-7~16はロクロ整形の甕である。7~9は小型で、7は半球形の体部に外傾する口縁部をもつ。外面の体下部に回転ヘラケズリ、内面はミガキののち黒色処理を施す。8・9は長胴で、外傾する口縁の端部を上方につまみ出す。10~16は中型から大型で、いずれも長胴である。10・11は口縁部がやや内彎し端部を丸くおさめ、10の内面にはナデが施される。12・13は口縁部が外傾し、端部を上方につまみ上げる。12は内面にナデを施す。13の外面の一部には炭化物が付着する。14・16は外傾する口縁部が上方に屈曲し端部は丸くおさめられる。外面の一部に炭化物が付着する。15は体上部の内外面にロクロナデ、以下の外面に並行タタキメを施し、内面に並行の当て具痕を付す。外傾する口縁部は端部が上方につまみあげられる。体部外面には炭化物が部分的に厚く付着する。

図30-1・2はタタキ甕で、いずれも底部付近のみが遺存する。1は平底、2は底面がやや突出し、いずれも外面に並行タタキメ、内面にヘラナデが施される。1の外面には炭化物が付着する。

図30-3・4は土師器の鍋である。3は半球形の体部にほぼ水平に延びる口縁部をもつ。内外面にロクロナデが施され、外面には炭化物が厚く付着する。4は半球形の体部をもち、無頸である。口縁端部直下の外面に低い突帯を巡らす。内外面にロクロナデを施し、外面にはさらにケズリを施す。内外面に炭化物が付着する。

図30-5~8は筒形土器である。いずれも内外面に指オサエとナデを施し輪積み痕を多く残す。

図30-9は土製の羽口である。短い筒形で、吸気部の内面の一部を除いてほぼ全体が還元し灰色を呈する。先端部には滓が付着する。溶着滓は蛍光X線分析を行ったところ、鉄がもっとも多く次いでカルシウムや珪素などが検出された。溶着滓に酸化鉄はまったくみられない。

図30-10・11はそれぞれ焼台と円面硯である。いずれも須恵器で、内外面にはロクロナデが施される。10の底部は回転ヘラ切りである。11は脚部の破片で、円窓が一か所穿たれ、外面に斜位の格子が線刻で描かれる。

図30-12は還元炎焼成された須恵質の風字硯である。手前側の縁の一部が遺存する。上面に墨痕、下面に片脚の剥離痕が認められ、下面と側面との角を面取りする。上面には側縁に沿う方向に浅い溝が掘られている。

図30-13は土錘である。紡錘形の軸方向に貫通孔を穿つ。

図30-14は砥石である。直方体の正面と背面を主使用面とし、摩耗によりやせ、二つに破断した片方と思われる。破断部が丸みを帯びており、破断後も使用されたものと思われる。

図30-15は曲刃の鉄鎌である。基部は急激に幅を減じ、柄の装着部をL字に折り曲げる。柄の装着角度は鈍角である。

図31-1は用途不明の木製品である。茎部の長い鍬形である。

図31-2は曲物容器の底板である。半分以上を木目に沿って欠損するが、径を還元すると径が

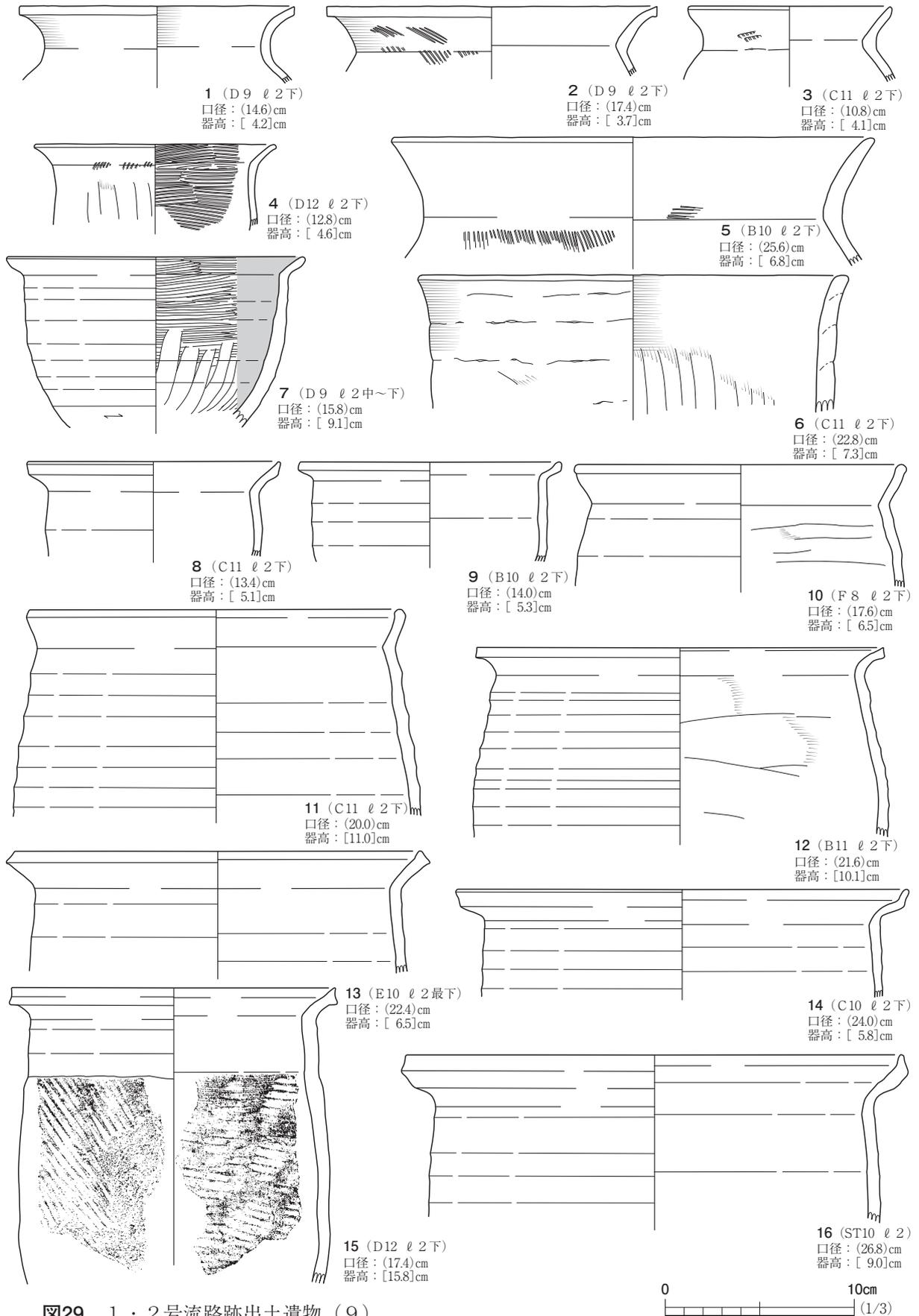


図29 1・2号流路跡出土遺物（9）

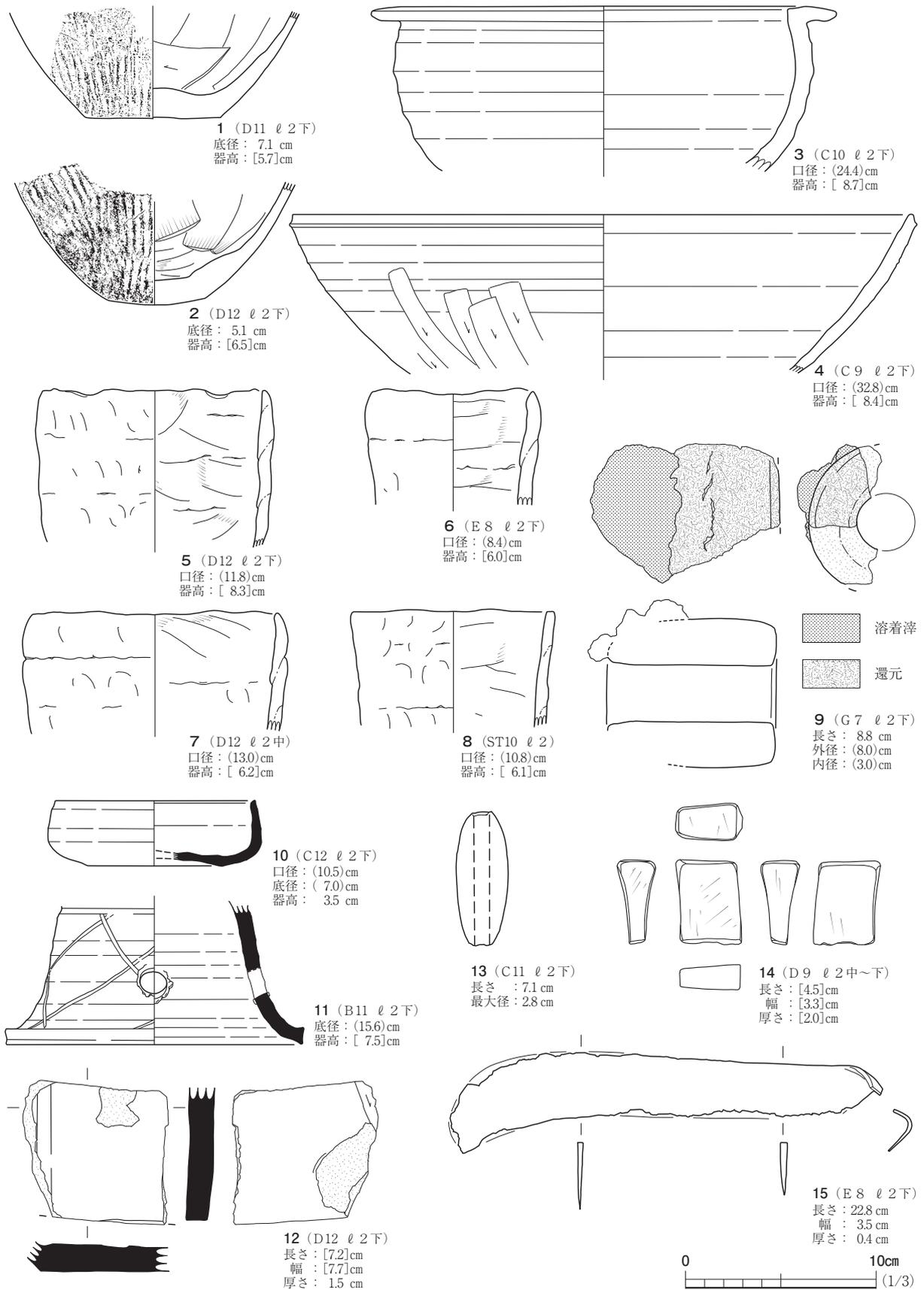


図30 1・2号流路跡出土遺物 (10)

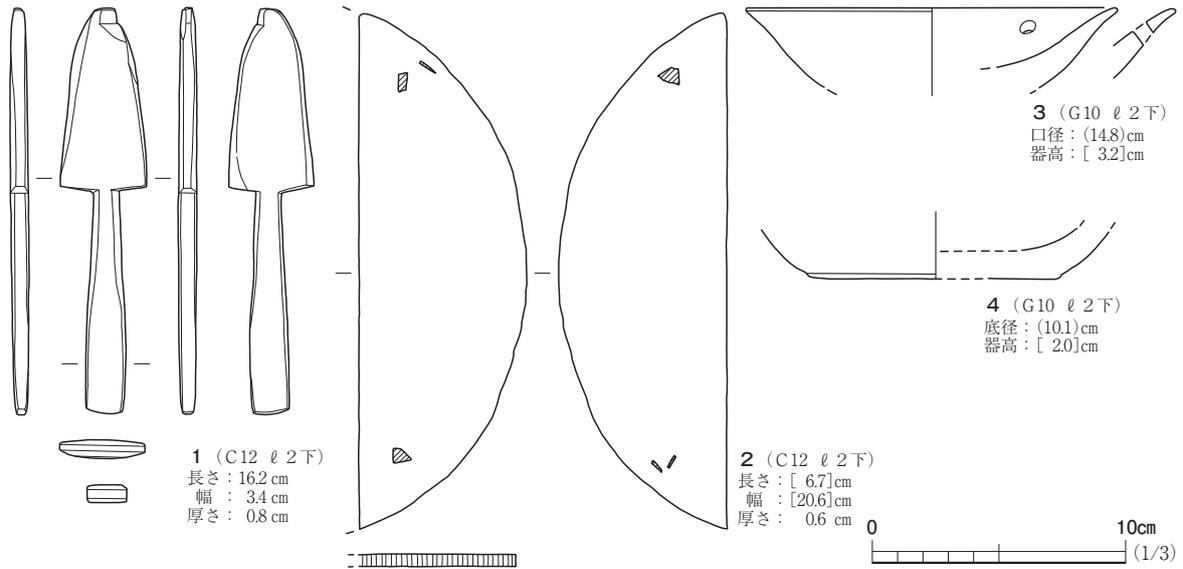


図31 1・2号流路跡出土遺物（11）

11～12cmほどとなる。黒色の樹皮による綴じが二か所認められる。

図31-3・4は木製の刳物容器である。3は口縁部から体部にかけて、4は底部付近が遺存している。3は外反する口縁部に径6mmの穿孔が1孔ある。4は平底の底部が段によって作り出されている。（青山）

まとめ

1 a・b号、2 a・b号流路跡は、おおむね南から北に向かって流れる自然流路跡で、2本の流路跡の合流地点が検出された。堆積土の状況からいずれも大きく上下に二分される。上部は止水状態にあったものと考えられ、遺物はほとんど出土しなかった。下部は流路跡として機能していたことが堆積状況からうかがわれ、多量の遺物が出土した。

遺物は、縄文時代前期、同後期、弥生時代後期、古墳時代前期の土器を少量含むが、大半は9世紀中葉～10世紀初頭にかけてのものである。遺物からは流路跡の上限について断定できないが、機能停止は10世紀初頭以降と考えられる。（藤谷）

第5節 堰状遺構

堰状遺構（図5・32, 写真4）

堰状遺構は、調査区北端のD・E 2グリッドで検出された遺構である。調査区の5グリッド半ばより北側の部分については、サブトレンチを合計9本設定した。その中のST1からは杭列が検出された。そこで、遺存度が良い遺物が出土している他のサブトレンチの部分と合わせて、2号深掘りグリッドを設定した。

堰状遺構は、堰本体とその南側の杭列からなる。杭列は合計19本の杭が西北西から東南東方向に長さ約10.5mの範囲に並ぶ形で検出された。検出面は河川床かそれに近いと思われる礫層である。

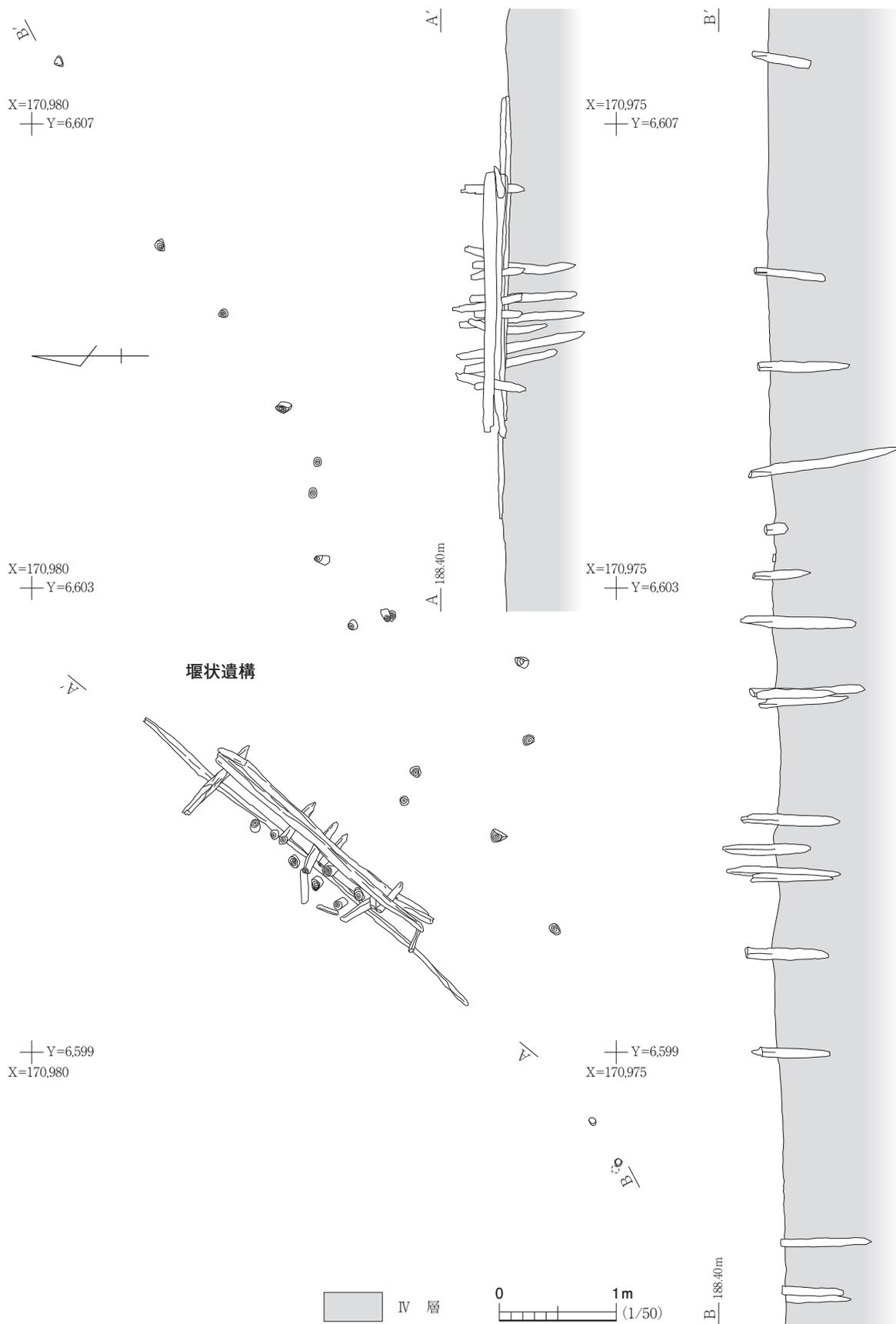


図32 堰状遺構

杭の長さは、最長のもので1.35m、最短のもので25cmとなっている。杭材には、芯持ちの丸太材の他に、角柱状の建築材を転用したと思われるものも含まれていた。

堰の本体部分と考えられる部分は、杭列の北側に北東－南西方向を軸として位置している。その規模は、最長の横木の長さが3.7m、南東側横木から北西側杭までの幅が35cmとなっている。堰では、3本の横木とその間に打ち込まれた15本が遺存していた。南東側の2本はそれぞれ長さ2.3mで、上下方向に重なりあっていた。杭列の杭には芯持ちの丸太材が使われ、その長さは長いもので1.4mをこえる。打ち込まれた方向は、鉛直方向の他南東方向にやや傾いて、打ち込まれたものもあった。

遺物は、本遺構が位置する深掘りグリッドより、平安時代9世紀と思われるロクロ土師器と須恵器が出土している。

本遺構は、出土遺物より、平安時代9世紀に機能した堰跡であると考えられる。川筋は明確にできなかったが、南東から北西方向に流れる水流に対して機能していたものと推定される。（藤谷）

第6節 性格不明遺構

1号性格不明遺構 SX01（図33・36，写真6・29）

1号性格不明遺構は、調査区中央よりやや北側のE6グリッドで検出された遺構である。調査区西側平坦面から流路跡に続く緩斜面上に位置しており、当初竪穴住居跡の可能性を考えて調査を進めたが、平面形が不整形であること、明確なカマド施設が検出されなかったところから、性格不明遺構として報告する。北側の一部がST13で破壊されている。周辺には、南側に3号溝跡が、北東側上部には2号性格不明遺構が位置している。遺構検出面は、西側がLⅢ上面、東側が流路跡上部堆積土となっている。

遺構の平面形は、北側が窄まる形の不整形円形を呈し、南北の長軸が4.4m、東西の短軸が3.45mである。遺構検出面からの深さは、最深部で18cmとなっている。底面はほぼ平坦で、壁面の立ち上がりはやや急である。底面の中央よりやや北西側には、長さ1m、幅65cmの範囲にわたって堆積土はブロック土を含む2層で、堆積状況は、人為堆積と考えられる。

遺物は、ロクロ土師器と須恵器が出土している。図示資料図36－7はロクロ成形の甕で、長胴の器形で口縁部に段を有する。

本遺構は、出土遺物より、平安時代のものと考えられるが、性格は不明である。（藤谷）

2号性格不明遺構 SX02

遺 構（図34・35，写真7）

本遺構は、E5・6、F5・6の4グリッドにまたがって位置している。ST13の北壁において、1b号流路跡内堆積土の中層に挟まれて、人為的な堆積土があることを確認した。まずは、人為

堆積土の広がり把握するため、S T 13を北壁にそって東西7m、南北4mで拡張し、さらに南側にはS T 13に直行するように東西2.5m、南北3mのトレンチも新たに広げて精査を行った。また、遺構の東および北側については、既に工事関連作業に着手していたことから、工事に影響のでない程度での遺構精査を心がけた。

本遺構の西側2mには、周囲の地形を形成するLⅢからなる地形が残っている。これは、平安時代の自然流路である1b号流路跡の西岸にあたり、本遺構の西側にちょうどせり出した形となっている。本遺構は、1b号流路跡が完全に埋まりきる前に、流路内を掘削して構築している。本遺構は、横木と杭を用いた木枠部分と、盛土部分から構成されたと考えている。遺構の規模は、確認できた東西遺存長7.2m、南北遺存長は下端間の長さで約4.9mを測り、東西方向に延びていた。

堆積土は、確認面LⅠと同系色であった灰黄褐色砂質土をℓ1、木枠部分の南北側および木枠を覆った堆積土についてはℓ2、そして木枠部分の南側から図35下段D-D'断面に見られる掘り込み内の堆積土をℓ3と大きく3層に分けた。また、ℓ1～ℓ3の3層それぞれの部位については、含有物と色調でさらに細分し、a、b、c・・・と呼称し併記した。堆積状況を見ると、ℓ2の一部(ℓ2g～2j)とℓ3a～q層については人為堆積、それ以外は自然堆積と判断した。このうち、人為堆積と考えたℓ2の一部(ℓ2g～2j)と木枠部分南側の堆積土ℓ3a～3qについては、1b号流路跡を掘削した際の土を使って埋め戻している。それ以外の堆積土(ℓ2a～2f・2k～2t)については、本遺構機能時から徐々に流路跡内に堆積していった自然堆積土と考えている。

本遺構の構築した工程を、以下に整理してみる。まず、①平安時代に北流していた自然流路(1b号流路跡)が、河床(LⅣ)から約60cmまで粘質土(図35下段D-D'断面：1b流2b～2e層)

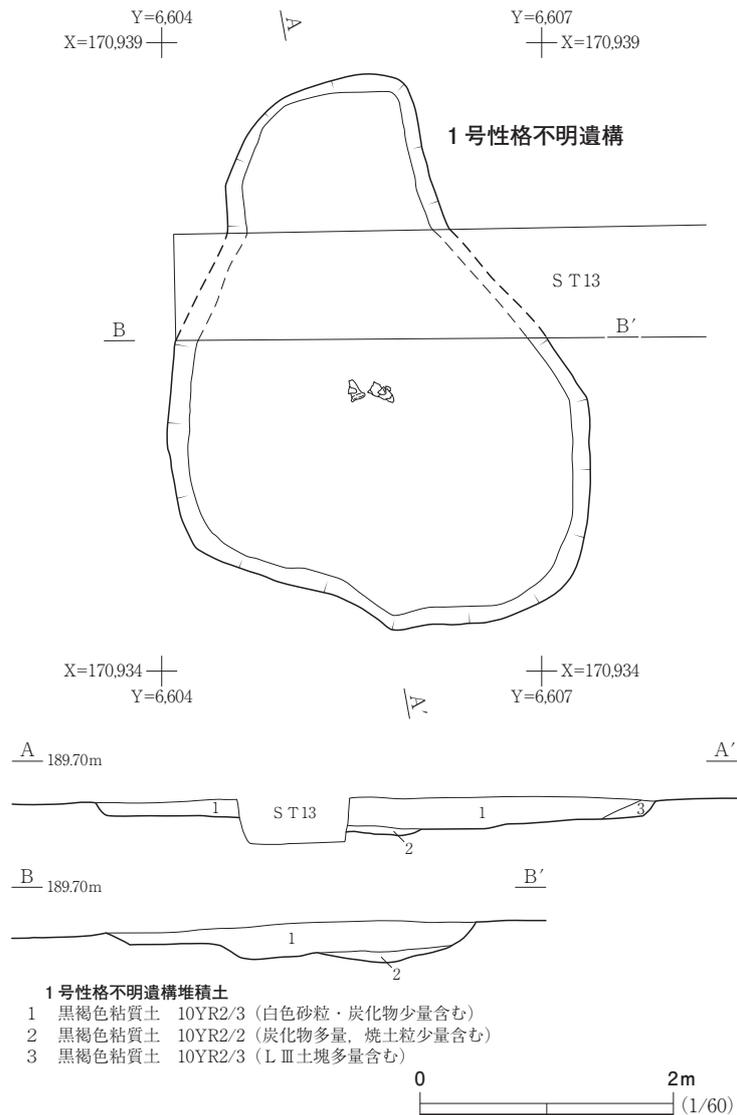


図33 1号性格不明遺構

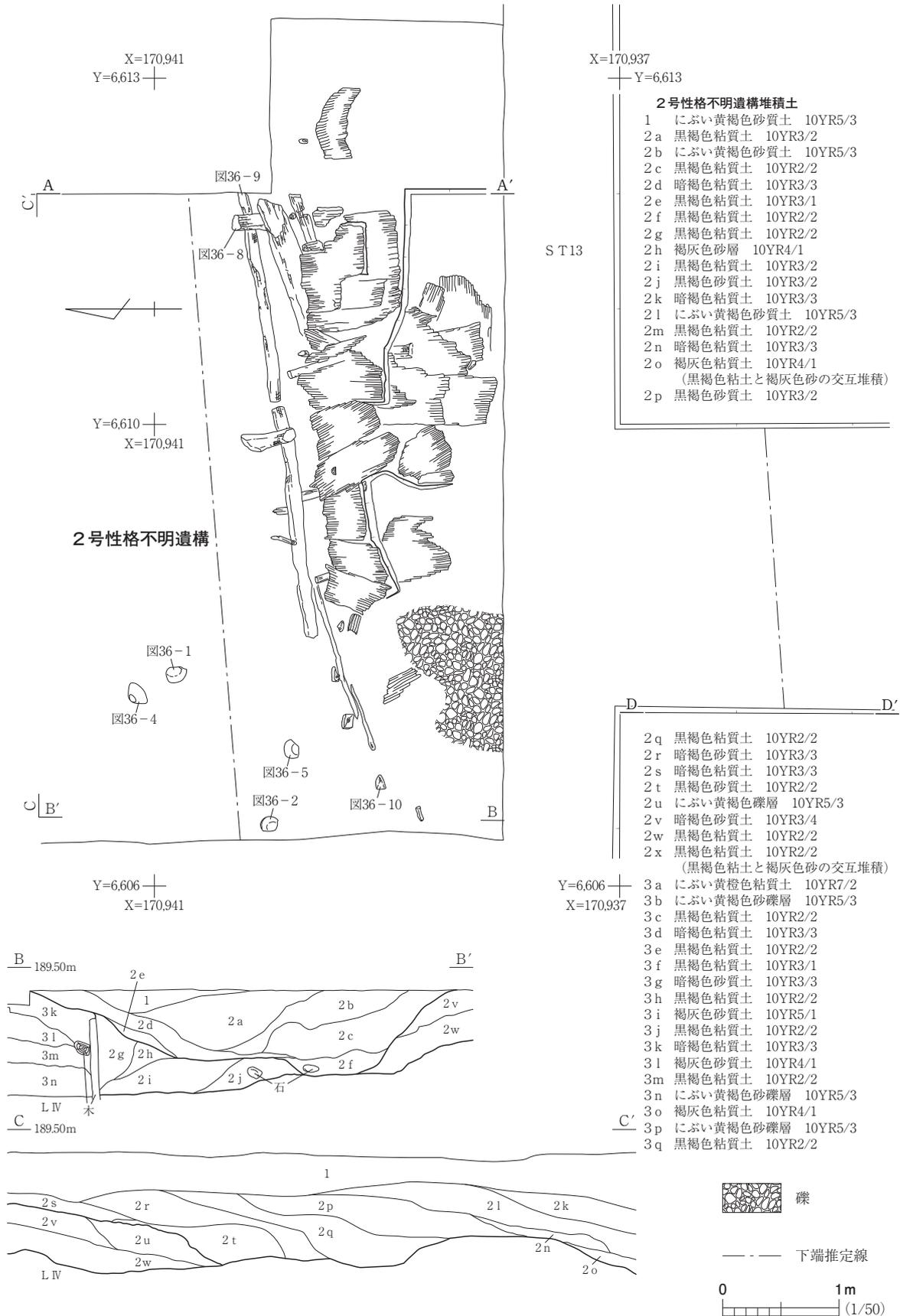


図34 2号性格不明遺構 (1)

で覆われる。②深さ約50cm、幅約5mほどの規模で、F5グリッド付近から東西方向に断面形が箱形になるよう溝状に掘削する。図34下段断面に見られるℓ2u～2wの3層については、掘削前の流路跡内堆積土で、溝状に掘削した北側法面を形成する。③掘削範囲の底面北寄りに、杭と横木を用いて、そして盛土(図34下段B-B'断面：ℓ2g～2j。図35上段A-A'断面：ℓ3e・i・j)で横木と杭を補強しながら東西方向に延びる木枠部分を作る。

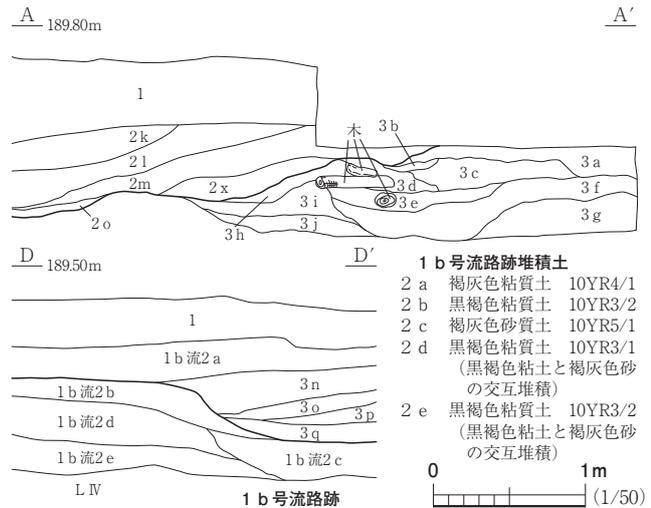


図35 2号性格不明遺構(2)

④木枠部分の南側には、スギなどの樹皮、コモ状の敷物を挟みこみながら、粘質土を底面から70cm以上の高さまで幾重にも積み上げる、という完成にいたる4つの工程を考えた。

また、上記の③の工程の中で触れたコモ状の敷物について、もう少し詳しく整理する。コモ状の敷物については、図34平面図に植物繊維の方向として1個体ずつ図化した。これらのコモ状の敷物は、上下に幾重にも重なっており、図右上では繊維の方向が異なる個体も確認できた。上下に重なった個体ごとの高さは、数cmと厚みが無く、土を盛るごとに、コモを重ねただけの状況に見える。人為的に埋められたℓ3c～e(図35上段A-A'断面)をみると、植物繊維の断片が含まれ、複数枚のコモ状の敷物と、数枚の樹皮が粘質土を挟み込むように4～5重ねになっていたものと考えている。また土中には長さ数cm、厚さ数mmほどの細かい骨片も少なからず含まれていた。

本遺構の想定される完成形状は、断面形状は台形をなした土手状の遺構として考えられる。その規模は上端幅約3m、法面裾にあたる下端の幅約4.9mほどと考えている。また、遺構の高さは、掘形底面からの高さ70cm以上であったと考えられる。この時、遺構の高さは、図34下段B-B'断面ℓ3kと図35上段A-A'断面ℓ3aの上まで盛り上げていたと考えている。

遺物(図36, 写真28・29)

遺物はℓ2上層～中層にかけての堆積土から出土した。平安時代の土師器杯片25点、甕片43点、須恵器杯・高台杯片3点、甕片1点が出土した。そして、木枠部分に用いられた杭と横木が複数出土した。遺物の大半はℓ2層下位から出土している。これらのうち、10点を図36に示した。

図36-1～5はロクロ成形の土師器杯で、すべて本遺構の木枠部分よりも北側から出土した。同図1以外の4点すべては、底部調整として回転ヘラ削りを施す。同図6は須恵器高台杯の底部片で、底部外面に墨書が見られるが、「澤」と読めるようである。6の内面には墨を擦った痕跡が認められ、硯として転用されたものである。同図8～11は木製品で、同図8～10は木枠部分に用いられた2本の杭(同図8・10)と、横木の破片(同図9)である。同図11は、木製の挽物皿の破片で、厚みのある高台部をもち、内面に「×」状の刻みがある。

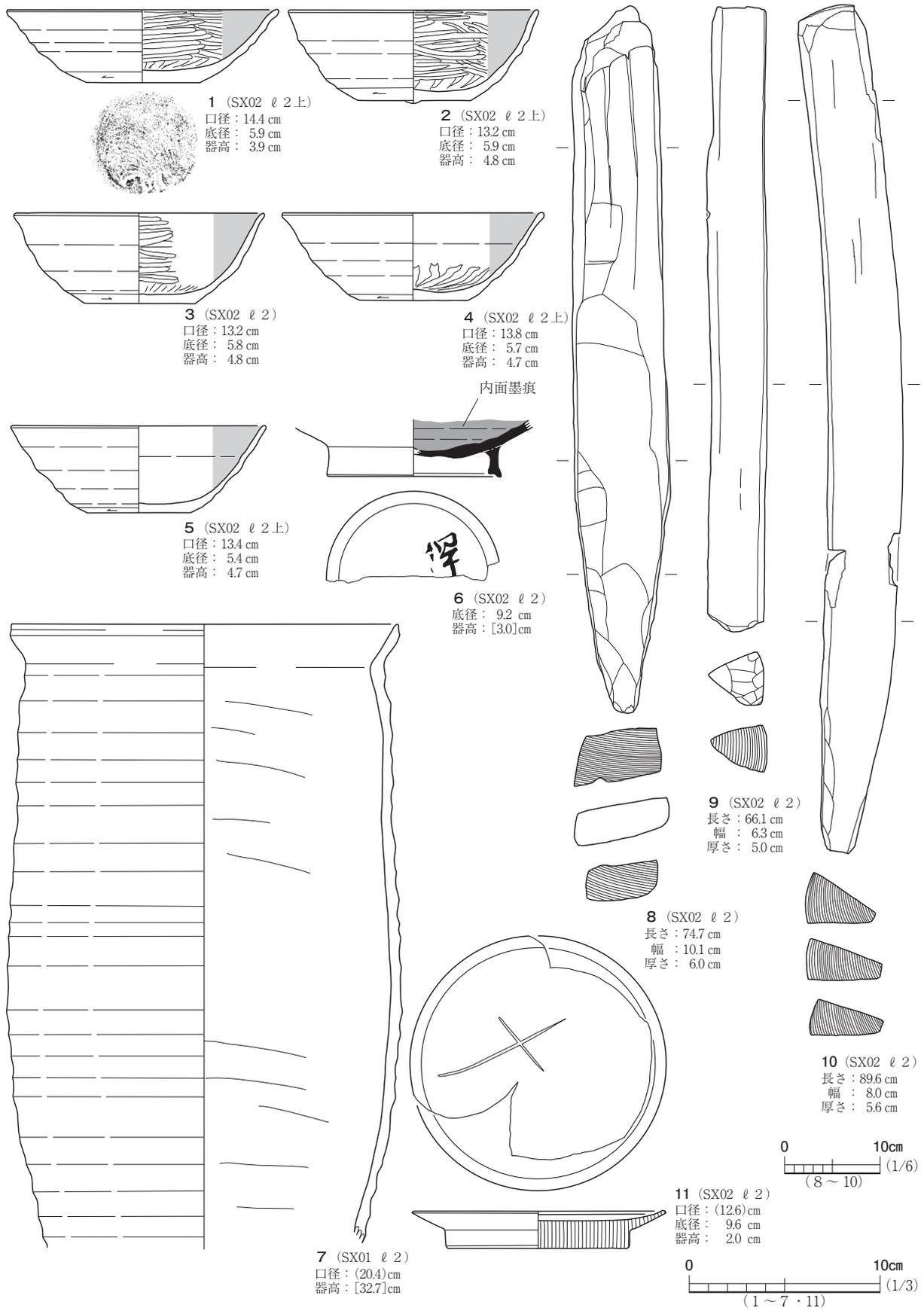


図36 性格不明遺構出土遺物

まとめ

本遺構は、東西方向に延びた法裾幅約4.9m、上端幅約3m、高さ70cm以上の断面台形状の土手状遺構である。本遺構は、敷葉工法という手法を用い、土の中に草本や樹皮などを入れることで軟弱な地盤を補強していたと考えられる。本遺構の機能としては、次の3つの可能性が考えられる。①路面幅約3mの道路跡。盛土部分の上端幅3mを路面とし、東西に延びた道は、水の流れがおおむね止まった1b号流路跡を南北に分断するように西岸に取り付いた様子を考えられる。しかし、この場合暗渠などの施設が必要となるが、そのような施設は確認できなかった。②堤状遺構。1b号流路跡を完全に分断してしまうことから、①に付随する機能として用いられる。③船着場状遺構。1b号流路跡を分断することなく、幅約3mの盛土を西岸から長さ7m強延長させる程度に止め、小舟などで人の往来や荷下ろしなどができる施設として機能した可能性を考えられる。

年代については、出土した9世紀前～中葉の土器のほかに、平安時代の自然流路である1b号流路跡を壊して掘り込まれていた状況も考え合わせると、1b号流路跡が完全に埋まりきる以前までに構築された遺構で、おおむね9世紀前半以降のものと考えている。 (阿 部)

第7節 遺構外出土遺物

北区遺構外からは、土師器246点、須恵器39点、陶器2点が出土した。土器以外の出土遺物はない。遺構外出土遺物は、流路跡と堰状遺構が検出されたグリッドでの出土数が多い。とくにC11、D8、E2・6グリッドなどが多く、各50点前後が出土した。このうち2点を図示した。

土師器 (図37, 写真29)

図37-1は土師器甕である。平底で張りのない体部、外傾する口縁部の端部を外方につまみ出す。内外面にロクロナデを施し、特に内面底部付近のロクromeは明瞭である。底面に回転糸切り痕を残す。体部外面には被熱により器面が赤変した部分が広範囲に認められる。

灰釉陶器 (図37, 写真29)

図37-2は灰釉陶器の高台杯である。底部付近の一部分のみが遺存する。高台の外表面は丸みを帯びる。胎土は精良で灰白色を呈する。内面の底部中央付近、外面の高台周辺を除いてごく薄く灰釉がかかる。(青山)

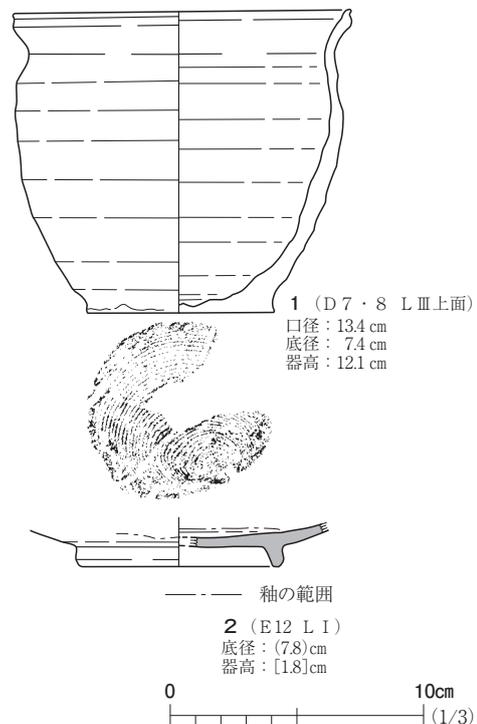


図37 遺構外出土遺物

第3章 南区の遺構と遺物

第1節 遺構の分布と基本土層

遺構の分布（図38～40）

本調査区で検出された遺構は、土坑5基、溝跡9条、自然流路跡5条である。本遺跡は会津盆地床の沖積地に位置し、現状では起伏ときわめて少ない平坦部に立地する。周囲はほ場整備によって造られた大区画水田が広がっている。勾配はごく小さく、阿賀川の盆地外への出口がある北西方向に向かうきわめて緩やかな下り勾配である。南区の範囲は南北約160m、東西約110mであるが、調査前の地形測量図によれば、南東端と北東端の高低差は約80cmである。

本調査区で確認された遺構のうち自然流路跡については、このような地形的な要因から、いずれも南東から北西の方向へ延びる傾向が認められる。一方、人工的な溝跡にはこのような傾向はまったくみられない。土坑については、調査区内の各所に散在し、分布に規則性は認められない。

基本土層（図41）

本遺跡の基本土層は、上述のような地理的な条件によりおおむね南東から北西に向かって緩やかな下り勾配をもって、調査区内の各地点ともほぼ同じ層序がみられる。ただし、遺跡内を南北に通る市道部分のみ、各層ともその両側よりもやや標高が高く、微高地の存在を示唆する。

L I ……酸化鉄をやや多く含んだ黒褐色粘質土で、水田耕作層である。遺跡内の全域に平均して約30数cmの厚さで堆積していた。ただし、一部は調査前に排土置き場へ至る重機の通路として整地したため、調査の時点では市道西側の調査区では攪乱されている。

L II ……黒色の粘土層である。水田耕作によって攪拌されなかった表土層の下部と考えられる。15～20cmの層厚をもち、調査区の全域に堆積している。

L III ……褐灰色の粘土層である。本遺跡で検出された縄文時代から近現代までの各時代の遺構は、この層の上面で確認された。約20～45cmの層厚で調査区内の全域に堆積している。この層以下は、調査区内の各所に設けたつぼ掘りの断面によって観察を行った。

L IV ……黄灰色の粘質土層である。周囲よりやや各層の標高の高い市道部分でこの層が欠落していた以外は、調査区内各所の各所で確認された。最大で約40cmの層厚をもつ。

L V ……暗灰黄色の砂層で、こぶし大以上の円礫を多量に含んでいる。グライ化した湧水層である。すべてのつぼ掘りがこの層までは達しなかったが、調査区内のほぼ全域に堆積しているものと思われる。

（青 山）



図38 南区全体図

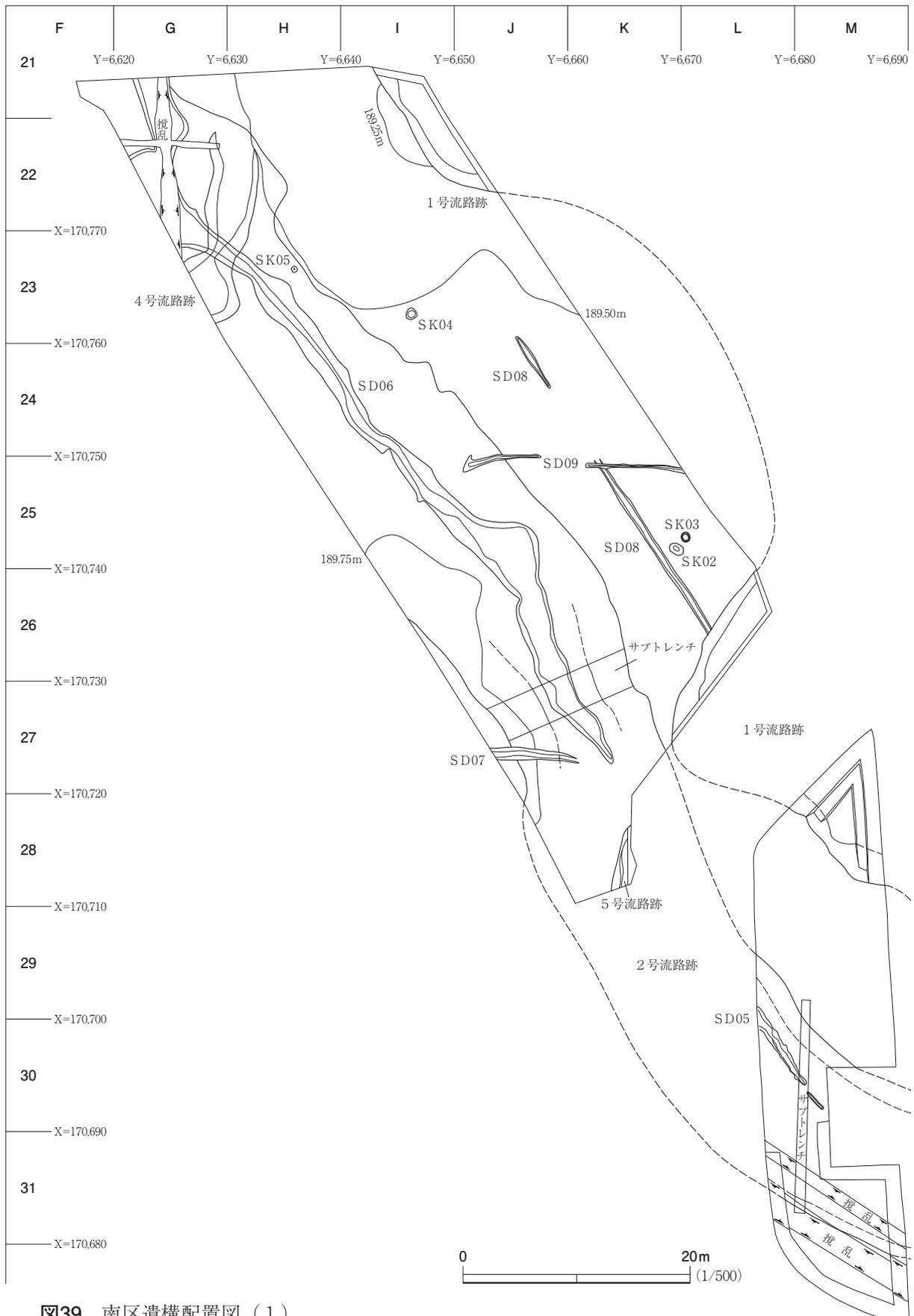


図39 南区遺構配置図 (1)

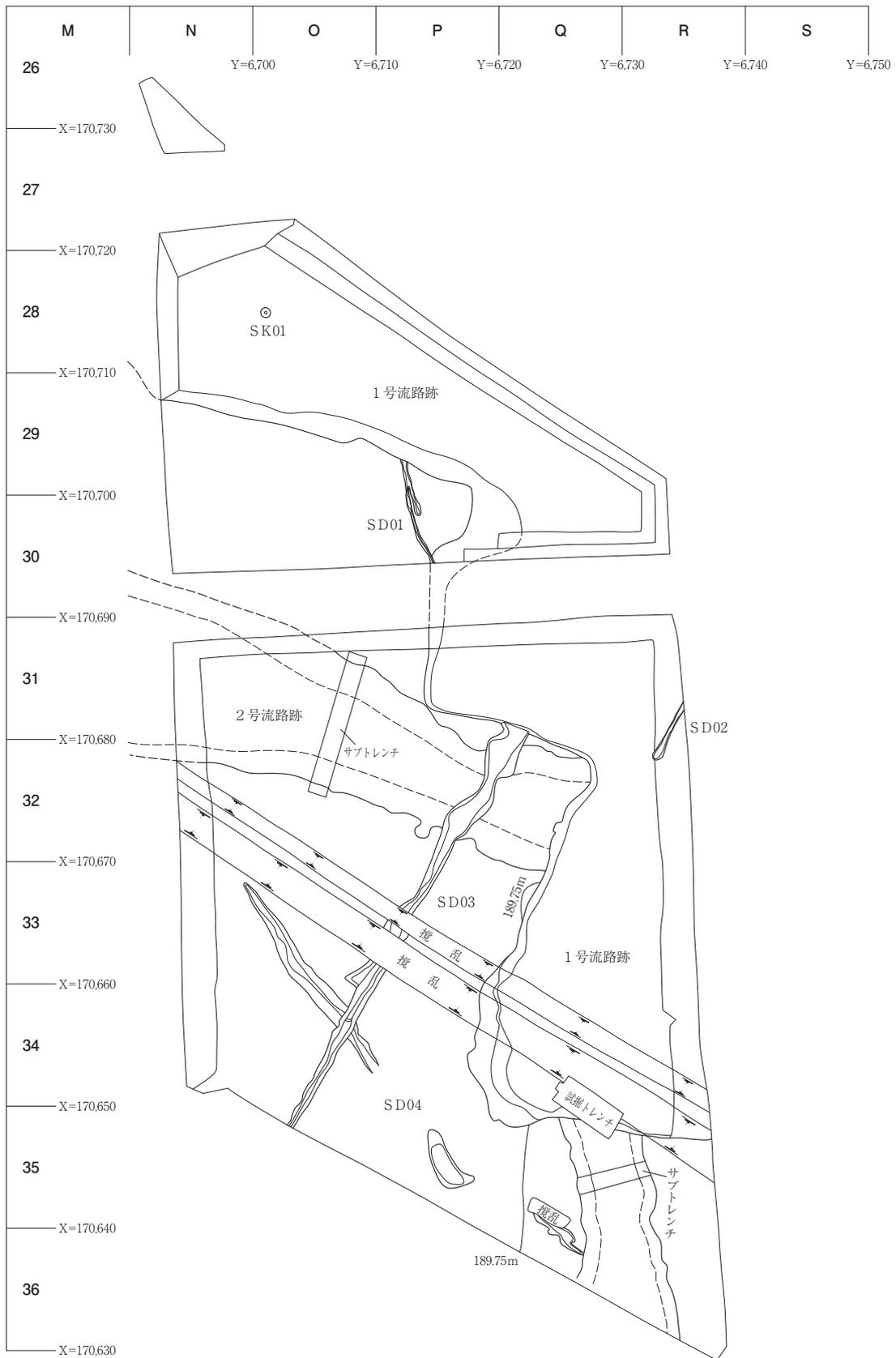


図40 南区遺構配置図 (2)

0 20m (1/500)

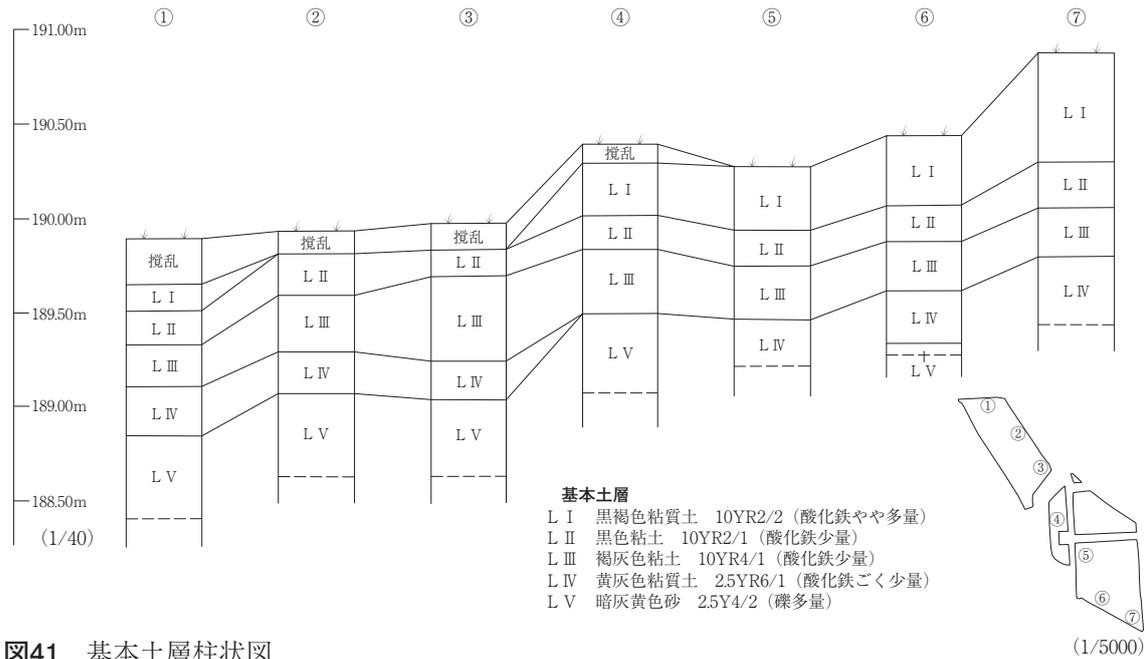


図41 基本土層柱状図

第2節 土 坑

本調査区においては、5基の土坑が検出された。

1号土坑 SK 01 (図42, 写真10)

本土坑は、調査区東部のO 28グリッド、検出面は1号流路跡の堆積土上面である。標高は189.6m付近である。1号流路跡と重複し、これより新しい。

平面形は円形で、規模は約80cm、検出面からの深さは40cmである。壁の傾斜は50～60°で部分的に段がつけられており、底面は小さくほぼ平坦である。堆積土は5層に分かれる。ℓ 1は灰黄褐色シルト質粘土、ℓ 2は黒褐色粘土で灰黄褐色シルト質粘土の土塊を含んでいる、ℓ 3は黒褐色シルト質粘土、ℓ 4は黒色シルト質粘土、ℓ 5は黒色粘土である。遺物は出土しなかった。

本土坑は1号流路跡よりも新しいことから10世紀以降に位置づけられる。性格は不明である。

(荒 木)

2号土坑 SK 02 (図42, 写真10)

本土坑は、調査区中央部のK 25・L 25グリッド、L III上面で検出された。標高は189.5m付近である。北東約40cmには3号土坑が隣接、南西約60cmには8号溝跡が北西方向に延びている。他の遺構との重複はない。

平面形は北西と南東方向に長い楕円形で、規模はもっとも大きい部分で1.34m、もっとも小さい部分で91cmである。検出面からの深さは31cmである。壁の傾斜は40～50°で、底面は緩やかな凹

面をなす。堆積土はレンズ状で3層に分かれる。ℓ1は灰黄褐色のシルト質粘土、ℓ2は黒褐色のシルト質粘土、ℓ3は黒褐色粘土と黒色粘土が互層をなしていた。ℓ2から近世陶器の甕の体部片が1点出土した。

本土坑は、出土した陶器片から近世に位置づけられる。性格は不明であるが、北東側に隣接する3号土坑との何らかの関係が推測される。(青山)

3号土坑 SK03 (図42, 写真10)

本土坑は、調査区中央部のL25グリッド、LⅢ上面で検出された。標高は189.5m付近である。南西約40cmには2号土坑が隣接している。

平面形は円形に近い楕円形で、径はもっとも大きい部分で88cm、もっとも小さい部分で77cmである。底面は、周縁がドーナツ状に浅く掘りくぼめられ、その内側の中央部は平坦である。検出面からの深さは、周縁部のもっとも深い部分で8cm、中央部で4cmである。

ドーナツ状に掘りくぼめられた周縁部には厚さ3mmほどの竹材を環状に曲げた輪が設置されていた。竹材の遺存状態は悪く、取り上げることはできなかった。輪を綴じた方法についても不明である。竹材の幅は8cmほどが遺存していたが、表土剥ぎと検出作業の際に若干削られているため、本来はこれよりも広がったものと考えられる。

堆積土は設置されていた竹材の内外でやや異なる。内側のℓ1は黒褐色のシルト質粘土で、外側のℓ2は黒色のシルト質粘土である。遺物は、ℓ1から陶器播鉢の小片が1点出土している。

本土坑は、出土した陶器片から近世に位置づけられる。性格は不明であるが、南西側に隣接する2号土坑との何らかの関係が推測される。(青山)

4号土坑 SK04 (図42, 写真10)

本土坑は、調査区北部のI23グリッド、LⅢ上面で検出された。標高は189.5m付近である。

南西約3mのところと2号流路跡が、同約7mのところと6号溝跡が、それぞれ北西から南西方向に延びている。他の遺構との重複はない。

平面形は不正な円形である。規模はもっとも大きい部分で1.05m、もっとも小さい部分で94cmである。検出面からの深さは、もっとも深いところで10cmである。壁はもっとも急な部分で40°の角度で立ち上がり、底面はほぼ平坦である。堆積土は黒褐色のシルト質粘土である。遺物は出土しなかった。

本土坑の時期・性格は不明である。(青山)

5号土坑 SK05 (図42, 写真10)

本土坑は、調査区北部のH23グリッド、2号流路跡の堆積土上面で検出された。標高は189.5m付近である。2号流路跡と重複し、これより新しい。南西約2mのところと6号溝跡が、西約6m

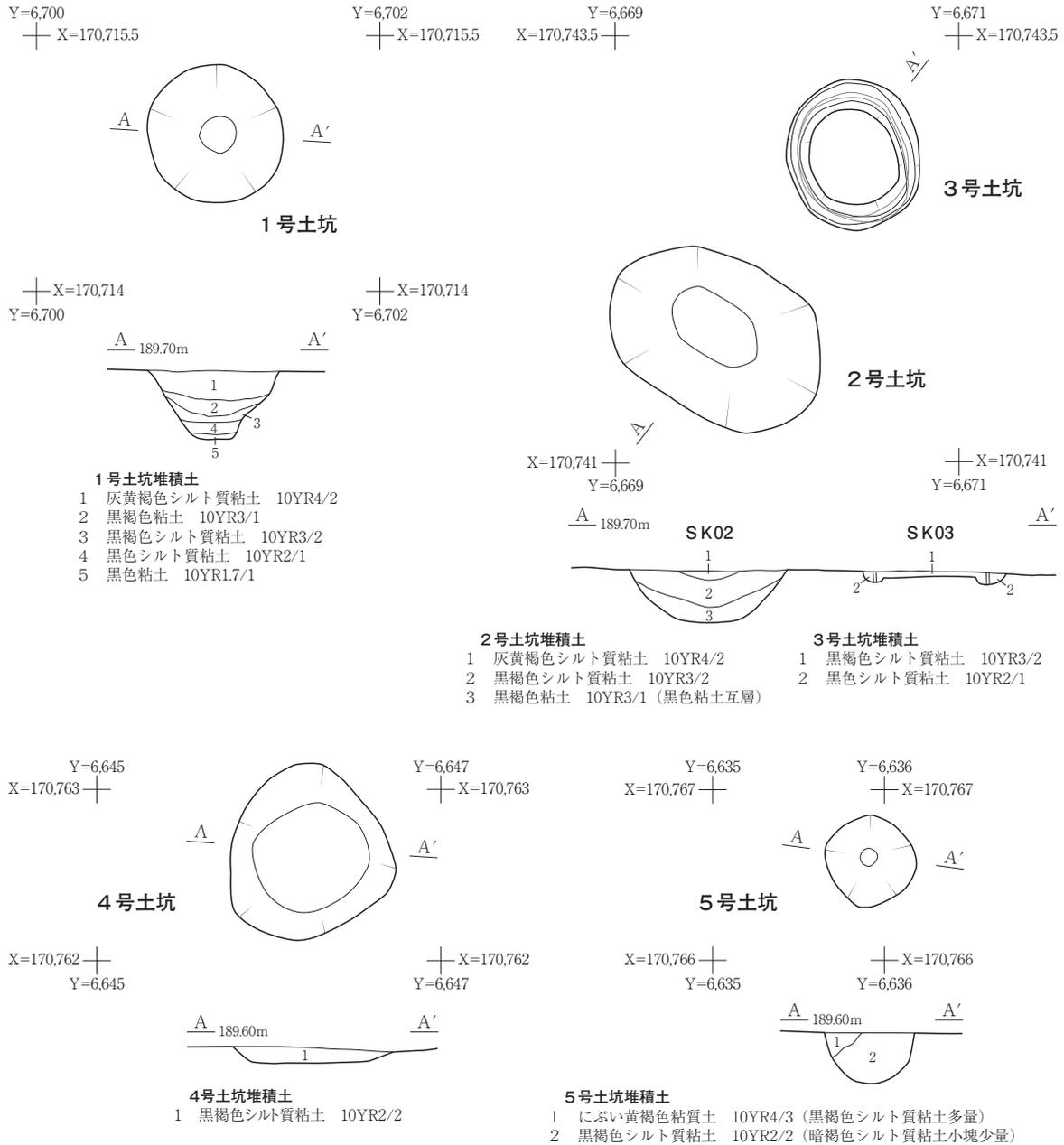


図42 1～5号土坑

のところに4号流路跡が位置する。

平面形はやや不正な円形である。規模はもっとも大きい部分で53cm、もっとも小さい部分で49cmである。検出面からの深さは、もっとも深いところで30cmである。壁は上部が急角度に立ち上がり、底面に向かうにしたがってしだいに角度が緩やかになり、底面は楕形を呈する。堆積土は、上部に部分的にみられる①と検出面から底面にかけて堆積する②からなる人為堆積である。遺物は出土しなかった。

本土坑の時期・性格は不明である。

(青山)

第3節 溝 跡

本調査区においては、9条の溝跡が検出された。

1号溝跡 S D 01 (図43, 写真11・36)

本溝跡は、調査区の東部、P 29・30グリッドのLⅢ上面で検出された。本溝跡は北からおよそ15°西に偏する方向に直線的に延びる。南部はきわめて緩やかに蛇行する。北端は1号流路跡に接続し、これと併存したものと思われる。南端は調査区外へ延びる。規模は、長さ9.4m、幅は最大で52cm、深さは最大で10cmである。北端から2.6mのところ東側に分岐し、その長さは2.45m、幅は最大48cm、深さは最大7cmである。底面には凹凸があり、北に接続する1号流路跡に向かって緩やかな下り勾配がある。堆積土は1層で、黒褐色の砂が堆積していた。

堆積土中から、土師器片6点、弥生土器片1点、剥片1点が出土した。土師器片には平安時代の長胴甕の胴部片が含まれる。このうち剥片1点を図43-1に図示した。粘板岩と考えられる石材を用いた縦長の剥片で、背面に自然面を多く残し、両側縁に二次加工が加えられている。

本溝跡の性格は不明であるが、出土遺物から平安時代のものと考えられる。(青山)

2号溝跡 S D 02 (図43, 写真11)

本溝跡は、調査区の東端部、R 31・32グリッドで検出された。検出面は1号流路跡の堆積土上面である。北からおよそ30°東に偏する方向に直線的に延び、北東端は調査区外へ延びる。規模は、長さ5.7m、幅が最大80cm、深さは最大6cmである。底面は、部分的に緩やかな凹凸が認められたものの、おおむね緩やかな舟底状をなしていた。底面に顕著な勾配は認められなかった。堆積土は1層で、黒褐色のシルト質粘土が堆積していた。遺物は出土しなかった。

本溝跡の年代は1号流路跡よりも新しいことから、10世紀以降に位置づけられる。(青山)

3号溝跡 S D 03 (図44・45, 写真11・36)

本溝跡は、調査区の東部、O～Qの31～35グリッドで検出された。LⅢ上面で南半部を検出したが、北半部はプランが判然としなかったため1号流路跡と同様にLⅣ上面まで掘り下げて検出した。北から約25°東に偏してほぼ直線的に延びる。北東端は1号流路跡に接続し、堆積土が類似することからこれと併存期間があり、同時に埋没したと考えられる。南西端は調査区外へ延びる。溝の中央部は現代の2条の溝状の攪乱によって壊されている。溝の北部は2号流路跡と、南部は4号溝跡と重複し、いずれも本溝跡が新しい。規模は、長さ37.6m、幅は北に向かうにしたがって広くなり、最大で2.8m、もっとも狭い南端部で60cm、底面は北東に向かう下り勾配があり高低差は60cmである。南端から12.5mのところ西側へ最大65cmの張り出しがある。張り出しはもっとも

深い部分で34cm、底面はおおむね平坦で、溝の底面より約20cm浅い。張り出しの北端は攪乱によって壊され、遺存していた部分の長さは1.22mである。堆積土は、南西部では黒色のシルト質粘土であり、1号流路跡近くではこれに砂質土を筋状に含む多くの層に分かれ、水成堆積の様相を呈する。

溝の南西部では、図45-3～5の完形の須恵器杯が3点出土した。いずれも底面から10～15cm浮いた状態で、3と5は口縁部を上、4は底部を上に向けて出土した。本溝跡から出土した遺物は、これら須恵器の完形品を含む、土師器9点、須恵器5点、木製品5点で、このうち9点を図示した。

図45-1・2は土師器杯である。いずれもロクロ成形で、外面はロクロナデの後に回転ヘラケズリ、内面はミガキののち黒色処理が施されている。2の底面には回転糸切り痕が観察される。同図3～6は須恵器杯である。いずれもロクロ成形で、底面に回転ヘラ切り痕が観察される。3は外面に柿渋と思われる薄い塗膜が部分的に観察できる。5の底面には「生」の墨書がある。6は器面全体に柿渋と思われる薄い塗膜が観察でき、体部外面に「沼」、底面に「佐」とと思われる墨書がある。

図45-7～9は木製品である。7は曲物容器の側板の一部で、樹皮で2列に綴じられ、中央に1孔が穿たれている。8は断面が円形の棒状の材で遺存している片方の端部は丸く加工されている。9は断面が三角形の細長い材である。

本溝跡は、自然流路跡である1号流路跡に接続する人工の溝跡である。下流部にあたる北西部では1号流路跡の堆積状況とよく似た水生堆積の様相をもつが、上流にあたる南西部ではこのような様相はみられない。出土遺物から9世紀中葉の年代が考えられる。（青山）

4号溝跡 SD 04（図44, 写真11）

本溝跡は、調査区の東南端部、N～Qの33～36グリッドで検出された。検出面はLⅢ上面である。3号溝跡と重複し、これよりも古い。北から40°前後西に偏する方向にきわめて緩やかに蛇行しながら断続的に伸び、両端は自然に途切れる。溝は北西から南東に向かって約18m伸び、約6m途切れて約5m伸び、再び約5m途切れて約5m伸びる。いずれも堆積土の状況がよく似ていたことから同一の溝跡と判断した。規模は、長さ40.9m、幅が最大1.8m、深さは最大58cmである。底面は、部分的に凹凸が認められたものの、おおむね緩やかな舟底状をなしていた。南東部分が深く壁の立ち上がりが急である他は、緩やかに立ち上がる。堆積土は2層に分かれる。黒褐色から暗褐色のシルト質砂で、沼沢パミスと思われる粒子を多く含んでいた。遺物は出土しなかった。

後述する5・6号溝跡と直接はつながっていないものの、溝が伸びる方向や堆積土の状況がよく似ていることから、これらと同一の自然流路跡と考えられる。（青山）

5号溝跡 SD 05（図43, 写真11）

本溝跡は、調査区の中央部、L・Mの29・30グリッドで検出された。2号流路跡の上面で検出され、これよりも新しい。北から40°前後西に偏する方向に緩やかに蛇行しながら断続的に伸び、南東端は自然に途切れる。北西端は調査区外へ伸びる。溝は北西から南東に向かって約8m伸び、

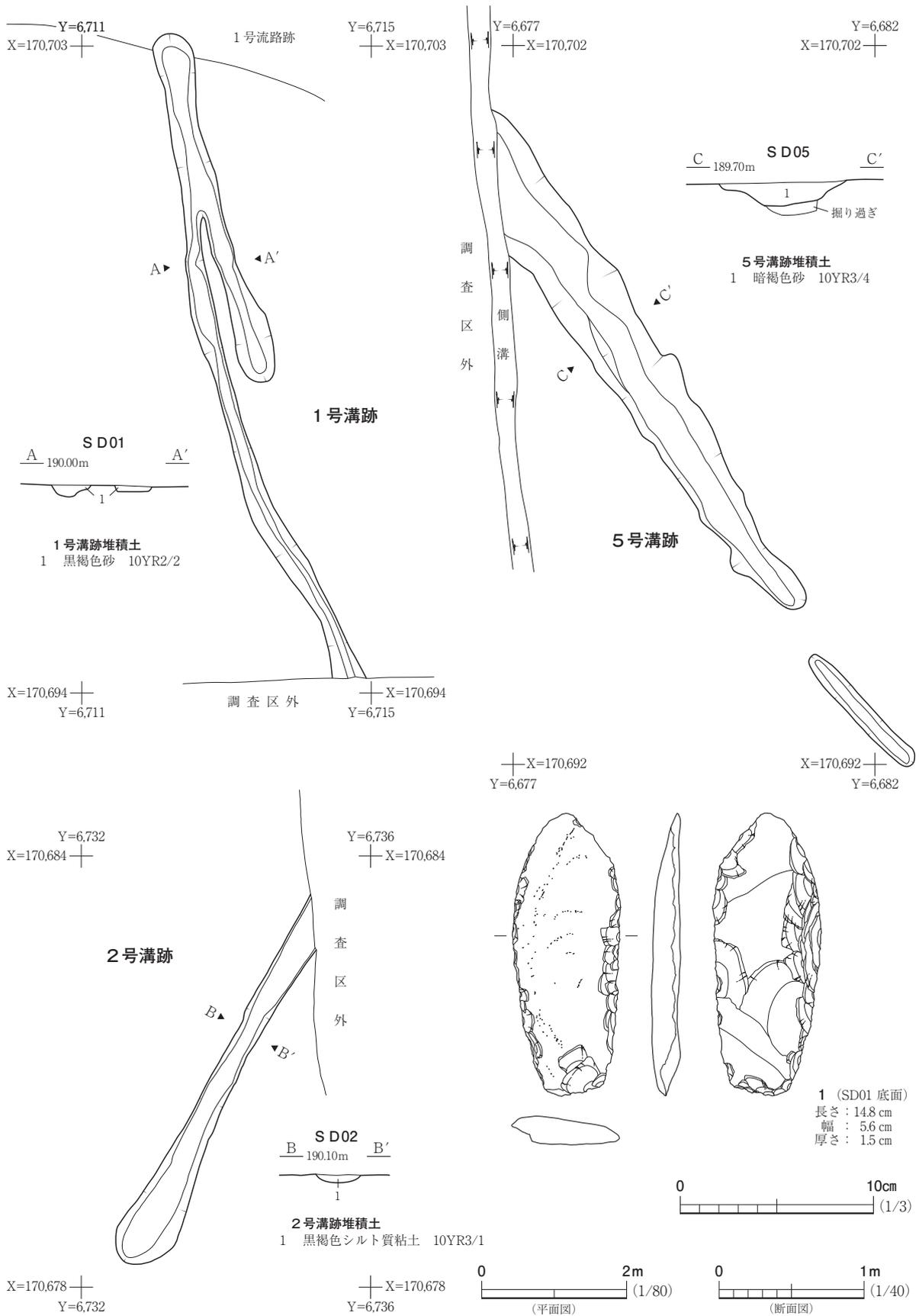


図43 1・2・5号溝跡, 1号溝跡出土遺物

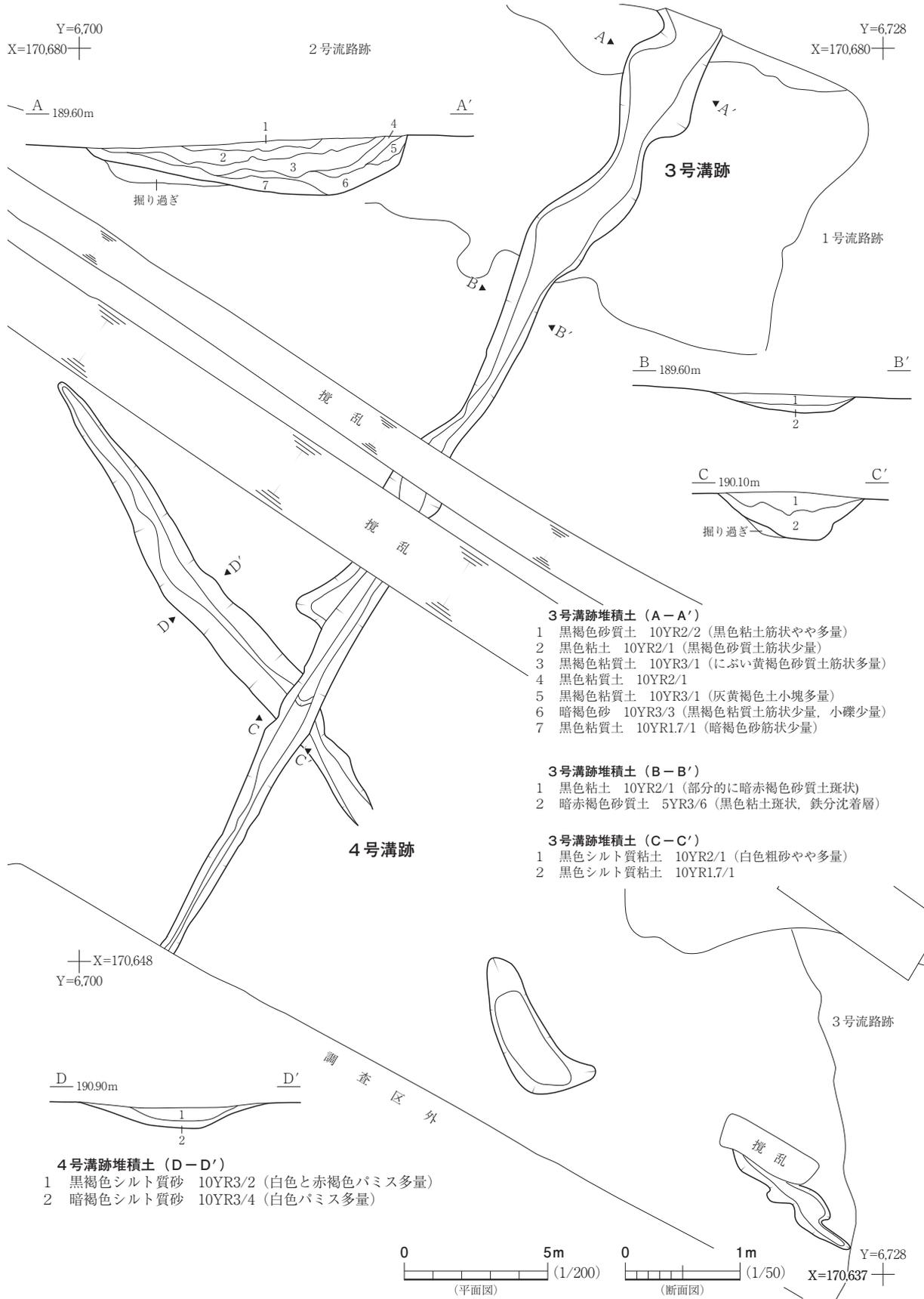


図44 3・4号溝跡

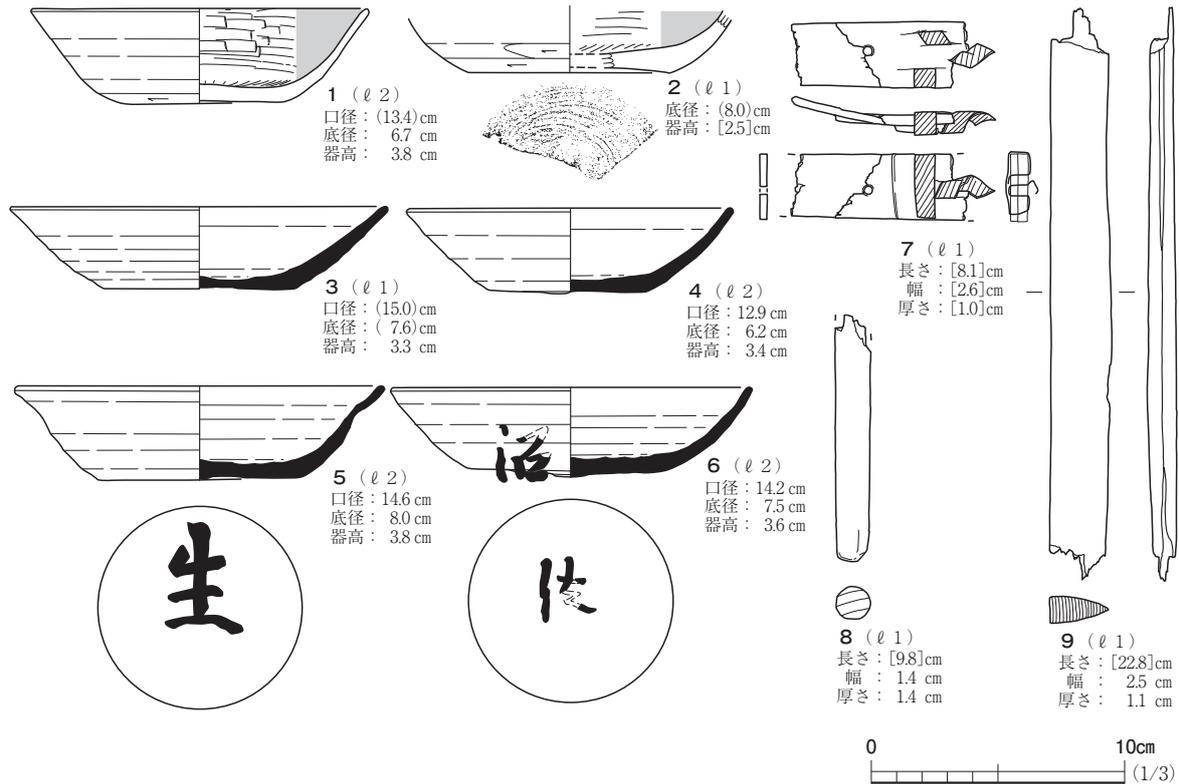


図45 3号溝跡出土遺物

約70cm途切れて約2mの長さで延びる。いずれも堆積土の状況がよく似ていたことから同一の溝跡と判断した。規模は、長さ10.8m、幅が最大1.2m、深さは最大26cmである。底面は部分的に凹凸があり、おおむね緩やかな舟底状をなしていた。底面は北西に向かう緩やかな下り勾配になっており、両端部の高低差は18cmである。溝跡内には暗褐色砂が堆積していた。遺物は出土しなかった。

前述した4号溝跡と後述する6号溝跡と直接はつながっていないものの、溝が延びる方向や堆積土の状況がよく似ていることから、これらと同一の自然流路跡と考えられる。(青山)

6号溝跡 S D 06 (図46, 写真12)

本溝跡は、調査区の北西部、G～Kの22～27グリッドで検出された。本溝跡の全体が2号流路跡と重複し、これより新しい。北西部は4号流路跡と重複し、これより古い。北西端付近は攪乱で壊されている。溝跡は北から40°前後西に偏する方向にきわめて緩やかに蛇行しながら延び、南東端は自然に途切れる。北西端は二股に分かれ、いずれも調査区外へ延びる。規模は、長さ72.5m、幅2.5m前後の部分が多く、J 25グリッドのもっとも幅の広い部分で5.0m、深さは最大41cmである。

底面には部分的に凹凸が認められ、おおむね緩やかな舟底状をなしていた。両端部で顕著な高低差は認められなかった。壁は緩やかに立ち上がる。溝跡内には灰黄褐色を基調とする砂や砂質土がレンズ状に堆積していた。堆積土の最下部には褐色の酸化鉄が多く含まれ、堆積土を掘り上げると底面に酸化鉄が沈着している部分が広範囲に認められた。

堆積土中から土器の小片が2点出土した。いずれも磨滅が激しいが、縄文土器である。

本溝跡は前述した4・5号溝跡と直接つながらないものの、溝が延びる方向や堆積土の状況がよく似ていることから、これらと同一の自然流路跡と思われる。年代は出土遺物から縄文時代に位置づけられ、本溝跡が切っている2号流路跡の年代である縄文時代前期以降に本流路ができ、本溝跡が切られている4号流路跡の年代である平安時代以前に埋没したものと思われる。（青山）

7号溝跡 S D 07（図47, 写真12）

本溝跡は、調査区の中央部、J・K 27グリッドで検出された。検出面はLⅢ上面である。2号流路跡と重複し、これよりも新しい。ほぼ東西方向に南へややカーブしながら延びる。西は調査区外へ延び、東端は自然に途切れる。検出された部分での規模は、長さ7.9m、幅が最大1.2m、深さは最大20cmである。底面は部分的に緩やかな凹凸が認められたものの、おおむね緩やかな舟底状をなしていた。顕著な勾配は認められなかった。堆積土は1層で、黒色粘土が堆積していた。堆積土中から土師器の小片が5点出土した。いずれも磨滅が激しいが、1点はロクロ土師器と考えられる。

本溝跡の年代は、出土土器からすれば9世紀頃に位置づけられる。（青山）

8号溝跡 S D 08（図47, 写真12）

本溝跡は、調査区の中央部、J～Lの23～26グリッドで検出された。検出面はLⅢ上面である。9号溝跡、1号流路跡と重複し、9号溝跡より古く、1号流路跡より新しい。溝跡は北から約30°西に偏する方向にほぼ直線を描いて延びる。溝跡の南東端は調査区外に延びる。検出された部分の規模は、長さ31m、幅は最大84cm、深さは最大11cmである。溝は途中で途切れる。その南東部の長さは約18mで、約7.5m途切れ、北西部の長さは約5.5mである。いずれも延びる方向が一致し堆積土がよく似ていたことから同一の溝跡と判断した。底面には緩やかな凹凸が認められるものの、おおむね平坦である。底面は北西に向かう下り勾配になっており、両端部の高低差は11cmである。溝跡内には黒褐色粘質土が堆積し、灰黄褐色粘質土の塊を多く含んでいた。遺物は出土しなかった。

本溝跡は1号流路跡堆積土上面を掘りこむことから、中世以降に位置づけられる。（荒木）

9号溝跡 S D 09（図47, 写真12）

本溝跡は、調査区の北部、J～Lの24・25グリッドで検出された。検出面はLⅢ上面である。8号溝跡、2号流路跡と重複し、これらより新しい。溝跡はほぼ東西方向に延び、西端は南へ緩やかにカーブする。東端は調査区外に延びる。検出された部分の規模は、長さ18.8m、幅が最大55cm、深さ最大16cmである。溝は途中で途切れ、東部の長さは約8.4m、約4m途切れ、西部の長さは約6.2mである。堆積土は西部が灰黄褐色土、東部が黒褐色土である。堆積土は東西で異なるが、溝の延びる方向が一致することから、同一の溝跡と判断した。底面は全体的に凹凸が認められる。底面は東に向かう下り勾配になっており、両端部の高低差は17cmである。遺物は出土しなかった。

本溝跡は中世以降の8号溝跡よりも新しく、さらにそれ以降に位置づけられる。（荒木）

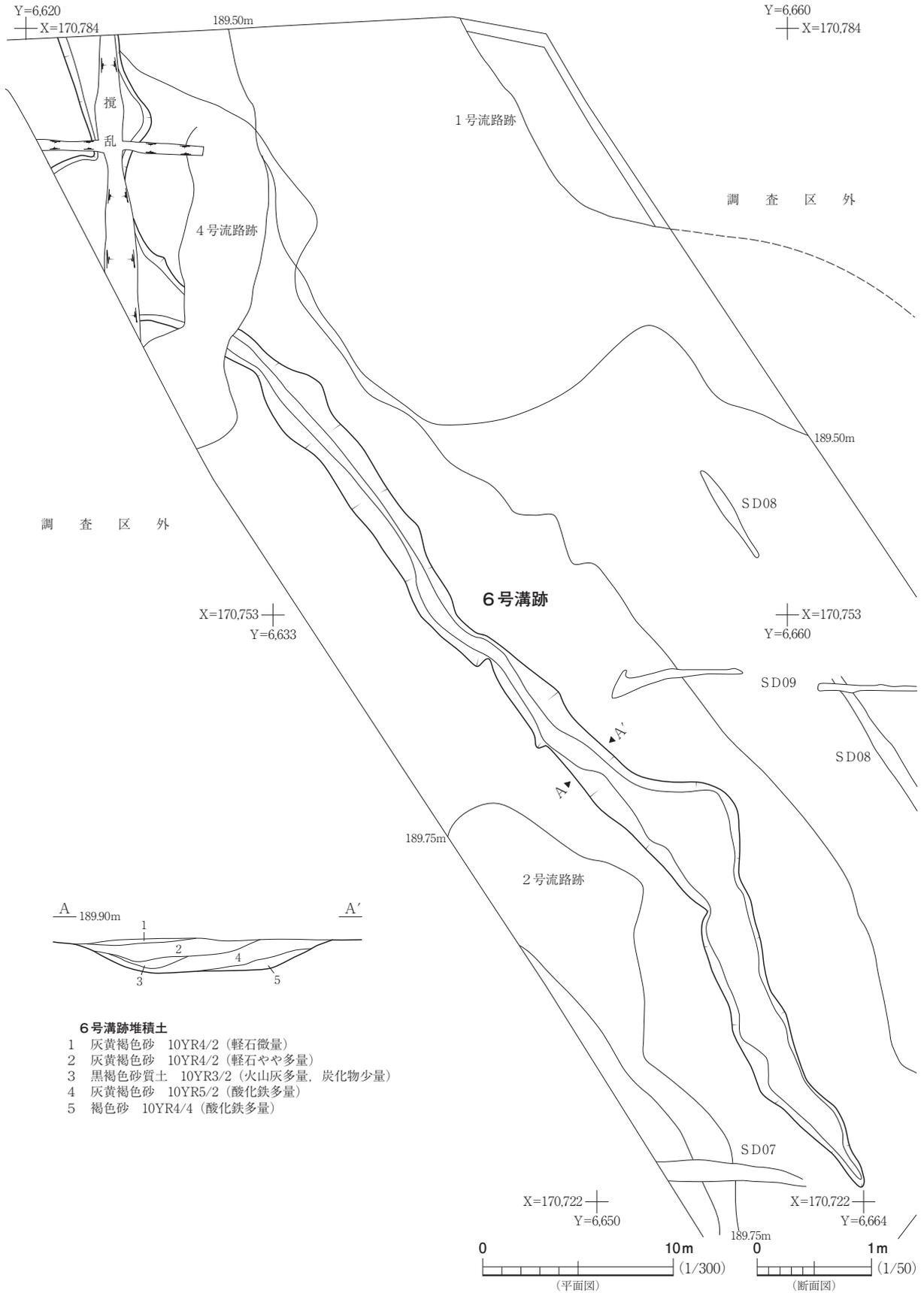


図46 6号溝跡

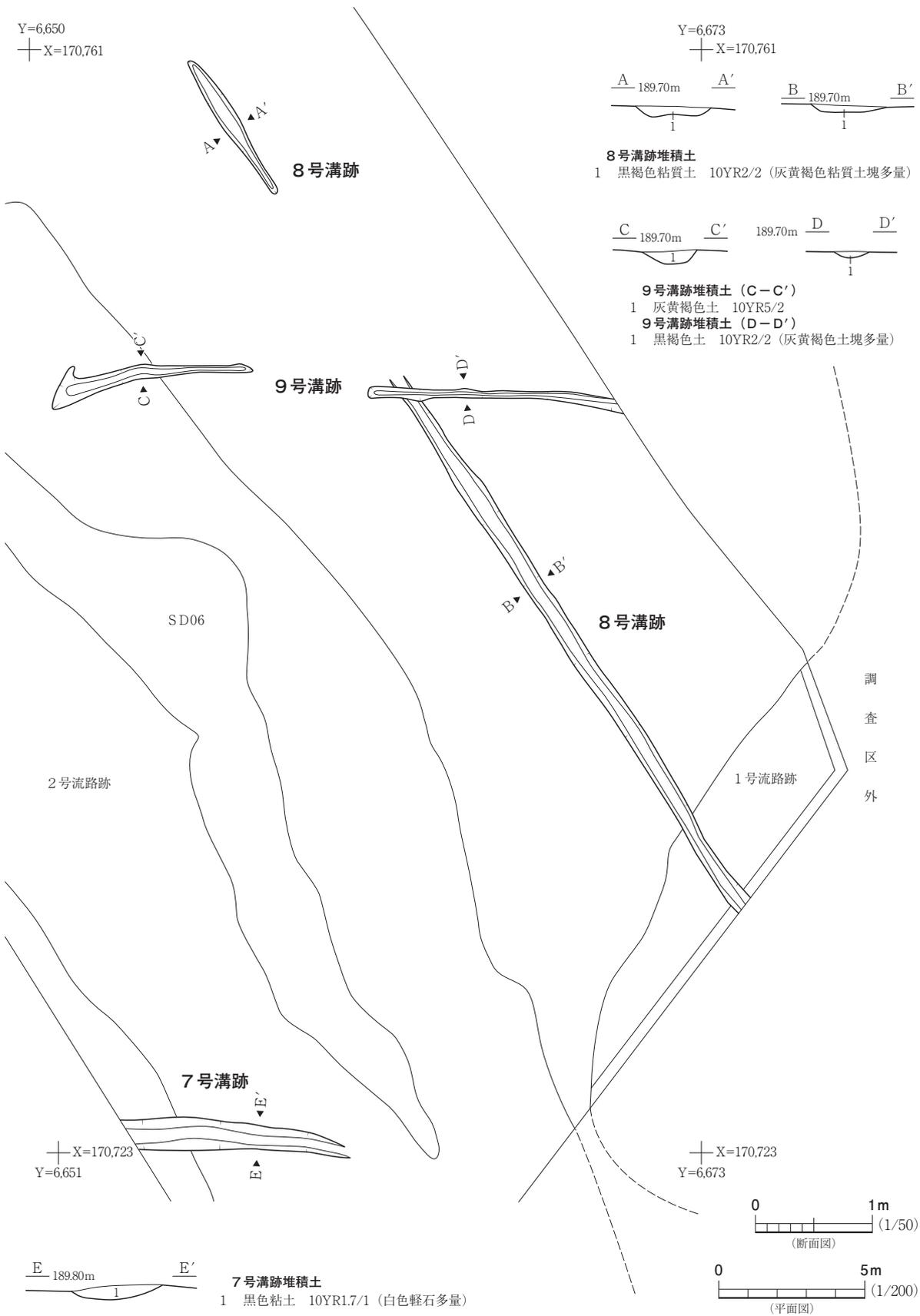


図47 7～9号溝跡

第4節 流 路 跡

本調査区においては、大小5条の自然の流路跡が検出された。

1号流路跡

遺 構 (図48, 写真13・14)

本流路跡は、おおむね南東から北西の方向に蛇行しながら延びる大規模な自然流路跡である。本遺跡の東を北流する第二沼川をはさんで隣接する鶴沼C遺跡においても、本流路跡の延長上に同様の流路跡が検出されている。これらは同一の流路跡である可能性が高い。また、本遺跡の北区においても同様の流路跡が検出されている。

本流路跡は、本調査区の北端から西端にかけてのI～Rの21～35グリッドで検出された。流路跡の北部はLⅢ上面で検出されたが、南半部はプランが判然としなかったためLⅣ上面まで重機で掘り下げて全体を検出した。

本流路跡は5か所に分断して検出されたが、堆積土の状況がいずれもよく似ており、出土した遺物の年代についても同じであることから、同一の流路跡と判断した。調査区北端部のI・Jの21・22グリッドで検出された部分については直接はつながらないが、蛇行によって一部が調査区外へ延びていると判断した。

本流路跡は南西側の片側の岸のみが調査区内に検出され、北東側の岸は調査区外に延びて検出されなかった。1号土坑、2・8号溝跡と重複し、これよりも古い。1・3号溝跡とは併存する。2・3号流路跡は本流路に切られており、本流路跡が形成される以前に流れていた自然流路跡と考えられる。南部は現代の溝状の攪乱によって一部が壊されている。

規模は、調査区内で検出された部分で長さ166m、幅は20.8m以上、検出面からの深さは最大で1.54mであり、本調査区で検出された遺構ではもっとも規模が大きい。掘削の際には現地表面からの深さが2mをこえる部分も生じ、作業の際の安全対策のため調査区壁に段あるいは法面を残したため、検出した部分の堆積土をすべて掘り上げることはできなかった。

底面はLⅤの礫層上面にほぼ一致する。こぶし大から人頭大の礫による凹凸がみられる以外はほぼ平坦であった。底面の標高には北西に向かう緩やかな下り勾配があり、高低差は60cmである。

岸はQ34グリッド付近ではなだらかで部分的に段を有していたものの、その他の部分ではいずれも急な角度をもって立ち上がっていた。

堆積土は、大きく4層に分かれる。ℓ1は黒色粘土、ℓ2は灰黄褐色の砂質土をスジ状に含んだ黒褐色粘土で、いずれも遺物をごくわずかに含んでいた。以上の層は、本流路跡の水流が停止し湿地化して以後の堆積層と考えられる。ℓ3は砂と粘土が互層をなすいわゆるラミナ層を一括したものである。流路内の各部でさまざまな様相をもって堆積し、多くの層に細分することができるが、

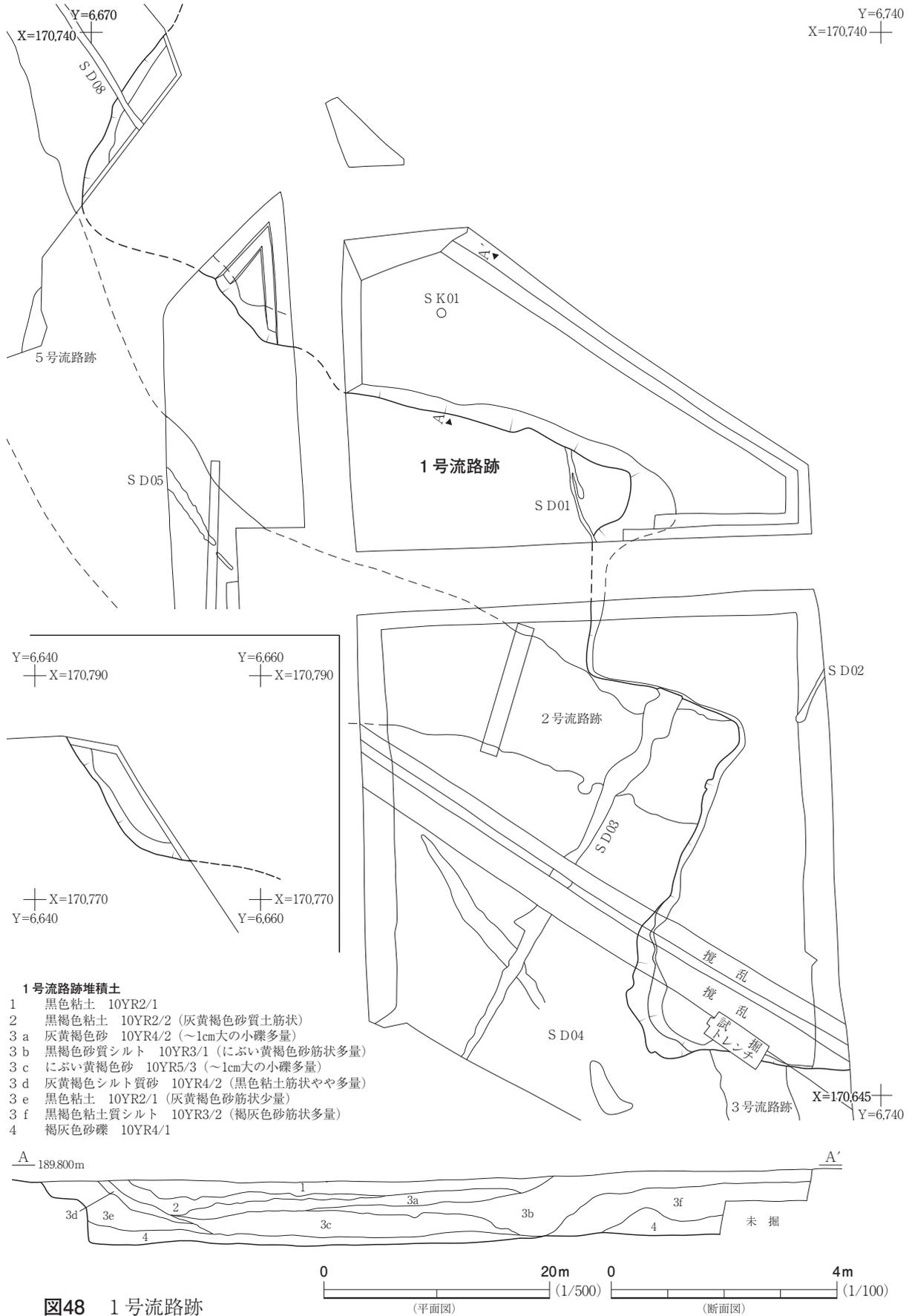


図48 1号流路跡

いずれも水流が比較的顕著であった様相を呈する。包含されていた遺物の量は少なかった。ℓ 4は褐灰色の砂礫層で湧水があり、遺物を多く含んでいた。この層も顕著な水流により、LVに由来する砂礫を浸食・運搬しながら堆積した層と考えられる。

遺物 (図49～53, 写真36～43)

出土した遺物は、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、須恵系土器などの土器962点、木製品10点、石器・剥片2点である。N28, O28・29, Q29・30グリッドからの出土量が多く、各100点以上の遺物が出土した。このうち縄文土器25点、弥生土器5点、土師器23点、須恵器27点、須恵系土器1点、木製品7点を図示した。

図49-1～25は縄文土器深鉢である。このうち1～5の胎土には繊維混和痕が認められる。1は早期の茅山下層式と思われる波状口縁付近の破片で、外面に条痕、口唇部などに刻み目が施され、焼成後の補修孔が外面から内面にむけて1孔穿たれている。2～4は羽状縄文が、5は組紐文が施されている。前期前葉の花積下層式～大木2a式と考えられる。6～11は後期の加曾利B2式頃のものである。6は、体部に1条の沈線を巡らせその上部に斜位の沈線が観察される。底面には網代痕が付されている。体部下半は無文である。7～11は磨消縄文が施されている。12は晩期の土器で、小さな波状の口縁部をもち、入組文が描かれる。大洞C2式と考えられる。13～19は地文のみで、15と17の外面には炭化物が付着する。20は無文、21～24は条線文を施した粗製土器である。25は底部付近のみが遺存しており、無文である。後期から晩期のものと思われる。

図49-26～30は弥生土器である。26は中期の二ツ釜式の壺である。体部上半に渦文、下半に縄文が施されている。27・28は中期の甕で、結節回転縄文が施され、外面に炭化物が付着している。口縁端部にも縄文が施されている。29は地文のみで外面に炭化物が付着する。30は後期の天王山式の壺である。地文を施したのち体部中ほどに2条の沈線を巡らせ、その直下に下向きの連弧文を施す。内外面に炭化物が付着している。

図50-1～3は土師器の高杯である。1は「八」の字に開く脚部片で、外面に縦方向のミガキが施されている。2は中空棒状脚と杯部の接合部の破片である。外面にケズリが、内面に輪積み痕が観察される。3は屈折脚の破片である。内外面とも磨滅が激しい。1は古墳時代前期、2・3は同中期のものである。

図50-4～16は土師器杯である。4は長く外反する口縁部の破片で古墳時代後期、5は短く外反する口縁部から体部にかけての破片で古墳時代中期に位置づけられる。6～16はロクロ成形で、外面にロクロナデののち回転ヘラケズリが、内面にはミガキののち黒色処理が施されている。11・12の底面には回転糸切り痕が残される。11・12・14には外面に柿渋と考えられる薄い塗膜が、7の外面には炭化物が付着する。

図50-17は須恵系土器の杯である。ロクロ成形で、内面はコテによって整形されていると思われる。底面に糸切り痕が残される。

図50-18は土師器で、器形は鉢と考えられる。口縁部付近の小片から復元したものである。口

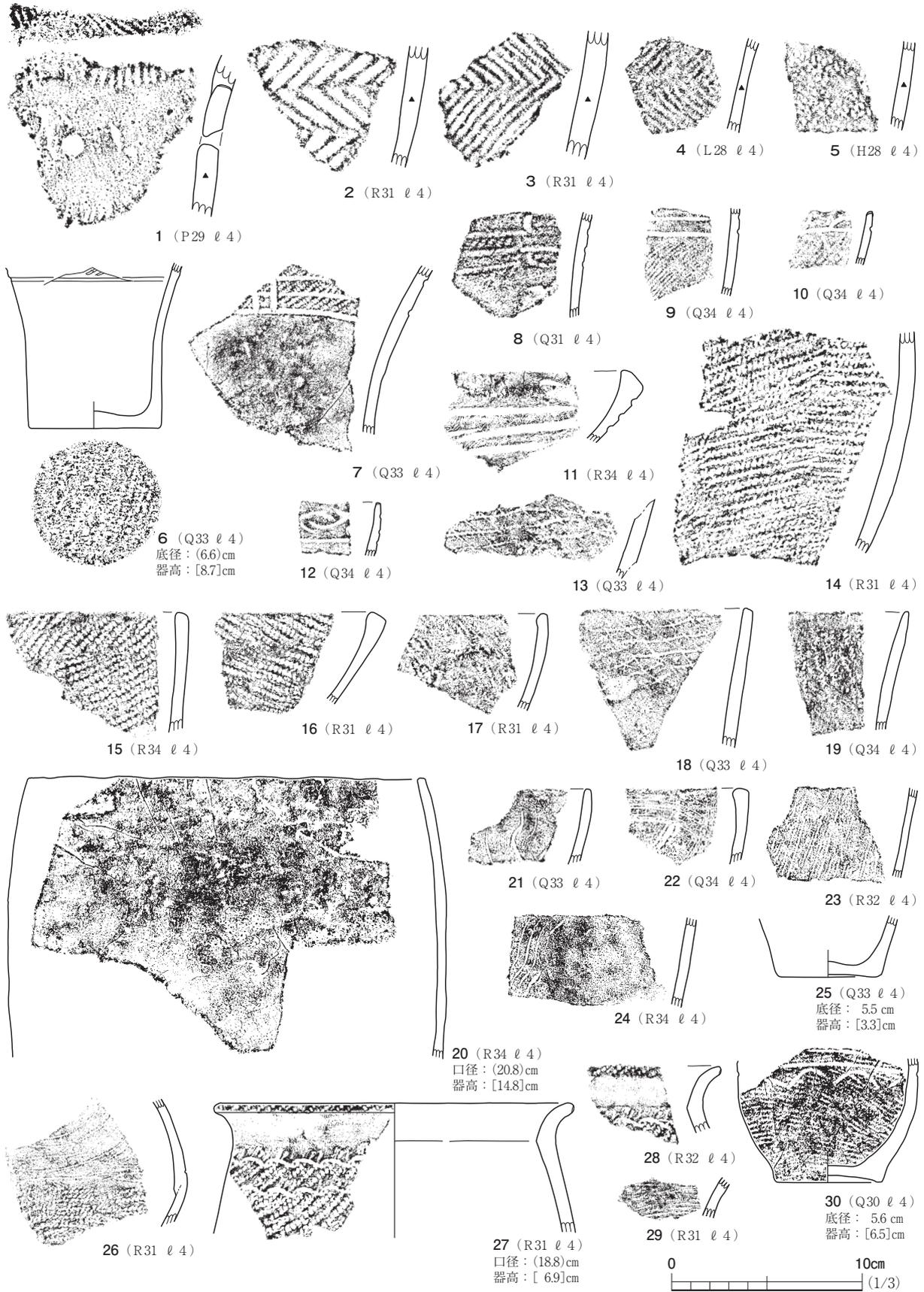


图49 1号流路跡出土遺物(1)

縁部は直線的に外傾し、外面の口縁部直下に受け状の突帯を巡らす。外面にはロクロナデが、内面にはミガキと黒色処理が施される。

図50-19～22は土師器甕である。19～21はロクロ成形で、19・20は口縁部を上方につまみ出す。19の外面には炭化物が付着する。22は非ロクロ成形で、外面にケズリ、内面にナデを施す。

23は手づくね土器である。24は把手付き鍋の把手部分である。

図51-1～7は須恵器杯である。ロクロ成形で、いずれも底面に回転ヘラ切り痕が観察される。1・3の体部外面には墨書が一文字認められる。判読はできなかった。7の底面には「×」の線刻がみられる。

図51-8は須恵器高台杯である。ロクロ成形で、体部と底部の境に明瞭な稜線を形作り、稜線の直上に回転ヘラケズリを施す。

図51-9は須恵器蓋である。口縁部付近の小片からの復元である。

図51-10～14は須恵器瓶類である。10～12は高台が付く。10は焼き歪み、底面に一本線の線刻と焼台の溶着がみられ、内面の底部には緑色の自然釉がかかる。13の内面には黒漆が厚く付着している。漆は体部の破断面にも付着し、その状態からは天地を逆にして漆の容器として使用されたと推定される。頸部の破断面には漆は付着していない。14は長頸瓶の頸部である。口縁端部を欠失する。頸部に断面半円形の隆帯を巡らす。

図51-15～18は須恵器甕である。15はロクロ整形され、外面の底部付近にケズリが施されている。16は素口縁の端部をつまみ出し、外面にタタキメ、内面に当て具痕がみられ、当て具痕は一部ナデ消されている。17は素口縁で、外面にハケメの後ロクロナデが施されている。18は口縁部が短く外傾し、ロクロ整形で、内面にハケによるロクロナデがみられる。

図52-1～9は須恵器甕の体部片である。外面にはいずれも並行のタタキメがみられ、2にはさらにナデが、3・9にはカキメが施されている。内面は、1・2が並行の当て具痕、3・4が並行の当て具痕のちナデ、5が格子の当て具痕とナデ、6～9は同心円の当て具痕がみられる。9の外面には環状の焼台の痕跡がみられる。

図53-1～7は木製品である。1～3は曲物容器である。1は側板の大部分が底板から外れた状態で出土したもので、図上で復元した。円板の側面に側板を巻き、5か所を鉄釘で結合している。側板の綴じ方は不明である。2・3は円板のみである。2は大半が折損し、一部分のみが遺存する。周縁が一段低い。3は一部が折損し、遺存した部分の円板の側面に木釘が2か所打たれているのが確認できる。4は挽物容器である。底部はやや突出し、口縁部は外反する。器壁が厚く、もっとも厚い部分で1.8cmである。底面には加工痕が観察される。5・6は細長い板材、7は角材で、遺存する片側の端部の角の片方を切り落としている。

図53-8は石器である。やや縦長の剥片の両側縁を両面からの加工によって整え、先端部に腹面から剥離を加えて片刃を作り出した搔器である。腹面の刃部から約3cmの範囲に使用痕の光沢が顕著に認められる。

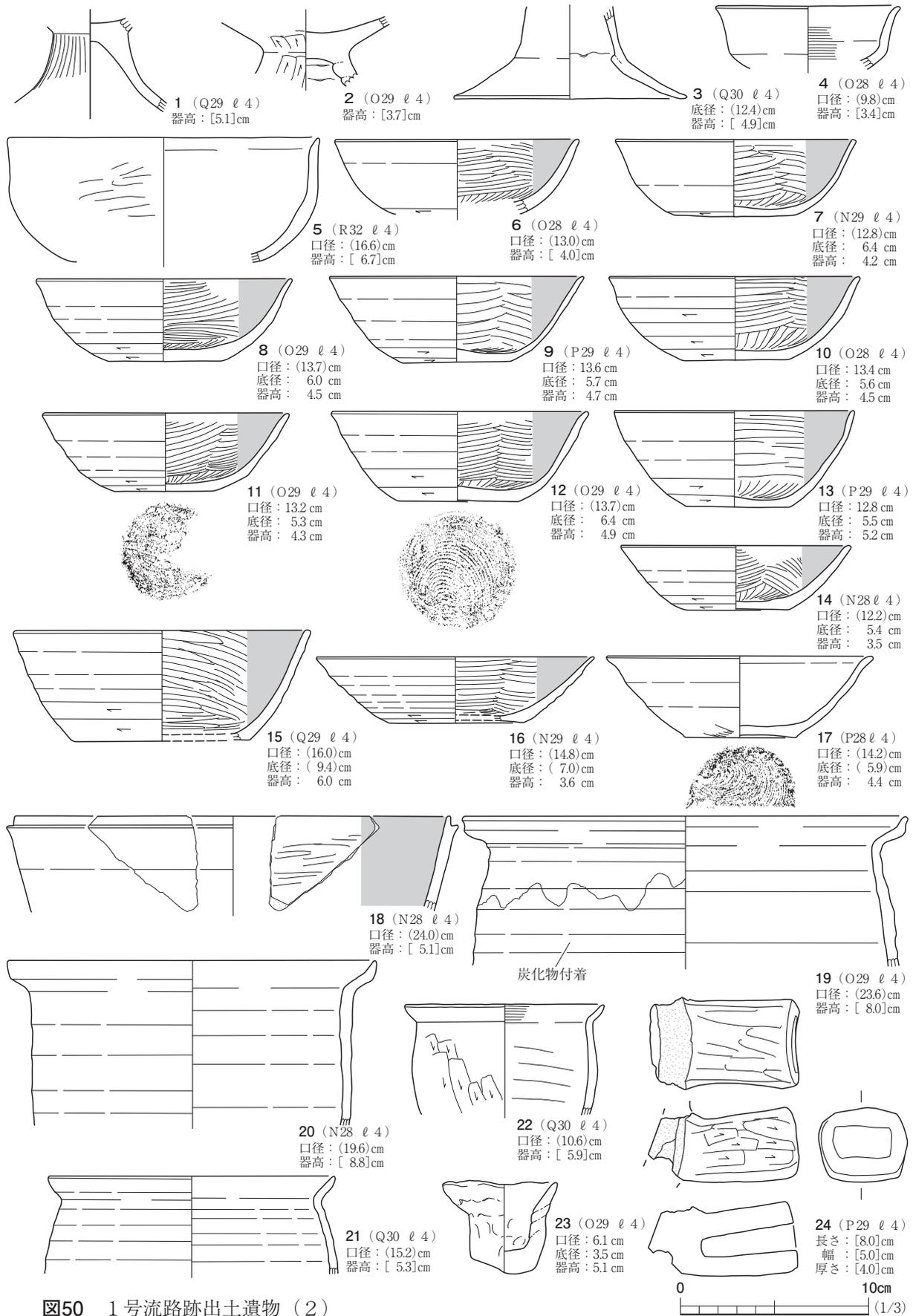


図50 1号流路跡出土遺物 (2)

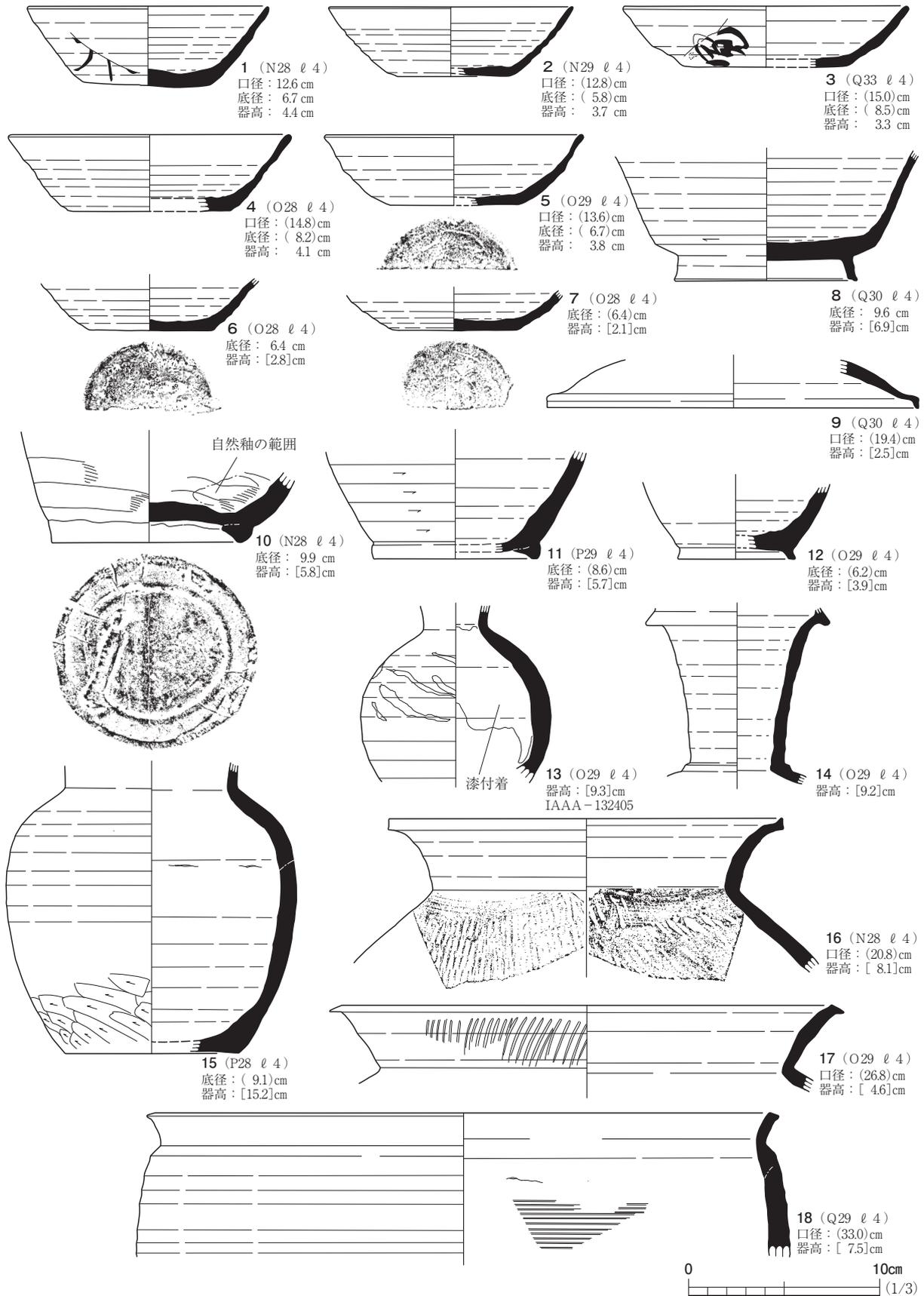


図51 1号流路跡出土遺物 (3)

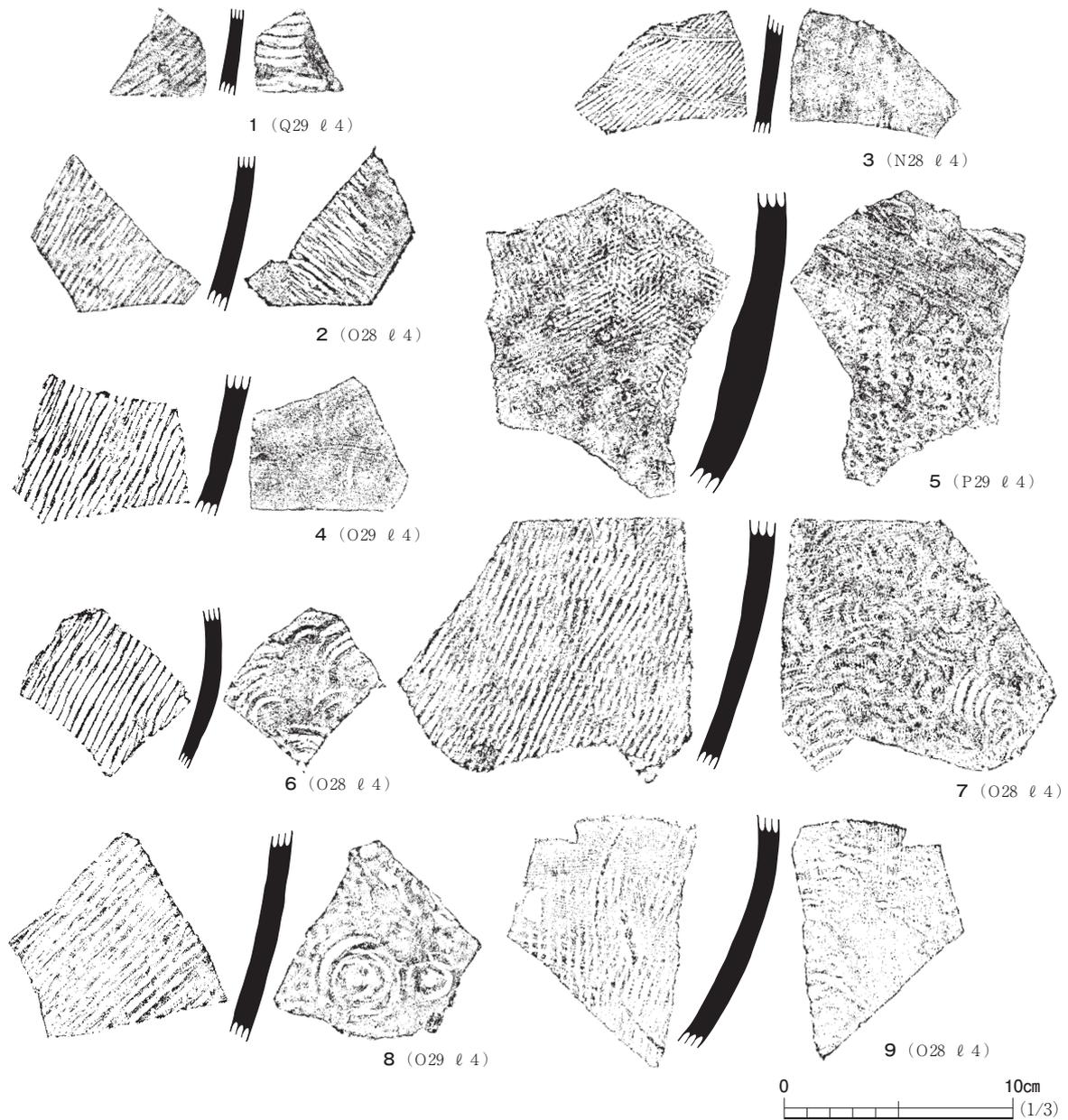


図52 1号流路跡出土遺物（4）

まとめ

本流路跡は、おおむね南東から北西に蛇行しながら流れる大規模な自然流路跡である。堆積土の状況から、水流が止まり湿地状態となった上部と、流路として機能し多くの遺物を出土する下部に大別される。出土遺物の大半は平安時代前期9世紀中葉～10世紀初頭のもので、縄文時代早期・前期・後期、弥生時代中期・後期、古墳時代の遺物が少量含まれる。出土遺物から本流路跡の形成時期を断定することはできないが、縄文時代前期に降下した沼沢パミスが堆積する2号流路跡を切っていることから、これ以降に形成されたと考えられる。水流が停止し湿地状態へ移行したのは、10世紀初頭以降と思われ、隣接する鶴沼C遺跡では本流路と同一と考えられる流路跡の堆積土表面で中世の遺構が検出されていることから、中世には完全に埋没していたと考えられる。（青山）

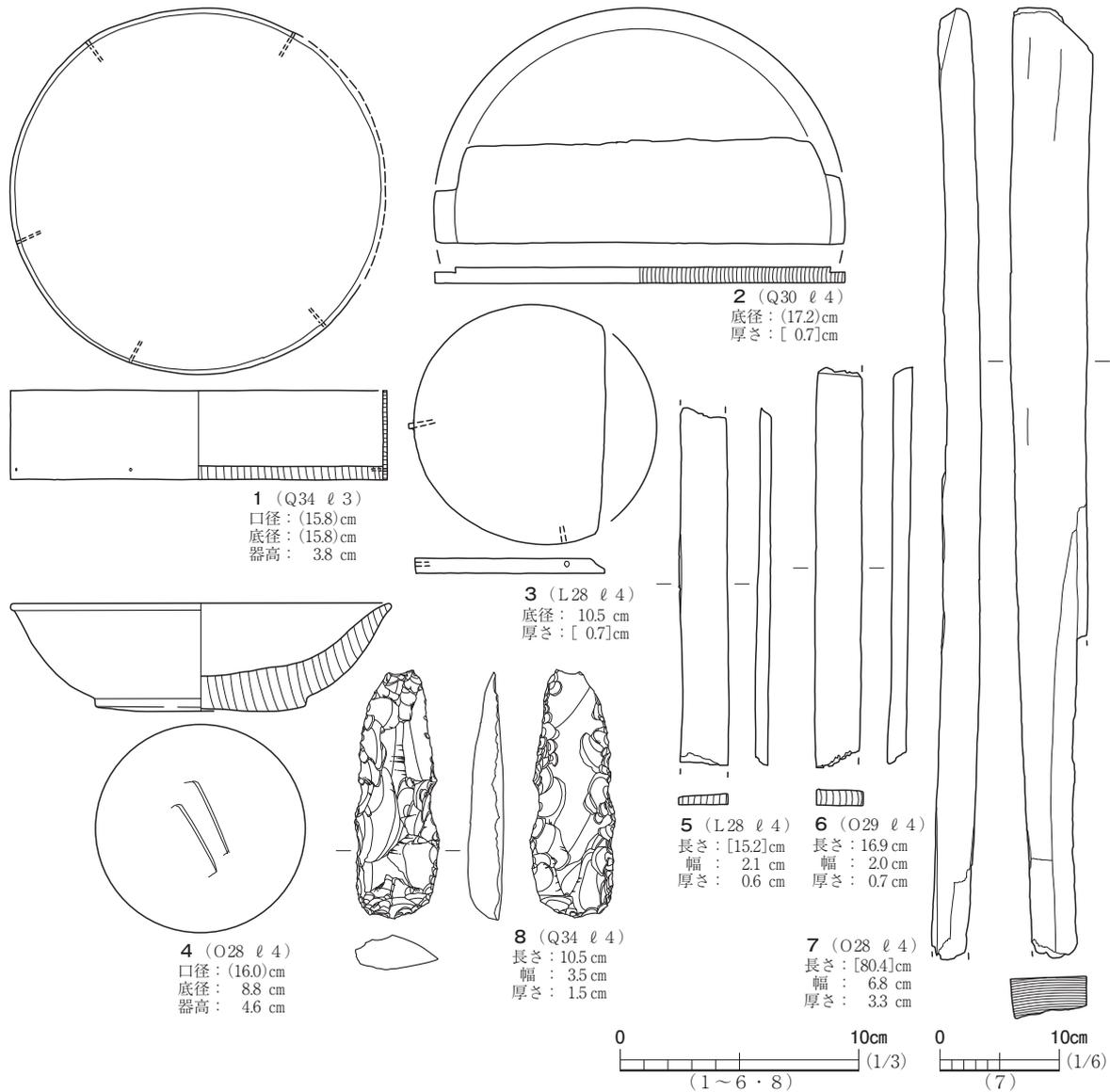


図53 1号流路跡出土遺物 (5)

2号流路跡 (図54, 写真15・41)

本流路跡は、おおむね南東から北西の方向に蛇行しながら延びる大規模な自然流路跡である。調査区の北西端から東端にかけてのF～Qの21～33グリッドで検出された。検出面はLⅢ上面である。

本流路跡は3か所に分断して検出されたが、堆積土の状況がいずれもよく似ていたことから同一の流路跡と判断した。北西端は調査区外に延びる。5号土坑、3・5・6・7・9号溝跡、1・4・5号流路跡と重複し、このいずれよりも古い。北西部は現代の溝状の攪乱によって一部が壊されている。規模は、調査区内で検出された部分で長さ157m、幅は最大で15.7mである。

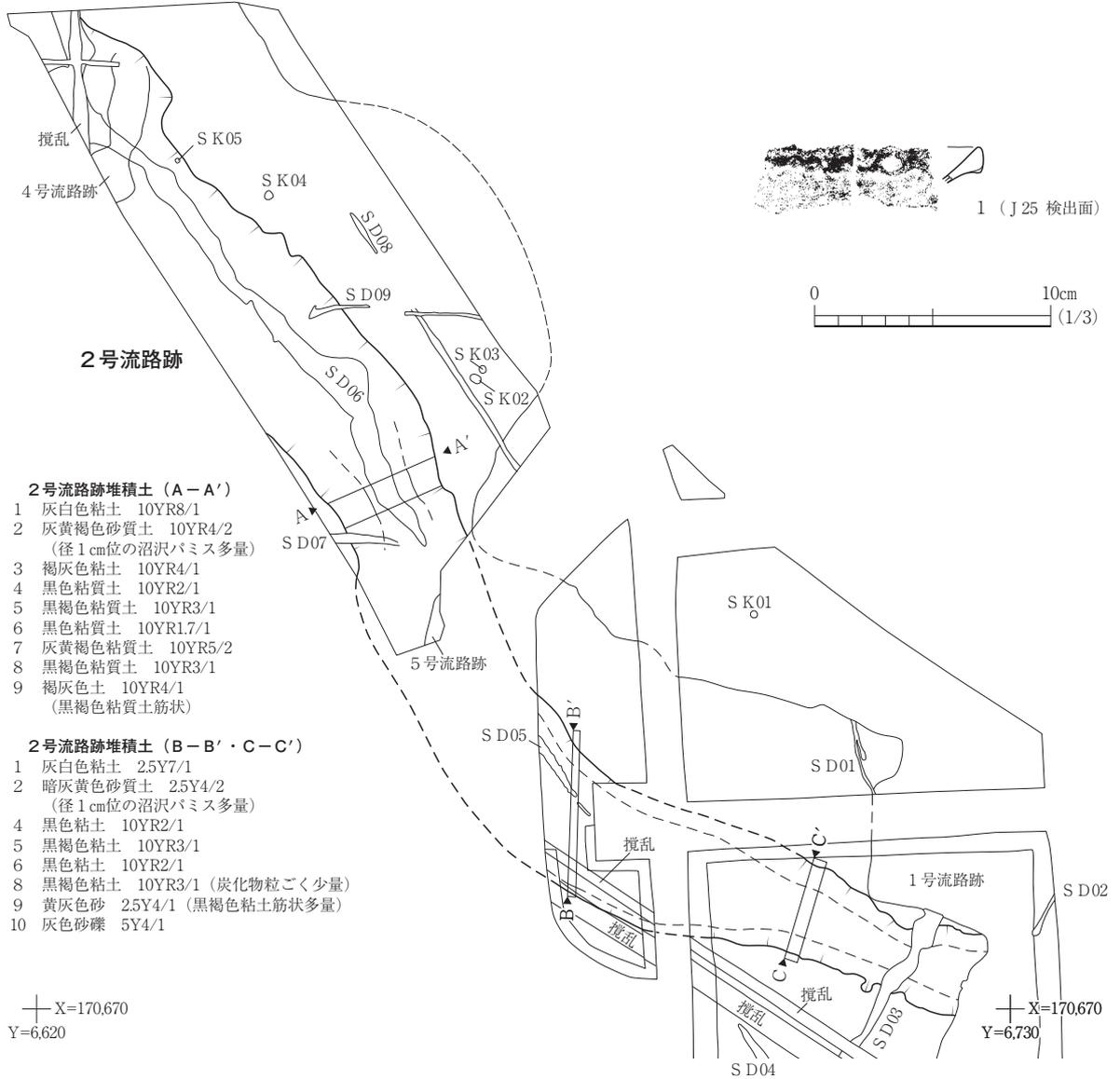
本溝跡の3か所にサブトレンチを設けて一部分の掘削を行ったが、遺物は出土しなかった。遺物を含まない自然流路跡については調査を行わないの方針により、これ以上の掘削は行わなかった。

検出面からの深さは最大で1.22mである。底面はLⅤの礫層上面にほぼ一致する。こぶし大から

第4編 鶴沼B遺跡 (1次)

Y=6,620
+ X=170,790

Y=6,730
+ X=170,790



- 2号流路跡堆積土 (A-A')**
- 1 灰白色粘土 10YR8/1
 - 2 灰黄褐色砂質土 10YR4/2 (径1cm位の沼沢パミス多量)
 - 3 褐灰色粘土 10YR4/1
 - 4 黑色粘質土 10YR2/1
 - 5 黒褐色粘質土 10YR3/1
 - 6 黑色粘質土 10YR1.7/1
 - 7 灰黄褐色粘質土 10YR5/2
 - 8 黒褐色粘質土 10YR3/1
 - 9 褐灰色土 10YR4/1 (黒褐色粘質土筋状)

- 2号流路跡堆積土 (B-B'・C-C')**
- 1 灰白色粘土 2.5Y7/1
 - 2 暗灰黄色砂質土 2.5Y4/2 (径1cm位の沼沢パミス多量)
 - 4 黑色粘土 10YR2/1
 - 5 黒褐色粘土 10YR3/1
 - 6 黑色粘土 10YR2/1
 - 8 黒褐色粘土 10YR3/1 (炭化物粒ごく少量)
 - 9 黄灰色砂 2.5Y4/1 (黒褐色粘土筋状多量)
 - 10 灰色砂礫 5Y4/1

+ X=170,670
Y=6,620

+ X=170,670
Y=6,730

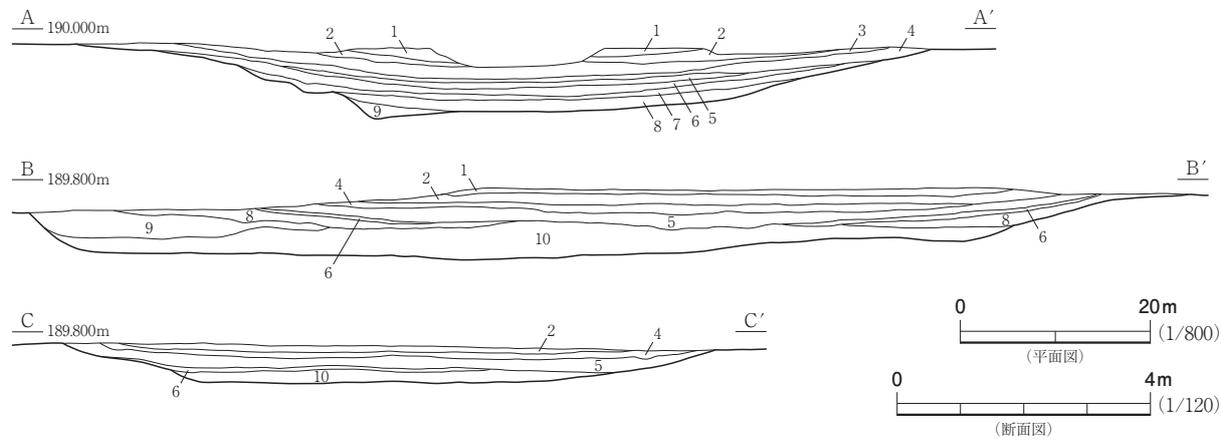


図54 2号流路跡, 出土遺物

人頭大の礫による凹凸がみられる以外はおおむね平坦であった。断面図の底面の標高を比較すると、A-A'がC-C'より約50cm低く、南東から北西に向かって流れ下る流路跡であることがわかる。岸は、掘りこみを行った範囲ではいずれも緩やかな角度で立ち上がっていた。

堆積土は、各層が薄くレンズ状に堆積する自然堆積の様相を呈する。最上部のℓ1は灰白色粘土からなり、ℓ2は沼沢パミスと思われる軽石をきわめて多く含んだ最大18cmの厚さの層である。以下は黒色と黒褐色から褐灰色等の粘土もしくは粘質土が交互に堆積していた。

検出作業の際に土器が1点出土し、図54-1に図示した。縄文土器深鉢の口縁部の破片である。磨減が激しいが、前期の大木5式と思われる。(青山)

3号流路跡(図55, 写真15)

本流路跡は、おおむね南北方向に延びる自然流路跡である。調査区の南東部、Q・Rの35・36グリッドで検出された。検出面はLⅢである。南端は調査区外に延び、北端は1号流路跡によって壊されている。溝跡は北から約10°西に偏した方向に延びる。規模は、長さ16.9m、幅は最大で7.4mである。

本溝跡の1か所にサブトレンチを設けて掘削を行ったが、遺物は出土しなかった。遺物を含まない自然流路跡については調査を行わないとの方針により、これ以上の掘削は行わなかった。

検出面からの深さは最大で36cmで、底面は緩やかな舟底状である。岸は掘り込みを行った範囲ではいずれも緩やかな角度で立ち上がっていた。流路内には、4層が薄くレンズ状に堆積していた。

本流路跡は、縄文時代前期以降に形成された1号流路跡に切られていることから、これより古い年代が考えられる。(青山)

4号流路跡(図56, 写真15・43)

本流路跡は、おおむね南から北の方向に延びる自然流路跡である。調査区の北西部、G・Hの22・23グリッドで検出された。検出面は2号流路の堆積土上面である。

南端は調査区外に延び、北端は自然に途切れる。6号溝跡、2号流路跡と重複し、これらよりも新しい。北西部は、現代の溝状の攪乱によって一部が壊されている。

規模は、長さ16.9m、幅は最大で6.2mである。検出面からの深さは最大で35cmである。底面は緩やかな舟底状で、両端部の標高に顕著な高低差は認められなかったが、これは本流路跡が検出された部分が短いことによるものと思われる。岸は、いずれも緩やかな角度で立ち上がっていた。

流路内には、2層がレンズ状に堆積していた。ℓ1は黒色のシルト質粘土、ℓ2は黒色の粘土で、いずれも本流路跡の下層にある2号流路跡の堆積土に由来する白色のパミスが少量含まれていた。

堆積中から土師器片45点と須恵器片1点が出土した。このうち須恵器甕を図56-1に図示した。外面に並行タタキメ、内面に同心円状の当て具痕がみられる体部の破片である。

本流路跡は出土遺物から平安時代には流路の機能を保持していたものと考えられる。(青山)

第4編 鶴沼B遺跡（1次）

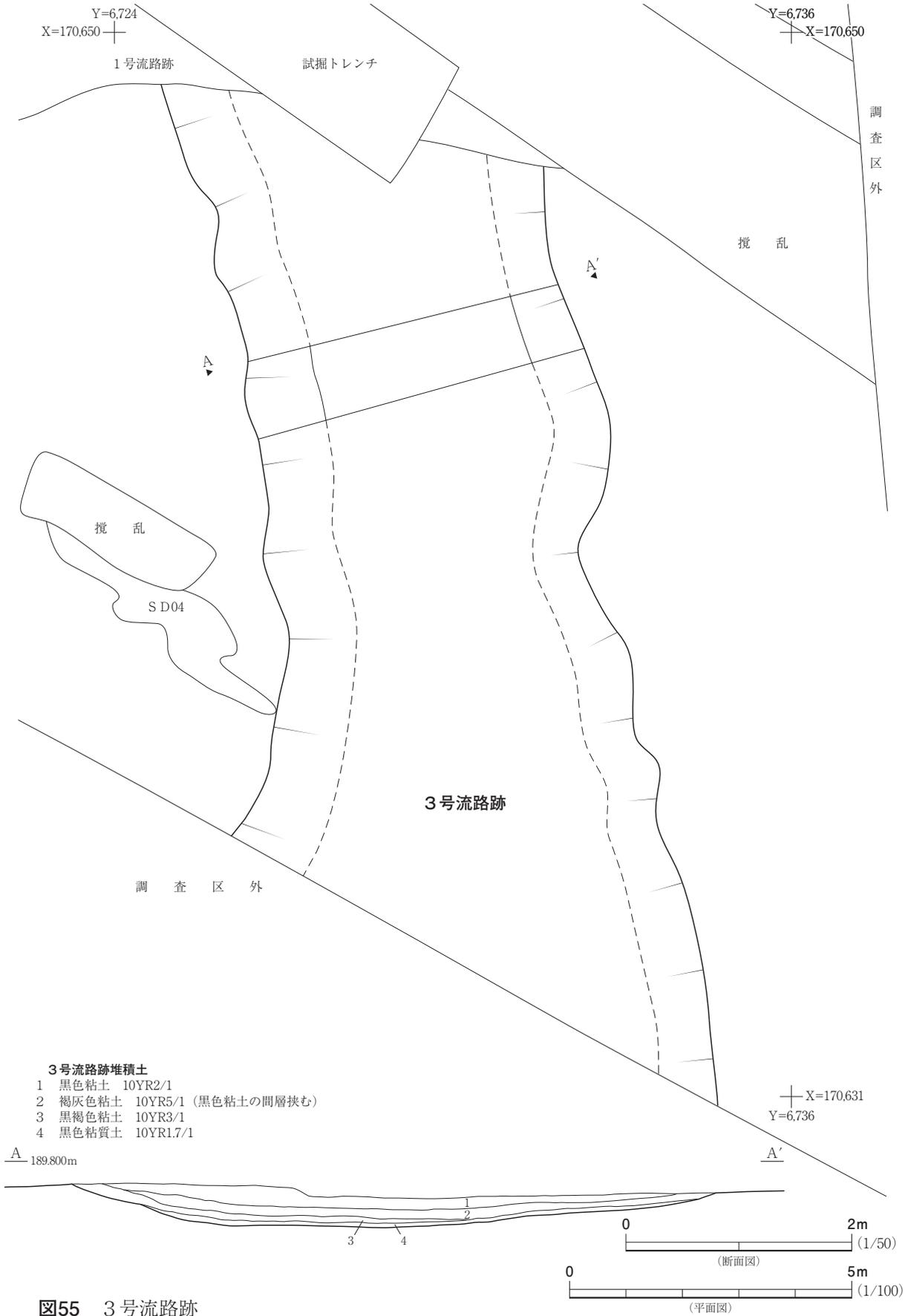


図55 3号流路跡

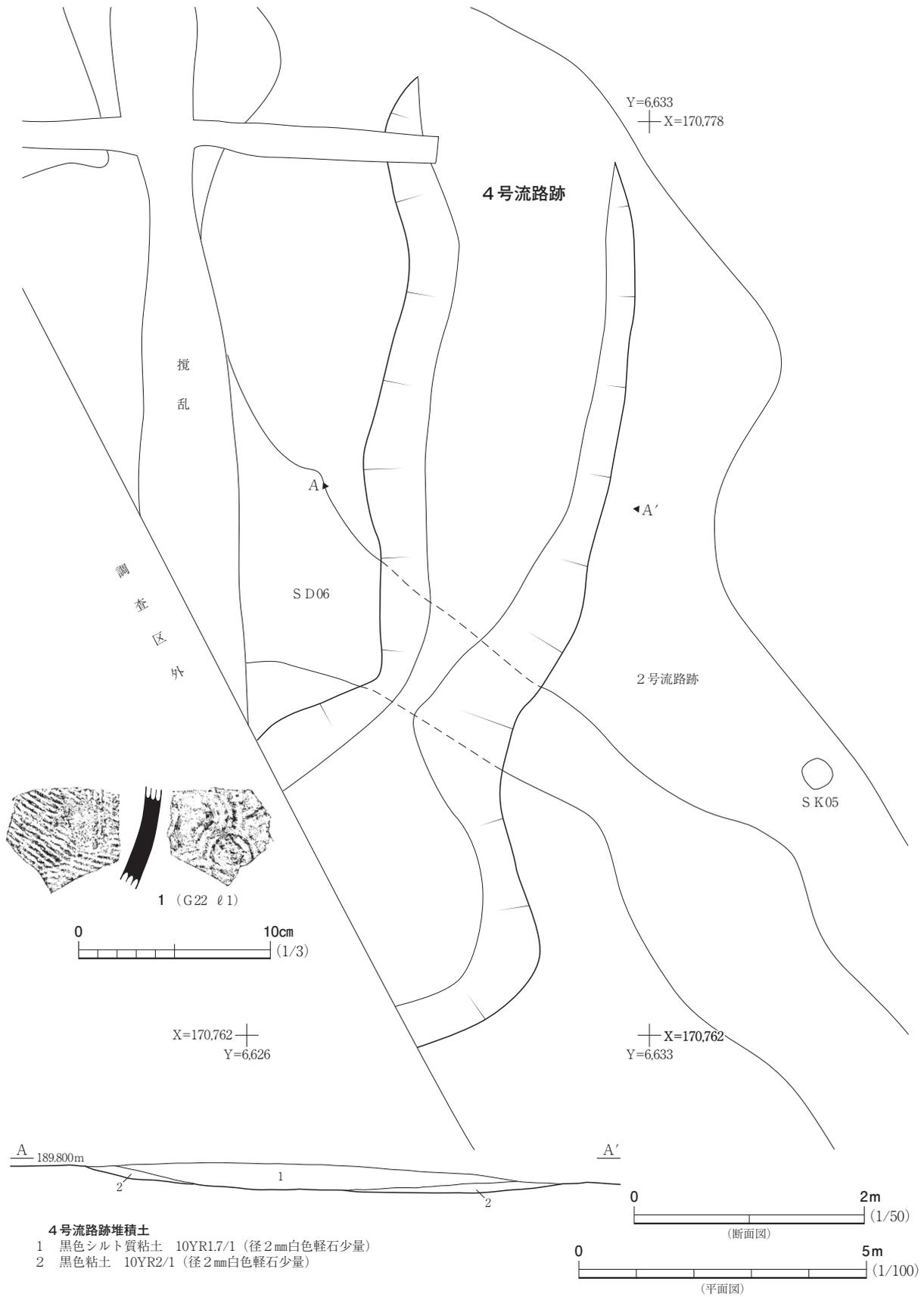


図56 4号流路跡, 出土遺物

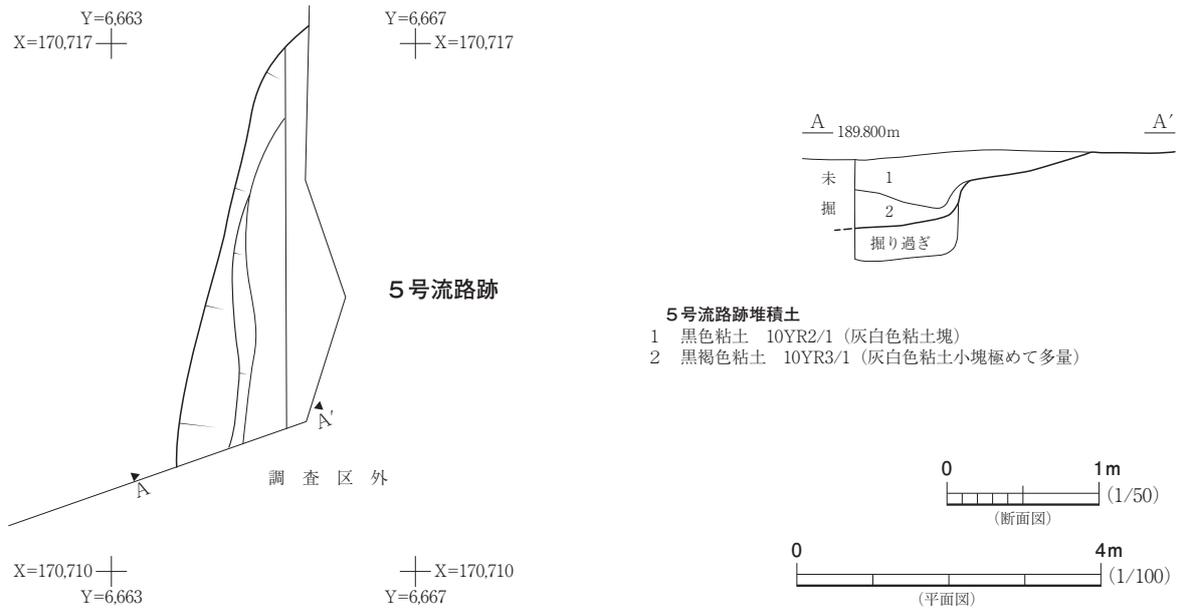


図57 5号流路跡

5号流路跡（図57，写真15）

本流路跡は、おおむね南北方向に延びる自然流路跡である。調査区の中央部、K 28グリッドの調査区の隅にごく一部分が検出された。2号流路跡の堆積土上面で検出され、これよりも新しい。北、南、東の三方が調査区外に延びており、本流路跡の西岸のごく一部分が検出されたものである。

規模は、長さ6.1m、幅は1.4m以上である。検出面からの深さは最大で68cmである。底面は全体の姿は不明であるものの、流路跡の中心に向かって緩やかに下っており、舟底状を呈するものと思われる。岸は、底面から20cmほどの高さで急角度に立ち上がり、そこから検出面まで緩やかな角度で立ち上がっていた。

流路内には、黒色から黒褐色の粘土からなる2層がレンズ状に堆積し、本流路によって壊されている2号流路跡の堆積土に含まれる灰白色粘土の小塊を多く含んでいた。

堆積中から土師器片7点が出土した。いずれも古墳時代中期頃の杯の破片である。

本流路跡は、出土遺物から古墳時代には流路として機能していたものと考えられる。（青山）

第5節 遺構外出土遺物

南区の遺構外から出土した遺物は、縄文土器1点、土師器4点、須恵器1点である。このうち縄文土器1点を図示した。

縄文土器（図58，写真41）

図58-1は縄文土器の深鉢である。口縁部直下に横位に連続する入組文、その直下に3条の沈線が巡らされている。

（青山）

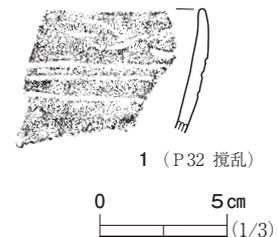


図58 遺構外出土遺物

第4章 総括

鶴沼B遺跡は平成5年の会津若松市教育委員会による分布調査によって発見され、平成7年には同市教育委員会による試掘調査と本発掘調査が行われている(石田1996・2000)。市教育委員会による調査区はA区・B区の2か所で、A区は北区の南西側、B区は北区の東側に位置する。A区では掘立柱建物跡6棟、土坑2基、溝跡6条、B区では掘立柱建物跡1棟が検出され、出土遺物から9世紀中葉～後葉と11世紀の年代が考えられている。ここでは、会津若松市教育委員会による調査成果とあわせて今年度までの調査成果を概括する。

流路跡について

本遺跡における今年度の調査でもっとも多くの時間を費やしたのは、自然流路跡の調査であった。規模が大きいこと、出土した遺物の量が多かったことによる。このうち、北区の1a・b号、2a・b号流路跡、南区の1号流路跡は、両調査区間の未調査部分を隔てて約80m離れているものの、流路の方向、規模、堆積土の状況、出土遺物がきわめてよく似ており、同一の流路跡である可能性が高い。次年度の調査によってこれら南北調査区の流路跡がどのようにつながっているのかが明らかになるものと思われる。

この流路跡は、本遺跡だけにとどまらず、昨年度と今年度に発掘調査が行われた西木流C遺跡、本遺跡の東側に隣接し本年度に発掘調査が行われた鶴沼C遺跡でも検出されている。やはり、流路の方向、規模、堆積土の状況、出土遺物の様相が類似し、同一の流路跡である可能性が高い。

この流路跡は、縄文時代前期に降下した沼沢パミスを引きわめて多く含んでいる本遺跡の南区2号流路跡を切っており、これを流路跡が形成された年代の上限とすることができる。機能停止と埋没の年代は、9世紀後葉の遺物をもっとも新しいことから、これ以降と考えられる。北側に隣接する西木流C遺跡では上層の黒色粘土層から11世紀頃のかかわりが出土し、西側に隣接する鶴沼C遺跡では中世の遺構が流路跡の堆積土上面から掘りこまれている。これらのことからすれば、遅くとも11世紀には水流が停止して埋没が始まり、中世以前には完全に埋没していたと考えられる。

出土土器について

前述のように、流路跡から出土した遺物はきわめて多い。ここでは、これらの遺物を整理して、遺跡の年代について検討する。

縄文時代早期 図49-1は茅山下層式である。本遺跡で出土したもっとも古い遺物である。

縄文時代前期 図21-1・2、図49-2～5、図54-1は前葉の花積下層式～大木2a式、図21-3は後半の興津式である。

縄文時代後期 図21-4～6, 図49-6～11。いずれも中葉の加曾利B式である。図3-3は後葉の新地式である。

縄文時代晩期 図49-12, 図58-1は中葉の大洞C2式, 図3-1・2・10は晩期最終末である。

弥生時代中期 図49-26～28は, 中期の二ツ釜式である。図21-10はいわゆる兎Ⅱタイプ(佐藤1990)とよばれるもので, 頸部に二本同時施文の並行沈線を巡らすことから, 中期でも新しい段階に位置づけられると思われる。

弥生時代後期 図3-12, 図49-30は天王山式である。図3-12は, 筒形の頸部など会津坂下町能登遺跡(大越他1990)出土資料に近い特徴をもつが, 交互刺突文をもたず, 口縁端部を棒状工具で波状に刻むなど若干の様相の違いが認められる。

古墳時代 図3-11・13～16, 図21-11～15, 図50-1は古墳時代前期に位置づけられる。図3-4はタタキ甕で東北地方ではこれまで出土例がないものである。図50-2・3・5は同中期, 図50-4は同後期に位置づけられる。

本遺跡では, 縄文時代以降, 縄文時代前期, 同後期, 弥生時代中・後期, 古墳時代の遺物が出土していることから, 本遺跡周辺にこれら各時代の遺跡の存在が示唆される。上記以外の土器はいずれも平安時代前期のものである。平安時代以降, 遺物量が格段に増加することは, この時期に本遺跡周辺での活動が活発になったことを示す。以下では, 平安時代前期の土器について検討する。

平安時代前期の土器について

平安時代前期の土器は, 流路跡から出土したものがその大半を占める。流路跡という遺構の性格上, 出土した土器群は一括性が高いとはいえないが, 遺跡の年代幅を考える唯一の手がかりである。ここでは平安時代前期の土器について整理し, 本遺跡の年代について考える材料とする。本遺跡出土土器の特徴は次のとおりである。

食膳具は土師器杯がもっとも多く, 須恵系土器の杯がこれに次ぐ。須恵器杯は少ない。土師器杯は回転ヘラケズリで再調整されたものがほとんどで, 手持ちヘラケズリによる再調整と無調整のものとはごくわずかである。内面調整は, 底部に放射状のミガキを施すものがほとんどである。土師器甕はそのほとんどがロクロ整形であることを特徴とする。

会津地方における平安前期の土器の変遷については, つぎのように整理されている。9世紀前葉は食膳具の大半を須恵器の杯が占めて土師器杯はほとんどみられないが, 9世紀の中葉以降になるととくに掘立柱建物跡で構成される集落で食膳具に占める須恵器杯の割合が急激に減り, かわって土師器杯が食膳具の大半を占めるようになる。また, 杯の年代を推し量るのに底径/口径比がある程度有効な指標であることも指摘されている(山中1999・2000・2002)。

本遺跡出土資料には, 記年銘資料など年代を推し量ることのできる直接の手がかりはなく, 上記のような年代観を踏襲して検討を加えていくことにしたい。

本遺跡の食膳具は, 土師器杯がその大部分を占めている点で9世紀中葉以降とされる様相にもつ

とも近い。本遺跡における土師器杯の底径／口径比は、0.39～0.46がもっとも多く、やはり9世紀中葉以降とされる様相と一致する。数は少ないものの、底径／口径比が0.33～0.38のもの、すなわちやや新相を示す資料がこれに次いで多く、古相を示す0.47～0.50のものが少量含まれている。

須恵器杯については、底径／口径比が0.55～0.60のもの、すなわち9世紀前葉に位置づけられるものが多く、次いで0.50～0.55のもの、すなわち9世紀中葉とされるものが多い。これ以下のものは数が非常に少ない。本遺跡から出土した会津若松市大戸古窯跡産と思われる須恵器には、図25-13や図51-8など9世紀前葉で生産が終了するとされる器型の蓋や高台杯(石田1994)が少数ながら含まれている。南区3号溝跡出土土器(図45)は9世紀前葉の特徴を備えた資料といえる。

須恵系土器の杯については口径が12～14cmの範囲に分布するものの、明確な法量の分化は認められず、口径が10cm程度の小型の杯はみられない。会津地方でこれにもっとも近い特徴をもつ資料としては、喜多方市(旧塩川町)の鏡ノ町遺跡Aの3号不明遺構出土土器がある。須恵系土器がもっとも多く、これに少数の土師器杯が伴う一括資料で、伴出した須恵器の年代観から9世紀末～10世紀前葉に位置づけられている(和田1997)。宮城県多賀城跡第61次調査第10層出土土器群もこれとほぼ同じ様相をもち、灰白色火山灰の降下以前に位置づけられている(柳沢1992)。灰白色火山灰の降下した年代については、承平4年(934年)に焼失した陸奥国分寺七重塔の焼土層が灰白色火山灰を直接覆っていることなどから、これに近い時期であることが指摘されている(白鳥1980)。ゆえにこの土器群についても10世紀前葉を下限とすることができる。

本遺跡出土の須恵系土器は、口径のやや縮小したものが含まれる点でこれらよりやや新しい様相をもつ。このような特徴をもつ土器群は会津地方ではまだ出土例が少なく、宮城県多賀城跡第60次調査S E 2132井戸跡、同第61次調査鴻ノ池地区第7層出土土器などに類例を求めることができる。このような特徴をもつ土器群については「第3群土器」(柳澤・白崎1998)、「F-3群土器」(古川2007)として編年的検討が加えられ、灰白色火山灰との関係などから、10世紀前葉～中葉頃(柳澤・白崎1998)、10世紀中葉(古川2007)という年代が示されている。このような年代観に従えば、本遺跡の須恵系土器の下限も10世紀中葉頃とすることができる。

本遺跡出土土器のいま一つの問題は、ロクロ土師器の杯に手持ちヘラケズリによる再調整がほとんどみられない点がある。周辺地域では9世紀中葉以降、回転ヘラケズリから手持ちヘラケズリへ移行する中で、このような特徴をどのように解釈するかは問題である。解釈の一つは、手持ちヘラケズリが多くなる9世紀後半の資料が本遺跡では欠落している、もう一つは9世紀後半にも会津地方では手持ちヘラケズリに移行せず回転ヘラケズリによる再調整が主流であったとする解釈である。本遺跡の資料の口径／底径比の推移からすれば、特定の時期の資料が欠落していることは考えづらい。すなわち、少なくとも本遺跡出土資料においては、9世紀後半以降も手持ちヘラケズリではなく回転ヘラケズリが卓越する状態が継続したといえることができる。

以上をまとめると、本遺跡の流路跡出土土器は、9世紀前葉に土師器と須恵器が相半ばしながら食膳具を構成し、9世紀中葉に須恵器の杯の割合が減り、かわって土師器杯が組成の大部分を占め、

9世紀の後葉に土師器杯に加えて須恵系土器が食膳具に加わるという、これまで指摘されてきた会津の土器の変遷とよく一致した様相をもっているといえる。本遺跡流路跡出土土器には、これまで会津では出土例のなかった10世紀中葉頃の土器群を含んでいることも指摘できる。

量的な盛衰からは、9世紀前葉頃は遺物量が少なく、9世紀中葉頃の遺物量がピークに達し、9世紀後葉以降は遺物量を減少させながら10世紀前葉に続き、10世紀中葉以降は遺物がみられなくなる。本遺跡では、これ以前は古墳時代まで、以降は近世までの遺物は出土しておらず、量もわずかである。土器からすれば、本遺跡周辺では9世紀前葉～10世紀中葉までの活動がもっとも盛んであったと考えられる。

（青 山）

参考文献

- 石田明夫 1994 『会津大戸古窯跡群発掘調査報告書（遺物編）』会津若松市文化財報告書 第37号 会津若松市教育委員会
石田明夫 1996 『若松北部地区県営ほ場整備事業発掘調査概報』Ⅳ（平成7年度）会津若松市文化財報告書 第46号
会津若松市教育委員会
石田明夫 2000 「第10編 木流遺跡」『若松北部県営ほ場整備発掘調査報告書』Ⅱ 会津若松市文化財報告書 第66号
会津若松市教育委員会
石田明夫他 1988 『会津大戸古窯跡群分布調査報告書』会津若松市文化財調査報告書 第12号 会津若松市教育委員会
大越道正他 1990 『東北横断自動車道遺跡発掘調査報告10』福島県文化財調査報告書 第242集 福島県教育委員会
管野和博 2009 「会津盆地における平安時代後半期の土器様相」『会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告9』福島県教育委員会
佐藤信行 1990 「天王山式土器の成立と展開」『天王山式期をめぐって』弥生時代研究会
白鳥良一 1980 「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要』Ⅶ 宮城県多賀城跡調査研究所
古川一明 2007 「多賀城跡の11世紀～12世紀の土器について」『宮城県多賀城跡調査研究所年報』2006
宮城県多賀城跡調査研究所
柳澤和明 1992 「第61次調査」『宮城県多賀城跡調査研究所年報1991』宮城県多賀城跡調査研究所
柳澤和明・白崎恵介 1998 「第68次調査」『宮城県多賀城跡調査研究所年報1997』宮城県多賀城跡調査研究所
山中雄志 1999 「ロクロ土師器を中心とする会津地方の土器様相」『福島考古』第40・41号 福島県考古学会
山中雄志 2002 「会津地方におけるロクロ土師器の出現と展開を巡って」『福島考古』第43号 福島県考古学会
和田 聡 1997 『鏡ノ町遺跡A』塩川町埋蔵文化財調査報告 第3集 塩川町教育委員会

付章 自然科学分析

第1節 出土炭化物等の放射性炭素年代測定について

(株)加速器分析研究所

1 測定対象試料

鶴沼B遺跡は、福島県会津若松市高野町中沼字鶴沼に所在する。測定対象試料は、1号流路跡出土須恵器内面付着漆と堰状遺構を構成する木製品(杭)の合計2点である(表1)。

2 測定の意義

試料が採取された遺物および遺構の年代を明らかにする。

3 化学処理工程

- (1)メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。
- (2)酸-アルカリ-酸(AAA: Acid Alkali Acid)処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常1 mol/l (1 M)の塩酸(HCl)を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム(NaOH)水溶液を用い、0.001Mから1 Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1 Mに達した時には「AAA」、1 M未満の場合は「AaA」と表1に記載する。
- (3)試料を燃焼させ、二酸化炭素(CO₂)を発生させる。
- (4)真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5)精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト(C)を生成させる。
- (6)グラファイトを内径1 mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

4 測定方法

加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置(NEC社製)を使用し、¹⁴Cの計数、¹³C濃度(¹³C/¹²C)、¹⁴C濃度(¹⁴C/¹²C)の測定を行う。測定では、米国国立標準局(NIST)から提供されたシュウ酸(HOx II)を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5 算出方法

- (1) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の ^{13}C 濃度($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(%)で表した値である(表1)。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- (2) ^{14}C 年代(Libby Age : yrBP)は、過去の大気中 ^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年(0yrBP)として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期(5568年)を使用する(Stuiver and Polach 1977)。 ^{14}C 年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。 ^{14}C 年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、 ^{14}C 年代の誤差($\pm 1\sigma$)は、試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。
- (3) pMC (percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。pMCが小さい(^{14}C が少ない)ほど古い年代を示し、pMCが100以上(^{14}C の量が標準現代炭素と同等以上)の場合 Modern とする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。
- (4) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差($1\sigma = 68.2\%$)あるいは2標準偏差($2\sigma = 95.4\%$)で表示される。グラフの縦軸が ^{14}C 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下一桁を丸めない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal13データベース(Reimer et al. 2013)を用い、OxCalv4.2較正プログラム(Bronk Ramsey 2009)を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表2に示した。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に基づいて較正(calibrate)された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」(または「cal BP」)という単位で表される。

6 測定結果

測定結果を表1, 2に示す。

試料の ^{14}C 年代は、AW-TRN・B-1が $1320 \pm 20\text{yrBP}$ 、AW-TRN・B-2が $1240 \pm 20\text{yrBP}$ である。暦年較正年代(1σ)は、AW-TRN・B-1が659～760cal ADの間に2つの範囲、AW-TRN・B-2が694～858cal ADの間に4つの範囲で示される。

試料の炭素含有率を確認すると、木製品 AW-TRN・B-2は55%で、化学処理、測定上の問題は認められない。漆 AW-TRN・B-1の炭素含有率は41%というやや低い値を示した。試料中に白色

粒が少量認められたことから、胎土等が混入した可能性があり、測定された炭素の由来に若干注意を要する。

表1 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 補正值)

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-132405	AW-TRN・B-1	1号流路跡(南) 図4 図51-13	漆 (須恵器内面付着)	AaA	-25.05 ± 0.55	1,320 ± 20	84.82 ± 0.25
IAAA-132406	AW-TRN・B-2	堰状遺構(北) 礫層 図5-6	木製品	AAA	-24.56 ± 0.55	1,240 ± 20	85.74 ± 0.24

表2 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 未補正值, 暦年較正用 ^{14}C 年代, 較正年代)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-132405	1,320 ± 20	84.81 ± 0.24	1,322 ± 24	659calAD - 690calAD (58.8%) 751calAD - 760calAD (9.4%)	654calAD - 715calAD (77.6%) 743calAD - 766calAD (17.8%)
IAAA-132406	1,230 ± 20	85.82 ± 0.22	1,236 ± 22	694calAD - 746calAD (42.4%) 763calAD - 778calAD (12.7%) 792calAD - 803calAD (6.0%) 843calAD - 858calAD (7.2%)	688calAD - 752calAD (46.0%) 759calAD - 780calAD (14.7%) 788calAD - 875calAD (34.7%)

参考文献

- Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51 (1), 337-360
- Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, *Radiocarbon* 55(4), 1869-1887
- Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, *Radiocarbon* 19 (3), 355-363

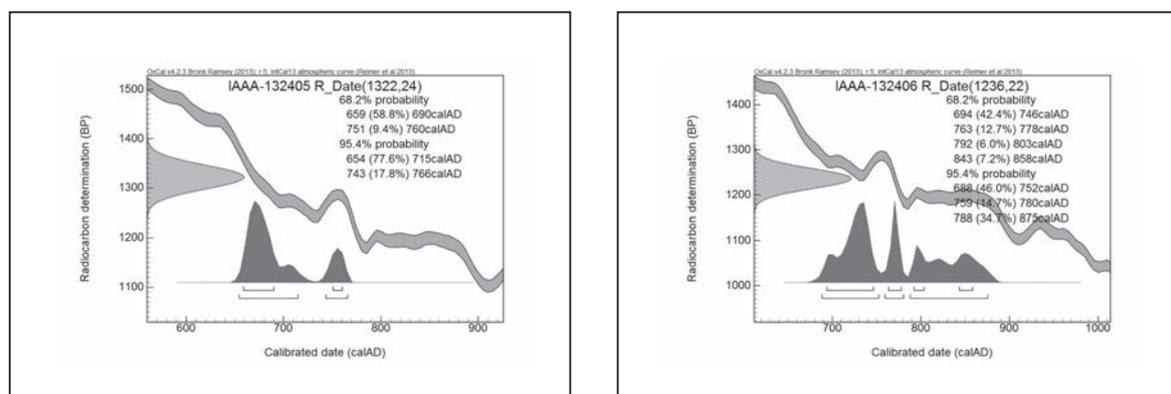


図59 暦年較正年代グラフ

写 真 図 版

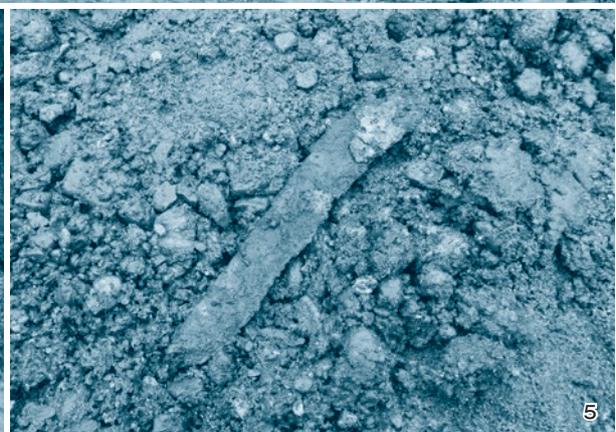
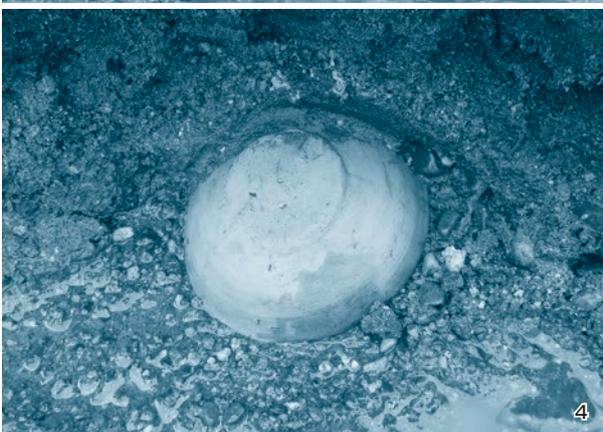
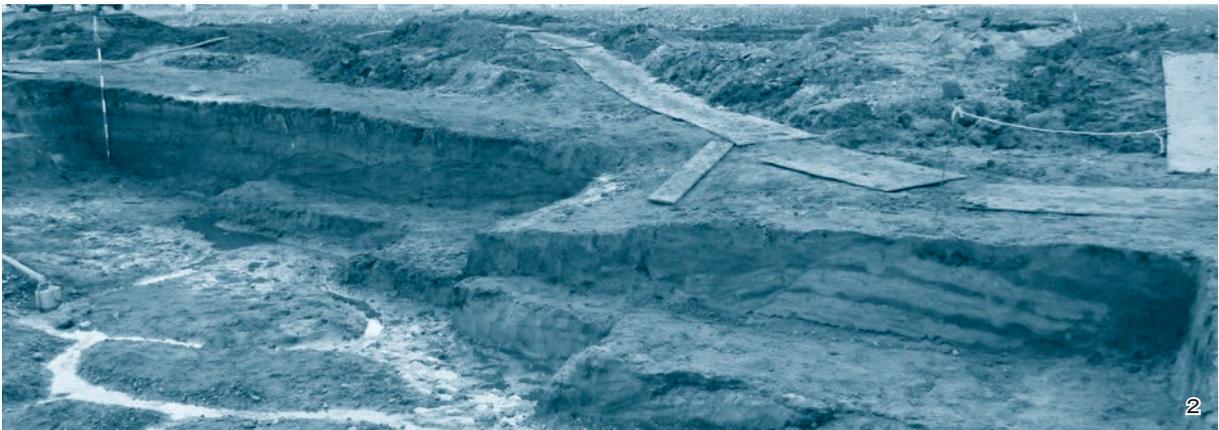
第4編 鶴沼B遺跡（1次）



1 調査区全景（北西から）



2 北区全景（真上から）



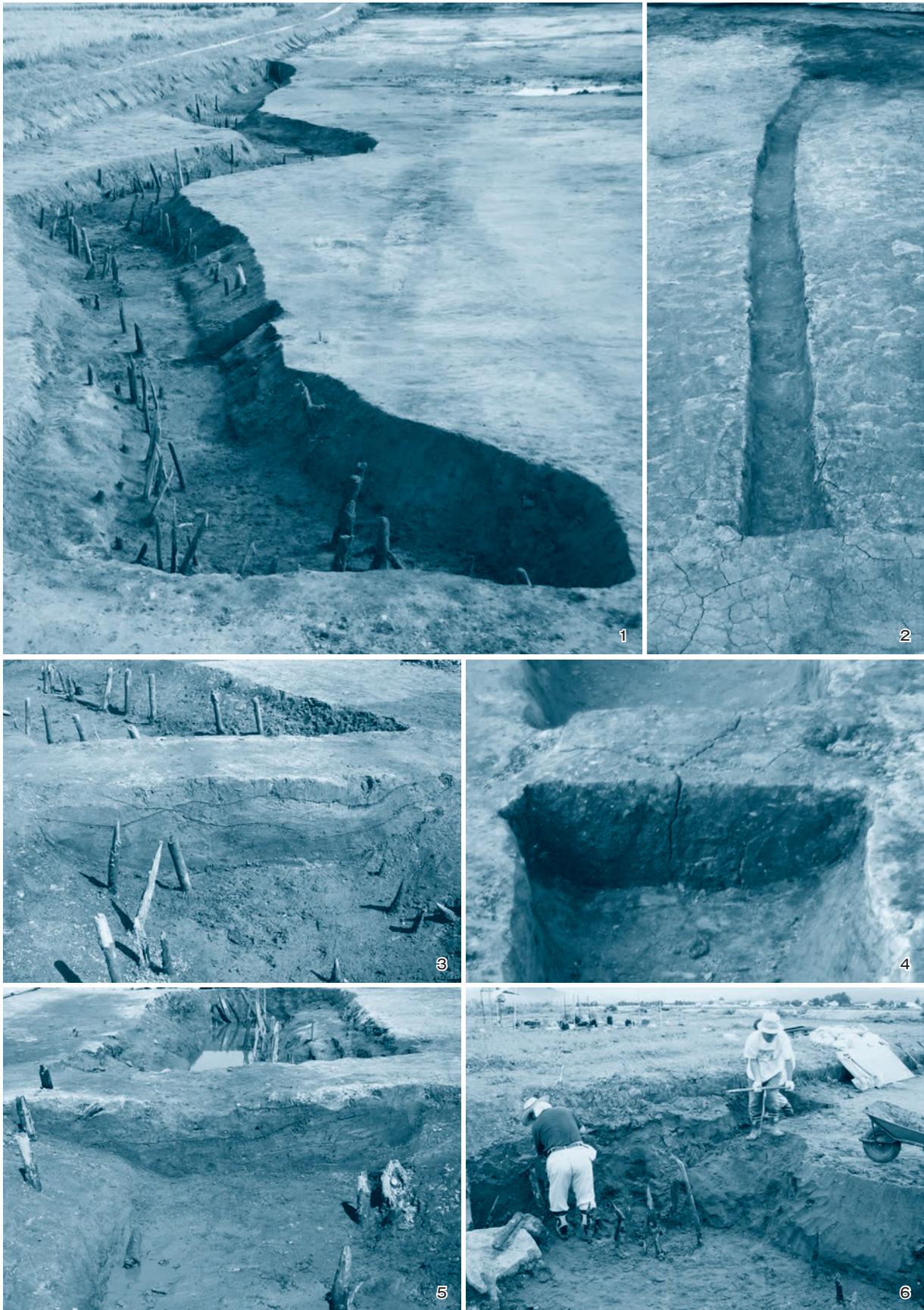
3 北区自然流路跡

- 1 1 b号流路跡土層断面 (北から)
- 2 1 a号流路跡土層断面 (南西から)
- 3 1 a号流路跡土層断面 (東から)
- 4 遺物出土状況 (東から)
- 5 鉄器出土状況 (西から)



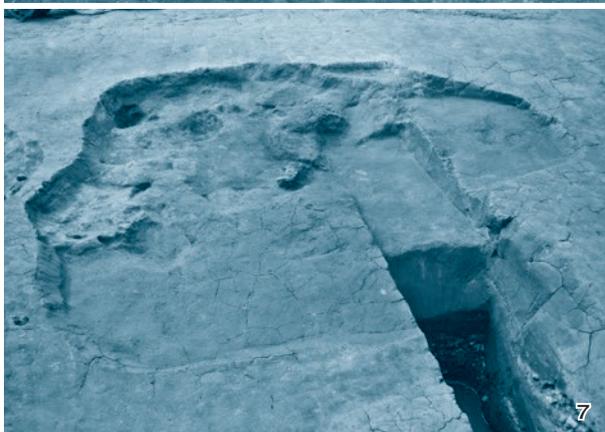
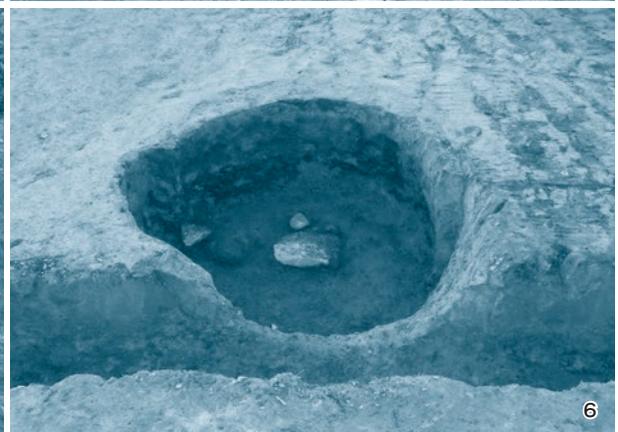
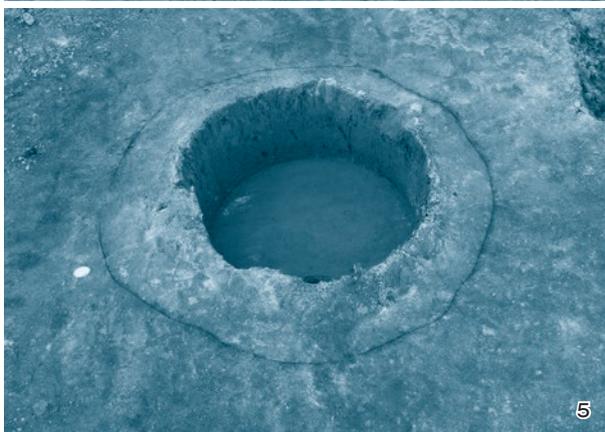
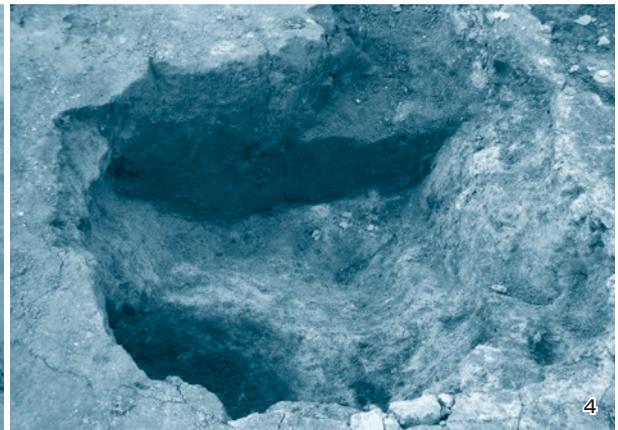
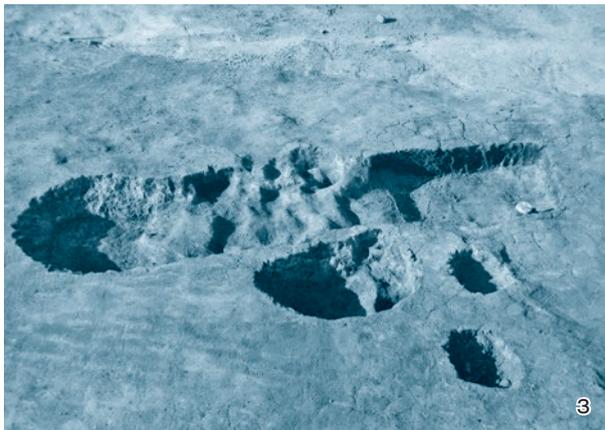
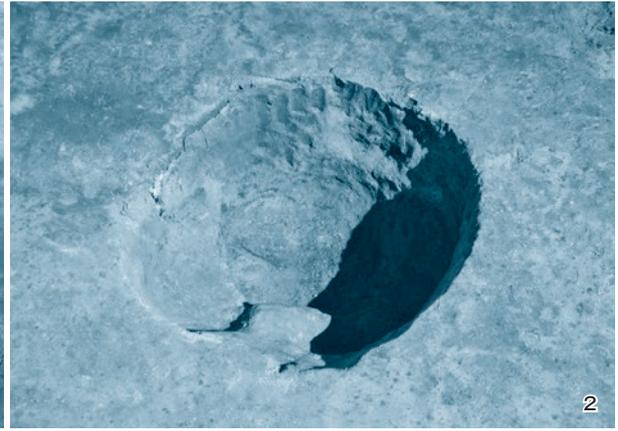
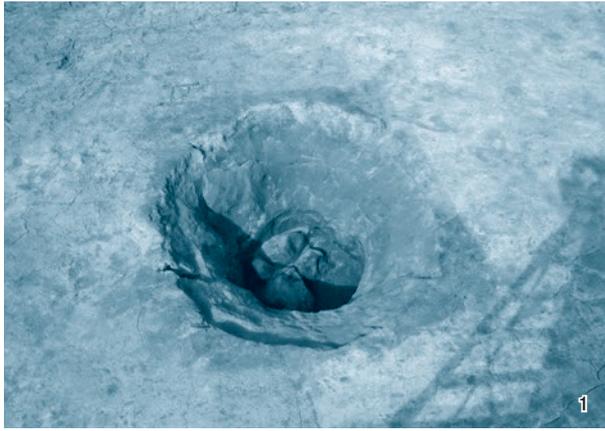
4 北区堰状遺構・杭列

- 1 堰状遺構・柱列全景（北から）
- 2 堰状遺構・柱列全景（南西から）
- 3 堰状遺構全景（南東から）
- 4 堰状遺構・杭列（南から）



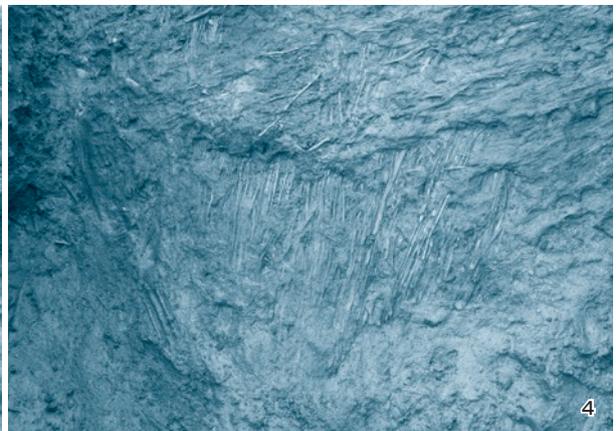
5 北区溝跡

1 1号溝跡全景(北から) 2 2号溝跡全景(南から)
3 1号溝跡土層断面(南から) 4 3号溝跡土層断面(南から)
5 1号溝跡土層断面(南から) 6 作業風景(東から)



6 北区土坑, 1号性格不明遺構

- | | | | |
|---|------------------|---|--------------------|
| 1 | 1号土坑全景 (南から) | 2 | 2号土坑全景 (南から) |
| 3 | 3・4号土坑全景 (南から) | 4 | 4号土坑土層断面 (東から) |
| 5 | 5号土坑全景 (南から) | 6 | 6号土坑全景 (東から) |
| 7 | 1号性格不明遺構全景 (東から) | 8 | 1号性格不明遺構土層断面 (北から) |



7 北区2号性格不明遺構

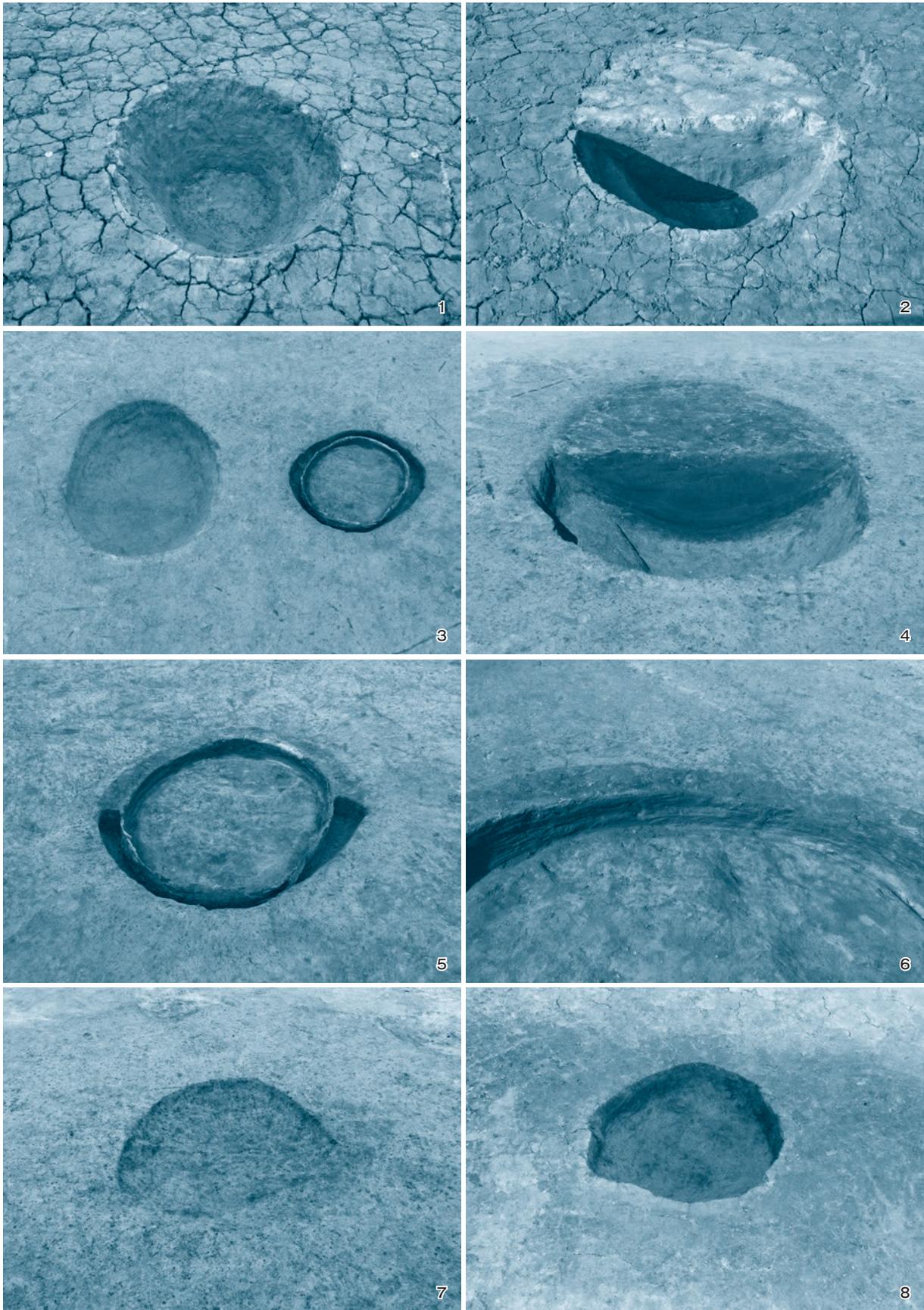
1 全景(西から)
2 土層断面(東から)
3 土層断面(西から)
4 植物遺体出土状況(東から)



8 南区全景（1）（南西から）

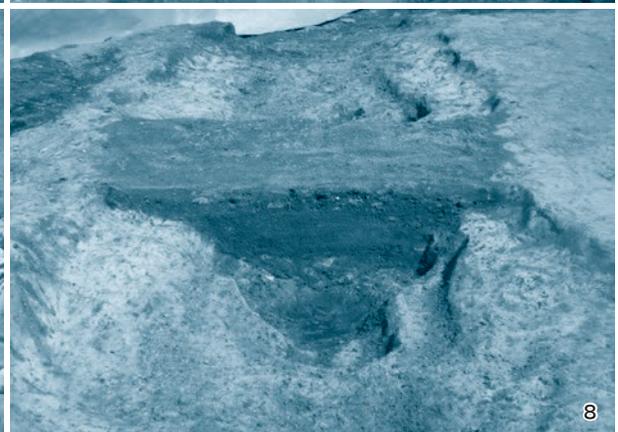
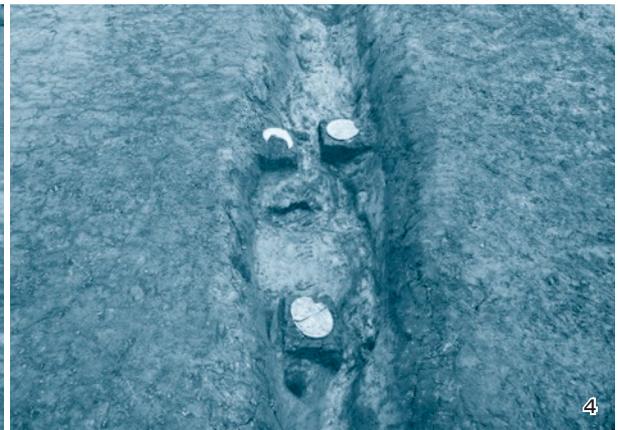


9 南区全景（2）（北から）



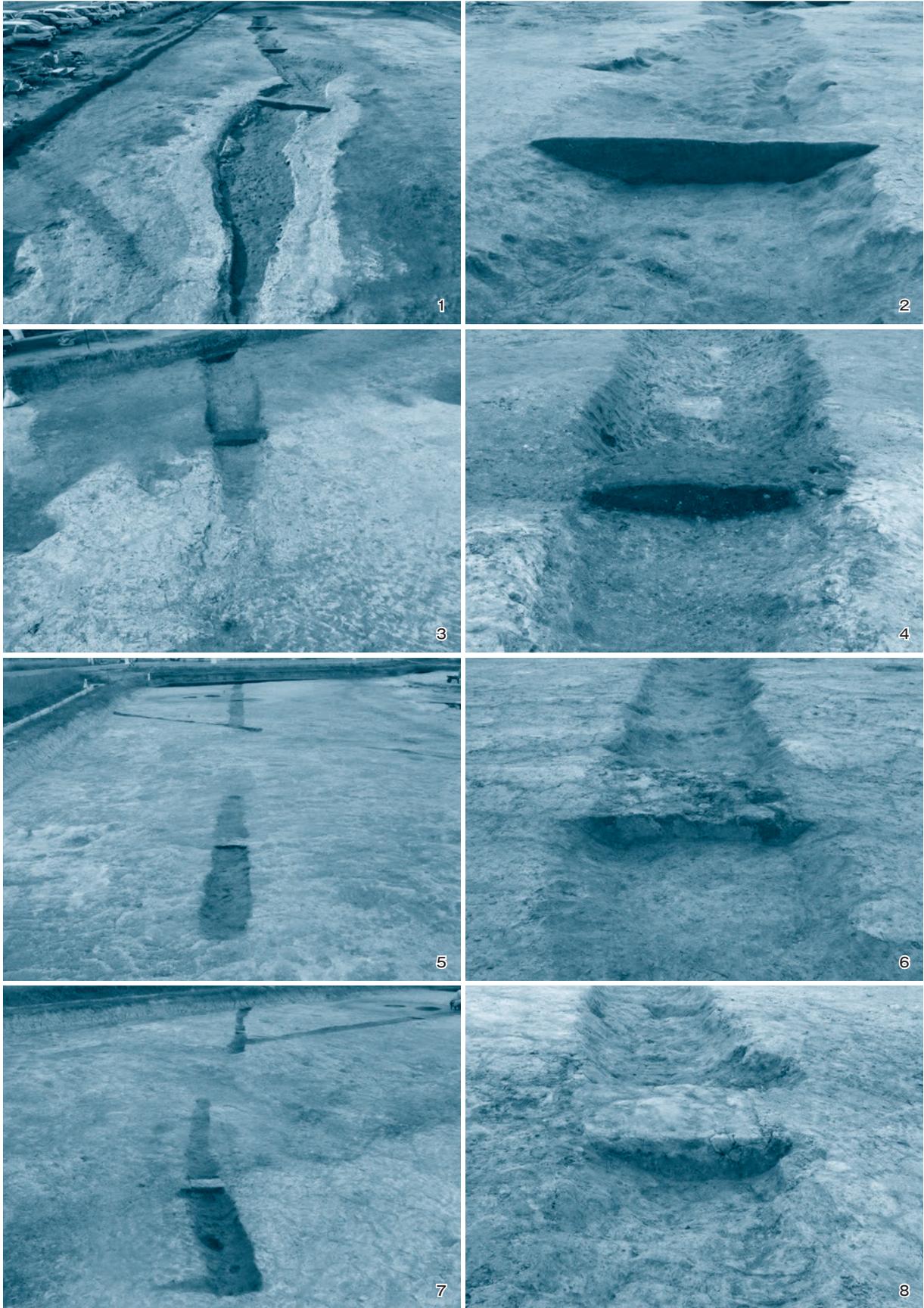
10 南区土坑

- | | | | |
|---|---------------|---|-------------|
| 1 | 1号土坑全景(南から) | 2 | 1号土坑断面(南から) |
| 3 | 2・3号土坑全景(東から) | 4 | 2号土坑断面(東から) |
| 5 | 3号土坑断面(東から) | 6 | 3号土坑細部(東から) |
| 7 | 4号土坑全景(南から) | 8 | 5号土坑全景(南から) |



11 南区1~5号溝跡

- | | | | |
|---|---------------|---|------------------|
| 1 | 1号溝跡全景 (南から) | 2 | 2号溝跡全景 (南から) |
| 3 | 3号溝跡全景 (北から) | 4 | 3号溝跡遺物出土状況 (南から) |
| 5 | 4号溝跡全景 (東から) | 6 | 4号溝跡断面 (東から) |
| 7 | 5号溝跡全景 (南東から) | 8 | 5号溝跡断面 (南東から) |



12 南区6～9号溝跡

- | | |
|-----------------|---------------------|
| 1 6号溝跡全景 (南東から) | 2 6号溝跡断面A-A' (南東から) |
| 3 7号溝跡全景 (東から) | 4 7号溝跡断面 (東から) |
| 5 8号溝跡全景 (北から) | 6 8号溝跡断面A-A' (南から) |
| 7 9号溝跡全景 (西から) | 8 9号溝跡断面A-A' (東から) |



13 南区1号流路跡全景（東から）



1



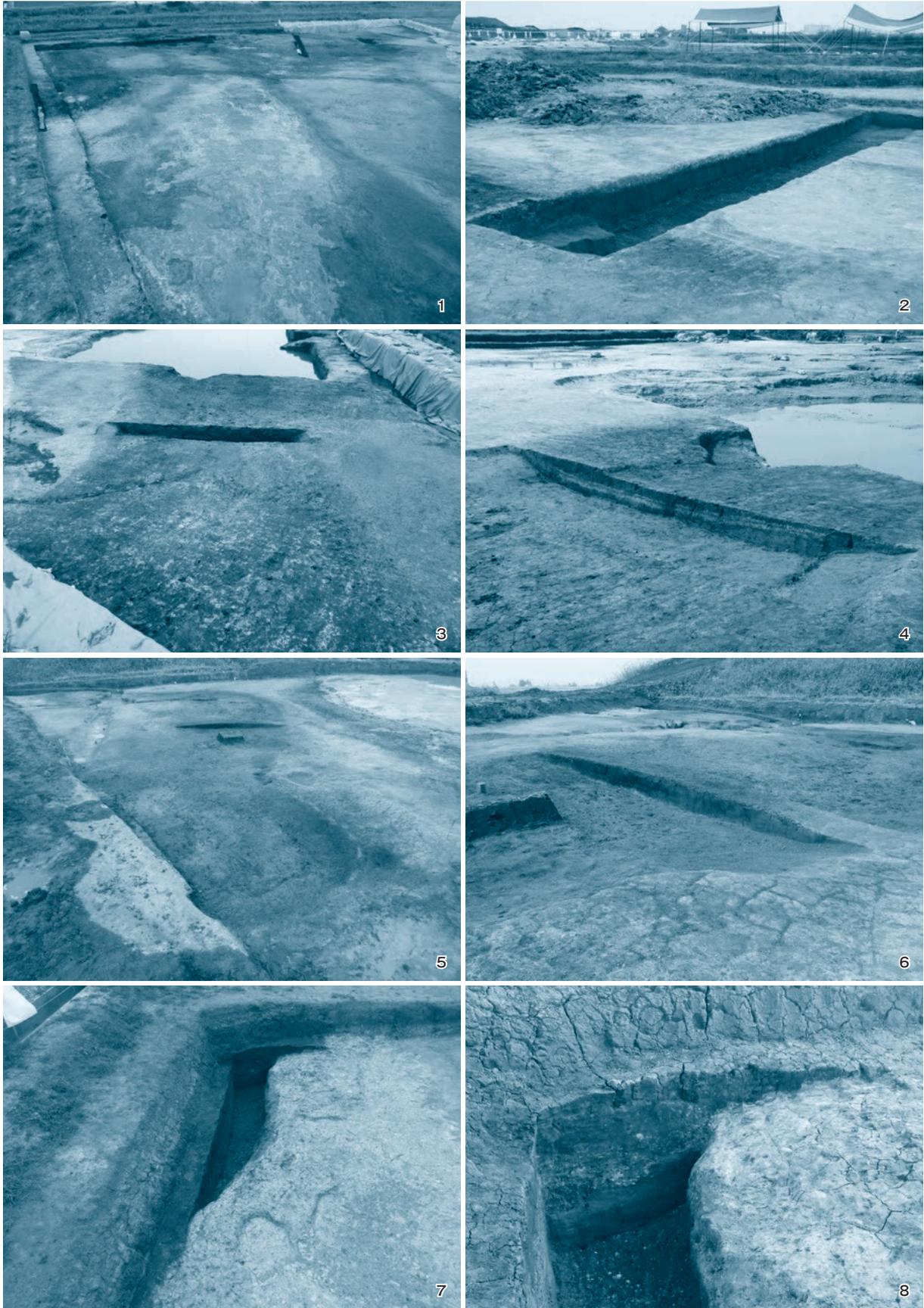
2



3

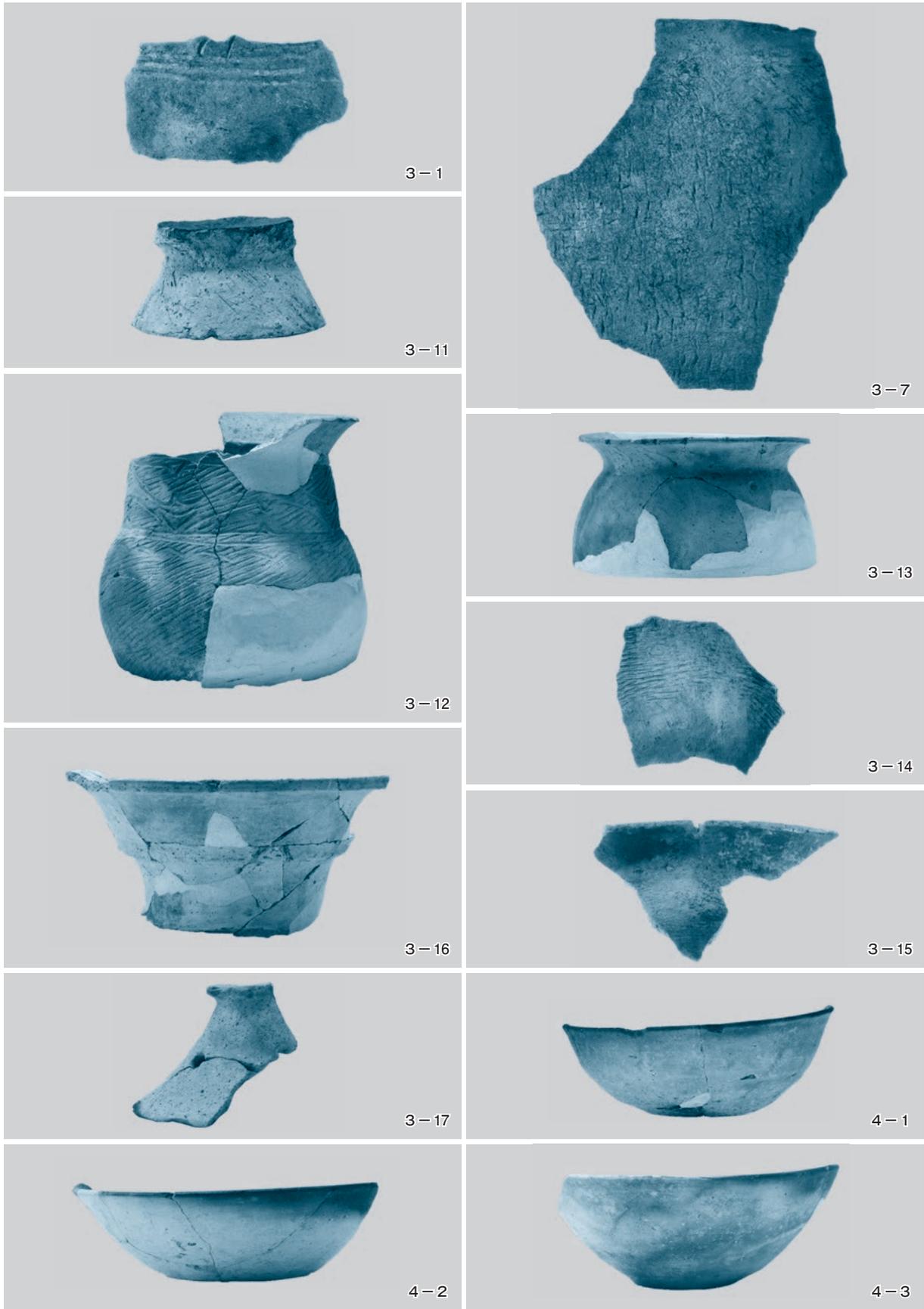
14 南区1号流路跡

1 断面（東から）
2 検出状況（西から）
3 遺物出土状況（北東から）

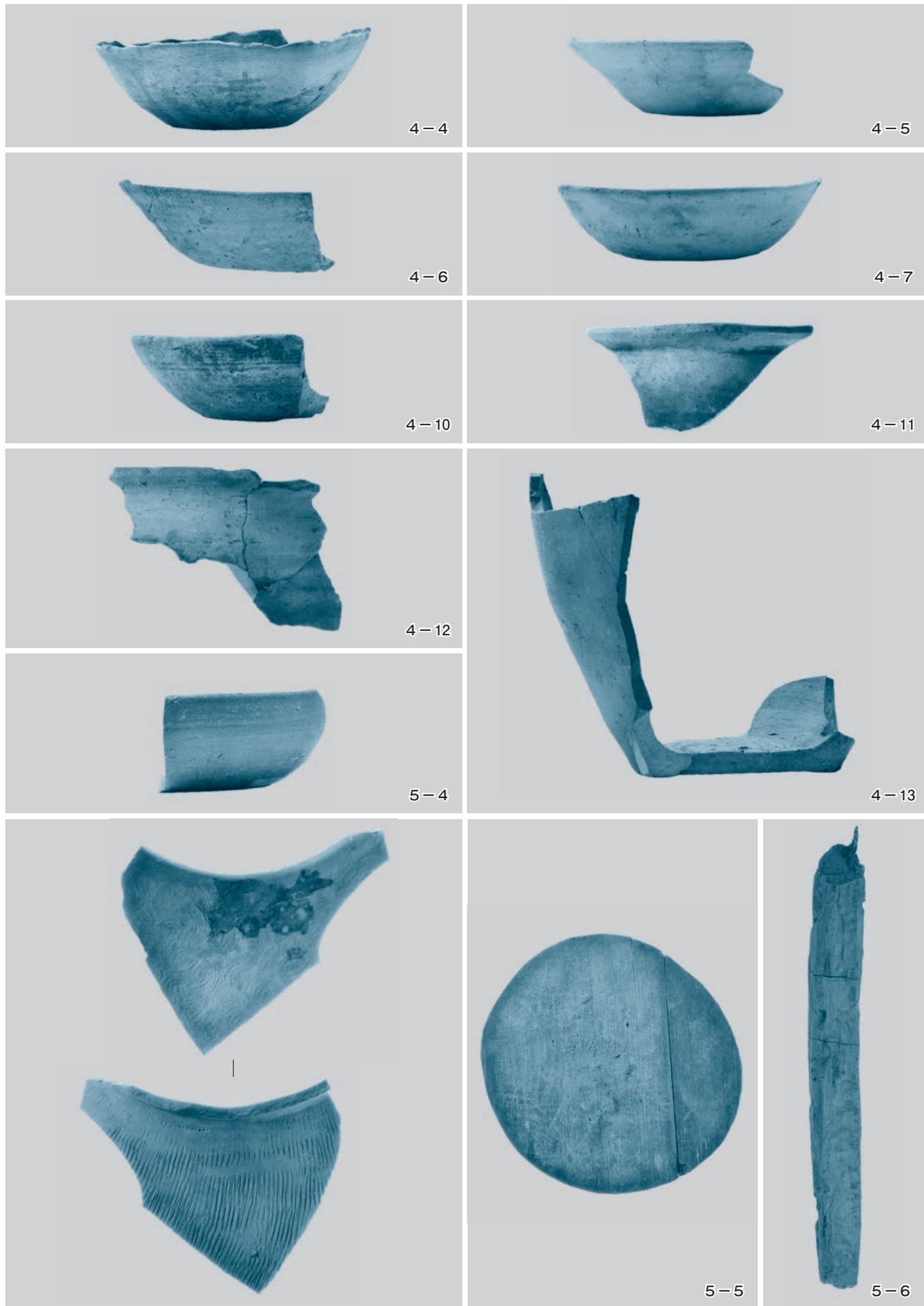


15 南区2～5号流路跡

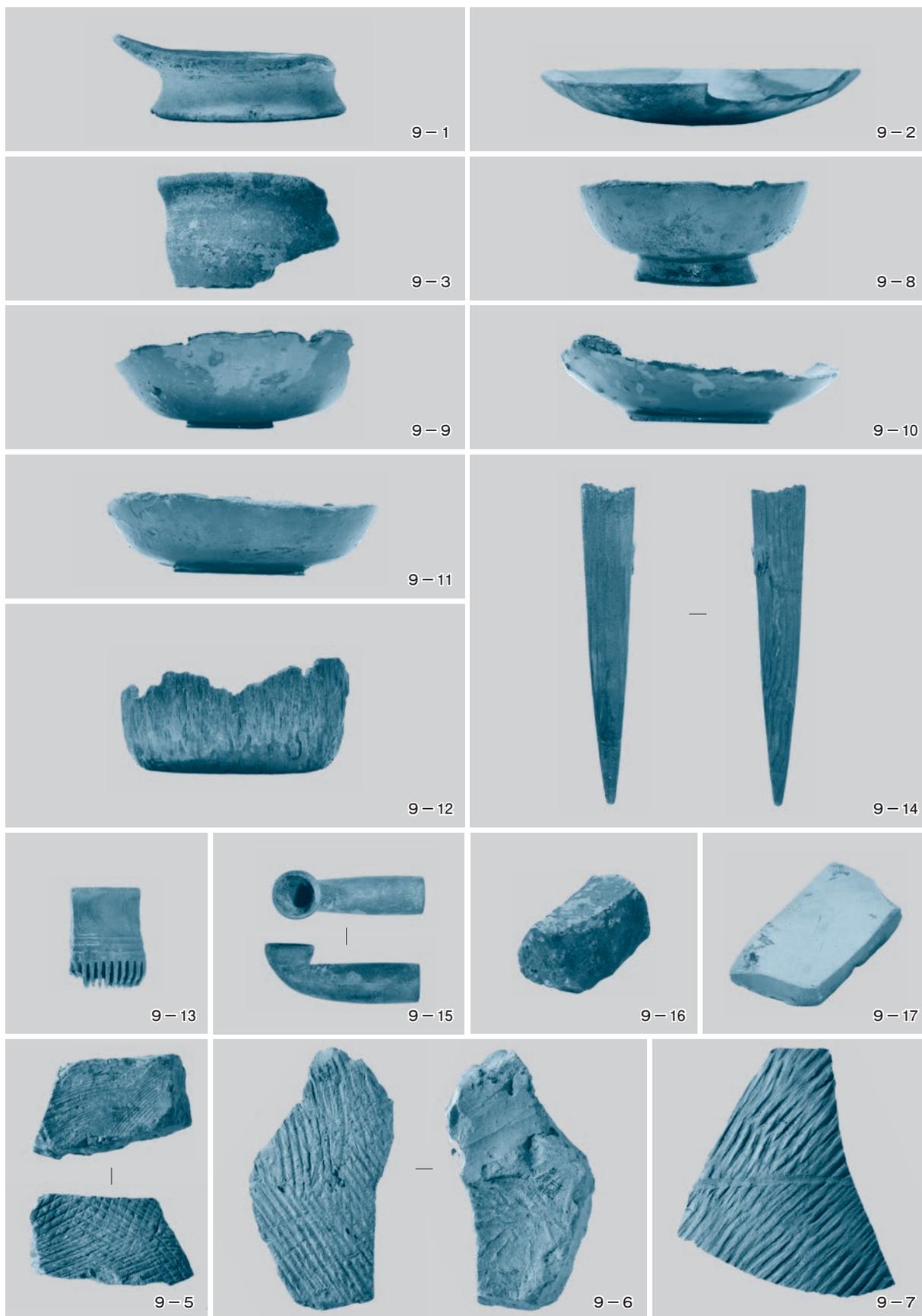
- | | | | |
|---|----------------|---|-------------------|
| 1 | 2号流路跡検出状況(西から) | 2 | 2号流路跡断面C-C'(南東から) |
| 3 | 3号流路跡検出状況(南から) | 4 | 3号流路跡断面(南東から) |
| 5 | 4号流路跡全景(南から) | 6 | 4号流路跡断面(南東から) |
| 7 | 5号流路跡全景(北から) | 8 | 5号流路跡断面(北から) |



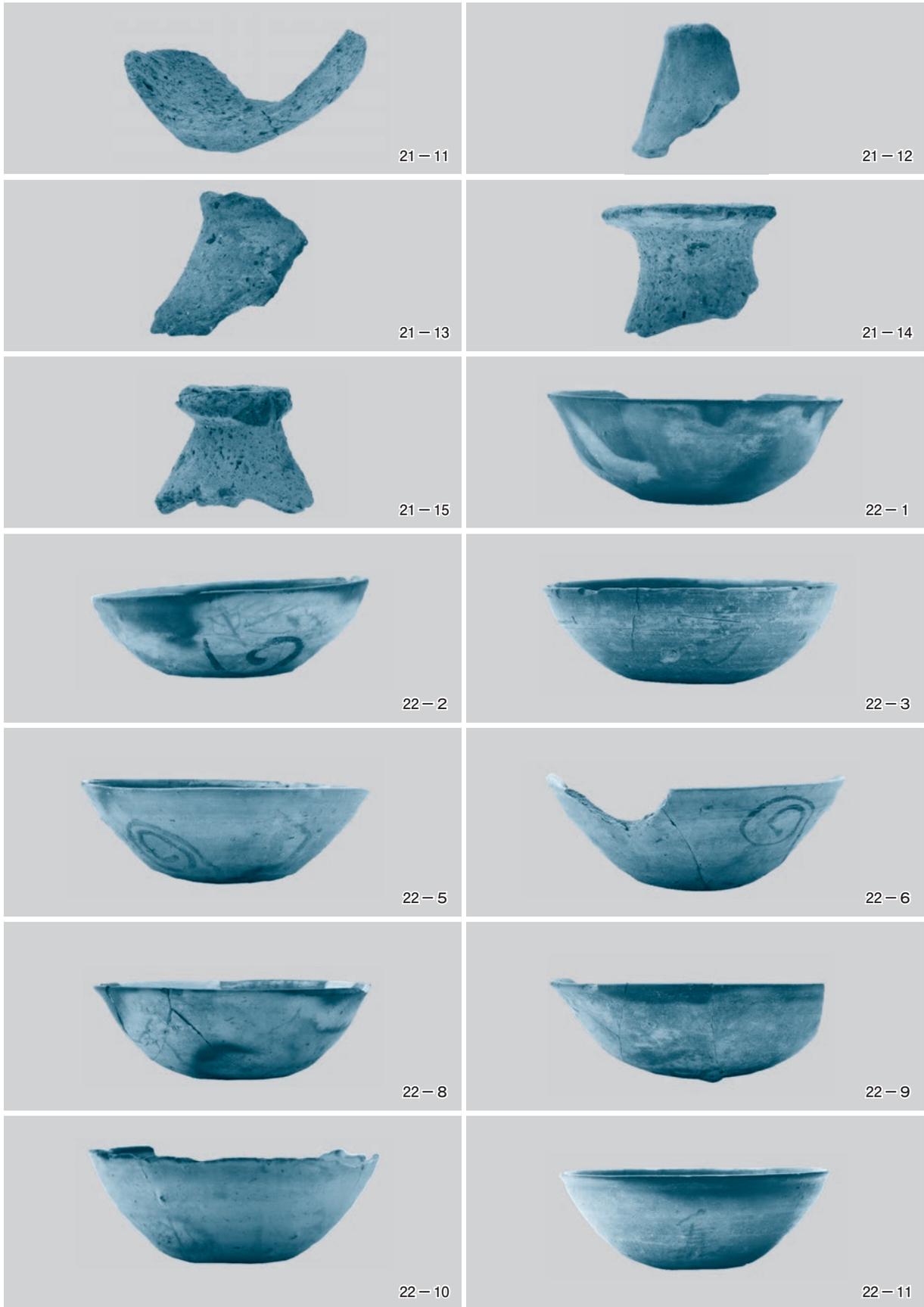
16 北区深掘りグリッド出土遺物 (1)



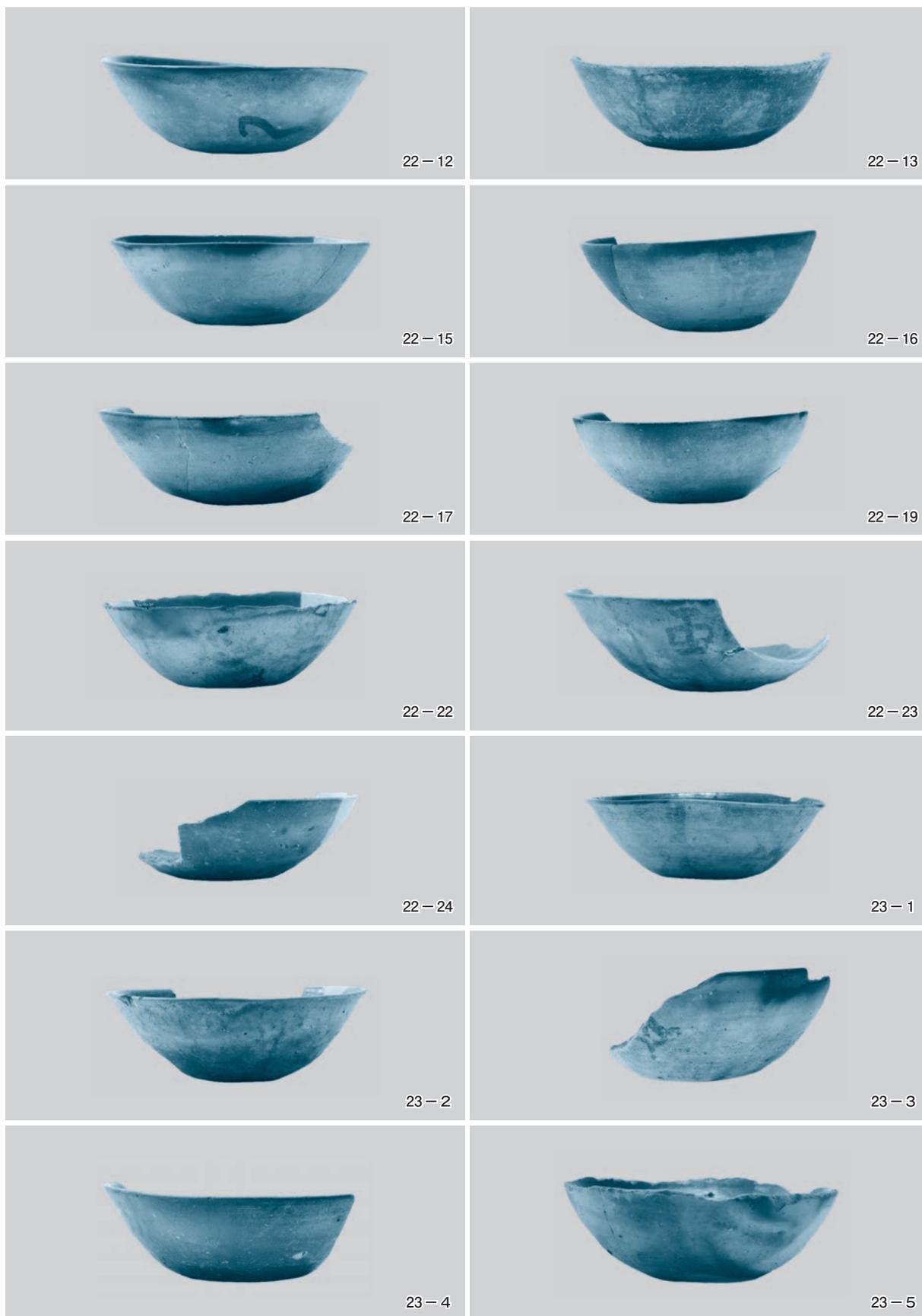
17 北区深掘りグリッド出土遺物(2)



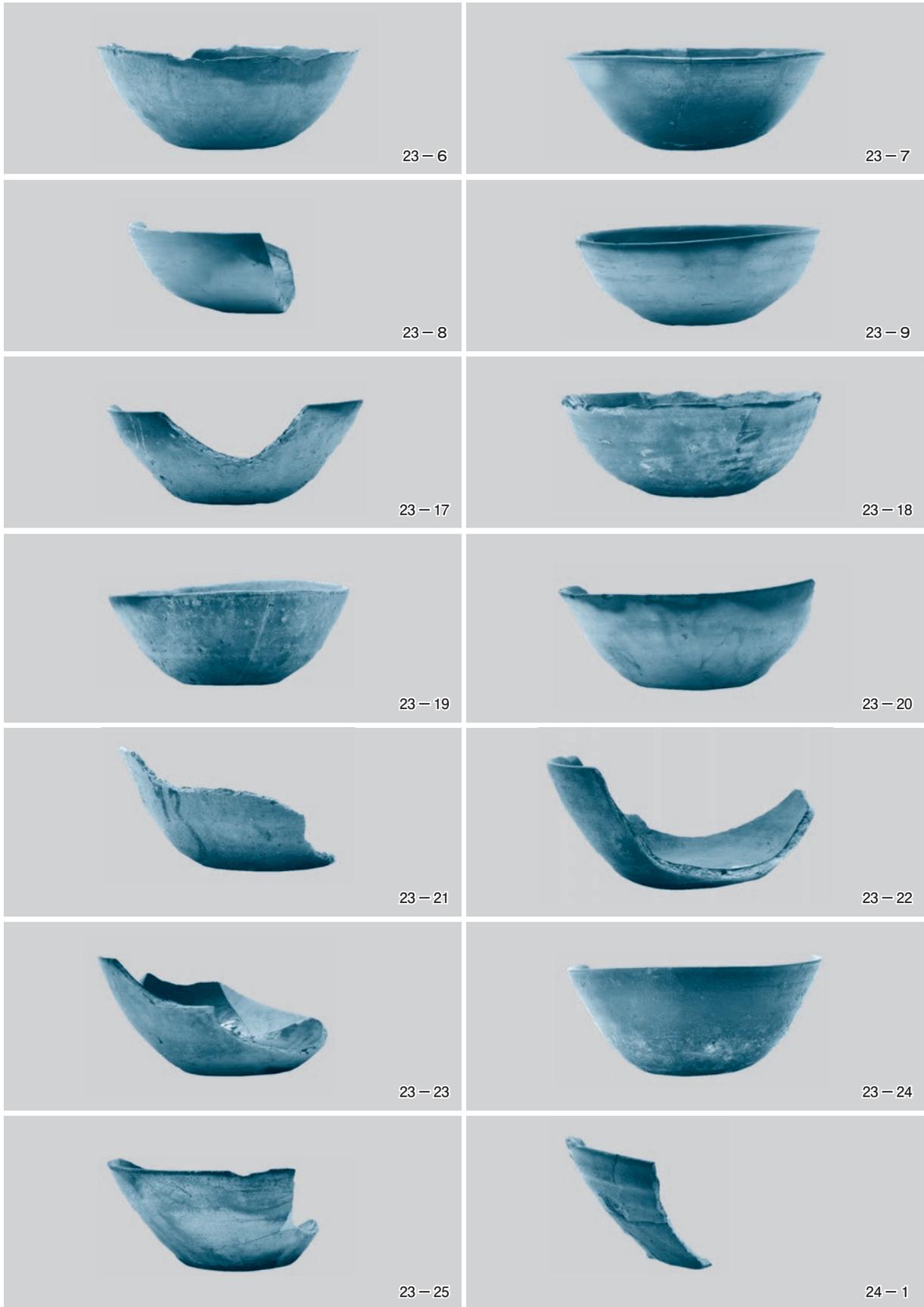
18 北区1号沟迹出土遺物



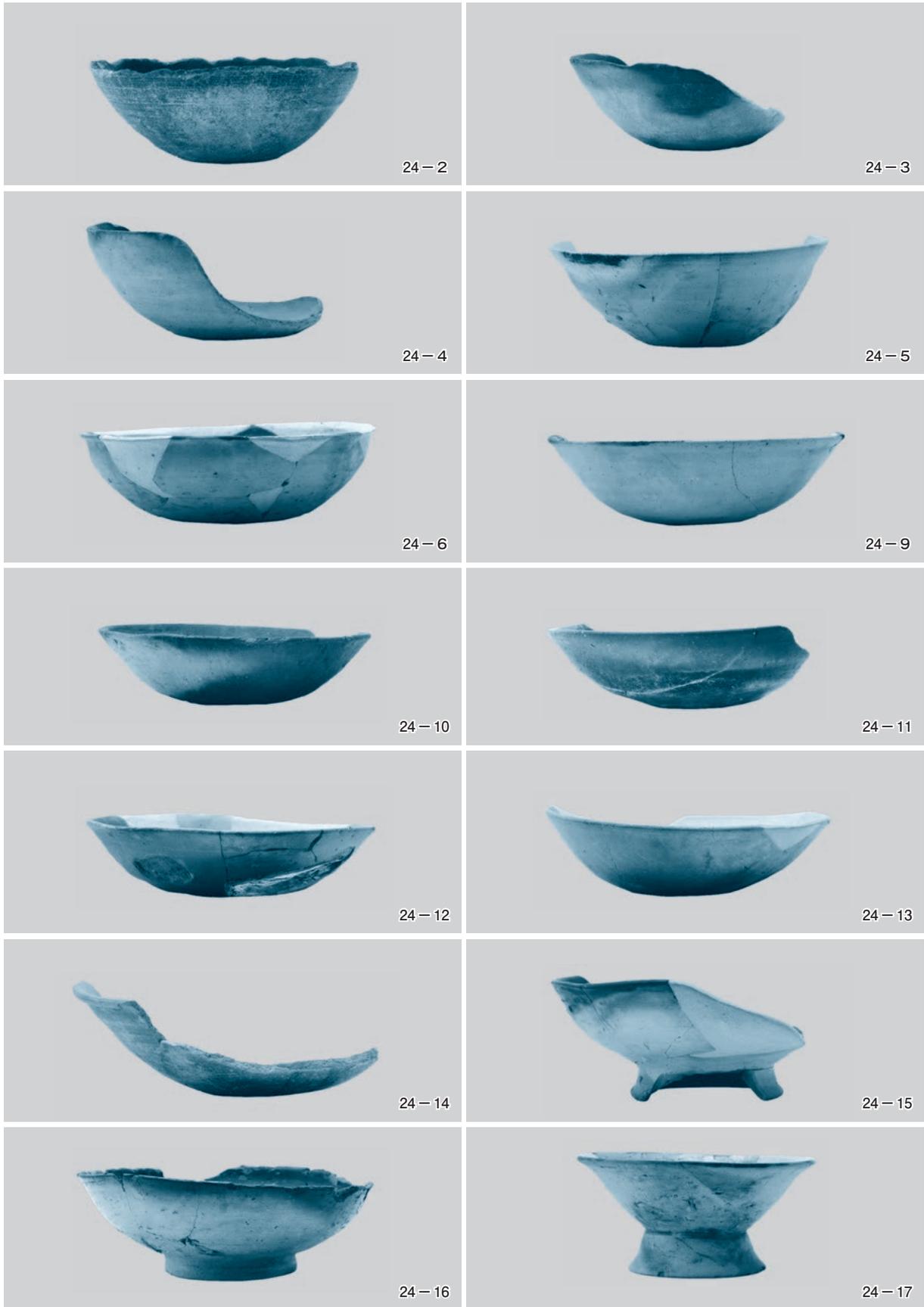
19 北区流路跡出土遺物(1)



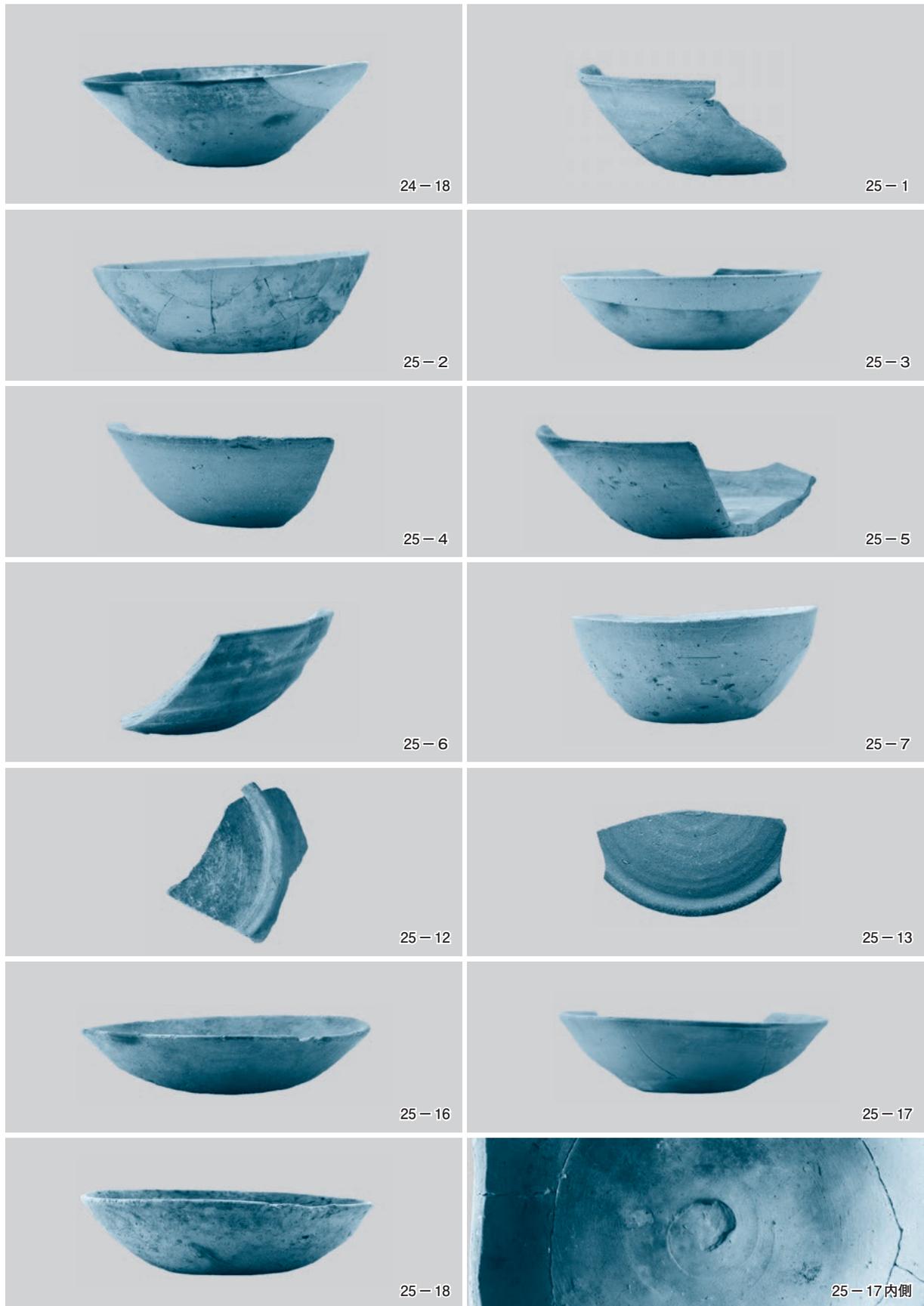
20 北区流路跡出土遺物（2）



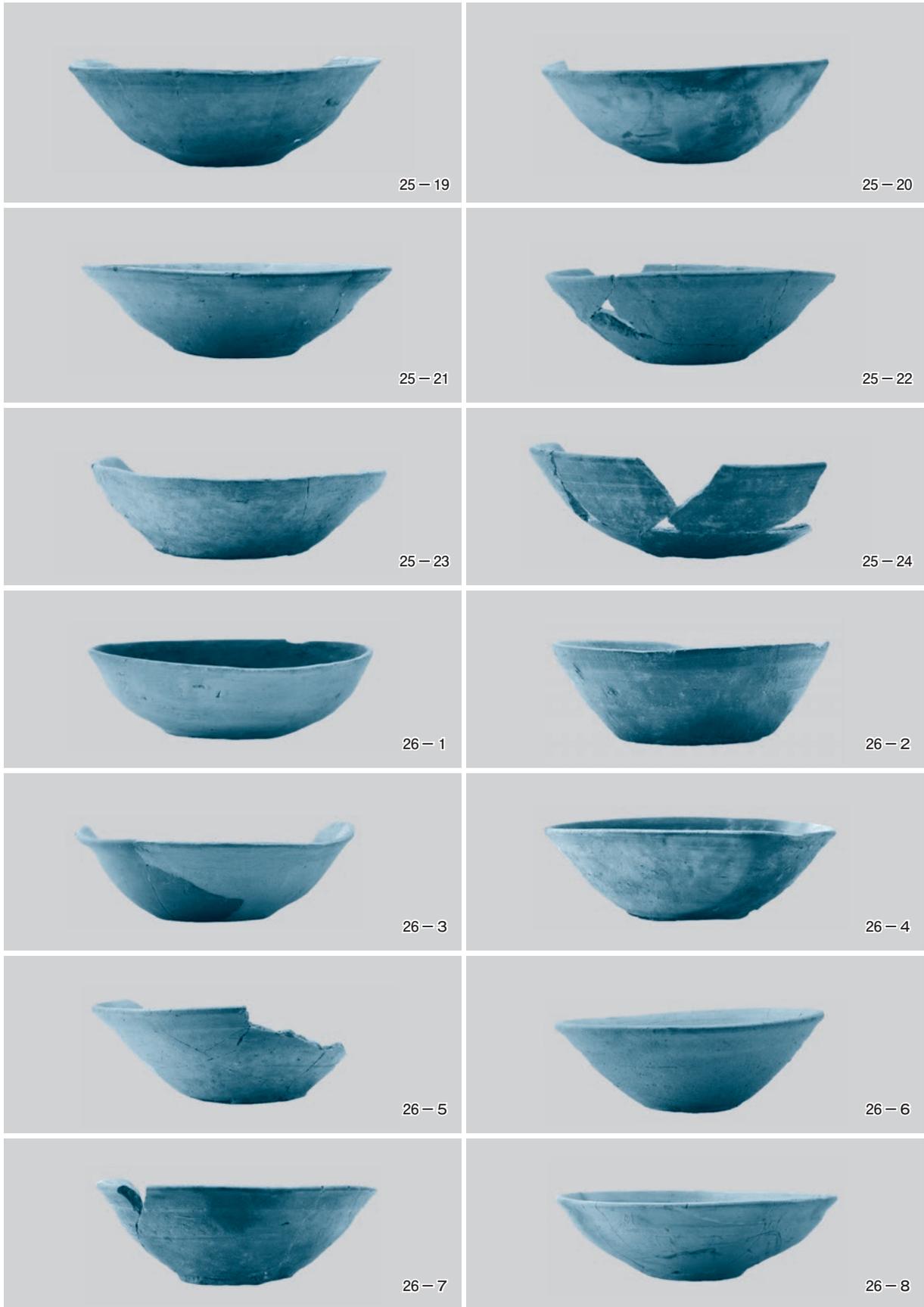
21 北区流路跡出土遺物(3)



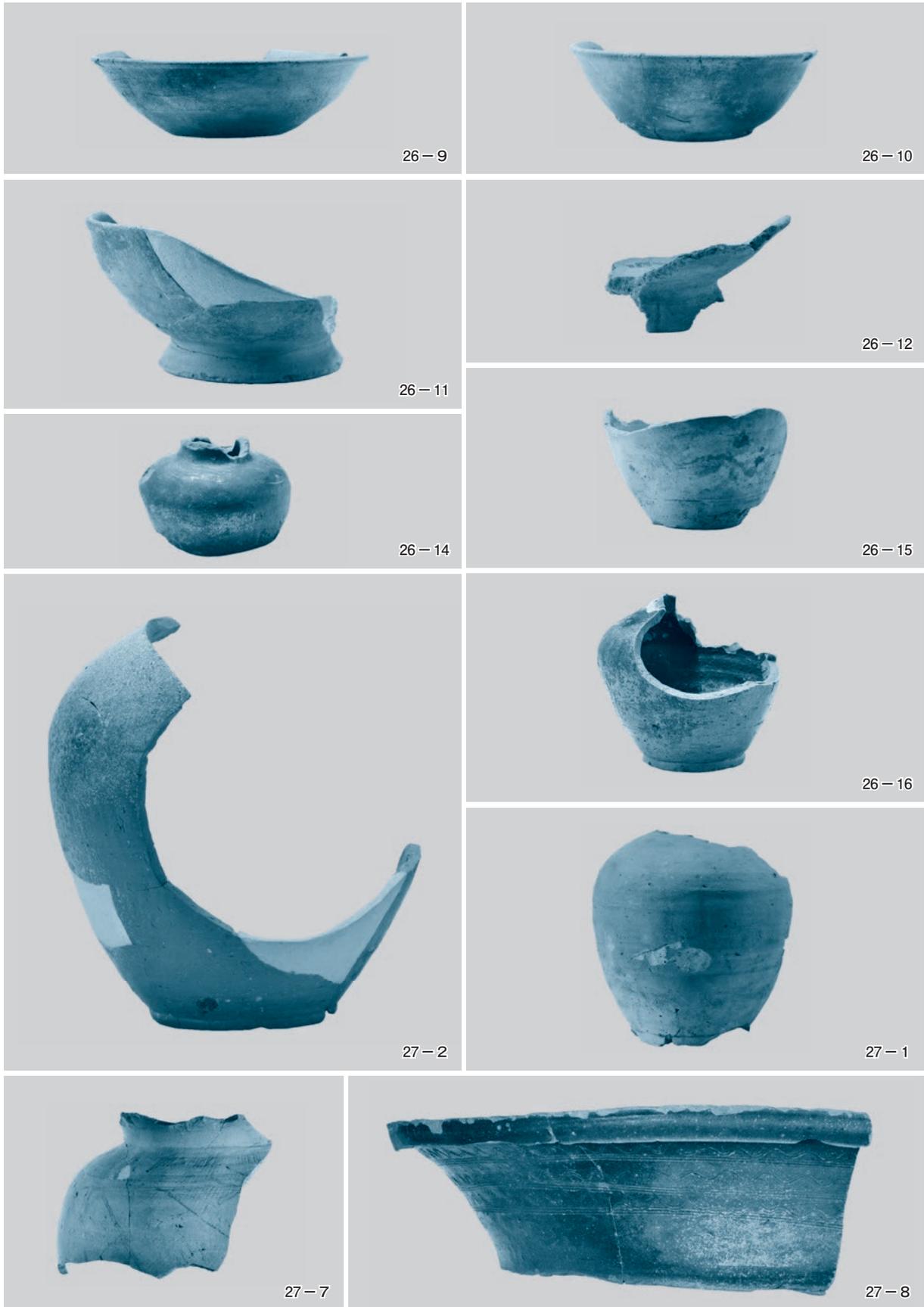
22 北区流路跡出土遺物（4）



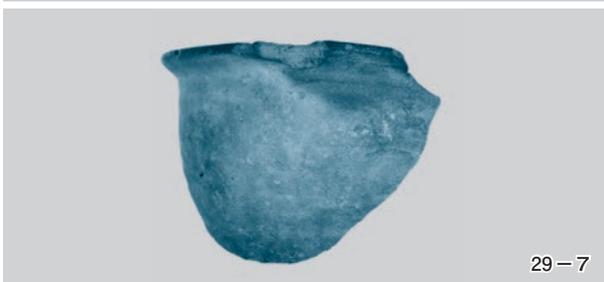
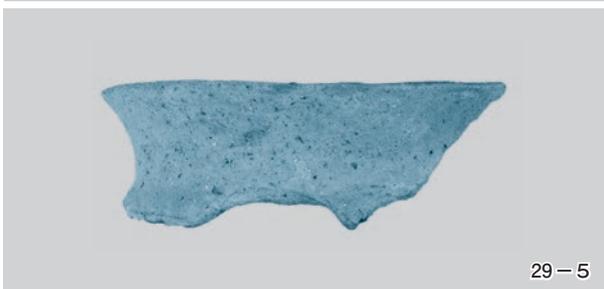
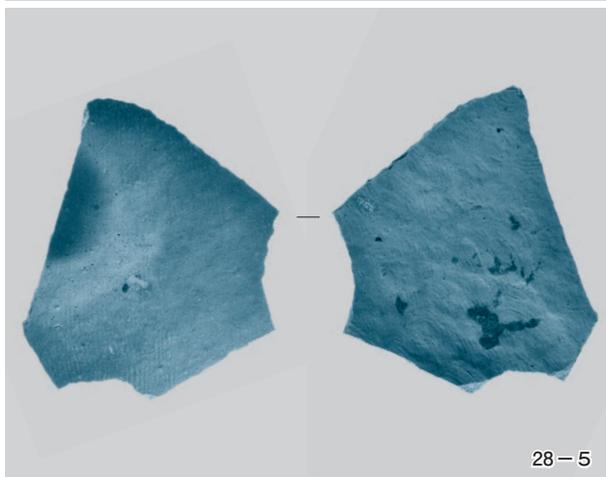
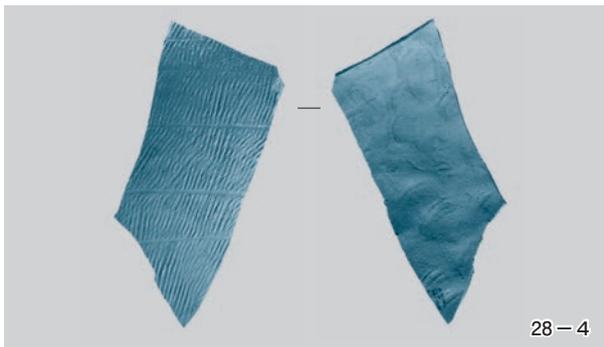
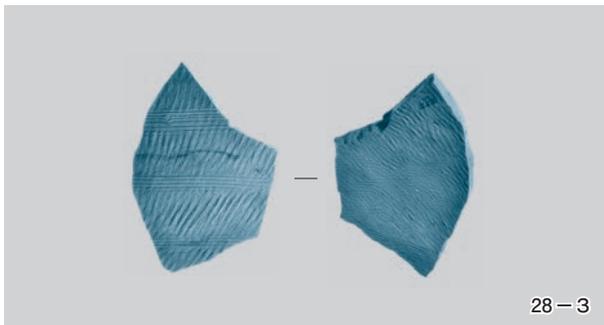
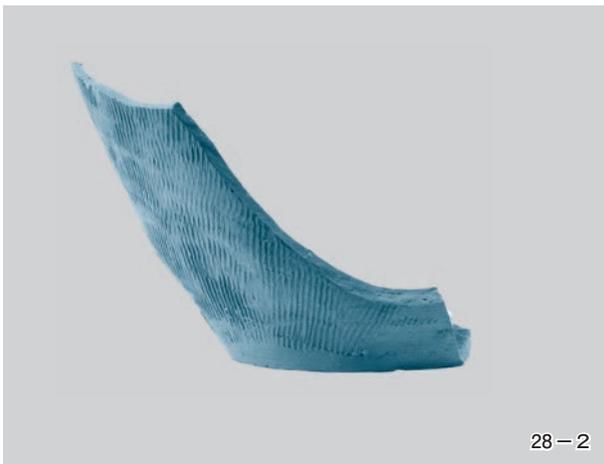
23 北区流路跡出土遺物 (5)



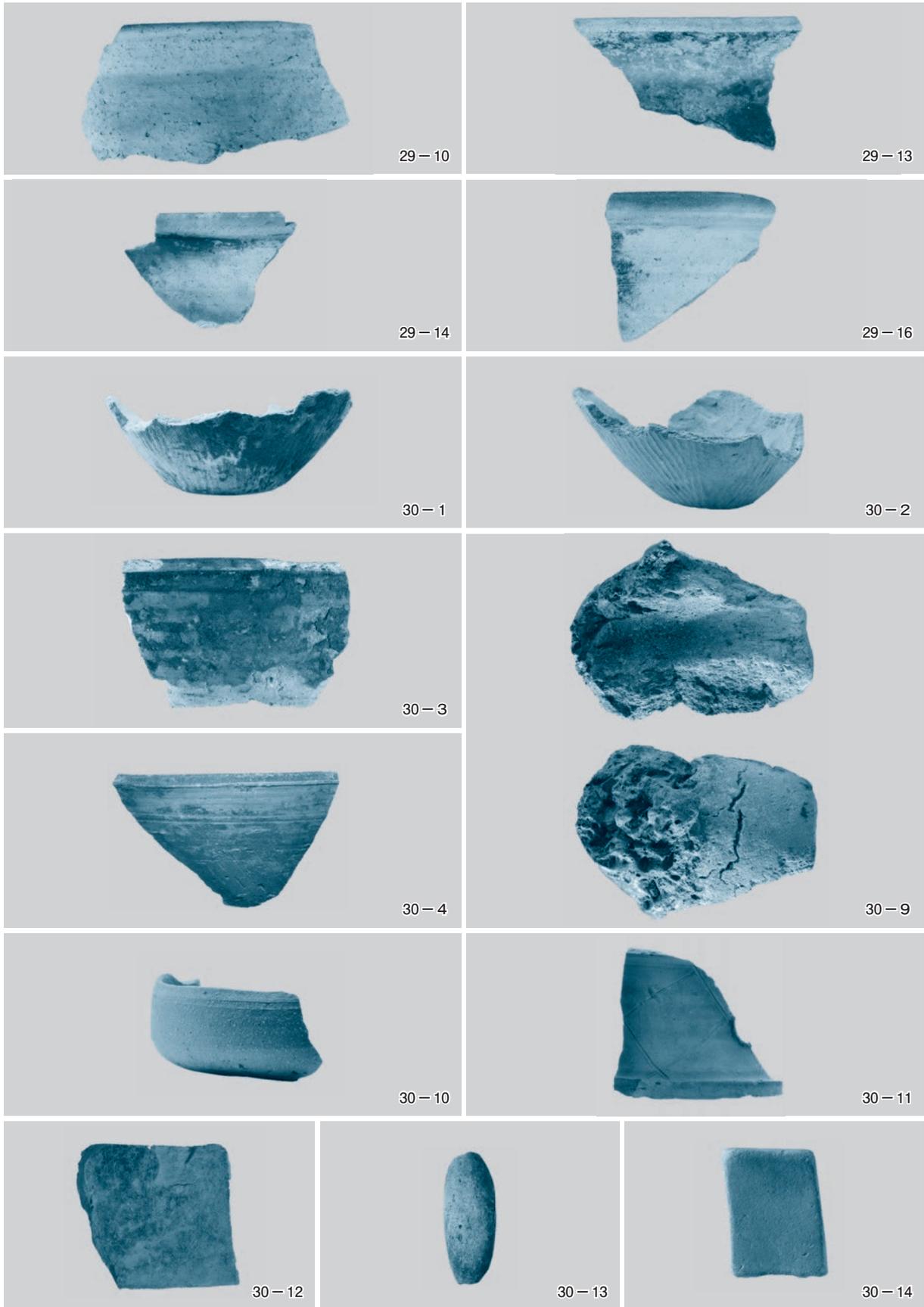
24 北区流路跡出土遺物（6）



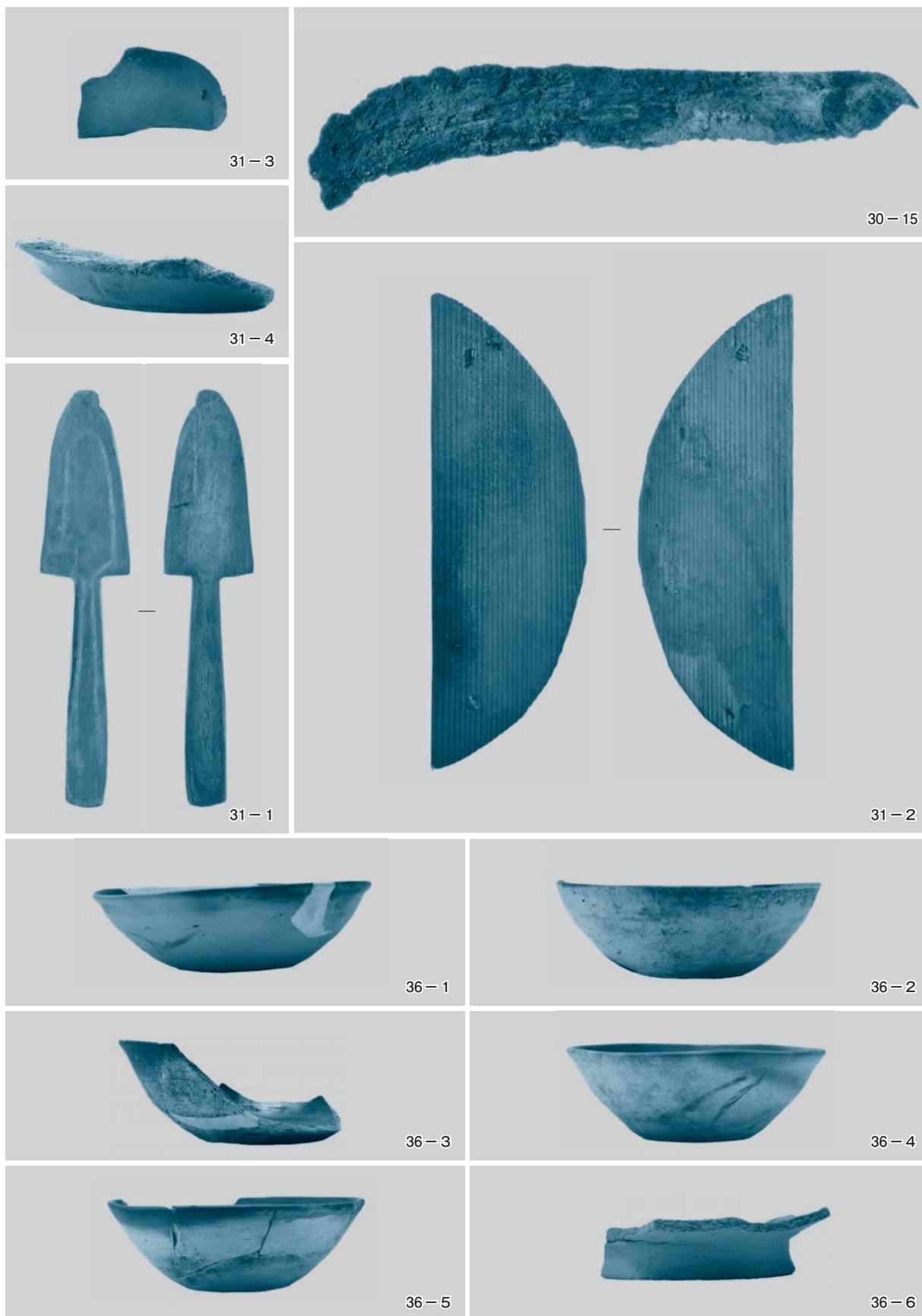
25 北区流路跡出土遺物 (7)



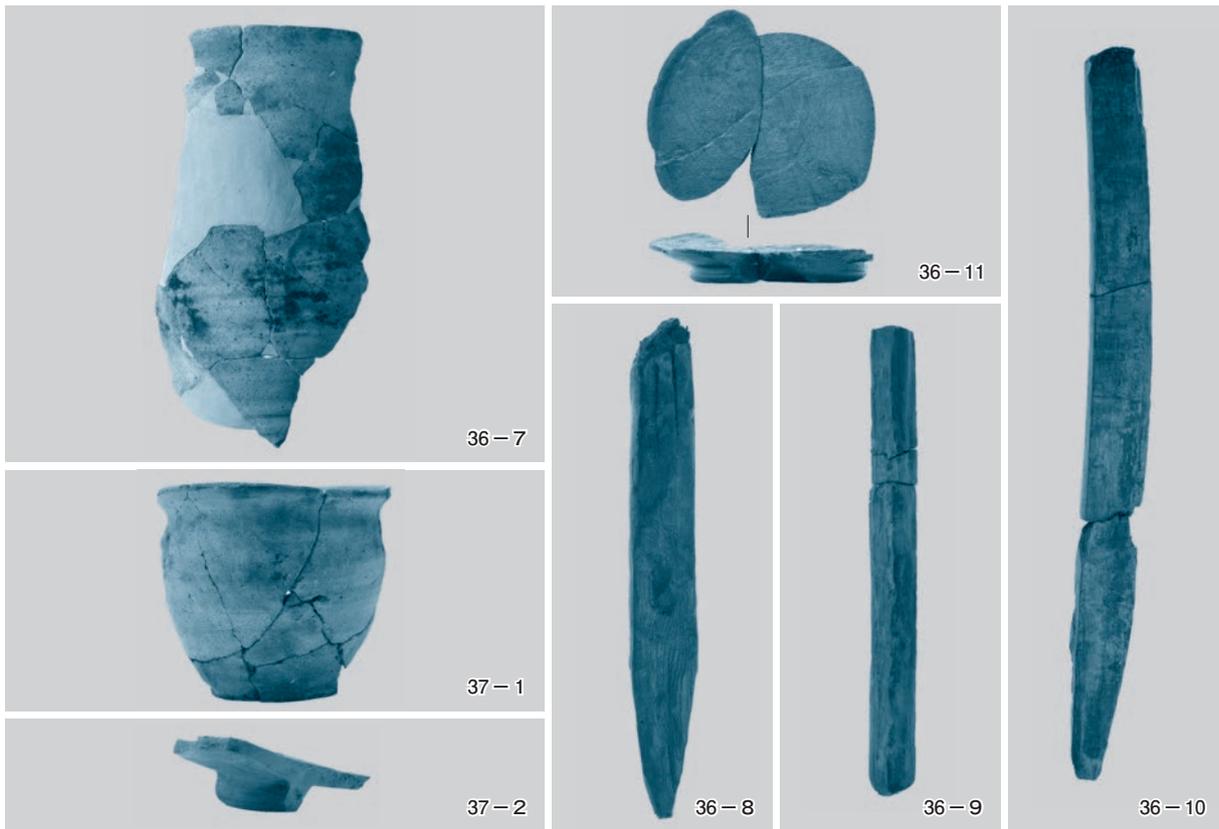
26 北区流路跡出土遺物（8）



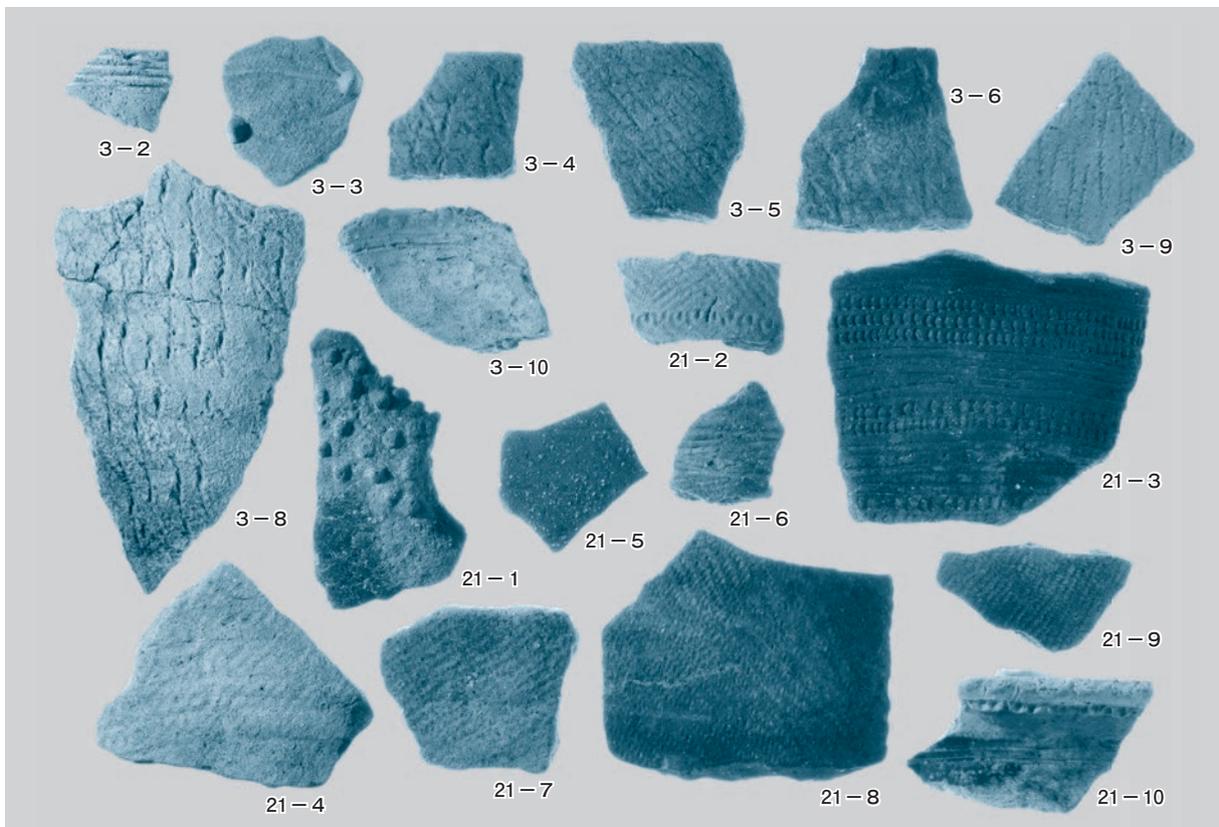
27 北区流路跡出土遺物(9)



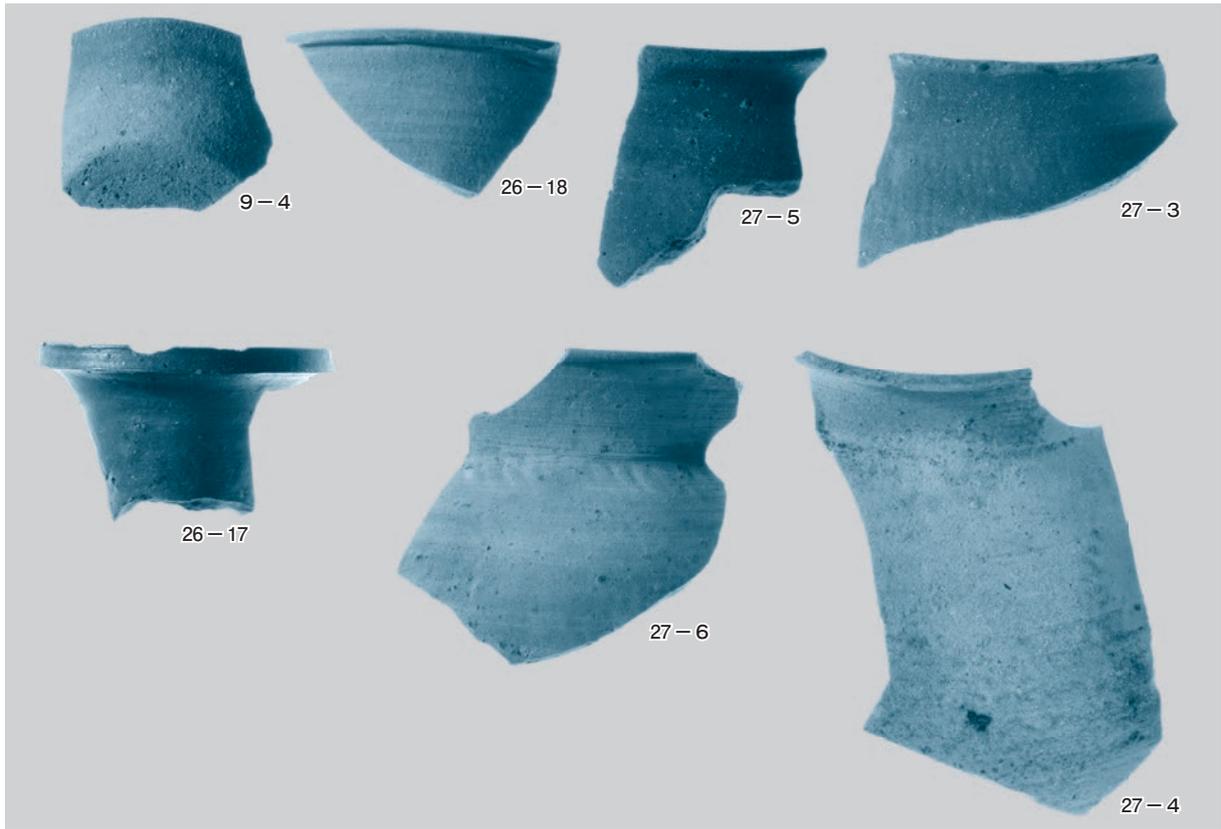
28 北区流路跡，性格不明遺構出土遺物



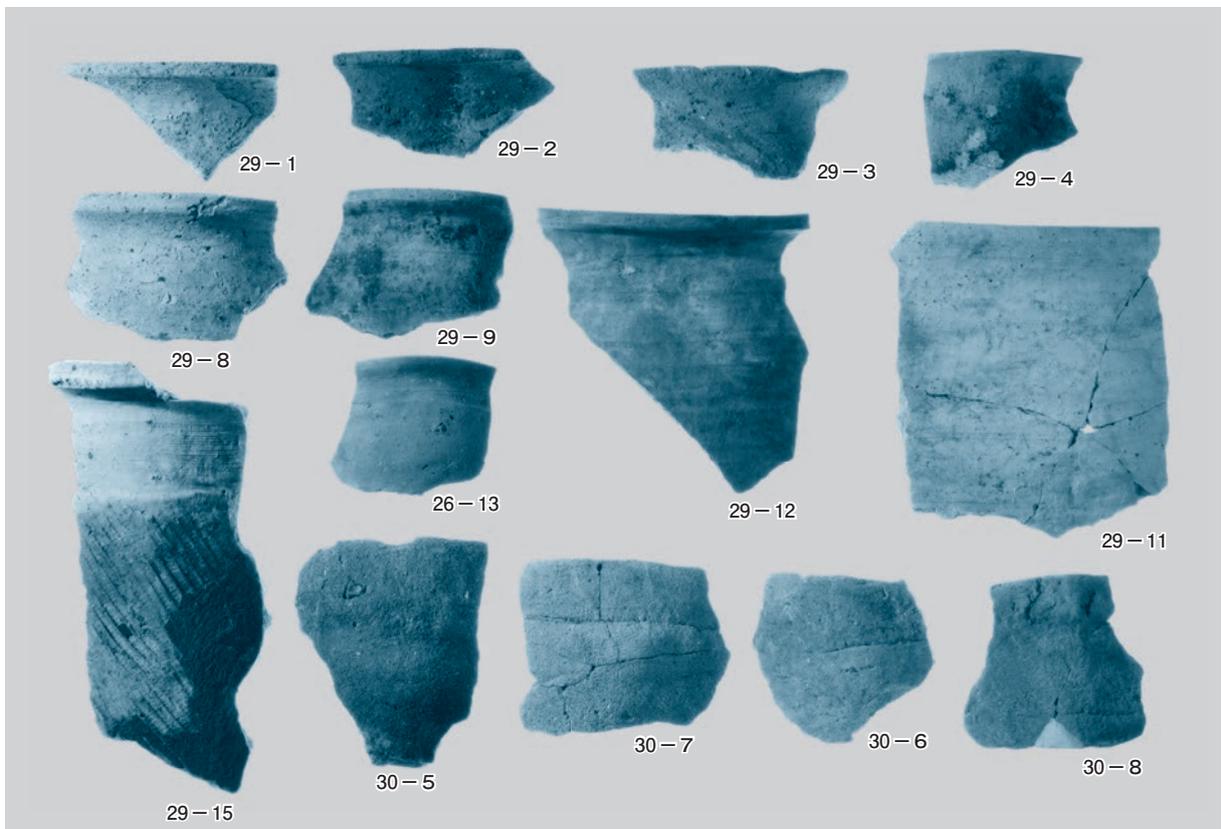
29 北区性格不明遺構，遺構外出土遺物



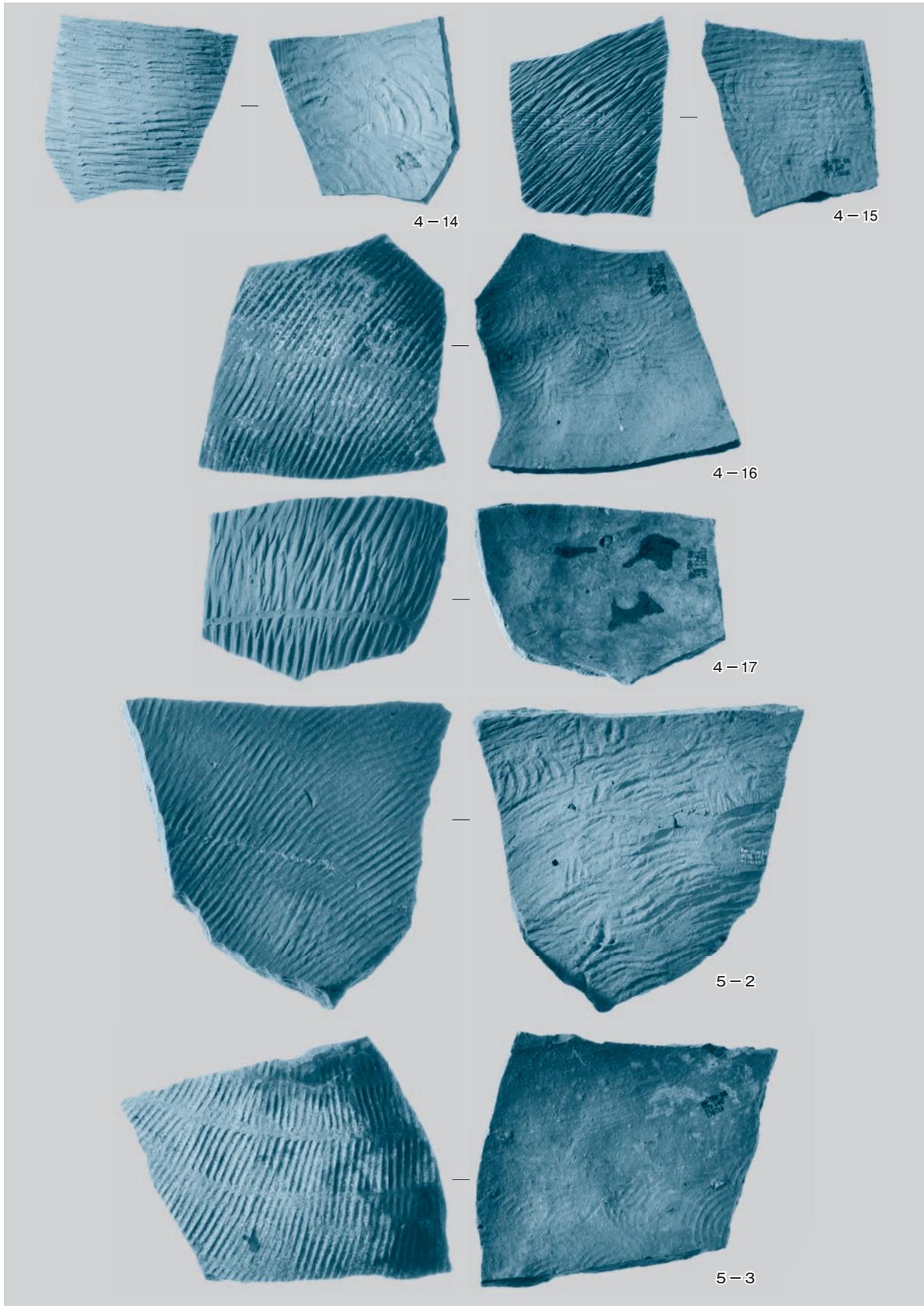
30 北区深掘りグリッド，流路跡出土縄文土器



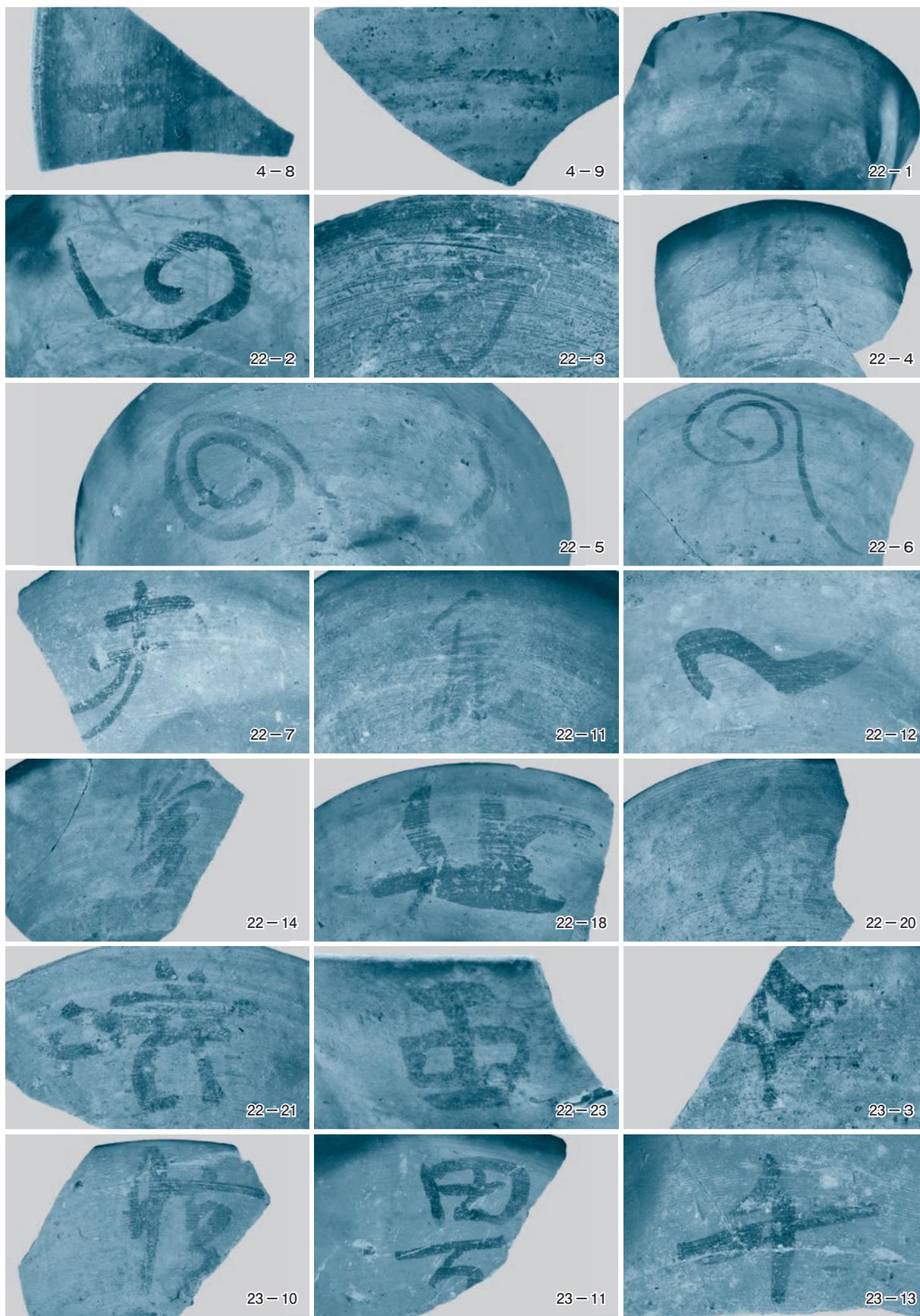
31 北区溝跡，流路跡出土須恵器



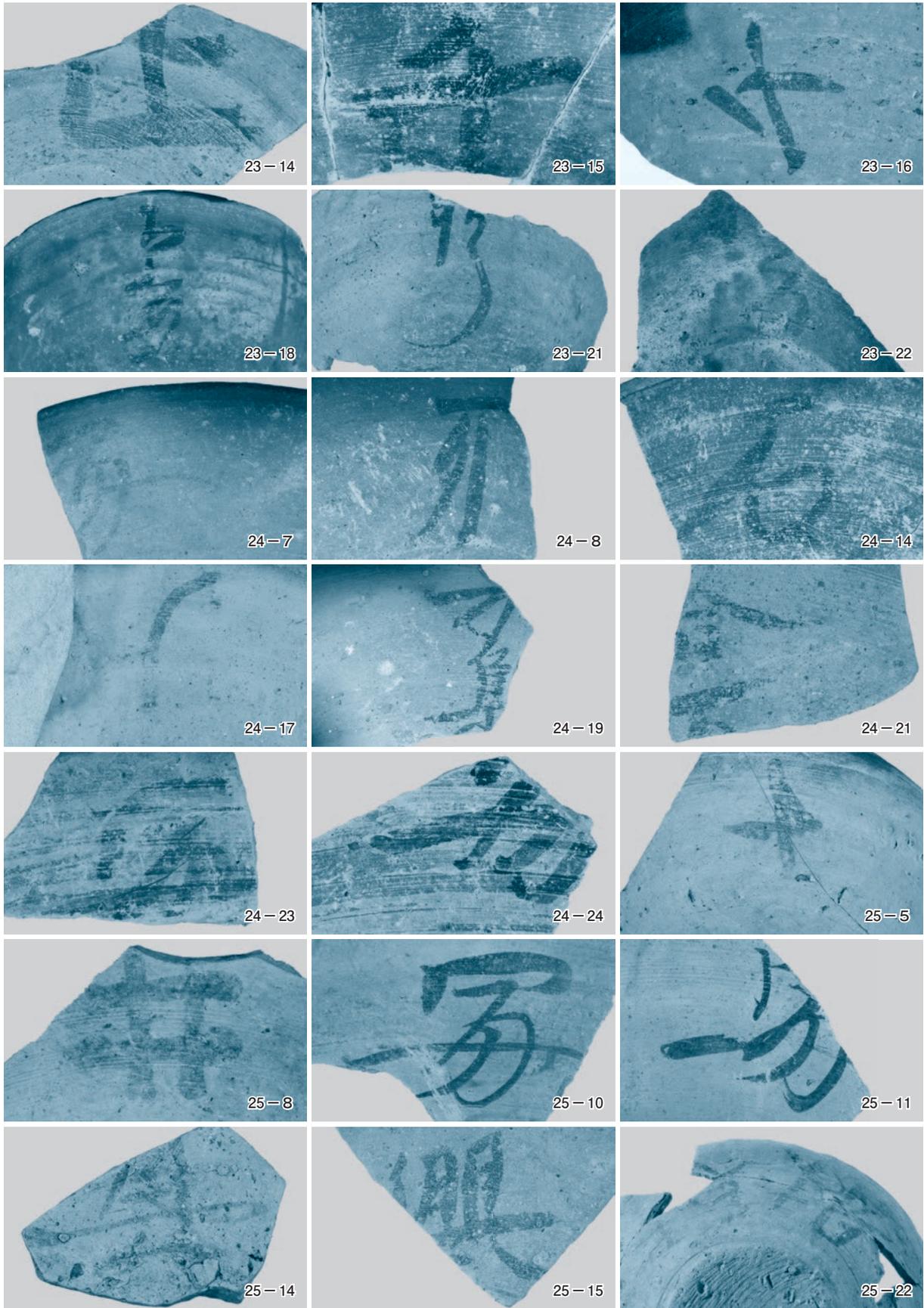
32 北区流路跡出土土師器



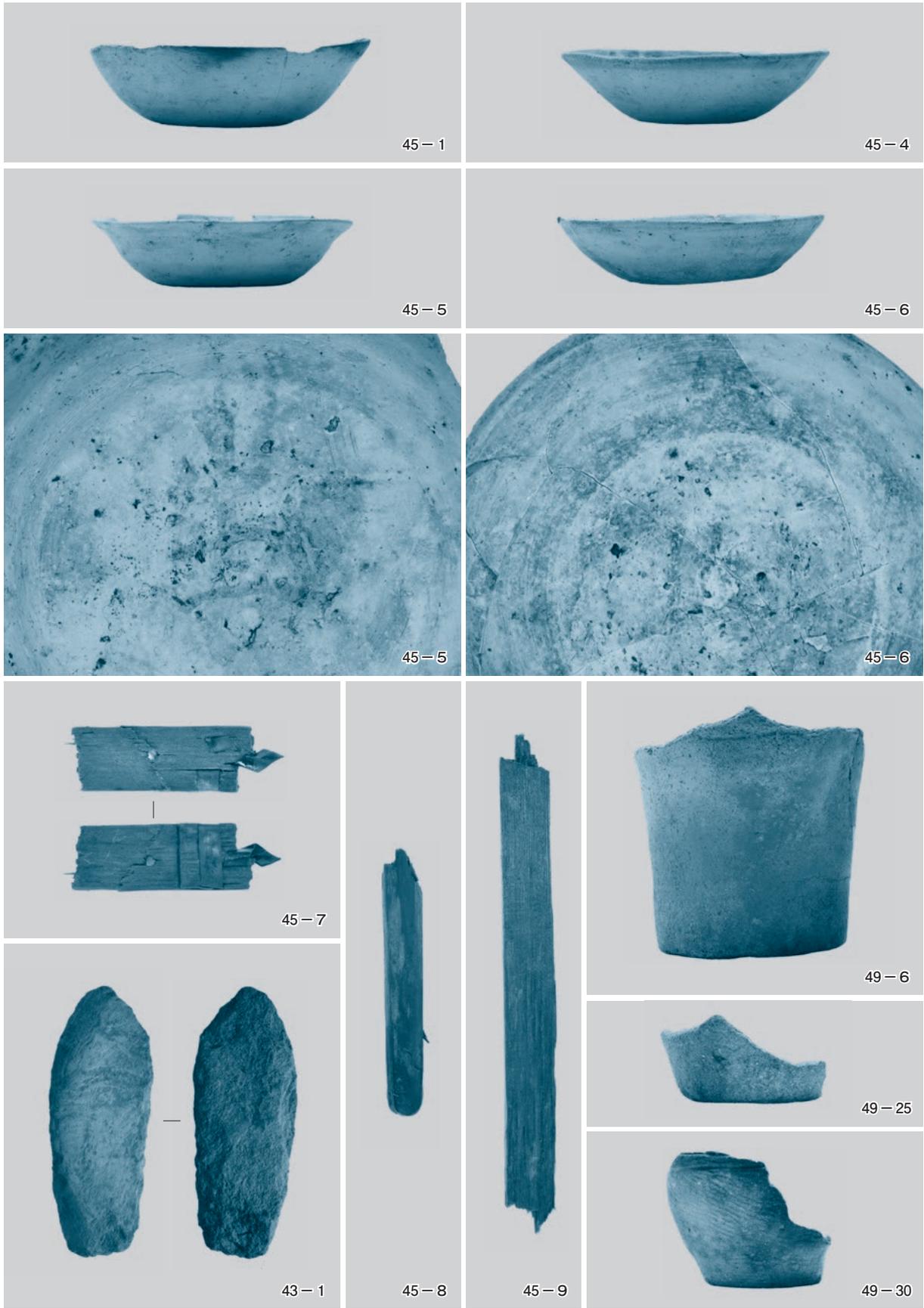
33 北区深掘りグリッド出土須恵器



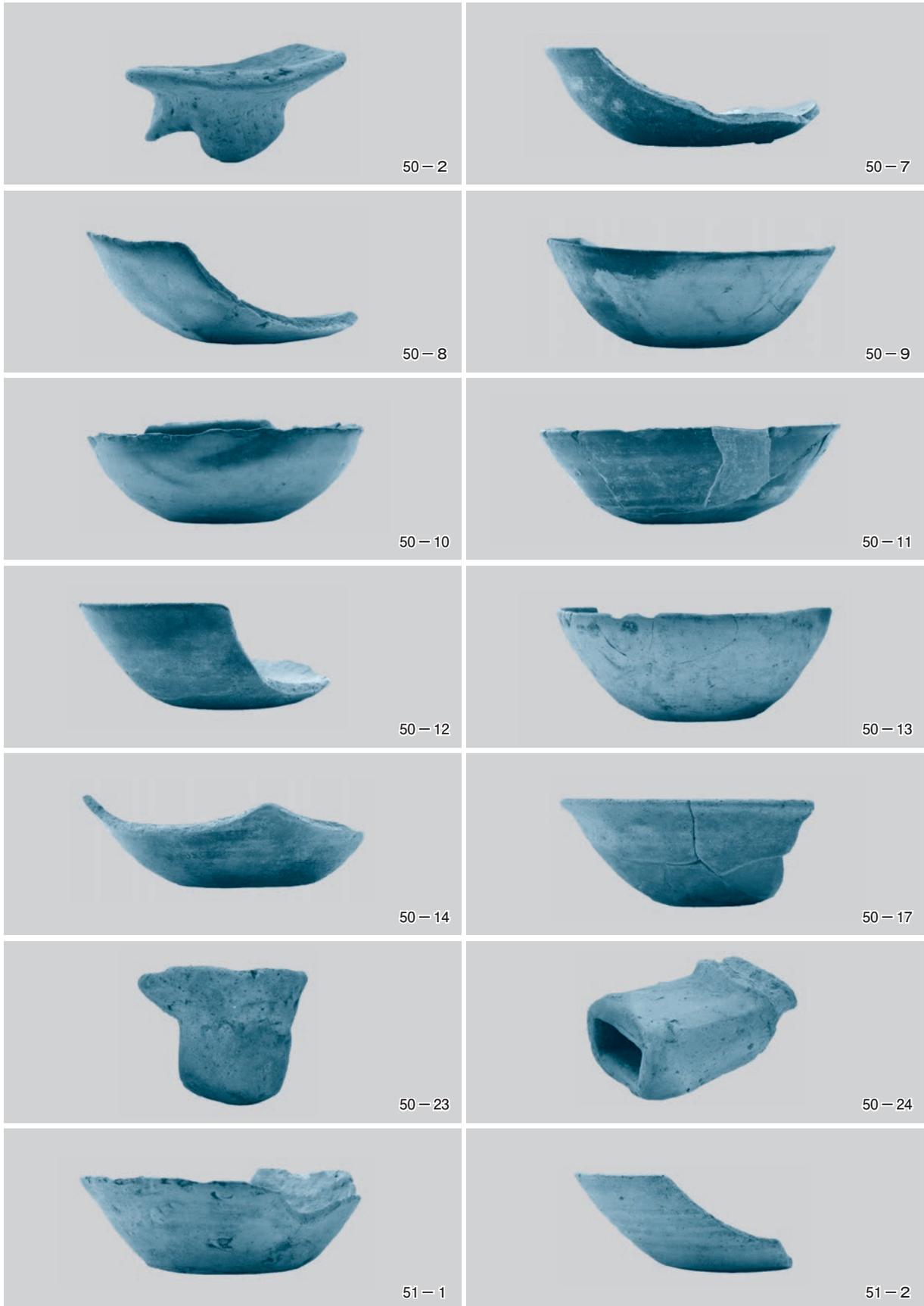
34 北区出土墨書土器 (1)



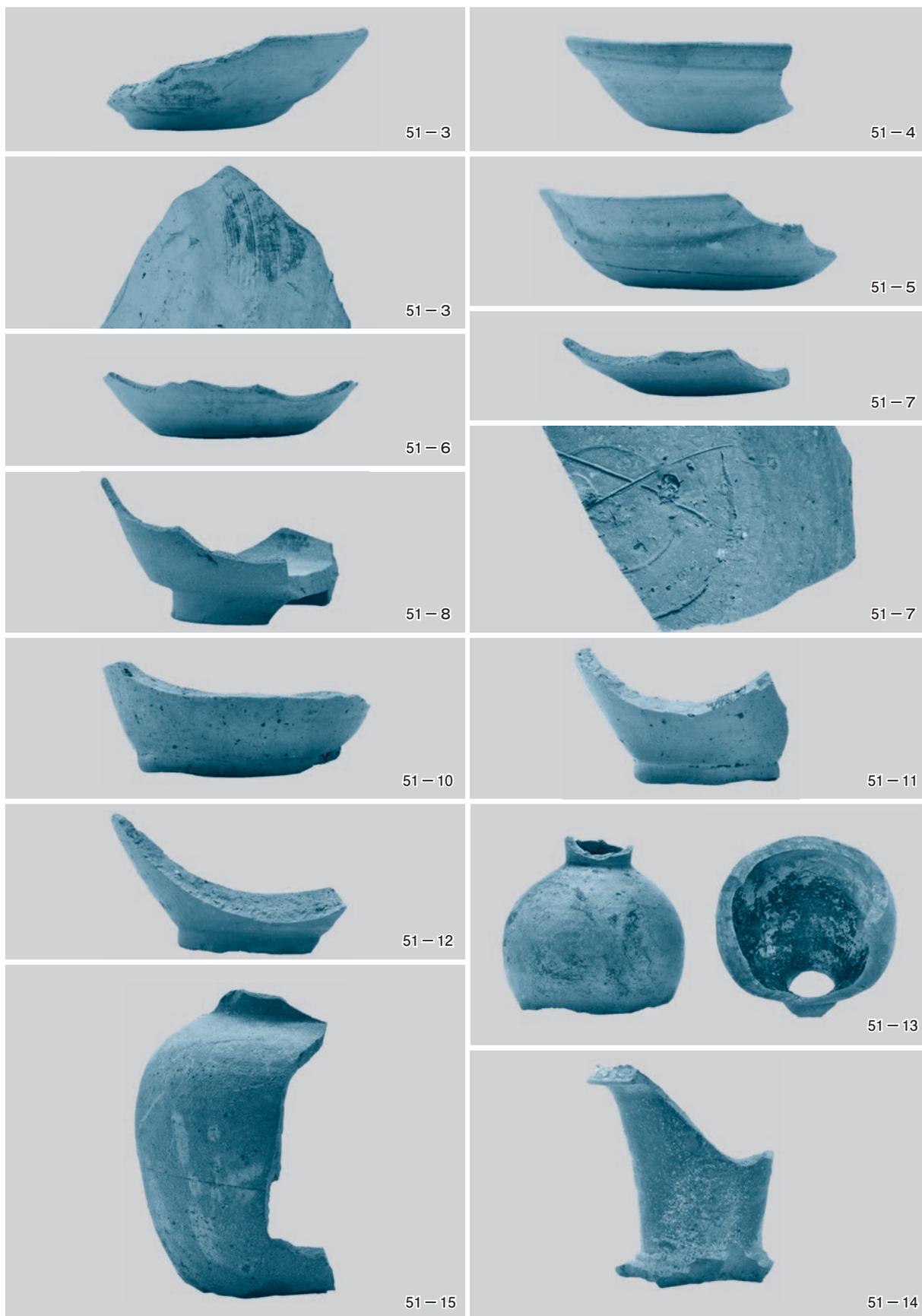
35 北区出土墨書土器(2)



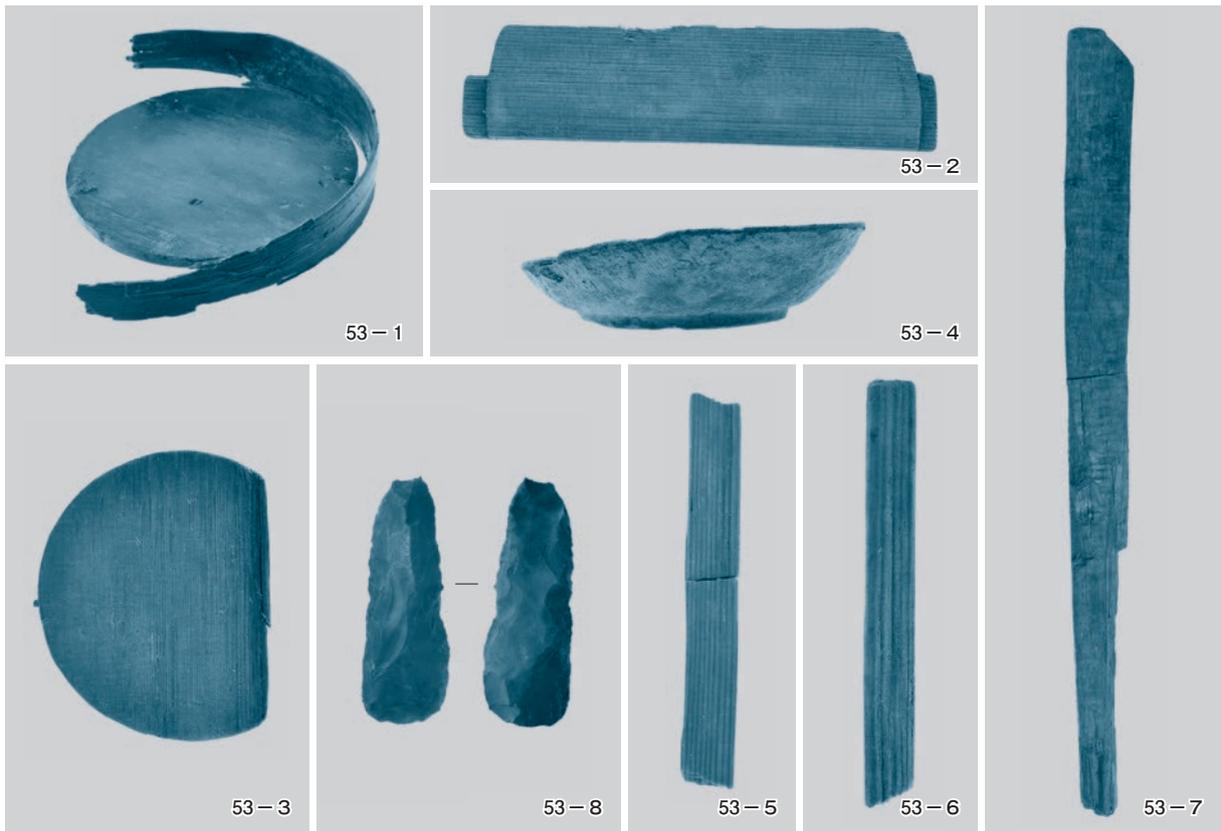
36 南区沟迹, 1号流路迹出土遗物(1)



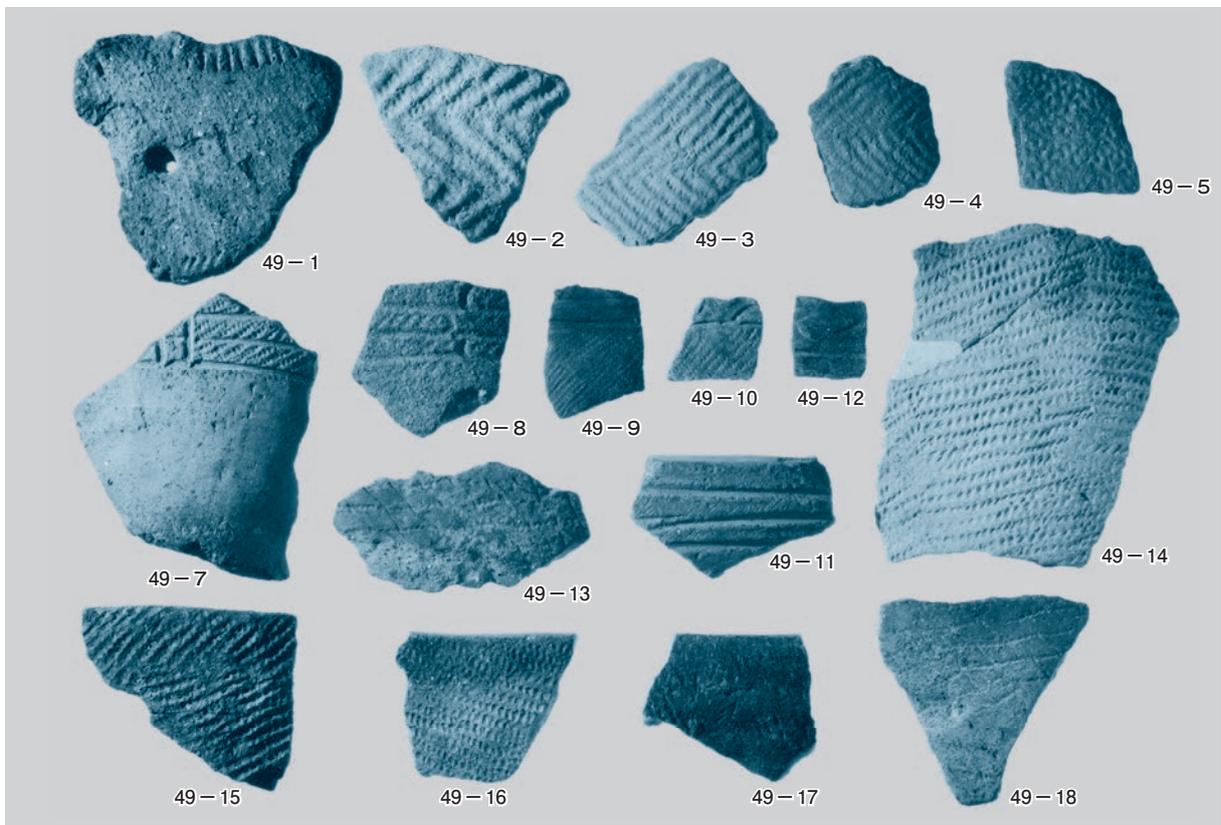
37 南区1号流路跡出土遺物(2)



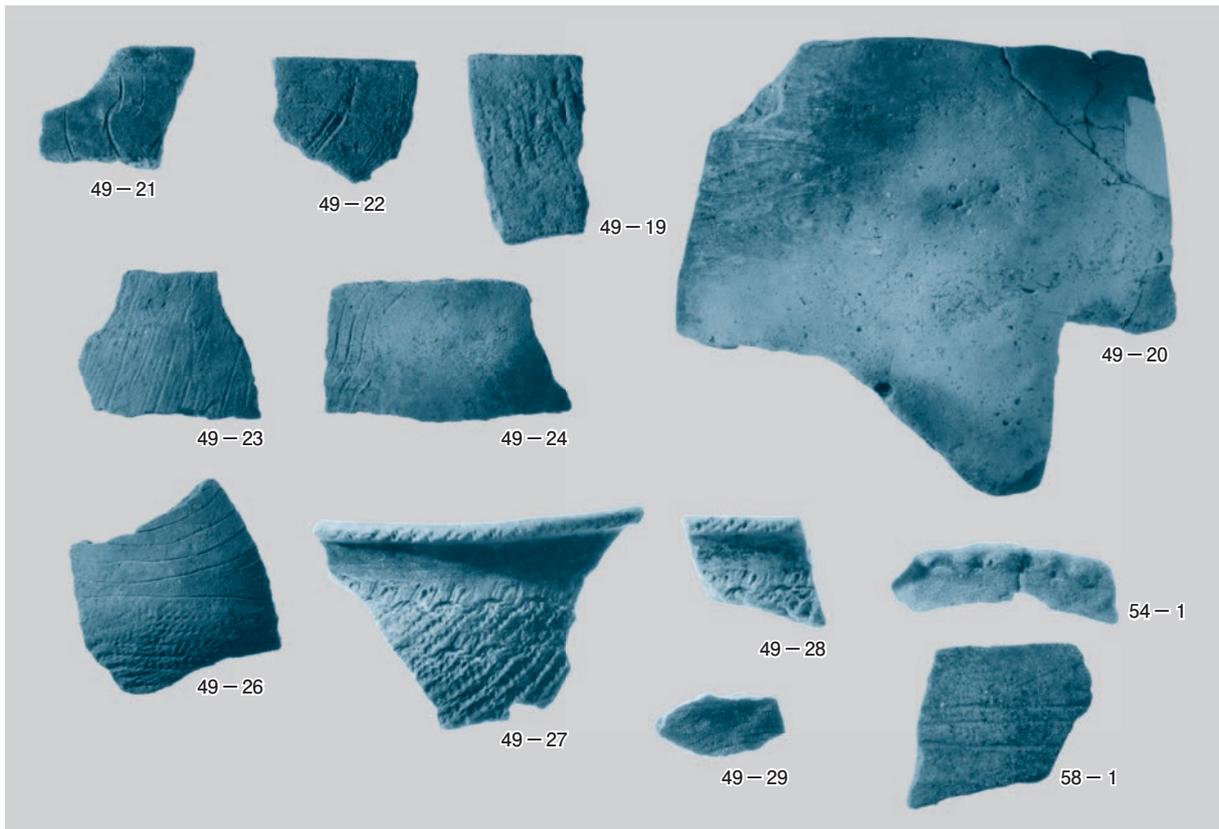
38 南区1号流路迹出土遺物（3）



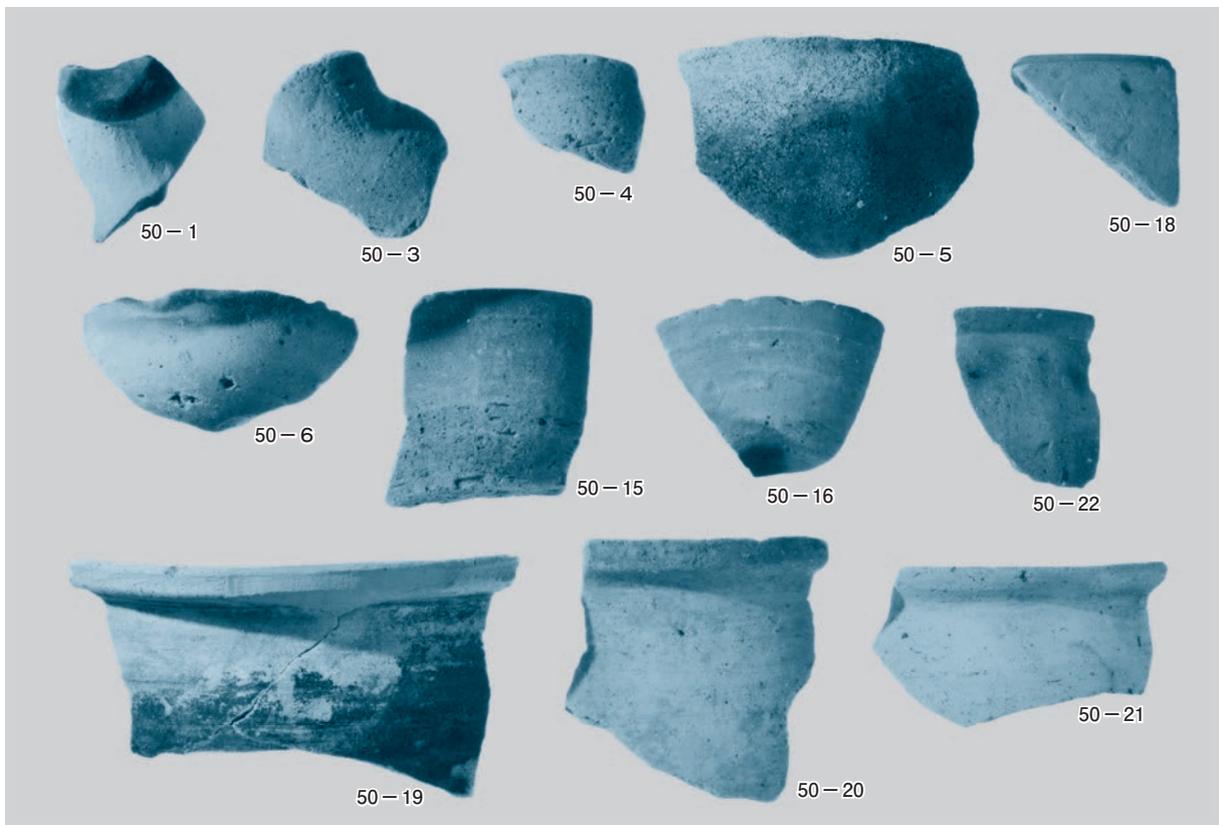
39 南区1号流路跡出土遺物(4)



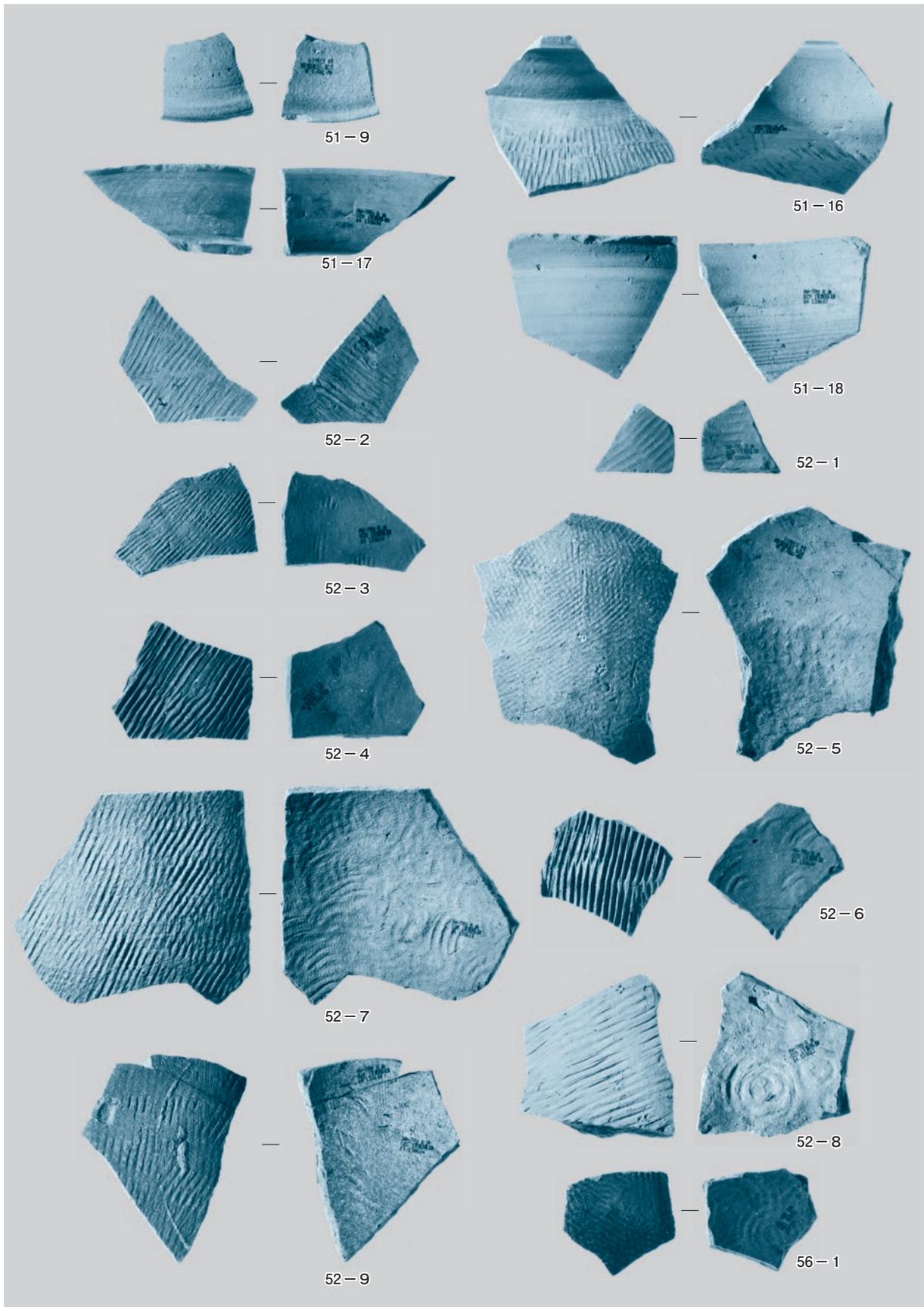
40 南区1号流路跡出土縄文土器



41 南区1・2号流路跡，遺構外出土縄文・弥生土器



42 南区1号流路跡出土土師器



43 南区1・4号流路跡出土須恵器

報告書抄録

ふりがな	あいづじゅうかんきたどうろいせきはくつちょうさほうこく14							
書名	会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告14							
シリーズ名	福島県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第495集							
編著者名	藤谷 誠 菅原祥夫 細山郁夫 吉野勤也 青山博樹 阿部知巳 鶴見諒平 荒木麻衣							
編集機関	公益財団法人福島県文化振興財団 遺跡調査部 調査課 〒960-8115 福島県福島市山下町1-25 TEL 024-534-2733							
発行機関	福島県教育委員会 〒960-8688 福島県福島市杉妻町2-16 TEL 024-521-1111							
発行年月日	2014年12月19日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
さくらまち 桜町 (5次)	ふくしまけんかわぬまぐん 福島県河沼郡 ゆがわらおのおあぎなぐら 湯川村大字桜町 字千廻 他	4225	00030	37° 33' 13"	139° 53' 56"	2013年4月10日) 2013年5月17日	2,000㎡	会津縦貫北道路 の建設に伴う事前 調査
にしきながし 西木流 C (2次)	ふくしまけんあいづわかまつし 福島県会津若松市 こうやまちはおあぎなぐら 高野町大字木流 あぎなぐら 字木流	2028	00241	37° 32' 45"	139° 54' 28"	2013年4月10日) 2013年11月22日	10,400㎡	会津縦貫北道路 の建設に伴う事前 調査
にしきながし 西木流 D (1次)	ふくしまけんあいづわかまつし 福島県会津若松市 こうやまちはおあぎなぐら 高野町大字木流 あぎなぐら 字木流	2028	00242	37° 32' 39"	139° 54' 28"	2013年5月14日) 2013年9月13日	2,800㎡	会津縦貫北道路 の建設に伴う事前 調査
つるぬま 鶴沼 B (1次)	ふくしまけんあいづわかまつし 福島県会津若松市 こうやまちはおあぎなぐら 高野町大字中沼 あぎなぐら 字鶴沼	2028	00230	37° 32' 16"	139° 54' 38"	2013年4月15日) 2013年11月29日	12,100㎡	会津縦貫北道路 の建設に伴う事前 調査
所収遺跡名	種類	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
さくらまち 桜町 (5次)	流路跡	平安時代 近 世	土 坑 2基		土師器 須恵器 陶磁器 など	今回は、桜町遺跡の最終次調査にあたる。 遺構・遺物は希薄だった。		
にしきながし 西木流 C (2次)	流路跡	平安時代 近 世	流 路 跡 1条 土 坑 1基 溝 跡 11条		土師器 須恵器 木 器 など	1次調査に引き続き、平安時代の流路跡、 溝跡から多数の土器と木製品が出土した。焼 成前に「梓 今来」と刻書された須恵器横瓶 は注目される。		
にしきながし 西木流 D (1次)	流路跡	平安時代 近 世	掘立柱建物跡 1棟 土 坑 3基 溝 跡 3条		土師器 須恵器 など	西木流C遺跡とまたがる平安時代の溝跡の 他、同時代の掘立柱建物跡、土坑が発見され た。		
つるぬま 鶴沼 B (1次)	流路跡	平安時代 近 世 近 現代	流 路 跡 7条 土 坑 11基 溝 跡 12条 堰 状 遺 構 1基		縄文土器 土師器 須恵器 木 器 など	流路跡から平安時代の土器や木製品などが 多量に出土した。墨書土器が多く含まれる点 は特筆される。		
要 約	いずれも、古代の会津郡衙周辺に分布する官衙関連遺跡である。西木流C遺跡、西木流D遺跡、鶴沼B遺跡では、自然流路跡や溝跡から墨書土器を含む多量の土器類や、木製品などが出土しており、西木流C遺跡の須恵器横瓶に刻書された「梓 今来」の文字は、北陸経由の渡来系集団の存在を示唆するものとして注目される。							

※経緯度数値は世界測地系(平成14年4月1日から適用)による。

福島県文化財調査報告書第495集

会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告14

桜 町 遺 跡 (5次)

西木流C 遺 跡 (2次)

西木流D 遺 跡 (1次)

鶴 沼 B 遺 跡 (1次)

平成26年12月19日発行

編 集	公益財団法人福島県文化振興財団 遺跡調査部	(〒960-8115)福島県福島市山下町1-25
発 行	福島県教育委員会	(〒960-8688)福島市杉妻町2-16
	公益財団法人福島県文化振興財団	(〒960-8116)福島市春日町5-54
	国土交通省東北地方整備局郡山国道事務所	(〒963-0111)郡山市安積町荒井字文部内28-1
印 刷	北斗印刷株式会社	(〒965-0052)会津若松市町北町大字始字深町67-2
